
ブルージャスティスここにあり！

竹内すくね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブルージャスティスここにあり！

【Nコード】

N3771R

【作者名】

竹内すくね

【あらすじ】

悪の組織の戦闘員として働いていた男、青井正義。彼は仕事の帰り道で不安に苛まれる。このままで良いのだろうか、と。駅前で出会った車椅子の少女に手渡される一枚のチラシ。先立つものを得る為に、彼は戦闘員の傍ら、街を守り、怪人を退治するヒーローとしても活動する事を決めた。ヒーローとヒーリングが蔓延る街で、兼業ヒーローの青井は日銭を稼ぐ為に今日も戦う。

ヒーローとは何ぞや？

ヒーローとは何ぞや。

そう思った幼い頃の俺は辞書を開いたり、親に尋ねたりした筈だ。そうして得た答えは単純且つ明快なものであった。ヒーローとは英雄であり、主人公である、と。ヒーローとは人知を超えた力を持ち、救世主的な行為を行う者の事らしい。仮面をつけたライダーだったり、三分間だけ大きくなれる人間だったり、五人揃って悪を打ち滅ぼしたり。

じゃあ、どうすればヒーローになれるんだ？

そう思った俺は、やっぱり辞書と親に答えを求めた。でも、それは得られなかった。今でもそうだ。俺は何も分からず、何も知らず、ただ、何かを求めている。しかし、しかしだ。思うに、ヒーローとはいわば正義。なら、その逆に位置するモノが必要になる。即ち、悪。悪い奴がいて初めて、正義ってもんが出てきて、ヒーローだと持てはやされるんじゃないか？

正義と悪。

誰が、どう決めるものなのか、俺には良く分からない。何が正しくて、何が間違っているのか。誰が正しくて、誰が間違っているのか。俺には分からない。

ヒーローって何だ？

分からないまま、今日が来る。見ず知らずの誰かが守り、作ってくれた今を生きる。俺に許されたのは、それぐらいだった。

「おい、寝ぼけてんじゃないぞ」

何者かに揺さぶられて、俺は目を覚ました。どうやら、少しまで

るんでいたらしい。いかな、これから仕事だつてのに。

「そろそろ着く。お仕事の始まりだよ……っと」

何か、石の上にも乗り上げてしまったのだろう。バスが大きく揺れた。そのせいで、満員の車内にはどよめきが起こる。俺と同じく、眠っていた者も目を覚ましたに違いない。ふと、窓の外に目を遣ると、外は暗く、何も見えなかった。

「今、何時だ？」

尋ねると、隣の席に座った男が左腕の手首に目を落とす。しかし、そこには時計など巻かれていない。

「ああ、着替えていたんだ。悪いな、分からねえよ」

「そうか」と呟き、俺は目を瞑った。眠る為じゃない。今日の段取りを頭の中で整理する為だ。

「おい、二度寝かよ。だからお前はうだつが上がりねえんだ。いつまで経っても変わらない。いつまでこんな事やってりゃ良いんだつーの」

が、声を掛けられて思考は中断させられる。尤も、改めて確認するまでもない。俺たち下っ端は、いつだってやる事は一つしかない。

「今晚の相手、誰だっけ」

前の席の奴が、身を乗り出して俺に尋ねてくる。きっと、そいつは馬鹿面下げてるに違いない。

「お前、何年目だよ？」

俺よりも先に、隣の男が声を発した。声色から、苛立っているのが分かる。まあ、そりゃそうだろう。さあ今からやるぞって時に、どうしてそんな事を質問出来るのかが分からない。下っ端の身分とはいえ、ある程度相手を知っておくのに越した事はないんだ。そうすりゃ、次があるかもしれない。今回は、生きて帰れるかもしれないんだから。

「四年目。や、先週は風邪で休んでてさ、何にも情報入ってないんだよ」

「だったら同期の連中なり先輩なり、誰かに聞けば良いだろうが。」

てめえ、いつまでルーキー気分だよ。……あ？ 四年？」

隣の男が腕を組む。何か考えているらしかった。

「お察しの通り。俺の同期は前回、殆どが病院送りの面会謝絶。正直、風邪引いてて助かったとは思ってるよ」

なるほど、羨ましい。出来る事なら、俺だって先週は休みたかったよ。何せ奴らときたら、新兵器なんか持ち出してきやがって、試し撃ちだか何だか知らないが、こっちは必要以上に負傷者が出ちまった。俺だって前線が上がっていたら危なかった。

「同期が駄目なら先輩に聞けよ」

隣の男がそう言つと、前の席の男は頭に手を遣る。

「いや、俺、先輩方には嫌われてるらしくって」

「だろうな」俺は苦笑した。

「と言つか、俺たちもお前の言う先輩に当たるんだがな」

「うええっ？ マジっスか？ ぜんっぜん分からなかったっス」

窓を見る。そりゃそうだろう。顔や服装で見分けが付く訳がない。俺たちは皆同じ服を着ていて、同じマスクをしているんだからな。

「ま、気張る必要はねえよ。今日に限っちゃ、倉庫に置いてあるもんをちつとだけ持つてくだけだ」

その通り。尤も、持つてくもんは俺たちのもんじゃない。中身だつて知らない。箱を奪えつてのが俺たち下っ端に下された命令だ。

見ず知らずの誰かさんが後生大事に隠してたもんらしいが、こっちは仕事だ。関係ねえ。

「時間ピッタリに着きやあ、船に運び込む瞬間を狙える。適当にボコつて、適当にやりやあ良い」

俺は頷く。前の席の男はううんと唸つた。

「でも、そう上手くいくんスかね？ ほら、前ん時だって……」

「だああああ！ やめるよそういう事言つのはよう！」

誰かが立ち上がる。見ると、上背のある、結構ガタイの良い奴だった。

「変なフラグ立っちまうだろ！？」

「あ、え、えへ。すみません」

「お、着いたぞ」バスが止まり、俺たちは誰ともなしに立ち上がる。緊張感なんてかけらもない。楽しい楽しいお仕事の始まりだ。

ぞろぞろと、雁首揃えてバスから降りる。仲間、同僚である黒ずくめの集団を見回してから、俺は一人の男に視線を移した。

「こっからは歩きな」

チーフは俺たちを見回して、溜め息を吐く。彼はいつだってそうだ。憂鬱そうに仕事に臨む。俺よりも年上で、俺よりも高い位置にいるのに。

「作戦なんて大層なもんはナシ。襲って奪え。そんだけ」

「あーい」

気のない返事がそこから聞こえる。だが、チーフはそれを咎めない。

チーフは、俺たち下っ端を指揮する立場にいる。真っ黒なタイツコスチュームつてのは俺たちと変わらないが、組織からもらったと聞く、金色の悪趣味なバッジを胸につけていた。見分けを付ける為だ。が、六年目の俺はバッジなんかなくてもチーフだけは見分けられる。人一倍やる気なさそうにしているのが彼だからだ。戦闘中だと言っのに肩を落として、だからだと歩く奴を、俺はチーフ以外に知らない。

「あ、詮索もナシね。んで、バスは三十分しか待たないから。遅れて戻ってきた奴は帰りも歩きな」

情けない声がそこかしこから漏れる。チーフは小さく笑った。

その日、ヒーローは現れなかった。

早朝の駅前には混雑していた。学校に行く学生。会社に行く会社員。各々があるべき場所に向かう。誰だって他人の事は気にしていられない。この時間帯は一分一秒だって無駄にしたくない。

「お願いしまーす！」

が、人の集まる場所にはそれを見越した者も来る。有り体に言えばビラ配りの連中だ。ここ最近では、そういった奴らが増えている。そんで、中身も一緒。俺は、この手のチラシは全てもらう事になっている。何の事はない。ただの、話の種になるかと思っただ。

「……お願いします」

その中で、むすつとした顔の少女を見掛けた。ここいらじゃあ初めて見る顔だ。小さな女の子が珍しいってのもあるが、彼女、車椅子だった。別に、同情を引こうとしている訳じゃないだろう。だったら、もっと愛想良くしているだろうからな。

とりあえず、俺はその子からチラシをもらった。折り畳んでジーンズのポケットにねじ込む。受け取ったにも関わらず、女の子からのお礼の言葉はなかった。少なくとも、俺には何も聞こえなかった。

ホームで電車を待っている間、俺はポケットに突っ込んでいたチラシを取り出す。良く見ると、それはスーパーのチラシを再利用したものらしい。涙ぐましい。どこも金に困っているんだなあ。が、金に困っているのは俺もだ。と言うか、誰もが、今も、何かに困っている。

……俺が生まれるよりもっと前、この国の国会と呼ばれる場所は、文字通り崩壊した。詳しい事は未だに分かっていない。別段、知りたくもない。それよりも前は、今よりも随分と平和だったらしい。国民はのほほんと暮らしていたそうだ。いや、そいつは今も変わらないか。

ともかく、日本は無法状態となった。そりゃそうだろう。国民の代表機関、国権の最高機関、国の唯一の立法機関なんて呼ばれると

ころから壊れちゃったんだから。両親や爺ちゃんから聞かされた限り、それはもう酷い事になっていたらしい。人は死に、殺され、街は壊れて滅んでいった。国としての機能は既になく、他国だつて見えて見ぬ振りを通したそつだ。

でも、ちゃんとある。人はまだ生きてるし、街だつてある。日本つて国は、きちんと世界地図に載っている。この国を救つたのは、ヒーローと呼んで差し支えない傑物だつた。当時の内閣総理大臣である、御剣天馬みつるぎ てんまだ。尤も、形だけ。肩書きはあるが、ないに等しい。空つぽの総理大臣だ。けど、彼はやり遂げた。成し遂げた。日本という国を、見事再生したのだ。ヒーロースーツで。

ヒーロースーツ、だ。

何もふざけている訳じゃない。少なくとも、当時の総理大臣は真面目そのものだつたに違いない。ヒーロースーツつてのは、長つたらしいからとマスコミが縮めて広めた通称である。元の名前は身体強化なんちゃら甲殻だの。名前はどうであれ、性能は凄まじかつた。何せ着るだけで良い。誇張ではなく、パンチは岩を砕き、キックは鉄ですら粉碎する。どこの科学者に作らせたのか、当時の人間にとつては全く夢の世界、お伽話にも思えただつたらう。テレビで見ていたような奴が、そこから抜け出して野党議員やら暴力団をボッコボコにしていくのだから。力には力だ。御剣は恐ろしい力を持ったヒーロー部隊を組織し、一年ほどで国を治めて纏め上げたのである。無論、反発する者も多く出た。無理矢理だもんな。思いつくだけならともかく、正直、内閣総理大臣なんて肩書き持った人間のやることたない。変態の領域である。が、誰も、何も言えなかつただらう。言え、でこぴんで軽く数メートルは吹っ飛ばされるのだから。

しかし、その後がよろしくなかつた。凄まじい性能を秘めたスーツを、御剣以外の人間が欲しがらない筈がない。勿論、御剣も自分だけのものにしたかつたのだらうが、金の魔力には誰だつて逆らえない。ヒーロースーツの技術は民間にも流出してしまつたのだ。力には力だ。力でもぎ取つた平和なら、力で奪われる、失くされるの

も仕方のない事かもしれない。スーツの使用に関して、規制、法案が可決されたが時既に遅し。好き勝手にやる者は後を絶たなかった。再び、ヒーローは現れる。

だけど、彼らを応援する者は誰もいなかった。もはや、スーツがあるのが当たり前になっていたからだろう。貴重であれば有り難がる。だけど、スーツを着た者が犯罪を起こすのだからとんでもない。犯罪者を取り締まる為に、別のスーツを着た者が現れる。一般人からすりゃ、ある意味マツチポンプ。かくて、日本はヒーローとヒーローが当たり前のように闊歩する国になってしまった。

『ヒーロー派遣会社、社員募集中』

俺はさっきもらったチラシを捨てた。

そう、当たり前なんだ。俺が生まれた時にはもう、悪の組織と呼ばれるような存在も、正義の使者と呼ばれる奴らも、普通にそこにいた。毎日のように、どこかで誰かがスーツを着込む。スーツを着込めば犯罪が起きる。犯罪が起きればヒーローが飛び出す。

子供たちは蔓延るヒーローを見限ってしまった。今でも、大人になつたらなりたい職業はプロ野球選手辺りが強い。ヒーローになりたいなんて言うガキは滅多にいない。もはや、ヒーローとは職業なのだ。さっきのチラシみたく、ヒーローを雇い、有事の際に派遣する会社も今じゃ珍しくなくなった。時給が幾らかを計算する、安い英雄はこの街にもいる。きつと、どこにだっているんだろう。スーツは、一応は流通しているが、表立って売っている訳じゃない。それなりに高いし、許可なしに扱うのはやばい。七面倒な手続きを済ませて、そこで初めてヒーローを名乗れる。だけど、すぐに活躍出来る訳でもない。石を投げればヒーローに当たるような世の中だ。報奨金や依頼金目当てで、ヒーローからすりゃ犯罪者は獲物に近い砂糖に群がる蟻のように、いくらでも湧いて、集ってくる。海千山千、鷹の目を掻い潜るのは至難の業だ。時には、ヒーロー同士での小競り合いも起こる。もはや、奴らをヒーローとは呼べないのかもしれない。

「青井、青井」

名前を呼ばれて、俺は振り向いた。

「昨日は良かったよなあ、楽な仕事で。結局、誰も来なかったもんなあ」

「下調べが完璧だったんだろ。あん時、大概のヒーローさんは出払ってたらしいぜ」

「へえ」俺の対面のパイプ椅子を引き、人の良さそうな笑みを浮かべる男。彼の名は桑染^{くわそめ}。俺の同期だ。だけど油断してはならない。何故なら、俺たちは悪い連中だからだ。

桑染は紙コップに注いだばかりのコーヒーを口にする。不味いのに、良く飲めるな。下っ端に割り当てられた控え室にはろくなものがない。ロッカーだって数人と共用しなきゃならない。そこに戦闘用のスーツ押し込めてるから、洗濯を欠かすといえつない臭いが鼻を突き刺す。

埃っぽく、照明の切れ掛けた部屋。ロッカーと机、パイプ椅子。それ以外にや目ぼしいもんは見当たらない。ここが、俺の仕事場だ。つっても、ここでするべき事は殆どない。実際、下っ端は現場でひいこら言いながら動き回るのが仕事だ。

「ま、金さえもらえりゃ何だって良いさ。それより青井、ボード見たよな？」

「名前で呼ぶのやめろって言ってるんだろ。……ボードなら見たよ。けど、俺らにや関係ねえだろ」

ボードと言うのは、入り口近くに置いてあるホワイトボードの事だ。連絡事項やら、くだらない落書きなんかが残されている。桑染が言っているのは、今回の人事異動について、だろう。

「あの野郎、俺たちを差し置いて怪人に出世だぜ。あーあー、今度あいつん下ついたらさ、えっらそうにアゴで扱き使われるんだろ。な。後輩に追い抜かれてさー、もう涙も出ない。っーかどうでもい

い。どーでもいいーわきゃーねーよなー、もつと良いスーツもらつてさー、給料上げてもらつてさー、もうさ、家業継ごうかな。いや、商店街の酒屋なんかだけどさ。最近、ショッピングセンターが建つて客足が遠のいてるんだけどさ」

「やめるよ、鬱になる」

俺の勤め先は、噛み砕いて言えば悪の組織、である。詳しい実体は良く知らない。高校を卒業してふらふらしていた頃、組織の最下層、ピラミッドの一番下の戦闘員としてスカウトされて六年、特に何かをやった訳でもなく、今に至る。ちいせえ仕事を割り当てられて、二十歳を過ぎて走り回るのが俺の仕事だ。

六年経つても実体を掴めていないのは、俺がド下っ端であるのに加えて、そもそも、ここには実体なんて確かなものがないから、だろう。悪の組織なんて言つちまつたが、大それた目的なんかも聞いた事がない。世界征服なんて大層なもん掲げてたらとつくに辞めたるうが。

そんな組織にも、一応は序列が存在する。縦割り社会はどこにだって存在するのだ。俺たち戦闘員、俺らを指揮、監督するチーフ戦闘員、その上には怪人と呼ばれる奴らがいる。怪人つてのは特注のスーツをあつらえてもらった、優秀な戦闘員として俺は認識している。更に、その上には四天王と呼ばれる怪人がいやがる。まだ、見た事はないが。まあ、いるんだろう。んでもって、組織を束ねる親玉だ。勿論、会った事も見た事もない。

「いつまで『ごっこ』やってるのかね、俺たち」

桑染はコーヒーを啜った。俺は答えられなかった。答えるまでもなかったからだ。そんなもん決まつてる。死ぬまで、だ。俺たちみたいなクズやらグズは、ヒーローに刈られる悪役になるべくしてなつたんだから。ヒーローや悪者がどれだけ身近なものになつたつて、まともな神経してれば、こうはならない。俺の父親は平凡な会社ながら、定年まで無事に勤め上げ、退職金を元に母親と一緒に田舎に引つ込んだ。今頃は農作物の育ち具合に一喜一憂しているだろう。

俺は人様に迷惑を掛けてばかりだ。勘違いしているつもりはない。ヒーローが当たり前になった世界だって、悪い事は悪い。法律だって存在している。俺は今や、立派な犯罪者だ。どこへ出しても恥ずかしくない悪の組織の戦闘員だ。

戦闘員は体力が命だ。むしろ健康であればそれだけでも良い。若ければ若いほど、良い。俺はまだ二十代で、体だつて鈍らないように鍛えている。でも、来年は？ 再来年は？ 五年経てば、もう三十も見えてくる。その時、まだ、走れるのか？ まだ戦えるのか？

答えは、きつとノーだろう。そうに違いない。

「六年、粘った方じゃねえの？」
桑染は俺を見ずに言う。こいつだつて、辛いんだろう。六年経っても、いつまでやってもうだつが上がらない。このまま安い固定給と、雀の涙ほどのボーナスで、死ぬまで働かされる。何も残らない。何も遺せない。明日どこるか、今日を生きるのに精一杯だ。潮時、なのだろう。

この日の仕事はいつも通りに最悪だつた。二匹目のどじょうなんか、どこにだつていやしない。誰だつてそんな事は分かつてる。だけど、上から『行け』と言われりゃ行くしかない。昨日と同じ倉庫を襲ったが、案の定ヒーローどもが待ち伏せてた。怪人に出世したばかりの後輩は、カラスみてえなスーツを着て張り切っていたが、呆気なくボコられた。四対一でしばかれた。俺たち下っ端は逃げ出した。逃亡は禁止されていないし、何よりも命あつての物種である。三十人の戦闘員は怪人を見捨てて、必死に走つた。俺がバスまで辿り着いた時、一緒に逃げてきた戦闘員の内、三分の一は消えていた。多分、逃げている途中で他のヒーローに捕まってしまったんだろう。運転手はこれ以上待てないと、残った者を置いてバスを発車させた。席についてほつと一息吐いた時、桑染がどこにもいなかった事に気付いた。

保険なんかない。

福利厚生なんかない。

謝罪の言葉だつて聞かされない。

俺たち下っ端には何も無い。使い捨ての盾。次から次に補充される消耗品でしかない。何も……いや、俺には、少なくとも、俺には何も無いんだ。残ったもんも、辛うじて握り締めてるもんも、いつかはなくなっちまうだろう。分かってるけど、どうする事も出来ないんだ。しょうがないだろう。金がない。力がない。友達だつていつの間にかいなくなる。

そんな事を、電車に揺られながら考えていた。終わりにしようと考えていた。俺も、引っ込むかな。両親に事情を話して、俺も、畑を……。

「あ……」

そこまで思い至った時、涙が出てきた。情けなかったからか、悲しかったからか、分からなかった。俺、六年も何をしてたんだろう。うん、辞めちまおうか。悪の組織なんて、どうしてやってこられたんだ俺は。あ、馬鹿だからか。グズだからか。クズだからか。

ホームに下りると、今朝捨てたのと同じチラシが落ちていた。多分、俺のじゃあない。あの、車椅子の女の子が手ずから配ったものを、誰かが何の気なしに受け取り、何も考えずに放ったんだろう。俺は少女に対して、申し訳ないような、そんな気分陥ってしまった。めらんこりー。駄目だ。俺は馬鹿だから、考えれば考えるほど深みにはまる。もう、とりあえず今日はよそう。考えるのは寝て、起きてからだ。幸い、明日は土曜日で休みだし。

改札を通過して駅前に出ると、流石に今朝とは違い、閑散としていた。だけど、俺は見つける。今朝と変わらない、その一点を。

車椅子の子だ。彼女はまだ、チラシを配っている。たった一人で、誰の手も借りずに、自らの力だけで。

ただ、チラシを配っているだけだ。それなのに、彼女のそれは、何故か、とてつもなく崇高な行為に思えた。曲がりなりにも悪の組織の戦闘員であるこの俺が、そう思わされたのだ。気付けば、足は少女の方に向いている。この先について、俺は何一つ考えていなかった。ただ、彼女がチラシを配っている姿を認めた瞬間、憑き物が落ちたような、そんな気にさせられたのは確かだ。だから、だろうか。

「なあ」

馬鹿だ。

俺は馬鹿だ。

何を考えてやがる。

俺は、どこで、何をしてきたクソ野郎だ？

「これぞ、電話番号とか書いてねえぞ」

ヒーローとは何ぞや？

ブルージャスティスなんてどうかしら？

「うつ、くそ、くそ……」

泣いていた。

俺は布団の中で泣いていた。

将来に不安があったからではない。友人をなくしてしまったという恐怖からでもない。俺は、自分より年下のガキに泣かされてしまった。あの車椅子のクソガキ、すげえ目だった。すげえ顔だった。ちよつとした親切心と、興味からチラシの不備について教えてやったのに、

『……はあ？』

だよ。

はあ？ って。いや、どうしてだよ！？ もう嫌だ。何かムカつく。明日は家から一步も出ない事に決めた。とりあえず、辞職にについてはまだ早い。今は英気を養って、次はヒーローどもをボコボコにして追い込んでやる。仇は取ってやるぜ桑染！

翌朝、大家が家賃を取り立てに来たので窓から逃げた。

だが、何も考えずに出てきたので暇を持て余している。そして気付いた。俺に興味と言える趣味なんてなかったのだと。余暇って何だ。テレビ見たり、音楽聞いたり、そんなぐらいはする。けど、それ以上はない。休みの日は、今まで何をして過ごしていたっけ。

気が付くと、俺は駅前まで足を伸ばしていた。人通りは少なかつたが、昨日とは違い、家族連れが目立つ。ベビーカーを押した主婦や、辺りをうるちよろするガキンチョども。実に平和だ。この中に、俺みたいな悪の組織の戦闘員が混じっているなんて、誰も考えては

いないだろう。……いや、考えていたとしても、無視するんだろう。ここで正体を現したところで、怪人が現れたところで、あの人たちは我関せずといった顔で改札口を抜けて、電車に乗り、シヨツピングセンターなりに行くんだろう。

アホらしい。帰ろうかな、とも思ったけど、ついつい目で追ってしまう。今日も、あの車椅子の少女はチラシを配っていた。昨日の朝は忙しくて見てなかったし、夜は暗くて良く見えなかったけど、中々、悪くない顔である。と言うか良い。目鼻立ちもしっかりして、可愛い。茶色、というよりも栗色のウェーブがかかった髪は、ふわふわしてわたあめみたいだった。車椅子に乗っているせいか、やけに小さく見える。ううん、十五、六歳くらいだろうか。フリルのついたピンクのワンピース、膝の上には白い鞆が置かれている。白いハイソックス、白いローヒールのパンプス。……何か、甘い。砂糖で出来てるって感じ。か弱くて、守ってあげたくなるような。

まあ、性格は悪いに違いない。目付きも悪いし、愛想なしだ。チラシを受け取ってもらっても、礼なんか言わない。当然だろうと言わんばかりである。何だか腹が立ってきた。お前はどれだけ偉いんだ。可愛いなら何をやっても許されるのか。ふざけるな、俺は口りコンじゃねえ。どこかの誰かが許しても、この俺だけは許さねえ。

八つ当たりという単語が頭の中に浮かんだが、俺の足は止まらなかった。どうして、俺ばかりがこんな辛い目に遭わなきゃならないんだ。俺が何をしたらってんだ。

「おい」

車椅子の少女の前で立ち止まると、彼女は小さく手を上げた。チラシを渡そうとしているのだろう。俺はそいつを引っ手繰るようにして受け取った。

「昨日はよくもやってくれたな」この手の台詞は板についている。

少女は小さく顔を上げた。俺の顔を見つめて、不思議そうに、と言うか不審そうに眉根を寄せる。

「邪魔なだけだ」

たじろぎそうになる。が、昨日の俺とは違う。昨日は、アレだ。色々精神的にも参っていたし、センチメンタリズムでメランコリックな状態だった。

「お前、覚えてないのか？」

「邪魔だつて言ってるでしょ」

ふいっと顔を反らされる。謝つて欲しい訳じゃあなかったが、この野郎、俺を舐めてやがる。こちらら六年も戦闘員やってんだ。

「親切に声掛けてやったつてのに、よくもまあそんな事言えるよな」「親切？」

「電話番号だよ、書いてなかったじゃねえか」そう言つて、俺はチラシを見せ付ける。

「書いてるわ。それより、さっきから何なの？ 警察呼ぶ？ ヒーローが来るまでそこで喚いてる？」

「は？」

チラシをひっくり返せば、そこにはきちんと電話番号なり、どこかの住所なり待遇なりが書かれていた。きつ、きたねえ。書き足しやがったんだ。

「や、別にそういうつもりじゃ、俺はさ、ただ」

「仕事の邪魔だからどこかへ行つてくれる？ と言つた、行かなきゃ本当に怒るから」

周囲からの視線が突き刺さる。冷静に考えれば、華奢な女の子に俺みたいな凶体のかい男が絡んでいる構図である。通報されない方がおかしかつた。警察はともかく、ヒーローまで出張つてくりゃあ人生終わりである。

車椅子の少女はふっと、鼻で笑つた。人を馬鹿にするような所作が、実に良く似合っている。

「それとも、あなたヒーローになりたいの？」

咄嗟の事で、声が出なかった。

「あなた、体格は良いものね。へえ、鍛えているのかしら。学生？何か部活でもやっているの？」

「学生じゃねえよ」

「あら残念。だったらもう、どこかで働いてるのかしら？」

「い、いや……」

何故か、真実を口にする気にはなれなかった。

俺が躊躇っている、女の子はこっちに顔を向ける。じろじろと、値踏みするような視線で体をねめつけられていた。

「はつきりしない人ね」

ヒーロー、か。よりもよって、俺みたいな奴に何を言ってるんだか。

「用がないなら消えてくれる？ 目障り」

チラシに目を通す。ヒーロー派遣会社、か。うん。待遇は、はっきり言って悪い。実績もない新興のくせに足元見てやがる。この街には何十、何百って同業社も同業者もいるんだ。金払いが良くないと、誰だって興味を持たないっつーの。

「掛け持ちとかありか？」

「は？」

「いや、他んところでも働いてんだよ俺。こういうのは先に言っておこうと思ってる」

少女は僅かに目を見開き、俺とチラシを見比べた。

「本気？ 冷やかしじゃあないでしょうね？」

「とりあえず、話だけでも聞かせてくれよ。ああ、そっか。こういうのって面接か。履歴書とか、そういうのいるんだっけ？」

今いるところにはスカウトで入ったから、特に面接とか、そういうのってなかったんだよな。改めて考えりゃ、俺は本当にあそこの社員なのかどうか不安になってきた。

「ちょ、ちょっと待って。本当に、本気なの？ 自慢じゃないけど、ウチは待遇だつて良くないわよ」

「出来たばかりだもんね」

「お金だつて、そんなに払え、ないし」

おいおい。んな事言っちゃうかよ普通。だまくらかしてでも勧誘

しろよ。

「掛け持ちしてるし、まあ、そんな気にしないって」

ヒーローって言葉につられた訳じゃあない。俺はただ金が欲しいだけなんだ。先立つものさえあれば、どうにかなる。幸せはそれで買えるんだからな。ただ、悪の組織なんてやってる奴にまともな就職先なんてない。仕事柄、恨みだつて買っている。スーツと覆面で正体を隠しながらやってるけど、素顔丸出しの職場ってのは嫌な感じだ。だから、ヒーローってのは打ってつけじゃあないのか？ 正体を隠せるし、スーツを着られるんだから、そこそこの腕っ節とそこそこの体力があれば資格も職歴も関係ない、筈だ。派遣社員ってのも良い。実質、今の職場と変わらない。やる事だつて変わらない。基本的には走り回って、戦うだけ。変わることを言えば、自分の立ち位置だ。正義が悪か。それだけの違いに、違いない。

「……り、履歴書はいらないわ。とりあえず、ウチに来てもらえるかしら？」

迷う事はない。運命や天命なんか信じちゃいない。多分、俺みたいなクズが選べる道は、これぐらいなのだから。

女の子に連れてこられたのは、駅前から十分ほど歩いた先にある、小汚い雑居ビルだった（俺だけで歩くならもつと早く着いたかもしんない）。四階建てだが、テナントは入っていない。つーか、人のいる気配がしない。俺、騙されてるんじゃないだろうな？

「一番上だから、階段で行って」

「は？ だっ、おい！」

それだけ言うと、女の子はエレベーターに乗り込んでしまう。先に向かったらしいが、一緒に乗せてくれても良いだろうがよ。あ、いや、もしかして警戒されてるのか？ だよな、普通。何か、帰りたくなってきたな。こういう経験ってないし。

結局、着てしまう。着いてしまう。エレベーターの前で、女の子が苛々した様子で待っていた。

「ヒーローになりたいんなら、五秒で上り切りなさい」

本気で言ってるのかよ。ヒーローになりたいきや役所で手続き済ませてスーツ着れば良いんだよ。

「あ、今のってテスト？　もしかして、不合格か？」

「……馬鹿じゃないの？」

言って、女の子は鞆から鍵を取り出す。すいーっと廊下を進み、一番奥の扉の前で立ち止まった。ほう、ここがヒーローの巣窟と言うわけか。……やばいな、すげえ緊張してきた。バレたらどうしよう。バ、バレるわきゃねえよな。こっちや覆面被って色々やってたんだし。

「どござ」

「お、うん」促され、俺は扉を潜った。

意外にも、こざっぱりとした室内である。ビルが汚いから、もっとえげつないのを想像していたんだが、ビニールの床には埃一つ落ちていない。革張りの黒いソファに、ガラスのテーブル。書籍がみっちり詰まった本棚。あ、こっちはデスクがある。ノートパソコンだ。欲しい。うわあこのテレビでけえ！　え、どうしてこんないっぱい新聞が置いてあんの？　うわー、うわー！　内心、馬鹿にしていたが、流石はヒーローを派遣する会社だ。生活臭が一切感じられない。ウチの組織も見習ってもらいたい。もっと待遇良くしろよ。

「座って。楽にして良いわ」

女の子は車椅子から降りずに、窓際に向かった。そこには、木製のエグゼクティブなデスクがある。やらしい言い方だが、高価に見えて、社長っぽい。彼女の指定席なんだろう、きつと。……ん？　「どうしたの？」

女の子と向かい合うようにして、俺はソファに座った。って、う

っ、うわ。腰が沈む。

「い、いや。……あの、さ」

嫌な予感と言っか、気になっていたんだけど。

「他の人は？ つーか、君が、俺を面接すんの？」

「何か不都合でもあるの？」

「だって君、バイトだろ？ ビラ配りの」

俺がそう言っつと、女の子は眉をつり上げた。何かおかしな事を言っつてしまっただろうか。

「あなた、鈍い。誰を探しているのか知らないけど、ここの社長は、私よ」

………嘘だろ。い、いや、でも、何だかそんな気はしてた、よ
うな、していないような。

「気付いてなかったの？ 良いわ、今までの無礼、非礼の数々は忘
れてあげる」

女の子は意地の悪い笑みを浮かべた。

「ようこそ、ヒーロー派遣会社『カラーズ』へ。私は白鳥湊子。こ
こで、一番偉い人間よ」

これ以上分かりやすい自己紹介もないな。

「あなたの名前、聞かせてもらえるかしら？」

「青井正義。色の青に、井戸の井。それで……」

「もしかして、正しい義、かしら？ ふふっ、すごい。正にヒーロ
ー、良い名前じゃない。気に入ったわ、あなた」

職場じゃあ馬鹿にされるんだけどな。確かに、ふざけた名前に違
いない。けど、悪い気分じゃなかった。自分よりも年下の人間に褒
められるってのは。

「雇ってあげる。光栄に思っただ方が良いわよ。青井、あなたは、ウ
チの初めてのヒーローなんだから」
は？

「細かい事を言っただってしようがないと思うの。噛み砕いて言えば、ウチは、依頼に応じ、その仕事に適したと思われるヒーローを派遣し、派遣された者と時間給を折半する方式でやってるの。別に、仕事がない時にここにいる必要はないわ。仕事があれば連絡を入れるから。直接仕事場に行ってもらう事もあれば、一度ここに集まるって場合もあるでしょうね」

全然、全然話が頭に入ってこなかった。俺は手を上げ、待ったと短く叫ぶ。

「……タメ口はやめなさい。で、何よ？」

聞きたい事は山ほどある。けど、ちよつと待て。待ってくれよ。

「俺、一人？ 嘘だろ？ ヒーローが、俺しかいない、だって？」

女の子、白鳥は小さく頷いた。

「今のところはね。けど、募集だって掛けてるわ」

気付くべきだ。これ以上の深入りは、本当にやばいんじゃないのか？ こんな、こんなところで、マジで金なんか入るのかよ？ いや、そもそも仕事なんて来るのか？ だって、社長自らチラシ配ってるような会社なんだぞ。

「当ては？ 本当に、俺以外にも来るんだらうな？」

「どうかしら」おい。

数つてのは、多ければ多いほど良い。フォローも効くし、選択肢だつて増える。一人きりじゃあ、流石に辛いぞ。例えば、俺が怪我や病気でリタイアしたら、誰が、どうするんだ？

「社員は？ 社長以外に誰が……まさか、一人でやってるなんて事は……」

「馬鹿ね。いるに決まってるでしょう」

恐る恐る口にしたが、どうやら最悪の結果は免れたらしい。

「運転手が一人いるわ」

「ふっざけんなよ！？」

運転手だあ？ そりゃいないよりマシだけど、いないよりマシだけどー！

「そうね、あなたの名前はブルージャスティスなんてどうかしら？」
「おおっ？ お前俺の話聞いてなかったのか？ 信じらんねえ、駄目だ。どうせすぐ潰れちまうよ」

「なっ……？ あなた、正気？ 社畜になるつもりあるの？」

「ねえよ！ つーか、社長がそういう事言つなよ！」

ギリギリ残ってたやる気が根こそぎ持ってかれた。本当、無理だ。ここじゃあ俺まで潰される。そんな気がする。

「悪いけど、この話はなかった事に」

立ち上がった、一目散に扉へ向かう。

「ちよっ、まつ、待ちなさい！」

「今後ますますのご健康とご活躍をお祈りしております」

「あなたが祈るな！ 分かった、分かったわよ。譲歩、譲歩しましよっ」

俺の足は止まった。だけど振り向かない。

「とりあえず、ウチに入ってちょうだい。別に、あなたに強要はしないわ。仕事が入れば連絡する。内容が気に入らなければ断っても良い」

んなもん当たり前じゃねえのか？

「ふわふわし過ぎなんだよ、あんたは。マジで、ここでやる気あんのかよ？」

言っちゃなんだが、この街は激戦区だろう。そこら中に悪の組織がひしめき、ヒーローたちが蠢いている。生き馬の目を抜くような世界なんだ。きつと。

「あんた、幾つだ？」

「十六よ。文句ある？」

若っ。マジかよ、十六で社長になれんの？ や、でもこんなアレな会社じゃあなあ……。

「あんたみたいなお子供がやれるようなところじゃないと思うぜ。正直、オススメしない。つーか、畳むのをオススメするね」

世間つてのを知らなさ過ぎる。俺にそう思われるくらいに、この

子は危うい。

「関係ないわ」
だけど。

「悪を駆逐するのに、正義を守るのに、年なんて関係ないのよ」
こいつは言い切ったのだ。一番最初に言ったのは、金じゃない。
こいつは、悪を滅ぼすと、正義を守ると言い切った。

ヒーローって、何だ？

疑問が浮かぶ。凄まじい速度で脳内を駆け巡る。爆発しそうな
感情を抑えるのに必死だった。

「……どこまで、ガキなんだ」
ヒーローなんざ、もういない。

正義も悪も、何もかも分らない。

でも、俺は、悪い奴に違いない。組織の戦闘員として、本当に、
駄目な事ばかりやってきた。この手に残ったものは、もう、ない
に等しい。薄汚れて、この先だって良く見えない。

どうして、そんなにまつすぐなんだ。

どうして、そんなに綺麗に見えるんだ。

どうして、俺は。

どうして、俺は。

「ガキと、好きに呼べば良い。けれど、私を否定するのはよして」
どうしても、俺は、諦められなかったのだ。

「……ブルージャスティスは、やめてくれ」

こいつにあてられたのか？ それとも、弱り切っていたのか？
頭がおかしくなってしまったのか？

「もっと、良い名前を頼む。社長」

いや、きつと、俺はヒーローになりたかった。そうに、違いない。

社長、お待たせしました

二晩経ったら、俺はヒーローになっていた。勝手に。どうやら、白鳥濤子社長が各種手続きを済ませてくれていたようである。俺がやった事と言えば、適当に書いた履歴書と運転免許証のコピーを渡したくらいのものだ。その間、俺は組織の戦闘員としてヒーローから逃げ回ったりコンビニで店員に絡んだりしていた。クズである。「おめでとう、青井。あなたの初仕事よ」そして同時に、今日はヒーロー派遣会社カラーズの初仕事の日でもある。

早朝、俺は社長に呼び出された。午前六時である。殺してやろうかと思った。

「……前日までに連絡をくれよ」

会社のソファにケツを埋め、俺は社長を睨みつける。こっちは昨夜も働いてたんだよ、戦闘員として。

「ああ、ごめんなさい。嬉しくて、舞い上がっていたわ」

社長はくすくすと微笑む。そうしていると可愛らしいが、中身は最悪に近い。

「それで、仕事の内容については教えてくれなかったよな。気に入らなければ、断っても良いんだよな？」

「念を押さなくても心配ないわ。けど、あなたは断らない」
言ってる。

「仕事は単純明快よ。今日の午前八時、オフィス街に合成怪人が現れるから、あなたはそいつをやっつければ良いの」

確かに単純明快だ。見つけてボコれて事だからな。ただ、一つ問題がある。と言うか、心配と言うか。

「どうやってそんな情報を。タレコミか何かか？」

「馬鹿ね。ウチみたいな、どこにも知られていない会社に情報を流してくれる人なんかいる訳ないでしょう。自分で調べたのよ」

「それ、確かか？ 騙されてるんじゃないだろうな？」

「心配しないで。直接、そいつに聞いたようなものだから」

「はああ？ どういう事だよ。まさか、こいつ、怪人と繋がりがあ
るのか？」

「余計な詮索は無用よ」

睨まれる。まあ、知らない方が良い事が山ほどある。深く考え
ないようにしよう。与えられた仕事をこなして、お金をもらっただけ
だ。

「分かった。やるよ。相手は一人だろ？」

合成怪人つてのは、ウチの組織の奴じゃあない。別の組織の怪人
だ。それだけが心配だった。いつ辞めるか分からないとはいえ、一
応は俺の巣だ。同僚と戦うなんて真つ平ごめんだからな。

「ええ、どんなタイプの怪人かは分からないけど。自信、ある？」

そいつは俺に支給されるスーツ次第だな。スーツの性能が高けれ
ば高いほど、戦闘では優位に立てる。安いじゃあ、身体能力を二
倍にだつて引き上げられない。逆に言えば、どれだけ中身が貧弱な
奴でも、スーツさえ良ければマツチヨな奴とだつて互角以上に戦え
る。

「そこそこ」

組織の戦闘員に支給される汎用スーツは安物だ。身体能力は大し
て上がらない。だが、怪人やヒーロークラスになると、二倍、三倍
は当たり前だ。こっちは常に極限の状況に置かれている。自慢じゃ
ないけど。けど、そんな俺がヒーロースーツを着れば、まあ、そん
じよそこらの奴には負けまいだろうな。

「良かった。ああ、現場までは車で行けるから安心しなさい」

「へえ、マジで？」

そついや、運転手がいるとか言ってたっけ。ヒーロー派遣の会社
ともなると、何か、すげえ機能が隠されたりしてるスーパーカーだ

つたりするんだろつか。あんまりゴテゴテした奴は恥ずかしいけど。
「九重ここのえとはまだ会っていないわよね。ちょうど良いから、自己紹介も済ませておきなさい」

「はいはい。……で、俺のスーツなんだけど」切り出すと、社長はテレビを点けた。

「他のヒーローに横取りされちゃうかもしれないから、迅速にね。でも、怪人に気取られるのも良くないから、八時ちょうどに着くようにするわ」

あ、社長もついていくつもりなんだ。へえ、あつそ。で、テレビの音量上げるのやめてくれねえかな。

「ちなみに、依頼者はいないから」

「はあ？ 何言ってるんだよてめえ」

「……あなた、誰に対して口を利いているつもりなのかしら」

うつ、すいません。柄の悪いところで働いているものですから。

「心配しなくても、怪人さえ倒せばお金は払うわ」

「金さえもらえるなら。でも、依頼じゃないのに、どうしてだ？」

「知名度よ。カラーズはまだ出来たばかりで誰も知らない。でも、

怪人をバシッと倒してしまえば、注目されるかもしれないでしょ」

そうかあ？ 今更ヒーローだの怪人だの、気にする奴なんているのかよ。

「小さな事からコツコツとが、我が社の方針よ」

「ふうん。それよりスーツ見せてくれよ、スーツ」

「コーヒーでも淹れてくるわね」

結局、はぐらかされてしまった。

待ち合わせの時間になったとの事で、俺と社長は雑居ビルの前で車を待つ。

「なあ、運転手ってどんな奴なんだ？ 九重、だっけ？」

「あなたよりも若いわ。それに、仕事もしっかりしているから心配

しないで。目的地まで安全に届けてくれるわ」

俺より若いのか。大変だなあ、こんなところに捕まって。

「そろそろ来るわね」

どんな車だろう。どんな人だろう。新しい出会いってのは、この歳になっても怖いな。少ない社員なんだし、仲良くやれば良いんだらうけど。

と、向こうから車が走ってくるのが見える。タクシーだった。近づいてくる。どこにでも転がってるような、面白みのないセダンだ。屋根上には表示灯が設置されている。真っ白い車体に、桜色、とでも言うのだろうか、帯を締めるような塗装が施されていた。それが目の前に止まった。おい、邪魔だ。誰が手え上げたよ。客ならよそで取れってんだ。

「来たわよ」

「はあ？ いや、つーか退かせよ、これ」

運転席から降りてきたのは、どこから見ても間違いなく、タクシードライバーだった。どこのもんかは知らないが制服を着ている。

背が俺よりも高く、僅かに見下ろされてしまう。つーか、マジにでけえな。けど、細い。百八十、九十センチあるんじゃないのか。

「社長、お待たせしました」中性的な声だった。俺よりは高く、社長よりも低い。

「つて、え？ 社長？ 社長って言わなかったか？」

タクシードライバーは後部座席のドアを開けて、社長を車椅子から下ろし、両腕で抱き抱える。高慢ちきなウチの社長は何も言わず、ただ頷いていた。俺には何が起こっているのか良く分かっていない。ドライバーはせっせと働く。社長を後部座席に押し込めた後は、車椅子を畳み、トランクの中へ丁寧にしまった。そして、目が合う。何か、女みたいな奴だった。肌も白いし、なーんか頼りないっつか。

「な、何だよ？」

「あ」ドライバーは帽子の位置を直し、白い手袋を外して、俺に手

を差し出した。

「九重です」

「どうやら、握手を求められているらしい。俺は咄嗟に、その手を握った。」

「青井、です。えっと、よ、よろしく?」

「何をやっているのよあなたたちは」

後部座席のウィンドウが開き、社長が身を乗り出す。

「ウチのドライバー、九重よ。さっき言ったじゃない。九重、彼は青井正義。ウチのヒーローよ。精々、仲良くしてあげなさい」

九重と呼ばれたドライバーは頷き、俺を見た。何か、物静かっけ言うか、何を考えているか分からないタイプだな。

「さ、話なら走りながらも出来るでしょ。乗りなさい、青井」

「あいよ」俺は後部座席のドアを開けて社長の隣に座ろうとしたが、
「前よ、前」

社長は嫌そうに、俺を追い払うように手を振った。仕方なく、助手席に座る。が、気まずい。仲良くしろって言われてもなあ。

俺が乗り込んだのを確認してから、九重は運転席に戻る。彼は息を一つ吐き、社長をちらりと見た。

「出しなさい」頷き、九重は車を発進させる。

そうか。タクシーだったのか。はあ、何だかなあ。

「何をがっかりしているのよ、あなたは。感謝なさい。本当なら、あなたを現場まで自力で向かわせても良かったのよ」

「いや、まさかタクシーだとは思わなくて」

まあ、組織じゃあバスに乗って移動していたんだけど。

「九重は腕利きのドライバーよ」

「へえ、でもさ、わざわざそんな格好しなくても良いんじゃないか?」

九重は答えなかった。どうやら運転に集中しているらしい。

「まだウチに慣れていないのよ」

「まだ?」

「スカウトしたのよ、対応が良かったから。九重はタクシードライバーだったの」

え。マジで。いや、ついやってる事は変わらないじゃねえか。……まあ、俺が言える立場じゃあないか。似たようなもんだし。「どれくらいで着くんだけ？」

九重へは、どういう風に接して良いか分からない。が、年下と聞いているし、まあタメ口で充分だろう。が、彼は答えない。あれ、もしかして無視されているのか？ おいおい、初日からいじめかよ。「無駄よ青井。運転中の九重に話したい事があるなら……」タクシーが停まる。信号待ちらしかった。

「今ね。九重、現場まではどれくらい掛かるの？」

「……十分程度です」

「それから、頼んでおいたものは？」

「持ってきています。トランクの中です」

「そ、ありがとう」

信号が青に変わり、発進する。なるほど、そういう事か。

「車が停まっている時だけ、九重は答えてくれるから」

「すげえな」色んな意味で。

「最初は驚いたけどね。あ、無視してる。よりもよってこの私を、と」

何様だよ。

午前七時五十分、つまり怪人が出現するという十分前に、タクシ―は現場に到着した、らしい。

現場は、何の事はない。オフィス街である。まだ、背広姿のおっさんたちがそこらを歩いている。羨ましくもあった。ああいうのが、世間一般では普通と呼ばれて、俺には素晴らしく思える。普通でいれたら、どれだけ良かった事か。「怪人って、マジで出るのか？」

「十分後には分かるわよ。それより、スーツね」

「お、おう。そうだよ、だからさ、ずっと聞いてたじゃねえか、どうして無視してたんだよ」

社長は俺と視線を合わそうとしない。彼女は九重に目を遣り、顎をしゃくった。九重は車を降り、トランクに近づいていく。

「ああ、何だよ。頼んでたものってスーツだったのか。驚かせんなよな」

そういうサプライズはやめろよな。いやー、スーツかあ。何か、こう、やっぱり良いな。やすい戦闘服しか着た事なかったし。身体能力が二倍、三倍に上がるって、どんな世界なんだろう。やっぱり良いよなあ。普通ってのも羨ましいけど、六年もこういうのやってきたんだ。知りたいに決まってるし、実際に着てみたい気持ちってのもある。

大きな紙袋を抱えた九重が戻ってきた。彼は、そいつを社長に手渡す。

「初仕事よ、気合を入れなさい、青井」

「おう、任せろ。怪人なんざ一捻りだ」

社長から紙袋を受け取った。

「ところでさ、どこで着替えれば良いんだ？」

「その必要はないわ」

「あ??」

袋ん中に入っていたのは、リアルな馬のマスクだけだった。流石に、それはないだろうと思って、袋を逆さにして振ってみる。マスクが落ちてきた。どっから見ても馬だった。

「……………これだけ？」

「そうよ。さあ、行きなさい」

「どっ、どこにだよ!??」

「こんなもん被ってさあ! どの二次会に行けっつてんだ!

「てめえにはっ、これがスーツに見えるのか!? 人を馬鹿にするのも大概にしとけよコラ!」

「怒鳴らないでちょうだい。仕方ないじゃない、スーツなんて、そんな高いもの買える訳ないじゃない」

「はあああ!？」

怒り過ぎて死にそうだった。と言うか、こんな被って怪人の前に出たら死ぬ。スーツを着れば誰だってヒーローになれる。怪人にならなくていい。だけど、スーツがなければ誰だって一般人だ。身体能力も何もクソもない。

「でも、これ高かったのよ？」

「知るかつ、帰る。帰るぞ俺は」

「ここまで来てそれはないでしょう」

「ここまで何も言わずに連れてきやがって、よくもまあ……!」

だから、言わなかったんだ。スーツの話題が出る度に、強引に話を逸らしてきやがったからな、このアマは。

「帰るの？　なら、契約違反で違約金をせしめるわ。二百万出しなさい」

「アホかてめえ！　契約なんざした覚えねえよ!」

「あら？　したじゃない。書類ならあるわよ？」

なっ、何だつて？

「馬鹿ね、あなた。会ったばかりの他人に印鑑まで渡すかしら」

「お、お前……!」

「手続きなら、全てこちらで済ませておくと申したでしょう?」

「ぎゃあああ!　ハメられた!　年下の小娘に騙された!　悪の組織の戦闘員がつ、こんな女に!」

「ただじゃおかねえ」

「ヒーローの台詞じゃないわよ、それ。さ、行きなさい馬マン」

「名付けるな!　誰が馬マンだ!」

社長はしらつとした顔で窓の外を眺めていた。

「どうするの?　お金、払えるの?　払えなければ、しかるべき所に訴えるけれど?」

畜生!　畜生畜生畜生!　ふざけんなよふざけんなよ、こんなの、

ただのパーティグッズじゃねえか。視界が悪くなる分むしろない方がマシだろ。

「俺を殺す気か」

「自信、あるんでしょ？」

ふつと、鼻で笑われる。野郎、そうかよ。ここでもそうか。ヒーローだの何だの言ったって、戦闘員と変わらねえ。俺たち下っ端は使い捨ての消耗品でしかないんだ。ふざけんよ、クソ。

「来た」九重が呟く。窓の外に目を遣れば、高らかに笑う怪人がいた。

オフィス街、交差点のと真ん中、人の波が割れて、引いていく。そこから姿を現したのは、狼型のスーツを着た怪人だった。割と、オーソドックスなタイプのスーツである。狼つてのは、良く見るっちゃあ、良く見る。だけど、性能としては間違いなく、悪くない。

『オロロロロ！ 合成怪人様のお出ましたあ！』
「強そうね」

ぼそりと社長が言う。他人事だと思つてやがる。……合成怪人つてのは、自分の体の一部分をアニマルやらバードやらの強い部分と混ぜ合わせた、俺には想像出来ないタイプの怪人である。よくもまあ、親からもらったもんをいじくれるな。一応、スーツも着ているが、奴らはそれを脱いでもそこそこ戦える。

狼怪人は、中の奴の体格も良いだろう。正直、無茶苦茶強そうだった。と言うか、俺じゃあまず勝てない。馬マンのデビュー戦には相応しくない相手だ。と言うか最初で最期。

「せめて、武器とかねえのかよ」

「ないわ」断言される。

「し、死ぬぞ、俺」

「うーん」

「口先だけでも大丈夫って言えよおおおおお！」

やばいぞ、やばい。こうなったら他のヒーローが出てくるのを期待するしかない。

『オロロロ！ オロロロ！ さあ戦闘員ども！ オフィスレディをさらえっ、さらうんだ！ 若いだけだぞ！ 去年まで女子大生やってたような女をさらえ！』

何言ってるんだあいつは。

真っ白い、汎用スーツを着た戦闘員がわらわらと出てくる。その数は二十を超えていた。俺が行ったところで、怪人に辿り着く前にあいつらに殺されるかもしれない。

「何やっているの、馬マン。早くしないと女性が誘拐されてしまうわ」

馬のマスクを強く握り締める。悲鳴が上がる。絹を裂くような、若い女の声だ。だが、慣れた者もいるもので、怪人たちを見ずに、普通に会社中へ入るような連中もいる。見て見ぬ振りが生きていく上でのコツである。彼らの行動は実に正しかった。そして、彼らは面倒な事を無視するくせに、いざ自分が痛い目に遭えば叫ぶのだ。助けて、と。

『オロロロロロロっ！ いいぞ、いいぞ！ バス中に押し込め！』

『ヒヤホー！』

流されるな、流されるなよ俺。勝てる訳がないんだ。行っても何も出来ない。パンチ一発で内臓ぶっ壊されて死にまうのがオチなんだ。

「……悪を滅ぼせとは言わない。正義を守れとは言わない。けど、あなたはいつらを見て、何とも思わないのかしら？」

言いやがる。むしろ、俺は怪人側の人間だ。奴らの立場や境遇が手に取るように分かるんだよ。

「青井正義、あなたは、どう思うの？」

でも、関係ねえよな。気持ちがあつたところで、立場を知っていたところで、奴らは俺を分かってくれない。好き勝手に暴れ回っ

て、控え室で『今日は楽だったな』なんて笑い合っただ。俺は、こんなにも辛い目に遭ってると言っのに。

「ムカつくぜ」

俺は馬のマスクを被った。

「けど、あいつらよりも、今はあんたのがムカつくよ」

「その怒りをぶつけてらっしゃい」
「言われなくとも。」

邪魔じゃけえ、消えろ

タクシーから出てきたのは、馬のマスクを被った男である。俺の事である。ジーンスにジャケットを羽織った俺は気炎万丈、戦闘員と怪人を睨み付けた。だけど奴らはこっちを見ない。若い女にうつつを抜かしてやがる。俺だってそうするに違いない。こんな変態、誰が相手にするだろうか。スーツもなしに、舐めた格好でやって来る奴なんざ、無視するに限る。

「おい」

だから、易々と近づけた。と言うか、一般人には俺も同類に見られていただろう。

「ああっ？ 何だよお前」

近くにいた戦闘員の肩を叩く。無防備に振り向いたそいつの股間を蹴り上げる。

「がっ……………！？」

スーツを着て身体能力が上がったとしても、無敵ではない。ダメージは通る。戦闘員に支給されている程度のスーツでは、急所に通ったダメージは中々抜けないだろう。

俺は悶絶している戦闘員の頭を掴み、地面に叩きつけた。アスファルトとそいつの頭がぶつかり、

「オロロ？ 何者だ？」

狼型のスーツを着た怪人がこっちを見る。距離は遠い。奴と俺との間には、戦闘員がうじゃうじゃといやがる。気付かれてしまったからには、もう不意打ちは通じないだろう。

「見た事ないヒーローです！」

「ウルフさん、やっちまいますよー！」

戦闘員が好き勝手に喚き出す。

「オロロッ、お前らがやれ。俺は、若い子とバスで遊ぶ。無視しても良いけど、さっさと始末して帰るぞ」

「ずりい！ くそっ、やるぞお前ら！」

ウルフと呼ばれた（まんまじゃねえか）怪人がバスに戻ろうとする。奴が背中を向けた瞬間、俺は覚悟を決めて駆け出した。掴み掛かるうとする戦闘員を擦り抜けて、ウルフとやらに狙いを定める。

そもそも、この数相手じゃ分が悪い。だったら頭を潰すのがセオリーだ。うん、いつもそうやってやられてるし。

「うお意外と早いぞっ」

「追いつけ追いつけっ、野郎生身じゃねえか！」

その通り。戦闘員での仕事ん時みたいには走れない。息だっですぐに上がるだろう。っーか捕まる。なるだけ攻撃は喰らいたくない。今晚だつて仕事はあるんだ。俺は立ち止まり、飛び掛ってきた戦闘員をやり過ごして、交差点から背を向ける。向かってきた俺を見て、野次馬たちが道を開け始めた。

「何なんだためえはっ」俺が聞きたいっつーの。

人込みに紛れて、ビルの間に身を隠す。息を整えていると、足音が聞こえてきた。軽い音だ。くそっ、やっぱりスーツがないと洒落んなんねえぞ。

「いたっ、いたぞ！」

見つかった！ 狭い路地、更に向こうへ逃げる。と、集団の中でも、一際足の早い奴がすぐそこまで迫ってきた。無理だ。俺は反転し、振り上げられた拳を避ける。戦闘員のバツクを取り、そいつの首に腕を巻きつけた。躊躇はなしだ。一気に締め上げて窒息させる。首の骨を折るつもりじゃねえと効果はないだろうし。

「動くな動くな動くな！ こいつがどうなっても良いのか！」

タップされているが無視。スーツを着ていても、関節を極められたり、こう、隙間を狙われるような技には弱いのだ。

「卑怯だぞ、ヒーローじゃねえのかためえ！」

「離してやれよ！ そいつ昨日から風邪気味なんだつて！」

「知るかつ、散れ散れ！ お前ら、全員で飛び掛ければイケるなんて思うなよ！ マジで！ 一人か二人くらいは殺すからな！」

俺が一步前に進めば、縦に並んだ戦闘員どもは一步退く。

「この馬が！」

「うるせえぶつ殺すぞ！」

しかし、やはり覆面もないよりはマジだったかもしれない。面が割れりゃあこの辺、どこるか街を出歩けないぞ。こうやって、また恨みを買っていく訳か。ヒーローって因果な商売だな。

「お前ら邪魔すんなよ、あのウルフとかいう怪人とタイマン張らせる。そうすりゃ命だけは助けてやる」

「なっ、お前そんな真似出来るかよ！」

「下っ端が」

怪人よりは劣ったスーツを着ているとは言え、数が数だ。万に一つの勝ち目があるなら、これしかない。けど、明らかに分が悪い。

戦闘員二十人に囲まれるか、並外れた性能を持つ怪人とサシでやり合うか、どちらが死に難いだろうか。いや、欲張んな。とにかく、俺としちゃあ金や勝利は二の次だ。生き抜くのを考えなきゃなんねえ。時間さえ稼げば、騒ぎを聞きつけた他のヒーローがハイエナよろしくやってくる筈だ。そこから隙を突いて逃げれば良い。

「怪人守って死ぬなんざごめんだろっが！ おらクソが、道開けるってんだ！」

怒鳴った瞬間、何かに躓いてしまった。調子に乗り過ぎたかもしれない。つんのめり、無様にこける。戦闘員の首を絞めていた為に、受身すらろくに取れず、地面にぶつかつた。

「今だーっ！ やっちまえ！」

「おおああああ待て待て待て待て！」

うわーっ前が見えねえ！ くそマスクの位置が畜生どうなっただどうなるんだ俺は！？

「待て、悪党どもめ」

「な、何者だ？」

「ふん」

な、何だ。何が起こった？ 女の声がしたと思ったら、戦闘員たちが足を止めたぞ。

「あーっもう！ こんな馬野郎の相手なんかしてっからだよ！ 新手が来ちまったじゃねえか！」

「困め困めっ」

新手？ そっ、そうか。ヒーローが来てくれたのか。良いぞやっちまえ！ ……何だかなあ。

戦闘員を手放し、こそこそと離れる。マスクの位置を直してみると、そこには確かにヒーローらしきスーツをまとった女がいた。

すげえ格好だった。スーツと言えばスーツだが、肌はかなり露出している。真っ赤なビキニみてえな、こんなんで攻撃を防げるのかよ。っーか恥ずかしくねえのかよ。

「はん、雁首揃えてぞろぞろと、われら雑魚にゃあ相應しい」

「てめえ面白い格好しやがって、おっ、おい、一、二の、三で行くぞ」

「はあ？ マジかよ、ウルフさん待とうぜ」

女ヒーローは腕を組んでいた。九重や俺よりも背は低いが、それでも百七十センチ近い。彼女の顔は、バイザーで半分が隠れていたが、真一文字に結ばれた口からは、意志の強さ、みたいなものが感じられる。長い黒髪はポニーテールにまとめられて、青いマントと一緒に風に吹かれて揺れていた。うーん、それっばい。確かに、ヒーローだ。顔立ちも整っているし、扇情的なスーツも、艶やかな黒髪も注目を惹くだろう。けど、何よりも目を引くのは、

「……………こっちから行くぞ」

彼女の持つ、恐らくは武器であろう、巨大なしゃもじだ。二メートル近くはあるだろうか。それで、分厚い。叩かれりゃ痛い筈。しかも、スーツのお陰で力は上がってるんだ。戦闘員程度のスーツじ

やあ、あの攻撃には耐えられないだろう。

しかし、しゃもじである。あの、ご飯をよそったりするアレ。ピキニヒーローはしゃもじを片手で振り回している。恐ろしい。

戦闘員たちがじりじりと間を詰めようとする。が、ヒーローは腰を深く落としてしゃもじを振り被った。掬い上げるような動作で、得物を振るう。近くにいた戦闘員二人が攻撃を喰らい、宙に浮いた。とんでもないパワーだ。あのスーツ、かなり良いものに違いない。

「ぎゃあああああ何だよそれ!？」

「ふざけんなよ馬鹿力女が！」

「てめえそんなの喰らったら死ぬだろ普通！」

戦闘員がぎゃあぎゃああと喚き出す。ヒーローは何も言わず、しゃもじを構えた。そのしゃもじには『一周年記念』と筆文字で書かれている。酷いセンスだ。あんなもんで殴られて死にたくねえ。

「畜生、ウルフさん呼んで来い」

「おっ、俺が行く！」

「いや俺が行く、俺が行くから誰かあいつを押さえとけ！」

結局、残った戦闘員は倒れていた仲間を背負い、一目散に逃げ出した。なので、構えを解いたヒーローは俺を見る。彼女は暫くの間こつちを見ていたが、興味をなくしたように顔を逸らした。

「……ほうとくくない。邪魔じゃけえ消えろ」

ホウトク……? そういや、こいつさつきから方言喋ってんな。

広島かどっかか? 何て言ったか知らないが、馬鹿にされているのは分かった。邪魔だし、消えろとも言われた。面白くねえ。助かったのは事実だけど、後から来ておいしいところ搔つ攫いやがって、正しくヒーローだ。礼は言わない。情けないけど。

しゃもじヒーローはこつちを見ないまま、じつと怪人を待っていた。

「オoooooooooooo! 好みじゃねえが、若い女は大歓迎だ! 痛め

つけて弄んで楽しい思いをさせてもらうからな！ オロロロロロロ
！」

やってきた怪人はしゃもじの一発を受けて動かなくなった。頭を打ち据えられ、地面に叩きつけられて、ぴくりともしなかった。ギヤラリーと化していた戦闘員どもは怪人を見捨ててバスに乗り込もうとしたが、別のヒーローに囲まれて、バスから引き摺り下ろされて一人ずつ丁寧にボコられていった。

広島弁のヒーローは携帯電話でどこかに連絡をした後、普通に歩いて帰っていった。

残された俺は事態の收拾を見届けた後、馬のマスクを脱ぎ捨てて、とぼとぼとタクシーに戻った。

「全然駄目じゃない、あなた」

もはや、憎まれ口を叩く気すら起こらない。助手席に乗り込み、深く、長い息を吐く。九重が心配そうに俺を見ていたが、じつと窓の外を見つめるしかなかった。戦闘員がリンチされる。バスの中に押し込まれていた若い女は、ヒーローに礼も言わず、そそくさとその場を後にしていた。

まあ、こんなもんだ。

現場に駆けつけたヒーローだって、賞賛浴びる為に来た訳じゃない。金欲しさ、あるいは、俺たちみたいに知名度とやらを上げる為に戦闘員と戦いに来たのだ。尤も、数人掛かりで一匹の雑魚を袋叩きにするような事しかやってないけど。

「あら、マスクはどうしたの？」

「……知らねえよ」

「ふうん？ じゃ、給料から引いておくわね」

「好きにしるよ」

社長の顔を見られなかった。そりゃ、スーツどころかまともな武器すら用意していない彼女のやり方には腹が立つ。俺が死んだって

『あらそう』の一言で済ませてしまいそうな女なのだ。腹が立たない方がおかしい。戦闘員を倒すどころか、怪人とすら戦えなかったのは俺の責任じゃあない。土台、ただの人間には無理な話なんだから。けど、やってやると息巻いて出て行ったのは俺なんだ。彼女のほんの少しの期待を裏切ったのは俺なんだ。初仕事、失敗しちまった。

「九重、出してちょうだい」

「……良いんですか？」

「良いも悪いもないわ。帰るわよ」

「……シートベルト」

タクシーが発進する。九重に言われて、俺はベルトを締めた。かなりの時間、車内には陰鬱な空気が立ち込めていた。

「青井」

社長が口を開く。俺は、ミラー越しに彼女を盗み見た。

「一つ褒めてあげる。あなたは、あいつらみたいなハイエナにはならなかった。怪人には届かなかったし、戦闘員とだってまともに戦えなかったでしょう。けれど、あなたはあなたの正義を守った。あなたは私の正義を守った」

「……良く言っぜ」

それきり、社長が口を開く事はなかった。

ヒーローとしての仕事が終わった数時間後、俺は戦闘員のスーツを着て仕事場に立っていた。悪の組織としてのお仕事である。うん、こっちのがしつくり来るよな、やっぱり。

「先輩、今日の相手は誰でしたっけ？」

「ああ？」

オフィス街の一角、人気のない路地裏。持ち場にいる時に話し掛かれて、俺は面倒くさいながらも振り返る。

「相手はいねえよ。俺らの役目は陽動だってチーフが言ってたろ」

先日の、倉庫での戦闘のせいで、俺たちの班の戦闘員の数は減っていた。なので、今日は別の班の仕事に組み込まれている。俺たちの班の役割は、騒ぎを聞きつけてノコノコとやって来るであろうヒーローの注意を引きつけ、本隊の仕事をやり易くする、である。

「捨て駒っスね」

「……うるせえ」

確かに、俺たちは捨て駒に違いない。けど、無理をする必要はない。今回に限っては適当にやってくれば良いんだ。

「今日はバスも出てない。自力で帰るしかねえんだ。怪我なんかしてみろ、捕まっちゃまうぞ」

「はあ、けど、二人一組つてのは心細いっスよ。陽動したってどうするんスカ？ この辺の建物に火つけて回るんスカ？」

「馬鹿野郎、そんな事したら捕まった時に酷いぞ。てめえが持っているのは何だ？」

「メガホンっス」

後輩の戦闘員は、メガホンを掲げてみせる。

「そいつで喚いてる。ヒーローがこっちに来るかもしんねえ」

「来たらどうすんスカ!？」

「知るか！ 逃げろ！」

まあ、俺たちの班はそこら辺に分散しているし、運悪くこっちにヒーローが来るとは限らない。そもそも、ヒーローが来ないかもしれないしな。

俺と後輩は必死に逃げ回っていた。運悪く、ヒーローがこっちに来ていたのである。

「はっ、はっ、はあ……やべえやべえっスよやべえっスよう」

路地裏から路地裏へ、時には深夜の交差点を横切って、俺たちはヒーローを撒こうとしていた。けど、あっちのスーツの性能は高い。完全には振り切れない。背中には、常に殺気を感じている。プレッ

シャーのせいか息が切れてきた。俺は背後を見遣ってからビルの壁面に背中を預けて、呼吸を整える。後輩はその場にへたり込んでいた。

追ってきているのは、この辺を縄張りしているヒーローだ。戦国武将の鎧みたいなスーツを着た、トルーパーとか呼ばれている奴だ。俺たちじゃあ手も足も出ないまま、撫で斬りにされて呆気なく殺されるのがオチだろう。悪党に人権はないのだ。

「ひっ……！　だ、誰か来るっスよ！」

「ここまでか」敵を引きつける、その仕事は必要以上に終わっている。ここらが潮時だ。組織に逃げ帰るべきだろう。

「帰るぞ。本隊とは逆方向から、こう、遠回りに」

「追いつかれたらどうするんスカ！？」

その時はその時だ。けど、ヒーローだってそろそろ気付く頃だろう。俺たちが困だという事に。

「見つけた」

「うわあああああつ！？」

後輩が叫ぶ。俺たちの前方、進路を塞ぐかのように立つ者がいた。ビキニみたいなスーツを着た、髪が長くて背の高い女である。彼女は、巨大なしゃもじを持っていた。

「……野郎」

見間違える筈はない。こいつ、昼間のヒーローじゃねえか！

「先輩っ、先輩どうするんスカ！？」

「ぶっ殺してやる！」

恨み晴らさしておくべきか。俺は駆け出す。昼間の馬マンとは違う。今はスーツだって着ているし、しゃもじ女の攻撃やパターンは既に見ているんだ。勝てるかどうかは分らんが、一矢報いる。っーか殴る。掻き集める嫉妬パワー！　巻き起これ俺のエネルギー！

無事に組織へ戻れたのは奇跡と言っても差し支えないだろう。俺

の体はぼろぼろだった。体中が痛い。が、スーツのお陰か、幸いにも軽い打撲だけで済んでいた。生きてて良かった。生きているって素晴らしい。

『お前、すごいな、よくもまあそんなスーツでヒーローに向かっていったもんだ』

チーフからは褒められたが、あんまり嬉しくなかった。結局、あの広島女には指一本触れる事すら叶わなかったのである。どうやって助かったのか、いまいち覚えていない。とにかく、今日はもう何もかも忘れてゆっくり休もう。

他のネコ科の動物と違って、泳ぎが上手い

金が足りない。

お金が欲しい。

「青井よう、やっぱな、早く怪人になった方が良いと思うぜ」

「はあ」

安い居酒屋。俺はビールを呷る。焼き鳥を貪り、先輩の話聞き、適当に相槌を打つ。

「お前の為を思って言ってたんだ。分かってんだろ、五年、十年先も下っ端で走り回ってられんのか？ その点怪人は良い。手下あ扱き使っただけで良いからな」

俺とサシで飲んでいるのは、組織の怪人、俺の先輩である。白髪交じりで、顔に刻まれた皺。こうして見れば、やっぱり普通の人間と変わらない。スーツを脱げば、怪人だって一般人だ。特に、俺の属する組織は合成だの、改造だのと言った高等技術を持たない。好まない。一部の者だけが、ガチの怪人となっている。で、先輩は組織の中でも古株の怪人らしい。修羅場を潜り抜けてきたのかとさえ言え、そうではない。先輩はそれだけ危険を察知するのが上手く、また、人を使うのが上手かった。

「怪人になれば、給料だつて戦闘員ん時とは比べもんならねえぞ」でも、どうせここも割り勘なんだろ。先輩には何かを驕ってもらったという覚えがない。

「いや、なれるもんならなりたいっすよ」

「ま、そうだよな。俺が推薦してやっても良いんだけどよ、お前、実績とか、そういうのねえもんか」

「ろくな仕事回ってこないんだよ。」

「あ、待てよ。こないだ^{すまたけ}煤竹が言ってたっけか。お前、ヒーローを

必死で足止めしてたらしいな」

「あー、まあ、らしいっすね。あんま覚えてないんですけど」

煤竹というのはチーフの名前である。彼と先輩は同期なので、仲が良いらしかった。

「そのお陰かどうかは知らないが、仕事は無事に終わったらしいな。いや、あそこはトルーパーが縄張りにしててよ、結構やべえ地区なんだわ」

「あの時代錯誤ヤローっすか」

刀振り回す奴もいれば、しゃもじ振り回す奴もいるけどな。

「もしかしたら、煤竹ん方から良い話がお前にいくかもしれないぞ」「いやいや、流石にそれはないでしょう」

仕事が成功したのは俺のお陰じゃないし、こっちは陽動の任務だつて忘れていたんだ。ヒーローを足止めしたっつーか、恨みだけで必死に喰らいついていたというか。

「まあ、頑張りますよ。正直、下っ端は気楽っちゃあ気楽ですし」「ぎゃはは、かもな！」

けど、いつまでも下っ端ってのは、なあ。

先輩と分かれて（やっぱ割り勘だった）家に帰る。今日の仕事は見張りだけで楽だったが、明日は組織の方じゃなく、ヒーローとしての仕事が待っている。早めに寝て、明日に備えよう。

……しかし、金が。

金さえあればなあ。つーか、カラス貧乏過ぎる。金さえあれば、スーツだって買えるんだ。スーツがありゃ仕事の成功率だって高まる。むしろないと死ぬ。もう、こないだみたいな真似はごめんだ。せめて、スーツ抜きでも出来るような仕事さえもらえれば、まだどうにかなる。コツコツと金を貯めて、そこで、いつかは俺もヒーロースーツを。

ヒーロー、か。

相変わらず、分からん。社長は正義だの悪だの言っているが、俺には良く分からない。まあ、金が大事ってのは彼女だって分かっているだろう。明日は、色々話を聞いてみるでしょう。

薄汚い雑居ビルの四階に、俺の職場はある。ヒーロー派遣会社、『カライズ』が。大失敗に終わった初仕事の後、今日、久しぶりに社長と顔を合わせる訳だが。

「スーツがないと、俺は仕事が出来ない」

とりあえず言ってやった。そりゃそうだろう。ヒーローを派遣すると言っておきながら、やってくるのは馬のマスクを被った一般人だぞ。詐欺だろう、これは。

社長は指定席から俺を見つめている。つまらなさそうに。冷たい目で。

「そうね」

お？

「青井、あなたの言う通りよ。はっきり言えば、ウチにはお金がないのよ」

「スーツがないなんて、マジで騙された気分だぜ」

「まあ騙したのだけど」

こら聞き捨てならねえぞ。

「私も考えを改めたわ。ヒーローとは、心意気だけではままならぬものなのだ。正義を執行するにはきちんとした装備が必要だものね」

「その通りだ」

「なので、今日は簡単な仕事を用意したわ。安心なさい、今回は正規の依頼を受けたの」

いや、むしろ安心は出来ないんだけど。前は社長のポケットマネー依頼だった訳だし。

「……怪人を倒せとか、そんなんじゃないだろうな」

「ある意味、そっちのが楽かもしれないわね」
「はあ？」

「あなた、子供は好き？」
そう言っただけで微笑む社長だが、目は一切笑っていないかった。

ウチの社長は、依頼の内容について詳しく説明してくれなかった。まあ、どんな仕事であれ俺は断れない立場だし（不本意ながら）。流されるままに九重のタクシーに乗り、促されるままに早朝の、デパートの屋上へやってきた。開店前なので、俺たち以外には誰もいない。

「何をしろと言うんだ」

屋上は、小さな遊園地となっていた。象やどっかのヒーローの乗り物（お金入れたらゴインゴインって動く奴）、テントの下には古めかしいビデオゲームが並んでいる。でも、俺の目を引いたのは特設のステージだった。小さいが、まあ、そこそこの立ち回りは出来そうなの、それぐらいの空間はある。なるほど、読めたぞ。

「……ああ、いや、分かった。アレだろ、ショーだろ？」

まあ、分かり易い。ヒーローを派遣って、こういうところにも送り出す訳だ。これならガチの怪人と戦う必要はない。スーツだって貸し出してくれるんだらう。考えたじゃねえか白鳥漣子さんよう。

「違うわ」 あっさり否定された。

「と言うか、この時代にヒーローショーなんてやる訳がないでしょう。その辺歩けばリアルで見られるんだから」

「じゃあ、俺は何を……」

社長は指を鳴らす。すると、九重がどこかへと歩き去っていった。嫌な予感がする。何を持ってくるつもりなんだ。俺に、何をやらせるつもりなんだ。

「お待ちせしました」

戻ってきた九重は、背中に何かを担いでいた。……すげえ、何か

モコモコしているような。

そこで気付く。デパートの屋上、子供は好きかと尋ねられた事、それらが一致する。つーか一つしかねえ。九重は担いでいたものを下ろして、俺に見せた。着ぐるみだった。白と黒の。ネコの。

「こつこつこの、やった事ある？」

「こ、こつこつこのつて、何だよ」

「マスコットよ、マスコット。この着ぐるみはね、ここのデパートのマスコット、オセロット君よ」

お、オセロット？

「……ネコ科の、オセロット属に分類される食肉類。南アメリカの熱帯雨林に生息している。他のネコ科の動物と違って、泳ぎが上手い」

俺が戸惑っていると九重が答えてくれた。俺が聞きたいのは、そういう事ではない。

「白黒のオセロと名前を掛けているのね。ふふ、くだらない。さあ青井、あなたはオセロット君になり、子供たちを楽しませるのよ」

「ぐっ、う、嘘だろ……？ マジで言ってるのか……」

「開店まで時間がないわ。早く着替えなさい」

俺が着替えるまでもなく、社長は楽しそうに笑っていた。

視界が悪い。蒸れる。吐いた息が顔に掛かる。気持ち悪い。

「おらーっ！ かかってこいよー！」

「ぎゃはははははは！」

青井正義がオセロット君となってから数時間、休憩などは一切なし。俺はひたすらに子供たちに追い掛けられ、蹴られている。

俺の仕事は簡単だ。要は子守りをすれば良い。風船を配ったり、おどけた動きをして適当にやっていると良い。筈、だった。けどガキどもはいつだって容赦がない、常に本気なのだ。面白がって後ろからケツを蹴られて、群がられる。親御さんの目がある内は反撃だ

って出来やしない。と言うか、反撃したらさつきから目を光らせているデパートの関係者に怒られる。

畜生、殴り掛かりたい。マウントとってボコボコにしてやりたい。「こいつぜんぜんテイコーしねえ！ なぐれなぐれ！」
やめるおおおおおおおおおお！

午後二時、俺はようやく休憩をもらえた。

オセロツト君の皮を脱ぎ捨てて、デパートの屋上、ステージに腰掛けて紙コップのジュースを啜っている。春先だと言うのに、汗みずくで気持ちが悪い。こんな事なら着替えを持ってくるべきだった。今頃、社長と九重はデパートをうろろしているに違いない。ウインドウショッピングとやらを楽しんでいるんだろう。俺には、労いの言葉一つもなく。と言うか、あいつら、どうして付いてきてるんだよ。ムカつく。もっとやる事はあるだろうに。会社の宣伝とか。しかし、くそ。悪の戦闘員である俺が、ガキどもに追い掛かれるとは。屈辱だ。金の為とはいえ、どうしてこんな事をしなくちゃならないんだ。

「あら、サボりかしら？」

ふて腐れて寝転がっていると、意地の悪い声が聞こえた。上半身を起こすと、社長がこっちを見て笑っているのを認める。傍に立つ九重はそわそわと、落ち着かなさそうにしていた。

「休憩だよ、休憩。今はガキだっていないだろうが」「いや、一人いるか。目の前に。」

「くそ、いつまでやりやあ良いんだよ、これ」

「閉店までよ」

悪びれず、言う。俺は頭を抱えた。涼しげな顔しやがって。

「お前らは何してたんだよ。良いよなあ、こんなもん被らなくて」
傍らに置いてある、オセロツト君の頭をぼふぼふと叩く。

「ええ、あなたには感謝しているわ。私なら子供の相手なんてして

られないもの」

「お前だつて子供だろうが」

「あなたから見ればね。けど、あなただつてまだまだ子供だと思つわ」

うるさい奴だな。

「あの」

視線だけを向けると、俺に呼び掛けたであろう九重は視線を逸らしてしまう。

「何だよ？」

「……それ、触つても？」

それ、とは、恐らくオセロツト君の頭の事を言っているのだろう。「こんなもん触つても、面白くも何ともないぞ」

言いつつ、俺は九重に向けて頭を放り投げた。彼はそれをしっかりと両腕で受け止める。表情こそ変わらないが、少しだけ、嬉しそうにしていた、ように見える。……変わった奴。

「どうせなら着れば良いのに」

「……え？ そ、それはちよつと……」

ちらつと、九重は俺を見る。こつちの機嫌を窺うように。

「あなたの汗が染み付いたような着ぐるみに袖を通すくらいなら、泥に塗れた方がマシかもしれないわね。九重、あまり長くは触らない事ね。病気にでもなつたら大変だから」

「だつたら泥に塗れるよ」

「嫌よ。それより、そろそろ休憩は終わりだから」

「あ？ どうしてんな事お前に決められなくちゃいけないだよ」

「さつき、社員からそう聞いたのよ。忙しくなるから、伝えておいてくれて。全く、私をパシリに使うなんて、良い度胸していると思わない？」

「げーっ、マジかよ。もう休憩終わり？ 荒いよ荒いよ人使いが荒過ぎるよ。」

「ほら九重、それを返してあげなさい。子供たちに正体がばれてし

まうわよ」

ちっ、仕方ないな。仕事は仕事だ。お金の為に頑張ろう。九重から受け取ったオセロット君の頭を被る。

「ふふ、似合っているわよ」

「黙れ」

ガキどもの声とはたばたとした足音が聞こえてくる。奴らの相手をするには集中力が大事だ。忍耐、忍耐。

「うわああああ出たああああああああ！」

「ぎゃああああああああ！ 何だこいつー！」

ほら早速きやがった。が、ガキどもは俺の方を見ていない。いつの間にか、屋上にいた新しい着ぐるみ野郎を指差している。黄色い、ひよこの着ぐるみだ。何故か、背中には仰々しい、悪魔みたいな羽根が生えていたけれど。

「……何だあいつ、新しいマスコットか？」

社長は小首を傾げる。

「さあ、私は何も聞いていないけれど」

ひよこの着ぐるみはひよこひよここと歩き、子供たちに近づいていく。……何か、客を横から掠め取られたような気分だった。

「おいつ、俺を見る！ お前らの遊び相手はこっちだ！」

「何を言っているの、あなたは」

「……様子がおかしくないですか？」

九重が心配そうに言う。そんな事はどうでも良い。ガキどもが好奇の目で見るのは、このオセロット君でなければ！

「おいこらてめえ人のシマで何勝手やってやがんだ、ああ？」

ひよこ野郎に近づいていく。すると、そいつは首を巡らしてこっちを見た。

「ピーヨピーヨ。子供は素晴らしい。愛くるしい、幼き雛よ。しかし、時が経てばその愛らしい肉体からは羽根が生え、巣から飛び立ってしまう」

「あ？ てめえ何抜かしてんだ？」

「まるで悪役の台詞じゃない」

誰が悪役だ。誰が。

ガキどもは俺とひよこを遠巻きに眺めている。

「ピヨピヨピヨ。だが、一度巣から飛び立てば、どんな危険が、どんな苦難が待ち受けているものか。私は、この子たちには幸せになつて欲しいのだ。出来るならば、私の腕の中で。安らかに」

……何か、おかしいぞこいつ。話が通じていない。と言うか、こいつのガキどもを見る目付きは危ないに違いない。

「子供たちよ、いざ行かん！ 私と共に！ 私との、愛の巣へ！」

声を上げ、ひよこは羽根を広げた。何かと思つた瞬間、そいつ

は羽根をばたつかせて、少しずつ空に浮かんでいく。飛んで、いる？

「うおおおすげえ飛んだ！ 飛んだぞこいつ！」

「さっきのネコよりかっこいい！」

聞き捨てならねえ！ くそう、このひよこがああ！ けつたいな

パフォーマンスで子供のハートを鷲掴みやがった。ひよこのくせに！

「ネコじゃねえ！ オセロットだ！」

「何を言っているの！」

社長に叱られる。

「マスコットじゃないわ、アレはきつと、怪人よ」

「何っ？」

いや、でも、そうだ。冷静に考えれば、空を飛べる着ぐるみなんか存在しない。野郎のつけてる羽根は飛行ユニット、つまるところスーツだ。どこかの組織が送り出した怪人以外に有り得ない。

「ヒーローはどうしたんだよ！？」

「……まだ、気付かれていないんです」

深刻そうに、九重は言う。実際、これはかなりやばい。だが、社長は笑っていた。絶好の機会だと言わんばかりに。

「ヒーローならいるじゃない。ここに」

そうして、俺を指差す。

「お、お前、まさか……」

「仕事よ青井。あの怪人を倒しなさい。子供たちの前で完膚なきまでに。ふふ、良いわ。つまらない仕事だと思っていたけれど、こんなサプライズが待っていたなんて」

「そんなサプライズいらねえから！」

ひよこは空を旋回しながら、ガキどもをねめつけている。品定めしているような、不気味な佇まいだった。

「実際、あなたがやらなければ子供たちに危害が及ぶわ。他のヒーローだってすぐに駆けつけてくる。少しでも良いところを見せ付けてやりなさい」

畜生、他人事だと思っただけ好きに言いやがって。

空を飛ぶ怪人だと？ あんなもん、どうしろってんだ。こっちの攻撃は届かない。向こうが飛び道具らしき武器を持っていないのは幸いだが、空中から仕掛けられちゃあどうしようもねえぞ。捕まえようにも上に逃げられちゃおしまいだ。ヒットアンドアウェイで少しずつ削られていく。

「うわあああああ！」

ようやく事態に気付いたガキどもが逃げ回る。デパートの中に逃げ込もうとするが、ひよこ怪人は出口を塞ぐように、そこに舞い降りた。

「ピヨピヨピヨピヨ！ 実に良い！ 声変わりする前のあどけない声ときたら！ 声ときたら！ 聖歌隊に勝るとも劣らない！ 素晴らしいぞ君たちっ、さあ、もっと悲鳴を聞かせておくれ！」

俺は、悪の戦闘員だ。ヒーローかもしれないが、それはまだ変わらない。だけど、ガキにまで手を出すほど落ちぶれちゃあいない。戦闘員だろうが怪人だろうが、中身は俺らと変わらない人間だろうが。そこまでやっちゃあ、駄目だろうが！

「畜生やってやる。俺か、あいつか、ガキどもに人気があるのはどっちか！ 白黒はつきりつけてやるうじやねえか！」

「……が、頑張つて。オセロット君」

任せる。ヒーロー、オセロット君の初陣だ。

命乞いとクラシックは聞かない主義だ

勝算がない訳じゃあない。空を飛び回る相手ってのは確かに厄介だ。だけど、怪人の中身はあくまで人間。俺たちはどう逆立ちしたって人間のままだ。鳥にはなれない。見たところ、あのひよこもスーツを着ているだけで合成怪人の類じゃあない。狙うのは、あの羽根だ。あれさえどうにかすりゃあ、ピヨピヨうるせえあの野郎も地べた這いずり回るに決まってる。問題はこつちだ。オセロット君は、つまるところただの着ぐるみでしかない。もこもこしているだけで、身体能力が上がったりはしない。むしろ動き辛い。だが、朝から今までガキどもに追い回されて、そこそこには慣れている。ある程度は戦える筈だ。

「ピヨピヨピヨっ、ああ、子供は柔らかくて良いなあ！」

「そこまでクソ野郎」

腕を組み、ひよこ怪人を見据える。野郎はこつちに一瞥くれた後、名残惜しそうに子供から手を離れた。その隙に、子供たちは親御さんの元へ逃げていく。

「今の内に逃げろ」

促されて、母親たちは子供の手を引いて建物の中に避難する。ひよこ怪人がその後を追おうとするが、そうはさせん。俺は怪人の背中に襲い掛かる。しかし、野郎は飛行ユニットを使って手の届かない上空へ飛んでいった。

「ちっ、下りて来い！ 焼き鳥にして食ってやるからよ！」

「ピヨピヨ！ ピーヨピヨ！ お前、それはスーツじゃないな？」

ただの着ぐるみだろう。でかい口、叩けば叩くほどお前は無様になるぞ」

既に無様晒してんだよこつちは。

「うるせえ殺すぞボケが」

言つと、ひよこ怪人は俺を目掛けて急降下してくる。好都合だ。とっ捕まえてその羽根むしり取つてやる。しかし、奴のスピードは予想以上に凄まじかった。俺の右腕は空をかき、怪人の足が胴に炸裂する。俺は地面に転がった。

ダメージは、意外とない。この着ぐるみが分厚いせいだろう。相手が鳥型の怪人と言うのも不幸中の幸いだった。機動力は群を抜いて素晴らしいが、火力を犠牲にしている。飛行ユニットという、扱い辛いものを装着しているのも今となつては運が良い。あれが壊れるのを、怪人は一番危険視している。向こうだって、無茶な攻撃はしてこないだろう。粘ればどうにかなるかもしれない。それどころか、俺が奴を倒さなくても良い。もう少しすれば本物のヒーローもやってくる。出来れば、それまでに飛行ユニットは壊しておきたい。そうすりゃ、後は困んで終わりだ。

「ピヨピヨピヨ、お前の考えている事は分かるぞ。これだ。こいつをどうにかしたいんだろう」

怪人はご自慢の羽根を愛しげに撫でる。

「だが、それは無理だな。お前のスピードではついてこれまい。他のヒーローがやってくる前に始末し、子供たちを私の巣へ持ち帰る！」

くっ、速い。

屋上という開けた空間をフルに利用していやがる。怪人は上空を飛び、四方八方から俺に攻撃を繰り返す。捉えられない。視界が悪いのもあるが、何よりも、やはり速い。右にいったかと思えば左から、前かと思えば上からきやがる。とてもじゃないが、こいつはユニットを壊すどころか時間を稼ぐのですら……。

「何をやっているの青井！ 早く仕留めなさい！」

わーい応援ありがとう社長。邪魔だからお前も失せとけよ。

「……ふん、なるほど。お前は派遣会社の社員らしいな。あのようなメスに扱き使われている訳だ。男子として、情けないとは思わな

いのか？」

「誰がメスよつ、青井、早く殺しなさい！」

やべえぞ、考える。考える。いや考えても無駄かもしない。俺は、あいつには追いつけない。せめて、どこから攻撃が来るのか予測出来れば、まだ何とかなる。

「ピョーッ！ よそ見か小僧！」

頭に良いのをもらってしまふ。俺は倒れ込み、立ち上がるうとしたが、怪人の攻撃を受けて、仰向けに転がされてしまった。

「ピョピョピョ、しかし心根こそ素晴らしい。生身と変わらぬ身で怪人に立ち向かうとはな」

好きでやってんじゃないんだよ。俺だってスーツ着たいっつーの。だがここまでだ。ああ、早く子供に触りたい。子供たちに囲みたい。愛しい雛鳥よつ、卑しい私に、どうか愛を教えてください！」

ここまでか？

次はどうすれば良い。どこから来る。上か、右か、左か、後ろか、前か、どこから……いや、待てよ。そうか。分かる、分かるぞ。野郎は、野郎の攻撃は

「お、オセロツト君……！」

九重が叫んだ。

俺は倒れたままでひよこ怪人を睨みつける。奴の姿は雲間に隠れて見えなくなる。だが、分かるぞ。上空から、狙いを定めて急降下してくるつもりなのだろう。いや、そうに違いない。

「立ち上がるのよオセロツト！」

だから、このままだ。

「ピョーっ！」

奴は、上から来る。何故なら、俺がこうして、無様に倒れているからだ。寝転がっている奴を攻撃するには、真上からの攻撃しかないだろう！

俺は両腕を伸ばす。怪人の攻撃を防ぐ為じゃない。だから、ほら見る間抜け。

「うわあああああああああああ！」

力いっぱい叫ぶ。俺の両腕は、間抜けなためえを抱き締める為にあるんだよ！

急降下してきた怪人は頭から突っ込んできていた。覚悟は決めていたが、一撃目はどうしたって避けられない。胴に、頭が突き刺さる。歯を食い縛って、意識が飛びそうになるほどの痛みを我慢する。「なっ、お前まさかこれを……!?」

だが、しっかりと掴んだ。俺の右腕は怪人の羽根を。俺の左腕は怪人の胴体を捉えている。堪える堪える、力を振り絞れ。

「おお……っ！」

羽根を、引き千切る。

「うあああああああ!? 羽根がっ? 羽根がああ!?」

片方だけで良い。羽根型のユニットは二つ揃わなけりゃ、バランスが取れなくて飛行は難しくなる。

「俺で良けりゃあ愛してやるぜ! 骨までしゃぶってやるよオ!」

ひよこ怪人が悲鳴を上げた。俺は千切った羽根を投げ捨てて、もう片方のユニットにも手を伸ばす。

「ひっ、や、やめる! やめてくれ! 高かった、高かったんだそれはい！」

「知るか! こっちだっけ痛かったんだ! てめえただで済むと思っでんじゃねえだろうな!」

情けなんか掛けてられるか。こっちは命が掛かってたんだ。二度とよろちよろ出来ないように、徹底的に痛み抜いてやる。

「いやだあああ誰か助けてくれえええええ!」

「それでも怪人かてめえは!」

だが、怪人の声は届いたらしい。

「そこまでだっ」

振り向くと、屋上には背の低い男が立っていた。赤み掛かった長い茶髪、特徴的な高い鼻。真っ赤なコートを翻し、そいつは俺の方に近づいてくる。

「……？」

足音が、人間の放つものではなかった。金属が擦れてぶつかるような、妙に高い音を奏でている。こいつ、改造を受けてやがる。全身じゃないが、恐らくは下肢部分。いつの間にかここにいた事を考えるに、こいつにも飛行能力が備わっているのかもしれないかった。

だけど、そんな事はどうでも良い。俺は助かったのだ。しかも、怪人の飛行ユニットをぶっ潰すといった活躍を見せつけて。今回の仕事は、どうやら成功に終わったらしい。

「遅いじゃないか、ヒーローさん」

怪人から手を離して立ち上がる。俺は着ぐるみの中でにこやかな笑みを浮かべていた。

「それ以上近づくな、ゲスめ」

「は？」

「貴様、どこの組織の者だ？」

俺は首を傾げる。こいつ、何を言っているんだ？

「答えろ、悪党が！」

あく、とう？ まさか、俺の事を言っているのか？ 恐ろしくなった俺は、社長たちに目を向ける。彼女たちも呆然としていた。

「い、いやいやいや！ 俺は怪人じゃねえって！ ただの人間だから！ これだってスーツじゃねえし、着ぐるみだし！」

「騙されんぞ。俺は見ていたぞ、貴様の戦いを。ヒーローとは思えん。悪魔のような戦いだっただけ」

そりゃ悪魔にでもならねえと、ただの人間が怪人に勝てる訳ねえだろうが。

「ともかく、彼から離れる。これ以上の暴虐は許さん」

言われて、仕方なく俺は引き下がる。何だか、視野の狭い奴に捕まってしまった。

「君、大丈夫か？」

「う、うう。羽根が、羽根が……」

よりもよって、ヒーローが怪人を助けようとしてやがる。馬鹿

か。

「なあ社長、あいつに何とか言ってみてやってくれよ。このままじゃ俺ら悪役だぞ」

「そうしたいのは山々だけれど、話を聞いてくれるような雰囲気ではないわね。とりあえず、私たちは事情を説明する為にここの社員を呼びに行くわ」

「なっ？ てめえふざげんな！ こんな奴と二人きりになったら、死ぬまで殴られちまうぞ！」

社長と九重は、逃げるようにこの場を去った。あまりの早業、迷いのなさに、俺は動く事が出来なかった。

「……さて、貴様の処分についてだが」

俺は精一杯首を振る。横に。横に。横に。

「待て待て待てって！ 俺は怪人じゃない！ お前の敵じゃないんだ！」

「ふ、俺の敵だと？ それを決めるのは俺自身だ。そして、お前は俺の敵だ。俺が、そう決めたからだ。悪魔め覚悟しろ」

ま、まずいつて！ まずいつて！ そういうのはまずいつて！

「よせ、よすんだ！」

「命乞いとクラシックは聞かない主義だ」

「ぎゃああああああああああ！ やだやだやだーっ！ 死にたくねえよおおおお！」

「あら、少しばかり遅かったかしら」

小一時間ほど、俺はヒーローに殴り続けられた。蟻をいたぶるように、とても優しく、だけど恐ろしい力で。もはや動く体力どころか、このクソアマに罵声を浴びせる気力も残されていない。

「かつこいー！ 飛んでる！ すっこい飛んでるー！」

「次はおれをのせてくれよう！」

デパートの関係者を連れてきた社長たちがヒーローに事情を説明

し、誤解が解けた頃、既に俺の体力は限界に近かった。

あの鼻高野郎は、怪人を倒したヒーローとして、子供たちに大人気。羽根をもがれたひよこ怪人は別のヒーローにどこかへ連れて行かれてしまった。俺は、ここで何をしている？

「……大丈夫、ですか？」

「……そう見えるなら、眼科に行つた方が良い」

やっぱり、ヒーローは嫌いだ。と言うか死ぬ。第一、野郎は言いやがった。『見ていた』と。後から出てきて、おいしいところを持つていくんだ。金も、名声も、何もかも。実際、怪人と戦っていたのは俺だろうが。ガキだつて、その母親だつて、それを見てたんじやねえのかよ。何だこの仕打ち。地球滅びろ。

「きつと、酷い顔をしているわね」

社長はこつちを見る。

「悔しい？」

「別に」

「悔しいのね。でも、それはあなたが自覚したからかもしれないわ。自分が、ヒーローなんだつて。だから、悔しいのよ」

ヒーローなんざくそくらえだ。

「また失敗しちまつた」

偉そうに出張つていって、この有様だ。しかも怪人にやられたんじゃない。ヒーローにやられたんだ。曲がりなりにも、ヒーローを名乗っていたのに。

「失敗ではないわ。ここのデパートにカラーズの名前を覚えてもらえたでしょうし、恩だつて売れたでしょう。ふふ、色をつけてもらったわ」

「……風船、もらいました」

「あなたがやったのよ。確かに、最後はしまらなかったわ。けれど、子供たちを守つたじゃない。途中までは、私が予想していたよりも、ずっと上手に戦っていたわよ」

もしかして、慰められているのだろうか。やめてくれ。惨めにな

る。

「か、かつこよかったです」

嘘つけ。

「はあ、もう良いわ。九重、帰るわよ」

「え？ で、でも」

「青井はそこでいつまでもふて腐れているつもりらしいから」

それは困る。俺は急いで起き上がった。

「ふざけんなよ、ちゃんと乗せてけっつーの！」

戦闘で疲れて、ヒーローにボコられた俺を放置するなんてアホかお前ら。

「だったら、それは脱ぎなさい。借り物なんだから」

ああ、忘れてた。俺は被り物の頭に手を伸ばす。けど、すぐには、取れなかった。

「何しているの？ もしかして取れないの？ 不器用ね」

「ちげえよ」ただ、少しばかり名残惜しかったただけだ。悪いな、オセロット君。中身が俺じゃなけりゃ、もうちよいかつこよくなれたのによ。

「本当、口が悪いなお前は」

「あなたに言われたくないわ」

オセロット君の頭を脱ぎ、そいつを地面に放る。九重が後ろに回り、チャックを下ろしてくれた。ありがとう。本当、お前は気が付く奴だな。その女にも見習って欲しいもんだよ。

「ふー、涼しい」

風が気持ち良い。屋上つてのは、風が吹く。空が近くて、何だかスーツなんかなくなつて飛べそうな気がしてきた。

「うあ、汗まみれじゃないの。駄目よ、駄目。九重、やっぱり青井は乗せられないわ。車の中が男臭くなるから」

「てめえが持つてきた仕事のせいだろうがよ！ おい九重、絶対に乗せるよ。こんな女に尻尾振ってたらろくな事にならねえからな」

俺は九重と肩を組む。無理矢理に。

「二対一だ。はっはあ、社長さんよう。女つてのは男に勝てないよ
うに出来てるんだなあ、これが」

「性差別ね。あなた、本当にヒーローとしての自覚はあるの？ ま
るで悪役、しかも小物じゃないの」

一瞬どきりとしてしまったが、まあ、概ねその通り。今更悪だの
下っ端だの言われたところで怯むものか。

「ま、今日の私は少しばかり機嫌が良いから、同乗を許可しましよ
う」

「……あ、そっぴやオセロット君の仕事はもう良いのか？」

「仕事どころじゃないもの。それに、マスコットならあそこにいる
でしょう？」

言つて、社長は子供たちに囲まれるヒーローを指差していた。鼻
高改造野郎は、俺をボコりにボコつていた時のような鬼みみたいな形
相はどこへやら。その辺にいる、ちゃらい兄ちゃんになっている。

「オセロットでも、ひよこでも子供の人気は取れなかったな」

「所詮、被り物、偽者だもの。本物のヒーローには敵わないわね」

「ヒーローつつつか、空を飛べるのを珍しがってる風にしか見えな
いけどな」

「あら、それは負け惜しみと言つたのよ」

ところで、さつきから九重は一言も喋らない。それどころか息し
ていないようにも見えた。

「あなたが臭いのよ。離してあげなさい」

「はいはい」まあ、確かに臭い。少し可哀想だったかな。けど男同
士だし、何を気にする必要があるのやら。ううん、九重とはまだぎ
こちない。俺のが年上なんだし、もっとこつちから歩み寄つてやる
う。うん、そうしよう。そんで仲良くなって結託して、いつかこの
社長を痛い目に遭わせてやるう。げへへ。

「やだ、何よその顔。気持ち悪い」

マジで。いつか痛い目に遭えば良いんだ。

やはり無償と言つのも面白くない。金は欲しい

やはり金なのだ。何をするにしても金は要る。しかし、俺は金がない。組織の戦闘員の給料では生活するのに精一杯だ。その先はない。貯金なんか殆どない。稼ぐ為には、ヒーロー派遣会社の方でどうにかするしかない。だが、そっちにも金はなかった。ヒーローは俺一人。しかも、一人分のスーツですら用意してもらえない。これではおいしい仕事なんか寄ってくる筈もない。スーツが必要だ。大至急。その為には金が要る。金を稼ぐ為には金が必要なのだ。何て無様。何と虚しい、世知辛い世界なのだろうか。堂々巡りの無限ループ。社長は小さな事からコツコツと、とか言っているが、それじゃあ駄目だ。先に立ち行かなくなっちまう。

話は、意外と簡単だ。つまり、金を掛けずにスーツを手に入ればそれで良い。問題なのは、その方法だ。けれど、俺は下っ端ながらも、悪の組織の構成員として六年もやってきている。心当たりの一つや二つはあった。

仕事の終わった後の閑散とした控え室で、俺はそんな事を考えていた。

うん、動こう。思い立ったが吉日だ。心当たりの人物へ会いに行こう。

戦闘員として六年もやっているのは、ウチの組織の中じゃあ長い部類に入る。ヒーローにも捕まらず、酷い怪我也負わず、とりあえずはやってこれてきた。しかし、うだつが上がらないと陰口を叩かれてもいる。まあ、その分顔は広くなった。俺がこれから会おうとする人物も、その内の一人である。友人と言つのは気安い。上

司と呼ぶのも違う気がする。少し、変わった奴なのだ。

控え室を出て、薄暗い廊下を進む。悪の組織としての雰囲気作りではなく、単純に、この辺りは電灯が切れているだけだった。代える金もないだろうし、上には代えるつもりもないのだろう。所詮、下っ端。戦闘員ゾーンである。だけど、もう少し進めば明るくなる。本来なら、俺みたいな奴が立ち入ってはならない場所なのだ。が、そこは他の奴よりも顔が広い俺である。警備の人間にへーこらしながら、腰を低くして歩く。角を幾つか曲がり、階段を下り、長い廊下を進んで、再び階段を上る。ここがどこなのか、時折分からなくなる時もあったが、流石に慣れた。長い廊下、角を曲がり、突き当りの扉をノックする。返事はないが、礼儀として。

「入るぜ」

部屋の中は暗かった。だが、照明に困る事はない。室内のそこかしこにパソコンがあり、つけっぱなしのディスプレイが煌々とた光を放っているからだ。床はケーブルやら紙切れやらで足の踏み場もない。生活感のかけらもないが、目的の人物はこの部屋から殆ど外に出ていないらしい。どうやって、生きてるんだか。

「よう、生きてるか爺さん」

返事はない。が、背中を丸めて机に突っ伏す白衣の老人を見つけた。何かの作業をしていて、その途中で眠ってしまったのだろうか。彼はキーボードに顔を埋めている。とりあえず揺さぶってみた。起きなかつたので、適当な場所に腰を落着かせる。邪魔だったので、良く分からん機械を蹴って退かしておいた。

「……む、ぐう……」

「おう、お客様だぜ。何だよ、またパソコンとにらめっこしてたんか？」

爺さんが起きる。彼は体をゆっくりと動かして、ディスプレイを睨みつける。白髪を手で撫でつけて、白髭を指で弄んだ。何から何まで白いジジイである。

「……お前か。パソコンではないと言うとらうが」

「ああ、アレだろ。ワークステーションとか、そういう感じの」
「違う。ワークステーションは……ああ、もう良い。お前は何を、何度言っても理解せんからな。そもそも、理解出来るとも思っておらんが」

パソコンなんて皆同じだろうが。インターネットが出来ればそれで良いんだろ。

「ち、久しぶりに寝られたと思ったならこれじゃ」

「へえ、何日ぶり？」

「二十三、四くらいか」ほっとけば、この爺さんは体がおかしくなるまで起き続けている。それだけ、キーボードを叩くのが楽しいんだろ。無趣味の俺からすりゃ羨ましくもあるが。人間、ここまでは行き着きたくない。

「歳考えるよな。ま、俺は爺さんの歳、知らねえけど」

「うむ、わしも忘れてもうたわ。それで、何か用事でもあるんじゃないやろ。手早く済ませてくれ」

言いつつ、爺さんはディスプレイを見据えたままキーボードを叩く。キーボードも、爺さんの近くには四つもある。それら全部を彼は淀みない動作で叩くのだ。叩いて叩いて叩き続ける。

正直、この爺さんが何者なのか、俺にも良く分かっていない。彼は組織の中でも相当古い人間で（果たして、本当に人間なのかどうかは分からないけれど）、何をやっても許されるのだと言っていた。俺が組織に入りたての頃、この爺さんにメシを届けに行つたのがそもそも始まりだった。知り合ってから六年経つたが、爺さんはすげえ頭が良さそうって事しか、俺には分かっていない。良さそうってのは、実際、頭が良いのかどうか分からないからだ。既に狂っている可能性が高い。だけど、この爺さんは天才なのだろう。

「スーツが欲しいんだけど」

「……六百万くらいでええのがあるぞ」

「いや、金はない。俺みたいな戦闘員は貧乏だって知ってるだろ？」
この爺さん、スーツやら武器の開発に掛けてはめっぼう強いのだ。

組織の戦闘員用のスーツも、一人一人の怪人に合わせたスーツも、武器の作製も、大抵はこの爺さんが絡んでいる。曰く、趣味、だそ
うだ。しかも、組織お抱えの技術班よりも遥かに性能が良いものを
作るのでえげつない。正直、技術班にはめっちゃくちや嫌われている。
「戦闘員には汎用の支給されてるだろうに。それで我慢せえ。欲
しけりや出世するんだな」

「分かってるよ、んなの。でもさ、そこを何とか、お願い。ね？」
ウインクしてみる。唾を吐かれた。

「きつたねえな！ あんたの部屋だろ！？」

「わしの部屋だから吐いたんじゃ。金もないのにスーツが欲しいだ
と？ 舐めるなよクソガキが」

酷く正論。けど、そこを曲げて欲しくてここに来たんだ。

「金、金、金。爺さんも世知辛くなつたもんだな。分かったよ、じ
ゃあ、めっちゃくちや安くしてくれ。一着百円くらいで」

「……お前、何をやらかすつもりじゃ。一介の戦闘員が組織のルー
ルを無視してわしにスーツを頼んでおる。その意味、分かっておる
のか？ 背信行為と捉えられても仕方ないぞ」

う。確かに、そうに違いない。まあ、ある意味裏切つてると言え
ば裏切つてるし。もはや怖いものはないのであった。

「何もやらねえよ。ただ、欲しいんだ。組織の戦闘員、その立場は
理解してるよ。スーツ手に入れても、でしゃばって着やしねえ」

「うづむ。まあ、そうだな」爺さんは椅子から立ち上がるうとした
が、腰を悪くしているのですぐに座り直した。

「お前とはそこそこに長い付き合いでもある。わしにとっては数少
ない知己じゃ。こっちに余計な疑いが掛からぬと言うのなら、作っ
てやらんでもない」

「マジか？」

やった、すげえ。言ってみるもんだな。いや、持つべき者は何と
やらだ。

「条件はあるがな」

「ああ、何でも言ってくれ」

「やはり無償と言うのも面白くない。金は欲しい」

結局金かよ！ だから金はないって言ってるんだろが爺さん、もうろくしてんじゃねえっつーの。

「そういう意味ではない。金は、この世で最も分かり易い誠意じゃ。わしは、お前の誠意が見たい。誠意に応じて、わしはそれだけのスーツを作ろう。無論、他の怪人どもよりは安くしてやる」

うーん、まあ、仕方ないか。いや、むしろ有り難い。タダでもらえるとは思ってなかったし。安くなるっただけでも、爺さんに言った価値はあるだろう。

「いまいち意味が分かんねえけど、どんくらい用意すりゃあ良いんだ？」

「それはお前に任せる」

ふうん、じゃあ、とりあえず。

「ほい、これでどうだ、爺さん」

「……何じゃ、これは」

「見て分かんねえのかよ。百円玉が三枚で三百円だ。すごいぞ、百円のもの二つ買える。消費税を考えなきゃ三つだ」

爺さんは三百円を受け取り、白衣のポケットにしまった。そして、もう何も言ってくれなかった。反省。でも、お金返して欲しかったり。

まあ、金だ。金さえありゃあ何とかなる。スーツだって安く手に入りそうだし。うん、希望が見えてきた。とりあえず控え室に戻って、荷物取って帰ろう。そろそろ、今着ているスーツも洗濯しなきゃならないし。……っーか、スーツの洗濯くらい組織でやってくれよな。クリーニングにゃ出せないし。自分で洗うのも面倒だしよ。

「あ、おい青井」

「え？ あ、どうしました？」

廊下を歩いていると、煤竹チーフに呼び止められた。今日のチーフは素顔である。冴えないおっさんだが、俺よりも立場が上なので、やっぱり萎縮してしまう。

「ホワイトボード見てないのか？」

「や、あはは。だって、俺には縁がないですし」

「やっぱり見てなかったのか。まあ、残ってたんなら良い。お前を呼んでる人がいる」

心臓が痛い。すげえビビった。まさか、爺さんにスーツを頼んだのがバレたのか？ いや、という事は、俺がヒーロー派遣会社で働いているのも？ やべえ、やべえやべえ。

「ん、どうした顔色が悪いぞ？ やっぱ、今日はやめとくか」

「気にしないでください。えっと、それよか、俺を呼んでる人ってのは？」

「エスメラルド様だ」

エスメ……？ 誰だ、そいつ。つーか日本人か？

「ウチの四天王をやってる人だよ。まあ、戦闘員とは関わらないもんなあ。知らないか、普通」

えへへ。四天王って人らがいるのは知ってたけど、その四人が何者なのかは全く知らない。組織の戦闘員としてそりやどうなんだって感じだけど、会わないし、関係ないもんは関係ない。とにかく偉い人たちなんだろう。幹部だな、幹部。良い響きだ。けど、どうして、その四天王の一人が俺を呼んでるんだ？

「うん、まあすぐに分かるし先に言っておく。おめでとう、良かったな青井、出世だよ」

シュツセ？ 暫くの間、言葉の意味が理解出来なかった。えーと、誰が、シュツセするの？

「おい固まるなよ。まあ、出世と言っても怪人じゃあない。数字付きだけどな」

「……あ、ああ、何だ。そういう事ですか」ちょっとガツカリ。怪人にはなれないのかよ。

数字付きというのは、下っ端戦闘員の中でも限られた、選ばれた者たちから成る部隊の事だ。数字付きの部隊は、それと同じく怪人の中でも限られ、選ばれた奴しか持てない。ちなみに数字付きなのは、そいつらが着るスーツからきている。胸の辺りに番号が刻まれているのだ。ださいけど強い。おまけに下っ端と比べればグンと給料も上がる。確か、一つの隊が十三人、くらいだったかな。うーん、エリート集団と言えば、すげえ聞こえが良いのでこれからそうして触れ回ろう。

「しかも四天王、エスメラルド様の数字付きだ。正直羨ましいくらいだよ」

「そ、そうなんですか？ や、あんまし実感はないん、ですけど」「そらそうだろうな」

奴隷根性が染み付いていたらしく、上に行くとか、そういった言葉には全く縁がなかった。なので、未だに良く分かっていない。

「で、どうする？ 今から顔出しに行くか？」「きよ、今日はやめときます。その、次来る時に……」

「何だ、緊張してるのか。ま、良いけどな。じゃ、今度はボードも見ておけよ」

チーフはどこかへ行ってしまう。俺はぼけつとしたまま動けなかった。

俺が、出世か。やっぱり、現実味が湧かない。嬉しいっちゃ嬉しい筈なんだけど、うーん。まあ、明日になったらそういうのも分かるだろう。もしかしたら、全部ドツキリかもしんないし。

翌日、組織の仕事は夜からなので、俺は用事だつてないのに、意味もなくカラーズに足を運んでいた。

誰かに自慢したかったのである。寝て起きたら、出世つて文字が急激に有り難く感じられた。これは追い風である。金がない。けどスーツは欲しい。爺さんにスーツを頼んだら、数字付きの話が舞い

込んだ。明らかに、天が俺に味方している。ふ、ふふ。いや、やっぱり辞めるとかやめよう。あの組織でもうちよい頑張ってみようじゃないか。拾われた恩もあるし、後ろ足で砂を掛けるような真似はしたくないよなあ。と言うか不実ではないか。うん、そうに違いない。

「何も出さないわよ」

俺の顔を見るなり、社長はそう言い放った。まだ何も言っていないのに。

「いや、何もいらねえよ」

とりあえずソファに座る。社長は居心地悪そうにしていた。今日の俺はそういうの気にしない事にしていたから。

「仕事なら何もないわよ。悔しいけれど」

「へえ」と、俺は心ない相槌を打つ。

「……何か用なの？ 先に言っておくけど、無心ならよしてよね」

「いやいや、むしろ、金の心配ならいらなくなるかもな」

社長は疑惑の視線を俺にぶつけてくる。遠慮も容赦もない。ただ、真実だけを計ろうとするまっすぐな目だ。

「まあ、出世？ するんだよね、俺」

「あなたは一生ヒラのままよ」

「ここでじゃねえよ！」

しかも一生ヒラなのかよ！？ もうこんなところ辞めようかな俺！

「掛け持ちしてるって言っただろ。そこで、まあ、そんな大層なんじゃないけどさ、給料は上がるって言われたんだ」

「へえ、ウチも助かるわね。その分、お給料を減らしても構わないんでしょ？」

「構うつーの！ お前さ、俺に逃げられたらヒーローいなくなるって事、本当に分かってんのかよ」

「逃げたら訴えるもの。お金、払えないものね？ もしも勝手にい

なくなつたら、見つけ出して首根っこ引きずつてむしり取つてもう二度とそんな気を起こせないように痛めつけるまで」

多分、駆け引きとか照れ隠しとか、そんなんじゃなく、本心なんだろう。恐ろしいわ。

「独裁者め。……実はさ、スーツも、こつちで何とかなるかもしれない」

「何ですって？ 嘘、本当？」

「マジだって。ちよつとしたツテがあつてな、安く買えるかもしれないんだ。まあ、いつの事になるかは、全くの未定だけどよ」

「すごいじゃない！」

お、おお？ 社長が喜んでる。珍しい。

「私、あなたの事を誤解していたわ。もっとグズでクズでカスの三拍子揃つたどうしようもないロクデナシだと思つていたもの！ 流されるままに流される、私がこの世で最も嫌いな人間だと内心では蔑んでいたわ。けど、何も言われずにスーツのアテを探すなんて、立派な奴隷根性の染み付いた社蓄じゃない！ 流石ね、ビバ社蓄」
まくし立てる。

「そりやどうもありがとう」

ヒーローって何だ。正義って何だ。とりあえず、スーツをもらつたらこのアマを再起不能なまでにボコボコにしてやる。

お前青くないぞ！

俺は数字付きの戦闘員に出世する（予定）。それも、そこらの怪人の指揮する部隊ではない。その上の、（恐らくは）幹部クラスの四天王と呼ばれる人の下につくのだ。六年、燻り続けていた甲斐もあつたというものだろう。遂に、俺が認められたのだ。

「おい、そのニヤけ面あやめとけよ」

「ういつす」チーフに釘を刺されて、俺は気を引き締める。

今、俺はチーフに連れられて、ある扉の前に立っていた。……この先に、四天王の一人、俺の上司であるエスメラルド様がいるらしい。緊張するよりも先に、何だかにやにやにしてしまふ。

「ここで変な真似すりゃ取り消しになるかもしれないからな」

「ういつす」小声で返す。

「じゃ、行くか。……煤竹です」

チーフが扉を三度ノック。その後、長い長い間が空いた。手に汗握り、喉も少し渴いてくる。大丈夫、か。本当に、今更になって騙されているんじゃないかと心配になってきた。

「入りたまえ。ああ、煤竹チーフ、君はそこまで良い」

えっ？ マジかよ、色々とフォローしてもらおうと思ったのに。

しかし、チーフはやつと肩の荷が下りたとしても言わんばかりに、晴れ晴れとした笑みを浮かべている。もう、俺が何を言っても無駄だろう。彼は俺の肩を叩き、背を向けて去っていった。呆気ない。

「……聞こえなかったのか？ 入りたまえ」

「しっ、失礼します！」

声だけで判断するなら、どうやら、中にいるであろう人物は四天王とは言え、若い男らしかった。

扉を開けて、後ろ手で閉める。顔を上げると、意外と、部屋ん中

は普通だった。戦闘員の控え室よりはマシだが、そこらの会議室と変わらない。長机が四つ、部屋の真ん中で長方形を作っている。パイプ椅子がそこらに置きっ放しで、散らかっているような印象を受けた。実際、部屋の隅には段ボールが山のように積み重ねられているし、何故か、冷蔵庫が四つも設置されている。何だこの部屋？ マジで四天王の部屋なのか？

「掛けたまえ」

部屋の中には、髪の長い男が一人。けったいな事に、その髪は銀色に染められている。線の細い、黒いジャケットを羽織った若い男だ。二十代、俺と歳は変わらないだろう。そのせいか、必要以上には萎縮しなかった。無論、ある程度の緊張はしているが。

「私は江戸京太郎^{えと きょうたろう}。君の名は把握しているが、一応、聞かせてもらおうか」

促されて、俺は椅子に腰掛けたまま自己紹介の内容を考えた。

「青井正義。煤竹班で六年、戦闘員をやっていました」

当たり障りのない、普通な自己紹介である。江戸と名乗った男は小さく頷いた。

「うん、ようこそ、エスメラルド部隊へ。君には伝えておいた通り、数字付きをやってもらおう。君に与えられるナンバーは十三だ。直、新しいスーツも渡せる。去年の健康診断から、極端に太ったりはしていないな？」

「問題ありません」太れるほど良い生活を送ってはいない。むしろ去年よりも痩せている。

「ならばよし。さて、数字付きについて説明しておこうか。ある程度は知識があるとは思いますが、これも通過儀礼の一つだ。私の話に耳を傾けたまえ」

偉そうだが、実際偉いのだ。俺は一言一句聞き逃さないように構える。あ、メモとか持ってくるべきだったのだろうか。まあ、今更か。

「基本的に、通常の戦闘員だった時と行うべき事は変わらない。仕

事の内容は、やはり、走り回り、奪い、襲い、ヒーローと戦うものだ」だろうな。

「ただ、上司は変わる。同僚も変わる。初めの内は慣れないかも知れないが、気になる事があれば、遠慮せずに私に相談すると良い。君の悩み全てを解決出来るとは思っていないが、僅かなりとも君の援けになれるかもしれない」

意外と、良い人だった。

「数字付きの控え室は、この部屋の隣にある。そちらを好きに利用してくれば良い。仕事の連絡は、煤竹チーフの時と変わらない。何かあれば携帯にも連絡を入れるし、控え室のボードに大抵の事は書かれている筈だ」

うんうん。

「勘違いして欲しくないのは、数字付きになったとは言え、君の立場は怪人よりも下にある。位が上がったとは言え、他の戦闘員に指図出来る立場ではない。その点は理解しておきたまえ」

うん。まあ、俺が誰かに命令するなんて想像も出来ないし。

「さて、私からの話はこんなものか。何か質問があるなら、今の内に聞いておきたまえ」

「あ、じゃあ、三つばかり良いですか」

「数を制限する必要はないが、良いだろう、聞こうか」

江戸さんは組んでいた腕を解き、リラックスしているようにも見える。堅苦しくないよう、気を遣ってくれたのだろうか。

「あの、どうして俺を数字付きに？」

「ああ、その事が。いや、煤竹チーフから君の事を聞かされたのだよ。何でも、自分よりも強大なヒーローに向かって行ったそうじゃないか。陽動の任務を与えられていたが、それ以上の成果を上げたと聞いている。鬼にも勝る君の奮戦のお陰で、仕事はスムーズに済んだそうだ」

まさか、八つ当たりの逆恨みでの行動が、そんな風に評価されていたとは。

「戦闘員である者は、ヒーローには勝てない。スーツからして違う。だが、君は向かっていった。私はその点を評価している。そして、ならばとも思った。君に、もっと性能の良いスーツを与えたなら、どれだけの戦果を上げてくれるのだろうか、と。六年と言う勤続年数も大きい。今日び、そこまで生き長らえる戦闘員と言つのも珍しい」

お、おお！ おおおお！ ま、まさか、こんな俺をそこまで評価してくれるなんて！ 一生ついていきますエスメラルド様！

「ちょうど、欠員も出たところでな」

「欠員、ですか」そういや、数字付きは一部隊につき十三人だ。俺がどれだけ素晴らしい功績を納めても、そこは覆らない。いよいよ、本当に運が向いてきたらしい。

「十三番……ああ、君の前任者に当たる者だが、以前から希望していた会社への就職が決まったらしくてね」

再就職か。……再就職？ そういうのって、アリなのか？

「勿論引き止めたよ。彼は、数字付きの中でも優秀な男だったからね。だが、熱意に負けたよ。尽くしてくれた恩もあったし、涙ながらではあったが、どうにか送り出せた。しかし、君のような男にも出会えたのだから、悪い別れではなかったのだろう」

「あ、ありがとうございます。お陰で、俺みたいな下っ端が数字付きなんて……」

「自分を卑下する事はない。君は、君の力を揮ってここにいるのだから」

「ありがとうございます、エスメラルド様」

そう言うと、エスメラルド様は不思議そうな、と言うか困ったような顔になる。流石に、気安かっただろうか。

「……君は何か、勘違いをしているようだな」

「え、つと……？」

「私は、エスメラルド様ではない」

「はい？」

えっ、違うの？　じゃあ誰だよお前！　ここまできて俺を担いでたなんて抜かすんじゃないだろうな！　ああ！？　と、心の中では強気に出る俺。

「四天王ともあるう方の顔を知らないのか？」

「あ、その、下っ端が長かったものですから。四天王なんてやんごとなき身分の方とは、関わり合いのない人生を送ってきたもので」

「む、いや、だが、そうか。では、改めて自己紹介をしておこう。

私は、エスメラルド様の右腕を自負している者だ。立場としては怪人にあたる」

そういう事だったか。まあ、何かおかしいとは思ってたんだよ。

偉い人が、わざわざ俺みたいな木っ端と会ってくれるなんて思ってたなかつたし。

「ああ、勘違いしてはいけない。エスメラルド様と親しくしようなどと驕ってはならないぞ」

「いやいや、そりやもう当たり前です」

「うむ、それさえ心得てくれるのならば、特に言う事もない。まあ、会う事もないだろうが。……今日のところは仕事の後で疲れてもいるだろう。帰って、ゆっくり休みたまえ。明日からは、新しい生活が始まるのだから」

頷き、俺は椅子から立ち上がった。瞬間、扉が開く。誰だろうと思つて振り向くと、女の人がいた。何だ？　ノックもしないで入ってくるなんて。礼儀を弁えないどこの下っ端だコラあん？　けれど美人だった。背はちっこいけど気の強そうな瞳。ショートボブの黒髪に、褐色の肌も艶かしい。白いチューブラ。赤く、短いチョッキをその上から着ている。短くて黒いスカートが俺の横を擦り抜けていく。視線だけで追い掛けると、彼女のネックレスが目に入った。何か、骨みたいなものぶら下げている。そんで、でかいピアス。平べったくて、こっちも骨みたいだった。美人は美人だが、へそ出しルックのやばそうな女である。

その女は、部屋の主である江戸さんには一瞥もくれず、段ボール

をぐそぐそと漁って魚肉ソーセージを右手に。冷蔵庫を開けてペットボトルのジュースを左手に持ち、俺たちには何も言わずに出て行くとした。いや、幾らなんでも失礼過ぎるだろう。

「ちょ、おい、あんた」

扉を足で開けようとしていた女は振り向く。無表情だったが、目をくりくりとさせていた。その仕草は何も知らない子供みたいで、けど、こいつは子供じゃない。騙されんな。

「失礼じゃないのか？」

江戸さんが何も言わないのなら俺が言うしかない。悪の組織といえども、上下関係くらいはきっちりしておかないとな。

「……青井君、良いんだ」

「そういう訳にはいかないでしょう。……あんた、勝手にそういうの持っていてさ、何か、言う事があるだろう」

俺がそう言うと、女は心底から分かっていない風に口を開けた。

「私が持っていては駄目なのか？」

「あんな、そういう意味じゃなくてさ」

本当に分かってないんだろうか。若い女、と言うより、よくよく見りゃあ、まだ十代、か？ えげつない格好に（勝手に）騙されていたが、ウチの社長と変わらない年齢にも見える。

「いただきます、か？」

「部屋に入る時はノックだってしているし、持っていつでも良いか江戸さんに了解を取らなきゃ駄目だろうが」

「そういうことか」

女の子はソーセージとペットボトルを江戸さんに見えるように振った。

「エド！ これ、食べるぞ！」

「そんな言い方があるかよ！」

「………は、はは。いや、青井君、大丈夫。本当に大丈夫だから」
「そうですか？」

江戸さんは何と心の広い方だろう。海よりも山よりもこの地球よ

りも宇宙よりも寛大に違いない。

「アオイ？」

女の子が物珍しそうに俺を見る。

「そう、青井。俺の名前だ」

「アオイ、アオイ、アオイ。……どこがだ？ 青くないぞ？」

ちっ、アホみたいな事言いやがって。

「あっはっは、お前青くないぞ！ けど、私も緑じゃない！」

「……緑？ 何の話だ？」

「私の名前だ！」

どんと、女の子は自分の胸を叩いた。力を入れた為か、ソーセージが潰れてしまう。

「みどりまゆかり緑間縁だ！ だけど緑じゃないだろう！」

「そ、そうだね」何がツボに入ったのか、緑間と名乗った女の子は大笑いし始める。

「気に入ったぞアオイ！ これをやるから、ちゃんと食べて大きくなれよ」

潰れた魚肉ソーセージとペットボトルの炭酸飲料を渡された。緑間は段ボールから新しいソーセージ、冷蔵庫から新しいジュースを持ち出して、楽しそうに部屋を出て行った。嵐のような女である。俺は何も言えず、閉められた扉をぼんやりと見つめるしか出来なかった。

「何ですか、あの女は。江戸さんの知り合いですか」

江戸さんは溜め息を一つ吐いた後、段ボールから何かを取り出す。ちまきだった。彼はそれを口に入れる。

「青井君」

俺は身構えた。

「これは、誰が悪いのかとか、そういう問題ではないのだが……まず、私が何も伝えていなかった事も原因の一つにあるだろう」

江戸さんは何を言おうとしているのだろう。俺は持たされたソーセージとペットボトルを机の上に置く。

「混乱しているようだから、分かり易く言おう。先ほどの方が、我々の仕えるべき上司であるエスメラルド様だ」

「冗談でしょう」

「まさかこんなタイミングで、良いのか、悪いのか、私には分からない……」

ちまきを食べ終わった江戸さんは、目を瞑り、難しそうに唸った。タイミング？ 今の話が本当なら、本当に、さっきの女の子が四天王のエスメラルドだったのなら、タイミングが良いのか悪いのか、分かり切っているだろう。俺にとっては、最悪のタイミングだったに違いない。

「クビですか」

「……分からない」江戸さんは、威厳が、とか、ぶつぶつと呟いていた。

生き地獄のような時間が終わった後、俺はようやく『帰って良い』と言われた。しかし『また会おう』とは言われなかった。つまりは、そう言う事なのだろう。

「帰りなさいよ」

翌日、俺は朝からカラーズに顔を出していた。これも立派な社員としての務めだろう。何せ立派な勤め先を失ったのだから、もうここしか残されていないのだ。

「社長、掃除でも何でもしますよ！」

「……気持ち悪いわね。ゴマすったって何も出てこないわよ。知ってるよ。」

「給料を上げるとは言わないから、せめてちゃんと払ってもらいたい旨を伝えに来ました」

「えー？ 九重の給料だけで精一杯なのに」

「おい！ 払えよ！ 俺だって働いてんだろうが！ つーかデパートん時のギャラはどうなってるんだよ！？ お前、あんなの死なな

い方がおかしかつたんだからな！」

社長は耳を塞ぐ。非常に嫌そうな顔をしていた。あんまりである。「お金なら心配しなくても良いって言うてなかった？　あなた、出世したんでしよう。それに、給料ならちゃんと払うわよ。給料日は月末だつて言つたじゃないの」

その話はナシだ。流石に、四天王にタメ口利いたくらいで組織を追われるつて事はないだろうが、まあ、数字付きになるのはご破算だろう。元の生活に逆戻りである。いや、そもそも、まだ数字付きになつてもいなかった。話が上手過ぎると思つたらこれだよ。やっぱり、人生は上手くいかないようになってるんだ。畜生。

「ま、まあ、そうなんだけどな」

「なら、良いのだけど。あ、そうだ。次の仕事についてなんだけど」「お、おう」待つてました。とりあえず働かせてくれ。少なくとも、その間は嫌な事を忘れられる。かも、しれない。

「当分はないと思つていてちようだい」

「はああああ？　企業努力が足りねえんじゃねえのか社長さんよう」「馬鹿言わないで。しようがないじゃない、知名度がないんだもの。カラーズの名前を知つてもらふには怪人たちを倒すのが手っ取り早いんでしようけれど……」

スーツがないと倒せない、か。

「九重だつて、今は宣伝活動で頑張つているの」

「じゃあ俺もやるよ」

「……あなたが？」

頷くと、社長は喉の奥で笑つた。そんな年頃なのに、嫌らしく笑わなくても良いじゃないのか。

「あなたは気にしなくても良いのよ。だつて、我が社が誇る唯一のヒーローだもの。そういつた地道な活動はヒーローには似合わないわ」

う。すごく、申し訳ない。

こうなつたら、組織としての仕事を今まで以上に頑張り、お金を

貯めて爺さんにスーツを作ってもらおう。うん、そうすりゃ、良い事だって起こってくれるだろう。

では奪いましょう

あの日から三日経っても、特にお咎めもなかった。とりあえず、クビにはならなかったらしい。と言うか、いつも通りにヒーロー派遣会社には仕事がなかったし、組織からは正式な辞令も出ていなかった為、戦闘員としての仕事をこなしていた。煤竹チーフからは色々と聞かれたが、適当に誤魔化しておいた。まあ、やっぱり俺には下っ端が向いているって事で。

今晩は楽な仕事だった。控え室では同僚たちの機嫌も良い。飲みに行こうと誘われて、俺の機嫌もうなぎ上りである。こないだは先輩とサシで飲んでたからなあ。久しぶりに、気の置けない奴らと楽しくやれる。カラースからも連絡は来ていない。明日は組織の仕事もない。つまり、

「居酒屋予約取ったー?」

「ガンガン飲もう、ガンガン。んでカラオケな」

「青井、てめえ数字付きの話なくなっただってな! ぎゃはは、その辺り聞かせるよ!」

「何やったんだよ、もったいねえなあ!」

オールで楽しくやろうよ! って事である。若さだけが俺たちの背中を押していた。明日、仕事がある奴だっているんだろうが、そこは考えない。そういうのを気にして考えていたならば、俺たちは戦闘員なんて職に就いていないのだ。

全員の着替えも終わり、予約も取れた。それじゃあ行こうかと誰かが立ち上がった時、扉が開く。自然、皆の注意はそっちに向いた。「アオイ! いるか!」

控え室に入ってきたのは、背の低い、褐色肌の女の子だ。惜しげもなく肌を露出させている。彼女の傍には、銀髪で線の細い男が立っていた。

「……誰、あの子？」

「つーかいきなり何？」

「ひやはは、ケッコー可愛いじゃん！」

ま、まずいんじゃないのか。これって。同僚たちは、この人たちの正体を知らないんだ。と言うか、初めて見たに違いない。

男は、江戸さんだ。女の子は緑間、じゃなくて四天王のエスメラルド様である。つーか、どうしてこんなところに来てるんだ？

「アオイ、いたら返事だ！」

「青井？ おい、呼んでんぞ。つーか、何、お前の妹？」

「紹介しろよー、しっかし全然似てねえなあ」

黙っていても無駄だろう。同僚たちは好き勝手に騒ぎ立てていた。俺は立ち上がる。とりあえず、江戸さんに頭を下げた。

「あつはつは、いるじゃないかアオイ！ 相変わらず青くないなあ！ あれ？ でも、なんか顔色悪いぞお前」

そりや顔色だつて悪くもなるわ。この状況は理解不能だ。生意気な俺を断罪に来たのか、それとも、クビを言い渡しに来たのか。とにかく、悪い予感しかしない。

「悪いが、青井君以外の者は出て行ってくれないか？」

「あ？ そりや出てくつもりだつたけどよ、あんたら後から来てなんだつてんだよ？」

江戸さんは溜め息を吐き、腕を組む。あの人を怒らせちゃあまずい。俺の立場が悪くなつちまう。

「みつ、皆！ マジで、マジで悪いんだけど、今日のところは！ な、頼むよ。また今度、ちゃんと説明すつから！ な！？」

「えー？ つーか青井飲みはどうすんだよ、予約取つちまつたし」俺だつて行きたいよ。

「済まないが青井君、飲み会とやらは後からの参加にしてもらえな

いだろうか？」

江戸さんに言われて、俺は何度も頷いた。

「とにかく頼むって！」

俺の人生が掛かってんだ！

渋々ながらではあったが、俺の必死さが伝わったのか、同僚たちは控え室を出て行ってくれた。残されたのは、俺と、江戸さんとエスメラルド様である。一体、何が始まると言うのか。

「……まず、どうしてこちらに顔を見せなかったのか答えてもらおうか」

江戸さんは静かに、ゆっくりと言った。怒りを押し殺しているような、そんな風だった。

「それは、その。クビ、だと思ったので……」

「エスメラルド様に恥をかかせるつもりだったのか？ 十三、この数が揃って初めて数字付きの部隊は完成する。君には、少しばかり失望したよ」

んな事言われても、そつちだって何も言わなかったじゃねえか。

「三日、我々は君が来るのを待っていた。だが、これ以上は待てないと、その、エスメラルド様が、な」

「元気だったかー、アオイ」

童女のように、エスメラルド様は笑う。

「……君をクビにするつもりはない。数字付きの話をなかつたとする事もない。何より、エスメラルド様は君を大層気に入っておられる」

「そ、そうなんですか」

「まことに、残念ながら、な」

睨まれる。あまりにも恐ろしい、恨みや辛み、妬みや嫉みが込められた魔眼から、俺は目を逸らす。

「アオイー、反省してるか、反省。反省は大事なんだって、みんな

言ってるぞ」

「はい、反省しております」

「じゃ、今日はカイサンだ。また明日な！　ちゃんと来いよ、待つてるからな！」

椅子から下りると、エスメラルド様は屈託のない笑顔を見せて、控え室を後にする。あの、江戸さんを置いていかないで欲しいんですけど。

「あの方がそう言うのなら、私からはもう何も言いません。青井君、明日からはエスメラルド様の数字付きという誇りを持ち、仕事に励んで欲しい」

「勿論です！」

「うん、期待している。邪魔をして済まなかった。飲み会があったのだか。今の事は忘れて、大いに楽しむと良い」

ブチ切れ寸前だった江戸さんも、最後には笑ってくれた。良かった。何とか、どうにかかった。

二人がいなくなつて、俺は机に顔面を突っ伏す。正直、生きた心地がしなかった。何せ、四天王と、その右腕的存在なのだ。ちよつとでも機嫌を損ねりゃあ、俺のクビなんか簡単に飛ぶ。物理的にも、そうに違いない。とにかく、明日からは本当に数字付きとして働くんだ。頑張ろう。うん。

数字付きになつてから三日後、大した仕事は与えられなかった。

俺にだけではない。そもそも、エスメラルド様の部隊は誰一人働いていないようにも思えた。怪人も、俺と同じ数字付きも、そうでない末端の戦闘員に至るまで、である。色々話を聞いて回れば、何もいなくても給料は入るそうなので、むしろラッキーだと笑う者が殆どだった。こないだまでは牛馬の如く働かされていた身なので、落ち着かない事この上ない。

「仕事？」

なので、江戸さんにも話を聞いて見る事にした。

「ええ、その、何もしていないってのは、ちよつと座りが悪くって」
「……素晴らしい心意気だが、君の立場は以前のような戦闘員とは違うのだよ。君は、四天王の一人であるエスメラルド様の下で働いているのだ」働いてないけどな。

「属する組織の人間として、エスメラルド様の部下として、選ばれた数字付きとして、誇りを持って仕事に臨んでもらいたい。我々には我々の仕事がある。しかるべき時が来れば、嫌でも働いてもらうのだから」

うつん、そ、そうなのか。でも、こちとらプライドなんか持った覚えがない。どこの怪人の下だろうが、呼ばれりゃ走って尻尾振り、行けと言われりゃそっちに走り、襲えと言われりゃあっちに駆けるような生活をしていたんだ。楽なのは良いけど、何だかなあ。

「失礼するぞー！」

扉が開く。エスメラルド様だ。俺が前に言った通り、きちんとノックをして入ってきている。未だに、その件に関してはトラウマもんだった。

彼女は段ボールやら冷蔵庫をごそごとと漁り始める。慣れたもので、江戸さんは気にしたような素振りを見せない。

「走り、襲い、奪うのは数字付きになる前と変わらないだろう。しかし、今は違う。機が熟すのを待ち、嵐のように獲物に襲い掛かり、奪い尽くす。スマートさが求められる。そこを理解しておきたまえ」
やべえ、何か説教が始まっている。失敗した。

「良いか青井君、君の六年、今までに積み重ねてきた経験を馬鹿にするつもりは毛頭ない。しかし、エスメラルド様の数字付きとして働くのならば、それ相応の……」

「エドー、肉が食べたい」

「では奪いましょう」あれー？

江戸さんの行動は迅速だった。すぐに戦闘員を呼び出し、部隊を編成し、標的を定めて、作戦を練る。空っぽだった会議室には数字付きが全員集まり、息苦しさを覚えるくらいだった。

「今回は私も現場に赴く」

歓声が沸く。俺は良く分からないので、とりあえず拍手をしておいた。どうやら、江戸さんが直接現場に行く事は珍しいようである。急遽決まった事なので、今回は江戸さんと、数字付きの戦闘員だけで仕事を行うらしい。ターゲットは精肉店。行って、奪う。内容はそれだけだった。つか時間掛けて綿密な作戦がどうか言っていた割には無茶苦茶荒かった。それで良いのか江戸京太郎。

俺の任務は、肉を運び、クーラーボックスに入れるというものだった。釣具店などで売っている、中々に値の張りそうなものである。今回の仕事の為、江戸さんが自腹を切ったらしい。

お仕事は、今晚、店の閉まる時間を狙って、である。驚くべき事に、現場まではバスではなく数字付きや江戸さんの支給された車で行けるらしい。俺たちは十人乗りのワゴンで、江戸さんは何か、すげえかつくいいRCなんかかって奴だ。素晴らしい。

「君には期待している」

だが、どうして、俺が江戸さんの車の助手席に乗っているんだ？ こういうのって、普通は年功序列つか、数字付きん中でも偉い奴がここに座るべきだろう。と、それとなく江戸さんに聞いてみたら『前の十三番の指定席だった』との事。どうやら、俺は余計なプレッシャーを抱えるはめになりそうだった。前任の十三番って、無茶苦茶仕事の出来る奴だったんだな。

「裏切らないようには努力しますが、大丈夫ですかね」

「始まる前から心配事を口にしては、成功するものも成功しないと思いたまえ。だが、君にとってはエスメラルド様の数字付きとして初めての仕事だったな。緊張するのも無理からぬ事だが、気楽

にしたまえ」

ターゲットの精肉店、その五百メートル手前の駐車場に車を止めると、江戸さんたちの行動は早かった。俺はついていくのに精一杯である。って言うか、江戸さん、スーツを着ないのな。それだけ余裕って事なんだろうか。

逃走用のルートを確保する者、見張りに立ち周囲を警戒する者と、数字付きの戦闘員は定められた仕事をこなしていく。

「こつちです」

五番と書かれたスーツの戦闘員に従い、人の目を避けながら俺たちは路地裏を駆ける。精肉店の裏、従業員が出入りする通用口の近くで一度立ち止まった。

「まずいな」携帯電話をポケットに戻した江戸さんが息を吐く。何が、まずいんだろう。

「六番から連絡が入った。他の組織の怪人が近くで暴れているらしい。ヒーローが数人、そちらに回っているようだ」

「用意していたルート、二つが潰れますね」

今、ここにいる数字付きは俺を含めて四人。江戸さんを含めた五人で襲撃を掛けるつもりだったが。

「速攻仕掛けて、速攻戻りましょう」

「いや、リスクが高い。此度、失敗は許されないのだ」

迷っていても時間は過ぎる一方だ。肉を奪うだけの簡単なお仕事の筈だったのに。

仕方がない。

「俺が行きます。ヒーローを足止めすれば良いんでしょう？」

「何？ しかし十三番、新参のお前では……」

七番の戦闘員が何か言い掛ける前に、江戸さんがその続きを制した。

「待て。ヒーローとの戦闘経験だけで言うなら、十三番は数字付き

の中でも最も信頼出来る」

他の戦闘員が一瞬、ざわつく。まあ、伊達に下っ端長くないって事だ。ちよつと不名誉だけど。

「分かりました。江戸さんがそう言うなら。しかし、彼の逃走経路は？ 今からでは間に合いませんよ」

「四つ目のルートを使う。途中で私が拾い上げよう。十三番、ルートは、しっかり頭に叩き込んであるな？」

俺は頷く。良かった。会議では何も話せなくて地図ばかり見ていたからな。

「では状況を開始する。……頼むぞ、青井君」

江戸さんは俺にだけ聞こえるように『頼む』と言った。ならば、応えるだけである。

俺はヒーローがいるであろう方角へ走った。騒ぎの聞こえる方へ、怒号が飛び交う方へ。路地を抜け、ビルの間を擦り抜け、人込みを掻き分けて俺は走った。

「行くぞブルー、イエロー！ ウルトラパッションキックだ！」

「おう！ 喰らえ怪人っ、俺たちの必殺技を！」

「タイミングを合わせろおおお！」

道路の真ん中、ヒーローが三人。赤、青、黄、三人がそれぞれの色を基調としたスーツに身を包んでいる。奴ら、見た事があるぞ。

三人揃わなきゃ出てこない、鬱陶しい野郎どもだ。

信号機みたいなヒーローたちと向かい合っているのは、俺とは別の組織の戦闘員たちである。真っ赤なお揃いのスーツを着た、分かりやすいやられ役だ。その後ろには、カブト虫みたいな角が生えた怪人がいる。昆虫型のスーツってのは珍しい。カブト虫って事は、レアな昆虫ん中でも、防御に長けた甲虫タイプの怪人だ。アレなら、少しは粘ってくれそうである。

しかし、ヒーローたちは決め技らしきものを撃とうとしていた。そうはさせるか。俺は物陰から飛び出し、奴らの注意を引く。

「待て！ 待て待て待て、待てだ！ 俺が来たからにはそこまでだ！」

とにかく、訳の分からん口上でまくし立てる。声さえ大きけりやあ、ヒーローってのはこつちに目を遣る。奴ら、自分よりも目立とうとする奴を嫌う傾向にあるからな。

「何者だ！？」

「貴様、どこの所属だ、名を名乗れい！」

視線が、一斉にこつちに向く。ちよつと気持ち良かった。

「うるせえ信号トリオ！ 俺はお前らの大好きな悪者だよ！ そんなで、俺はお前らが大嫌いだ！ おいカブト虫、手え貸すぞ！ こいつらぶつ潰してやる！」

カブト虫怪人は俺を見て、こくりと頷く。寡黙な奴だ。だけど、こつち奴は良く喋るのよりも信頼出来る。

「ええい乱入者め。しかし、獲物が増えたのは好都合！ まとめて蹴り殺してやる！ 合わせろブルー！ イエロー！」

「まずい！」

「石投げろ！ 石！ タイミング合わせてあいつら飛ばせんない！」

「おっしやれやれ！」

戦闘員たちが石やら、空き缶やら、とにかく身の回りのものをヒーローに投擲し始める。大技さえ出せなきゃ時間は稼げるのだ。そんなで、適当なところで切り上げれば良い。

カブト虫怪人に頭を下げて、俺はその場から走り去った。今回は最高だった。悪の組織側にとっては、対ヒーロー戦で稀に見る勝利である。

大技を出せず、チームワークの崩れた信号トリオは戦闘員に囲まれ、カブト虫に強烈な一撃を受け、気絶するまで殴られた。と言う

か気絶した後も殴られていた。今も、殴られている。日頃の積もり積もった恨みつてのは恐ろしい。俺も気を付けなければ。

うん、しかし、良い奴らだった。俺が完璧なヒーローになった暁には、こいつらには手加減してやろう。

その後、江戸さんにピックアップしてもらった俺は、無事に組織へ戻る事に成功した。車内では、江戸さんからあらん限りに褒めちぎられたが、流石に気味が悪かった。こう、何と言うか、褒められるのに慣れていないのである。

それでも、達成感があった。初仕事は成功して、ヒーローだってボコボコに出来た。二十数年に及ぶ俺史の中でも、かなり気持ちの良い一日であった。

「いらない」

クーラーボックスを持ったままで、江戸さんはその場に崩れ落ちた。

「私は眠い。エド、もう話し掛けるな、邪魔するな」

エスメラルド様に、意気揚々とお肉を渡しに行った江戸さんは、あまりにも可哀想である。見ていられなかった。……せめて、調理済みの状態で持って行けば良かったのに。

「そ、それでは、明日の昼食にでも……」江戸さんは諦めていなかった。線は細いが心は強い。

「いらない！」

もっ、もうやめてあげてください！

「む」エスメラルド様がかっこちちを見る。うわ、目えとろんとしてるじゃん。っーか、まだ十時回ったところなんだけど。完全、ガキじやん。

「アオイ、肉は好きか？」

問われて、俺は縦に首を振る。

「じゃあやる」

エスメラルド様は江戸さんからお肉の詰まったクーラーボックスを取り上げ、俺に向かって突き出した。

「い、良いんですか？」

「お前、今日ががんばったからな。良く分からないけど。そうなんだろ」

受け取れと、もう一度言われて、俺は江戸さんに申し訳ないと思しながらも、クーラーボックスを受け取った。

「ん。じゃ、明日もがんばれ」

エスメラルド様は部屋を出て行ってしまふ。

「……………肉、食います？」

「私はベジタリアンだ。覚えておきたまえ」
報われねえな、色々と。

あああああ……折角作ったのに……

カライズでのお仕事は久しぶりだった。

「お願いしまーす！」

ヒーロー派遣会社、カライズ。俺はその派遣社員である。その一方で、悪の組織の戦闘員としても働いている。ちなみに、そっちではこないだ出世した。しかも肉まで食べた。上司である江戸さんには悪いとも思いつつ。でも美味かった。美味かったなあ。

「お願いしまーす！」

そう、今、俺はヒーロー派遣会社での仕事をしている。俺は笑顔でティッシュを配っていた。早朝の駅前、道行くサラリーマンや学生にまで邪険に扱われる。この野郎、ぶん殴るぞ。

「そうそう、もっと声を張りなさい。……ふあ、ねむ」

隣であくびをしているのは（仕事なんだから、せめてあくびくらい我慢しろや）、カライズの社長、白鳥澪子である。

そう、今日のお仕事はティッシュ配りだ。しかも、良く分からんパチンコ屋の。……カライズどころか、全然ヒーロー関係ねえし。

「お前さ、前に、俺には地味で地道な真似させないとか言ってたなかつたか？」

「お仕事なら話は別よ」言い切る社長。

零細企業には仕事が来るだけ有り難いのであった。

「ヒーローの募集だって、ちゃんとやっているわよ。焦らないで、草の根活動に精を出しなさい」

まあ、急に仕事 came 来たって応えられるものでもない。ヒーローは俺一人だし、そもそもスーツがないのでヒーローですらない。そんな状態で『怪人を倒してくれ』なんて言われても苦笑いを浮かべるのが関の山だろう。

「しかし、パチンコ屋の宣伝じゃあなあ」

「あら、気付いてないの？」

社長は小さく微笑む。悪い事を企んでいるような、そんな顔だった。俺は訳も分からずにティッシュを配る。ふと、段ボールの傍にしゃがみ込んでいた九重と目が合った。あいつはさつきからそうしてサボってやがるのだ。いや、まあ、九重の仕事は運転する事で、こういうのは俺の役目だけだ。

「あいつ、何をやってんだ？」

「仕込みよ」鈍いなあとでも言いたげに、社長は俺を見る。

「五個に一個のペースでやってるから、効果の程は分からないけれど」

「……んん？ まあ、気にせずにティッシュを配ろう。と、段ボールからティッシュを掴み上げたところで、異変に気付いた。広告が、違うものになっている。色鮮やかなパチンコ屋のそれではない。真っ白で、色気も味気もない広告に摩り替わっていたのだ。つーか、これウチのじゃん。摩り替わっていたっつーか、摩り替えてんだ！ さつきから九重が何かごそごそやっていると思っていいたらこれだよ。こんな事やってやがったんだ。

「お、おい、こんなのバレたら……」

「バレなければ良いのよ。幸いな事に、ここには見張りらしき関係者もないわ」

「ヒーロー派遣会社のやる事かよ」

「ガタガタ言わないで配りなさい」

「こっ、こいつ……！ 悪の組織の戦闘員の、俺よりも汚い真似しやがる。」

「……駄目ね。別の派遣会社に来てしまったわ」

む、しかも、あつちは大人数で、子供受けを狙ってか風船まで用意している。ヒーローっぽいコスプレをしている可愛い姉ちゃんまでいるし。もしかしたら本物かもしれない。……どうせ働くなら俺もあつちが良かった。

「移動するわ。難癖つけられるのも嫌だし」

「良いのか？」

社長の性格から言っつて、俺にいちやもんつけさせるくらいの暴拳に出ると思っつていたが。

「新参は同業者から目をつけられないようにしないと」

ふーん、そういうもんか。まあ、ヒーローが手を組むつて話もあんまし聞かないし。獲物を奪い合つたり小競り合いするのが大好きだからな、奴ら。そういうところ、悪の組織の方がまだやりやすい。時と場合によりやあ普通に助け合つたりもするし。

午後、一時を回つた辺りか。ティツシユの八割程度を配り、営業所に戻つてギャラを受け取つた俺たちは、今は帰路に就いている。

タクシーの助手席で俺はあくびを噛み殺した。

「七、三で良いわね？」

「何が？」

「取り分よ」

「ざけんな。分けるほどの金でもなかつたじゃねえか。つーか、お前らは勝手にやつただけだろ。さっきのは俺に受けさせた仕事だつたんじゃないのかよ」

行く先々でちよろちよろと動き回りやがつて。幾ら暇だとは言え、こつ、保護者気取りされるつても嫌な感じだ。一人で出来るつつの。

「なら全部もらつちやうわね」

「話聞いている？ ねえ話聞いている？ ……こここのえー、お前からも何とか言つてやつてくれよ」

しかし運転中の九重は聞く耳を持つてくれなかつた。

「お前さ、そういう態度ばかり取つてると色々逃げちまつぞ社員とか幸運とか。」

「逃げたら追い掛けるまでよ。前にも言わなかつた？」

本当、ムカつく女だ。

「表情に出ているわよ。……あら、九重、止めなさい」

社長は言うが、九重は話を聞いていない。仕方がないので、俺は彼の肩を揺さぶってやった。交通量も少なく、対向車も来ていなかったので大丈夫だろうと判断したのである。九重はブレーキを踏み、車を路肩に寄せて、恨めしそうに俺を睨んだ。

「社長が止めろってさ」

「……何か？」

社長は指を差す。その先には、小さな公園があった。滑り台やブランコ、砂場やシーソーが見える。だが、彼女は公園に用があった訳ではない。そこにいる奴らに用があるらしい。

公園には、戦闘員が四人ばかりいた。どこの組織か知らないが、ドクロのお面を被った、忍者みたいな連中である。あれは、忍び装束とも呼ぶのだろうか。

「黒い忍者だ」九重が端的に述べる。

「アレ、何かしらね」

忍者四人の真ん中に、と言うよりも囲まれている者がいた。それとも、似たような忍び装束を着ている。色は、他の奴らとは違って青いが、恐らくは、アレもスーツだろうな。で、赤い布切れみたいなのを口元に巻きつけている。黒髪は短くて、所々がはねている。「楽しそうな話をしている訳ではなさそうね」同感だ。青い忍者は、じりじりと間を詰められている。公園で遊んでいたであろうガキや、その母親は危険を感じてとっくに逃げ出していた。しかし、気になるのか、安全そうなところで忍者たちを見つめている。野次馬め。まあ、俺たちも同じなんだけど。

うーん、良く分からないが、何だろう。ヒーローと怪人の戦闘五秒前って感じだろうか。触らぬものには祟りなし。やられそうになっっているヒーローにやあ悪いが、助ける義理はどこにもないな。

「九重、行こうぜ」

九重は頷き掛けるが、社長が待ったを掛ける。死ぬほど嫌な予感

がした。彼女は可愛らしい顔には似合わず、口の端をつり上げて、こっちを見る。俺を、見るのだ。

「チャンスね。ギャラリーもいるし、あなたの存在を知られるにはちょうど良い状況じゃない」

ほら来た。とりあえず言わせてもらおう。ふざけんな、と。

「どうやってだよ？ いや、分かってる。行けてんだろ？ スーツもなしに、徒手空拳でやれってんだ、あんたは」

「ふふ、こんな事もあるうかと、用意しているものがあるの。九重は頷くだけで、何も言わずに車を降りる。

「……今度は何だ？ 牛か？ 豚か？ 何のマスクだ？」

「マスクじゃないわ。……ヒーローにも様々な種類があるのよ」
はあ？

「私が最近おもしろ 目を付けたのは、メタルなヒーローよ。金属のボディを纏った、鋼の正義。たとえ体が血の通った肉でなくても、悪を憎む心に違いはないわ」

金属だと？ そんなもん用意出来る筈が……いや、しかし、もしかしたら。メタル、か。うん、それなら通常のスーツでなくても、あるいはもうただの鉄板でも良い。少なくとも、今までの馬マンだのオセロット君よりもマシだろう。問題は、機動力だ。こいつらの事だから、マジでただの鉄の塊を用意してらって可能性もある。まあ、盾程度には使えるだろう。

「メタルなんだな？」

「メタルよ」

「分厚いのか？」

「いえ、薄いわ。とても着やすいと思うわよ」

メタルなのに薄い？ カラーズってのはそんな、高度な技術力を持っていたのか？

いぶかしんでいると、九重が段ボールを持って戻ってくる。ブツは、そこに入っているらしい。

「さあ、装着よ」

段ボールを手渡される。が、やけに軽かった。見ると、箱には何も入っていない。

「……………アレか？ 馬鹿には見えない裸の王様スーツなのか、これは？」

「スーツなら、それよ」と、社長は段ボールを指差した。

「だから、どこにも」

もう、俺は気付いてしまった。しかし、一縷の望みを信じて口を開く。

「サイズはぴったりだと思っただけだ」

何故か、段ボールはメタリックなカラーで塗装されていた。おまけに、何だかマジックで模様が書き加えられている。俺が死にそうな顔をしていると、九重はまた別の段ボールを差し出してきた。これは、何だ？ 形状からして、こう、腕にはめるのか？ この段ボールを、腕にはめて、どうしろと言っただ？ なあ、誰か答えてくれよ。誰か教えてくれよ。誰でも良いから助けてくれよ。

「さあ行くのよ、段ボールファイトマシン！」

「せめて段ボールって言うなよおおおおお！」

「殺す気だ！ こいつは俺を殺そうとしている！」

「何だよ！？ ナンナンドヨこれ！？ 小学校の学芸会じゃねえんだぞ！ いや、そっちのがもつとマシなもん作るだろうよ！ お前、お前っ、これ、えっ、マジなのか？」

「……………ご、ごめんなさい」ああ？ どうして九重が謝るんだよ。頭あ下げなきゃならんのは、そのアマだろうが。

「提案したのは私だけれど、作ったのは九重よ。あなた、その苦勞を水泡に帰すつもりなの？」

「知るかつ！ お前も、こんな事させられてんじゃねえよ！」

ひっ、と、短く叫び、九重は両腕で自分の顔面をブロックする。

俺よりでかいくせに、俺より気が小さいのな、こいつは。

「あーあー、九重、あんなに頑張って作ったのになあ」

「おい、やめろよ。よせよ、そういう言い方。おかしいだろ、なあ、

おかしいだろ？」

あの戦闘員、刀持ってんだぞ？ 段ボールじゃ普通に切られるだろ。俺ごと切られちゃうだろ。

「……ごっ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「なーかしたー、なーかしたー」

「荒い煽りすんじゃないよ！」

肩書きは社長でも、中身はガキじゃねえか。

そうしている内に、公園では戦闘が始まっている。青い忍者は、黒い忍者の攻撃を必死に避けているようだった。数では劣っているが、青い忍者の動きは、誰よりも速くて、戦闘員程度では追いつけない。……なら逃げろよ。さっさと、この場から立ち去ってくれよ。こんなところで見せ付けるようにしてやがるから！ ウチの社長がいらん事を思いついたんじゃないか！ 全部っ、てめえのせいだぞ！？

「もう、何とかならないのかしら」

社長はつまらなさそうに言う。

何とか、だと？ いや、無理だろ。この段ボールじゃ焼け石に水どころか、ふざけた格好しやがってと火に油を注いでしまうかもしれない。あの黒忍者ども、他のところの戦闘員よりも相当に良い動きをしている。江戸さんとこの数字付きよりも、だ。つまり、俺よりも。スーツを着ていたって、あのスピードにはついていけないだろう。かなり、厳しい。

「出て行ったところで、邪魔にしかならねえよ」

「そう。折角、スプレーとかいっぱい使ったのに。正直、馬のマスクよりも費用が掛かっているのよ？」

「そんなところに金掛けてどうすんだよ。もつと有意義に使えっつーの。良いか、遊びじゃねえんだぞ。それを、お前……こんな、こんな……」

言葉が出てこなかった。呆れるのを通り越して怒るのを通り越し

て何だかもう逆にどうでも良い気分である。

「ひっ、あ、あの……」

目が合うと、九重はしゅんとうな垂れた。俺が何をしたと言うんだ。でも、何だこの罪悪感は。

「……社長」

「何よ」

「あんたの目的ってのは、とりあえずカラーズの名前を売るってところにあるんだろ？」

社長は頷かない。その通りよ、と、目だけで言っている。

「極論、戦わなくても良い訳だ」少なくとも、今は。

「あなた、何をするつもりなの？」

「やれって言ったのはそっちだろう」

俺は、この、情けない段ボールで作られたパーツを腕にはめ、足首にはめていく。

「俺は戦わないぞ。ちょっと宣伝しに行くだけだ」

「えー？」

「不満そう！？ 何だよっ、許してくれよ！」

段ボールのパーツは、後一つ。頭部、俺の正体をバレないようにする為の、マスクとなる部分だけだった。

「仕方ないわね。でも、私が良いと言うまでは戻ってきちゃ駄目よ」

「まあ、良いだろう。けど、やばいと思ったらすぐ戻ってくるからな」

お互いの意見は一切無視する。

「ど、どうぞ」うむ。俺は九重から最後のパーツを受け取った。

って、雑い！ 段ボールを四角くしたただけじゃねえかコレ！ あっ、顔が書いてある。けど、穴も何も開いてねえぞ。視界がない。

「おい、先の尖ったもんくれ。穴開けるぞ」

「えっ、ど、どうして？」

「これじゃあ目え見えねえだろうが」

「目、目ならあるよ？」

九重はマジックで書かれた目を指差す。ちよつと誇らしげだった。ムカついたのででこぴんしてやる。

「心眼でも開けてったのか。お、ボールペンあんじゃん、借りっぞ」
躊躇せず、目の部分と口の部分を一気にぶち抜く。不恰好だが、それは元々だ。ひとまず、これでどうにかなるだろう。

「あああああ……折角作つたのに……」

「こいつは不良品だったが、今、俺の手で完成した。しかしこれ、マジでサイズ完璧だな。いつの間にか計つたんだ？」

「それはちよつと、ここでは言えないわね」

「なんで!? どして!? 言えよ、言ってくれよ! 俺に何を仕掛けたんだよお前!

「ちつ、クソ女め。ともかく行ってくる」

「ええ、段ボールファイトマシンの初陣ね」

そしてこれが段ボールファイトマシンの最後の戦いになるだろう。ミラーで自分の姿を確認すると、段ボールが動いているのが見えた。コレが今の俺だった。泣いてしまいそうだった。あ、いかん、水気は駄目だ。ふやける。

「あ、ドアが開かない」

「もうつ、九重、開けてあげなさい」
情けない。

「あつ、なんか出てきたぞ!」

「うわあダンボールだ! ダンボールだ!」

タクシーから降りた瞬間、ガキどもに指を差される。

「あいつもカイジンだ! やっつけようぜ、すげえヨワソーだ!」

「おらつ、くらえくらえ!」

水鉄砲を構えるガキども。

「うおおおお!? ふざけんな水掛けんじゃねえよ!」
濡れてふやけて破れちまうだろうが!

かたじけない

出たからにはやるしかない。戦力差はあまりにも絶望的である。比較するのもアホらしい。だが、今回は別に戦わなくても良いんだ。とりあえず、カラーズの宣伝をするに留めておこう。うん、俺以外にヒーローだっているんだし。ブランコで立ち漕ぎでもしながら叫べば、社長だって満足するに違いない。

と言う訳で、俺は案外、リラックスしていた。纏わりつくガキどもを母親のもとへ持つていき、公園へと歩く。ゆっくりと。うん、まあ、視界も悪いし動きづらいが、着ぐるみん時よりはマシだった。公園内に足を踏み入れると、今まで戦いに耽っていた奴らが一斉にこつちを見る。俺は思わず視線を逸らした。みつ、見んなよ！怖いじゃねえか。

黒い忍者どもは一旦距離を取り、四人でひそひそ話を始めている。青い忍者ヒーローはじつとこつちを見つめていた。その瞳からは感情と呼べる類のものを感じ取れない。

「どうも」とりあえず挨拶しておこう。
「俺の事は気にせず、ただ、俺の話だけを聞いてくれ」

そうして、ガキどもの方にも目を向ける。おお、ギャラリーが増えていた。これは都合が良い。

「……何者だ？」
黒い忍者に問われて、俺は待っていましたとばかりに大きく口を開いた。

「俺は段ボールファイトマシン！ ヒーロー派遣会社、カラーズでヒーローをやっている者だ！」

忍者たちは再びこそこそと話を始める。今の内に畳み掛けておこう。

「カラーズ、カラーズ！ 炊事洗濯家事退治！ テイツシユ配りからデパートの屋上でのマスコット活動など、何でもやらせていただきます！ ヒーロー派遣会社カラーズ！ カラーズをつ、どうぞよろしくお願いします！」

「こんなもんで良いだろう。さて帰るか。」

「待て」背を向けた瞬間、呼び止められる。

「からあずだと？ 聞いた事もない。貴様、イダテン丸の味方だろう」

イダテン丸？

「しらはつくれるか、異形め」

ふと、青い忍者に見られているような気配を感じた。……イダテン丸とは、そいつの事か。しかし、俺はイダテン丸なんぞ初めて聞いたし初めて見た。仲間な訳がないだろう。

「知らん。今日、この場に限っては、俺は誰の味方でもない。誰の敵でもない」

「ええい、ほざくか！」

黒忍者が刀を構えた。えっ、おいちよつと待てよ。

「カラーズはっ、最近出来たヒーロー派遣会社であり！ 我々社員一同は！」

「黙れっ」

言っが早い、忍者の一人は地を蹴り、俺に向かって飛び出してくる。俺はブランコの方へと、拙い動きで必死に逃げた。

「背中見せるかっ」

「俺は関係ねえよオ！ 勝手にやってるよバカ！」

ブランコから、シーソーへ、シーソーから滑り台へ。遊具の周りをぐるぐると走り回る。

「往生せぬか あ」

俺に刀を振り上げようとしていた戦闘員が倒れ込んだ。何が起ったのか、良く見ると、そいつの首元には何かが突き刺さっている。これは、手裏剣だ。呆然としてみると、イダテン丸と呼ばれていた

であろう忍者が、それを躊躇いもせず引き抜いた。うわ痛そう。

「くそっ、やはりイダテン丸の仲間か！」

「よくもライデンを！」

「まずい、完璧に狙われた。逃げるしかない！」

俺はイダテン丸を盾にするようにして、公園の出口に向かって駆け出した。タクシーまで辿り着くが、何故かドアは開かない。

「おい何やってんださっさと開けるよ!？」

ドアは開かない。後部座席のウィンドウがゆっくりと下りていく。

「まだ駄目よ」

「はあああああ!？ 見たろさっきの!？ もう無理だつてマジでやべえつて！」

「あの、イダテン丸とかいう奴ばかり活躍しているじゃない。これでは意味がないわ」

「この人でなしがつ」車内の社長をぶん殴ろうとするが、それよりも先にウィンドウが上がっていく。

「ぎゃあああ腕が！ 腕が！ 俺の腕がああ!？」

「早く行きなさい」

こつちが悶えている隙に、ウィンドウを開けた社長は両腕で俺を押しやがった。そして、彼女は小さく手を振る。

「逃がすものかっ」ひいひい!

逃げ場などない。とりあえず、俺はイダテン丸の傍に立つ。しゃがみ込み、呼吸を整える。

「まずはその箱から殺すぞ、散っ」

「助けてイダテン丸！」

プライドなどなかった。だがイダテン丸は答えない。それどころかこつちを見ようとすらしない。戦闘員が迫ってきて、俺は滑り台の方へと逃げる。

「待てっ、待てっ」

「カラーズです！ カラーズをよろしくお願いします！」

頭の中がぐちゃぐちゃになって、思考と口が一体化している。意

味不明な事を叫びながら、俺は公園中を逃げ回る。

「何でもしますカラーズです！ 何でもやりますカラーズです！
一票をつ、清き一票を！」

金属音が高く響いた。滑り台の階段の部分に、刀が突き刺さっている。なんちゆう切れ味だ。ふざけきつてやがる。

「おぎゃああああ殺される！ カラーズっ、カラーズを助けて！
「シップウ後ろだっ」忍者が叫ぶ。

俺の近くにいた忍者がぐらりと崩れた。そいつの体が地につくより先、イダテン丸が忍者の腹を蹴り上げる。一、二、三、四……何回蹴った？ 凄まじい体術だ。スーツの性能に頼りきっている訳ではないらしい。このヒーロー、練り上げられた技と、鍛え上げられたしなやかな体付きの持ち主なのだと、俺は今更ながらに気付いた。やがて、黒忍者は地面に倒れ込む。と言うより、叩き付けられた。当分は目覚める事もないだろう。

「クロガネ、回り込め」

「応よシロガネ」

残った黒忍者が、イダテン丸を挟み込むような位置に立つ。背負った刀を鞘から抜き去り、おおっ、と、甲高くも威圧感のある声を放った。

だが、イダテン丸は動じない。構える事もしない。ただ、自然に立っている。流れに身を任せていると評すよりも、流れを読み切り、その中で静かに立っているという方が相応しい。水のような佇まいだった。

黒忍者二人はイダテン丸の周囲を回り続ける。隙を探っているのだろうが、無駄だった。そうして、痺れを切らしたのはそいつらの方である。刀を振り上げ飛び掛かる。

「なあっ……！？」

刀は空を切った。確かにそこにいた筈なのに、イダテン丸の姿は霞にでも紛れてしまったかのように、忽然と姿を消している。

「うっ……！」

俺が辺りをきよるきよるとしていると、戦闘員が一人倒れた。その喉元には、イダテン丸の手刀が突き刺さっている。

「うおおおおおおお！」

一人、最後に残った忍者が咆哮を上げる。だが、もはや負け犬の遠吠えにしか聞こえない。俺は笑った。

「参ったか！　これがヒーロー派遣会社カラーズの実力だ！」

「ここぞとばかりに勝ち誇る。」

「お、おのれっ！」

「ぎゃっはっはっは！　おらどうした下忍風情が！　悔しかったらかかってこいよっ、そうでないならドロンと隠れてニンニン喚け！　視線だけで人を殺せるなら。黒忍者はそんな目をしていた。しかし、全然怖くない。さあイダテン丸、さっさと野郎を仕留めてしまえ。」

「許せんっ、せめて貴様だけでも！」

「っておい！　狙うのは俺じゃねえだろ！」

向かってくる！？

俺は背を向けて逃げようとしたが、足がもつれて近くにあった鉄棒に頭をぶつける。クラッときた。クラッと。

「往生！」

したくねえ！

目を瞑って、無駄だと分かっているけど両腕で頭をブロックする。だが、いつまで経っても痛みは訪れなかった。恐る恐る目を開けると、俺の前にはイダテン丸が立っている。そして、黒忍者はゆっくりと倒れていった。

「……た、助かった」立ち上がるうとしたが、腰が抜けている。

ま、まあ、全て終わったんだからもうどうでも良い。

しかし、こいつら、一体何だったんだ？　一応、忍者同士だったし、まさかアレか。抜け忍って奴か？

「な、なあ」

事情を聞こうとするも、イダテン丸はこっちを見なかった。

「あんた、ヒーローだよな？ こいつら、何？ どちらの戦闘員なんだよな？」

答えてくれないと思ったが、とにかく喋った。何を話したのか分からないけど、とにかく話し続けた。けど、やはり返事はない。

「……………っ」

「え？」

イダテン丸はこちらに背を向けたまま、何かを言ったような気がした。だけど、声が小さくて良く聞こえない。やがて、ヒーローは俺に向き直る。ゆっくりと首を振り、息を吐いた。関わるな、とでも言いたそうで、俺は何も言えなくなる。

「かたじけない」

「え、う、うん？」

それだけ言つて、イダテン丸は公園の入り口に向かわず、フェンスを飛び越えていつてしまふ。とんでもない跳躍力だった。まあ、よその組織の事情に首を突っ込むのも面倒な話である。全部忘れてしまおう。うん、それが良い。

立ち上がり、俺はタクシーに向かった。

「だっせえなあおまえ！ にげてばっかだった！」

「イクジナシだこいつ！ イクジナシイクジナシ！」

「うっせえ殺すぞガキども！」

息を吐く。まあ、どうにかなった。まだ、生きていられる。けど、いつまでこんなギリギリの事やらなきやなんないんだろう。

「疲れた……………」

「逃げてただけじゃないの」

「アホかお前。立ち向かえつてののか」

死ねと同義語だぞ。

「それに、ちゃんと宣伝してやったじゃねえか」

「悪名が轟いたような気がするのだけけど」

「悪名だとして、そいつも立派な知名度だろ。つーか労えよ、今まさに、俺は死に掛けてたんだからな」

「ああ、お疲れ」

「おい入ってねええええ。投げ遣りに言うくらいなら何も言って欲しくなかった。九重は運転してるから、ずっとだんまり決め込んでるし。つーか、何か不機嫌？ 段ボールファイトマシンを駄目にしちゃったから、か？ 最初から駄目だったつーの、こんなの。」

「今度はもつとまともなスーツ用意しとけよ。いい加減にしとけてんだ、マジで」

「段ボールを外そうとするが、上手く外れない。と言うかぴったりフィット過ぎて、この、全然……！」

「ちよ、社長、これ外してくれよ」

「ええ？ どうして私が。嫌よ」

「外れないんだって！」

腕をぶんぶん振る。うわ、やべえよ。時間が経つにつれて、何か肌と一体していくような感じがする。早く外さないと、何かまずい。

「九重に頼みなさい。ほら、信号で停まったわよ」

「お、おお。こつ、九重、これ、取って取って」

腕を振ってアピールするが、九重はこつちを見なかった。

「ちよつとお、どうして無視してんの!？」

「オカミみたいな喋り方はやめなさい」

「早く外してくんなきゃマジでやばいじゃないの!」

信号が青になり、車は発進する。

「頼む頼むマジで！ なあもう早くこんなの……」

「………こんなのって言った」

「あ？」

「折角作ったのに」

「運転中に九重が喋ったのも驚きだが、こいつが恨みがましく物を言うのにも驚いた。」

「穴だって開けちゃうし、濡らしちゃうし……」

「お前ふざげんなや、何言ってるんだよ。こんなのをこんなのって言うて何が悪いんだよ」

死刑執行人みたいな真似しといて、何を可愛くむくれとんじゃコラ。

「自信作だったのに」

「あーっ、もう、分かったから、会社戻ったら外してくれよ」

九重は膨れっ面のままこっちに一瞥くれた後、

「じゃ、写真だけ撮る。それまで着てて」

そう言い切り、運転に集中する。もう口を利いてくれなかった。

「……なんなの、こいつ？」

「うるさいわね。それより、あまり寄らないでくれる？ 薄気味悪い威圧感があるのよ、それ」

ヒーローって何だ。正義って何だ。

少なくとも、この女からはそういったものを感じられなかった。

「ちっ、けど、ちゃんと金払えよ。命懸けで宣伝したんだからな」
「嫌」

いつか死ぬぞこいつ。すげえ嫌な死に方で。

だからウチに頼んだのよ

俺はカラーズでの仕事に身の危険を感じていた。そう、今更ながらに。しかし、このままではスーツを買う金を貯めるよりも先に死んでしまう。ありったけの、なけなしの貯金を下ろし、俺は爺さんの元へと向かっていた。

「何じゃ、これは？」

俺は爺さんを無理矢理起こして、封筒に入った有り金を突きつけていた。

「金だ。いや、誠意だ」

「……気の早い奴め」

爺さんはパソコンの群れを見回して、あくびを一つ。つまらなさそうに俺を見て、キーボードを叩き始めた。

「どうしても、必要なんだ。もうこの際だ、並以下のスーツでも良い。この誠意でどうにかしてくれ」

「乗り気じゃない」

「乗らなくても良い」

「たわけが」キーボードを叩く指に力が入る。静かな部屋に高く、乾いた音が響いた。

乗り気じゃないって言われても困る。こっちや命が掛かってんだ。無慈悲な社長に理不尽な書類を握られちまってる。何とかして盗み出そうとしたが、どうやらカラーズの社内には書類など置いていそうになかった。調べていないのは、社長の私室らしき扉の向こうだが、鍵が掛かってどうにもならねえ。

「わしがスーツを作っているのは、紛れもなく趣味じゃ。誰に言わ

れても、気が乗らん限りはやらん」

「そりゃ約束が違うんじゃないかねえのか？」

「抜かせ。どうしても作って欲しいと言うんなら、わしを乗せてみるか」

理由がなくちゃ、それも、相当に面白そうな理由じゃなきゃ爺さんは動かないだろう。……事情を説明するか？ いや、駄目だ。この爺さんは組織に忠誠こそ誓っているかどうか怪しいが、古い人間であるのに違いはない。こないだも背信がどうか言ってたし、ヒーロー派遣会社で働いているのを馬鹿正直に話しても、部屋を叩き出されるのがオチだろう。

「分かった。今日は帰るよ。……とりあえず、この誠意は持って帰っても良いか？」

「好きにせえ」

床から立ち上がる。ケープルがうじゃうじゃとしていて蹴り飛ばしてやりたかったが、これ以上爺さんの機嫌を損ねるのもまずいだろう。

「ああ、そうじゃ」爺さんは思い出したかのように、デスクの引き出しから何かを取り出した。

……グローブ？ うん、黒いグローブだ。サッカーのゴールキーパーが使っているような、分厚い奴である。しかも、片方だけ。

「今は理由を聞かん。お前の敵に回るのもつまらなさそうじゃからな。どうしても、必要なだろう。だが、スーツまでは出来ておらん。これで暫くは我慢しておれ」

差し出される。爺さんの皺くちゃな手が、誇らしいものに思えた。「これは……？」

「暇潰しに作っておいた。素晴らしいぞ、それ。並の怪人やヒーローのスーツよりも威力のあるパンチを打てる筈じゃ。正直、お前にやるのはもつたいない」

「い、良いのか？ だって俺、爺さんには何も……」

爺さんは何も言わず、白衣のポケットから硬貨を三枚取り出す。

それは、以前、俺から取り上げた三百円だった。三百円、ぽっちである。

「お、おお」じっ、爺さん！ すごい、かっけえ！ マジか！ 良いのかよ！？ 並のスーツよりも性能が良いものをくれんのか？ いや、グローブだけだけど。片方だけだけど。

俺は早速、そのグローブを右腕にはめる。少し指の先が余ったが、握れば問題ない。誰かをぶちのめすには何も、問題なんてなかった。「今はグローブだけじゃが、ま、いずれスーツも完成するだろうよ」「へ、へへへ、すごい。うん、絶対爺さんに乗せてみせるよ。良いもん、作ってくれよな」

「たわけが」爺さんは俺から顔を背け、パソコンのモニターを見遣る。

「わしは良いものしか作らん」

「その通りだな。さてと」

腕をぶんぶん振り回す。

「……何をしている？」

「いや、とりあえず試しに何か殴っておこうと思って」

「ふ、ふっ、ふざけるな！ お前、恩を仇で返すつもりか！？」

滅茶苦茶怒られた。部屋を叩き出された。三百円はやっぱり返してもらえなかった。パソコン、いっぱいあんだから一個くらい良いじゃんよう。早く試したかったんだよう。

スーツではなく、グローブ、それも片方だけを受け取った。

だが、調子に乗り過ぎるのは危険だろう。こいつが爺さんお墨付きのものすごい性能のもんだとしても、所詮はグローブ。右腕、拳の部分しか纏えない。俺は、右拳しかヒーローになっていないのだ。他の部分は何も変わらない。一般人だ。どんなに強い一撃を打てたとしても、相手の攻撃を喰らえば、先に倒れるのは俺なのだから。

しかも、まだ一発だって試していない。戦闘員用のスーツもある

し、数字付きん時にヒーロー相手に試すのが一番確実だし楽しそうだが、グローブをどこから手に入れたのか、他の奴らに聞かれるのも危ない。やはり、カライズでの仕事ん時に試すしかないのだろうか。

俺は部屋の中を見回す。……何か、殴ってみようか。いや、でも、ヒーローとしての最初の一撃だぞ？ つまらないものを殴ってどうするんだ、俺。けど早く試したいしなー、どうしようかなー。

そんな事をにやにやしなから考えていたら、いつの間にか布団の上で寝こけていた。グローブをはめたまま。小学生か。

そんな折、カライズにある仕事か舞い込んできた。地道な宣伝活動が遂に実を結んだのである。チラシにティッシュに、配れるものは配った。うんうん、よきかなよきかな。それに、俺には爺さんからもらったスーパードロップもある。

「何かがついているとしか思えないな」

「何を言っているのよ、突然」

九重が運転するタクシーの中、俺は笑う。楽しくて楽しくて仕方がないのだ。

「ちよっと、少しは緊張してよね」

「うむ、分かっているわ。がっはっは」

仕事は、とあるバーのマスターからだった。髭面で強面の、バーテンダー服が筋肉質なボディで張り裂けんばかりの。そんな人だった。駅前でティッシュを受け取り、カライズの存在を知ったらしく「怪人を倒してくれ」と言われたのだが、正直自分でやればとも思ったものだ。

依頼者は繁華街の地下にあるバーでマスターをやっている。そういう場所なので、ちよっとした揉め事いざごきは起こっていたらしいが、そこは自慢の肉体を見せ付ける事でどうにか回避してきたそう。だが、幾ら鍛えていようと、スーツを着なけりゃ一般人。

一般人では敵わないモノが、この世には、この国には、この街にはいる。つまり、怪人。依頼人は、怪人に脅されているのだった。どこの組織か知らないが、カタギから売り上げハネようなんざ悪の組織の風上にも置けねえ。欲しかったら襲って奪えってんだ。

「相手は、単独らしいわね。それだと、うっん、どこかの組織には属していないのかしら？」

さて、そりゃ分からんな。小金欲しさで勝手にやってるって事もあるだろ。

「けれどもつたいないわね。あの依頼人、あれだけの体があるなら自分がヒーローになれば良いのに。……詮無い事ね」

「あのおっさん一人ならどうにでも出来るだろうが、客が人質に取られてるようなもんらしいからな。確か、ちいせえ店なんだろ？

常連客しか来ないみたいだな事言ってたじゃねえか。そんなんで、よくもまあヒーロー派遣しようだなんて思ったな」

「だからウチに頼んだのよ」

ミラー越しの社長は、真剣な眼差しをしている。あの、意地悪そうなお笑みはなりを潜めていた。

「潰されたくなかったのよ、きつと」

……まあ、小さいのは小さいながらに楽しくやっていたんだろう。何かしらの店を持った事のない俺には分かんないけど、常連客に囲まれて、和やかに。だけど、その時間を大切に思っていた。そうに、違くない。

ムカつくわな、そりゃ。

その怪人つてのは、まあ、やってる事は理解出来る。俺だつて端くれながら悪の道に手を染めているのだから。けど、他人がやってるとなりやあ話は別だ。俺以外の誰かが良い目を見ているというのは、納得出来ない。俺が自分の幸せを掴む事は難しい。しかし、俺が誰かの幸せを潰す事は簡単である。この世の中、作るよりも壊す方が楽勝なのだ。

「うあ、青井、悪い顔してるわよ」

てめえに言われたくねえよ。

午後十時を回ったところ、俺たちは店の近くにタクシーを停めて地下へ続く階段を下りていく。こういう、洒落た店に入った事はなかったので、少しばかり気が引けてしまふ。が、社長はあつさりと扉を引いた。店内には、ジャズっぽい音楽が鳴っている。ムードあるな。大人の隠れ家って感じた。

「ああ、ようこそいらっしやいました」

ムキムキのマスターが頭を下げる。

「どこでも好きな場所にお掛けください」怪人を恐れているのだろう、俺たち以外に客はいなかった。いや、俺らは仕事で来てる。つまり、客は一人もいないんだ。……怪人のせいだ。

俺はカウンターに一人で座る。社長と九重は奥にあるソファに座らされていた。注文を聞かれたが、丁重に断っておいた。アルコールの入った状態で戦える相手なら、酒を楽しめたんだけどなあ。とりあえずウーロン茶で喉を潤す。

ここで、怪人を待つ。

今日、来ると怪人は言ったらしい。マスターは、金を渡さなければ、この店を潰す。客を殺すと脅されている。物騒な輩だ。

俺は、倒せるだろうか。いや、倒す。ぶっ潰す。こっちには爺さんからもらったグローブだってある。こういったものにかけて、爺さんは嘘を吐かない。自信があると言っていた。だから、このグローブは本物だ。問題は俺にある。俺が打たなきゃ、俺が当てなきゃ、このグローブを無駄にしちまうんだ。逆に、当てれば何とかなる。並のスーツよりも性能が上だと爺さんは言った。そんじょそこの怪人くらいじゃあ、耐えられないだろう。そうでない困る。

ならばどうやって当てるか。簡単だ、近づいて当てる。あるいはノコノコと近づいてきたところをぶん殴る。こっちはほぼ生身。ちよびつとだけヒーローみたいな存在なのだ。グローブだけはめてり

や目立つだろうが、相手は油断するだろう。そこに付け込む。そこを仕掛ける。

「青井、青井」

「……何だよ」こっちや色々考えてるつてのに。

「用があるならそつちが……いや、良い。何?」

カウンター席から奥へ移動する。社長と九重は馬鹿でかいパフェを食っていた。ここ、こういうのも出すのか。

「てめえ、仕事だつて分かってんだろうな?」

「ええ、心配せずともギャラから引いてもらっているから」

「俺の分からじゃないだろうな?」

九重の横に座り、俺は彼のパフェを食おうとした。

「だ、駄目」しかし、九重はしつかりとブロックしている。ケチ。

「で、何か用かよ? 俺は精神統一するのに忙しいんだ」

「寝てたんじゃなかったの?」

失敬だなキミは。

「いえ、あなた、今日は随分と大人しいのね。いつもならもっと醜く喚き散しているのに。自信があるの?」

「まあね」はぐらかす。あのグローブについて、まだ話すつもりはない。

「ふうん、そ。なら、私からは特に何も無いわ」

もつと美味そうに食べよ、パフェ。

「……そついやさ、今日は何もないのか?」

「何もつて、何よ」スプーンをこつちに向けるな。

「いや、だから、マスクだの着ぐるみだの、そついったもんだよ」社長はゆっくりとアイスクリームを飲み込んでいく。

「あるわよ、当然じゃない。大事な社員を裸で送り出す訳ないでしょ」

野郎、スカした顔で。

「九重、出しなさい」

頷き、九重はテーブルの下に置いてあった紙袋を持ち上げる。

「今回は何だ？ 段ボールで作った剣でもくれんのかよ？」

俺がそう言うと、九重は不満そうな顔を浮かべた。こいつ、まだ気にしてやがる。

「違うわよ。……ヒーローには、似合うものがあると思わない？」

「スーツだろ」

「特に、私たちのような孤高の者には。孤高のヒーローには、これは欠かせないわ」

答えを聞くのが面倒になったので、俺は紙袋を逆さにした。落ちてきたのは、黒くてでかい布である。何だコリヤ？ 着るのか？

まあ、今までよりは一番それっぽい感じだが。スーツにしちゃあ随分と薄いな、これ。

「マントよ」

「あー、なるほど。でも、どうしてこの、端の部分が擦り切れてるんだよ」今日、初めて着るんだぞ。既にぼろぼろってどういう事だよ。

「そっちのが歴戦の証って感じがするじゃない」

このマントを着るのは、今日が初めてだと言っているだろう。何が歴戦だ。そうやって格好で人を騙そうとしやがって。

「こけおどしにはなるかもしれないわ。ちよっと着てみなさいよ」立ち上がり、ジャケットを脱いで着てみる。

「あはは、似合わない」

「うるせえよ。それよか、顔隠すもんはないか？」

「あ、忘れていたわ」

おいざけんなよ！

「ここで怪人を逃がさなければ良いじゃない。マスターだって、あなたの正体は言い触らさないわ」

「どうかな、人の口には戸が立てられねえんだぜ。とにかく、何かないか」

「……るっさいわね。マスター、少し良いかしら？」

社長はマスターを呼びつけ、耳元で何か囁いた。マスターは頷き、

奥に引つ込む。何を持ってこさせるつもりなんだろう。

眼鏡だった。

「う」レンズもしっかり入ってる。

「マスターの私物よ。弁償出来ないから、レンズは外さないでね」
ちっ、ないよりマシか。

とりあえず、眼鏡は怪人が来てからで良いだろう。マントだけ着ておこう。

しかし、アレだな。社長もたまには良いもん持つてくるじゃねえか。これは良いぞ。マントってのは実に良い。これで、体を隠せる。相手からは、俺の腕が見えない筈だ。うん、いけそうな気がしてくる。

俺は再びカウンター席で茶を啜る。もう、誰も口を開かなかつた。パフェを食い切ったあいつらも黙ってくれている。……っ！か眠たそうだった。まあ、ぎゃあぎゃああと騒がれるよりは良い。

マスターは、さっきからずっとグラスを拭いている。誰の為に。何の為に。俺よりも随分と年上の男の顔は、どこか寂しそうだった。不安ではなく、寂しがつている。この店に常連が戻るのを待ち望んでいるのだ。

誰が悪い。何が悪い。それはきつと、誰にも分からない。怪人がこの店を選び、金をよこせと脅している。もしも、金があったならなら、怪人はこんな事をせず、マスターだって平穩に暮らせていたのだ。だけど、俺は殴る。怪人をぶっ飛ばす。無性に腹が立つからだ。どこのもんかは知らないが、その体に叩き込んでやる。悪党にも流儀はあるのだ。折角スーツ着てんだから、面倒な真似せず奪えば、襲えば良い。他人を殴る、それが出来ない臆病者は、スーツを着る資格も、怪人を名乗る資格もねえ。俺たちクスは、体使ってナシボだろうが。

店に着いてから約二時間。遂に、扉が開いた。客ではない。待ち

望んでいた野郎だ。俺は眼鏡を着けて、入り口を睨む。慣れない世界が目の前に広がっていて、少しでも吐き気がした。

プライストレスっ

「シャシャシャシャ、おい、金え用意出来てんだろうなあ、おい？」
マスターは無言で、入り口付近に陣取る男を見つめている。こいつが、怪人だ。声からして、どうやら若い男らしいな。

怪人はきつちりスーツを着込んでやがる。黒と白の二色で構成されたものだ。パンダ？ いや、毛は殆ど生えていない。頭ん部分も変に飛び出して。良く見りゃ、背中になんかある。……そうか、ひれか。背びれだな、ありゃ。と、なると、魚型の怪人か？
「シャチだよ」九重が呟く。

なるほど、シャチ型か。ええと、シャチっつーとクジラの仲間だから、魚じゃなくて哺乳類だったっけ。ふうん、いや、初めて見たが、中々に鋭いフォルムをしている。はっきり言って強そうだ。こんな七面倒な事しなくて、良いもん着てんだから、そこそこは仕事出来るだろうに。

「シャツシャツシャツ！ どうしたよマスター、金はどうしたよオ？ あ？ おいおい、客が殆どいなえじゃねえか。シャシャシャ、逃げられちまったなあ、残念だよなあ」

怪人は嫌らしく笑う。さて、ここまでだ。いつまでも好き勝手許してはいられない。俺は立ち上がる。マントが翻る。ちよっと、足を踏み出すのが怖いけど。

「……ああ？ 何だよてめえ、邪魔だろうが。シャシャシャ、それとも何か、てめえが金をくれんのかよ？」

「やらん」

マントの中に右腕を隠す。

「お前にはびた一文やらねえよ」

「おい、マスターまさかてめえこんなのを用心棒として雇ったんじ

やねえだろうな、おい。良いぜ、おもしれえ、スーツもなしに俺とやるうってのか、シャシャシャ！ 舐めんじゃねえぞ!？」

シャチ怪人が足で床を踏みつけた。どうやら、相当キレてるらしい。やりやすく助かるぜ。

「マスター、奥に」促され、マスターはカウンターを抜け出す。彼が社長たちの方へ退避したのを確認し、俺は怪人に向き直った。

今、仕掛けるか？

どうする、野郎は油断している。一気に間あ詰めるか？ 迎え撃つか？

「シャシャッ、出てきたのは良いけどビビってんのか、ああん？」
まるで警戒していない。良いぜ、だったら一発で決めてやる。

俺は足を踏み出した。

「出せ」

「あ？」

シャチ怪人は俺の歩みを手で制する。

「てめえ、何を隠してる？ 俺の目は誤魔化せねえぞ」顔のどこに目がついてるか分からないような顔してくせに。

「ビビってんのはてめえだろうが。三枚に下ろしてポン酢つけて食い尽くすぞ」

「俺は魚じゃねえ！ シャシャッ！」

頭に血が上ってる割には良く回る。つか、こいつは臆病なんだろう。強気な態度は、踏み込まれたくないという弱気を隠す為か。

「だったら、そっちから来いよ」

俺は左腕だけを出し、手招きする。怪人はじっと、俺の手を見据えていた。

「出せ」

しつげえな。さっさと来いよ。さっさと打たせろよ。

「……分かったよ」面倒くせえ、当てりゃ良いんだ。こつちから仕掛けてやる。どっちにしろ、まともに打てるパンチは一発だ。野郎の性格からして、避けられりゃ警戒されちまうだろうしな。

踏み、込む。

「シヤアツ!？」

まだ、ギリギリまで右腕は出さねえ。最悪、一発受けても仕方がない。だが、ちゃんと喰らってくれよ。

「おっ、おお……!」

腰を落とす。同時、マントを翻らせる。怪人の視界は黒一色に染まっている事だろう。狙うのは腹だ。スーツの上からだろうが関係ねえ。三流が、気絶だけじゃ済まねえぞ。

拳を作る。しっかりと握り締める。グローブから力が伝わるような感覚を受け、力をグローブに伝えるような感覚に溺れ、俺は振り上げるようにパンチを放った。それは、怪人の腹部を確実に捉える重く、鈍い一撃は確かに通っているのだ。

「おおおおおらあああああああっ!」

「ぎっ……!」

怪人は短く叫ぶ。まともに声を上げられず、入り口から、階段横のコンクリートの壁に吹き飛んだ。怪人はスーツを着て身体能力が上がっている。それでも、野郎は軽々と宙を浮き、壁にべったりと張り付いている。

やばいだろ、これ。

俺は声が出なかった。絶句である。自分の右腕をぼんやりと見つめていた。やばい。こいつはやば過ぎる。殴打による反動もない。制限はない。条件もない。すげえ、何発だつて打てる。何回だつて殴れる。やべえだろこれ最高にハッピーじゃねえか。

「しまった。何か、カッコイイ台詞とか考えとくべきだったな」

店の奥に目を遣ると、社長たちが信じられないといった表情を浮かべている。うん。……うん、うん。俺はさ、奴らのこういう顔が見たくてしようがなかったんだな。やーっと、俺をすげえ男って認める気になったみたいだ。はっはっは、讚える。崇める。俺を生涯敬って暮らせ! 平伏せ愚民が頭がたけえっつーの!

「何やってるの!？」

「あ？」

社長は俺を、いや、俺の向こうにあるものを指差していた。

「シャアアアアアアアアアア！」

「うおっ？ なっ、マジかよてめえ」

「馬鹿じゃないのあなた！？ 油断していてどうするのよ！」

頭を低くして、距離を取る。信じられん、怪人め、まだ動けるのかよ。一発でくたばったのかと思っただぜ。

「シャツ、シャツ、シャツ……て、めえ……！ んなもん、やっぱ隠し持ってたんじゃないか。許さねえ、許さねえぞ！」

侮っていたか。ちっ、やべえぞ。どうする。どうすりゃ良い。いや、打っただけだ。足見ろ、ふらついてんじゃないか。

俺はもう一度、いや、さっきよりも深く腰を落とす。だが、怪人は焦らない。野郎は背中に手を伸ばした。何を、するつもりだ？

「驚いちまったが、シャシャシャ、二度目はねえ。てめえ、さっきので倒れなかった俺に驚いてやがったな？ もう隠しているものはないな？ つまり、そういう事なんだろ？ もう、タネは終わりって事なんだろ？」

怪人は、自分の背びれを掴む。それを、引き抜いた。っーか抜けるもんなのそれ？

「シャシャシャ、見切ったぜてめえ」シャチ怪人は引っこ抜いた背びれを握り、構える。どうやら、野郎も得物を隠していたらしい。

……リーチこそ短いが、空手の俺には充分だろう。いよいよまずい。「シャツ、お前、威力はともかくパンチの速さってのは大した事なかったぜ。マントで面食らっちゃったが、その手はもう二度と食わねえ。それじゃあ、俺には届かないぜ。打ってみろ。そいつが届くよりも先に、こいつで切り落としてやる」

面白いくらいに手がバレている。あんだだけ警戒されちゃあ、確かに同じ手は使えねえだろう。

「なるほどな。良く回る頭と舌だよ」

俺は左腕をマントの中に戻す。

「おい、こらてめえその手を戻すんだよ、おい」

「お前は金が大好きらしいな」

「シャ？」

怪人は俺の問いを受け、高く笑った。

「シャツシャツシャツシャツ！ ええおい、金が嫌いな奴なんているのかよ、おい！？」

左手を、ジーンズの後ろに回す。ポケットに差し込んだままのものに、手を伸ばす。

「金がありゃあ何だって出来るだろうが！ 何だってっ、何だってなあー！」

「……概ねその通りだ」

「シャーツ、概ねじゃねえ。全部だ。俺の言っている事は何一つ間違つてねえ。金が、全てだ。分かるかクソが」

そこまで金が好きか。そうかよ。

「分かったよ。確かにそうだ、金があれば何でも出来る」

「シャシャシャ、そうだろうが！」

「金さえありゃあ……」

左手をマントから、抜く。怪人が構える。俺は掴んでいたものをばら撒いた。封筒から、三十枚の札が飛び出して、舞う。目玉しっかり見開いとけよ、そんで有り難く見る。こいつが俺の有り金だ！

「シャーツ……！？」

「てめえをぶん殴れるんだからな！」

怪人は俺の誠意に気を取られていたが、すぐに得物を構え直す。

だが遅い。

既に俺は野郎の懐に入り込み、拳を放っている。衝撃をなるだけ逃がさないように、怪人の背中に手を回す。こいつが邪魔な背びれを抜いてくれたお陰で、余計な傷は負わずに済んだ。

「やめろおおおおおおお！」

この世にあるものは、何だって金で買える。金さえありゃあどんなものでも手に入るのかもしれない。だけど、金にだって変えられ

ないものがある。金がなくても、手に入るものはある。俺だって金は大好きだ！ 愛してる！ けど、この店にはきつと、そういうものがあるんだ。俺みたいなクズじゃあ手に入らないものがあるんだ。てめえみてえな三流が触れちゃあならないものがあるんだ。あつたんだ。てめえが、そいつを奪つたんだろつが！

「おおおおおつ！？」

まずは一発。怪人の体が浮き掛けるが、俺はしっかりと抱き止める。簡単には寝かさねえ。軽く足で蹴つてやると、ボディブローが突き刺さっていた怪人は後ろへとふらつく。もう少し頑張ってくれや。

腰を落とす。低く、もつと低く。そこから、振り上げた拳を、野郎の顔面に！

「プライスレスつ、パアアアアンチイイイッ！」

ぶつ飛ぶ。間違いなく、クリーンヒットだ。グローブの性能に飽かした一発目のそれとは違う。全身全霊、本気で打ったパンチだ。これで立たれちゃおしまいだ。けど、どうやらその心配はいらないらしい。入り口を過ぎ、再び壁にぶつかった怪人だが、その体はコソクリにめり込んでいる。

「う、嘘……何よ、それ……？」

「や、やったあ！ すごいや青井さん！」

正直、やり過ぎ感があった。まさかとは思うけど、死んでないよな。俺は慌てて怪人に駆け寄る。耳を済ませると、どうやら、息はしているようだった。医者さえ呼んでやりやどうかになる。ついでに警察も呼んでやるか。怪人を捕まえるなんて、奴らにとつちや滅多にない体験だろうし。怪人だってスーツさえ剥いじまえばただの人間だ。普通に捕まって、普通に刑務所行け。バーカ。

「今のつ、今のパンチ！ すごいね！」

「お、おお？ そ、そうか？」

駆け寄ってきた九重の目はすげえキラキラしてた。ちよつと引いてしまう。

「……青井」社長が俺を、何かこう、すごい目で見ていた。

「あなた……」

あ、まずい。グローブについて、何か言われるんだろうか。でも、どう説明すれば良いんだ？ まだ隠しておこうと思っただけど、ここまで威力のあるもんとは思ってなかったし。

「やるじゃない」

社長はにっこりと微笑んだ。歳相応の、可愛らしい笑顔である。こうしてりゃあ、もう少し頑張つてやろうかなあ、なんて思うんだが。

「まあな」とりあえず、誤魔化す必要もないらしい。俺はこっそりとグローブを外して、ジャケットを羽織る。とりあえず、それはポケットに突っ込んで上着で上手く隠しておこう。

と、マスターが壁にめり込んだままの怪人を見遣る。彼は、何を言えば良いのか迷っているらしかった。だけど、分かる。嬉しがっているに決まってる。気持ち良かったに決まってるじゃないか。俺の手は、震えている。怖かったんじゃない。当然じゃねえか。こんな。

「どうやら、依頼は終了したらしいわね。マスター、こんなところで良いのかしら？」

おい、お前がやったみたいと言うなよ。

マスターは無言で、頭を下げた。その目からは、一筋の涙が。当たり前前の日常が戻って来る事を思い、感極まったのか。俺には、やっぱり良く分らない。だけど、明日からこの店には確かな平穩が帰ってくる筈だ。そうでなきゃ、駄目だ。うん、そうに違いない。

翌日、俺は組織の仕事がなかったので、カラーズに向かおうと決めた。決めていた。とにかく褒めて欲しかったのである。こう、やっぱりまだ慣れていないが、他人から『すごい』やら『かっこいい』なんて言われて嬉しくない奴はいない。いてたまるか。いたらぶん

殴ってやる。

「ギヤラは必要ないわよね」

「は？」

だから、ちよつと社長の言っている意味が良く分からなかった。

「だって、昨日はあんな風にお金をばら撒いちゃうんだもの」

「いや、あれ、後で全部拾ったじゃん。ああいうのはノーカンだから。つーか、仮に俺が億万長者だったとして、社員が働いた分はしっかり払うのが社長の仕事だろ」

俺はソファに座る。茶など、出る気配はない。

「……そうね」何だか機嫌はよろしくなかった。何が不満なんだろう。怪人だってやつつけたし、マスターの店だって綺麗に守った。それでも、社長は物憂げに息を吐く。むう、昨日の笑顔はどこへやら。

「あんだよ、何かあんなら言ってくれよ」

「名前よ」

は？

「昨日、あなたのヒーロー名を考えていなかった事に気付いたの」

「いや、別にそういうのは……」

「駄目よ。馬マン、オセロット君、段ボールファイトマシンに続く四号。それを、はあ。失敗したわ。カラーズが知られても、カラーズのヒーローの名前だって知られなきゃいけないのに」

んな事今更言われてもなあ。第一、オセロット君はあのデパートが考えた名前だろ。

「あなたのせいね。だって、特徴がなかったもの。と言うか、マンと眼鏡をつけた、ただの青井正義じゃない」

ただのって……！ ひでえ、なんつー言い草だ。

「もう良いじゃねえか、ガタガタとうるせえなあ。あのマスターには、昨日のヒーローは眼鏡マンでしたとか適当言っとけよ」

「眼鏡はマスターありきのものじゃない！」

「そんなんで怒んなよっ」何をやってたって文句を言うのな、こいつ

は。エスメラルド様を見習え。あの人には好き嫌いがないんだぞ。何だって食う。

「仕事はちゃんと成功したんだからさ、もう良いじゃねえか」

「はあ……そうね」

社長は窓を開けて、室内の空気を入れ替える。俺は、彼女が自分の気持ちを切り替えようとしているのだと思った。

「青井、どうだった？」

「何が？」

「怪人を、悪をぶっ飛ばした気分よ」

気分、ねえ。んな事今更言われても、まあ悪くはなかったんじゃないのかな。何か、複雑な気持ちでもあるけど。俺も、いつかはああいう風にぶっ飛ばされちまうんだろうなあ。とか。

「案外、普通だったよ」

「うそ」社長は俺を指差す。

「だってあなた、楽しそうにしているもの」

「思わず鏡を探したが、社長は俺のそんな姿を見て、小さく笑った。」

だけど裏切り者は許せない

俺は今、困った事になっていた。

「アアン？ おら、何か言ったらどうなんだよ？」

悪の組織。本日の仕事が終わった俺が控え室に行こうとして廊下を歩いていると、前の方からだけえゴリラ型の怪人がやってきた。見た事ないが、多分先輩だろう。と言うか怪人なので俺よりも上の立場である。なのでそそくさと道を開けて頭を下げたら、野郎、俺が数字付きだつてのに気付いて、ごちゃごちゃと難癖つけてきやがった。『どこの所属だ』の『どこの派閥だ』の、意味が分からなかったので曖昧に笑ったりしていたら、どうやら、このゴリラの機嫌を損ねてしまったらしい。

「口も利けねえのかためえ！ 俺のが偉いつて分かってんだろ！？」
父さん、母さん。俺は今、悪の組織の廊下でいじめを受けています。こんな経験びっくりです。ちよつと泣きそうです。つーかこえええよおおお！ 腕太いし、顔怖いし、何？ 何なの？ どうして俺がこんな目に遭わなきゃなんないの？

「良いか？ 俺様はな……」

「何をしている？」

えっ、江戸さん！

「……彼はエスメラルド様の数字付きだ。それを分かっている、このような振る舞いに出ているのだからな？」

江戸さんはゴリラをねめつける。良いぞ、やれっつーか殺してくださいこんな危ないの！

「へっ、何、ちよつとウチのルールについて教えてやってただけっすよオ」

ゴリラ怪人はにやりと笑う。

「それは素晴らしい。だが、彼に物を教えるのは上司である私の務めだ」

「じゃ、今日ん所はこんくらいで勘弁してやりますか」
打って変わって、今度は豪快に笑い、ゴリラは俺たちに背中を向けて歩いていく。助かった。

俺は廊下の壁に背中を預けて、スーツに刻まれた『13』を見る。畜生、こいつのせいで酷い目に遭った。

「また、面倒なのに絡まれたな、青井君」

「今の、誰なんですか？ いや、怪人つてのは分かるんですけど」

「そうだな、エスメラルド様の顔を知らなかった君にとつても、ちよつど良い機会だ。着替えてから、私の部屋にきたまえ」

また、説教でもされるんだろうか。憂鬱である。

でも上司の命令には逆らえない。俺は控え室に戻り手早く着替えて、江戸さんの待つ部屋へと向かった。

「失礼します」

江戸さんの部屋、と言うか、ここは会議室めいた居様を呈している。彼のプライベートな空間つてのは、本当はどこにあるんだろうか、なんて事を考えた。でも、まあ、仕事に打ち込んでいる人なので、本人は気にしていなさそうである。

「ああ、座りたまえ。早速なのだが、先の怪人について話そうか」

「まさかこの歳であんな風に因縁つけられるとは思ってませんでしたよ」

パイプ椅子を江戸さんの対面に持っていき、俺は扉の近くに腰を下ろした。

「絡まれたのは君のせいではない。君も、少しは組織について関わりを持ったという事なのだと思います」

「えーっと、どういう、意味でしょうか？」

「四天王を知っているね？」

勿論だ。知っている。けど、エスメラルド様に会わなけりや、江戸さんにそうだと言ってもらわなけりや、何も知らないままだった。「エスメラルド様以外の四天王、名前を言えるかな？」

「アンドロメダ様、とか？」 適當言ってみる。

江戸さんは苦笑し、段ボールん中から袋に入ったどら焼きを二つ取り出す。一つを、俺に向かつて放った。しつかりキャッチ。

「知らないと言うのは、決して恥ずかしい事ではない。そんなものは知らないと声高に叫ぶのが恥なのだ」何だか知らんが怒られたっぽい。

「先ほどの怪人は、四天王の一人であるグロシユラの部下だろう」

「グロシユラ……」

強そうな名前である。

「獅子のスーツを纏った怪人だ。この組織でも、最も強大な力を持っている。腕力、膂力だけなら、ヒーローと怪人を合わせたとして、この街でも五本の指に入るだろう。自然、グロシユラの部下には似たような者が集まる」

ライオン型、か。百獣の王、その名に相応しい力を持っているらしい。流星は四天王だ。

「頭を使う事は苦手だが、良く言えば豪放磊落で、部下にも慕われている」

分かりやすい。確信はないが、一番最初にやられそうなタイプだと思える。

「蝶型の怪人、クンツアイト。彼も四天王の一人だ」

「へえ、どんな人なんですか？」

「……そう、だな。美を重んじる方だと聞いている。美しいものを愛でるのが至上の喜びだと」

美しいもの、ねえ。ああ、そういや、随分前に美術品だのを狙ってる奴らがいたっけ。多分、そいつらはクンツアイトって奴の部下だったんだろう。

「そしてエスメラルド様。あの方に関しての説明はいらないう

？」

「と言うか語りたくなさそう。聞くな、と。江戸さんの目が言っている。何気に、エスメラルド様が一番謎っちゃ謎なんだけどな。基本的に、食っちゃ寝してるだけだし。どうやって四天王まで上り詰めたんだろうか。」

「最後の一人だが、スピーネル様という」

「……様付け、なんですね」

「ん、ああ。彼は、組織でも最古参の方だからな。私がここに来た頃には、既に四天王としての役割を下りたがっていたようだが」

四天王を？ そりゃもつたいねえ話だな。

「だから、私もスピーネル様については殆ど何も知らない。と言うより、彼を知っている者は数少ないだろう。確か、鳥型の怪人だとは聞いていたが」

ふうん。四天王か。良いなあ。

パワーのあるライオン型のグロシユラ。美を愛する蝶型のクンツアイト。最古参の鳥型怪人スピーネル。そんで、俺の上司のエスメラルダ様。六年目にして、ようやく四天王全員の名前を知る事になった。

「あのう、それで、四天王と俺が絡まれた事については……」

「派閥だよ。四天王は四人。組織は四つの派閥に分かれているんだ。目立った争いはないが、やはり、集団と言うものは分裂する生き物なのだよ。良く理解し、覚えておきたまえ」

なるほど。俺は俺の知らないところで四天王の派閥つてのに巻き込まれていたらしい。下っ端ん時はすげえ気楽だったんだなあ。うーん、数字付きになれて給料が増えたのは嬉しいけど、厄介な事も増えそうで、それだけは嫌だった。

翌日、俺はびくびくとしながら控え室に向かっていた。今は着替えてないから、俺が数字付きってのは誰も分からないだろうけど、

警戒するに越した事はない。

「よう」肩を叩かれる。それだけで心臓が口から飛び出しそうだった。

「……お、おお？ 何？」

「どしたん、何そんなびくついてたんだよ」

俺に声を掛けたのは、数字付きの同僚の男である。番号は、確か二番だったっけか。

「何でもねえよ。あ、今日って仕事あんのか？」

「ないっ。ウチはそれだけで金が入ってくる！」

言い切られる。はあ、今日はどうやって時間を潰そうかな。

二人して控え室に向かう。二番は気の良い奴で、俺とも歳が近かった。

「そっぴや知ってるか？ 裏切り者が出たらしいぜ」

心臓が止まるかと思った。

「へ、へえ、そうなのか」

「裏切りつてのも、いまいち分かんないけどな。何かやらかしたんだらうとは思っけど」

「例えば、何をやったんだらうな？」

探りを入れてみる。俺の事では、ない筈だ。けど、まだ心臓がバクバクしてやがる。落ち着け落ち着け。ポーカーフェイス青井！

「さあ？ ヒーローに情報流したとか、そんなんじゃねえのかな」

「けしからん奴もいたもんだ」

「しかも、グロシユラんとこの数字付きかららしいぜ」

「裏切った奴が、か？」

四天王の数字付きって言ったら、俺たちと同じ立場じゃねえか。

しかも、江戸さんからの話を聞く限り、グロシユラってのは部下に慕われてる豪快さんじゃなかったか？

「あくまで、らしいって奴だけ。もったいねえっちゃんもったいねえよなあ」

数字付きの裏切りか。何だか、自分の事みたいだった。

裏切り者、裏切り者。やけに心に突き刺さる。そいつが、何を思い、何をして裏切ったのかは知らないが、どうにも他人事には思えなかった。

まあ、とりあえず忘れよう。江戸さんの説教でも聞いて、心を無にしよう。

「青井です」ノックを三回。

「入りたまえ」

扉を開けると、黒くて大きなものが部屋にあった。と言うか、いる。背中をこつちに見せているそいつは、一体どこの何様だろう。邪魔だ、さっさと消えろよ。かと思えば、そいつは深く頭を下げる。そして気付いた。

「あ、あわ、なんで……？」

「こ、こいつ！ 昨日のゴリラじゃねえか！ どうしてこいつがここにっ、江戸さんの部屋にいるんだよ！？ まさかアレか俺を狙ってきたのか！？」

「ん、青井君、気にせずに座りたまえ」

「は、あの、けど……」ゴリラはずつと頭を下げている。昨日とはまるで別人だった。真摯な態度である。

けど、立ちっぱなしってのも疲れる。俺はパイプ椅子を掴み、ゴリラとはなるべく離れた場所に座った。そうして、江戸さんに小声で尋ねる。

「な、何が起こってるんですか？」

「人を貸してくれと頼まれている。不躰だとは思わないか？」

江戸さんは小声ではなく、普通に答えた。恐らくはゴリラにも聞こえるように、だろう。

「昨日は私の部下に何をしたかも忘れていらっしゃるらしいな。ふん、所詮はけだものの部隊か」

江戸さん、いつになく攻撃的である。ゴリラはと言うと、無言で

頭を下げたままだった。うーん、分からん。

「人を貸せって、どういう事なんですか？」

「……裏切り者が出たと言う話は知っているか？」

俺は頷く。江戸さんは冷蔵庫から二リットルサイズのペットボトルを持ち出して、紙コップに中身を注ぐ。麦茶だった。

「あ、い、いただきます。……えーと、それで、どうして？」

「裏切り者はグロシユラの部隊から出た。裏切ったのは、彼の下で働いていた数字付きなのだよ。そこで頭を下げている者は、裏切り者の始末を任せられたらしい」

「う、裏切りの、始末、ですか」

無性に喉が渴いて、俺は麦茶をおかわりする。

「裏切り者を連れ帰り、事情を聞くのか。それとも、見つけたその場で殺すのか。私には分からない。だが、グロシユラは部下に慕われる反面、ルールには厳しい。己を裏切った者を放っておく訳はないだろうな」

ゴリラはグロシユラの部下だ。裏切り者の始末を命令されるくらいだから、一定の信頼を勝ち得ているのだろう。だが、妙だ。どうして、ここに来る必要があるんだ？　ここは江戸さんの部屋で、彼はエスメラルド様の部下なんだぞ。頭を下げる理由がどこにあると
言うんだ。

「失敗したのだよ」江戸さんはつまらなさそうに言い捨てる。

「その彼は、裏切り者の始末に失敗したどころか、自分の数字付きを失ったのだ」

そうだ。怪人には数字付きの部隊を持つ権利がある。だけど、失っただつて？　一体、今、何が起こっているんだ。

「振り返ちにあった」ゴリラが死にそうな声で呟く。死ねば良かったのに。

「裏切り者を見つけたは良いが振り返ちに遭い、それだけでなく数字付きを失った。これでは、何を言われるか分からなくて、グロシユラにも報告出来ないのだろう。ふん、見上げた忠誠心だ」

江戸さん、本当にこのゴリラを嫌っているらしいな。

「そうして、一番与し易いと思ったエスメラルド様に、恥ずかしげもなく『数字付きを貸して欲しい』と言いにきたのだろう。……貴様、私に殺されてもおかしくはない身だと、理解しているのだろうか」

数字付きを貸せたと？ ざけんな、俺じゃねえか。しかも、裏切り者つてのは数字付きをボコボコにしたんだろ？ やだよ。やだよ。仕事でもねえのに危ない目には遭いたくねえよ。

「……せめて、エスメラルドに会わせてくれ」

ゴリラが言うと、江戸さんは立ち上がった。

「様を付ける、ゲスが。もう良い、目障りだ。グロシユラに殺されるのが嫌なら私が殺してやる。それも嫌なら、ここから立ち去れ。二度と、近づくな」

う、うわああ。やべえ、こええ。俺まで怒られてるような気分になってきた。もううぜええよおおおお、ゴリラさっさと消えてくれよおおおお。

しかし、俺の願い虚しく、荒々しいノックが三回。そして、扉が開く。またややこしくなってきたぞ。

「エドー、何かくれー」

エスメラルド様である。彼女は俺を見つけると、手を振って隣の椅子に腰を下ろした。

「おーアオイ、元気か？ 元気か？ こないだやった肉はちゃんと食べたか？」

「は、はい。おいしくいただきました」

「うん、お前は良い奴だ。ところで、そこでのかいのは誰だ？」

ゴリラは呆然としている。どうやら、エスメラルド様の正体つてのに気が付いたらしい。江戸さんは眉間に指を当てて、辛そうに座り直す。

「彼は、グロシユラの部下です。裏切り者を始末する為、エスメラルド様の数字付きを貸して欲しいと頭を下げているのです」

「裏切り者？ グロシユラんところから出ちゃったのか？」

「そのようです」

エスメラルド様は腕を組み、それから立ち上がる。部屋の中をうろつろとした後、ゴリラに指を突きつけた。

「そいつ、強いのか？」

「お、俺がですか」ゴリラは自分を指差す。

「違う。お前じゃない。裏切ったヤツだ。強いのか？」

ゴリラは答えない。いや、答えられないんだろう。彼に代わり、江戸さんが口を開いた。

「並の怪人よりは強いでしょうね」

江戸さんはゴリラを見ながら言う。

「じゃあダメだ」あっさりと、エスメラルド様は言い切った。

「私の部下は危ない目にあっちゃダメだからな！」

上司が優しいのは部下にとつちや最高の幸せである。そこに違いない。うん、一生ついていきます！

「だけど裏切り者は許せない」あれー？

「私の数字付き、全員は貸さないぞ。でも、半分なら良い」

「エスメラルド様っ、しかし……！」

エスメラルド様は江戸さんを指差す。

「私が貸すと言っているんだぞ、エド」

強く見据えつけられて、江戸さんは何も言えなくなってしまった。このままでは、俺は二分の一の確率で恐ろしい裏切り者と戦わされるはめになるかもしれん。

「おいゴリラっ、私の部下を傷つけたら許さないぞ。良いなっ？」

「あっ、ありがとうございます！ ……それで、誰を連れて行けば？」

「あー、後で言う。けど、うーん、アオイは行くよな？」

は？

「え、えっ？」

「私はお前に期待している！ がんばって欲しい！」

嘘
だ
ろ
ー
。

あは、動かなくなっちゃった

『あの怪人には悪いが、グロシユラには裏から手を回しておく。つまり、恩が売れる、貸しを作れるという事だ』

『アオイー、危なくなったら逃げてもいいからなー？』

うーん、やはり、数字付きになっても戦闘員である事に変わりはない。上司やら、良く分からないところの陰謀に巻き込まれるのは仕方がないのだろう。

ワゴンの中は無言だった。俺たち数字付きの内、七名はゴリラ怪人と共に裏切り者が目撃された場所へと向かっている。ゴリラは一番後ろの席で、じっと窓を見つめていた。気色悪い。

「……なあ、おい十三番」

「ん？」

数字付きは仕事中、お互いを番号で呼び合う事となっている。

「なあ、なあ、マジかよ？」

言いたい事は分かる。俺だって、あの場に居合わせなければ言いたい事だって山ほどあつたらう。

「ああ、マジだよ。俺たちや、野郎の指示に従って、裏切り者と捕まえなきゃなんねえの」

「マージーカー」六番はうな垂れる。俺だって、そうしたかった。と言っかしている。

裏切り者が目撃されたのは、港の倉庫らしい。どうやら、テントなんか張っちゃってそこで過ごしているらしかった。さっさと街か

ら出て行けばいいものを。

港の近くでワゴンは停まり、とりあえず、全員が外に出てゴリラの指示を待つ。

「すまん」

何を言うのかと思えば、ゴリラはいきなり謝りやがった。

「え、あ、何？」

俺たち数字付きは顔を見合わせる。なるほど、ゴリラめ。江戸さんにたつぷり絞られたからか、やけに丸くなって見えるぜ。ちょうど良いや、いろいろと話を聞き出しておこう。冷静に考えりゃ、俺らは裏切り者について何も知らないんだ。

「追い掛ける奴って、一体、何をやらかしたんですか？」

「どうしても聞きたいのか？」

何も知らないままやれるかよ。

「……裏切り者は、レン、と呼ばれている者だ。グロシユラ様に拾われて、数字付きとして働いていた」

ゴリラは言い難そうだった。裏切り者について喋る事は、自分の上司の恥を曝け出している事なのだと思うのだろう。

「いずれは怪人になる逸材だった。だが、レンには問題があつてな。何と言えば良いのか、ああ、抑えがきかない性格だった」

「分かりやすく言ってもらえませんか？」

十二番が余計な事を言う。やめろ、それ聞いたら多分、やる気なくなるぞ。

「やり過ぎるタチでな。……レンは、自分以外の数字付きを皆殺しにしたんだ」

「はあああああつ！？ マジかよ、やべえじゃん！」

「変だと思っただんだよー、急に仕事なんか入るからさー」

江戸さんがいないと、まあ、俺たち数字付きもこんなものである。

………つて、え？ ミナゴロシ？ 嘘？ だつて、ちよつとボ

コられちゃつて、てへ。つてくらいの話じゃなかったのかよ。おいおいマジかよぶざけんよ。

「殺す気か!？」

「死ぬゴリラっ」とりあえず叫ぶ俺。

「帰るぞっ、やってられっか!」

ゴリラは非難轟々だったが、言い訳せずに、ただ黙って俺たちの声を受け止めていた。

「何故、裏切ったのか、俺には分からん。しかし、奴が仲間に手を掛けたのも事実。どのような理由があつたにせよ、処分を下す必要がある」

「一人でやってろ!」

「ヒーローならともかく、どうして同じ怪人に殺されなきゃいけないんだ!」

「死ぬゴリラっ」言っとけ言っとけ。

「殺される!」

我慢出来なくなつたのか、ゴリラは地面をぶん殴る。怪人のスーツを着ているのだから、普通に砕けた。破片が舞い、俺の耳は衝撃音できーんとなった。

「お前らの気持ちも分かる。だから、前に出なくても良い。いや、決して出るな。レンの気を引くな。ただ、見ていてくれれば良い。最初から俺はそのつもりだった」

あ? どういう事だ? だったら俺らなんか呼ばず、最初から一人でやってりゃ良かったじゃねえか。

「何が起こつたとしても、お前らは包み隠さずグロシユラ様に報告して欲しい。俺の口からは、もう、報告出来んからな」

「ま、まあ、そういう事だったら、なあ?」

「最初から言つといて欲しいよなあ」

良く分からんが、証人が欲しかったって事なのだろうか。……何だか、やっぱり分かんねえなあ。

危ない目に遭わずに済むと分かれば話も違ってくる。俺たちエス

メラルド数字付き部隊は、意気揚々と先を進む。無論、裏切り者が奇襲を仕掛けてくるのは怖かったので、先頭はゴリラが歩いていて後ろの方を歩いている奴らはびくびくしながら周囲を見回している……想像していたのよりもとんでもない事に巻き込まれてしまった。裏切り者はゴリラが仕留めるとか言ってたが、それが出来るんなら前回やつてる筈だろう。こっちに火の粉が掛かる可能性は、ゼロじゃない。むしろ百パーセントだろ。俺たちよりも強いであろうゴリラがやられた瞬間、俺たちの全滅は確定するようなもんだ。逃げちまうか、やっぱり。

「止まれ」ゴリラが指図する。うるせえぞ。

が、誰かが息を呑む音が聞こえる。前の方に視線を遣ると、誰かが倒れているのが見えた。薄暗がりだが、見間違える筈はない。

「何か寝てんぞ」

寝てるんじゃない。誰だ？ 誰が倒れている。どうして、こんなところで、血を流して倒れているんだ。いや、目え背けるな。倒れてんじゃねえ。こいつはもう、とっくに。

「やばくねえ？」

「これ、ヒーローだよな。何で死んでんの？」

「まさか……」

全員がゴリラを睨む。責任転嫁しなきゃやってらんないのだ。

ゴリラはヒーローの死体を調べているようだった。……若い男だな。良く見えないが、イニシャルが胸に入ってるようなスーツを着てる。青、一色だ。マントをしていたようだが、びりびりに破かれている。

「見た事ねえ奴だな」

「うーん？」

「そこまでだっ！」

あ？

「うっ、上だ！ 上にいるぞー！」

倉庫の屋根の上、そっちに目を向けると、人影が二つ見えた。こ

っ、こいつらが裏切り者なのか？

とりゃあ、だの、うりゃあ、だのという叫び声を放った後、影が地面に舞い降りる。この身のこなし、間違いなくスーツを着ている。そして、裏切り者ではなさそうだ。組織から逃げてるような奴が、わざわざ突っ掛かってはこないだろう。タイミング悪く、この場に出くわしたヒーローだな、こいつらは。数字付きはゴリラを守るようにして配置についた。悲しい習性である。同時、誇らしいとも思えた。口ではどうのこうの言っときながら、やる時ややるのだ。

降り立った影は二つ。どちらも似たようなスーツを着ていた。青、一色の。それで赤いマント。シンプルなヒーローである。マスクも、顔の上半分が隠れるようなタイプのものだ。……死んでたヒーローの仲間か？

「お前たちが弟を殺したのか!？」

ゴリラが指を差される。差してんのは、スーツの胸元に大きく『M』と書かれたヒーローである。隣の奴は『L』だった。

「よくもやってくれたなっ、我らは夜釣りを楽しもうと思っていただけなのに!」

「貴様ら悪党どもはっ、いつもそうだ!」

「厄介だな」ゴリラは腕を組み、ヒーローたちを見据える。

確かに厄介だ。俺たちは裏切り者を追っている。だが、どうやらこのヒーローどもは俺たちを狙っている。こいつらの対処に時間を掛ければ、裏切り者はどこかへ行ってしまいかもしれない。

「十三番」

「おう」声を掛けられたが、そつちには目を向けない。MマンとLマンを睨んだまま、同僚に答える。

「二手に分かれよう。ヒーローを足止めすんのと、裏切り者を探すのに分かれるんだ」

それが良い。うん、それが良いってのには気付いている。しかし、誰が、どっちの相手をするんだ？

「俺はこいつらを止めるっ」何？

哄笑が響き渡る。それだけで全てを理解した。テントん中から這い出てきたのは、小さな男？ いや、っつーか、ただのガキだった。まさか、こいつが組織の裏切り者なのか？

「……こいつが、レン？」

「ああ「マジかよ。」

「何、そつちのは？」

ちっちなあ、まだ小学生だろ。アシンメトリーとでも言うのだろうか、レンの右目は伸ばした金髪（染めたにはあまりにも綺麗だった）で隠れている。俺は残った方の目で睨まれた。が、あんまり怖くない。タンクトップと短パンから出ている四肢も、未発達である。本当に、こんなガキが数字付きを殺したのか。と言うか、こいつ自身が数字付きだったのか？

「十三番……いや、青井とか言ったか。すまんが、後は任せる」

「はっ？ お、おいあんた！」

ゴリラは姿勢を低くして地を蹴った。その時の衝撃で、地面が碎ける。……本気じゃねえか。本気で、あんなガキと戦うつもりなのかよ。俺にはまだ分からない。何も信じられない。

「ようこそお兄ちゃん！ 僕がちゃんと壊してあげるからっ」

ガキはテントを蹴り上げる。中からは、そいつの得物らしきもんが見えた。

それは、刃物である。遠目なのではつきりとしなが、片手持ちで、刀身は厚い。刃渡りは五十センチといったところだろう。ナイフっつーか、ありや……鉈か？ えげつねえもん持ってやがる。

「おおおおおおおおおっ！」

「あはははっ、怒ってる怒ってる！」

ガキが鉈を振り回す。ゴリラは、意外にもクレバーだった。ガードを上げて、相手の隙を見つけて拳を繰り出している。思っていたよりも、強い怪人だったんだな、あいつ。

だけど、ゴリラの攻撃は当たらない。あのガキ、確かに数字付きだ。いや、っつーか、並の怪人よりも強い。まず、素早い。ゴリラの

パンチは決して遅くない。巨体から放たれる攻撃にしては、実的に確だ。けど、避けられる。

「こっちこっちい」

何よりも、ガキはまだ攻撃をしていないのだ。ただ、ゴリラの攻撃を避け続けている。まるで戦いを楽しんでいるようだった。月光を浴び、鈍く煌めく鈍。アレで、さっきのヒーローも、組織の仲間も殺したってのか。

「レンっ、グロシユラ様に拾われた恩を忘れたか!？」

「うるさいなあ。ほら、そんなんじゃ僕には勝てないよー」

ガキはゴリラから距離を取り、鈍をくるくると回して弄ぶ。

「分かってるんじゃないの、お兄ちゃんも」

ゴリラは善戦しているように見える。だけど、疲労しているのはゴリラだけだ。ガキの方は息一つ乱しじゃない。ああ、そして楽しそうに笑うんだ。笑って、笑って、一頻り笑ってから、野郎は

「あは、動かなくなっちゃった」

何度も、何度も、何度も。

「僕を壊すって言うてくれたのに」

ゴリラはもう動かない。鈍で胸を割られて、倒れて、それでも尚、ガキに、攻撃を……。

馬乗りになつたガキはくすくすと笑う。血を浴びた横顔は、子供とは思えなかった。アレが、本性なのか。いや、そもそも、最初から隠してなどいなかった。

きっと、ゴリラは分かっていたのだろう、自分の最期を。この結末を予想し、覚悟していたに違いない。だからこそ、これ以上迷惑を掛けたくなくて、グロシユラには頼まず、無関係の俺たちに頭を下げたのだ。

俺は動けない。逃げたくても、少しでも気取られれば、次は、俺

が、ああなる。死ぬ。殺される。怪人ですらああなるのだから、戦闘員程度のスーツしか着ていない俺なら、ああああああ、俺なら……ね、そっちのお兄さんはどうする？」

声が出なかった。じつと見つめられ、微笑まれて、俺は、立ち尽くすしか出来ない。

ここで、死ぬのか？

嘘だろ。俺は、六年も戦闘員やってきたんだ。出世だってしたし、ヒーローの派遣会社にだって……だから、やめろ。頼むから、殺さないでくれ。

「ふーん」ガキ、いや、レンはゴリラから退くと、鉈を握り締めたままこっちに向かってくる。動けないままで、俺は彼の動きを見ていた。

「弱そ。あは、助けてあげるよ。じゃね」

レンは、ゆっくりと歩き去っていく。もう、振り返る事はなかった。組織ではどんな関係だったか知らない。けど、兄と呼んだゴリラを殺したのに、もう、完全に興味を失っている。おもちゃを壊してしまったかのような気軽さで。

「……そうか。後の事はグロシユラがやるだろう。ご苦労だった、君たち。今日はもうゆっくり休みたまえ。ああ、いや、明日は休みにしよう。エスメラルド様も気にしておられたしな」

ヒーローを足止めしていた数字付きは全員無事だった。ただ、あのヒーロー二人は、ゴリラを殺した後のレンに殺されてしまったらしい。俺たちは、本当に見ている事しか出来なかった。生きているのも、不思議なくらいだ。実感出来なくて、足元が定まらず、妙にふわふわとしている。こんな経験、今までになかった。

どうしてだろう。

今までにだって、やばいと思った事はあった。ヒーローに追い詰められた事もある。だけど、あの、レンって奴は違う。あいつは、

ヒーローじゃない。俺たちにとって分かりやすい敵じゃあない。むしろ、味方の筈である。そんな奴に、どうして殺されそうにならなきゃいけないんだ？ ゴリラは、どうして殺されちゃったんだ。…理由なんかない。レンは、あのガキは、自分の楽しみだけでゴリラを殺したんだ。いや、殺したなんて風に捉えちゃいけないんだ。

おもちゃを、壊した。

それくらいにしか、捉えていないんだろう。

「青井君？ どうした、まさか、怪我でもしているのか？」

「いえ、大丈夫です。問題、ありません」

俺は偉くなつた。ただの下っ端から、四天王の数字付きになれた。だけど、その分、余計なものまで背負っちゃまうんじゃないのか？俺は、それが嫌だった。

てめえの命はそんなに安いのか

江戸さんから気を遣われてもらった休みではあったが、俺は布団から抜け出せないでいた。と言うか、殆ど眠れていない。どうしても、昨夜の事が頭から離れない。ゴリラの死に様が、レンの血に染まった横顔が、焼きついて、離れない。目を瞑ると怖くて、もしも、あいつが俺の部屋にいたらと思うと、もう駄目だった。

今、何時だろ。もう嫌だな。明日なんか来なきや良いのに。とりあえず携帯電話に手を伸ばす。瞬間、鳴った。死ぬかと思った。誰からだろうと、ビビりながら確認してみると、社長からだ。あのアマはこういう時に空気読まない。メールは、いつも通り簡潔なものである。『仕事。水族館前に十時集合』との事だ。内容については一切触れていない。俺を仕事が断れない立場に追い込んでいるからだ。何をさせても良いと思つてやがる。鬼か。悪魔か。何が正義か。

だが、良いかもしれない。働いてたら、色々忘れられる。少なくとも、体を動かしている間は。こうして鬱々としているよりは、金も稼げるし生産的で健康的だろう。今日は晴れ。絶好の行楽日和。どこかで遊べる訳じゃないけど、うん、外には出よう。俺は布団を跳ね除けて、身支度を始めた。

社長に指定された水族館は、この街で唯一のそれである。電車に乗って数十分、最寄り駅から歩いて五分、街の郊外に位置していた。そこまで大きくはない。むしろ、日本でも小さい方だろう。さてさて、交通費は出してくれるんだろうな。

さて、水族館前といっても、一体奴らはどこにいるんだろう。視

線を忙しなく動かしていると、入り口近くの広場で、売店の開店準備が始められていた。シロクマだのペンギンだの、様々な動物のぬいぐるみなんかが目立つ。しかし、確か、この水族館にはペンギンなんかいなかったような……ちよつとした詐欺である。

と、売店の売り子がこつちを見て手招きしていた。あの車椅子、社長か。なるほど、今日の仕事は水族館の売り子って訳ね。やつぱヒーロー関係ねえ仕事じゃん。

「おーす」

「社長にはちゃんと挨拶しなさい。あなた、自分が社員だって立場を分かっているんでしょね？」

「分かっているって。で、今日は何か、ここの店員をやれって事が」

「物分りが早くて助かるわ。九重」

「はい」と、売店の裏から声が聞こえてくる。

九重も、売店手伝ってくれるのか。運転手だつてのに、悪いな。

しかし、顔を見せた九重の表情は俺の予想に反して明るいものを感じられた。彼は両手いっぱいぬいぐるみを抱えている。帽子はいつものドライバーのじゃあない。フグみたいな、不細工な魚の帽子を被っている。恐らくはこの商品だろう。

「……何か、楽しそうだな」

「そうですね」素っ気なく言うが、九重の口元は緩んでいる。まあ、いつもいつも車運転して、俺の素晴らしい仕事振りを見ているだけだから、こういうのも良いんじゃないかな。うん。

「さて、じゃ着替えてきなさい。小さな水族館とはいえ、今日はお客も多いでしょうし」

「今日って、平日だろ？」

平日の昼間つから水族館に行く奴なんかいるのかよ。

「何でも、珍しい魚が入ったらしいわよ」その言い方だと魚屋っぽく聞こえるが。

「開館は何時だ？」

「もうすぐよ。だから、あなたも今の内に着替えてらっしゃい」

着替える？

「馬鹿ね。水族館なんだからマスコットもいるに決まっているじゃない。そういうのは、あなたの仕事でしょう？」

「ちよつと待てや。どうして俺の役目になるんだよ？ 九重が着れば良いじゃねえか」

「九重は、マスコットになつてるあなたが見たいの。さ、四の五の言わないで。給料下げるわよ」

きたねえ！ 九重つ、お前もキラキラした目でこつち見んじゃねえよ！

どうも、マスコットのペン太君です。ペンギンの着ぐるみです。

「あら、やっぱり似合うわね」

ふざけんな、こんな誰が入つたつて同じじゃねえか。あ、皮肉か。皮肉なのかコラ。

「しかし、この着ぐるみ妙にリアルだな。デフォルメしようと言う意思が一切感じられん」ただのでかいペンギンである。オセロツト君のがまだ可愛げがあつたぞ。

「ガキが引いちまうんじゃねえのか？」

「さあ、どうでも良いわよそんなの」

お前だつて今は水族館に雇われてる身いだらうが。

やっぱり、正解だつた。働いている内は気分も楽になる。と言うか、余計な事を考えなくても済むのだ。ペン太君の人気は、意外にも上々であつた。デパートん時とは違い、水族館に来るガキはそこそこ大人しかつたのである。あくまでそこそこな。けど、こつちも色々と動きを工夫したり、休憩時間には売店にあつたペンギンのDVDを九重と二人で見たりして研究を重ねた。ただし、マスコットの人気とは関係なく、売店に金を落とす者は殆どいなかった。社長

は舌打ちばかりしていた。金の亡者め。

そうして、いつの間にか、閉館時間も迫ってきていた。

「全然、駄目ね。はあ、歩合制だったのに」

「おいそういうのは先に言えよ！ タダ働きとか嫌だからな！」

「あ、あの、まだお客さんがいるから……」

俺はじたばたする。九重に止められて、俺は息を吐いた。

水族館の出入り口を見ると、結構な数の客が帰ろうとしている。

話は、あの客がはけてからだな。しかし、畜生、歩合制だと？ どうすんだよ、もう。

だけど休んではいられない。最後に残った力を振り絞り、少しでも売店の土産物に気を引かせる。ほらっ、こつちだぞガキども。何かペンギンがちよろちよろしてるだろ、お母さんに言え！ ペンギンを近くで見たいと！ そんなでぬいぐるみとか欲しがれ！ そうだ、そうだよな！ そもそも、水族館の行きしなに土産買う奴がどこにいんだよ。荷物になるから、普通は帰りに買っていくんだ。俺はペーイス配分をミスってしまったらしい。今なんだ。今、俺は最高のパフォーマンスを見せるべきだったんだ！

「俺を見るおおおおおおっ！」
「頑張ってみる。」

「うああああああっ、ペンギンが逆立ちしてるよおかあさん！

おかあさん！」

「すげーっ、あっちいこうぜ！」

どうだっ、俺を見る！

「……マスコットが口を利用してどうするのよ」

人込みに目を向ける。その時、

「あ、ペンギンがねちゃった！」

俺は、信じられないものを見てしまった。

「青井？ どうしたの、ほら、もう一息よ。休憩、終わりっ」

いた。見た。

レンだ。

見間違えじゃない。野郎、こんなところに来てやがった。いや、けど、ああしてりゃあただのガキにしか見えねえ。楽しそうに笑ってやがる。あいつは昨日、ゴリラを、ヒーローを殺したつてのに……！

このままじゃまずい。あいつ、何をしでかすか分からないぞ。こんな人込みで、もしも昨日みたいな事になれば。やばい。死人が出る。それどころか、ウチの奴らも危ない。社長も、九重も、狙われないって道理はねえ。あのクソガキは理由もなく、誰かを殺せるんだ。一秒でも早く、ここから逃げないと。

「社長、仕事、切り上げよう」

「……書き入れ時よ？ 分かって言っているの？」

金よりも命のが大事だろう！ けど、ああっ、どう説明すりゃあ良い！？ レンを知ってるのは俺だけだ。どうして奴を知っているのか、問い質されても返せない。悪の組織にいるなんて、信じてくれる筈もないし、信じられれば、俺はもうここで働けない。第一、社長たちを死なせるのはきつ過ぎる。こいつらは一般人なんだ。ヒーローでもない。怪人でもない。あのガキに、殺されても良い訳がない。

「頼むからっ」

「駄目よ」うう、聞いてくれない。……いや、でも、ここで下手に騒ぐよりも、レンがどこかへ行くのを期待する方が良いのか？ そもそも、あいつが何かやらかすつもりなら、とっくにここは血の海だ。少なくとも、今は水族館を楽しんでいるガキにしか見えない。

見、だな。やり過ぎそう。

「あ、いらっしやいませ」

「いらっしやい。好きなものを買っていきなさい」

……………最悪だ。

「あは、すごい。いっぱいあるね」
来ちまったよ。

レンは昨夜と殆ど変わらない格好だった。返り血を浴びた服と、

似たようなタンクトップと短パンである。野郎は売店の中を興味深そうに見回していた。たっ、頼むお願い早く帰って！

「ゆっくり見て行って良いからね」おい九重、てめえ。

九重の言葉に従うかのように、レンは一つ一つ、丁寧に商品を見て回っていく。手に取り、ぬいぐるみを顔に押し付けてみたり。だけど、いつ、爆発するか分からない。破裂寸前の風船を前にしているような……とにかく、頼むから……！

「これはどうかしら」さりげなく、社長は一番高いぬいぐるみを勧めていた。

「……うーん、僕、これが良いかな」

レンが気に入ったのは、小さなイルカのぬいぐるみである。もう、それタダでやるから。ああっもう、九重め、レジをもたついてんじやねえぞ。早く袋入れて、そう、そうそう、早く帰せそんな恐ろしいガキは。

「……ありがとうね」

「うん、ありがとう」レンはぬいぐるみの入った袋を抱える。うん、まあ、どうにかなるか。スイッチさえ入らなけりゃ、普通のガキだ。問題は、スイッチがいつ入るか、なんだけど。

「見つけたぞっ！」

最悪だ。

「あら、お客かしら？」

いや、多分、違う。見覚えがある。レンを指差しているのは、青いスーツに、赤いマントの男である。そいつの胸元には『XL』と刻まれていた。こいつは、ヒーローだ。

「弟たちの仇っ、悪魔めっ、鬼の子め！」

ポーズを決めるXLマン。……ややこしい時に出てきやがって。敵討ちだか何だか知らねえが、他所でやれってんだよ。

「社長、逃げよう」

「どうして？ …… 良く分からないけど、あの人はヒーローよね？
どうして、この子が狙われてるのかしら」

言ってる場合かよ！

「九重つ、店仕舞いだ！」

「え、え？」

ああもうつつ！ そんなに死にたいのかよ！？ 嫌だつ、嫌だ嫌だ

嫌だ死んでも嫌だ死にたくねえ！ 俺はまだ死にたくないんだよ！

「貴様が面白半分にしたのは、俺の家族だ。その罪、償う覚悟は

……」

「あはは、つて言うかおじさん、誰？」

「…… 因果応報つ」×Lマンが高く、跳躍する。うお、嘘だろ、水族館の屋根まで届きそうだ。野郎、良いスーツ着てんな、マジに。

あ、じゃなくて、レンは？

レンは、既に臨戦態勢だった。ぬいぐるみの入った袋を地面に置き、最初から持っていた手提げから、己の得物を取り出す。それは、昨夜も見た、鉈だ。それで、あいつは、ゴリラを、ヒーローを殺した。

「あはつ、すごい飛ぶじゃん！」

嬉しそうに、レンは笑い飛ばす。

「社長っ！」

「分かっているわ」

既に店を置く準備は出来ている。つーか、もうギャラなんかいらねえ！ こっから逃げようっての！

「行きなさい、青井」

「…………… うん？」

「好機よ。あのヒーロー、子供を狙うなんて大した正義じゃないの。気に入らないわ、やってしまいなさい」

いやいやいやいや！ あいつらの話聞いてたか？ レンがつ、あ

っちのヒーローの兄弟を殺したんだって！

「どうして俺があのがキをつ！ やばいのがどっちなんて見りゃ

分かるだろ!？」

「分からないわ。どんな理由があるにせよ、子供に手を出す者を見
過ごせないもの」

「分ならず屋が。九重、こいつを連れてけ。……何してんだよお前
?」

九重はじつと、一点を見つめていた。Xレマンが降下してくる。
いや、攻撃だ。両足を突き出すようにして、レンを狙っている。だ
けど、大雑把な蹴りが当たる筈もない。

「詫びる!」

Xレマンの足はアスファルトを砕く。レンは、彼の背後に回って
いた。

「あはははははははっ!」

あ。

躊躇なく、振り下ろす。

レンの鉈は、ヒーローの頭部に直撃していた。スーツをしていて
も関係ない。ざっくりと、突き刺さっている。

「あは、あははっ。やっぱり魚よりも面白い。僕はっ、こっちのが
面白い!」

そうして、動かなくなった男を蹴飛ばして、馬乗りになって、鉈
を振る。何度も、何度も。

狂気が、こっちにまで伝わってきた。駄目だ。もう、逃げられな
い。

「……何、あの子」今更気付いたってもう遅い。俺たちは、レンの
狩場中にいる。だから、言っただろうが。馬鹿が。

「あのままにしておけないわ」

「何、言っただお前?」

社長は決して目を逸らさない。レンの行為を、しっかりと見続け
ている。

「分かってる。分かってるわ。だけど、他のヒーローが来るまで…
…」

「持ちこたえろつてののか？ お前、本気でイカれてんのか？」

誰がやると思ってたんだ。お前じゃない。お前は、指図するだけだろっが！

「だってこのままじゃ……」

「ああ助からねえよ。ガタガタ抜かして、こっちのいう事に耳い貸さねえからだろ」

いや、今はこいつを責めたって仕方ない。

「逃げるぞ。とりあえず、水族館へ……」

言い掛けた俺は口をつぐむ。レンが、こっちを見ていた。それだけで、足が動かなくなる。

「う、あ……」

「青井っ」

やめる。見るな。こっちを、俺を見るな。やめてくれ。頼むからっ、お願いだから！

「うああああああああああああっ！」

レンが立ち上がり、鉈を構えて、くっ、来るな！

「ペンギンが叫んでるっ、すごいやー！」

鉈が、俺の前方のアスファルトを砕いた。

「あは、びつくりした？」

背中を向けて、逃げ出す。どこまで逃げれば助かるのか、そんなもん知らない。けど、もうこれ以上ここにはいられない。後の事なんか、他の奴なんか知らねえ。俺が、俺さえ、俺だけでも！ 死にたくない。死にたくないっ死にたくないか……！

「あれー？ 逃げるの？ じゃあ良いや。ねえねえ、さっきはぬいぐるみありがとね」

「え？」 間の抜けた、九重の声。

振り向けば、レンが、九重のすぐ近くにまで迫っている。彼の右手には鉈が。左手には、イルカのぬいぐるみが。

「いつ、いや……！」

尻餅をついた九重は売店の奥へと逃げる。レンは、楽しそうに彼

を追いかけた。まるで、鬼ごっこでもしているかのような気安さで。
ああ、あいつ、死んじゃうぞ。

何をやってんだ。何をやってんだお前ら。どうして俺の言う事を聞かなかった。どうして逃げようとしなかった。だから間抜けでだから死ぬ。

社長はその場から動かない。じつと……さっきから、ずっと、俺を、見ている。やめろ。見るな。俺を見るな。俺を頼るな。俺を、殺そうとするな。

「くっ、くそっ、くそがつ、くそがつ」

言えよ。もう言えよ。助けろって喚けよ、死にたくないって泣いてみるよ。そうすりゃレンだって気まぐれ起こして助かるかもしれないってのに。……だから、言えよ間抜け！ そんなに死にたいのかよ。

「あ、ち、ちくしょうちくしょう！ てっ、てめえの命はそんなに安いのかっ」

足が震える。声が震える。

違うだろうが。絶対、違う。お前らはヒーローでもヒールでもない。ただの、人なんだ。だからもつと見苦しくても良い。潔い真似すんなよ。俺とは違うだろ。

いや、きつと、そうに違いないんだ。

「おおおおおっ、俺を見るおおおおおおおっ！」

震える手で、着ぐるみの頭を外す。レンに当たらなくても良い。こっちに気付きさえすればっ、俺を見さえすれば、それで良い！

走りながらペンギンの頭を投げる。レンの気が逸れて、俺は死ぬのを覚悟して、飛び込んだ。鉈が胸を掠める。素材が分厚かった為か、俺には届かなかった。

「何だよそれっ？」

レンの体を押し倒す。その衝撃で売店の商品が棚から落ちる。ぬいぐるみやキーホルダーが降ってくる。必死で九重の名前を叫んだ。レンが鉈を振る。だけど、外れた。奴の得物は俺の投げたペンギン

の頭に刺さっている。

「ごめんなさい」誰かが謝った。けど、気にしてられるか。とにかく手当たり次第に物を投げつける。俺の後ろに九重が回って、チャックを外してくれた。そうだ。こんな邪魔なもん、いつまでも着ていられるか。

「あはははすごいつ、何それ、何それ!？」

レンが売店から抜け出る。俺はそれを追い掛けた。走りながら、ポケットに差し込んでおいたグローブをはめて、野郎の顔面に狙いをつける。

「すつご……!」

アスファルトが砕けて、俺の頬を破片が切りつけた。

あなたはヒーローなのよ？

「あはっ、嘘でしょお兄さん。スーツもなしで、そんな事っ」

「てめえだっけ着てねえだろうが！」

「僕はね！」

レンが後ろに飛び退く。俺にビビった訳じゃない。時間を掛けて遊ぶ為だろう。ああっ、くそ、息が。しんどい。呼吸が……。

「あ、青井さん……」

申し訳なさそうな表情をした九重と目が合う。社長も、無事か。

とにかく、良かった。くそ面白くもねえけどよ。尻拭いはもうこめんだ。

「どっか行ってる」

俺一人だったら、逃げるくらい、どうにかなるかもしれない。けど、あいつらが邪魔だ。足手まといにしかない。俺とレンとじゃ戦いには、ならないだろう。怪人とヒーローを瞬殺しちまうようなバケモンが相手なんだ。あいつが俺に飽きたら、それで終わり。

「びっくりしちゃった。それすごい。グローブ？」

「うるせえ」

「スーツも持ってるんでしょ？ ヒーローなんだもんね？」

「うるせえっ」

踏み込もうとするが、鉈が俺の動きを止める。間近で見るとえげつねえ事この上ない。まともに受けりゃ肉だけじゃ済まない。骨を抉って、中身にまで達するだろう。レンはこれ見よがしに鉈を構えて、適当に振るった。舐められている。だけど、そのお陰で助かっている。

そして、爺さんからもらったグローブを持ってきていて助かった。こいつがなけりゃ、俺はとっくに死んでいただろう。対抗手段は、

これだけだ。殴って当てる。そうすりゃ倒せる。だけど、どうやって当てるんだ？

「スーツ着なよ。待つてたげる。そっちのが面白そうだし」

親しげに微笑まれる。その笑顔は、あまりにも無邪気で、俺の心をかき乱した。どうして、そんな顔が出来るんだ。ゴリラと戦っている時もそうだった。ヒーローと戦った時も、数字付きを殺した時も、こいつはこんな顔をしていたに違いない。そう思うと、無性に腹が立つ。こんな奴に殺されるのかよ、俺は。

「あは、本気出さなくても僕と遊べるって事？　すごいね、お兄さん」

レンはその場で飛び跳ねる。ステップを踏んでるにしちゃ、随分と高く跳ねやがる。ああ、楽しいのか。体を動かすのが、人と戦うのが、そんなに、そんなに……！

「楽しいかよっ」

まだ、舐めてくれている。スーツがなくて良かったと思うべきか。半端な装備で立ち向かっても瞬殺されるだけ。だったら、生身の方がマシって事かよ！　貧乏万歳！

拳を振るう。勿論、避けられる。空を切った俺の右腕。そこを鉗が襲い掛かる。慌てて姿勢を低くし、そのまま駆け抜けた。

「鬼ごっこ？　やるうー！」

一人でやってろ！

終始、圧倒されていた。当たり前だ。ヒーローですら、怪人でさえも触れられない奴が相手なんだ。俺なんか立ち向かって良いもんじゃない。最初から、俺の勝ちはなかった。最初から、決められていたんだ。

なのに、あいつらはまだここにいる。

俺の攻撃は一発だつて当たらない。追い掛け回され、ふらふらと逃げ回られて、無駄に体力を消耗し、今は片膝ついて肩で息してる。

なのに、あいつらはまだここにいる。

「……逃げろってんだろが」

社長を睨みつけた。彼女は、涼しげに俺の視線を受け流す。

「逃げろって、言ってるんだろが！」

叫べば、九重は肩を震わせる。なのに、絶対に動こうとしない。じつと、ずっと、俺の無様な姿を見つめている。はつきり言っただけで愉快だった。そして、不可思議だった。全く理解出来ない。俺は、こいつらを見捨てて逃げようとしたってのに。他人の命食い潰しても、生きていたいと思っただけなのに。

レンは退屈そうだった。大口を開けてあくびをしている。夕陽に照らされた野郎の顔は、実に良く似合っている。何よりも、彼には鮮やかな赤が似合うのだろう。いつか月夜に浴びた真っ赤な血潮が、俺の脳裏を過ぎった。

「ね、お兄さん。もう良いよ。スーツ着てよ。僕、飽きちゃった」
死刑宣告にも等しかった。

俺はスーツなんか持っていない。もう、これ以上の武器はないんだ。だけと言えない。言ったら、本当に最期だ。

それでも、こっちから手は出せない。……ヒーローはまだか？
どうして誰も来ないんだ。お前らの大好きな獲物がいるってのによう。

「疲れちゃった」あ？

レンの姿が消える。そう思った次の瞬間、俺は強い衝撃を受けて、地面に倒されていた。

「もういいや。後で遊んであげるよ」

あ？ 何が起こった？ 俺はどうなった？ 生きてるのか？ 死んでるのか？

足音が聞こえる。やけに軽い音だった。ただ、殴られたただけだと気付いた俺は上半身を起こす。俺への興味を失ったレンは、社長たちを向けていた。

やめろ。

見るな。

そつちを、見るな。

「あーム力つく」

鉦を弄ぶ。

ぎらりと、鈍く光る。

「や、め……」声が出なかった。俺は、今更になって恐怖を感じているらしい。

「お兄さんが悪いよ。スーツ着ないから」

そうして、レンは駆けた。向かう先は、車椅子の少女。俺の上司。性格の悪い、鬼のような……。

白鳥澪子は動かなかった。矢のように飛んでくる殺意を前に、動けなかったのかもしれない。九重は腰を抜かしてその場にへたり込んでいた。

呆気なかった。社長の眼前に入ったレンは鉦を振り上げる。

「……………」

しかし、いつになっても、レンが得物を振り下ろす事はなかった。彼は、信じられないといった表情で社長を見ている。そりゃ、そうだろう。俺だって同じ気持ちだ。彼女は、レンを見ていない。目の前にある狂気を、脅威を、凶器を、殺意を、一切合財を無視している。

「あ、は。あはっ、あはははっ！ 何それ？ すごい、なんで？

ね、どうして？」

レンは鉦を下ろし、けたけたと笑った。

「あなた」社長の声は小さい。だが、震えてはいなかった。

「何を怯えているの？」

社長は、俺を見ている。だけど、彼女の言葉は俺に向けられたものではない。レンに放たれた、刃だ。

全く。全くもって、ふざけたアマだ。

馬鹿だとも思う。いや、馬鹿だ。そうに違いない。だから、助けてって泣けば良い。やめてくださいって喚けば良い。ガキのくせに、

一丁前に意地を張るんだ。何の力もないくせに、口だけは達者なんだ。余裕ぶって、ス力して、気に食わねえ気に入らねえ。

「あなたは、何に怯えているの？」

「僕が？ あは、お姉さんさあ、何言ってるの？」

俺に何を期待してるって言っただ。

ずっと見るだけだよ、てめえは。目は口ほどにいつか？ ふざけんな。言いたい事があんなら、さっさと見えよ。どうして、こいつはそうなんだ。

「違うの？」

社長は、初めてレンを認める。彼女の目は、心底からレンを哀れんでいるようにも見えた。

「遊んだげる」レンが鉈を振り下ろす。

俺は、レンが動くよりも先に走り出していた。背後からの攻撃を察知した野郎は、社長から離れて水族館の方へと逃げる。……逃げろ？ どうして、俺はそんな風に思ったんだ。

「……どうして逃げねえ？」

「あら」社長は笑う。俺はレンを睨んでいるから彼女の顔を見ていない。けど、分かった。こいつは、意地悪く、口の端をつり上げているに違いない。

「社員を置いて逃げる社長がどこにいるの？」

「どこにでもいるっつーの」

そう、と。囁くように。そして、社長は零した。

「実は、腰が抜けて動けなかったのよ。青井、ありがとう」

「は。笑かしやがる」

俺は右腕に力を込める。くだらねえ。命張るような場面じゃねえだろう。けど、どうしたって、力が入る。パンチは、何発打って打てる筈だった。

「青井」

「おっ」

「どうにかしてちょうだい」

「おつ」

踏み、込む。声を荒らげレンへと迫る。

「もっつ、うざいって!」

レンは、俺を追い払うように鉈を振るった。疲れてはいないようだが、相当に苛立っているらしい。

「……お兄さんたち、何なの？ スーツも着てないのに、僕みたいに改造だって受けてないんでしょ？ なのに、どうして、壊れないの」

「お前が本気出せば壊れるだろうよ。……昨夜みたくな」

「何か言った？ ふんだ、というか僕はさっきから本気だもん」嘘だ。つーか、本人が分かってないらしい。改造を受けたとか言いやがったな。ガキだからか、それとも慣れていないのか、上手く力を制御出来ていない。社長がペースを狂わせたか？

「スーツ着てない人間なんか、皆同じのくせに」

「何……?」

問えば、レンは鉈を愛しげに撫でる。

「だってそうじゃん。これで胸を割るでしょ？ そしたら血が、ばーって出るよね？ 痛い痛いって泣いてさ、助けてっっておっきな声を出すよね？ 全部、同じじゃん」

「何言っただお前」本心からそう思った。やっぱり頭あおかしいのかこいつ。

「僕さ、確かめたかったんだよね。だから、遊ぶついでに調べたの。そしたら皆同じだっけ分かったの。お兄さんもお姉さんも、お爺さんも赤ちゃんも、どれもどいつも同じだもん。ゼーんぶいっしょ。みーんなおなじ。あは、つまらないよね?」

鉈の切っ先を向けられる。何故か、恐ろしいとは思わなかった。神経が麻痺してるのかもしれない。

俺は、目の前のガキを可哀想だと思っていた。泣きたいのを我慢して、無理に笑っているような。そんな風に思ってしまった。

「良く分かんけど、違うぞ」

「何がっ」

所詮、ガキじゃねえか。こいつが本気を出せば俺なんかあつという間に死亡だが、今だけは話が違う。

「人間つてのは同じじゃない。お前、昨日も同じ風に思っていたのか？」

「……昨日？ お兄さん、何言つてんの？」

正直、ムカついていた。

あのゴリラ怪人は、どうしてこんなガキを追っていたんだろう。

自分が死ぬつて分かつてたのに、江戸さんにまで頭を下げて、俺たち数字付きにボロカスに言われて。それでも、レンを見つけて、殺された。……『お兄ちゃん』と呼ばれていたな。俺みたいに『お兄さん』ではなく『お兄ちゃん』と。ゴリラとレンは、もしかしたら組織にいた頃、仲が良かったのかもしれない。いや、今となつては分からない。勝手な想像。適当な妄想でしかない。けど、もしもそうなら、ゴリラがレンを追っていた理由が分かる。あのゴリラは、このガキを、本当に殺したいと思っていたのか？ 裏切り者として始末しようとしていたのか？

「違つだろう」答えを口にしてみると、思っていたよりもしつくりときた。

「違わないよ。お兄さんも、同じだ。今までの奴らと……昨日の、あいつと……一緒なんだ」

俺とゴリラを一緒にするんじゃないやねえ。

「そこにいるお姉さんとも同じだ。僕と遊んで、壊れちゃうんだ」

俺と社長を同じにするんじゃないやねえ。

「だからっ、うるさいから！ もう壊れちゃえ！」

俺とまとめられたら、社長もゴリラも可哀想じゃねえか。あんまりだ。俺みたいなクス、滅多にいねえよ。違つんだ。俺は、あいつらとは違つ。俺は、とんでもねえクスで、どうしようもなくグズで、こんな、こんな安い命！ 比べんな！ 並べんな！ 惨めになんのは俺なんだから！ だからっ、教えてやろうじゃないやねえか、てめえの

体に直接なア！

鉈が閃く。当たれば死ぬ。だけど、こっちにも武器はある。そんなんよりも、もつと良いもんがな。

俺は拳を突き上げる。レンは、目を丸くさせた。きらきらとした破片が、俺たちの間を散って、落ちていく。

「うそ、そんなのって……」 すぐえぜ爺さん。三百円で買ったもんとは思えねえ。

グローブで鉈の刀身を粉々にした後、俺は右腕を振り被る。何を思ったのか、レンは動かなかつた。それどころか、九重みたいに腰を抜かしている。誘ってんのか？ だけど、もう関係ねえ。

ここで殺す。

ここで仕留める。

そうしなきゃ、俺たちは助からない。こいつを殺して俺が助かるなら
！

「駄目よ、青井」

右腕を、振り下ろす。アスファルトが粉々に砕けて、レンは俺を見上げていた。やつぱり、ガキだ。ちいせえナリでよくもまあやってくれたじゃねえか。てめえのせいで、こっちは夜も寝られなかつたつてのによ。

「ひっ」俺が腕を上げると、レンは、まるでガキみたいに目を瞑って、怯えていた。

「大人をつ、舐めるなパンチッ」

やーいビビつたか。バーカ、てめえみたいなんにグローブ使うのはもつたいねえよ。な訳で、そのまま、野郎の頭に俺の必殺パンチを喰らわせる。ただの拳骨だった。こんなん、こいつにとつちや痛くも痒くもないだろう。つーか、こいつがやった事に比べれば、マジで子供の遊びに等しいんだろう。

「う……」

だが、
「うあ、いた……いた……いた……いた……いた……」
泣いていた。

レンは声を上げて、わあわあと泣いていた。

俺はどうして良いか分からず、社長たちに目を向ける。社長は何も言わず、気を失っているであろう九重に視線を落としていた。

「うあああああああああつ、やだあああああああああ！」

「は？ ……この、てめえ、ふざけんのも大概にしるよ！ 今更泣いてんじゃねえよ！ お前つ、自分がやった事分かってんのか！？ ここまで好きにやっついて、拳骨一発で泣き喚くなんて、許してたまるか。組織まで引つ張って、嫌と言うほど謝らせて、グロシユラとやらにボコボコにされる！ つーか死ね！」

「うっ、うっ、うっうっうっ……！」

涙目で睨まれる。もう一発殴るぞてめえ。

「お、おぼっ、おぼえてろ！」

「ああっ!？」

グローブを見せると、レンは再び泣き出した。そこで、凄まじい勢いで逃げ出してしまう。まずい、ここで逃がすのは精神衛生上良くない。確実に仕留めてやる！

「待ちなさい」

「なーんでだよ!？ お前、馬鹿か!？ ああ馬鹿か！ 殺され掛けたんだぞ!？ 悠長な事言ってる場合か馬鹿！」

「……馬鹿、馬鹿と。馬鹿の一つ覚えね」

落ち着き払いやがって。こっちはもうギリギリなんだぞ色々と。

「命まで取る必要はないでしょう」

「だったら大人しく殺されるってのか!？」

「だって、あなたはヒーローなのよ？ ヒーローは何も殺さないわ。悪を滅ぼして、正義を守るだけだもの」

ぐっ、この……! この脳天気女が……!

「カラーズの者は誰一人として殺されていないわ。それで良いと思

わない？」

「……あんだ、案外ドライな奴だな」

「そう？」

「そうだよ。見る、九重は耐え切れずに失神しちゃってるじゃねえか。比べて、社長は死体を見ても、レンに殺されそうになっても動じなかった。何て女だ。とんでもない肝を持ってやがる。」

「それより、言い訳はどうしようかしら。これじゃあ、働いたのにお金を取られてしまうわね」

「ええ？　しようがねえだろう、もう」

「そのヒーローさんに罪を被ってもらいましょうか」

鬼か。怪人より情がねえぞ、てめえ。

大人しゅうしとりやあ良かったのに

誰にも言えない秘密を抱えたまま暮らすつてのは、想像以上にストレスの溜まるものだった。

組織を裏切ったガキ、レン。

先日、俺はそいつをどうにかして追っ払う事に成功した。レンがスーツを持っていない俺を舐めていたのと、社長が彼のペースを崩した事が起因しているのだが。まあ、生きてるのは俺だ。いや、あいつ死んでないけど。死んでて欲しいけど。

俺は、誰にも、何も言えなかった。当然だ。レンを見つけたのに、逃がしてしまったのである。話せる訳がない。調子に乗って喋ってしまえば、追求されるのは間違いない。ヒーロー派遣会社に内緒で勤めているのがバレれば、俺だって裏切り者扱いされるだろう。…エスメラルド様は、裏切り者を許せないと言っていた。身内には優しい人なんだが。うーん。まあ、裏切る方が悪いっっちゃ悪いんだけど。うーん。

珍しく、今日は数字付きにも仕事があった。他の組織が動くとの情報を得た江戸さんが、便乗してスーパーマーケットを襲撃すると決めたのである。控え室は、いつもよりも騒がしかった。

「江戸さんって掛け持ちしてるらしいぜ」

「えっ？ マジで？」

「だってさ、前にもあったんだよこういうの。他の組織がどつか襲うから、ヒーローはそっちに行く。そこを狙って別の場所を襲うんだって。そういう情報って、簡単には手に入らないんじゃないのかな？」

耳を済ませる。江戸さんが掛け持ちだって？ まあ、ありえるっ
ちやありえるが。

「その辺の下っ端を潜り込ませてるんじゃないの？」

「金でネタ買ってるかもな。まあ、俺だって売れって言われりゃ売
るだろうし」

控え室では面白い話が聞ける。まあ、根も葉もない、くだらない
噂話が大半を占めているが。

しかし、江戸さんか。あの人は、すっげえ出来る人である。エス
メラルド様が好き勝手やれているのは、彼の手腕によるところが大
きいだろう。何故、江戸さんは彼女に仕えているのだろうか。その
気になれば、彼が四天王になる事だって……いや、邪推だなこりゃ。
よしておこう。それよりも仕事だ、仕事。

午後六時。

俺たち数字付きは所定の場所についていた。半分は逃走ルート
の確保と見張りに、残りはスーパーマーケットの駐車場に停めたワゴ
ンの中で、他の組織の奴らが動くのを待っている。

「そっいや、今日は怪人いねえのな」俺は呟く。窓の外に目を遣れ
ば、スーパーマーケットは多くの買い物客で賑わっていた。この喧
騒を、狂騒に変える。それだけで、心が躍るような気さえしていた。
「数字付きだけで充分だろうって、江戸さん言ってたな」

「今日はアレだろ。スーパーのバックヤードから野菜盗ってくるだ
けだし」

「……エスメラルド様に食べさせんのかな？」

「あー、最近肉ばっか食ってるもんな。でもさ、全然太らないんだ
よあの人」

「俺の彼女が聞いたら羨ましいとか言うんだらうな」

合図を待つ間は、皆リラックスマードである。仕事が終わったら
飲みに行こうぜ、なんて話も出ていた。

居酒屋に予約でも入れようかという話が出た後、七番の携帯電話が鳴り始める。

「おい、仕事ん前は切つとけよ」

「悪い悪い。……あれ？ 九番からだ」

九番？ あいつは、確か見張りだったな。何かを見つけたんだろ
うか。

「なんで無線じゃないんだ？」

嫌な予感がする。七番は通話ボタンを押し、電話を耳に当てた。

『そっちにヒーローが向かってる！ でけえしゃもじ持った女だ！』

「はあああつ！？」

車内が驚愕、その色に染まる。だが、俺だけは違った。

でかいしゃもじを持ったヒーローだと？ あいつだ。あいつしか
いねえ。

「どうしてバレてんだよ！？」

『悪い。見つかった。で、洗いざらい喋ったら見逃してくれるとか
言うから』

「てめええ俺らを売ったんか！ もう良いつ、今日の飲みはお前持
ちだからな！」

『ふざけんなよっ』

「んな事よりどうすんだよ、仕掛けんのか？ 帰るのか？」

意見が割れ始める。

『帰るな帰るなっ！ ここで逃げたら俺の罪が重くなるだろ！』

「死ぬ犯罪者が！ 俺たちを殺す気がっ」

七番は電話を切った。どっちにしろ、結論を出すのは急いだ方が
良い。

「十から十三の四人でバックヤード向かえ！ 残りは裏口に車回し
て逃げる準備だ！」

「仕方ねえ！ 出るぞっ」

俺は車から降りて、スーパの入り口を目指した。後ろを見ると、
他の三人も駆け出している。ワゴンは一度駐車場を飛び出し、裏口

の方へ回った。そこからなら、仕事が終わった俺たち四人を上手く拾えるかもしれない。

「うわっ、何だあいつら！」

「また出た、道開けといた方が良いぞー！」

退け退け、悪の組織のお通りだ！

自動ドアが開くのを待つ。この時間ですら惜しい。立ち止まりたくはない。いつ、追いつかれるか分かったもんじゃない。

「バックはどこだ？」

「鮮魚コーナーだ！」

十一番を先頭に、俺たちは店内を走って回った。買い物客は俺たちに道を開けて、商品を品定めしている。見慣れたものなのだろう。鮮魚コーナーでスイングドアを発見する。十一番は体当たりするかのように突っ込み、俺たちは後に続いた。加工場には入らず、ストックヤードへと向かう。薄暗く、寒い雰囲気の中、俺たちは大量の段ボールを認めて腰が引けた。

「野菜ってどれだよ!？」

「もう適当に持って帰ろうぜ」

「そこまですら悪党どもはっ？」

裏口から、誰かが入ってくる。足音が規則的に響く。数字付きか？ いや、違う。今のは女の声だ。そして、数字付きに女はいない。

「だっ、誰だ？」

ぬらりと、影が動く。

しゃもじが見えた。あ、やばい。

「追いつかれたあああああ！」

ストックヤードを逃げ惑う戦闘員。外には逃げられない。あのアマが裏口から来たって事は、俺たちを拾う筈のワゴンは……？ っく、確認には行けない。一度店ん中に戻って、そこから……っっておいバカども勝手に動いてんじゃねえぞ！

「臆病者が。大人しゅうしとりゃあ良かったのに」

間違いない、やっぱり、あの女だ。現れたのは、こんな場所には似つかわしくないヒーロー。

退くか、行くか。どうするよ俺。

「十三番っ」くそ、他の奴らは既に店内に戻ったか。俺一人で相手に出来るような奴じゃない。逃げるが勝ちだ！

ワゴンを探したがどこにも見当たらない。俺たち四人はスーパーの近くの物陰に身を潜めていた。

「ケータイは？」

「車ん中だ。どうするよ、一旦戻るか？」

「あのヒーローが残ってたらどうすんだよ？」

見張りの奴らも、逃走ルート確保にいつてる奴らとも連絡が取れない。ここは、やはりワゴンを探すのが得策ではないだろうか。いや、あんまり長いことうろろしてんのも怖いな。

「もしかしたら、あいつらも別るところに車停めてるかもしれねえぞ」

「じゃあ二手に分かれっか」

「いや」俺は十一番の発言を制した。

「これ以上分かれんのはやべえだろ。第一、心細い」

他の組織も動いている。ヒーローだって他にもいるだろう。この近くには、やばい奴らが山ほどいやがる。

「俺たちは数字付きなんだ。あいつらだって馬鹿じゃない。ここでうろろしてたってさっきの奴に見つかって、捕まるだけだ。だから、戻ろう」

逃げ、帰る事は俺たち皆が得意の筈だ。

「仕事ミスつちまったもんはしょうがない。江戸さんに報告して指示を仰ぐ」

「よし、とりあえず九番が悪いつて事にしよう」

「っーかあいつのせいじゃんか。あいつが見つかって、しかもゲロ

「つたんだぜ」

「殺されてもおかしくないだろ。……言わない方が良いんじゃないか？ マジで、江戸さんに殺されるかも」

と、とりあえず、帰ろう。

組織に戻ると、他の奴らは駐車場で俺たち突入班の帰りを待っていてくれた。それくらいの良心は持ち合わせていたのだろう。しかし九番はボコられていた。丁寧にスーツまで脱がされていたので、ダメージをかなり受けている。未だに胸倉掴まれているが、止めようとは思わなかった。死ぬ寸前までやられとけ。

俺らを拾う筈だったワゴン組は、しゃもじヒーローを見掛けてそのまま組織に戻ったらしい。せめて連絡の一つでもして欲しかったが、誰もケータイを所持していなかった、あの状況じゃあ仕方ないっちゃ仕方ない。立場が逆なら、俺だって逃げていただろうし。

「報告はどうする？」

「そろそろ行かなきゃ江戸さんだつて勘付くぞ」

「じゃあ十三番だけで行ってこいよ」

「なっ、俺一人なんて嫌だ！ 九番が行けよ」

「アホか。こんな顔の九番が行ったら怪しまれるだろ。新入り、てめえが行ってこい。文句あんのか？」

ずいと、数字付ききん中でも大柄の三番が前に出る。重圧を感じて、俺は後ろに下がった。

「な、ない、です」

「だったら行け。おら、駆け足だ」ケツを蹴られる。畜生、覚えてやがれ！

「……やはりか」

「えっ？」

江戸さんの部屋まで報告に行くと、彼はひとりごちるように言った。失敗したのだから、もっと怒られると思っていたのだけだ。

「数字付きは全員無事なんだな？」

「はい」九番の事は伏せておこう。

「それより、やはり、と言うのは？」

失敗するのが分かっていて俺たちを行かせたんなら、色々考えを改める必要が出てくる。

「ヒーローが出たと言ったね。しゃもじを持った、女の」

「ええ。……最近、良くそいつを見ますね」

「やはりと言うのはその事だ。今回の仕事が失敗したのを予想していた訳ではない。他の組織が行動していたのまでは間違いなかった。問題は、そのヒーローだな」

どういう事だろうか。

「件のヒーローだが、どうやら、最近は酷く頑張っているらしい」「と、言うこと？」

「他の部隊、他の怪人にも被害報告が出ている。『しゃもじを持った女に邪魔をされた』と。別の組織も同様だ。そのヒーローは、ピンポイントで姿を見せている」

そうだったのか。野郎、じゃなくてあのアマ……！

「様子見に徹した方が良いのかもしれない。青井君、数字付きには良く休むように言うておいてくれ。うん、君たちに怪我がなくて本当に良かった。仕事は失敗したが、エスメラルド様も責めはすまい」
「そう言うってくれるのは有り難いが、今後について不安は残る。あのしゃもじ女がいる以上、果たして、今後の仕事が上手く事はあるのだろうか。」

翌日、俺は朝早くから社長に呼び出されていた。仕事である。

「今日は何すんだ？」

「交通量調査ね」

「……もうさ、普通のバイトじゃねえか。ヒーローとしての仕事、どうなってるんだよ?」

こないだのマスター以来、依頼がきてねえじゃねえか。社長は会社の前の道路をじっと見つめている。仕事場まで、今日は九重のタクシーで行くのだ。

「焦らなくても来るわよ。その内、嫌と言うほどね」

「どうだかな」お、タクシーだ。時間に正確な奴である。

タクシーが俺たちの前に停まり、九重が姿を見せた。

「お、おはようございます」

「揃ったな」

今の内に、言っておきたい事があった。それは、先日の水族館での事、レンとの戦闘についてである。あんまりこういうのは好きじゃないんだが、足を引っ張られるのはごめんだった。

「話がある」

「後にしてもらえる? 早く現場に行かなくちゃいけないのよ」

「聞けつて。あんな、こないだの事だけだよ」

そう言つと、社長と九重は黙り込む。一応、気にはしているらしかった。

「マジで、やばい時は逃げてくれ」

「言わなかった? 社長が社員を置いて……」

「はつきり言つて邪魔なんだ。俺は、スーツだつてもらつてねえんだぞ。その上、どこまで追い込めば気が済むんだ」

九重はうな垂れている。泣きそうだった。

「嫌よ」

「はあ? お前……だからな、足手まといだって言ってるんだよ」

「だから、あなたが守ってくれば良いんじゃない」

「前に出てくんなつて言ってるんだ!」

社長は肩を竦める。舐めてんのか。いや、舐め切ってるらしいな、こいつは。

「うるさいわね」

う、いつか見たような目で睨まれる。人は、ここまで邪悪な目付きというのが出来るものなのだろうか。

「お金を払っているのは私よ。お給料の中には、私のボディーガード代も含まれていると知りなさい」

「へりくつだ」

「あらそう」ありえんこいつ。

「ヒーローが増えたら、私は後ろで構えていようかしら。でも、それまでは、私は逃げない」

何言ってるんだ？

「今のところ、ね。あなたがいなくなってしまうえば、ウチは終わりなの。だから、私はあなたの終わりを見届ける必要があるわ。安心して、骨だけは拾ってあげるから」

「俺が焼け死ぬの限定じゃん」

「安心して、骨になるまできちんと燃やしてあげるから」

「お前が燃やすなっ。……もういい。今度は助けねえからな」

「そうね、ありがとう」

お礼を言っな！ 絶対見捨てる！ つーか俺が殺してやるかな
！

全然デカくないじゃろっ！

交通量調査つてのは初めてやるが、酷く退屈だ。通行人の数を数えるだけ、カウンターをかちかちやるだけなんだけど、これなら、マスコットやってる方がマシである。

駅前から少し歩いたところにタクシーを停めて、組み立て式の椅子に座ってから数十分が経過した。流石に、この時間は人が多い。ここらは会社とかもあるし、学校が向こうにあるから学生だって通る。きつい。指がつりそう。拘束時間も長い。半日はこうしていいと駄目らしいのだが、俺たちは三人でやっているの、実質、一人四時間か。交替して休憩挟めば、そこまで辛い仕事でもない。むしろおいしいのではなからうか。時間が経てば人通りも少なくなる。椅子に座るだけの簡単なお仕事の始まりだった。

二時間が過ぎて通行人も少なくなった頃、

「ぶっっ？」

タクシーのウィンドウが開き、社長が顔を覗かせる。

「どうもこうもねえよ。っーか話し掛けんな。それから、お前もちやんとやれよ」

「……何を？」

「いや、何をつて。これに決まってんだろ。一人で十二時間も出来るかよ」

社長は首を傾げた。

「え？」

首を！ 傾げるな！

「疲れるのは嫌よ」

「それが働くつて事なんだよ」

「嫌。だって、今まで私一人でやってきたんだもの。少しくらいは

「樂をしたいじゃない」

「そういや、こいつ一人でチラシ配ってたっけ。朝から、晩まで。他にも、色々やっていたんだろう。」

「折角の部下よ？ 効率良く使わなくちゃ、可哀想じゃない」

「これのどこが効率的だ。自分が楽しただけだろうが」

「そうよ。偉い奴はね、樂をしても良いの。さ、ほら、人が通るわよ。カウント、カウント」

「ウインドウが閉められる。俺のやる気を削ぐだけ削いで、後はもう知らん振り。」

「今何時だ。腹減ってきた。もう交替してくれ。駄目だ。集中力が続かん。もう、どうして俺が人なんか数えなきゃいけないんだ。社長と九重は昼食を買いに行くと言ってたが、全然戻ってこない。」

「そのコンビニで買えば良いだろうに。どこまで行ってんだ、畜生。しかし、目は勝手に動く。指は勝手に動く。俺の体は奴隷と化していた。」

「なあ」

「誰かが俺の前で止まる。見上げると、背の高い、若い女が立っていた。どこにでもいそうな、大学生に見える。シャツにジーンズと、割かしラフな格好だった。彼女の長い黒髪は、腰まで届きそうである。」

「なあ、ちいと聞きたい事があるんじゃないが」

「俺は無視した。女の後ろを爺さんが通り、カウンターを回す。」

「なあ」

「……邪魔」

「女は俺を見下ろした。やけに鋭い目付きである。社長のそれとは違い、気の強さを隠そうともしない。素直な奴だと思った。」

「この会社に行きたいんじゃないけど」差し出された名刺を一瞥する。

「知らねえ。よそ当たれや」

「そのゆい方は……！ どうせ暇なんじゃろうに」

「暇じゃねえよ、働いてんだ。おら、どっか行けって」

「学生が。就職活動か何かか？ 自分で調べるよ、そんなんは。」

「意地悪。教えてくれてもええじゃない」

「だから、知らないって言ってるんだろ」

「ちゃんと見てなかった！」

名刺を近付けられる。うぜえ。消えろよ。俺は女の手を払い除けて、椅子に座り直す。

「で、会社はどこにあるん？」

「電話して聞けよ。鬱陶しいんだよ、さつきから」

空腹つてもあつて、俺の語気は知らない間に強まりつつあった。

「うっとうしいたあなんじゃ。そっちが教えんから……」

「知らないって言ってるんだろ！ マジで、さつさと失せるや」

「ちつさ……何？」

俺は女を見上げた。

「器が、こまいつてゆうたんじゃ」

「道を教えてもらえなかつたくらいでそこまで言うか？ お前の器

のがちいせえんだよ」

「ふ、ふん。口の回る男は好きじゃない」言つて、女は髪の毛をか

き上げる。何かかっこつけてるみたいで、全然似合ってたなかった。

「失せるバーカ」

「どっ、どうしてそがーな事をゆうんか！」

ムカつくからだ。……でも、初対面の奴にここまで言ったのは初めてかもしれん。腹あ減ってるし、社長やら組織やら、各方面から色々と溜め込んでいたんだろう。この女とはもう二度と会う事もないだろう。適当に相手して、ストレス発散させてもらうか。

「そこにいたら陽が当たたらねえだろデカ女」

「誰がつ。全然デカくないじゃろう！ 腹立つ男……！」

何か。

なーんか変だな。この女の話し方、どっかで聞いたような気がする

る。うーん？ けど、こんな奴知らねえしなあ。

「変態。こつち見んな」

「……………まさか？ まさか、こいつ。ひょっとして……………！」

「……………名刺、見せてみる」

「……………ん」女は名刺を差し出した。俺はその会社とやらの住所を確認した後、向こうの方を指差す。

「まっすぐ行け。したらでかくて赤い屋根のビルが見えるから。その六階」

女は疑わしそくに俺を見た。

「ほんまに？」

「ほんまほんま。ほら、遅刻するんじゃないの？」

嘘だけど。

「あ、ありがとう」

名刺を返すと、女は早歩きで去っていった。

「あら、誰かと話していたの？」
入れ違いになる形で、社長と九重が戻ってくる。何故か手ぶらだった。

「道聞かれた。で、俺のメシは？」

「え？ 九重、そんなもの頼まれていたかしら？」

九重は首を横に振る。

「私たちはさつき食べてきたから」

「なんでだよ？ 買ってこいよ！ 氣い利かせるよ！ 俺はこつから動けねえんだぞ！」

「それはそうよ。勝手に持ち場を離れたらクビになってしまうわね」
ぐっ、くっ、クソガキが……………！」

「……………もういーよ。交替、交替な」

「誰と？」

「お前らのどつちかとだよ。腹が減ったし、眠いんだ」

「と言うか、もう帰っても良いんじゃないか？ 残り八時間、こいつらでやれよ。」

「ガムがあるから、それを噛みながら続けなさい」

「なあ喧嘩売ってんだよな？ そうなんだよな？」

「私はやらないから」社長は九重に視線を遣る。往来だつてのに、車椅子から下ろされた彼女はお姫様抱っこで後部座席に運ばれていた。

九重は車椅子をトランクに入れた後、タクシーの前に立って俺を見る。

「……やりませう。助手席で良かったら、寝てください」

「寝るのは、やめとく。けど、腹は減った。ちよつとこのコンビニ行ってくるから、その間は頼む。えーと、やり方、分かるか？」

大丈夫だと、九重は頷いた。俺はタクシーから自分の財布を取り、コンビニに向かおうとする。社長は、目を瞑っていた。眠ろうとしているのだろうか。ラジオをかけてやる。大音量で。

カライズの仕事、と言うか、交通量調査のバイトは終わった。俺は後の事を任せて、徒歩で一度家に戻る。シャワーを浴びてから、今度は悪の組織の仕事場に向かうべく家を出た。

尤も、昨日の今日で仕事があるとは思えない。例のヒーローがどこに、どのようにして現れるのかが分からない以上、打つ手がないのである。作戦を立てたって、奴らは力づくでそれを邪魔するのだから。

だが、俺の予想とは裏腹に、組織では大掛かりな作戦が進められていた。らしい。どこそこを襲い、何かを奪うような仕事ではない。その内容とは、ヒーローの駆逐、である。駆逐とは大層で物騒だけだ。

「情報を集めたい。数字付きは例のヒーローを探して、可能ならば交戦を」

九番を除いた数字付きを集めた江戸さんは、表情一つ変えずにそんな事を言い放った。俺たちは顔を見合わせる。

「俺たち、だけですか？」

二番の疑問は尤もだ。だから、江戸さんは首を横に振り、前もって用意していたような答えを口にする。

「四天王、クンツアイトの部隊も動いている。エスメラルド様の下につく怪人とその数字付き、そして、集められるだけの戦闘員を費やすつもりだ」

「……マジっすか」それって、つまり、何人が動くんだ？ 組織にいる構成員の数を、俺は正確に把握していない。だけど、相当の数が動くぞ、それって。俺たちだけじゃない。別の組織だって、同じような事をしているかもしれない。

「それだけ、しゃもじ女がやばいって事ですか？」

「私たちだけでなく、他の組織もヒーローには情報を漏らしていない。だと言うのに、例のヒーローは我々の仕事場所に現れる。何か、掴んでいる。そう考えても不思議ではないだろう」

そうだ。九番が情報をバラしやがったのはアレだけど。そもそも、九番がいた場所の近くにしゃもじ女がいたのは事実。あのアマ、どんな情報源を持ってやがるってんだ。

「実は、『赤イ松』の幹部から、連係を持ち掛けられている」

赤イ松と言えば、この街でも昔からあるような、そこそこでかい組織だ。日本だけじゃなく、海外にも支部があると聞く。そんな奴らも、あのヒーローを危険視してるとっのか。

「言い出す事はないだろうが、他の組織も、一旦は協力し合いたいというのが本音だろう。うちの組織の怪人だけでなく、多くの怪人がこの数日で倒されている」

「しかし、相手は危険です。情報を集めるのは賛成ですが、数字付きだけで交戦と言うのは……」

江戸さんは俺を見る。嫌な予感がした。

「十三番、君の意見を聞きたい」

やっぱり、か。しゃもじ女とやり合って帰ってきた事で、俺は数字付きになれたようなもんだしな。詳しい話を聞きたいんだろう。だけど。

「正直、あのヒーローに関しちゃ、無我夢中だったんで。あんまり、詳しくは話せませんよ」

「構わない。十三番、『しゃもじ』の戦闘能力は、どのようなものだった？」

江戸さんには前にも言ったが、他の数字付きは詳しく知らないんだ。情報は回っているだろうけど、まあ、一応言っておこう。「分かりやすいパワータイプっすね。異名の通り、武器はしゃもじで、そいつを振り回すのが『しゃもじ』の戦法です」

「確かに分かりやすい。しかし……」

「対策は立てられないですね」

「言いよどんだ江戸さんの後を、四番が続けた。」

「力押しされちゃあ、どうしようもねえよなあ」

「つーか、前からあんな奴いたっけ？」

「知らん。俺は前に初めて見た」

申し訳ないが、俺だってこれ以上の情報を持っている訳ではない。戦ったが、やはりどのようにならったのか覚えていない。と言うか、生きて帰れたのが奇跡だったのである。

「仕方ないな。数字付きは交戦を控えてくれ。これは、エスメラルド様の指示でもある。他の組織も動いているだろうから、私はそちらの線で動いておく」

なるほど、江戸さん個人としては情報が欲しいわけだ。一応、頭に入れておこう。全員が姿勢を正して、彼の顔を見つめる。

「勇気と無謀を履き違えてはならない。覚えておきたまえ。……何、少し忙しくなるが、例のヒーローを倒せばすぐにいつものようになる。全く、私は、それはどうかと思うがな」

きつと、それに近い事をエスメラルド様が言っていたのだろう。

交戦しなくても良いと言われたので、数字付きからは余計な緊張

を感じられなかった。だけど、俺たちが仕掛けないだけで、向こうが仕掛けない道理はない。それだけは忘れちゃいけないかった。

夜の街を、あてどなくさ迷い歩く。数字付きは三班に分かれ、しやもじ女を搜索していた。途中、他の組織の戦闘員や怪人と出会う事があった。顔見知りの怪人たちと情報を交換しながら、真っ白な地図を塗り潰していく。

「しかし、ウチの連中とは会わないな。クンツアイトってのも動いてるんだろ？」

「上手い事分散させてんじゃねえのかな。同じところを同じ奴らが探したつてしようがねえだろうし」

恐らくはそうだろう。だから、別組織の連中としか遭遇しないのだ。

「こうしてぞろぞろしてるけどさ、ヒーローは見ないよな」

「まあ、別に俺ら何かしてる訳じゃねえし」

「見つかったら問答無用で殴られそうだけどな」

「違うない。」

「そついや十三番さー」

俺は首を巡らせる。

「お前つて、マジで『しやもじ』と戦つたのか？」

「あー、だから、あんま覚えてないんだよ」俺は苦笑する。尤も、表情の変化などマスクのせいで分からないだろうが。

「お前が何か情報掴んでたらさ、色々と、なあ？」

手柄にはなる、か。けど、なあ……。

「実は、何か掴んでんだろー？」

「いやいや、何も知らないつて」

俺は笑う。今だけは、マスクをしていて良かったと思う。何せ、今の俺は嫌らしい笑みを浮かべているだろうからな。

しやもじ女の正体に、俺は気付いている。証拠はない。ただ、広

島弁を喋って、長い黒髪をしていただけだ。体格も似たようなもんだったが、そこまでは分からない。だけど、特徴的過ぎる。昼間の女を疑うなって方が難しい。

ヒーローも、戦闘員も、正体を知られてはならない。だから、俺たちは顔を隠している。ある程度鍛えているとは言え、中身は普通の人間なのだ。スーツを着ていない時に襲われれば一たまりもない。……『しゃもじ』の正体に気付いている者は、他にもいるかもしれない。だけど、この街で最もあのヒーローの中身に近づいているのは、俺なんだ。唯一のアドバンテージを、俺だけが握っている。そう簡単に、他の奴に渡してたまるかよ。こいつは使える。金になるかもしれない。まだ、誰にも言えないな。

「ま、気長にやろうぜ」

「おー、つーか、いつまで探せば良いんだろな」

「適当にやろうや。地図も大分埋まってきたし。もしかして、今はこの街にやいないかもな」

「ぎゃはは、恐れをなして逃げたか」

「どっかの怪人が倒してくれねえかなー」

倒すのは、俺だ。いや、倒せなくても良い。絶対に、あの女には痛い目を見てもらう。調子に乗りくさってボケが。目立ち過ぎるとどうなるかってのを思い知らせてやるぜ。何、手掛かりは持つてる。バレないようゆっくりやるさ。あのアマが何の気なしに俺に見せた名刺が、いつかあいつの首を絞める。そうに違いない。

ファンタジーか何かか？

今日はカラーズの仕事がない。戦闘員としての仕事も、夜まではない。だから、と言う訳ではないが、俺はある場所へ向かっていた。昨日、あの広島弁を喋っていた女が行こうとしていた会社へ、である。住所は名刺で確認していたので、それについては問題なかった。交通量調査をしていた地点から、十分も歩かないで、そこに着いた。

「……七時か」

時間としちゃあ少し、早い。サラリーマンや学生の数もまばらだった。

例の会社は、ビルの六階にある。カラーズのそれとは違い、建物の外観は白くて、真新しかった。そして、あの女が行こうとしていた会社の名前を確認し、どのような会社であるかも確認する。何の事はない。そこは、ヒーロー派遣会社だった。『ミストルティン』という社名らしい。すげえそれっぽい。カラーズも社名変えて欲しい。ズ、だけど、ヒーローは俺しかないんだもん。

しかし、ヒーロー派遣会社か。あの広島女が行こうとしていたのは、ヒーローとしてか？ それとも……いや、待とう。とにかく、あのアマを待ち伏せる。幸い、時間はまだたっぷり残されているのだ。問題は、俺の根気がどこまで続くのかって言うのと、場所を変えなきゃ怪しまれるって事だった。

どうして、俺はあのヒーローに執着しているのだろうか。最初に会った時、馬鹿にされたからか？ おいしいところを持っていかれちゃったからか？ それとも、戦闘員としての仕事を邪魔されたからか？ いや、どれも違うような気がする。もっと分かりやすい理

由な筈だ。そう、俺はただ、ム力つくだけなんだ。あの女が、ム力ついてム力ついてしょうがない。だから、だろつか。交通量調査の時、あんなに突っ掛かっていったのは。腹が減っているだけじゃなかった。俺は、最初に気付いていたのかもしれない。あの女が、しやもじのヒーローだって事に。

一時間ほど経って、人通りも多くなってきた。忙しい空気の子いか、俺を気にする人は誰もいない。けど、いつまでもこうしているってのも、何だかだるくなってきた。そもそも、あの女が今日もここに来るとは限らないのである。でも、俺が帰った後に来る可能性も、なきにしもあらず。とりあえず、もう少しだけ残っていようか。喉渴いたし、コンビニかそこらの自販機で……、

「あぶねえ」

見つけた。

背は、その辺の男より高いから、すぐに分かった。駅前からやってきたであろう人込みの中、頭一つ抜けて見えている。長い黒髪に、強い強そうな目。間違いない、奴だ。俺は気付かれないように、背を向けて距離を取る。

女は、あのビルへと入っていった。その後を追いかける。だが、早計は禁物である。もしかしたら、彼女はしやもじと関係がないのかもしれない。名刺を持っていた以上、可能性としては薄いけど、ミストルティンというヒーロー派遣会社ではなく、別のテナントに用があるのかもしれない。

何気なく、さり気なくを装ってビルの入り口に行く。女の姿はそこにはなかった。エレベーターが動いている。これを使って移動したのか。暫く、見つめる。エレベーターは、六階で停まったらしかった。ついさっきまでは、何をやってるんだろって考えていたが、今は違う。あの女は、間違いないヒーロー派遣会社と関わりがあるんだ。社員か、依頼者か。……昨日は名刺を持って、会社に向

かおうとしていたな。と、すると、新入社員って感じか？ それとも、マジで就職活動？ いや、でも、すげえラフな服装だったな。何にせよ、もう少し待とう。

コンビニでジュースとパンを買い、それを食いながら三十分ほど経つと、ビルからあの女が出てくるのが見えた。急いでいる様子はない。隣には、グレーのスーツを着た、サングラスの男がいる。歳は、若くは、ないな。四十代か、もしかすつともつといってるかもしれねえ。女がビルに入る時にはいなかったな。彼女が社員だとしたら、あの男は上司か？

「……………」

こつちには、来ない。奴らは徒歩で移動している。どうする？ 追うか？ ……いや、やっぱやばい。つーか怖いな。それに、奴がヒーローとして仕事場に向かおうとしているのなら、手荷物が少ない事が気に掛かる。スーツを下に着ているような感じでもないし、あのしゃもじを入れるような鞆すら持っていない。ほぼ、手ぶらだ。もしかしたら、スーツは別の場所に保管しているのかもしれないが、すぐには確かめられない。

奴らの進む先、身を隠すような場所もない。そも、派遣社員だとしても、数多くの怪人をぶっ倒してきたヒーローだ。尾行に気付かれないとも…………いや、とつくに気付かれているかもしれない。今日のところは引き上げよう。つーか、ヒーローの正体見たり枯れ尾花って感じ。ここまで確実なら、もう間違いない。しゃもじ女の正体は、あのアマだ。悪の組織を苦しめていたのは、ミストルティンの派遣社員だったのだ。

その足で、俺はカライズへと向かっていた。組織に行き、ミストルティンについて調べても良かったのだが、他の奴らには、しゃも

じの情報に渡したくなかったのである。それに、社長も一応は派遣会社のそれで、同業者だ。何か知っているかもしれない。

「ああ、あそこね」

な訳で尋ねてみると、社長は何か知っているらしい風に言った。こいつも、たまには役に立ちそうだな。

「何か知ってるのか？」

「それよりも、どうしてあなたが知っているの？」

「ああ、俺だって同業者くらい知っておこうと思ってさ。ちょっと調べたんだよ」

社長は、いつもの指定席から俺の顔を見つめる。何かを探っているような視線が気持ち悪くて、テレビの方に視線を遣った。

「……殊勝ね」どうもと返しておく。

「でも、どうしてミストルティンなの？ あそこは、そんなに大きくはない会社よ。この街でなら、もっと大きなところもあるのに」

「俺の知り合いがさ、そこに依頼した事があるんだよ」

社長は僅かに目を見開いた。

「へえ、あなたの知り合いって、波乱万丈な人生を送っているのね」「どういう意味だ？」

「知らないの？ あそこは、怪人の退治を専門に請け負っているのよ。つまりは、そういう事。依頼料だって馬鹿にならないと思うわ。その知り合いとやら、あなたは、どうしてウチを紹介しなかったのかしら」

怪人の退治を専門に？ へえ、そんなところもあったのか。自信があるようで、ムカつく限りである。

「俺がここに入る前の話だったんだよ」

「そ。何かあったら、次はウチをよろしくと言っておきなさい」はいはい。

「だから、ミストルティンには戦闘能力の高いヒーローがいるわ。あまり良い話は聞かないけどね」

俺は身を乗り出す。面白そうな話が聞けそうだった。

「素行の悪いヒーローが目立つのよ。依頼料だって、足元を見て吹っ掛けてるとも聞くわ。……まあ、実力は確かだから、文句は言えないと思うけど」

ま、あの女も柄は悪かったしな。

「青井」

「何？」

「転職を考えているの？」

「まさか。俺には、ここでヒーローやってるのが天職だって、最近はその考えでるんだ」

社長は笑わなかった。

今日も、組織はしゃもじを探すのだろう。数字付きの控え室に行く前、ふと、俺は面白い事を思いついた。今まで慣れ親しんだ、小汚い下っ端戦闘員の控え室に行く。

控え室に入ると、相変わらず汚かった。小汚い連中が俺の顔を見て、鬱陶しそうに『あっちへ行け』という風に手を払う。

「よう、久しぶり」

俺がにこやかに手を上げてても、誰も返してくれなかった。パイプ椅子を引き、部屋の中央に座り込む。

「おいおい、出世頭に挨拶くらいしとけよ」

「うるせえ裏切り者が！ てめえ、一人だけ偉くなりやがって」

「しかも四天王の数字付きって話じゃねえか。畜生、良いなあ！」
分かりやすい反応をありがとう。

「数字付きって言っても、お前らと大して変わらねえんだよ。やってる事は同じだ」

「分かったから失せろって」

「消えるバーカ」

頑なな奴らである。彼らの心を溶かすには、面白いものが必要だ

ろっ。

「まあ聞いてくれよ。頼みがあんだ。あのさ、久しぶりにアレ、やるっぜ」

控え室が静まり返る。スーツに着替えようとしていた者も、その動きが止まっていた。

「……誰かから、やれって言われたのか？」

「いや」俺は首を横に振る。

「ついさっき思いついた。思い出したって言うべきか」

「青井よう、仕掛けてもさ、意味があんのか？ 時間だって掛かるし、上にバレたら面倒くせえぞ」

その言い分は尤もだ。だけど、既に元、同僚の奴らは食いついてる。

「しゃもじ女、知ってるだろ？ お前らも昨日駆り出された筈だからな」

「ああ。けど、俺らにやそこまでやる気はねえよ。分かってんだろ？」

分かっている。俺だつて、つい最近まではここで愚痴ばかり零していた人間だ。いや、愚痴ばかり零しているのは、数字付きになつたつて変わらないか。

「でも、偉くはなりたいだろ？ あのしゃもじ、ここだけの話、相当やべえ奴だ」

「知ってるっつーの。つか、お前、良く生きて帰ってきたよな。あの女、怪人を相当始末してんだろ？ 正直、俺らまで駆り出してどうすんだつて話だよ」

「そいつに、少しでもダメージ与えりゃ、誰かの目には止まるわな」俺は、控え室にいる奴らを見回した。俯いている奴もいたが、目の色を変えた奴もいる。こいつらだつて、ここでいつまでも燻っているつもりはないんだ。だから、協力してくれ。利用してやるから。「上手くいきゃあ、俺から上司に言っても良い。使える奴がいるってな」

「青井さ、お前、そこまでして何をやりたい訳？ 正直、まともじゃなくねえか？」

「俺は、あのしゃもじがムカつくだけだよ」

「は。何それ。お前、もしかしてそいつと知り合いなの？」

知り合いと言えば知り合いだが、こいつらが想像しているような関係ではない。むしろ、関係がないのだ。

「遊びだよ、遊び。成功しようが失敗しようが、手伝ってくれた奴は飲みに入れてってやるよ」

「どうせいつもんどこだろ
うるせえ。」

「まあ、そんなら良いか。気楽に、適当にやって良いんだろ？」

「おお、まあな。けど、今晚にでも暇見つけてやっといってくれ。しゃもじ女がいつ出てくるかは分からないからな」

「誰が誘き寄せんだ？」

勿論、俺だ。

「あつそ。ならいーけど。じゃ、今晚から仕掛けていくって事で良いな？」

「……何？ マジで全員やってくれんのか？」

改めて、控え室中にいる奴らを見る。十数人はいた。マジかよ。言い出したのはお前なんだから、ちゃんとおごれよ？」

肩を叩かれる。まあ、あの女へ反撃出来るかもしれねえんだ。安いもんだろ。俺だって、上手くいくとは思っていない。こいつらに声を掛けたのは、念の為、ちょっとした保険のつもりだった。

さり気なく、地図を持つ。こうする事で好きに動けるからな。

今晚も、エスメラルド様の数字付きは街でしゃもじの搜索に当たっている。既に、別組織の奴らとも情報を交換した。昨日よりも、数が増えているような気がする。急いだ方が良いかもしれん。

九番も回復し、十三人を四、四、五の三班に分けた俺たちは、昨

日と同じような場所を歩いてきた。昨日いなかったからと言って、今日もないとは限らない。焦る事はない。他の場所にも、組織の手は伸びている。どこかで、しゃもじが引つ掛ければそれで良い。出来るなら、この手で痛い目見せてやりてえが。まあ、無理だろう。他の方法を考えないとな。

だが、一緒にいる数字付きにはバレないように、俺はミストルテインへと向かっていた。そこにいるとは思えないが、他の場所を探すよりも、見つけられる可能性は高そうである。

「この辺、昨日は行ってなかったよな」

「駅前ってやばそうだな。まだ終電きてないから一般人もいるし、ヒーローだっっていんだろ」

「派遣会社、この辺多いんだよな。……十三番、戻ろうぜ」

「でもさ、だからこそこの辺にいるかもしれないじゃん」

他の三人はこの場所を嫌がっている。長くはいられない。不審に思われるのもつまらないしな。

「じゃ、もう少しだけ行こうぜ」

コンビニの前を横切ると、店から若い男が出てきた。俺たちの姿を認めたらしいが、興味は持たれなかった。

「ちよつとビビった」

「俺も」うん。俺も。やっぱり戻りたくなってきたな。

「じゃ、あの辺まで行ったら戻ろうぜ」

俺は地図を折り畳んで、スーツの中にしまい込む。

「お、あの子可愛いじゃん」

「えー？ そうかあ？ 気が強そうで駄目だな。俺はもっと、こう、ヤマトナデシコって言うの？ ああいう子が良い」

「んなもんこの世にいねえよ。ヤマトナデシコ？ ファンタジーか何かか？」

ふと、同僚が指差している方に視線を遣った。髪の毛長い女で驚いたが、あの、広島弁の女じゃない。まあ、流石に初日からは出会えんわな。

そうして、ミストルティンの入っているビルの前まで辿り着く。周囲を警戒するも、人の気配はなかった。ここまでだな。

「じゃ、戻るか」

「ういー」

「あいよー」

気だるそうに返事をした面々は、体を伸ばしながら来た道へ戻ろうとする。俺は最後尾につき、もう一度、ビルを見上げた。その時入り口の自動ドアが開く。中から現れたのは、くそでかいしゃもじを持った、ヒーローだった。

『しゃもじ』だ。

まだ、彼女はこっちに気付いていない。

マジかよ、やっぱこっち来てて正解じゃねえか。ツイてる。ツイてるじゃねえか……！ どうする？ 今、仕掛けるか？ あいつらはちゃんと俺の頼んだ通りにしているのか？ そのエリアまであのアマを引つ張れるか？ それまで逃げ切れるか？ 数字付きは、何人残れる。こっちは四人しかない。周りにゃ別組織の戦闘員も怪人もいない。孤立無援だ。その状況でしゃもじとやり合っても、一分持つか持たないかだ。

だが、千載一遇とも思える。いつ、あの女が他の怪人に倒されるか分からない。それどころか、ここまで好き放題に暴れ回ったんだ。ただで済むとも思えない。どっかの組織に拉致られて、死にたいと言うまで痛めつけられるかもしれない。そうなりゃ、俺の出る幕はない。……仕掛けちまうか。

「いたぞおおおおおおおっ！」

「えっ？ 何？」

「は？」

大声を出す。しゃもじの注意をこっちに引きつける為だった。他の数字付きにゃ悪いが、まあ、一緒に頑張って逃げ切るうぜ。

その喋り方さ、おもしれえな

走れ走れ。

逃げる逃げる。

頑張れ頑張れ。

「てめえええええええつ、黙ってりゃバレなかったんだろつがよ
おおおお！」

「ふざけんなよおおおおお！」

「悪いっ、気がつ、動転してて！」

ラッキーだ。これはラッキーなんだ。そう言い聞かせて、必死で走る。追いつかれりゃ終わりだが、罠を仕掛けているであろうエリアまで引つ張り込めばこつちのもんだ。

俺が、元同僚たちに頼んだのは、罠の仕掛けである。最初はヒーローから逃げ切る為の消極的なものだったが、そこは下っ端の俺たちだ。暇を見つけりゃ、罠の改良に勤しんだり、新しいものを作ったりしていたのである。もはや趣味の領域だった。もう随分とやっていなかったが、対ヒーローの罠としては、未だに有効の筈だ。実際、何人かのヒーローをそれで仕留めている。手柄は、ヒーローを追い込んだ怪人もが持つていつてしまったが、とにかく効果の程はある。

しかし、数字付きにはバレたくない。ありゃあ、下っ端だけのものだ。何年も掛けて、少しずつやってきたんだから。だから、俺にとっては最後の機会だ。罠を使うのは、今日が最後である。失敗したくはない。あれは、俺の……！

「引きつけるっ、お前らは先に行ってる！」

「おっしや任せた！」

「骨が残ってりゃ良いな！」

あ、くそつ、躊躇なしに逃げやがる。俺を置いてった数字付きは、もう背中が遠くなっていた。都合が良いけどな。

俺は一瞬立ち止まり、ビルとビルの間を滑り込ませる。足音は近い。しゃもじはこっちに狙いを定めたらしかった。

「ここですつ、何をしとるお前ら！」

けど、遠いな。一駅、二駅分は自力でどうにかしなきゃいけない。そこまで、無事に辿り着けるかどうか。

戦闘員のスーツを着ているが、とつくに息は切れている。休みなしに逃げ続けるのは、心臓に悪い。背中に纏わりつくヒーローのプレッシャーが、俺の体力をじわじわと削っていた。

でも、後、もう少し。

足がもつれそうになるが、根性でカバーする。腕が上がらなくなってきた。頑張れ。しっかりしろよ青井正義。あのアマに一泡吹かせたいんだろっが！

「はっ、ぐ……」

見えた。雑居ビルが建ち並ぶ場所だ。もう数分逃げれば、そこまで辿り着ける。直線じゃあ地力が違い過ぎる。遠回りになるが、曲がり角を駆使してヒーローとの距離を稼ぐ。しゃもじに飛行能力が備わってなくて助かった。あいつ、やっぱりパワーだけだ。得物で叩く。それ以外に能がない。

角を一つ、二つ、三つ……そして、見える。元はコンビニ、今は空っぽの建物があるだけの土地である。そこが、目的地。開けたところには、罨が待っている筈だ。あいつらがちゃんと仕掛けてくれているんなら、いつもの場所に紐がくくり付けてある。それを切っちまえば、罨が発動する。

だが、

「あれ？ どうしたんだよ青井」

罨は、まだ仕掛けられていなかった。

元同僚、下っ端戦闘員たちはだらだらとしながら罽を仕掛けていく途中だった。こいつらああ……！ 今晚仕掛けるって言ったらうが！ ああでも、しゃもじを見つけるのが早過ぎたし、こいつらだって、まさか今日仕掛けるとは思ってなかったんだろうしいいいい。ああああどうしようどうしよう！

とにかく、逃げなきゃやべえ。ここで一網打尽だ！

「逃げろ！　しゃもじだ！」

戦闘員は顔を見合わせる。十数人が、俺を見て一斉に首を傾げた。嘘？

「もう来るぞ！」

俺の剣幕に、どうやらマジだと信じてもらえたらしい。戦闘員は仕掛けを止めて、撤収の準備を始めた。

「もう来るのか！？」

「一分ねえぞ！」

「だったらやるぞつ、途中までは仕掛けてある！」

そう叫んだ奴が、俺の方へと走ってくる。そいつは、クロスボウを持っていた。畜生、そいつを持ってるとって事は、全然仕掛けられてないじゃんかよ。

「どこまでやったんだ？」

「第二段階」

「全然じゃ　来たぞ仕掛ける！」

俺の声に弾かれて、全員が所定の位置につく。第二段階って事は、殆ど、何も無い。ヒーローを、ちよつとびつくりさせるだけだ。

それでも、やる。やれるとこまでやる。

しゃもじがこつちを認めて、狭い路地を駆け抜ける。もう数秒でコンビニの駐車場に姿を現すだろう。紐が切られる。瞬間、罽が発動した。仕掛けが作動し、下方の物陰に置いてあった消火器が破裂する。視界が利かなくなつた筈だ。ヒーローがどこにいるのか、こちにも分からない。それでも、ここまでは一本道だ。路地を抜けてここまで来るには、まっすぐ行くしかねえんだろが。下っ端二

人が走る。その手には、ロープが握られていた。二人はしゃがみ込み、そのロープを、張る。うん、それだけだ。罨つつーか悪戯つつーか。だが、女の声が聞こえる。焦ったような、そんな声だ。ロープから手を離し、下っ端は手を上げて戻る。

合図だ。間抜けが、引つ掛かったっていう、喜びの！

「Boooooooooooooooooobyyyyyyyyyyyyyyy
yyy！」

全員が叫ぶ。ヒーローの位置は捉えた。ありったけの飛び道具をぶち込む。クロスボウト、投石。当たったかどうかなんか知るものか。それでも、今はこれくらいしか出来ない。

「……………やったか？」

「あつ馬鹿！ その台詞は駄目だろ！」

濛々とした煙が晴れていく。真つ白い粉が、風に流されていく。

ヒーローは、健在だった。しゃもじを盾の代わりにしたのだろう。彼女の得物には、多数の矢が突き刺さっていた。……………失敗だ。

俺が何か言うまでもなく、戦闘員たちは背中を向けて逃げ出している。俺は、足元に転がっていた石を拾って、投げつけた。しゃもじに当たって、乾いた音を立てる。

「……………終わりか」

ヒーローは、ゆっくりと立ち上がった。しゃもじがぼろぼろだったのを確認して、彼女は口元を歪める。キレてやがんな、ありゃ。

「くだらん真似しやがって……………！」

「よう、久しぶり」

「あ？ ……動くなよ、いとおしてあげるから」

残念、俺の事は覚えちゃいないか。ま、そりゃそうだろう。けどな、俺は、お前を覚えてる。

「くだらないときたか。言ってくれるなあ、ヒーローさんは
しゃもじは得物を構えた。」

「わりゃあ、絶対殺す」

こいつは、ムカつく。腹が立つ。何故だか分からない。そう、思

っていた。けど違う。こいつは、俺を否定しやがったんだ。俺の事を何も分かっていないくせに、分かっているからと言わんばかりに切り捨てた。てめえなんかが、俺の、これまでの六年間をつ、どうして！ どうして！ どうしてっ！ くだらないと言えるんだ！？ こつやっつて、こつして俺たちは生きてきたんだ。てめえは立派にヒーローしてるか知らねえけどよ、舐めんじゃねえぞクソが。

「その喋り方さ、おもしれえな」

無言で、しゃもじが地を蹴った。まっすぐ来ると分かっていたから、俺は横っ飛びで地面を転がる。そうして、走った。奴には背を向けて、笑いながら走る。

「気にしてんのか！？ 気にすんなよっ、遠慮なく喋れよ！ なあっ！？」

「このおおおっ！」
走れ走れ。

走れ、走れ。

目的の地まではすぐそこだ。

「ぐっ……！？」

だけど、俺は背中に衝撃を感じて、前のめりに倒れ込む。ヒーローは、俺の首根っこを掴んで顔を近づけた。鬼より怖い顔だった。

「捕まえたぞ」捕まった。

「われ、何じゃ。何を狙つとる」

お前を、凹ます事だけを。それだけを考えて、ここ数日は動いていた。お前の事が忘れられなかった。もう謝って欲しいとは思われない。ただ、痛い目に遭って、泣いてくれ。

ここまで近づくと、バイザー越しの顔だつて分かる。ああ、間違いない。こいつは、あの女だ。ようやく会えた。

「だんまりか」

なら、それでも構わない。女はそう続けて、拳を振り上げる。

「ちゃんと着けたかよ？」

「……………ああ？」

僅かに、俺を拘束する力が緩んだ。

「あの日、会社には行けたのかよ？」

「なっ……………！？ お前つまさか！」

緩んだ！

俺は隙を衝き、ありったけの力でしゃもじ女を突き飛ばす。それから、もう振り向かず駆けた。深夜の交差点には一般人なんていない。

「待て　　あ」

ここには、クズとグズしかいないんだ。

数え切れないほどの戦闘員と怪人が、俺と、しゃもじ女に視線を向けている。交差点には、下っ端戦闘員が仕掛けた、第二段階の罠が待っていた。

つーか、要するに自分たちよりも強い奴を呼んできただけである。罠に掛かったヒーローを倒し切れなかった場合、こういう風にプライドを捨てるのがコツだ。弱った奴を怪人が倒す。そのお膳立てをしたに過ぎない。けど、今日はどうにも数が多いな。なあ、ヒーロー？

「喜べよ。お前の為に集まってくれたんだぜ」

怪人と戦闘員は驚いていたが、我に返りしゃもじ女を見据える。睨む。

ヒーローは唇を、強く噛み締めていた。ハメられた事に気付いたんだろう。まあ、偶然が重なったって感じだけど。今日ばかりは、簡単にはいかねえぞ。手柄立たい奴らがわんさかいやがるからな。「なあ、何人倒せる？ 何人殺せる？ そんで、お前は何人目に倒されるんだ？」

「……………お前……………！」

すっげえ楽しい！ 超っおもしれえ！ こいつのこんな顔っ！ 見られるとは思ってなかった！ ざまあみるバーカ！ おらかかつ

「ガタガタ言うなや！ 罷仕掛けてやっただろが！」

「効いてなかったじゃねえか！ お前らが適当やってるから！」

笑い声が起こる。俺は面倒くさくなって、立ち上がるうとするのを止めた。

「もういや」今日は、あのアマに一矢報いた、筈だ。うん、気持ち良かった。全部が全部上手くいったとは思わないけど、終わり良ければそこそこ良しだ。

「分かった分かった。おごるから、だから黙れって」

こいつらは、出世したくないんだろが。金さえありゃ、何でも買えるつてのによ。怪人くらいにまで偉くなれば、こうやって疲れる事だつて少なくなるのに。

「青井さー、でもお前全然変わってねーよな」

「数字付きっていつても、俺らと同じじゃん。いやー、相変わらず良く走るねー青井君は」

俺の六年か。こいつらとうだつの上がらない毎日を繰り返していた。時には馬鹿にされたし、くだらないとも切り捨てられた。けど、ざまあみる。今にして思えば、案外、恵まれていたんじゃないかも。そう、思う。

「ところでさ、とりあえず俺らの事言っとけよ」

「そうそう、数字付きに穴が開いたら埋めてやるからさ」

「正義ちゃん、おねがい」

「名前で呼ぶなって言っただろ！」

いや、きつと、恵まれていた。楽しかった。俺の六年つてのは無駄じゃなかった。そうに、違いな。

お腹が減って死んでしまっただけなんです

しゃもじヒーローを退けてから数日、俺のテンションは全くいって良いほど下がらなかった。下っ端戦闘員や数字付きの同僚に、酒を振舞う日々である。なので財布は空っぽだった。そして、その事実気付いた俺のテンションは面白いくらいに下がった。給料日まで、どう凌ぐかに頭を悩ませている。つーか悩んでいる。解決方法は簡単。ぎぶみーまねー。どうすんだよ、爺さんに渡す誠意をなくしちゃまったぞおい。

「前借りとか出来るの?」

「嫌よ」

「……無理じゃなくて、嫌か」

柔らかいソファに身を埋める。俺は溜め息を吐いた。社長は鬱陶しそうに俺を睨んだ。

「理由がないもの」

「理由ならある。金はないけどな」

「無駄遣いするからでしょう」

反論出来ない。確かに、飲み過ぎた。食い過ぎた。祝勝だ大将だと持ち上げられて、悪い気はしなかったのである。

「もう少し我慢しなさい。そろそろ給料日だから。……ああ、振込みと手渡し、どっちが良い?」

給料の話か? 組織は振込みである。うーん、口座を一緒ににするのもアレだし。何より、手渡しは小銭をすぐに使えるし、もらった時の封筒の重みが素晴らしそうだった。

「手渡しが良い」

「分かったわ」

「ちなみにさ、俺の給料つてどれくらいなんだ？」

「待てないの？」

待ちきれない。せめて、額だけでも聞いて楽しむ。何せ、カラーズじゃ初めての給料なんだ。心が躍るのも無理はないだろう。結構頑張ったし、常に命懸けだった。いや、案外、数字付きの給料より良いかもなあ。

「えーと、確か八百……」

「おいこらちよつと待てや」

「何よ？ 折角教えてあげようとしていたのに」

「は、八百？ どうして百の位から始まるの？ ねえ？」

流石に八百万円は多いよーなんてへらへら出来るかボケ。

「多かつたかしら？」

「そんな事ないよ！？」

「でも、まあそれくらいが妥当じゃない？」

んな訳あるか！

「冗談よ、あなたって、からかうと面白いから」

「年上をからかうな。もう良い。大人しく待つから」

「最初からそうしていれば良いのよ」

テレビを点ける。ニュースでは、そこそこでかい悪の組織がヒーローに潰されたと報道していた。その後、芸能人が不倫していたというものになる。勿論、そっちのが面白そうだし、番組はヒーローよりも大きく取り上げていた。

「平和な証拠ね」

「まあね」言ってから、本当にそうだろうかと思った。

「勤労意欲が上がっているようで何よりね。そろそろ仕事に来るもの」

仕事？

「ええ、あなた、『ウゴロモチ』って組織は知ってる？」

「知らん。何だそりゃ、餅の仲間か？」

「馬鹿ね。最近、活発に動いている組織よ」

聞いた事ねえよ。つーか、ただだけの組織がこの街に巢食ってる
と思ってるんだ。流石に、全部は知らないっつーの。

「活発、ねえ。どんな悪さを働いてんだ？」

「窃盗、かしら。でも罪の大小は関係ないでしょう？ 悪は、悪よ」
何故か、その言葉は俺に向けられているのだと、そう、思っ
てしまっ。

「窃盗ねえ？ けど、活発って。捕まらないのか？ そんだけ目立
てば、ヒーローだって動くだろ？」

もしかして、滅茶苦茶強い奴らなんだろうか。

「いいえ、ウゴロモチは地下から建物に侵入するの」

「地下あ？」

「その手並みも鮮やかで、未だに、ウゴロモチの構成員はその姿を
捉えられていないの」

何？ そりやすげえな。けど、それでどうして、その、ウゴロモ
チって名前が出てくるんだ？ 誰にも見つかってないんだろ？ そ
んな風に尋ねると、社長は小さく笑った。

「メッセージを残していったのよ。『ウゴロモチに光を』って。メ
ッセージを残した本人たちには分からないけど、多分、組織の名
前でしょう」

光を、ね。悪の組織のくせに、ふざけた事抜かしやがる。

「手口つてのは、どんななんだ？ 地下から、とは言ってたけど」

「そのまま。穴を掘って、建物の下から出てくるのよ。だから、誰
にも気付かれない」

「穴って、トンネルみたいなんか。そしたら、追いかけるだろ」
「駄目なの」

社長は首を振った。

「そのトンネルは途中で塞がれているのよ。彼らは大量のルートを
持っているらしいわ。だから、惜しげもなく塞ぐ。それに、一度襲
ったところまでの道を残しておいても仕方がないと考えているので

しょうね」

うーん。まあ、土ん中なんて自由には入れないし、追えないだろうしな。そも、トンネルが残っててもアジトには行けないだろう。

「怪人の仕業なんだろうな、やっぱり」スーツの力でもないと、土なんか掘れないだろう。

「ん？ で、仕事に来るってのとそいつらは、何か関係があんのか？」

「ウゴロモチの怪人を退治してくれて依頼、来ない方がおかしいと思うけど」

来ないだろ、普通。そこまで騒がれてる怪人やら組織だと、カライズなんかより、もっとでかいところに頼むと思うけどな。

「まあ見ていなさい。九重が格安と触れ込んで、方々に宣伝しているところよ」

「格安う？」 信用出来るのか？

「他の会社の値段を調べたの。利益と相談して、ギリギリまで値段設定を煮詰めたわ」

社長は怪しい笑みを浮かべた。俺より若いのに、俺よりえげつない顔をしゃがる。

「件の組織を潰せば、カライズの名も知れ渡るわ。仕事、嫌と言うほど来るわよ」

「だったら良いな」ま、気長に待つとしよう。

あつさりと依頼人はやってきた。九重は出来る奴だ。

やってきたのは、スーツの似合わないハゲたおっさんである。おっさんは言った。『ウゴロモチの怪人を倒してくれ』と。前に依頼で来た、マスターみたいに脅されているのかとも思っただけど、そうではないらしい。

依頼人は、街の商店街で八百屋を営んでいる。生憎、俺はそっちにや用がない。買い物ならスーパーマーケットもデパートもある

この街だ。今の時代、商店街つてのは生き残っているだけでもめつ
けもんだろ。尤も、若い奴らが行かないだけで、古くからの人間
は今も商店街を利用するらしい。人情な話だった。とんと縁のない
話だったので、何だかむず痒かったが。

で、依頼人が店を構える商店街だが、実は、既に被害に遭ってい
る店があった。殆どが食料品を扱う店である。魚屋とか、肉屋とか。
そして、未だ被害に遭っていないのが八百屋のおっさんのところだ
という。正直、俺はどうかと思った。もう、ウゴロモチはそこを襲
わないんじゃないのか。まあ、出るかどうかも分からん相手だ。
社長は話を聞き終えて、とりあえずお試しという事で、八百屋での
見張りを申し出たのである。格安つてのが効いたな、うん。

おっさんの自宅は八百屋の二階だった。が、怪人が出てくると危
険だという事で、避難してもらった。どうやら、近くの雀荘で徹マ
ンしているらしいが。……気楽なものである。

俺たちは八百屋の二階に待機し、事が起こればそれに対処する
と決めた。

「あー……」

つまり、事が起こるまでは何も出来ない。ありていに言えば超暇
だった。

二階には和室があった。畳の感触つてのはやっぱり落ち着く、ま
るで、自分の部屋にいるみたいだった。

「緩み過ぎ」社長は分厚い本を読んでいる。タイトルは、英語だっ
たので読めなかった。良く見ると英語でもなくて、俺は死にたくな
った。この野郎、これ見よがしに頭の良さをアピールしやがって。

「だって暇だし」

「残念。多分、明日の朝まで暇よ」

「……どういう事だ？」

そりゃ、明日の朝まで見張る事になってるけど。それまで何も起

きないって事か？

「あなたも気付いているとは思っけど」

社長は栞を挟んで、本を閉じる。

「この商店街が襲われたのは、ウゴロモチが動き出した、最初期の話なの。軒並みやられたらしいけど、それから数日経っても、この八百屋は襲撃に遭っていない」

「うん」俺は体を起き上がらせた。窓の外を見ると、九重が戻ってくるのが見えた。おー、ちゃんとしてきたらしいな。今日の晩御飯は肉屋のコロッケがメインか。素朴である。何だかとっても久しぶり。

「その次はスーパーマーケットが狙われた。そうして、襲う店の規模は大きくなっていく筈よ。次はデパート、百貨店、卸問屋？とか、銀行も狙われるかもしれないわね」

まあ、そうだよな。既に小さい店を襲ってるんだ。もつとでかいところを狙いたいだろうよ、普通は。

「だから、この八百屋を狙う理由はないと思うわ」

「じゃあ、どうして依頼なんか受けたんだよ。もしかして、何もしないで金がもらえるって思ったからか？」

「あの依頼者も、そうして安心出来るでしょう？……あのね、商店街で、この店だけが被害を受けていないの。この、狭くて小さな世界でね。私には分からないけれど、色々と、あるんでしょ」

じゃあ何か、この依頼は被害を受けた店に対するポーズって訳かい。信じられねえな。金をドブに捨てるようなもんだ。俺には真似出来ねえ。

「ふうん？ けどさ、俺はてつきり、次に狙われそうなデパートとかに顔出して、無理矢理にでも会社を売り込むかと思ってたぜ」

「無理ね。大手には、既に正式な依頼が回っている事でしょうから。はあ、まあ、社長もそれなりに社長している訳だ。俺は体を動かすだけだし、ま、期待しないで待つとしよう。」

晩飯を食い終わった後、俺はシャツターを開けて外に出た。既に、商店街は閑散としていた。と言うか人っ子一人いやしねえ。店、閉めるの早過ぎねえか？ いや、でも、客が来ないんだから仕方がないか。

見張りつつあって、やる事一つもねえんだし、少し散歩していこう。第一、いつまでもあいつらと一緒にじゃ気が詰まる。……それに、なんか社長と九重って仲が良いんだよな。社長は、九重は最近スカウトしたとか言ってたが。もしかして、彼がカラーズに入った理由って、社長が好きだった、からか？ うーん、あの女、見てくれだけは良いもんな。喋るとアレだけど。

ああ、駄目だ駄目だ。あんまり関わるのもどうかって話だよな。しかし、今の俺って気を利かせてる、みたいな感じなんだろうか。九重は嬉しいだろうか。うーん。うーん？ 余計なお世話なんかなあ、こういうの。あー、駄目だ。まともなところで働いてなかったから、こういうの慣れてねえ。もう良い。全部流れだ、流れ。成り行き任せに身を任せてるのが一番良い。そうに違いない。

「……ん？」

自販機でジュースでも買おうかと足を止めた時、ふと、視線を感じた。気のせいだろうか？ でも、誰もいねえし歩いてねえし……い、いや、気のせいだ。うん、そうに違いない。アレだろ？ 『ウゴロモチ』って奴らは地下から来るんだろ？ って事は、この辺をのん気に歩いている訳がないって事だ。でもやっぱ怖いから帰るわ。

「あら、早かったのね？」

「まあな。……あー」俺は九重を見る。彼は、不思議そうにこちらを見つめ返していた。つーか、相変わらずタクシードライバースタイルである。制帽こそ取ってはいるが、室内なので何だか堅苦しい。「邪魔したか？」

「何が、ですか？」

俺の煩悶など知る由もない二人は、揃って小首を傾げた。

「いや、何でもない。それより、今日はどうなってるんだ？」

「何が？ 明確な主語と述語をちょうだい」

「だから、俺の、今日のスーツだよ。いつもさ、何か用意してくれてんだろ」

社長は、ああ、と、小さく漏らす。彼女が指を鳴らすと、九重が慌てて立ち上がり、部屋を出て行く。

「……あのさ、あいつをパシリみたく使うのはやめろって」

「だってあの子は私の足だもの」

「もつとき、九重の気持ちも考えてやれよ」

「うるさい」

可哀想。九重も、どうしてこんな奴を好きになっちまったんだかはあ。

「そついや、こないだのマントはどうなったんだ？」

「あら、気に入ってくれていたの？」

まあ、アレ着てる時にシャチ怪人ぶん殴れたんだし、縁起が良いじゃん、ほら。

「でも、駄目よ。あれは今のところ、あなたの勝負服なんだから」

「勝負服う？」

「だって、あのマントで初勝利を飾ったんじゃない。文句なし、だったでしょ？」

そつ言って、社長は笑う。歳相応の、可愛らしい女の子のそれだった。

九重が持ってきたのは、黄色い作業用のヘルメット（注意と書かれている。何にだ）と、ヘッドライト、そしてツルハシだった。

「重いから、気を付けてください」

「お、おお……いや、でも、これかあ？ ヒーローっつーか」

「工事現場の作業員ね」

「持ってこさせたお前が言うな！」

しかし、ツルハシの重みには確かな安心感があった。スーツ着てたつて、こいつの直撃喰らったら、流石にやべえだろ。今までで、一番まともな武装である。

「すげえしつくりくる」

「……ええ、一番、良く似合っているわね」

窓ガラスに映った自分を確認する。これでどこかの工事現場に行つても、違和感なんざなさそうだった。

「こんなもん、どつから持ってくるんだよ」

「買ってくるのよ。あなたの給料から引いておくから」

「てめえ、金に関して嘘は吐くもんじゃねえぞ」

「そう？ まあ、嘘じゃないから心配しないで」

「嘘つて言つてよ社長！」

けど、どうしてこの装備なんだろう？

「アレか。相手が地下から来るから、この、何か鉱山スタイルなのか？」

「いいえ」社長は否定する。

「九重の案よ。ウゴロモチって、どういう意味かが分かったのへえ。意味なんかあったのか。」

「……モグラって事なんです」

俺は九重を見つめた。そういや、何かこいつアニマルに詳しいよな。水族館ん時も張り切つてたし。

「ああ、それで、地下から」光を、つても、そういう意味か。けど、モグラって太陽の光を浴びたら死んじゃうんじゃねえの？

そう聞くと、九重はふつと笑った。馬鹿にしたような風ではなく、何か、優しかった。

「……それは、お腹が減つて死んでしまっただけなんです。モグラは、胃の中に半日以上食べ物が入ってないと、死んじゃうから。地上で見かけるモグラの死体は、仲間との縄張り争いに追い出されて

しまったものなんです」

へえ、そうなのか。燃費が悪いんだな。

「それから……」

結局、俺は眠たくなるまでモグラ講義を受けさせられてしまった。社長は、いつの間にか敷いていた布団で寝息を立てていた。ずるい。

探したよ、お兄さん

俺は八百屋の一階に寝かされていた。春だけど、下は土間みたいになってるので肌寒い。いや、寒いのはそれだけじゃない。こうして、俺だけが部屋から追い出されたのも理由の一つである。九重は良くて、俺が駄目って。何だよそれ。畜生、実は相思相愛じゃん。覚えとけよ、あいつら。ツルハシで、こう、ガツン！ とやってやるるかアアン！？ 無理だけど。

中々眠れなかった。俺は、枕が違ったら眠れないタイプなのである。環境の変化には、中々対応出来ないのだ。と言う訳で、布団の上でぼけっとなっていた。電気は点いていないが、目が慣れた。万が一、という事もあり、店ん中には一個だって野菜がなかった。異様な空間である。気味が悪い。

「くあ……」 あー、眠い。でも眠れない。地獄だな、こりや。明日つつーか、もう今日になつてるけど、夜から組織でも仕事があるし、嫌だなあ、もう。面倒くせえ。早く帰って仮眠を取りたい。……とりあえず、トイレ行こ。

立ち上がった瞬間、物音が聞こえた。社長か、九重が起きたのだろう。俺は気にせず、トイレに向かう。で、戻ってくる。すると、土間では、何かが蠢いていた。何か、である。眠い目を擦りつつ、その様子を眺めていると、一際大きな音が聞こえた。何だか、地面が盛り上がっているような気がする。

地面？

「……………うわ、マジかよ……………！」

出ないって言ってたじゃねえかよ。これって、アレだろ！ 完全にモグラじゃん！ ウゴロモチじゃねえかよ！ やべえどうしよう。どうするんだ、こつこつこの。もう、叩いちゃって良いの？ 出待ち

で良いわけ？

とっ、とにかく装備だ。えーとツルハシとヘルメットは……うわあ何かモコモコしてる！？

「こっ、このえー！ このえー！ 出たーっモグラだーっ」
パニックになった俺は一番頼りになりそうな奴の名前を呼ぶ。少ししてから、誰かが階段を下りてくる音がした。いや、社長には無理だ。だから、九重しかいない。彼は制帽を忘れてはいたが、スーツはきっちり羽織っていた。馬鹿野郎非常事態だ、全裸でも良いから急いで来いってんだ。

「……ね、寝ぼけてますか」

「違うっ、見る！」

俺はヘルメットを装着し、ヘッドライトで土間を照らす。あっ、すげえこれ意外と役に立つ。

九重は盛り上がった地面を見て、息を呑んだ。

「じゃ、社長を……」

「いや、寝かしとけ。それよか電気点けてくれ！」

壁に立て掛けておいたツルハシを掴み、俺は土間を見下ろす。：

…こいつ、何をしてるんだ？ 何かを探しているみたいにも見えるけど。

「あ、青井さん、どうするんですか」

やるしかねえ。場所は分かってんだ。だったら、こいつでぶっ叩く！

「モグラってのは！ 叩かれる為にいるんだな！」

盛り上がっている部分を、ツルハシの先端で突き刺した。手応えとか、そういうのは嫌だったけど仕方がない。猟奇的な武器を渡した、ウチの社長を恨むんだな。俺を恨むな。あの女を恨め。女の名前は、白鳥澪子という。

「動かなくなっただ」でも、手応えがない。やっただって感触がない。

「地面の下に逃げられたのかも」

やっぱり出てくるのを待った方が良かったかな。とりあえず、俺

か!？」

爺さんのグローブなら、何とかなるかもしれねえ。ここの上、全部ぶん殴ってひっぺがす! そしたら好き勝手出来ねえ筈だ。

「早くっ早くっ」

「ど、どこにあるんですか!？」

「どっかにあるだ　　ぎゃああいてええええ!　やめろって

クソ!　離せボケエエ!」

あー!　もう耐えられん!　やめてくれ!　畜生、こんなモグラにこの俺があ!　俺はっ、あのしゃもじ女をボコボコにしたんだぞ!
!　畜生!

「九重ーっ!」

俺の悲痛な叫びを聞いて、九重は何かを想像してしまったんだろ
う。布団の上につ伏してしまった。っーか、気を失ってしまった。

……え?

マ、マジか。やばい、やばいだろ、やばいだろこれ。こうなった
らなりふり構ってられん。助けを呼ぶんだ。

「しゃっ、社長!　白鳥さん!　白鳥さーん!」

返事はない。まさかあのアマ、この状況で寝てるんじゃないだろ
うな。

「だ、誰か!　誰か聞こえてませんか!?　誰か助けて!　お願い
しまあああああす!」

「……モグモグモグ」

「なっ、何だ!？」

声が聞こえてくる。下から、だった。姿こそ見えないが、その声
はモグラ怪人のものに違いない。

「こんな情けないヒーロー、初めて見たモグ」

うるせえ!

「それより、野菜はどこモグ?　どこにもないモグ」

「ここじゃあねえよ!　だから帰れ!　俺を放せ!」

「そうはいかないモグ。ミミズみたいによわっちいとは言え、ヒー

ローをここまで追い詰めたんだモグ。手土産に、お前の首を持って帰るモグ」

「モグモグうつせえんだよ！ 土食って帰って寝ろ！」

返事をする代わりに、力が強められる。もっ、もう駄目だ。

俺は気を失いかけていた。痛過ぎて、もうまともに意識を繋ぎ止めてられない。これ以上こんな目に遭うのなら、狂った方がマシだとすら思える。目を瞑る。次の瞬間、けたたましい破砕音が聞こえた。何事だと目を見開けば、シャツターが、砕かれていた。

「なっ、今の音は何モグ!? お前っ、心臓に悪いからそういうのはやめろモグ！」

「あはは」笑い声。

アシンメトリーな髪型。右目を隠した、生意気そうなクソガキがそこに立っていた。……気が滅入る。そう、か。そういや、妙な視線を感じていたが、それは、こいつだったのか。

レン。

数字付きを殺し、ゴリラ怪人を殺し、ヒーローを殺したモノが、そこにいる。ここで、笑っている。

「探したよ、お兄さん」

「こっ、こんな時に……！」

やべえ、騷り殺しだ。この状況じゃあ、それ以外にないぞ。

だが、レンは何もしてこない。俺を見て、それから、俺の足元を見る。

「何やってるの?」

「遊んでるように見えんのか!？」

「遊んでるの?」

「違うっつーの！」

「も、もう一人増えたモグ? お前の仲間か?」

「敵だ！」

しかも、考えられる限り最悪の。

「これ、怪人？」

レンはしゃがみ込み、モグラ怪人の腕を指差していた。

「だったらどうした!？」

「ふーん」レンは怪人の腕を、自分の両腕で掴む。

「なっ、何だモグ!？」

そして、引っこ抜いた。

大して力を入れていているようにも見えなかったが、こいつは、改造を受けているんだっただけ。

「モグウウウウウウ!？」

「あはっ、何これ!？ クマ!？」

レンは怪人の腕を掴んだまま、店の壁へと叩きつける。くぐもった呻き声を上げ、怪人は地面へとずり落ちていく。

戒めから解かれた俺は、その場へたり込んだ。良く分からんが、とりあえず助かったらしい。……とりあえず。

「う、うう? お、お前、一体何者モグ……?」

「駄目だよ。お兄さんと遊ぶのは僕なんだから。勝手に、お兄さんを取らないでよ」

誰が遊ぶかクソガキ。部屋に帰ってテレビゲームでもやってる。

「あっ、遊びでやってんじゃないんだモグー!」

モグラ怪人は起き上がり、レンに向かって爪を突き出した。鋭い。アレで切られりゃあひとたまりもないだろう。

「先に遊んでくれるの?」

しかし、すばしっこいレンには当たらない。彼は攻撃を掻い潜り、モグラ怪人の顎を軽く小突いた。それだけで、怪人の体がふらつく。「あはははっ、弱っ!」

ふらつく怪人の腹に拳を叩き込む。レンは容赦しない。ガキだから、加減を知らないんだ。こっ、第三者の視点から見ると、こいつの戦闘能力ってのは本当に凄まじく、恐ろしい。どうして、こいつが怪人になれなかったのか不思議でしょうがない。

「やつ、やめ……!」

モグラは地面に逃げようとする。だが、レンに尻尾を捕まれてじたばたとしていた。

「逃げるの？ 僕からお兄さんを取ろうとしたのに？」

「ぎゃああああお兄さん助けて欲しいモグーっ!」

「誰がお兄さんだ!」

可哀想だけでもうちよつとやられとけ！ せめて、このガキの残酷スイツチがオフになるまで！

俺はその場から逃げ出そうとする。

「お、お兄さんが逃げるモグー!」

「だっ、駄目だよ。ちゃんと遊んでよ」

「うるせえ馬鹿が!」

やってられつか人害どもめ。お前と遊ぶくらいなら、タランチュラの群れん中でメシ食う方がまだマシだ。

「じゃあ、邪魔なのを片付けちゃうね」

言っと、レンは怪人の尻尾を掴んだまま、宙ぶらりんになったモグラの腹へ蹴りを入れる。

何度も、何度も、何度も。……やり過ぎだと思った。やられてるのは、さっきまで俺に対して調子乗ってた怪人だけど、それでも。

「あはっ、は、あはははっ。どうしたの？ もう動かないの？」

モグラ怪人は声を上げる事すら出来ない。俺は、レンの手首を掴んだ。こうしたって、止める事は出来ない。力では敵わないのは、分かり切っている。だけど、これ以上は見えていられなかった。

「……何？」

上目遣いで尋ねられる。

「その辺で良いだろ」

「じゃあ、お兄さんが遊んでくれるの？」

「う。そ、それは無理だ」

「じゃあ、もつとこれで遊ぶもん」

レンが足を動かさうとした。

「それ以上やったら、もうお前とは遊んでやらねえ」

「ど、どうして……?」

今にも泣き出しそうな顔で、レンはこっちを見る。まるで、ただのガキだった。その辺で鼻を垂らしているようなクソガキだ。

「お前がやってんのは、遊びじゃねえんだ。殺す気かよ」

「壊れる方が悪いんだもん」

「壊す方が悪いに決まってるだろ!」

「う、あ……」レンは怪人から手を離れた。そして、俺から一步退く。

何だ?

「た、叩かないで。痛いよ、やだ……」

「ああ? お前、前も言ったけどな、自分が叩くのは良いのかよ。それで叩かれんのが嫌だって言うのか?」

そりゃあ都合が良過ぎるだろ。ガキだって言っても、そんなくらい分かるだろうが。

「や、めて……」

俺が前に出ると、レンは後ろに下がる。こいつ、もしかして俺にビビってんのか? でも、そんな馬鹿な。生身の人間に、改造人間が怖がる必要がどこにある。だけど、どう見たって、これは。

「じゃあお前がやめろ。蹴るのをやめろ。もう、こいつには手を出すな」

拳を振り上げて、殴る振りをする。それだけで、レンはへたり込んでしまった。しかも泣いている。事情を知らない人が見たら、ちよっと誤解されそうだった。俺は無実である。

「お、お願いっ、やめて」

「もうしないか!??」

「し、しないっ。しないから……」

鼻を吸る。すんすんと。

何か、すげえ悪い事をしているような気分になった。いや、待て。俺、待て。こいつに甘い顔見せたら、何されるか分からない

んだぞ。笑い掛けた次の瞬間には、笑顔で殺されるかもしれないだ。

「……お前、どうしてこんな事するんだよ」でも、俺は腕を下ろした。

「こんな、事？」

分かっていないのか。

「人蹴ったり、殴ったりだよ」

「あ、遊んでるだけだもん」

怒鳴りたくなるのを堪えた。

「人を、殺してんだぞ……！？」

「こわ、壊れただけ、それだけだもん！ 僕っ、何もしてない！」

「てめえ幾つだ！？ 責任逃れ出来るとでも思ってたのか！？」

レンは短く叫ぶ。本当に、怖がっているようだった。

「……う、うう……僕は、言われたただけだもん」

「何？ 言われた？」

何を？ 誰に？

「お兄さん、怖い……」

「お前、何の話をしてるんだ」

手を差し出すと、レンはそれを払い除ける。その衝撃で、腕まで痺れた。

「つてえな。だから……つて！ おいこら逃げんな！」

レンは泣きながら逃げ去ってしまう。俺は、訳も分からずその背中を見送った。どうせ、追いかけたところで追いつけないだろうし、癪癪起こしたガキに近づくほどアホな事もない。

とにかく、終わった。

モグラ怪人は倒したんだ。うん、そうしよう。俺が、倒した。そういう事にしておこう。

怪人を倒したけど、この後は良く分からない。社長、前にシャチ

を倒した時とかどうしてたんだろ。とりあえず、八百屋のおっさんと、警察に連絡しておいた。駆けつけてきたおっさんには滅茶苦茶お礼を言われたが、警察が怖かったので、俺は後の事を任せて、奥に引っ込んだ。

そんで結局、社長も九重も、朝になるまで起きてこなかった。

「おはよう、青井」

どうやら、社長の寝起きは……いや、寝つきは頗る良いらしい。

本人曰く、全然気付かなかった、との事だ。羨ましい。どこまで図太いんだ、あんた。

「褒めてあげる。一人で怪人を倒したのでしょうか？　すごいわ、私の期待以上の働きよ。ふふ、本当、すごい」

社長も、久しぶりに普通に褒めてくれた。

だけど、どうしても引っ掛かっている。レンの事だ。あのガキが、心配とかそういうんじゃない。俺は、狙われているのだ。何が奴のお気に召したか知らないが、次もあると、そう思って間違いないだろう。何とかしなきゃなんない。漠然と、そう思った。

我を抑えておけ！

今話題沸騰中の（一部で）ウゴロモチの怪人を倒した事で、カライズの知名度は少し、ほんの少し上がったそうだ。社長も、ほんの少しだけ嬉しそうで、毒を吐かれなくなって俺も嬉しい次第であった。

だけど、どうしても、あのクソガキの事が気になって、素直に喜べない自分もいる。気持ちが悪くて、早くどうにかしたかった。

俺は、ゴリラの言葉を思い出した。確か、レンは『拾われた』とか言っていた。あいつを拾ったって奴に会えれば、何か話を聞けるかもしれない。だけど、レンを拾ったのは、四天王のグロシユラだ。そう簡単に会えるとは思えなかった。

やっぱり会えなかった。グロシユラの部屋を調べて行っただが、ごく普通に、警備のゾウ型怪人に門前払いされた。ありや無理だ。潰される。

やはり、四天王とは簡単に会えるものではないのだ。エスメラルド様があんな感じなだけで、他の四天王は、もっとちゃんと四天王っぽくしているのだろう。だが、引き下がれるか？ ある意味、俺の命が掛かっているんだぞ。うん。無理だな。どうにかしてグロシユラに会わなけりや。けど、下手に動けば怪しまれる。レンに裏切られた今、神経とか過敏になっているだろうし。ちよっとでも怪しい真似をしたら、その場がぶーっといかれちゃうかもしれない。

仕事は終わって、着替えも済んでいたが、家に帰る気はしなかった。あのガキが、どこにいても分からないし。もはや、安全な場所などどこにもないのかもしれない。

組織で夜を明かそうとしたが、控え室に居残り続けるのもどうか
と思った。

「……で、わしの部屋か」

「うん」

爺さんは組織でも浮いているような存在だったので、レンについて、レンと遭遇した事について詳しく話しても大丈夫だろうと判断したのである（勿論、カラーズでの仕事中に会った時の事は言えないが）。それに、この爺さんは組織でも古株だ。グロシユラとのコネクションも持つてるかもしれない。

話を聞き終わった爺さんは、そうか、とだけ呟いた。レンの事、知らなかったのだろうか？ いや、そんな訳はねえよな。情報くらい勝手に仕入れてそうだし。

「それで、お前はレンをどうするつもりだ？」

「俺が知るか。ただ、グロシユラから話を聞きたいとは思ってる。拾ったのは、そいつなんだろ？」

「四天王だぞ」

知ってるよ。でも、肩書きなんか知るか。仮に、レンを拾ったのが総理大臣だとしても、俺は話を聞きたいと思う筈だ。そうに違いない。

「ガキが人を殺してるんだぞ？ そんなで、俺も殺されそうになっただ。親の顔見たいって思うのは当然じゃねえか」

「……親、か」

爺さんは、パソコンのモニターに目を向けていた。いつもは動くその指も、今日に限っては止まっていたが。

「拾ったなんて言い方じゃあ、アレだけどよ。けど、それならそれで責任があんだろ。人様襲わせといて、自分は何もしやがらねえ」
「ゴリラに任せたりじゃねえか。」

「一介の数字付きではグロシユラと会えんぞ。そもそも、会う必要

はない」

「何でだよ？」

「奴は、子供に人を襲わせるような真似はしないからじゃ。悪にも矜持というものがある。お前にも、ある筈だと思うがな」

矜持、なあ？

「爺さんはグロシユラがどんな奴かを知ってんのか？」

「まあ、長いからな」

「けどよ、スーツ脱げば、結局は人なんだぜ？ 爺さんの思ってる通りの奴じゃあないかもしれねえ。言い切れるのかよ？」

「言い切れる」

爺さんは俺の目を見ながら言った。歳食った割に、俺はその視線に気圧されてしまう。

「アレは、そんな事はせぬ。だが、お前の気持ちも分かる。レンが数字付きに手を掛け、裏切ったのは事実だからな」

「だったら！」

「レンは、誰かに何かを言われたと、そう言ったな」

俺は頷いてみせる。ガキは所詮ガキだ。頭悪いし、経験だってない。無邪気で、ムカつく。だから、子供に指図出来るような奴つてのは、大人だろう。レンに何か言ったのは、親、じゃないのか？

「グロシユラ以外の者が言った可能性も考えられる。むしろ、そっちの線が濃いじゃろ」

「誰が？」

「知るか。……しかしだな、レンとの接触を図れるような者は限られてる」

漠然とだが、その時、俺には爺さんの言いたい事が分かっていた。「それってまさか、ウチの中に……」

「言つな。それは言ってはならんぞ」

爺さんの目には、さっきよりも強い力が込められている。ビビった訳じゃねえが、俺は彼の意を汲んだ。

だが、考える事は止められない。レンと接触？ ふざけんな、そ

んなん、可能性が高いのは身内じゃねえか。あのガキに何か吹き込めるとしたら、外よりも中を疑うべきだろう。マジもんの裏切りじやねえか、それって。

「組織に混乱を招こうとしたのか……何か、狙いがあったの事か？」
「分からん。じゃが、ウチの組織について色々、知ってはいるらしいな」

レンは、何者かに唆された？ 組織の、裏切り者に？ そいつが本当の黒幕だったのか？

「青井、口は軽いか？」

「やめる。俺だって厄介事には巻き込まれたくねえよ」

爺さんは息を吐き、白い髭を指で弄ぶ。

「……とにかく、言うな。そして注意しろ」

どこに裏切り者がいるか分からないってか。

「俺は爺さんを信用しても良いのか？ 同時に、爺さんは俺を信用出来るのか？」

すると、鼻で笑われた。

「お前に大層な真似が出来るとは思えん。根っからの小者だからな反論する気にはなれない。

「それに、わしはもう、なくしてしまった」

「何を？」

「野心を。この歳になって大それた事を行う気力も、考えるつもりもない」

その言葉、どこまで信じて良いものか。だが、もしも爺さんが裏切り者なら、俺の身は危なかっただろう。誰を信じて、誰を疑うのか。難しいが。

「信じるぜ。爺さんには、俺のスーツも作ってもらわなきゃいけないんだからな」

俺は爺さんの部屋から出た。あのまま留まっても、重苦しく

なるだけだからだ。それに、彼はああ言っていたが、どうにも、俺はグロシユラって奴が信じられねえ。やっぱり、会って話を聞いてみたい。レンについて、あの、ゴリラについて。

と言う訳で、もう頼れるような人は、一人しかいなかった。

「四天王に会いたい？」

「え、ええ。まあ、噛み砕いて言えば」

江戸さん、お願いします。

と言つても、レンとの事を正直に話す訳にはいかなかった。深く突っ込まれるのも怖いし。なので、遠回りに遠回りを重ねて、頭を下げた。

話を聞き終えた江戸さんは目を瞑る。

「それは、難しいな」やっぱり。

「エスメラルド様には会わせたくない。スピーネル様の所在は知らない。残るのはグロシユラとクンツァイトの二人だが、クンツァイトは仕事の為、昨日からこの街を出ている。グロシユラについては、言うまでもないと思うが」

「警戒していますか」

江戸さんは頷いた。

「そもそも、私はエスメラルド様の右腕であつて、他の四天王と会う事も少ない。君と四天王を繋げるような力は持っていない。すまないと思うが」

「そんな、とんでもない。話を聞いてくれただけでも有り難いくらいです」

「ふむ。しかし、何故、四天王と？」

その視線は、少しばかり痛かった。レンが裏切り、一度は痛い目に遭わせたとは言え、しゃもじ女がうるちよろしているような状況である。何かを疑われてもおかしくはないだろう。

「話を、聞いてみたいんです」

「どのような話を」

俺は答えられなかった。

「……私は君を疑うつもりはないよ。だが、それは江戸京太郎として、だ。エスメラルド様の部下としては、君を疑わざるをえない。出来るなら、今の時期に目立つような行動をして欲しくはない」

尤もである。グロシユラに会いたいつてのは俺の問題だが、そのせいで江戸さんやエスメラルド様に余計な負担は掛けたくない。仕方がない、か。相手が相手だし。

「失礼するぞ」あ、エスメラルド様だ。あ、江戸さんが頭を抱えている。

「水、水」

江戸さんは冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。最近、胃の調子が悪いのだという。薬を持ち歩いているようだ。ストレスを与えている当の本人、エスメラルド様はコロツケパンに齧りついていた。

「エドー、どつか悪いのか？」

「ご心配なさらず」

「そうか。アオイ、パン食うか？」

結構です。……さて、組織じゃあ一晩だつて明かせそうにないし、とりあえず家に帰るか。

「アオイ、変な顔してるぞ。悩みでもあるのか？」

と、悩みのなさそうな顔で言われる。

「いえ、そんな、大丈夫です」

俺は部屋を出ようとしてエスメラルド様に背を向けるが、彼女は回り込み、俺の前に立った。そうして、顔を覗き込まれる。

綺麗な瞳だと思った。こんなところにいるのに、何も知らない子供のように、まっすぐで。

「隠し事するな」言えるか。

俺は江戸さんに助けを求めようとして顔を動かすが、エスメラルド様はそれを許さなかった。

「言わないと怒るぞ」

「う」やばい。

「……構わない。青井君、言いたまえ」

それは、果たして助け舟なのかどうか分からなかったけれど、俺は四天王に会いたいのだと告げた。エスメラルド様は自分を指差すが、そうじゃない。俺は首を横に振る。

「クンツァイトはどっか行ってるから、グロシユラになら会わせてやるぞ」

「えっ？」

ほっ、本当かよ。すげえ、流石四天王！

「いけません、エスメラルド様。今、グロシユラがどのような精神状態か、分からないとは言わせません」

「青井、何かするつもりなのか？」

「話を聞きたいだけです」

「じゃあ良いだろ」

江戸さんは椅子から立ち上がる。

「ですからっ」

「青井も」純真そのものが、俺を見つめる。

「裏切るのか？」

間を空けるな、俺。

「裏切りません」

エスメラルド様は相好を崩した。

「うん、会わせてやる。エド、ちよつと行ってくる」

「ああ、もう……行ってらっしゃいませ」

俺はエスメラルド様に手を引つ張られる。部屋を出る前、江戸さんに目を遣った。彼は『くれぐれも頼む』と訴えているようだった。

エスメラルド様に連れて行かれたのは、組織のトレーニングルームだった。腹筋台とか、ベンチプレスとかバーベルとか、ランニン

グマシーンだとかが置かれている。ここは男臭いし汗臭いから滅多に顔を出さないのだが、えー、ここにいんの？　ここに入んの？　躊躇いはない。

エスメラルド様は普通に扉を開けた。もわつとした熱気が、俺の顔を襲う。中にいた奴らがこつちを見た。スーツを脱いでる奴もいたが、怪人や、戦闘員のスーツを着たままでトレーニングに励む奴もいた。鏡を見れば、ちっこい子に手を引かれる俺がいた。こつ、これアレだから。この人四天王だからね？　勘違いすんなよお前ら！　「アオイはこういうのやらないのか？」

「毎日はやらないです」

ここを使うのは嫌なので、俺のトレーニングルームは自室である。腹筋とか背筋とか、回数も適当だけど。第一、俺ら下っ端が無茶苦茶な筋肉つけてもしょうがない。それよりも走り込む方がナンボかマシである。

エスメラルド様はトレーニングルームの、一番奥に足を進めていた。……扉があるが、この先は立ち入り禁止の筈である。だが、ここにいる奴らは何も言わなかった。と言う事は、やはり彼女の正体に気付いているのだろうか。

「邪魔するぞ」

「あつ、えー！」

扉が開く。中には、でかい男がいた。二メートル近い体躯である。そして、そいつはライオン型のスーツを着ていた。

こいつが、グロシユラ……？

「エスメラルドか」男は台の上で腹筋を続けていた。

「グロシユラ、アオイがお前に会いたって」えー？　エスメラルド様、会わせてくれたのは嬉しいけど投げっ放し過ぎ。

「我に？」

俺に視線が注がれる。グロシユラはただ腹筋しているだけなのに、俺は緊張して何も言えなかった。すげえ迫力。すげえ重圧。これが、四天王か。

「ん？ アオイ、話を聞きたいんじゃないのか？」

あ、ああ、そうだった。

「あの、初めまして。青井正義といいます。エスメラルド様の数字付き、十三番です」

「……そうか」適当に流されたのではない。グロシユラは、それだけで大方の事情を察したらしかった。頭使うのは苦手だって聞いてたけど、そうでもないじゃないか。何だか冷静っばいし。

「金剛が、世話になったな」

金剛というのは、多分、ゴリラの名前だったんだろう。

「江戸から話は聞いている。私の配下が……エスメラルド、お前にも申し訳ないと思っている」

「別に良い。それより、アオイ」

話をしたかったんだが、グロシユラが予想以上にこつくて怖い。

でも、思ってたよりは話が通じそうな奴だった。まあ、そうでもなけりゃあ部下には慕われないだろう。

「俺は、数字付きとして金剛さんと一緒に、その、レンに会いました」

「我もそう聞いている」

言う、のか？ ええいビビんな。言っちまえ。こっちは、てめえのガキに殺されかけたんだってな！

「そこで、レンに殺されかけました」

グロシユラは何も言わない。けど、腹筋は止めたらしい。台の上にあぐらをかき、俺を見ている。

「『どうしてこんな事をするのか』と聞いたら、あの子は言いました。『言われたから』と」

「何が言いたいか、我には分からん」

しらばっくれているのか？ ……それとも。

「グロシユラ様。あなたは、あなたが、レンを拾ったのだと聞きましました」

「それで？」

「……あの子に、何を言っただんですか？」

「何も。我はただ、レンを拾い、数字付きに加えたただけだ」
「だけ、だと？」

「レンは改造も受けていると聞きましたが」

「誰から聞いた」

「誰でも良いでしょう」

声が震える。でも、二人は笑わなかった。今更ながら、ここには、俺と、四天王しかないのだと気付く。

「ふん、そうだ。改造を受けなければ、レンの命はなかったからな。それが話か？」

命？ いや、今は関係ない。

「俺は、あなたが拾ったレンに殺されかけた。実際、あの子に殺された人もいる。どう思っているのか、俺は、それだけが聞きたかったんです」

「どう、思っているか……？」

グロシユラは台から下りる。酷く嫌な予感がしたが、俺の口は止まらなかった。

「レンに何をさせようとしているんですかと聞いています」

「そうか。お前は、我を、我を……疑っているのか！」

その動きを捉える事は出来なかった。グロシユラが消えたと思っただ次の瞬間、俺の眼前には、彼の爪が迫っている。

「よりもよって！ 我をっ！ 我おおっ！」

「グロシユラ」

俺に攻撃が届かなかったのは、グロシユラが思い止まったからではない。エスメラルド様が、彼の拳を受け止めていたからだ。

「私の部下を傷つけるつもりなら、許さない」

「そうだ！ エスメラルドっ、我を抑えておけ！ でないと我は、我は！」

……冷静じゃあなかったって訳か。ずっと、感情を殺そうとしていたって事かよ。畜生、にしたって、沸点低過ぎねえか。

「アオイ、話を続ける。私がこうしてるから、平気だ」

エスメラルド様に頷いて返す事すら出来ず、俺は口を開ける。

だが、気付いてしまった。トレーニングなんかしてたから、グロシユラは汗まみれだった。だから、今の今まで分からなかったのである。

こいつ、泣いてんだ。

一体、どうして。どうして泣いている？ 何が悲しくて、何が腹立たしくて泣いているんだ？

「アオイ」

きつと、グロシユラは自分が可哀想で泣いてるんじゃない。俺に腹を立てて泣いているんじゃない。その涙は、誰かを思って流したものだ。誰を？ 数字付きか？ ゴリラか？ レンか？ ……決まってる。全部だ。きつと、そうに違いないんだ。爺さんが言っていたのは確かだった。こんな、こんな奴が、くだらない真似をする筈がない。たとえ、その涙が嘘でも、演技だったとしても、今だけは騙されよう。

「グロシユラ様、申し訳ございません」

「おおおおおおおおおっ！ おおおおおおっ！」

もはや、話を聞いているかどうかも怪しい。

「……良いのか？」

エスメラルド様はこちらを見ないまま、尋ねる。

「分かった。アオイ、先に出た方が良い。私はこいつを落ち着かせるから」

「お願い、します」

死ぬほど、後味が悪かった。だけど、この場はもう、俺にはどうする事も出来ない。言われるがままにそこを出て、トレーニングルームをまっすぐに突っ切って、廊下に出る。

今のは、俺が悪かった。だけど、ああなったのは、裏切り者のせいなんだろう。そいつが余計な事をしなけりゃ、グロシユラが涙を流す事もなかったのである。

中か、外か？
裏切り者は、どこにいる。

正義を貫こうとする意思さえあれば

色々と会ったが、考えても仕方のない事は幾ら考えても仕方のない事なのである。時間を掛けても、悩みは解決しないのだ。割り切るのが、うまく生きるコツである。

最近、本当に動いてばっかだ。しかも危ない。しゃもじ女やらレンやらウゴロモチとか。一度は退けたつつーか、まあ何とかなっただけ、結局、全員が生きている。あのモグラ怪人を除けば、しゃもじもレンも、ただ逃げ帰っただけなのだ。また、戦うのかもしれない。……いや、戦うのは無理だな。あっちのが余裕で強いし。

俺が悩んでいても、仕事は入る。カライズも、そろそろ調子が良くなりそうだった。俺のお陰だな、うん。社長には給料上げてもらおう。

そんな訳で、今日も朝からお仕事だった。

「偉そうね」

「あー？ 何よ？」

俺はカライズのソファにどっかりと座り込んでいる。

「モグラを叩いただけじゃない。鬼の首を取ったように振舞っても、あなたの器が知れるだけよ」

「うるせえな。少しは浸らせろよ」モグラを倒したのは俺じゃあないんだけど。まあ良しとしよう。

「それよか、今日の仕事は何なんだ？」

「ウゴロモチの怪人を退治する事」

「げっ？ またかよ。」

「でも、どうなるのかしら。実は、今回の依頼者なんだけど、ヒー

「〇〇派遣会社に合同で仕事を頼んだのよ」

「合同？ すげえな、金掛かるだろ。そんな大掛かりな事すんのか」
「百貨店の者と言っていたけれど。とにかく、ウゴロモチの怪人を探して、倒してくれと言われたわ」

「探せえ？ そんな簡単に見つかるかよ。あいつら、だって土ん中いるんだぞ。」

「少なくとも、ウチはそんなに期待されていないわね。数合わせとあったところかしら」

「ま、適当に車でぶらついてりゃ良いって事だろ」

「ああ、今日は駄目よ。あなたは、その足でウゴロモチを探しなさい」

「九重が来れないのか？」

社長は首を横に振る。ふわふわとした髪の毛が、風に揺れた。

「私だけに乗せるから。あなたはあなたで、ちゃんと仕事をしていなさい」

「俺も乗せるよ」

「馬鹿ね。期待されていないからこそ、頑張るんじゃない。ウチはただでさえ人が少ないんだから、こつでもしないと見つけれられないわ」

「二手にしか分けられないじゃねえか。そうしたって見つからないもんは見つからないっつーの。」

「……もしもの話だけだよ、俺が怪人を見つけたらどうするんだ？」
「連絡をちょうだい。そつちに向かうから」むしろ、来ない方が良いかもしれない。邪魔になりそうだし。こつちはグローブもあるんだし、わざわざ足手まといを増やす必要はないだろう。

「無視したら給料はナシだから」
読まれていた。

本当に置いていかれた。くそう、俺だって車が良い。しかし、俺

一人つてのは、考えようによってはすげえ気が楽なのではなからうか。見張りがいないんだから、本腰入れて探す必要もない。他の会社のヒーローだってウゴロモチを探してるらしいし。うん、適当にやろう。ヤホーイ！

「仕事中だって事を忘れて、俺は普通にコンビニ寄ったり本屋とかレンタルビデオ屋で買い物をしていた。お腹が空いたから牛丼でメシを食う。これアレかなー、経費で落ちねーかなー、がはは。」

「携帯電話が鳴る。履歴を見ると、何回か着信がきていたらしい。マナーモードにしてたから気付かなかった。……社長からだった。とりあえず掛け直す。」

『今、何をしているの？』

「あ、メシ食ってます」

『……どうして、出なかったのかしら。もしかして、無視していたの？』

「いやいやいや、気付かなかったただけっスよ」

「何故か敬語になつてた。」

「用つてそれだけ？」

『目を離すと何をするか分からないもの』

「俺の女か、お前は」

「一々鬱陶しいんだよボケが。」

『舌つて、噛み切つても死なないものね』

「死ぬほど嫌つて事かよ。だったらもうマジで死んでくれよ」

「陽が沈み始めてきた。俺はウゴロモチの怪人よりも、今日の晩飯をどうするかを考えていた。近くにスーパーマーケットがあったので、何も考えずに入る。冷蔵庫ん中、空っぽだったっけ。うーん。ああ、またカレーを作り溜めしとくか。」

ビニール袋をぶら下げて、スーパーを出る。と、何だか、駐車場の辺りが騒がしかった。

「怪人が出たつてさ」

「へー、それより明日どうする?」

「合コン? めんどいなー、どうせあいつじゃろくなん連れてこないだろ」

大学生らしき連中がスーパーの中に入って行く。……怪人? 怪人が出たのか?

一応、仕事だ。俺は駐車場へ向かう。面倒な事が起きると予想したのか、車が次々と出ていって行く。すぐに分かった。地面が、盛り上がっている。まさか、ウゴロモチか?

「やべえ」とりあえず社長に連絡だ。くそ、しかし何だこのエンカウント率。俺の行く先行く先に出てきやがるじゃねえか、畜生。あー、もう、早く出る早く出るよバカ。

『何よ?』 うわ言い方ムカつく。

「スーパーの駐車場に怪人が出た。今、俺もそこにいる」

『嘘? 本当に?』

「本当だつて! こんな嘘吐くかよっ」

『スーパーつて、どこの?』

「ちよ、ちよい待てよ」

俺は財布からレシートを抜き出して、店名と住所を読み上げた。

『すぐに行くわ。あ、他のヒーローに先を越されちゃ駄目よ』

言ってる場合か!

携帯をポケットに戻して、考える。先手を打つのか? いや、アリだろう。前回、モグラとは戦ってるんだ。今回の怪人も似たような奴だろう。なら、大体分かってる。とにかく、土が盛り上がってるところに注意して、どっか、足場か何かになりそうなところに乗っていれば良い。だけど、駐車場は空っぽだ。車もない。このまま

じゃ、このスーパーが襲われる。……でも、買い物済んでるしなあ。危ない目に遭いたくないし、ギヤラもとっくにもらってるだろうし、わざわざ俺が行かなくても良いんじゃないのか。つーか、良いだろ。俺はそこから距離を取り、コンクリートブロックに腰を下ろす。とりあえず、社長を待つか。

近くを走っていたのだろう。社長たちはすぐにやってきた。そして、座ってぼけっとしていいる俺の頭が叩かれる。

「何すんだよっ」

「怪人は？ ……あなた、見ていただけなの？」

「そりゃそうだろ。こええじゃんか」

社長は呆れた風に息を吐いた。

「ヒーローとしての誇りはないのかしら」ないね。

「それより九重、今回もアレか、モグラ怪人なのか？」

「……み、見てみないと分からないです」

けど、全然出てこないし。

「青井、ちよつと、真ん中辺りまで歩いてみなさい」

「はあっ！？ お前が行けよ！」

いきなり何を言い出すかと思えば、こいつは！

「もついでーじゃん。九重、タクシーはどこに止めてんだ？」

「お店の裏っ側に停めてます」

「うんうん。早くしなきゃケーサツにがたがた言われるかもしれないな。帰るか」

「あなたが決めないで。ほら、行きなさい」

社長が指し示しているのは駐車場ではない。地獄だ。い、いや、怖いって。今はいいないって言っても、ほら、何かこつ最悪なタイミングでガツと足を掴まれたりするかもしれねえじゃんか。

「いつ、嫌だ！ そ、そうだ！ せめて、何かくれよ！ ツルハシは？ ツルハシはないのか？」

「あれは、あなたが取られちゃったんじゃない。九重、出しなさい」
九重はポケットから紙袋を取り出す。何だ。今日は何が出てくる
って言うんだ。

「今日は怪人と戦わないと思っていたから、さっき急いで作ったの」
「……作った？」

すると、九重が紙袋を広げた。そこには、穴が三つ開いている。
ちょうど、人間の目と口にあたるような部分に、穴が。

「マスクしか用意出来なかったわ」

「えっ、これマスクなの？ 被れて事なの？ ねえ、ちよっと？」

「つべこべ言わないで。ほら、ヒーローなら顔を隠さなきゃ」

茶色い紙袋を握らされる。もういい加減にしてくれよ。

「まともなスーツは、いつになったらもらえるんだ」

「青井、一つだけ言っておくわ。ヒーローを名乗るには、スーツの
有無は関係ないの。大事なのは、気持ちよ。悪を憎み、正義を貫こ
うとする意思さえあれば、他には何も要らないの」

「うるせえバカ！」

グローブは装着していたが、心細かったのでコンクリートのプロ
ックを持っていく。一歩先を爪先でちょんちょんと確かめながら少
しずつ進んでいく。

「男らしく歩きなさい」

外野は黙ってる。体張ってるのは俺なんだぞ。

かなりビビっていたが、駐車場の真ん中まで来ても、特に何もな
かった。怖がらせやがって。まあ、ここに用事なんかねえよな。そ
このスーパ―を襲撃しに来たんだろうし。あーあー、ビビって損し
た。

「ここにやいねえよ」

「じゃあ、ちよっとそこで踊ってみて」

「てめえが踊れ！」

だん、と。足で思いつきりアスファルトを踏んづける。

「……ヒミミミミ」

ん？

「おい、変な声出すんじゃないやねえよ九重」

「だ、出してませんっ」

何か、でも声が聞こえた気がするんだけど。

「ヒミミミミ、こんなところにもヒーローがいるとは」

「なっ、何だ！？」

叫んだ瞬間、足元から何かが這い出てくるような気配を感じる。

そこから飛び退くと、地面から腕のようなものが生えているのが見えた。いや、違う。

「怪人だっ」

「ヒミミミミミっ！ その通り！」

そうして、腕は引つ込む。くそ、やべえ！ だが、ここは駐車場の真ん中だ。土ん中を自由に動ける怪人にとつちや、俺は袋のネズミに違いない。とりあえずブロックを置き、その上に立つ。

「くそ、またモグラかよ」

「モグラじゃあない！ ヒミズだ！」

「ヒミズ？」

何だそりゃ。

「モグラの偽者みたいなものです！」

「誰がパチモンだヒミ！ 僕ちゃんはウゴロモチのヒミズ型怪人、あのモグ公とは一緒にしないでもらおうか」

「ごっつ、ごめんなさい」

怪人に謝ってんじゃないやねえぞバカ。……くそ、モグラとは違うとか言ってるけど、やってる事は殆ど同じじゃねえかよ。

「モグラとは違うところを見えてもらおうヒミ」だから同じだっつーの！

声だけが聞こえる。良く見れば、駐車場には小さな穴が幾つも開

いていた。アスファルトが盛り上がり、俺の方へと迫ってくる。

「む。被っているのは珍しいマスクヒミ」

「ただの紙袋だよ！」

俺はブロックを担いで逃げ出した。

「青井、こつちには逃げて来ないでよ」

「人でなしが！」

ヒミズ型怪人は楽しそうに笑っている。クソが、ム力つくぜ。俺は立ち止まり、迫ってくる怪人に向けてブロックを放った。

「うっ、うお！いきなり何をするヒミ！」

「調子乗りくさってからに！そこから引きずり出してボコボコにしてやる！」

モグラン時には出来なかったが、今なら可能だ。ここら一帯のアスファルト引っぺがしてやらあ！

瞬間、激しい物音が聞こえた。誰かが怒鳴るような声もだ。スーパ―の入り口辺りに目を向けると、こつちに向かつて誰かが走ってくるのが見える。

「あっ、あの子は」

「青井！」

レン、か？走っているっつーか、逃げてるようにも見えるが。

何から？あのガキが背中を向ける相手なんて、そうはいねえだろ。

「おおおおおおおおおっ！」

「うっ、うあ、うあああ！」

レンは既に半泣きだった。そして、彼から僅かに遅れて駐車場に入ってきたのは、ライオン型のスーツを着た、大男だった。そいつは赤いマントを付けて、数人の戦闘員を従えている。正しく、獣の王。くそ、遠目で見てもやべえって分かる。間違いない、四天王のグロシユラだ。でも、どうしてこんなところに。

「む？何かいっぱい足音が聞こえてくるヒミ。お、お前の仲間か？」

ぶざけんなよ、マジで。

畜生、畜生畜生！アレか、俺のせいなのか。昨日、グロシユラに俺が余計な事言ったから、野郎、見事に焚きつけられたって事かよ！あの様子、レンを連れ戻しに来たって感じじゃあない。殺しに掛かってやがる。

「……チャンス、ヒミ」

「うっ、うおおおおおおお!?」

あ、足が引つ張られる！しまった、やっちまった！

「馬鹿っ、よそ見しているから！」

このままじゃ社長たちも巻き込まれちまう。幸い、ヒミズ怪人は俺に気を取られてる。今なら、こっち側から逃げられる筈だ。

「九重っ、社長を連れてけ！」

「で、でも青井さんが」

「馬鹿野郎！お前らがいない方が良いんだろっが！タクシー持ってこい、こっから逃げるぞ！」

九重は頷くが、社長はここから逃げるのを拒んでいる。

「駄目よ、置いていけないわ」

「社長は無視しろ！良いから行けっ！」

「でも……」九重の視線を追いかける。その先には、必死に逃げるレンがいた。

……ふざけんなよ、マジで。お前、殺されそうになったんだぞ。

あいつをっ、可哀想だとか思っくんじゃねえぞ！

「ヒミヒミヒミ……」

「どわああっ!? 畜生離しやがれっ」

どうしろってんだ!? このままじゃ俺だっつてやばいんだぞ。どうして、こんな事になってんだ！

「いい加減にしろよっ！だからっ、こっつうのは嫌なんだ！」

レンが転んだ。グロシユラが拳を振り上げる。俺には、何も出来ない。

俺には。

「おおおおおっ、私の邪魔をするかあああああ！」

グロシユラがレンから距離を取る。

否、レンからではなかった。彼の前に立つ、赤色のヒーローから、距離を取ったのである。

「ガキに手を上げようとするとするたあ、悪党め」

巨大なしゃもじを持つ赤い女が、レンを庇うようにして立っていた。彼女はグロシユラを睨みつけている。また出てきやがったな、しゃもじ女。だが、そうだ。お前はヒーローなんだろ。今だけは有り難がつてやるよ。

「どけええ女っ」

戦闘員がしゃもじ女に襲い掛かる。だが、彼女は得物を振るって、そいつを吹き飛ばした。

「グロシユラ様は奴をっ」

「ここは俺たちが引き受けます！」

「おおお、おおおおっ！ すまんっ、すまん！」

レンは再び立ち上がって逃げ出していたが、グロシユラはしゃもじ女の脇を走り抜ける。彼女は、戦闘員に足止めを喰らっていた。

だが、そうだよな。ヒーローってのは、こういうのに敏感なんだよな。

「そこまでだっ」

上空から、何かが飛来する。グロシユラは立ち止まり、それを見上げた。

真っ赤なコート。長い茶髪。特徴的な高い鼻。背の低い男が、空を飛んでいる。彼の靴底からは、炎が噴出し続けていた。デパートで俺をボコった奴じゃねえか。どうやらあの時も、ブースターで空を飛んでいたらしい。

「とうっ、サンライトマスク参上！」

橙色のターバンと覆面をした、全身タイトの男がグロシユラの前に立つ。

「へー、あんたがグロシユラっての？」

「初めて見た。結構やりそうじゃねえか」

ちやらちやらした大学生風の男が二人、グロシユラの後ろに立つ。そして、先ほどから無言で立ち続けるヒーローもいた。イダテン丸と呼ばれていた、公園で出会った忍者である。

ヒーローが、六人か。一組織の幹部クラスに、この数を多いと見るべきか。いや、時間さえ経てば、もつと多くのヒーローが手柄を立てにやってくる筈だろう。

「ひっ、ヒミ……!?!? 何だか様子が変だヒミ」

あ、こいつの存在忘れてた。

……だけど、どうする。グロシユラを見殺しにも出来ない。かと言つて、レンを殺させるのも駄目だ。しかし、今の立場でヒーローと敵対するのもまずい。パワーバランスとしちゃあ、悪の組織が不利だろう。どうする。どうすりゃ良い。

「助けに来たぞグロシユラ!」

「うえっ?」 変な声が出た。

なっ……!

「おおおっ、すまん! おおおおおおっ、我は、我は!」

「気にするな! 行くぞエド!」

「……仕方ないですね。数字付き、グロシユラたちの援護に!」

なっ!? え、エスメラルド様!? 江戸さんに、数字付きまでいるじゃねえか! あいつら、今日は非番とか言つてたじゃ……いや、良く見りゃ、数字付きは全員揃っていない。半分以下だ。急遽、集められるのを集めたって感じだな。

っーか、やべえ。俺が一番やばい感じがする。

ただっ広い駐車場に、ヒーローとヒールが入り乱れて戦闘を開始する。もう、頭が追いつかなかった。

それが俺の正義だ

とんでもない乱戦だった。社長と九重は端っこに避難しているが、ヒーローの数は多くなっているし、騒ぎを聞きつけた他の組織の戦闘員や怪人もやってきていた。レンがどこにいるのかも分からない。混乱に乗じて、上手く逃げてくれていると良いんだけど。

「ヒッ、ヒミミ！ 意味が分からんヒミ！」

「お前とは気が合いそうだ！」

ここにはカライズだけじゃなく、組織の方の上司も来ている。長居は無用だ。とっとと逃げなきゃとにかくやばい。それに、俺が逃げなきゃ社長と九重は動かない。本当、馬鹿！ 早く死んじゃえ！ ええい、とにかくつ、その為には、足元のこいつをぶん殴る！

俺はグローブをしている右手に力を込める。

「くたばれやモグラが」

「僕ちゃんはヒミ！」

アスファルトを砕く。その音には誰も気付かない。誰もが、誰かと向かい合っている。こつちを向いてる余裕はない。好都合だった。俺にはグローブしかない。だから、悪の組織の戦闘員としての正体がバレる前に、カスみたいなヒーローだとバレる前に、こいつを片付けちまえば問題ない。

俺の足を掴んでいた手が、地面に潜ろうとする。させまいと、怪人の逃げる方向へパンチを放った。もう一度、アスファルトが割れて砕ける。

「ヒーツ！ スーツもないのになんつーパワーだヒミ！？」

お前が出てこなけりゃ、もつと簡単に逃げられたんだ。ただじゃおかねえ。もう二度と、地上に出たいと思えなくしてやる。

怪人の尻尾を右手で掴み、引っ張り上げる。アスファルトの上に転がし、腹あ狙って拳を放った。

「だらああああああ　　！」

「ぎゃ……！」

手応えありだ。怪人は痙攣を繰り返している。死んでないけど、当分は動けねえだろ。おっしや、今だ。今しかねえ。……とりあえず、こんな場所にこの状態での放置は可哀想だったので、ヒミズ怪人の足を持ち、俺は社長たちへ駆け寄る。息苦しかったので一度だけ袋を取り、すぐに被り直した。

「良くやったわ、青井」

「アホ」俺は社長の頭を小突く。

「……謀反？」

ふざけんなつ。

「行くぞ。この人数だ、巻き込まれちゃあ本当にやばい」正体がバレるからな。

「ええ、そうね。……九重？」

社長が動いたと思ったら、今度はこいつか。俺は九重の肩を掴み詰め寄る。彼の肩は思っていたよりも華奢で、少し驚いてしまったが。

「死にてえのか？」

目を伏せて、九重は首を横に振る。

「あの子が……」

「お前はまた、そんな事を言ってるのか。なあ、何でだ？ どうして気になる。あのガキは、俺を、社長を、お前だって殺そうとしたんだぞ。分かってるよな？　なあ、そこまで馬鹿じゃないもんな」

九重は俺を突き放した。睨みつけてやると、彼が涙を流しているのに気付く。……俺の周りは、泣き虫ばっかだ。

「子供ですよ……？」

「子供だからってなあ、何したって許される訳じゃねえんだぞ！」

「でもっ、でも！　あの子は！」

聞き分けのない奴め。お前だって体はでかいが充分ガキだ。

「放っておけないっ。こっ、殺したけど、そうかもしれないけど、

だ、だからって！ だからって殺されても良いなんておかしいです！」

俺は、拳を握った。お前は一人づつせえんだ。

「どうしてっ、こんな……もうやめてよ！ 誰かが止めてよ！ あの子はぬいぐるみが好きなの、ただの子供なのに！」

どうして、泣いてるんだよ。どうして、誰かの為に泣けるんだ。

お前も、グロシユラも……！

「青井さんはヒーローなんでしょ！？ だからっ、だからお願い……」

……お願い、あの子を、助けてあげて……」

九重はその場に泣き崩れる。社長が、彼の頭に手を置いてやった。止める、だと。誰を？ どうしろってんだ。ほら、泣いてないで見ろよ。

「おおおおおおおおおっ！」

「エスメラルド様っ、そちらは危険ですっ……数字付き、あの方を守れ！」

「サンライトソードっ！ 掛かって来い悪人もめ！」

「うわあああああ！？ 足っ、足が燃えて……」

「エドっ、私よりもグロシユラを助ける！」

「レンはどこだあああああああっ！？ おおっ、おおおおおお！」

ほら、あっちを見ろよ。

あそこはもう、俺みたいな半端者がいていい場所じゃあない。スーツを着たクズどもと、改造を受けたクズどもが楽しそうにやってるじゃねえか。俺が、ヒーローだと？ 馬鹿言うんじゃねえよ。スーツもないのに、やれっつのか。あのガキを助ける為に、俺に死ねっつと言っつのか、お前は。

正義と悪が、混ざり合っている。ある意味、俺には相応しい場所なのかもしれない。

だけど、俺は、ヒーローじゃあない。戦闘員でもない。俺は、酷く宙ぶらりんなんだ。

「なあ、社長」

社長は顔を上げる。

「俺は、何なんだ？」

「こんな、こんな、俺みたいな奴に、何が出来る。何が守れるって言うんだ。」

「何を迷っているの？」

「……何をって」

何を？ 俺は何を、迷っているんだ？

「俺は……」

「あなたはヒーローでしょう。ヒーロー派遣会社カラーズの社員、青井正義。違うかしら？」

「違う、けど」

「けど、俺はヒーローじゃないって。社長、あんたは知らないだろう。俺がこの六年間、悪の組織の戦闘員として働いてきたのを。今も、働いているって事を。」

「ヒーローよ、あなたは。高性能のスーツがなくても、強力な武器がなくてもね」

「スーツも武器も、あんたが渡さないだけだろうが」

「ちよつと盗まれちゃって」

「言ってる」

クソが、そんなまっすぐ俺を見んじゃねえよ。

正義か、悪か。どちらにつくか。俺が迷ってたのは、つまるところ、そういう事なんだろう。

「どんな事情があるにせよ、泣いている子供を見過ごさず訳にはいかないわ。そして、その子を見無視する者は、ヒーローだろうと何だろうと、私は許せない。悪を滅ぼせ、正義を守れ、とは言わないわ。ただ、あなたはあなたの正義を貫きなさい」

俺の正義？ 俺に、正義？ んなもん……。

「ないとは言わせない」

向こうの混戦に目を遣る。

エスメラルド様も、江戸さんも、しゃもじ女も、空飛ぶヒーローも、イダテン丸も、皆が戦っていた。金の為だろうと、名声の為だろうと、結構じゃないか。奴らには、確固とした信念がある。自分の正義を、己の悪を掲げているのだから。

レンは、今も蹲っている。駐車場の隅で小さく。

グロシユラはレンを見つけたらしい。ゆつくりと、しかし堂々と歩を進める。彼を阻む者はいない。誰かがあいつを止めなけりゃ、レンはきつと死ぬ。グロシユラに殺される。

「俺にも、あるのか」

分らない。分かんねえよ、そんなもん。けど、俺は、そういうのを見たくない。正義だとか悪だとか、そんなもん知らねえよ。だけど、この気持ちを正義だと呼ぶのなら、悪くはない気がした。

「俺の正義が」

「あるわ。そうに、違いない。保証する」

「そうか」

俺は気を失っているヒミズ怪人の尻尾を掴む。

「……九重、タクシー持ってこい」

「青井、さん……？」

「あのガキを助けたいんだろうが。俺が、あいつを持ってくる。お前は待ってる」

怪人が目を覚ましても厄介だ。申し訳ないが、てめえにはそのままできて欲しい。

俺は、怪人の腹を見遣る。

「すぐに戻る。……いつてくるぜ」

「ええ、いつてらっしゃい」

ヒミズ怪人が吹き飛ぶ。ヒーローとヒールの間を擦り抜けて、地面に落ちる。俺は駆け出していた。チャンスなんて、二度とない。いや、初めからないのかもしれない。けれど、走る。

「なっ、何か飛んで……!」

「こっちにくんぞお!？」

「袋だ! 袋!? 袋だけ被ってやがるこいつ!」

喧騒を無視して、あのクソガキのところへ向かう。誰も彼もが俺を見る。だけど手出しは出来なかった。と言っよりしないんだ。スーツを着ていない小者は相手にされなくて当然だ。てめえらは、仲良くそこでやり合ってる。

……よりによって、端っこに逃げやがって。そんでもって動かない。ガキが。今の状況で、てめえを助けようと思う奴なんかいやしねえんだ。そこで待ってても、誰も来ないんだ。分かれよ、もう。

「おおおおおおおっ、おおおおおおお!」

グロシユラか。

正直、真正面からいってもこいつにや勝てん。勝てる奴なんか、いるとは思えねえ。でもやる。

息を吸い込め。気を引け。俺の存在を、分からせてやれ。

「グロシユラアアアアアアアッ!」

グロシユラがこっちを見る。構わず、俺はこいつの脇を擦り抜けて、レンの前に立つ。

「……お、おお。我を、我の邪魔を……!」

怖いな。すげえ怖い。トレーニングルームで話した時とは全く違う。野郎、アクセル全開じゃねえか。話し掛けても、時間稼げるか? いや、何か喋れ。戦闘に入ったら、死ぬのはこっちなんだ。

「お兄さん、誰……?」

「よう、クソガキ」

レンは、俺のズボンの裾を握り締めていた。ガキがこっちを見上げた瞬間、その目から涙が零れる。

「泣くな」

「……え? お、お兄さん?」

「言っなよ」

うーん、流石に気付かれたか。まあ、良い。俺は袋の位置を調整

する。万が一にでも、脱げないようにしとかねえとな。

「おっ、おおっ！ おおおおお、我の邪魔をする貴様は、何者だ！？」

「袋マンだ」

「ヒーローか！ 我を悪だと断ずるか！ その子供を守るか！？」

貴様は知らぬだろう、それは鬼の子……！」

何言ってるんだ、てめえ。

「違うね。こいつはただのガキだ」

「違わぬわっ！ 盲目めっ、子供を守ればヒーローだと信じているのか！」

それも違うだろ。

俺は、あんたにレンを殺して欲しくないんだ。どうせ、他の誰かにやられちまうなら自分がつて考えたんだろうけどな。けどな、グロシユラ。お前は昨日、泣いていたんだだろうが。

「ぼ、僕……壊されちゃうの……？」

「そつだ！ 我が殺す！ そこで大人しくしている！」

グロシユラは俺をねめつける。憤怒が、立ち上っていた。

「凝り固まったモノを！ 我に押付けるな！」

「俺は、このガキを守らなきゃなんねえ。今のあんたには渡せねえんだ。悪いけどな」

「その子供が罪を犯していたとしても守ると言うのか！ それが貴様の正義か！？」

正義も悪も関係ない。むやみやたらに悲しむ必要はないだろうが。第一、グロシユラはレンを殺したくないんだろう。最初からそのつもりなら、こうして俺と言葉を交わす必要はねえもんな。

「若いのだっ、貴様は！ 貴様の正義は未熟そのもの！」

「それが俺の正義だ」

青い正義と笑わば笑え。だけど、これが俺の正義だ。中途半端で適当で、先も見えない俺だけど、今だけはやらせてもらう。貫かせてもらおう。

「吠えるか！」

限界だな。

「あ、わっ！？ えっ、何！？」

「逃げるんだよ！」

俺はレンを抱えて、グロシユラから背中を向ける。奴は追いかけ
てくるだろうが、時間なら充分稼いでんだよ。

「おおおおおおっ！ 貴様！ ぬうっ、後ろからとは！」

しゃもじ女が、乱戦の中を抜けてきている。奴の戦闘能力なら、
勝てるかどうかは別として、グロシユラの相手くらい出来るだろう。

「お兄さんっ、どうして、どうして？」

どうして助けてくれるの、か？ 馬鹿が。俺はてめえみてえな憎
たらしい奴どうでも良いんだよ。

「九重って奴に感謝しろよ」

「う、うん」レンは素直に頷こうとするが。がくんがくん揺れて変
な声を上げた。

駐車場の出入り口にはタクシーが停まっている。九重が、こっち
に気付いて手を大きく振っていた。逃げ切れる……！

「お兄さんっ、前！」

「なっ、この……！」

最悪だ。グロシユラからは逃げ切れたが、俺の前には、

「止まれ」

エスメラルド様が立ち塞がっていた。

畜生、畜生畜生ふざけんなよ。もう、あと少しでタクシーに乗り
込めるんだぞ！ どうして、あなたがここに出てくるんだ！

戦う？ いや無理だ。彼女も、れっきとした四天王なんだ。昨日、
グロシユラの拳を受け止めていたじゃないか。今、俺は数字付きじ
やない。あの人は決して、今の俺に笑顔を見せてくれやしないんだ。
敵、なんだ。

「クソガキ、離すぞ走れるか」

「あの人、強いよ……」うるせえ、そんなん分かってんだよ。けど、

このまま突っ切るしかないだろうが。

俺は走りながら、レンを殆ど落とすような形で離れた。彼は転ぶ事なく、両足で地面に着地する。そうして、俺の隣に並んだ。

「壊すの?」

「壊すなっ」

エスメラルド様は、敵だ。

覚悟を決めて、俺は彼女を睨みつける。エスメラルド様のまつすくな瞳が、こちらを捉える。グローブがある。だから、俺はこれで、お、俺の正義を貫く、たっ、為に……!

「お、おおっ、退け! 退けよっ、退いてくれええええ!」

「……………っ」

エスメラルド様は、何かに気付いたような顔をして、構えを解いた。俺とレンは立ち止まった彼女を見ながら、走り抜けていく。

退いて、くれたのか? でも、どうして?

「お兄さんっ、僕、どこに行けば良いの!?!」

「泣くなって言ってるんだろ! あのタクシーに乗れっ」

九重が後部座席を開いて待っている。彼は運転席に戻り、俺たちはそこに飛び込んだ。

「行きます」

「うっ、おおお!?!」

滅茶苦茶飛ばしやがるな!?

レンが倒れそうになるので、俺はこいつの頭を抱き抱える。

スーパーの方を見ると、まだまだ戦いは終わりそうになかった。

誰が、どこにいるのか分からない。だけど、あそこではまだ正義と悪が掲げられている。

「こっ、この車、どこに向かってんだ?」

一体何キ口出てんだ? たかがタクシー、こんな飛ばせるものなのかよ!? ふ、風景がっ、線になって流れていつてる!

「そんなの決まってるじゃない。私たちの……………」

社長は何かそれっぽい事を言い掛けるが、青い顔でビニール袋を

握り締めた。

「あ、酔ってきた……」

「吐くなよっ？ 絶対に吐くなよ！？」

白くてね、かっいいいいーロー

眠い。

意識は既に覚醒しているが、布団から起き上がりがりたくない。この温かさを失いたくない。今日、仕事あつたっけ？ 確か、夜から組織で仕事があつたっけ……？ だりいいい。行きたくねえええ。あー、すげえ体がだるい。

「うっうっうっ……」

もう動きたくねえよ。ずーっと、ここでこうしていたい。

「うっうん……」

寝返りを打つと、頬に柔らかいものが当たった。目を瞑って、二度寝をしようと決め込む。今まで滅茶苦茶やらされていたし、たまにはさー、だらけんのも良いじゃん。良いよね。良いに決まってる。俺の眠りを妨げる者は、何人たりとも許さん。

「……お兄、さあん……」

「…………んん？」

至近距離から声が聞こえる。同時に、俺のものじゃない吐息が顔に掛かった。

俺の腰に、何かが巻きつく。……手？ これ、手？ えっ？ 目、目は、目は……開けられなかった。そして、昨日何が起こったのかを思い出す。

そう、スーパーマーケットだ。そこで、俺はウゴロモチのヒミズ怪人を倒した。やったぜ！ しかし、そこでレンとグロシユラを見つけてしまった。知ってる奴が死ぬとか殺すとかいうのは好きじゃないので、俺はレンを助けた。と言うか助けてと九重に頼まれた。何が正義とか悪とか、やっぱり分かんないけど、まあ、やってしまったものは仕方がない。組織の上司に楯突くような真似をしてしま

つたが、バレて、ない、よな？ うーん。けど、あの時、エスメラルド様は何かに気付いているみたいだった。もしかして、袋を被ってるのが俺だって、気付いたんだらうか。

やめておこう。今は、ゆっくり休みたい。

まあ、俺と同じ布団で寝てる奴に気付かなけりゃの話だったんだけどな。すやすやと寝息を立てる奴を見て、俺は諦めたように寝返りを打った。

昨日、俺はレンを自分の家に連れ帰った。カライズに連れて行っても、危険だと判断したからである。見た目は子供、でも中身は猛獣と変わらない。スイッチがオンになれば、社長と九重に危害を加えるかもしれないのだ。正直、俺の家にも連れて行きたくなかった。疲れ果てて眠るレンを背負い、通行人からはちよつとした好奇の視線を浴びる。死にたくなかった。つーか、このガキが目え覚ましたら殺されるかもしれない。

「はあ」俺は溜め息を吐いて、布団の上に座り込む。レンは、まだ眠っていた。

どうして、連れてきちまったんだらう。俺だってこいつには殺され掛けたのに。……甘い。超甘いな、俺。

テレビでニュースをぼけつと見る。また、ウゴロモチの怪人がどこかの店を襲ったらしい。ウチの組織の四天王が倒されたとか、そういう報道はなかった。取り上げられなかっただけかもしれないが、何かあれば江戸さんから連絡も来るだらうし、とにかく、安心である。昨日、あの戦場がどうなったのか、気になるが、今はレンをどうにかしないといけないだらう。とりあえずグローブをはめておく。

「……………ん、ん」

レンが寝返りを打った。じつと見つめていると、ゆっくりと、目

が開いていく。俺は思わず身構えた。目を覚ました彼は、じつとこちらを見つめていた。それから、きよろきよろと視線をさ迷わせる。「あ、お兄さん……?」

「よ、よう」「手を上げる。レンは小さく笑った。

「ここ、どこ?」

「俺の家。つっても、安いアパートだけだな」

それでも、風呂とトイレはついている。押入れや冷蔵庫まであるぞー。はあ、そこそ良い部屋だと思っただけだなあ。

「お兄さんの? あ、僕……どう、なったの?」

レンは起き上がるうとしたが、俺は手で制した。何か、こいつを動かすのが怖かったのである。

「昨日の事、どこまで覚えてる?」

「タクシーに乗った、んだよね、僕」

「そこまでか。まあ、その後は大して説明する事もないんだが。」

「その後、俺の部屋に運んで。お前はずっと寝てたんだよ」

「……生きてるんだよね?」

「ああ。誰も死んでねえよ」

「グロシユラも、きつと生きてるだろう。」

「あんな、聞きたい事があるんだけどよ」

「レンは小さく頷く。やけに素直だった。まるで別人だった。こいつには、色々と聞きたい事がある。改造についてとか、裏切り者について、とか。けど、まあ、起きたばっかじゃ頭も動いてねえだろう。」

「その前に、メシでも食うか」

「良いの? だって僕……」

「遠慮してんのか? ……良いよ、テレビでも見てる」

「そういや、昨日色々買ったけど、あんな事になったから食材とか駐車場に置きっぱなしだったんだよな。冷蔵庫は、空っぽだ。食パンならあるけど、うーん。」

「パン好きか?」

「う、うん。食べられる」

「そうか」何かごちねえ。けど、しょうがないか。ついこないだまで、こいつはただの危険人物で、俺はこいつの標的になってたつて間柄だもんな。……それに、仲良くする必要だってない。いつまでも、こいつをここに置いておくつもりもない。落ち着いたら、グロシユラのところ連れて行こう。

簡素な食事を終えた後、俺はテレビの音量を少しだけ下げる。何から聞こうか迷ったが、裏切り者については後回ししようと決めた。

「お前、改造受けてたんだってな」

「う、うん。そうだよ」

「それは、お前が頼んだのか？」

レンは首を横に振る。その仕草が、とても弱々しいものに見えた。「気付いたら、なつてた」

「ああ、そうなのか」どんな改造を受けて、どんな能力を持っているのか、突っ込もうかとも思ったが、俺は口を噤む。

「僕、ここが弱かったんだって」

言つて、レンは胸に手を当てる。……グロシユラは命がどうとか言つてたな。心臓が悪くて、それを治す為に手術をつてのは、マジなのか。

「でも、僕は強くなった。ケガもしないし、病気にもかからなくなつたんだよ？」

だよつて言われても、困る。羨ましい事なのかどうか、俺には分からなかった。

「あの、ライオンみたいな怪人に追われてたよな？」

「うん。僕を拾った人。グロシユラつて名前なんだ」

知ってる。が、レンには俺が組織で働いてるとは言わない方が良さそうだな。

「親みたいなものか？」

「ちょっと違うかも」

でも、拾われたんだろ。そんな奴に、本気がどうかは別として、襲われてたんだぞ。何か、言えよ。へらへらすんなや、クソガキが。「改造って聞いて、何とも思わなかったのかよ」

「あは、分かんない」

楽しそうに笑いやがる。怪我也、病気もしなくなった、か。それって、痛いのも、苦しいのも、辛いのも、全部なくなったって事なのかな。だから、こいつは笑うのか？ 他に、どういう顔をして良いか分からないから。それで、ずっと楽しくやってきた訳だ。自分への、他人への痛みを忘れて、好きに生きてきたんだ。

「ああ」思わず、声が漏れる。

だから、俺にビビってたのか。あんな、たかが拳骨一発で、こいつは痛みを思い出した。トラウマって言葉を使うのは、簡単過ぎるかもしれないけど。

「……なあ、前に言ってたよな。『言われた』って。そいつに言われたから、組織ってのを裏切ったのか？」

「お兄さん、知ってるの？」

「ほら、その、グロシユラって奴が言ってただろ？」

「そうだったっけ」

レンは小首を傾げる。俺は無理矢理に押し通した。

「なあ、誰に言われて、あんな事をしたんだ？」

「変なスーツを着た人」

「変な？ も、もつと情報をくれ。」

「変なつて、どんな？ ヒーローみたいなんか、怪人みたいなスーツか？」

「白くてね、かっこいいヒーローみたいだった。僕のね、友達だつて言ってくれたの」

言葉が、出なかった。

かっこいい、ヒーロー？ お前の、友達？

「あははっ、僕はね、何でも出来るんだつて。だから、言うとおり

にしたらさ、皆、壊れちゃった。あは」

本当のヒーローが、そんな事をするかよ。友達つてのは、そんな事をしないんだ。

「皆が弱いから、壊れちゃったんだよ」

「……だから、僕は何も悪くないってか」

「え？」

「いや、何でもねえよ。それより、そいつの名前とか、どこにいるかとか分かるか？」

レンはふるふると、首を振った。否定の意を示したのだ。やりきれねえ。けど、裏切り者の情報は掴めた。白い、ヒーロー。いや、ヒーローっぽいスーツを着ていただけだ。……これだけ、か。爺さんや、他の奴らには言えねえな。つーか、誰に言えるよ？

やっぱり、レンをどうするか、もう少し考えた方が良さそうな気もしてきた。こいつを自由にしたら、そのヒーローとやらにまた何か吹き込まれるかもしれん。

「出かけてくる」

「あ、僕も……」

「いや、ここで大人しくしてろ」

「な、なんで？」

マジで分かかってねえのか？

「俺はな、今からカラース……車椅子の女の子と、タクシードライバーの格好をした奴、覚えてるか？ そいつらんとこまで行くんだよ」

「僕も行きたい」行ってどうすんだよ。また襲い掛かるうすんのか、ああ？

睨むと、レンはめめそめそとし始める。また、泣き出した。改造受けてんだろ。笑えよ、もう。鬱陶しいから。

「……や、やだ」

「わがまま言うなよ」

グローブは外せない。これだけが、今の俺を支えてくれているよ

うな気がしていた。

「ひっ、う、うう……ひとりに、しないで」

「そんな目で見ても駄目だからな」

身支度を済ませて、靴を履こうとする。シャツを掴まれて、背中に顔を押し付けられる。温い。涙が、俺のそこを濡らしていた。

何が悲しくて泣いてんだ、お前は。痛くないんだろ。辛くないんだろ。

「一個、約束しろ」

「す、するっ、何でもするからあ……」

「ちゃんと聞いてから答えろよ。あんな……」

人を殺すな。そう言い掛けて、俺はやめた。流石に、ひでえ言い方だと思ったからだ。

「もう二度と、人をおもちやにすんな。それが約束出来るんなら、連れてってやる」

ちらつと、振り向く。レンは頷いていた。何度も、何度も、何度も。

カライズの前に着き、ビルを見上げる。隣に立つレンも、俺に連れてビルを見上げた。その拍子に、野球帽が落ちそうになる。一応、変装用としてレンに無理矢理被らせたものだ。

「ここ？ 何か汚いね」

「ああ」生返事をして、エレベーターのボタンを押そうとする。けど、やめた。閉じられた空間で、このガキと二人きりになるのが恐ろしく思えたのだ。いや、一応、俺の言いつけを守っているのか、レンは大人しかった。だけど、俺はあの日を、あの夜を忘れた訳ではない。

最近、社長は鍵をかけていない事が多かった。俺が顔を出しに行

くようになつてからか。けど、無用心なのでやめといた方が良くないか。

部屋つつーか会社ん中に社長と、九重もいた。

「あら、青井……と、その子は」

レンは社長を見て、小さく頭を下げる。俺は、こいつの事をどう説明していいものか考えた。組織で知ったのを省けば、レンについて話せる事なんか、殆ど残りやしない。

「名前は？」

「え……あ、レン。黄前^{おつまえ}レンだよ」へー、初めて知った。オーマエつて、どういう字なんだろ。後で聞いてみるか。

「そう」社長は微笑んだ。

「私は白鳥澪子。ここで一番偉いの。あなたも、私には敬意を払いなさいね」

こんなチビにそんな事言つたつて仕方ねえだろ。

「あー、社長。こいつの事なんだけどな」

「怪我とかは、していないのかしら」

俺ではなく、レンが返事をする。大丈夫だよって、屈託のない笑みで。

「そう、良かったわね」

「良かったわねって、それだけか？」

「ええ。別に、聞きたい事もないし」

本心からそう言つたのか、俺には分からない。けれど社長は指定席に戻り、窓を開ける。

「良い天気ね」

そうしていると、さっきから黙り込んでいた九重が、つかつかとレンに近づいていく。

九重はしゃがみ込み、小さなレンと視線を合わせた。頭を撫でられたレンは目を細める。

「……これ、あげる」

「あ、イヌだーっ」

ぬいぐるみ？ 九重は、レンに犬のぬいぐるみを渡す。それを受け取ったクソガキは、嬉しそうにそれを抱き締めた。

「いいの？ いいの？」

「……うん。大事にしてね」

こいつは、まあ、そうか。昨日の時点で何も気にしていなかったもんな。九重め、気が小さいのか、そうでないのか分からない奴だな。

しかし、こうして見ると、本当にただのガキだな。人を傷つけないうって約束を守っていれば……こいつ、誰かにしつけられたとか、そういう経験がなかったのかもしれないな。聞き分けは、まあ、その辺のハナタレに比べりゃ良い方か。

「青井、あなたはその子をどうするつもり？」

「ん？ あー、そうだな」レンがこっちを見上げる。

レン、か。とりあえず、警察に持つてくのが筋つつーか、一番手っ取り早いよな。もしくは、こっそり組織まで連れて行くか、だ。だが、昨日の今日でグロシユラに渡すつてもどうだろう。もう少し、時間を置いた方が良いんかな、やっぱ。

「警察は駄目よ」

「はっ？ なんでだよ？」

「だって、訳ありなんでしょう」

「だったら九重、お前がこいつを引き取れよ。お前が、助けてくれて言ったんだからな」

九重は慌てていた。すぐに拒否するのもレンに悪いと思ったのか、目を泳がせているだけではあったが。

……いや、ちょっと待て。社長と九重にレンを任せるのはまずいな。もしもって時、ザ・口だけ達者組じゃあレンは押さえられないだろう。畜生、貧乏くじだ。

「ぼ、僕は……」

「皺んなるから離せや」

レンは俺の後ろに回り、ズボンの裾をきつく掴む。

「懐かれているじゃない。じゃあ、決定ね」

「青井さん、そのう、お願いします」

「……………とりあえずだぞ、とりあえず」

くそ。どうして俺が、こんなガキの面倒を看なきゃなんねえんだ。お前らで助けるって言っというて、後は俺任せか。っーか！ いつもそうじゃん！ 言うだけ言っつて、尻拭いすんのは俺なんだ！

「そんな目で睨まないでよ。私も考えておくから」

「ちっ、マジで頼むぞ。それよか、仕事って入ってねえのか？」

「何も。何も無いわ」社長は窓の外に目を向ける。

「じゃ、帰るか」

説明しなきゃなあ、とか考えていたが手間が省けた。

「え？ も、もう帰るの……………」

「買い物しなきゃダメだろうが。お前、着替えとかどうすんだよ」

「あ、あはっ、そっか。ん、そうだよね！」

レンは俺の手に視線を注いでいる。こいつが何を求めているのか、分かるうともしなかった。

「面倒見、良いじゃない」

「……………ですね。青井さんって良い人だ」

聞こえてんだぞ、お前ら。

こづいっ時は炭酸に限る

「そっいや、お前一人でいたんだろ。メシとかどうしてたんだ。金
は？ 水族館にも行ってたよな。ナンボか持ってたんのか？」

「あははっ、なくなっちゃった」

あ、そう。そう、か。また、余計な出費が……社長か九重に請求
してみるか。

レンの着替えや日用品、食料品を買い込んで家に戻ると、午後の
七時を回っていた。財布の中身は空っぽに近いし、体力も限界であ
る。今日は、もう休もう。無理。しんどい。数字付きの誰かに連絡
しとこう。風邪引いたとか、適当言っとくか。

「お兄さん、お電話？」

「ああ、そっだよ。仕事、今日は休むんだ」

こっして、そろそろ一日の終わりに差し掛かっていく訳だが、レ
ンは大人しかった。デパートでも、スーパーでも、俺の傍を離れな
いで歩いていた。暴れられるよりはマシなんだけど、それはそれで
気持ちの悪いものもあった。

「仕事、ないって言ってたよ」

そりゃカラーズの方な。

「掛け持ちしてんだよ。そっちは大体、夜からの仕事なんだけどな
「そ、そうなの……」レンは心細そうに俺を見ている。いや、そん
な目えされても行く時は行くから。」

「今日はアレだけど、明日からは行くからな。ちゃんと留守番しと
けよ」

返事はない。レンは俯いていた。また泣き出すつもりか、こいつ。

さて、電話も済んだ。特に怪しまれてもいなかったし、大丈夫だろう。……まあ、明日は江戸さんやエスメラルド様に会うのかもしれないけど。はあ、考えても仕方ない。そろそろ晩飯にすつか。

「お兄さんお兄さん、見て見て似合う？」

「あ？」

レンはくるくる回っていた。意味が分からなかったが、今日、買ってきたばかりの服をこいつは着ていたのである。知るか。似合うかどうか考えて買った訳じゃねえよ。安いを選んだだけだ。サイズ合ってりや文句ねえだろ。

「……もつとさ、黒とか青のが良かったんじゃねえか？」

「そうかなあ？」

レンが着ているの真っ白いパジャマである。こんなん、この歳になつて買わされるとは思ってたなかった。他にも、下着とか、色々買わされた。

「つーか、もう寝んのかよ」

「ううん、次はこれを着ようかな」

まあ、ああしてる内は大丈夫だろう。

「晩飯、どうする？」

「あ、ぼ、僕が作る……」

「作れんのか？」

言つてから気付く。そーいや、こいつ、初めて会った時にテント張つてたよな。小学生にしか見えないが、生活力はあるのかもしれない。

「お肉、ある？」

「豚肉が冷蔵庫に入ってる……ってこら、何するつもりだ？」

振り向いたレンは、鉈を持っていた。ぶ、豚肉って俺の事じゃないからな？

「お料理だよ？」

「まさかお前、それで……いや、やつぱいい。しまえしまえ、そんな物騒なもん。包丁ならその辺にあるから」

「使いやすいのに」レンは鉈を振り回す。

「やめろって！ 駄目だつ、料理ん時にそれはなし！ 約束追加な！」

文句を言うかと思つたが、レンは鉈をタオルで包み、押入れにしまった。ふう、助かつた。

「で、何を作るつもりなんだ？」

「豚肉だつたら、しょうが焼きかなあ」

「しょうがなんてウチにはないぞ」

「じゃあソテーにするね」

レンは台所に立つて、まな板やら包丁やらを並べ始める。何だか、俺よりも手慣れて見えたので、口出しは控えておこうと思つた。

「あ、エプロンとかないの？ お洋服に、油が跳ねちゃう……」

「エプロンなあ？ そんなもんねえよ」

しかし、こいつと初めて会つた時には想像も出来なかつただらう。まさか、こいつの作つたメシを食う事にならうとは。

食卓には、レンの作つた料理が並べられていた。言つていた通り、ポークソテーに、サラダに、スープまである。そこで、いつの間にかご飯も炊いていたらしい。その間、俺はずっとテレビを見ていただけだつた。ずっと、テレビを。味が、不味いか美味いかは関係ない。これはもう申し訳ないの一言だらう。

「あー、明日は俺が作るから」

「うんつ、楽しみにする。さ、お兄さん、召し上がれ」

レンはにこにこしていた。何が、楽しいんだらう。相変わらず、分かん。

「はい、どうぞ」

「お、サンキュ」茶碗には白米がうず高く積まれていた。馬鹿にし

てるのかと思っただけど、レンもそれくらいよそつていたので、何も言わない事にする。まあ、アレか。育ち盛りだもんな。あっはっは、食い潰す気か、てめえ。

でも、メシは美味かった。

風呂に入って、二人分の布団を敷く。そんで、電気を消「あ、点けといて欲しいな」そうとして、やっぱりやめる。

「怖いのか？」

「う、うん。……ダメ？」 布団に包まりながらレンは言う。マジかよ。

時刻は、うあ、まだ十時過ぎじゃん。駄目だ駄目だ。俺は寝られそうにない。いつもなら、組織の仕事でバリバリ動き回っている頃だし、体は正直である。全然眠くない。それでも、とりあえず布団には入っておこう。

「お兄さん、おやすみなさい」

「あー、うん。お休み」

やっぱり寝られん。ケータイで時間を確認すると、まだ十一時になったところだった。こりゃアカン。少し、体を動かそうか。とは言え、ガキは寝てるし、筋トレするのもアレだろう。コンビニまで散歩にでも行くか。めんどくさいから、起こさないよう、静かに、静かに……。

「んっ、んん……」

体を起こした瞬間、隣のレンが寝返りを打った。敏感な奴である。

「トイレ？」

「いや、コンビニ」

「あ、僕もいきたい……」

えー？ やだよめんどくせえなホントによろ。

「寝てるよ」頼むから。

「やだ、いく」袖を掴むな。しがみ付くな。……こいつ、マジで何なんだ。

しかし、嫌だって言ってもついてくるつもりだな。しょうがない、暴れられるよりはマシか。

「戸締まりは？」

「やったやった。それより、コンビニ行っただけぞ。わざわざ着替えなくても良いじゃんかよ」

「だって、折角買ってもらったんだもん」

レンはくるくると回る。子供っぽいプリントのＴシャツと、短パンである。見せびらかすほどのもんじゃないだろうに。

「お前さ、眠くないのか？」

「ね、眠くないよ」嘘だな。

「家帰ったらちゃんと寝ろよ。それで、明日は一人で留守番な」

「んー、あはっ、ねえ、僕もお兄さんの仕事場に行っちゃダメ？」

駄目に決まってるんだろ。俺は答えず、無視する事で自分の意志を示した。つもりである。

レンは俺の隣に並んで、ちらちらとこっちを見上げていた。言いたい事でもあるんだろうか。けど、聞き出そうとは思えなかった。コンビニまで、十分歩くか、歩かないか。気まずいつつ、変な感じである。多分、こいつが大人しいからだ。残虐スイッチがオフになってるレンは、普通の小学生にしか見えない。悪の組織の四天王であるグロシユラの庇護の下、改造を受けたバーサーカーには見えん。初対面での印象が強過ぎるんだろう。

「あは、どしたの？」

「何も。あ、つーか、お菓子とか買ってやらねえぞ」

「分かってるよう……あれ？」

レンが足を止める。俺は止まらずに歩き続けた。それでも、彼は追いかけてこない。

「……置いてくぞ」

「お兄さん、走ろう」

「ああ？」

「やだよ。だるい」

「変な人が後ろから来る」

「変な？ 俺は振り向いて、レンよりも後方に目を向ける。が、暗いし何も見えねえ。」

「嘘吐くなよ。悪い子にはゲンコツをくれてやるっ」

「やっ、やあつ！ それはやめてよっ」

「しゃがみ込むレン。ちよっと楽しくなる俺。……アホだな。ガキ苛めて何が面白いつてんだ。」

ふと気になつて、もう一度後ろを見てみる。すると、誰かが歩いているのが確認出来た。あいつが、変な奴か？ まあ良いや。どんだけ変でも、俺に危害を加えさえしなけりゃ。」

「ほら、行くぞ」

「ミミズだ」あ？ 誰がミミズだよ。てめえこらクソガキが。」

「お兄さんじゃなくて、後ろの」

「レンは指を差す。それにつられて見ると、」

「みみ見つけたあ……」

「ああ？」

二人組のミミズが、俺たちを指差していた。いや、ミミズみたいなスーツを着た二人である。どっかの戦闘員か？ けど、俺たちを見つけたって、言わなかったか？

「みみみ、モグラとヒミズをやった奴だ」

「みみ見つけたあ」

「ミミズがこっちに近づいてくる。」

モグラとヒミズって、アレか。おい、あいつらの事か？ つまり、何か、このミミズ怪人はウゴロモチの戦闘員で、仲間を倒した俺を

狙ってるって事なのか？ ふざけんなよ。今、完全に手ぶらだぞ。財布とケータイしか持ってねえ。つーか、俺の事をどうやって調べたってんだ。こっちは正体隠してヒーローを……モグラか？ あん時、ヘルメット被ってたけど顔丸見えで戦ってたし。野郎、警察から逃げ出したのか？ いや、違う。今は、どうやって、どうにかするかを考える。

下っ端の戦闘員だとして、スーツのない俺が戦える相手じゃあない。グローブがないんだから、俺はただの青井正義でしかない。だが、奴らこっちを狙ってやがる。素直に逃がしてはくれないだろう。「お前ら、ウゴロモチか？」

「……みみ見つけたあ」

「みみみ、ビンゴか。俺たちやウゴロモチの戦闘員よう。モグラとヒミズから聞いてるぜえ、てめえがやったんだろう？ なあ？」

ヒミズって、あいつも生きてたんかよ。乱戦に放り込んでやったから、死んでるか捕まったかと思ってたんだが。甘かったか。

「スーツも着てねえザコにやられた怪人に成り代わるには、今しかねえよなあ、みみみ」

「みみ見つけたあ」それしか喋れねえのか。

畜生、社長め。もっとまともなスーツをくれてたんなら、正体バズに済んだのに。……戦闘員が出てきたタイミングから考えて、偶然ではない。俺は、ウゴロモチにつけられていたらしい。しかしこいつら、仲間の敵討ちにしちゃあ楽しそうだ。怪人を倒した俺を倒して、成り上がるうつつか。馬鹿がつ、一般人ボコったって仕方ねえだろ。

「人違いだぜ、よそ当たんな」

「……みみみ、てめえの面あ割れてんだぜ。それに、そっちのガキが何よりの証拠だろうが。なあ、子連れのヒーローさん」

「そうかよ」俺が落ち着いていられるのは、レンがいるからだった。こいつら、モグラから聞いてねえのか？ あるいは、騙されてんのか？ ヒミズをやったのは俺だが、モグラをやったのはレンなんだ。

そして、レンにはスーツなんかいらぬ。改造受けてんだから、戦闘員程度一秒掛かんねえ筈だ。その気になりゃ、そのガキがやってくれんだろ。

「お兄さん、どうするの？」

レンがこつちを見上げてくる。おかしいな、まだスイッチ入ってねえのかな。

「お前がやりゃ話は早いだが」

「え、でも……」

「みみみっ、お喋りはそこまでだろ！」

ミミズが仕掛けてくる。二人いる。同時に向かってこない。タイミングずらつもりか？ 無駄だろっ。レンに攻撃は当たらないし、次の瞬間死ぬのはめえだ！

……何、やってんだ？

「みみみっ、こいつ抵抗しねえ！ ガンジー気取りかコラアっ！」

「みみ見つけた、見つけたあ」

ミミズどもは二人掛かりでレンに攻撃を続けていた。一秒なんか、とつくに過ぎてる。

「お、お……」声が出ない。出して、戦闘員の気を引いたら、次に殴られんのは俺だ。

レンは、ミミズの攻撃を受け、捌き、避ける。だけど、攻撃には回らない。踏み止まり、ひたすらに耐え続けている。だから、何をやってんだよ。殴れよ。蹴れよ。鉈あねえけど、充分だろうが。どうして、どうして反撃しないんだ！？

「みみみ、てめえ倒したらそこでギャラリィンなってる兄ちゃん殺してやるからよ！」

「みみ見つけたけたあ」

戦闘員の攻撃は鈍い。だからこそ、レンは耐えられる。改造を受けて、身体が強化されているのもあるが……いつまでも喰らってら

れるもんじゃない。俺なら、一発でぶっ倒される。それを、あのガキは防ぎ切っている。

「何を、何やってんだ!？」

レンの瞳がこちらに向いた。それを確認して、俺は声を荒らげる。「やれよっ、いつまで亀みてえに固まってんだ!」

俺はお前に期待してたんだぞ! ふざけんなっ、てめえが死んだら、次に死ぬのは誰か分かってんのか!？」

「そんな奴らに時間掛かってんじゃねえよ!」

その時、レンの口が開き掛けた。だが、ミミズの攻撃が彼の頬を捉える。レンは僅かに体勢を崩し、別のミミズの蹴りを喰らった。

レンは、俺に何か言おうとしていた。こっちの機嫌を窺うような、媚びた目で……あ。

あ。嘘だろ。そうか。こいつ、守ってるんだ。

『一個、約束しろ』

こいつ、俺との約束を守っているんだ。律儀に、馬鹿正直に。戦闘員だつて、スーツ脱げば人だから。だから、こいつは……どうして? 分かるだろ、手を出して良い時と、そうでない時がつ。火の粉だよ、そいつらは! 払わなきゃならねえだろうが! 手え出さなきゃ、自分がやられちまうつて、お前も分かっているだろ!？」

そして、俺は何をした。

ガキに全部押しつけて、助かるうとしてたんじゃないか。何が正義だ。何がヒーローだ。

俺は、レンを知らない。分からないし、分かるうともしなかった。だけど、あいつは俺との約束を守ろうとしてたつ。

「……ガキがつ」

言いたい事があんなら言え!

「みみみっ!？」

ミミズがこっちを向く。が、遅い。俺は近くにいた方の戦闘員の

背中を蹴つ飛ばす。足は痛むが、その分向こうにもダメージは通つてる筈だ。

「逃げるぞ！」

レンを見ながら叫ぶ。彼はもう片方のミミズを手で押し、そこから逃れて、俺と合流する。立ち止まらず、二人して走った。

「みみみっ、逃がすか」

「みみみみみみみみみみ……」

「ぼ、僕っ、僕ねっ」

「うるせえ黙って走れっ」

馬鹿が。馬鹿が馬鹿が馬鹿がつ。どこまでガキなんだお前は！

何とか撒いた。人通りこそ少ないが、だからこそ、近くにはヒーローがいる。ここらをうるつくヒーローの事なら、俺だつてある程度は把握していた。ミミズどもめ、今頃はあいつの攻撃で火炙りにされてんだろうな。

「お兄さん」

レンは息一つ切らしていない。俺は肩で息をして、電柱に体を預けているっつーのに。

「コンビニ、通り過ぎちゃったね」

「……楽しい散歩だったろ」

「あはっ、ちよっとびっくりしちゃったけど」

「そうか」

迷った。

俺との約束を守っていたのか？ 聞きたかったけど、やめておく。「さっきのミミズね、何か言ってた」

「何を？」

「『ヴィーフホリ様が動く』って。ヴィーフホリって、何だろ」

聞いた事ねえ。が、大方奴らのボスって感じだろう。怪人か、それとももつと上の存在かもしれん。けど、今はそんなん考えてらん

ねえ。今は……ああ、今もいいや。やめとこつ。

「喉、渴いたな」レンは少し戸惑ったのが、間を空けた後に小さく頷く。

「こういう時は炭酸に限る。スカっとしたのが良いんだ。……どうしたんだよ、行くぞ」

「んっ」

全く、ガキだな。どっからどう見ても。

手、つないで？

俺の部屋に俺以外の奴がいる。しかも寝ている。しかも昨日から。しかも、いつまでいるのか分からないときたもんだ。

あくびをして、そいつを見る。レンは、寝相が良い。布団も乱れていないし、すうすうと寝息を立てている。

「んう、んっ……」時折、寝言を口にするくらいのもので、そこに関しちゃう困る事はない。

昨夜はウゴロモチのミミズ戦闘員に追い回されたけど、どうにか家に戻れた。俺が無事目覚められたって事は、奴ら、ヒーローに見つかってボコられたか、一度逃げたか、だろう。ま、必要以上に警戒する必要はなさそうだ。

問題は、レンである。この野郎、組織に改造されたバーサーカーだつてのに、昨日は全然反撃しなかった。俺との約束を守っていたんだろうけど、その約束は時と場合に依じて破棄してもらわなきゃまずい。……ガキに戦わせるなんて無様な真似を避けりゃあ済む話でもあるけどな。うん、レンが目え覚ましたらちゃんと覚えておこう。

「おいしい？」

俺は無言で頷く。朝食はフレンチトーストとコーヒーという簡単なものだったが、作ってもらったのでそういう事言うのはやめておこう。

「あんな、昨日の事なんだけど」

「ミミズの？」

「じゃなくて、お前の。……手、出さなかったよな？ アレってや

「つぱり……」

レンは笑った。満足そうに、である。

「うん、お兄さんとの約束。僕、ちゃんと守れてたよね？」

「ううーん、やっぱり、そう、か。そうなるか。」

「あー、そーだな。けど、時と場合によるぞ。社長や九重みたいな一般人ならともかく、あいつらは戦闘員で、明らかに俺たちを狙ってた」

「でも、約束……」

「ああいう時は忘れる」

「良く、分かんない。じゃあさ、僕は誰と遊んでも良いの？」

「まっすぐな目で『誰なら殺して良いってんだアアン』と言われる。安易には答えられない。と言うか、ここで誰なら良いとか、そういうのを言うのは違うような気もする。そりゃあ、駄目なもんは駄目って教えなきゃならねえけど、強制っつーか、それはやだな。」

「お前を殴ろうとする奴なら、まあ、良いんじゃないか」

「蹴るのは？」

「……もうちょっと柔軟にだな」

「でも、お兄さんとの約束、破りたくない」

「しゅんとするレン。朝から面倒な話だった。」

「そんなくらい自分で考える」

俺はテレビに視線を移す。ニュースじゃあ、政治家の汚職だとか、良く分からのをやっていた。こいつらもスーツ着れば良いのに。そこで命令聞かせりゃ良いのに。そつちのがまだ分かりやすい。

「じゃあ、お兄さんが危ない時は、良い？」

「何が？」

「殴ったり、蹴ったりしても。そ、それなら大丈夫だよ……」

俺が危ない時か。やばいなーと思っただらまず逃げるけど、そういう状況になったら、十中八九俺は死ぬ。死んだ後までレンの面倒は見られねえから、まあ良いだろう。どうでも。」

「とりあえずはな。でも、色々考えとけよ」

「う、うん」女子アナが可愛くなくけりやこんなニュース番組ゼってー見ねえわ。あー良いよなー女子アナ。俺ももつと有名なヒーローになって、すげえやべえ事件解決したらインタビューとかされちゃうんかなあ。やっぱ今の時間はこの子が良い。他の番組の女子アナは歳がいき過ぎてる。早く交替しろ。若いし、おっぱいだし、何より「黒髪だよなあ……」黒髪つてのが良い。大学生ん時は合コン三昧で、野球選手とあんな事やこんな事をしてるんだろうけど、清纯っぽいのが良い。

「あ、とりあえず今日は連れてくけどな。社長と九重の言う事はちゃんと聞くんぞ。あの二人を殴ろうなんて考えるなよ」

「九重つて、ぬいぐるみくれた人だよね？ 僕、あの人好き」
じゃあ大丈夫だな。

社長に呼び出され、カライズに向かう。ちゃんとした仕事の話ではなさそうだったが、組織の仕事も夜からで、それまでは暇だし、何よりレンと二人きりで部屋にいるのは息が詰まりそうだった。

「青井、ビラ配りよ」

社長の第一声。えー、っーか仕事かよ。

「何、その不満そうな顔は。カライズの宣伝なんだから、気を入れなさい」

「ウチの？ ……金は、出るのか？」

いつもの席、窓際にて社長は小さく笑う。

「勿論、五百円出すわ」

「それつて時給？」

「日給だったら？」

どっちにしる安いわボケ。まあ、暇だからやるけど。それに、社員が増えれば俺も楽が出来る。

「駅前で配るのか？」

「そのつもりだけど？」

部屋の隅で、レンは九重に相手してもらっていた。何か、床には色んなアニマルのぬいぐるみが並んでいる。

「じゃあ、あいつは留守番な」俺はウゴロモチから『子連れヒーロー』の烙印を押されている。レンを連れて行かなければ、バレないで済むかもしれない。それに、駅前は怖いな。人が多いから、あのガキが何するか分からないし、レンを知ってる奴が通るかもしれない。

「ここに一人で置いていくの？」

「何されるか分からないから、不安なのか？」

「そうじゃなくて、可哀想じゃない。……九重」

社長に呼ばれて、九重はすぐに立ち上がった。

「今日は車を出さなくても良いわ」

「……えっ？ ど、どうして、ですか？」

「駅前だし、たまには歩きたいのよ。それより、頼みたい事があるのだけど」

あ、まさかこいつ。

「あの子と一緒に留守番を」

「ちょっと待て。流石にそれは……」レンと九重が二人きりになるんだぞ。そりゃやばいだろ。いくら、あいつが約束を守ると言っただって、不安は残る。

「……レン君となら大丈夫です。すごく、良い子だから」

「いや、でもな」

「心配ないわ。……あの子、水族館に会った時とは違うもの」
違うって、何が。

俺の視線に気付いた社長は、更に声を小さくする。

「怯えてない。前は、もっと、こう、ね？ 青井、あなた懐かれてるのよ」

「はあ？ 訳分かんねえぞ。つーか、知らないからな。俺からもあいつに言っとくけど、九重。殺されても文句言っなよ」

「……青井さんは、時々酷い事を言います」

「時々じゃなくて常々よ」
くそう。レンめ、お前のせいだぞ。

駅前で安っぽいチラシを配っている間も、俺はレンの事が気になつていた。ちゃんと約束を守っているだろうか。九重に迷惑を掛けていないのだろうか、と。

「青井」

「何だよ」

「親の顔になつているわよ、あなた」

俺は自分の頬を抓った。これでもか、と。

「誰が親か。良いからチラシを配れ、チラシを」

「私は見張りよ。あなたが怠けたら、その分お金を引かなくちゃいけないもの。具体的に言えば、溜め息一回で百円ほど」

「横暴だ」

「口答えは罰金よ」

あー、たのしいなー、チクシヨウが。

別のヒーロー派遣会社が出てきたので、弱小カライズはさつさと逃げる。まあ、早朝のそこそ良い時間に三時間近くやれたんだ。今日はそこそこ受け取ってくれたような気がしたし、新入社員が来る日も近い。俺の後輩かー。使える奴だったら良いなー。

んな事をばけつとしながら考えて、社長と一緒に会社に戻る。

「……早かったですね」

九重と、

「あつ、お帰り！」

何か良く分からん子供が出迎えてくれた。誰だお前。

そこはかとなくレンと似ているが、髪の色が違う。奴は金だったが、この子供は黒い。黒レンだ、黒レン。

「金レンはどこに行った？」

「あは、お兄さん何言ってるの？」

「おや、仕草までレンにそっくりである。双子か？ まあ、冗談だけだ。」

「染めたんか、髪」

「え、う、うん……だって、その……」

「ええい不良めっ」

「わああっ、やめてよう！」

「ん？ でも金髪から黒髪だしなあ。不良とは言わないのか、こういうの。びっくりするから勝手に染めないで欲しいんだけど、俺は別にレンの親じゃない。どうこう口出しする資格はないだろう。染めたきゃお好きになって感じである。」

「しかし、なんでまた……」 気になるものはしようがないが。

「……レン君が染めたいって言うから、手伝ってあげたんです。駄目、でしたか？」

「いや、そういうのは俺が口出しする話じゃねえからさ」
だから、理由を聞きたいんだけど。

「レンをじっと見ていると、彼は俯いた。恥ずかしそうに。恥ずかし、そうに？」

「あの、だってお兄さん……」
早く言えや。

「黒髪が、好きって言ってたから」

「………は？」

「だから、僕……」

「は、何？ え、何？ 俺が、黒いのが良いって言ったのか？ いいっ？ ……アレか？ そういや、朝にニュース見ながらそんな言っただよな、言っていないよな。」

「俺が、言ったから？」

「う、うん」馬鹿じゃねえの。

へらへら笑いやがって。俺に気に入られようとしてたってのか？

改造を受けた分際でよ、俺みたいなクズに好かれてどうしたいてんだ、こいつは。訳が分かんねえ。

「……青井さん。レン君は、あなたが思っているような子とは違います」

「何が違っつてんだ？　つーか、俺は別になあ」

俺の話を守るように、九重は前に出る。俺を、睨みつけているのか、この野郎。

「勘違いしてます。この子は、気に入られようとしているんじゃない。好かれようとしているんじゃない。ただ、嫌われたくないだけなんです」こつちにだけ聞こえるように、小さな声で言う。だけど、弱々しくはない。強い意志を以って紡がれた言葉が、俺の胸に響いている。そんな気がしていた。

「レン君は、青井さんに……」

殺さなかったからか？　助けてやったからか？　俺が、レンに懐かれてるのは、どうしてだ？

いや、違う。懐かれているんじゃない。レンにはもう、行くところがないんだ。組織を裏切り、それを唆した白いヒーローって奴とも連絡が取れない。俺だけ、ここだけ、なのか。

病気にも、怪我にもなりにくくなる。だけど、改造を受けたからって、心までは強くなれないんじゃないか。殴られりや痛いだろうし、辛い事も、苦しい事もあるに決まってる。そうに違いない。どうして、そんな単純な事に気付かなかったんだろう。

九重が俺を見る。やめてくれ。自分が、本当に駄目な奴だったんだって、自覚させられちまう。

へらへらと。

レンが笑っていたのは、誤魔化そうとしていたから、じゃあないのか？　自分を、他人を。そうして、楽になろうとしていたのか？　社長は、レンが怯えていると言っていた。今なら、彼女の言葉が分かる。レンは、嫌われるのを怖がっていたんだ。めちゃくちゃやりやがったけどな。だから、あー、多分。きつと。

「……クソガキが」

だから、言えよ。うぜえな。お前は確かに最低最悪だよ。好き放題やりやがって。そのくせ痛い目見るのは嫌だと泣き喚く。救いようがねえ。どうしようもねえ。だけど、ガキだ。こいつに物を教える人間がいなかったんだ。グロシユラの野郎、マジで拾うだけだったんじゃねえか。犬猫じゃねえんだぞ、クソが。野郎がもつとしっかりしてりゃあこんな事にはならなかったんじゃねえか。どいつもこいつもムカついてムカついて……ああ、畜生畜生。どうして俺がこんな気持ちにならなきゃいけないんだっつーの。

いつか、レンは必ず痛い目を見る。こいつは必ず裁かれる。だけど、俺は警察でも裁判官でも何でも無い。ただの戦闘員で、ただの出来損ない、ポンコツヒーローだ。だから、レンが報いを受けるその日まで、俺はこいつに、少しだけ優しくしてやろう。

「ガキなんだから、もっとそれっぽくしてりゃ良いんだ」

レンを見て、俺は手を伸ばそうとした。けど、その手をすぐに引っ込める。きつと、こいつはビビって目を瞑ってしまうのだ。殴られると思って。

「青井さん、あのっ」

「帰るぞ、レン」

すぐに背を向ける。何故だが、恥ずかしかったのだ。俺みたいな奴が、他人に優しくしようなんて。それも、ガキが相手なら尚更である。

「もう帰るの？ ふふ、ゆっくりしていけば良いのに」意地悪く言いやがって。

カラーズを出て、家まで歩く。結局、九重と遊びたいとか言いやるから、レンと一緒に俺まで残らされていたのだが。社長め、楽しそうに笑いやがって。ありゃ悪魔だな、絶対。

「暗くなってきたな」

「あの、お兄さん」

「何だ？」

「髪、似合うかな？」

金髪よりか大人しそうに見えて、悪くない。

「レン」

「あは、何？」

「もう二度と俺に気を遣わなくて良い」

レンは足を止める。

「……僕、何か、した？」

「してない。あんな、俺に対してだけだがな。嫌な事は嫌って言えばム力ついたら死なない程度に殴っても良い。ガキなんだから余計な氣い回すな。それで、俺に好かれようなんて思うな」

「でも、僕……」

お前には力がある。使いどころを知らないだけなんだ。しつかりやりやあ、俺よりかマシな人間にはなれる。うん、そうに違いない。つーか、アレだ。改造で得たもんなんかいつそ封印しまえ。ガキがわざわざクズみたいないま真似しなくて良いんだ。

「それでもお前を見捨てねえから、だから、なんつーか」どう言えは良いんだろ。くそう、何か、色々とすつ飛ばしてるような気がする。結婚もまだなのに、いきなりガキの世話だなんてよう。一人っ子で弟もいなかったんだ。分かるか、んなもん。

「手」

「ん？」

「手、つないで？」

差し出されたのは、小さな手だった。こんなもんで、人殴ったり、鉈振るったりしてたってのか。

「あいよ。あ、あんまし力入れんなよ」

「うっ……」

「そうそう、そうしてりゃフツのガキに見えるんだからよ」

「うん、ありがと」

レンはこつちを見ない。一丁前に照れてやがるらしい。

「お兄さんって、優しいのかそうじゃないのか、分かんない」

「分かるようになったら、大人になっただって事だな」

「大きくなったら、お兄さんのところで暮らせなくなる？」

大きくって……どこまでだ。そもそも、レンを匿うのに期限なんてあるのかどうか。裁かれるだのどだの言っただが、そんなの、いつ来るか分からない。かと言って、俺だって一人でやってくのに精一杯だったんだし、あ、こいつ学校とか行かせなくて良いのか？ どうしよう。つーか、未成年略取とかそんなんじゃないの、俺ってやっぱ爆弾でしかないぞ、こいつ。放り出しちまうか。

「……何だよ？」

レンがこつちをじっと見ている。心なしか、手に力が入っているような気もする。やめろつーの。お前が本気出したら、骨折どころじゃ済まねえんだからな。

「捨てちややだから」

「分かったから力抜いてくれ」

こいつが女じゃなくて良かった。とりあえず、機嫌は損ねないようにしよう。でも、甘い顔を見せちゃ駄目だ。ガキつてのは、すぐに付け込んでくるからな。うん、そうに違いない。

どうせなら先に折っとくね

今日も仕事だ。いや、今日こそ仕事だ。悪の組織の戦闘員として、粉骨碎身とは言わないが精一杯頑張る所存である。昨日は仮病使つてサボっちまったようなもんだからなあ。スーパーの駐車場での乱戦、その顛末についても聞いておきたいし。グロシユラが今後もレオンを追うのか、そういった事も確かめておきたい。

「お兄さん、何が食べたい？」

「んー、任せる」

俺はテレビから視線を外す。レオンは、さっき買ってやったエプロンを着て流しの前に立っていた。本当なら、俺が晩飯を作る筈だったんだが、彼が作りたと言ったのである。

「あは、分かった。それより、これ、どうかなあ？」

レオンがくるりと回ってみせる。エプロンが、フリルが揺れた。

「……花柄はどうかと思うがな」それとフリルも。

「えー、可愛いのに」

「男に可愛さは必要ない」

「時々古いんだね、お兄さんは」

そうかもしれないが、俺はお前をそういう道には行かせるつもりがない。ただでさえガキなんだ。男か女か分からん体格のくせに、そういう紛らわしい真似はよせってんだよ。

「好きな食べ物とか、ある？」

「肉は好きだ。特に牛のはな」

「あはっ、ないよ？ ……とってこようか」

駄目だったの！

「だって、食べたいんでしょ？」

「今はそうでもない。好きなもんだってただけだ。作ってくれんなら

何でも良いよ」好き嫌いとかないし。

「えへへ、分かった」言つて、レンは俺に背を向ける。

テレビに向き直り、俺はあくびを噛み殺した。どこの局でもクイズ番組とグルメ番組しかやってない。芸人だろつが俳優だろつが、やってる事は同じである。昔は、もっと色々面白そうな奴をやつてたんだろつか。

「ごちそう様でした」

「あは、お粗末さまでした」

レンが温かいお茶を差し出してくる。気を遣うなと言っているつてのに。でも飲む。

さて、お仕事だ。こいつには留守番を頼まなきゃならない。

「で、だ。俺は今から仕事に行かなきゃならないんだが」

レンは何も言わず、じつとこつちを見ている。この、目だ。何か訴え掛けている。いつまでも見ていられるようなもんじゃない。

「留守番、出来るよな」

「……一人で？」

「そりゃそうだろ。出来るよな」

「で、出来ないと思う」

いや、出来るだろ。てめえ、短期間とは言えテントで一人暮らししてたんだろつが。寂しいとか、その口で抜かしてみろ。舌引っこ抜いて首飾りにすんぞコラ。想像したらグロかったのじゃないけど。「どうしてだよ。お前、今までだって普通にやってこれてたんだろ」留守番くらいどうつて事ねえだろ。

「だって、お兄さんが帰つてこなかったら……」

「不吉な事言つなっ」

その可能性は常に、なきにしもあらずなのだ。むしろ、職業柄、その可能性は普通の奴よりも高い。

「僕、一人になっちゃうよ。そしたら、またいっぱい壊しちゃうか

も」

「え？ えっ？ それってもしかして脅してんのか？」

「あははっ、お兄さんとの約束は絶対に守るよ？ けど、お兄さんがいなくなったら、約束もなくなっちゃうんじゃないのかな」

この野郎、大人しくしてると思ったらすげえ腹黒いじゃねえか。

「……だけどよ、働かなけりゃ金は入らねえんだ。金がなきゃ生活出来ねえってのは分かるだろ」

「盗っちゃえば良いのに」教育的指導パンチ喰らわすぞ。

「駄目だ。お前はもう、今までやってたそっついうのは忘れる。ただの、子供なんだからな」

レンは面白くなさそうに頬を膨らませる。可愛くねえぞ、コラ。

「僕を一人にしないでよ」

「五年経ったら、その辺の女に言ってやれ」少なくとも、レンは不細工には育つまい。こいつなら女をとつかえひつかえのヒモ生活も余裕っぽい。ちよつと羨ましい。

「お兄さんじゃなきゃ駄目なんだもん」

「そこまで言うかあ？」

正直、はつきり言って気持ち悪いぞ。

「僕、あんな事されたの初めてだったんだよ？ 責任、取ってよ」

「ゲンコくれてやったただけだろうが」

「行っちゃやだから」

「女々しい事抜かしてんじゃねえぞ、男だろうが」

仕事だ、仕事。これ以上付き合ってられるかってんだ。俺は立ち上がり、組織へ行く準備を始める。

すると、レンは俺に倣うかのように立ち上がった。彼は背後に回り、右腕を取る。勿論、俺の、だ。何をするのかと思えば、ぎりと締め上げるように力を入れられてしまう。

「……何やってやがる」

「腕と足を折っちゃえば、お兄さんはどこにも行けないよね？」

「はあああ！？ てめえふざけ……いだっ！ くだい！ くだいだ

「ただだつ、離せ離せ離せつて！」

「何してくれてんだこいつ!? 改造人間が本気を出したら、俺みたいな一般人がどうなるかって分かってんのかよ!? マジで折れるぞ冗談抜きに！」

「お兄さんとなら、ムカついたら死なない程度に遊んでも良いんだよね?」

「あああああああつ! 分かった分かった分かったから頼むから!」

「今日は、お仕事に行かない?」

「俺は首を縦に振り続ける。」

「あはははつ、でも平気だよ? お兄さんのここが使えなくなっても、僕がご飯を食べさせてあげるから」

「そんなひでえマツチポンプ聞いた事ねえよ!

「きよ、今日はお前の相手をしてやるから……」

「本当?」

「もう限界だ。その寸前で、レンは俺を解放する。」

「あはつ、嬉しいな」

「俺は畳の上に蹲り、必死に呼吸を繰り返す。畜生、痛過ぎる。そんでやば過ぎる。こいつ、本当にこのままじゃ駄目だ。駄目過ぎる。」

「……今日は休むけど、明日は駄目だ」そろそろ組織に顔を出さなきゃ。色々と、話が動いているような気がする。

「どうせなら先に折っとくね」

「やめろつて! 今度は死ぬ気で抵抗すつからな。お前、ただで済むと思うなよ」

「第一、組織に行くのはお前の為でもあるんだからな。」

「そ、そんな風に睨まなくなつて……」

「泣きたいのはこつちだぞ。良いか? 絶対に、折れないから俺は」

「骨、強いのか?」

「そついう意味じゃない。強いのは心だ。多分。」

「お前がそんなんだつたら、俺はいつまでも仕事に行けねえだろうが。それじゃ困る。ここで暮らしていけなくなるんだぞ」

「う、うー、それは嫌。でも、お兄さんがいないのも嫌だ」

ありえんぐらいに懐かれてんのか、俺って。どうせなら可愛い女の子を助けりゃ良かった。そうすりゃあ、仕事に行かず爛れた生活を送るのも悪くなかったかもしれん。けど、なあ。レンじゃあどうしようもない。ただ鬱陶しいだけである。

「ちょっと留守番するだけだろうが」

「寂しいんだもん」

だもんって言うな、だもんって。

「……絶対帰ってくるし、お前を放ってどこにも行きゃしねえよ。だから、明日からは大人しく待ってる」

「絶対？」

「信じられねえのか？」

出会ったばかりで、何を言ってるんだか。裏切るほどに、俺たちの仲は深くない。深くなるうとも思わない。

「じゃあ、約束、して？ お兄さんは僕を見捨てないって」

だけど、こんな状況のガキを一人で放り出すほどクズでもないつもりである。

「分かった。俺は、お前を見捨てない」

軽い口約束だ。だけど、レンはそれに縋るのだろう。他に、やり方を知らないから。生き方つてのを教えられていないから。無性に腹が立つ。グロシユラがこいつを拾ったのは良い事かもしれない。今となつちゃあ悪い風にしか捉えられねえけど。けど、助けるんなら最後の最後まで面倒見るのが筋つてもんだらうがよ。ガキをいつまでガキのままにさせとくつもりだったんだ、野郎は。

「お兄さん……？ あの、僕……」

「怒ってねえから気にするなよ。気にするなつて言つたら」

とは言つても、レンはそういう性分なんだろう。スイッチが入れば、前みたいにけらけらと笑つて、自分を誤魔化し、偽る。抑えが

利かないってのは、本来の性格を隠す為の、こいつの、処世術だったんだろ。すぐには直らない、か。

二日連続で仮病を使ったが、同僚に怪しまれるような事もなかった。そう思いたい。せめてもの救いは、大して仕事がなかったという話だ。多分、スーパーマーケットでの戦闘のせいだろう。一組織の幹部とはいえ、そこらの怪人よりも四天王は大物だ。二匹目のどじょうを狙うヒーローが、その辺をうろついているに違いない。

「寝るぞ」

「で、電気消すの？」

「消さなきゃ寝られんだろうが」

レンは布団で顔の下半分を隠す。涙で潤んだ瞳がこつちを向いていた。

「泣き虫が。いつまで経ってもガキのまんまだぞ」

「電気消すんなら、一緒のお布団入っても良い？」

駄目に決まってるんだろアホか。

「つておいコラ、移動してくんじゃねえよ」もそもそと、レンは枕を抱きながらこつちの布団に入ろうとする。

「何も言わなかったじゃん」

「言わなくても分かるだろ」

「あは、そっか。えへへ」

あーっもうこつち来るなって！

「減らないんだからさー」

「いや、何か減ったり取られたり奪われたりするような気がする。

絶対こつち来るなよ」

「昨夜は何も言わなかったのに」

「おっ、お前！ 勝手に入ってたのか！？」

レンは小さな笑みを漏らす。悪魔的なそれだった。

「すぐに戻ったけど。あは、お兄さんってうるさいのに、寝てい

る時は本当に静かなんだよね」

「な、何をした……？」

「あはははははっ、何もしてないよ？ 何も
だったら笑うな！

「とにかく寝る寝る」俺は電気を消して布団に潜り込む。畜生、二日も組織サボっちまったから体力が有り余ってやがる。妙に目が冴えて寝られん。

目を瞑って無理矢理眠ろうとするが、駄目だ。

「ね、お兄さん」

おまけに、レンがこっちに来る。俺は彼を押し退けようとするが、やっぱり力じゃ敵わない。と言うか勝ってるのは歳くらいのものであった。家事だっっちゃつまうもん、こいつ。

レンは無理矢理俺の布団に入り、顔を近づけてくる。近い。近い。近い、近いから。

「……知ってた？」

吐息が耳をくすぐる。生温かくて死にそう。

「一人って寒いんだ。寒いよ。だから、二人なら」

「寂しいんか？」

「そうなんだ、多分。こんな近くにお兄さんがいるのにね」

いつそ突き放してやれば良かったのかもしれない。犬猫を拾うのとは訳が違う。見放せば、俺だってグロシユラを責められない。

「好きにしろよ」

「お兄さんの事は、もう好きだよ？」

それもお前の生き方だろうが。好きだの嫌いだの、知りもしないでよくもまあ。

暫くすると、レンは眠ってしまったらしい。規則的な寝息が耳元から伝わってくる。自由な奴だ。俺がガキん時はもっと大人しいっつーか、常識を弁えてたと思うんだけどな。

レンが約束を守るってんなら、問題なのは一つ。ウゴロモチの連中だ。奴ら、俺を調べたとか言ってたな。向こうを潰さねえ限り、常に危険が付き纏う。それだけならまだマシだ。ウゴロモチとウチの組織が手を組むような事があつたら、ヒーローを掛け持ちでやってる青井正義の情報が組織にまで流れちまう。そうなりゃ、裏切り者だつて一発でバレル。

ウゴロモチをどうにかする。

だけど、俺は出来損ないのヒーローで、組織の一戦闘員でしかない。零細だろうが、集団を相手にするには力が足りなさ過ぎる。組織で情報を集めるにしても、ウチとウゴロモチとの距離が近づけば近づくほど、危険度が高まっちまう。一人でやるしかない、のか。無理だろ、そりゃ。

ヴィーフホリ。

俺が持つてる情報は、今のところそれだけだ。そいつを手繰り寄せりゃあ、ウゴロモチに辿り着くかもしれない。だけど、ミスつまえばそこで終わり。ウゴロモチにやられても駄目。組織に気付かれても駄目。そんで、俺が出来る事は殆どない。……手詰まりじゃねえか。

でもやるしかないんだ。やらなきゃやられる。味方なんかいやしない。地中を自在に行き来出来るウゴロモチに対して、先に仕掛けられるとも思えん。奴らが来たところを叩く。俺に許されてるのはそれくらいだろう。もっと良いスーツ、武器があれば話は変わってくるのになあ。叩くって言っても、出てきたモグラにボコられるって展開しか見えん。

「……いい気なもんだ」

俺はレンのほっぺたを突く。思ったより柔らかくてドキドキしてしまった。馬鹿か、俺は。

「てめえのせいだぞ、おい」

一ヶ月経ってないってのに、面倒くせえ事が立て続けに起こってやがる。明日も、明後日も、無事でいられますように。

そう言えば、レンは元気か？

朝、良い匂いで目が覚める。腹が鳴ると、エプロンを着た人が笑うのだ。お腹は空いていないか、と。答えるまでもない。当然だ。死ぬほど減ってる。今朝は和食で、俺の食欲も一段と増すだろうと思われた。

素晴らしいじゃないか。

起きた時、既に誰かが目覚めていて、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。無垢な笑顔は、俺だけに向けられている。

「あはは、新婚さんみたいだね、僕」

「……………ちげえだろ」

そして現実に戻される。

メシ作ってくれるよ？ でも、ガキで、しかも男。どうするんだよ俺。この状況、いつまで続けるつもりなんだよ、マジで。

お昼ご飯も美味しゅうございました！ 青井正義です！

「もう駄目かもしれない」

「あははは、何が？」

男を掴むには、やはり胃袋なのかもしれない。レンめ、普通に美味い。普通に上手い。正直、俺もこいつも何かを勘違いしてしまっそうである。

「夜は何が食べたい？」

「こいつもさー、もっと男らしくしてりゃ良いんだよ。」

「何でも良いよ」

「何でもってというのが一番困るんだよ？ あ、じゃあ買い物に行こっよ」

レンは俺のやった野球帽をくるくると回している。一応、変装という名目で渡したものののだが。正直、こいつを外に出すのはどうかと思う。

「お前を知ってる奴に見つかったらどうすんだよ？」

プラス、俺を知ってる奴に見つかったらどうすんだ。

「髪の毛染めたし、帽子被るし、大丈夫だよ」

「けどなあ……」

「じゃあ、スカート穿く。女の子のカッコしてたら平気だよ？」

いや、いやいやいやいや。平気じゃねえよ。何お前、女装願望とかあんの？ やめろよ変態。それ以上おかしな設定付け足そうとするんじゃねえよ、頼むから。

「いつそ女の子になっちゃおうか」そう言って、レンは自分の下腹部に手を伸ばす。

「って何してんの!？」

「これ、取っちゃえば」

「取るな取るな!」

レンは不満そうな顔になってしまった。

「お兄さんも、女の子と一緒に暮らす方が良いんじゃないの？」

確かにそうだが、それとこれとは話が別である。

「僕、男の子だけど、本当に良いの？」

「何が良いか分からんが、とにかく馬鹿な真似はよせ。んな事したら死ぬほど痛いぞ」

「あはっ、僕、そういうのに鈍いから」

パンチ一発で泣くくせに何を言うか。ぶっ飛んだ思考しやがって、手に負えんぞこの野郎。

あのスーパーを利用するのは怖いので、少し遠出して、食材を買い込んで戻ってきた。レンは夕食の下ごしらえに、俺はテレビを見

て時間を潰す。……ゲームとか漫画とか、そういうのに興味ないの
かな、こいつは。趣味とかないんだろっか。駄目だな、それは。俺
みたいに駄目な大人になっちまう率が高くなっちまうぞ。

「……楽しそうだな」

「うん。僕、こういうのって良いと思うんだ」

鼻歌まで歌っていたレンは、振り向いて笑う。

「欲しいもんとかさ、ないのか」

「包丁が欲しいな、中華のとかさ」

「いや、そういうのじゃなくてだな」

「お兄さんだつて美味しいもの食べたいでしょ？ 僕も、お兄さん
に美味しいものを作ってあげたいからさ」

お前が女なら惚れてるね。何、尽くすタイプなの？ 嘘だろこい
つ。

「あは、気にしてくれてるの？ 大丈夫だよ、今はこうしていられ
るだけで楽しいから」

「別に気にしてねえよ。まあ、欲しいもんがあったら言えよな。そ
こそこのもんならどうにかしてやるから」

「うん、ありがとう」レンは小さく笑って、調理に取り掛かった。

晩御飯を食べた。身支度も済んだ。後は、

「……………へえ、行っちゃうんだ」

レンをどうやって丸め込むか、だ。

「僕に三食作らせておいて、置いてっっちゃうんだ」

「料理すんのは楽しいんじゃないか？」

「それはそれだもん」子供。

「良い子にしてくれよ、お願いだから。ちよろつと仕事してくる
だけだつて。留守番、出来るだろ？ 昨日約束したもんな」

俺がそう言うと、レンはむすつとして黙り込む。言質取ったんだ
から仕方ねえよなあ？

「分かった。けど、気を付けてね。……危ない事、するんでしょ？」
「あー、そうか。こいつは多分、気付いてんのか。気付いてんのか？」
「戦闘員の時は、顔バレしてなかったと思うけど。」
「しないの？」
「するかもな」

今日の戦闘員のお仕事は、なし、です。

なので、俺は江戸さんの部屋にいた。少しでも情報を聞き出せればと思ったのだが。

「君が休みの間に、少し状況が変わってしまった」

「おぼろげながらなら、話は聞いてます」

「どうやら、江戸さんは色々と話をしてくれるらしい。」

「先日、グロシユラがレンを追い掛けて出て行った。独断で、だ。」

それは仕方がない。問題なのは、尻拭いをさせられたのが我々だと言う事なんだ」

スーパーでの事を言っているらしい。が、知らなかったー、と、驚く振りをする俺。

「エスメラルド様は集められる数字付きを集めて、グロシユラの援護に向かった。私も前線に出ていた。だが、そこで得られたものはなかったに等しい。裏切り者、レンには逃げられ、ヒーローたちとの戦闘でグロシユラは負傷した。命に関わるような怪我ではないが、当分は自粛するだろう。むしろ、してくれなければ困る」

グロシユラが？ 嘘だろ。仮にも四天王だろうが。

「グロシユラは目立つ。ヒーローの狙いも、自然そちらに向いていたのだ。お陰で、我々は無傷で済んだのだが。……だが、ヒーローたちを勢いづけてしまった。そして一番の問題は」

嫌な予感がする。

「レンを連れて逃げ去った者たちだ。どうも、正体が掴めない。我々のような組織ではなく、ヒーロー派遣会社の者だと思うが。ま

るで、嵐のようだった。乱戦でね、とてもじゃないが、状況が把握出来なかった」

俺たち、カラーズの事か。畜生、江戸さんに目を付けられちまうとは。

「暫くは大人しくしているのが賢いと、私は思っている」

「……俺は、皆が無事で良かったと思ってます」

「ああ、私もそう思う。……青井君、ウゴロモチという組織を知っているかな？」

江戸さんの口から、ウゴロモチ？ 勿論、知っている。嫌と言うほど。だけど、素直には領けなかった。

「最近になって動き出した組織だ。テレビでもやっていると思ったが、そうか、詳しくは？」

「知らないです。流石に、名前くらいは聞いてますけど」

「実は、彼らから共闘を仄めかされている」ぎくりとした。奴ら、何て事をしやがる。

「尤も、ウチは受け入れるつもりはない。他の組織もそうだろう。

新興の組織と手を組んでも、得られるものは少ない。その上、ウゴロモチは怪人を何体が倒されているらしい。共闘と言えば聞こえは良いが、要は『助けてくれないか』というところだろう」

ふう、一安心。

「とりあえず、ヒーローの目をウゴロモチに向けさせるのが良いと判断している。ウゴロモチが潰えようがどうなるうがは知らないがね。その間、我々は体勢を立て直す」

強かな人だ。あるいは、ウゴロモチが馬鹿なのか。マスコミに取り上げられて調子に乗ってるのかね。

「じゃあ、俺たち数字付きも当分は、ああ、その……」

江戸さんは苦笑する。

「ああ、暇になるだろう。何、気にする事はない。いつもの事だ」
なら、当面の問題はウゴロモチって事になるな。レンを追い掛ける奴は、今のところいないっぽいし。グロシユラの容態は気になる

が、すぐには動けないだろう。

「さて、私は書類を提出してくる。青井君、今日はもう帰っても構わない。一応、顔を出せる時には出して欲しいが。……エスメラルド様が、君を気にしていてね」

苦々しく言われてしまう。江戸さん、エスメラルド様に心酔して
るんだなあ。

「分かりました。それじゃ、今日はお疲れ様です」

「ご苦労様。それじゃあ、気を付けて帰りたまえ」

紙の束を持ち、江戸さんは部屋を出て行く。さて、話も聞けたし、俺もそろそろ帰ろうかな。いや、しかし楽な仕事で良いやね。こう言っちゃなんだが、ヒーロー様様ってか。

「エドー、いるかー？」

「……………あ」

江戸さんと入れ違いでやって来たのは、エスメラルド様である。

彼女は室内を見回してから、俺に視線を定めた。

まずいな。あの時、エスメラルド様は俺の正体に気付いていたよ
うな節がある。気にしているってのは、心配って意味じゃあなく、
疑われてるって事じゃないのか。

「おー、アオイ。久しぶりだな、元気にしてたか？」

「お陰さまで。何だか、大変な事が起こっていたみたいですね」

エスメラルド様は手近なパイプ椅子を引き、そこに腰を下ろす。

……俺の気のせいかもしれないが、すぐには帰してくれなさそうな
雰囲気だった。

「グロシユラが先走ったからな。私も裏切り者は放っておけなかつ
たし」

「裏切り者には逃げられてしまったと聞きましたけど」

「変な奴に邪魔されたからな」

うっ、間違いなく俺の事だろう。

「そいつな、袋を被ってた。お前に似てたぞ」

「うえっ!？」

やべつ、声に出しちゃった。つかストレート過ぎるだろ！も
っと聞き方つてもんがあるんじゃないのか、こついうのつて。

「お、俺にですか？」

「目が似てた」目、ですか。……野生児。

「他人の空似ですよ。俺がヒーローみたいな真似する筈ないじゃないですか」

エスメラルド様は俺を見つめる。じつと、まるで咎めるように。
目を逸らしたら駄目だと、直感する。

「そっか。そうだよな。アオイは私を裏切らないって言ったもんな
！」

「その通りです」あれおかしいな、胸がずきずき痛むよ？

「ごめんな、疑って悪かった！ 今度、ご飯に連れてってやるぞ、
お詫びだ！」

嬉しいけど、流石に申し訳ないし、何より誘いに乗った瞬間江戸
さんに殺されてしまいそうだ。

「いえいえ、構いません。俺は気にしてないですから。それじゃ、
俺はそろそろ帰ります」

「……そうか？ ……うん、分かった。じゃあ、また明日な」
さり気なく『明日も来い』と言われてしまった。が、それを断る
のは気が引けた。俺は頭を下げて、爺さんのところに向かおうと思
った。

ウゴロモ子。

奴らをぶつ潰さない限り、心の平穩は訪れないだろう。爺さんに、
俺のスーツがどうなってるか聞きに行こうと思ったのである。だけ
ど、気が乗らないだの誠意が足りないだの言い出す偏屈なじじいだ。
詳しく事情を話せないままで、まともに取り合ってくれるかどうか。
「爺さん、俺だ。入るぜ」

ノックしてから、返事を待たずに扉を開ける。相変わらずとっ散

らかった部屋だ。心なしか、ケーブルの数が増えているような気がする。

「……お前か。スーツなら出来ておらんぞ」

「じゃあ帰る」

「かーっ！ 近頃の者は我慢が足りん。青井、お前はただでさえ脳が足りとらんと言うのに」

うるせえなあ。いきなり説教する奴がいるかよ。第一、ブツがないんじゃ用がないってんだ。

「ちよつとやべえ事になってる。グローブだけじゃどうしようもねえんだ」

爺さんは振り向かず、一心不乱にキーボードを叩き続ける。ディスプレイには、良く分からん数字やら記号が上から下に流れていた。「左用のグローブも欲しいのか？」

「そら、ないよりはマシだけだよ。俺が言ってるのは完全なスーツの事だよ」

「ならば誠意を見せる。何度同じ事を言わすんじゃ」

これだよ。いや、無理難題を言ってるのは俺だ。けど、それだけ必死なんだよ爺さん。ウゴロモチってやばい連中に狙われてるんだよ、俺は。

「訳ありなのは知っておる。事情を話してみい、面白ければお前のスーツを優先してやらんでもない」

「あんだよ、別の怪人のスーツ作ってるのか」

「ほれ、この間グロシユラがやられたじゃろ？ 奴の部隊にも穴が出ていてな、怪人クラスのスーツを用意せんとまずいらしい」

あー、あのしわ寄せがこんなところにまで。

「仕方ねえなあ、そりゃ。下っ端の面倒見てる場合じゃない、か」
「ほつ、抜かしおる。おお、そう言えば、レンは元気か？」

「は？ 俺が知る訳ねえだろ」いきなり何を言い出すんだ爺さん。危うく返事しそうになったじゃねえか。

「それもそうじゃったな」

「もつろくしやがって。そんなんで大丈夫かよ？」

爺さんは手を止める。椅子を回転させて、俺を見た。

「舐めるな。わしはまだまだ現役だぞ、小僧」

「そうかい。それじゃ、いよいよスーツを期待しちまうな」

「当然じゃ。ああ、スーツは無理だが、武器なら用意してやらんでもないぞ」

おっ、マジか。あのグローブも相当なものだが、懐に飛び込まなきゃならねえ。基本、生身の肉体だから危ない橋は渡りたくないし見たくもない。リーチのある得物があれば、楽にはなるだろう。

「目の色が変わったな。まあ、期待して待つておけ」

「おっ、じゃあな爺さん。次来るまでに死ぬんじゃねえぞ」

爺さんは答えず、軽く手を上げて答える。俺は部屋を辞して、今後もどうにかなりそうだと思った。

貴様に決闘を申し込むと言う奴だ

仕事がなかったので、予想以上に早く帰れた。ただし、電車は動いていない。タクシーを使うのも勿体ないので、だらだらと歩いて帰る事にする。

夜の街は、えらい静かだった。どこの組織も、ウチみたく事態を静観しているのかもしれない。ヒーローが凶に乗ってるから、それも仕方がない、か。それでもって、その原因はレンにある。俺にもあるんだろう。

あそこで、俺がレンを連れて逃げなけりゃ、どうなっていたかな……何も変わらない、か。うん、だからやめておこう。駄目だ、済んじまったもんはしょうがない。そうに違いない。

俺は頭を軽く振る。いつにも増して静かだからか、やけに頭が冴えちまう。

「……平和だねえ」呟いてみた。悪の組織の戦闘員が、平和だな、と。アホらしい。

自販機を見つけて、そこで缶コーヒーを買って飲む。人工的な灯りに誘われて、蛾が俺の周りを飛んでいた。うぜえ。

急いでコーヒーを飲み干し、ゴミ箱に捨てて歩き始める。いつもは電車だから気付かなかったけど、この辺は街灯が少ないんだな。ふうん、色々やるには好都合な場所である。

「……ん？」

何か、話し声が聞こえた。俺の後ろだ。くぐもったそれなので、男なのか、女なのかは分からない。ただ、一人ではなさそうだった。何気なく耳を済ませてみる。歩く速度は落とさなかった。

「……け……した」

こんな場所だ。嫌でも警戒しちまうじゃねえか。どうするかな、走ってみるか。でも、まだ家までは遠い。つーか、そこまで気にするようないや……いや。いや、気にしろよ、俺。忘れたのか、俺は、狙われてるんだぞ。

走る。

「ああっ、逃げたっ」同時、声が聞こえた。明らかに俺を指している。

振り向くと、自販機の灯りがそいつらを照らしていた。ミミズ型のスーツを着た奴が一人。それから、やけにでけえ怪人らしきスーツの奴が一人。だが、見覚えはある。モグラだか、ヒミズだかは知らんが、それっぽい形をしている。あの二人は間違いなくウゴロモチだろう。

しまった。しまったぞクソが！ 完全に狙われてたんじゃねえか！ 野郎、どうやって俺を追ってるってんだ！？

とにかく走る。家までじゃなくても良い。むしろ、家はやばい。レンがいる。どっか、人のいそうな場所に逃げ込んでヒーローの助けを待っしかない。

逃げ切れると思っていたが、スーツ相手じゃあそれも難しかったらしい。

「生身のくせに手こずらせやがって、ああ？」

ミミズが声を荒らげる。俺は肩で息をするのに精一杯で、返事も出来なかった。

前方にはミミズが。後方にはモグラの怪人が。俺は今、挟み撃ちされている。

「てめえのせいで戦闘員と怪人が二人ずつやられてんだぞっ」
んなもん知るか。仕掛けたのはお前らだろ。

つーか、クソっ。クソが畜生。最近の俺ときたらどうなってんだ

よっ。俺は！ ただの戦闘員だぞ！？ 下っ端だ！ そんな俺がどうして組織に狙われなきゃなんねえんだ！？

「ヴィーフホリ様、俺にやらせてくださいよ。仇取るんなら迷ってる暇はないは かつ？」

ヴィーフホリ。そう呼ばれた怪人の腕が、ミミズの腹に食い込んでいた。全く、見えなかった。位置的には俺を挟んでいた筈なのに、俺は、ヴィーフホリが動いたとすら気付かなかったのである。

こいつ、やべえ。すげえ強いじゃねえか。モグラやヒミズとは訳が違う、……そうか、前に他のミミズが言い残したヴィーフホリってのは、こいつの名前だったのか。

近くで良く見りゃ、モグラよりもシャープなシルエツトだ。鼻は長く、全身には粗い毛が生えている。背中も赤く、腹は灰色で覆われていた。指には水掻きらしきものが付いている。垂れ下がった尻尾は細長い。水陸両用って事か？ 羨ましいいつたらないな。

「……めちゃくちゃ強そうだな」
俺がそう言うと、ヴィーフホリは歯を見せて笑った。

「強そうではなく、強い。青井正義、貴様を一瞬で屠れるくらいにはな」

腹から腕を引き抜くと、ミミズは倒れて動かなくなる。

「悪いが、そいつは自慢にならねえぞ」

「かもしれないな」

「人違いって言っても、聞いちゃくれねえだろうな」

「下調べは済んでいる。マスメディアはウゴロモチを新興の組織と思っているようだが、それは違う。我々は長い間、地下からこの街にルートを開き巡らせていた。自由自在に移動出来るようなトンネルをな」

うるせえぞチキン野郎が。こそこそとやりやがって。

「ようやく、ウゴロモチが陽の目を浴びる時が来た。それを台無しにしてくれたのは、他ならぬ貴様だ。モグラとヒミズを倒したカラーズのヒーロー、青井正義」

「そこまで調べてんのかい。怪人辞めて探偵でもやったらどうだ？」
「この状況下で良く回る口だ。……だが、貴様は別のところでも働いているらしいな。我がモグラなら……」

「俺はコウモリってか。悪いが、バットマン……コウモリマンとは名乗れねえんだ」

もう使われてるからな。

「長年の計画を水泡に帰した貴様には、相応の報いを受けてもらう」「ご苦労なこった。手間暇掛けた割にや、随分とまあ詰め甘い計画じゃねえか」

覚悟は決まってる。隙さえあればすぐにも逃げ出してやる。だが、野郎のスーツは相当やばい。そうだ。こいつが、ヴィーフホリがウゴロモチのボスなんだ。そうに違いない。

「長自らが俺みたいなの下っ端ところにお出ましとはよ、随分とマンパワーに困ってるみたいだな」

「否定はしない。我々は少数精鋭だったからな」

何を狙ってやがる。俺を殺すだけなら、すぐにでもやりやあ良い。だが、ヴィーフホリはそうしない。一体、どういふつもりでだらだらとくつちゃべってんだ？ こつちとしちゃあ有り難いがよ。

「だが、それも終わった。度重なる失敗でウゴロモチは瓦解してしまっただから」

自分の組織の内情をべらべらと。湧いてんのか、こいつ。

「俺をスカウトでもしようってのか？」

適当に口にした事だったが、ヴィーフホリは意外そうに俺を見遣った。

「モグラを倒した時には、そういう考えもあつたがな。今欲しいのは貴様ではなく、貴様の首だ」そうかよ。そりゃ残念だ。

「だからこそ、貴様には盛大に散ってもらう」

ああ？

「我々はこの街に巢食うどの組織の中でも、知名度では決して劣っていない。そのウゴロモチを幾度も邪魔した者を潰せば、去ってい

つた者も戻り、新たにやってくる者もいるだろう」

「少数精鋭はどうしたよ」

「数は時に力となる。勉強になったよ。人さえ戻れば、ウゴロモチは回復する。以前よりも力を増して、この街を地下から支配し、そして、この街の人間を見下ろす。くはは、素晴らしいだろう」

ヴィーフホリは皮肉っぽい笑みを見せる。

ちっ、ここで俺を殺さないのは、時と場所を選ぶ為なのか。俺とこいつが戦っても結果は分かり切ってる。言わばパフォーマンス。客寄せってかこの野郎！

「ここで貴様を殺しても良い。だが、納得しないし、嫌だろう？」

ああ嫌だね。死ぬのはごめんだ。

「つまるところ、貴様に決闘を申し込むと言う奴だ」

「決闘だと？ 舐めやがって、まるでグラディエーターじゃねえか。てめえ何様のつもりだ」

「それでも構わん。何でも構わん。要は、貴様が無様に散れば良いのだから」

人が戻ればどうだの言ってやがるが、結局、こいつは自分が気持ち良くなりたいたいだけじゃねえか。だが、そいつを断れば俺は今すぐここで死ぬ。こんなところで殺されちまう。ざけんな、選択の余地なんざねえじゃねえか。

「……時間と場所は？」

「明日の深夜、貴様がモグラを倒した商店街で」

「商店街？ 人がいるだろうが」

「だからどうした。……気付かないのか？ 人質だよ。逃げる事は許されない。貴様が命惜しさに逃げれば、罪なき者がいわれのない罰を受ける事になるぞ。貴様の代わりにな」

どこまで面倒なんだこいつは！

「それだけか？」

「当然だが、一人で来い。カラーズには他のヒーローがいない事は確認済みだが、仲間を呼ぼうなどと考えるな。無論、こちらはギヤ

ラリーを用意するつもりだがな」

「ギャラリー、なあ？」

「楽しみにしておけ」

ヴィーフホリは背を向ける。どうやら、ミミズは放置するらしいか
った。

「明日の午前零時、商店街で待つ」

言い残して、ヴィーフホリは去っていく。俺はへたり込み、ゆっくりと息を吐き出していった。

俺はケータイをズボンのポケットにしまい、その場から立ち上がる。頭も体も、死ぬほど疲れていた。今日は仕事もなくて、さっさと家に帰れると思ってたのによう。

まさか、ウゴロモチのボスが出てくるとは思っていなかった。向こうから来るとは、これっぽっちも。

「……クソが」

明日の深夜、商店街で決闘、なあ？

本当、どうしようもねえよなあ。ヴィーフホリさんよう、だからお前は駄目なんだよ。俺を悩ませ続けていたウゴロモチも、明日でおしまいだ。コウモリを舐めやがって。モグラは大人しく土ん中に引っ込んでりゃ良かったんだ。光が眩し過ぎて、頭あйкаれちまったんだよな。はっ、そうに違いない。

ドアを開けると、部屋の中は暗かった。そらそつだ。午前三時だもん。あ、だもんとか言っちゃった。

「……寝よ」

とにかく、明日っつーか、もう殆ど今日だけど、備える為にもう眠ろう。

「ん、お兄さん？ 帰ってたの？」

布団に入ろうとすると、レンが目を覚ましてしまった。うわー、相手すんの超めんどい。

「お仕事、早く終わったの？」

「ああ、まあな」実質、仕事はなかったようなもんだけど。

「でも、何だか疲れてるみたい」

「目、良いんだな」

「ああ、僕って改造人間だから」

そんなの笑いながら言うなっつーの。

「疲れてるよ。仕事だからな」

布団に入って目を瞑る。流石に、すぐには眠られそうになかった。

「お腹空いてない？ 何か作ってあげようか？」

「良いから寝とけ。俺も寝っから」

「ああ、明日もお仕事？ あ、ヒーローのお仕事はあるの？」

一々逐一うるせえなあ。黙ってるよ。それで寝かせてくれよ。

「ヒーローは休み。仕事は、明日の夜もある。ちょっと忙しくなるかもしんねえな」

「そっか。お兄さん、頑張ってるね」

「あーいよ」寝返りを打つ。レンはくすくすと笑っていた。

翌日、俺はレンの作ってくれたメシを朝、昼しっかり食い、夕方までだらだらと家で過ごしていた。エネルギーが余っている。けど、そいつも使い果たしてしまうんだろっつーな。

「寝てばかりだね、お兄さん」

「お前もな」

「僕は色々やってるもん」

実際、レンは家事をそこそこやってくれている。彼は、暇を見つけては服にアイロン掛けしたり、戸棚の中身を自分好みに入れ替えたりにしていた。文句はない。ないけど、何だかなあ。

「マッサージ、してあげよっか？」

「……いや、いらん」

「あは、遠慮しなくても良いのに。優しくしてあげるよ?」
鳥肌立ちそうになるからやめろ。

「別に何もしなくて良いのによ。ああ、そうだ。今日の晩飯は俺が作るか」

「えっ、だ、駄目だよ」

レンはアイロンを掛けたばかりだった俺のシャツを胸にかき抱く。折角、皺を伸ばしてもらったところだったのに。

「僕が作るんだもん。お兄さんは、何もなくて大丈夫だからね」
「そっ、そうか……?」

やべえな。完全に餌付けされてる感がある。正直、レンの繰り出す料理は美味しい。彼がいなくなれば、俺の食事レベルも満足度も下がってしまう。更に、帰ってきたら寝床も用意されてるし洗濯物も掃除もやってってくれるし、このままじゃマジでまずいぞ、まずい。

「やっぱり俺が作る」

「あ、あはっ、やだなあ、駄目だって。僕が作るんだから」

このままずると関係が続いていても、後になって困る。それも、お互いが。

「そ、それとも、お兄さんは僕のご飯、嫌い?」

涙目。上目遣い。相変わらず惜しい。問題なのは性別だけだ。この俺が、それで落ちる訳がないだろう。

「美味しい。だけど、いつまで家政婦みたいな真似してるつもりなんだよ。お前だって、ここで一生終わると思ってるねえだろ。一応、追われてるんだからさ。身の振り方を一つや二つ考えたって間違いないだろうが」

一週間なら。一ヶ月なら耐えられる。……その先を考えれば、やっぱり気が滅入る。当然だろう。

レンは何も言わず、瞳を潤ませてこっちを見ていた。

「やめろよその目。俺がいじめてるみたいじゃねえか」

「だって、捨てないって言ったのに」

「いや、だからそれは、今日明日の話じゃなくて」

「言ったのに！」

立ち上がったレンは押入れに向かう。えーと、そこには確か鉈とかがしまつてあった筈だけど。

「分かったって！ だけどっ、少しくらいは何か考えろって言うてんだよ」

「何を……？」

うわ、とうとう泣き出しやがった。

まあ、アレだ。こいつもガキだったんだ。まだ落ち着いていないのかもしれない。でも俺を頼りにし過ぎたって良い事なんかないんだぞ。分かってんのかよ。

「すまん。泣かせるつもりはなかった」

「……ご飯、作って良い？」

結局、こうなるか。

「美味しいのを頼む」

レンは小さく頷く。まずいメシより、美味しいメシを食べる方が良いに決まってる。俺はもしかして、馬鹿なのかもしれない。

煮るなり焼くなり手柄立てるなり、好きにしてくれ

お仕事だ。

とは言っても、悪の組織、数字付きとしての仕事はない。いつもよりも早く組織に行き、江戸さんと少し話をして、同僚と駄弁って終電ぎりぎりまで駅前に戻る。全く、何をしていたのか自分でも良く分からない。

時刻は、午前零時を回ったところである。俺は適当な場所に腰を下ろして、空を見上げた。商店街までは少し歩かなきゃならない。ぼちぼち行こうかね。

ウゴロモチのボス、ヴィーフホリとの決闘。零時に、商店街で。野郎は待ってるんだろ？な、きつと。馬鹿だから。

昨夜、本当なら俺は殺されていた。

ヴィーフホリは恐ろしく強い。小さいながらも、一組織の首領なのである。そして、小さな組織を纏めるだけなら特別なものは必要ない。力だ。それさえありゃ下はついてくる。結果的にそうだったのだが、俺みたいな下っ端がウゴロモチをここまで引つ掻き回せたのは奇跡にも近い。それでキレられてりゃ世話ねえが。

だが、ヴィーフホリはそこまでだ。所詮アレだ、サル山の大将止まり。組織をでかくしたけりゃ、力だけじゃ無理なんだ。それを分かっているから、決闘なんて前時代的な事を言い出す。誰がまともにも相手をするかよ。

俺は昨夜、ヴィーフホリが去った後で社長に連絡をしていたのである。『ウゴロモチの怪人が、明日の深夜、商店街に現れる』と。勿論社長は食いついた。いつも通り、俺に出勤するように命じたの

である。だが、そりゃ無理だ。用事があるし体調を崩したと必死に
凌いだ。カラーズには俺しかいないから、彼女は諦める他ない。さ
んざん憎まれ口を叩かれたし、情報源を聞かれたが、どうにかかわ
せたとは思う。

そんでもって、俺が社長に頼んだのは一つ。その情報を、他のヒ
ーロー派遣会社に流せ、だ。最初は渋っていた社長も、自分たちで
はどうしようもないと思い直したらしく、情報を流すと約束してく
れている。彼女は何だかんだでヒーロー側の人間なのだ。怪人をみ
すみす逃すような事はしない。その事で、別の奴が得をしたとして
もだ。

俺も仕事に行く前、幾つかの派遣会社にタレコミをしておいた。
今頃商店街は火の海……とまではいかないが、中々の騒ぎになって
いるだろう。正直、匿名の俺や弱小カラーズの情報を信じる会社が
一つ、二つあれば良い方だが。ま、まあ、一つか二つ。一人か二人
は来ているだろう。うん。じゃないと困る。

商店街に着くと、予想以上の光景が広がっていた。

俺は物陰からその様子を眺める。中々に壮絶だった。ミニズ型の
スーツを着た奴らが数人、それから

、モグラ型のスーツを着た奴が一人。生きてるのか死んでるのか分
からないまま、多数のヒーローに引きずられるところだった。

つーか、ヴィーフホリの野郎。そろそろと連れてきやがってクソ
が。ギャラリーってそういう事か？ あるいは、俺を袋叩きする為
か、はたまたこっちの援軍を警戒していたか。とにかく、中途半端
な奴には違いない。

火の海とはならなかったし、商店街の人たちにも被害は出ていな
さそうだ。あの八百屋も、シャッターを閉めている。まあ、レンが
破ったままになってるけどな。アレじゃあ意味ねえ。

「しかし、多いな」

思っていたよりも、出張ってるヒーローが多い。こっから見える限りでも、十は超えてやがる。暇人どもめ、あやふやなソースに踊らされやがって。

……ああ、そうか。暇なんだ。ウチの組織だけじゃない。あの乱戦以降、活動を控えているのはよその組織も同じだったんだ。だから、ヒーローは暇を、力を持って余していたのだろう。そこにウゴロモチの怪人なんて情報が入れば、畏だと気付いてても行くしかねえよな。

全く、時勢が読めてない感じじゃねえか。ますます駄目だなヴィーフホリ。

だが、肝心の奴がいない。まだその辺をうるちよろしてるヒーローがいるって事は、ヴィーフホリは見つかってないんだ。危険を察知して逃げたか？ 逃がすか。ここで逃せば、今度こそ俺の命はない。今日、ここで確実に仕留める。やるかやられるかだ。別に、他のヒーローが野郎をぶっ飛ばしたって良い。だけど、五体満足で逃がす訳にはいかねえぞ。どうにかして見つけなきゃあな。

ヒーローから逃れるには、幾つかのパターンってもんがある。お約束と言っても良い。

一目散に走って逃げる。障害物を駆使して撒く。煙幕を使う。トカゲの尻尾よろしく戦闘員で足止めさせる。援軍を待つ。色々ある。

が、今回はそのどれにも当てはまらないらしい。ヒーローは商店街からいなくなり、随分と時間も経ったが、ヴィーフホリを見つけたという話は一向に聞けなかった。

商店街に残っているヒーローは、殆どいない。俺の知ってる奴と言えば、忍者の格好をしたイダテン丸くらいのもんだ。他の連中は、良く分かんない。スーツもヘボそうだし。あるだけ羨ましいけど。

残ってるのは五人、か。

少し頼りないな。何せ、ヴィーフホリは戦闘能力だけを見ればとんでもねえ野郎なんだから。

俺は八百屋のシャッターに目を遣る。そこにいるのは、何となく分かっていった。決闘申し込んでおいて、そう簡単に退くような奴ではなさそうだったからだ。第一、部下や仲間がボコボコにやられて素直に引っ込めるほどの器量もなかったんだし。

物陰から一步、前に出る。俺は顔を隠す為に、スーパーで使った紙袋を被っていた。さあ、出てこいよ。

「遅くなっちまったな」声を出すと、周囲のヒーローがこっちに視線を向けてくる。

ヒーローから逃れるには幾つかのパターンがある。その内、ヴィーフホリが使ったのは非常に簡単なものだろう。ただし、野郎にしか出来ない手段で、だ。

「……貴様……っ！」
そうら出てきた。八百屋のシャッターを壊して、ご立腹のヴィーフホリが姿を見せる。

ヴィーフホリが使ったのは古典的なやり過ぎである。自分が逃げるのではなく、追跡者を遠ざけた。勿論、八百屋の中も改められただろうが、そこにはモグラの使っていたトンネルがある。流石に、地面の下までは調べられないからな。野郎は穴の中で息を殺していたらしい。

「出掛けに腹を痛めてよ。気張ってたらこんな時間だ。悪いな」

「貴様は！ 恥を知らないのかっ」

「てめえだって仲間を呼んでただろうが。」

「さあ、やろうぜウゴロモチ」

ヴィーフホリが吼える。俺まで、その距離は十メートルあるかないか。野郎のスーツなら、ないに等しい距離だ。昨夜のスPEEDなら、数秒掛からず俺に迫れる。ただし、そこに障害物がなければの話だ。

目の色変えたヒーローたちが、ヴィーフホリの前に立ちはだかる。

前進を阻む為ではなく、ただ、痛め付ける為に。

「がああああああっ！」

右足を剣で斬りつけられる。銃弾が左腕を貫いていく。ヴィーフホリが右手を突き出す。ヒーローがきりもみに吹っ飛ばす。怒号と共に、ヴィーフホリの腹部に拳がめり込む。彼の左足がヒーローの頭部を捉える。

まるで獣だ。感情を剥き出しにして、痛みを忘れてひたすら突っ込んで来る。

「貴様があつ、俺を！ 俺をっ！」

ヴィーフホリの四肢は傷つき、痛めつけられていた。足を引きずりながら、気力だけで俺を睨んでくる。辺りには、ヒーローが四人蹲り、倒れ、動けなくなっていた。

俺はグローブをはめる。ヒーローは良くやってくれた方だろう。

今の状態なら、こいつも当たる。俺でも上手く当てられそうだ。スーツはぼろぼろ、尻尾は千切られ、長い鼻は折れ曲がっている。ヴィーフホリのスピードは今や見る影もない。今夜、こいつはとことんまで奪われたのだ。

「てめえの負けだ」

「負けはない……！」

腰を低く落とす。標的の方からのろのろやってくるんだから楽なものだ。

「モグラのお前じゃ誰かの上には立てねえんだよ。欲張らないでこそこそやってりゃ良かったんだ」

「黙れっ、黙れ！」

力ならあった。だから、こいつは誰かの下で働いておけば良かったんだ。

「よくもビビらせてくれたな。てめえらのせいで、最近の俺は睡眠不足だ」

お前をこの手でぶっ潰すまで、俺は安らかに眠られねえ。

ウゴロモチ。

こいつらは、地上の光に目が眩まなけりや、もっと上手く立ち回っていたんだらう。……やっぱりそうじゃねえか。モグラってのは、土ん中から出たら死ぬんじゃないか。

「ウゴロモチにつ、光を……！」

ヴィーフホリが腕を振り上げる。疲労困憊のせいも、緩慢な動きだった。

俺は野郎の拳を右手で殴って弾き飛ばし、

「ひか　　を！」

顔面に拳を叩き込む。

バランスを崩したヴィーフホリの頭が下がった。俺は一步踏み込み、アッパー気味に野郎の顎を殴り飛ばす。瞬間、今まで事態を静観していたヒーロー、イダテン丸が動いた。彼は倒れ込もうとするヴィーフホリの背中に蹴りを放ち、首根っこ掴んで地面に引きずり倒した。

構うもんか。後は好きにやってくれりゃあ良い。

「……よう、今まで手を出さなかったのはさ。俺に、氣遣ったたのか？」

イダテン丸はこっちを見ない。返事をしない。

「ま、どうでも良いけどよ。そいつ、やるよ。煮るなり焼くなり手柄立てるなり、好きにしてくれ」

長い間の後、イダテン丸が小さく頷いたのが見えた。

これで、ウゴロモチも終わりだな。構成員も殆ど倒されたし、残党だつてろくにいやしない筈だ。俺の悩みも一つ消えた訳である。

「あんたさ、口が堅そうだけど、一つ約束してくれねえか？」

ヴィーフホリの状態を確認していたイダテン丸は、目だけをこっちに向けた。

「今日、俺はここにいなかった。そいつをやったのはあんただ。そういう事でよろしく頼む。……頼めるか？」

「……心得た」

そりゃ心強いお返事で。

「助かるぜ。じゃあな、またどっかで」

会うだろうな、多分。こいつヒーローだし。もしかしたら、次は数字付きの仕事やってる時に行くわすかもしれない。そんな時は、見逃してもくれないし、気の一つも遣ってはいけないだろう。

それで良い。俺は今日、ヒーローとしてヴィーフホリを殴った訳じゃあないんだから。誰かを守りたいとか、大層な気持ちもお題目もなかった。だから、だろうか。やけに虚しいのは。

翌朝、ウゴロモチが壊滅したとのニュースがテレビでちらつとだけ流れた。新聞の一面を飾る事もなく、小さな記事で。

「青井」

「何だよ」

社長に睨まれる。俺は朝から、彼女に呼び出しを受けていた。

「ウゴロモチ、どう言う事かしら？」

「潰されたんだろ。良かったじゃねえか」

「……あなたが忙しいだのお腹が痛いあの言わずに出ていれば、新聞に載っていたのはカラーズだったのよ？」

載ってたら厄介な事になってたんだよ。俺は目立ちたくないぞ。

「勿体ない。それに、ウゴロモチのリーダーを倒したのはイダテン丸、ですって？ あの時、公園で囲まれていたヒーローじゃない」

社長は新聞を机の上に叩きつける。睨まれそうになったので、俺は九重に視線を移した。

九重はレンとトランプで遊んでいる（本当はレンを連れてきたくなかったのだが、脅されれば仕方がない）。二人で神経衰弱をやっているらしかった。

「なあヴィーフホリって動物がいるのか？」

「……あ、ウゴロモチの、ですか？」

「そう。モグラやヒミズは分かるけど、ヴィーフホリなんてのは聞いた事がないからな」

今更だが。

「……ヴィーフホリというのはロシア語で、ロシアデスマンの事ですね」

デス……？ えらく強そうな名前じゃねえか。伊達にボスの名前じゃあねえな。

「えっと、ロシアデスマンっていうのは、その、巨大なモグラって思ってもらえれば」

「ロシアとか、その辺に住んでるのか？」

九重は頷く。その間、レンはランプを次々とめくり、ペアを作り始めていた。どうやら、改造を受けて記憶力も優れているらしい。「でも、土の中ではないんです。ロシアデスマンの生活圏は水中や水辺に限られていますから」

「水？ そうだったのか」

「水辺の地面に巣穴を掘って、あっ、泳ぎも上手いんですよ」

やばい。また九重のアニマル講座が始まりそうだ。

社長の方に目を向ければ、彼女は気難しそうに溜め息を吐いている。きつと、俺に対する悪口でも考えているのだろう。そうに違いない。

仕方ないので、窓の外に目を遣った。洗濯日和とでも言うのか、良い天気である。……光なら、無理に掴もうと、望もうとしなくても良かったんだろう。アレは誰にでも、平等に降り注いでいるんだから。だけど、少しはウゴロモチの連中の気持ちも分かる。暗がり、に潜む身としては、あの眩しさと温かさに焦がれる気持ちってのは分かるんだ。

「あっ、何か気持ち悪い事を考えていそうな顔」

「失礼だな、あんたは」

全く、平和だ。明日もこういう日であれば良い。悪い事なんか何も起こらずに。いや、皮肉じゃあなく。

私の隣に座ろうなんて十年早いわ

ウゴロモチが潰れて、ヴィーフホリも捕まった。つまり、俺の悩みが一つ消えたのである。ビバ安眠だ。

「何か機嫌良くねえか？」

「そうかあ？」

俺の頬は緩んでいた事だろう。数字付きの同僚に返事して、俺は控え室のコーヒーマーカーのサーバーから、カップに中身を注いだ。俺のカップには『13』と、油性ペンで書き殴られている。エスメラルド様が区別がつくようにとやってくれた事らしい。

パイプ椅子を引き、コーヒーを飲む。対面に同僚、数字付きでは七番の奴が座った。

「気持ちは分かるけどよ。最近、楽だからな」

「楽じゃなくて、暇と言う。マジで、何も仕事がない。」

「江戸さんは嘆いてたけどな」

「暇だからだろ？」

「いや、ウゴロモチって組織が潰れただろ？ 何か、江戸さんはヒーローの目をそいつらに向けさせたかったらしいぜ。でも、すぐにやられちまったじゃんか」

「あー、そっぴやそんな事言ってたっけ。しまったなあ、江戸さんには申し訳ない事をしてしまった。」

「当分は様子見だろうな。ヒーローの動きを警戒するとかで」

「一生警戒でも良いけどな」賛成したいが、それは流石にまずいと思う。

俺はコーヒーを飲み干し、マグカップを流し台に置く。

「洗えよ」うるせえな。

「掃除のおばちゃんがやってくれんだろ」

「嫌々やってんだよ、ありゃ。俺はこないだ嫌味を言われたところなんだぜ。俺はおばちゃんに嫌われたくない。洗え」

俺は言われてない。

「洗えって言うてんだろ！」

「そんなんで怒ってんじゃねえよ！」

暇過ぎてエネルギーが余ってんじゃねえのか？ 無駄に発散させようとしやがって。

「洗わなきゃ殺すぞ」

「そこまで言うかあ？」

だが、こいつの目は本気だ。こんなくだらない事で喧嘩するのはどうかと思ったので、ここは従っておく。

「最初からそうしてりゃ良かったんだよ、ボケが」

戦闘員つてのは、基本的に血の気が多い。つーか馬鹿が多い。ヒーローとの戦闘がなけりゃ、ストレスやらを発散出来ないのである。スーツ脱いでる時に暴れても、普通に捕まるだけだし。

今日も終電で家に戻る。コーヒーを飲んでカップを洗うだけの簡単な仕事だった。いや、暇だ暇だとは聞いてたけど、どうなんだ、これって。

レンはぐっすり眠っていた。そりゃそうだ。組織に行くまでトラップに付き合ってたからな。疲れているんだろ。改造人間って言うても、所詮ガキなのである。

全然疲れるような事はしてないけど、眠くなってきた。明日も力ラースは休みだろうし、昼まで寝てられる。幸せ。……幸せなのか？

ケータイのアラームで起こされる。

しかし、設定した覚えはない。枕元のケータイを掴んで、蓋を開ける。着信だった。時刻は午前八時。はええよ畜生。朝っぱらから

ジャカジャカ鳴らしくさつてポケが。

「何だよ、もう」

『……おはようございます、でしょう。あなた、上司に対する態度がなっていないわよ』

社長だった。不機嫌なのはお互い様である。

『あなたが愚劣なのはいつもの事だから構わないけれど』ありがとうございます。

『それより仕事よ』

「はあっ？ 昨日は何も言わなかったじゃねえか」

当日に言っなくなってんだ。前もって連絡しろと言ってるだろうが。

『急遽決まったのよ。そうね、三十分以内に会社へ来なさい。遅刻したらノーギャラで働いてもらうから』

「ふざけんなや守銭奴が！ てめえマジで訴えるぞ！ ……あっ、切ってる」

くそっ、やばい。三十分って朝飯だって食べねえぞ。

「んんっ……今日は、早起きさんだね」

レンが体を起こす。しまった、さっきの声で目が覚めてしまったのか。

「仕事だからな」

「もしかして、ヒーローの？」

「そんな感じだ」

身支度を整えながら、適当に相槌を打つ。

「楽しそうっ。あは、僕も行くよ。良いよね？」

「だめー、お前は留守番な」

「僕も行くっ」

布団を跳ね除けたレンが俺の腰付近に抱きついてくる。すげえ邪魔。

「連れてつてくれなきゃ噛むよ！」

「どこを！？」

ケツか？ ケツなのか？

……まあ、最近はレンも大人しいし、何より時間がない。向こうに着いたら九重に相手してもらおう。あいつには何か懐いてるし。「分かった分かった。じゃ、早く顔洗って歯あ磨きな」「はいっ！ あは、お兄さん、ありがと」

カラーズの（正確にはカラーズの入った雑居ビルの）前に着くと既に九重のタクシーが停まっていた。後部座席には社長が座っており、運転席には九重がスタンバイ済み。用意が良いな。

「……おはようございます」ウインドウが開き、九重が軽く会釈してくる。

「おー、おはようさん。もう、仕事なのか？」

「そうよ」後部座席が開き、社長が俺を睨んできた。な、何だよ。三十分以内に着いただろ。

「私が三十分と言ったら、五分以内に来なさい」「体内時計狂ってんだな」

後部座席に乗り込もうとしたら、平手が飛んできた。避けようとして頭を天井にぶつけてしまう。

「ためえ何を……！」

「あなたは助手席よ。私の隣に座ろうなんて十年早いわ」

頭を摩りながら、俺は助手席に乗り込んでシートベルトを着ける。後部座席にはレンが乗り込んだ。

「出してちょうだい」

頷き、九重は車を発進させる。ミラー越しに確認すると、レンは景色を見て楽しそうに笑っていた。

「……で、仕事って？」

「ポスティングよ」

ポスティングってアレか。直接家にチラシを配っていくアレか。

「ウチの宣伝か？」

「いいえ、ピザ屋のよ」

社長は鞆の中からチラシを抜き取り、俺に手渡す。うん、ピザ美味しそう。って言うか、またこんな仕事かよ。

俺は鞆を見遣り、さり気なくチラシの枚数を確認する。

「そんだけか？」

「トランクに山ほど積んであるわよ？」

あ、そう。そうですか。まあ、車使える分楽は出来そうだけど。

「えー、ヒーローのお仕事じゃないの？」

「文句言うなよ。そっちのが楽だろうが」

「あは、楽なの？　じゃあ僕にもやらせてよ」

レンはピザ屋のチラシを折り始める。こら、そいつは商売道具だぞ。

「駄目だ、駄目。ガキが働くとか言うな」

「僕だってこれくらい配れるもん」

働いて欲しくないと言うか、組織の奴に見つかりたくない気持ちのが強い。

「車の中で大人しくしてる。社長からも何か言ってやれよ」

「あら、私は構わないわよ？　社会勉強の一環じゃない。それに、

小汚い男が配るよりも、可愛い子供が頑張ってる方が受けると思うわ」

「やっぱ黙っててくれ」

しかし遅かった。レンは社長の言葉に乗っかり『ベンキョーベンキョー』とオウムみたいに繰り返している。

「車から出るな。出たら怒るぞ」

「じゃあ、もうご飯作ってあげない」

なっ!?!?　何!?!?

「ふざけんな、だったら俺のメシを誰が作るってんだ」

「……あなた、この子に食事を作らせているの？　児童虐待で訴えられるわよ。と言うか私が訴えるわ」

「だってこいつ、俺より上手いんだぞ」

「情けない」

その通り過ぎるので言い返せなかった。

「それに、一応こいつは追われてる身なんだぞ？」

「顔を隠せれば良いのよね？ その点は心配しないで」

わー用意周到。

「とにかく駄目だからな！ でもメシは頼むからな！」

「本物のクズね、あなた。……レン、私が許可するわ。青井と一緒に
行っても良いわよ」

「あはははっ、やった。お兄さん、頑張ろうね」

ぐう、このコンビ、すげえめんどい。俺にとって一番相性が悪い
かもしれん。

ポスティングは、主にマンションや団地をターゲットとしていた。
一戸建てをこつこつ配ってては数を捌けないらしい。怠慢である。
第一、マンションって下から上へ移動して、結構疲れるんだぞ。

「それをあんたは分かっていない」

「いきなり何を言い出すの？」

チラシは七割程度消化出来た。どうやら、一日で配り切らなくて
も良かったらしい。決められた期間内に、決められた枚数を配られ
ば済む話なのである。それを面倒がって纏めてやろうとするから、
俺の足腰が痛む事になるんだ。

陽は傾き掛けている。今日はここまでだろうな。

「オフィス街にも配っておきましょうか」

「おいふざけんなよ？ こっちはもう限界だ。一步も動きたくない」

「あはっ、じゃあ僕が頑張ってくる」

「それも駄目だ」

レンを一人にさせれば、何をしでかすか分からんからな。

「嫌だからな、俺は」

タクシーは道路脇に停まる。俺は完全に無視されていた。

「一番大きなビルに向かいなさい」

「お前が行けよ！ 扱き使い過ぎだろ！」
もう勘弁してくれ。

俺は助手席に深く腰掛ける。動かないぞと言うアピールのつもりだった。

「九重、このまま俺んちまで向かってくれ」

「……そ、それは」あー、分かってる。お前は社長の犬だもんな。

「お兄さん、もう少しだから行こうよう」
ぐいぐいと後ろ髪を引っ張られる。

「わーかったよ。だから離せって、痛いから」

俺は車から降りようとしてシートベルトを外す。覚悟を決めたのだ。

「待ちなさい」

が、挫かれる。

文句を言っつてやろうと振り向けば、社長は窓の外を指差していた。
何かあんののか？

「誰かが戦っているわ」

「はあ？ ……あー、マジだ。レン、見えるか？」

大分先の、ビルの屋上に人影が見える。飛んだり跳ねたりしていて、影が忙しく動いていた。どんな奴が戦っているのか、はつきりとは見えないが。

「うん、見えるよ。あは、何だか忍者みたい」

忍者？ 忍者って言うのと、まさか。

「恐らく、イダテン丸でしょうね。怪人と戦っているのか、それとも、前みたいに追われているのかしら」

「レン、青い忍者は見えるか？」

「一人いるよ。後は、黒っぽい人たち。格好は似てるよ」

「どうやら、イダテン丸で間違いなさそうだ。こんなところで、つか、あんなところで戦っつてて恐ろしくないんかね。一歩間違えりゃ転落死だぞ。」

しかし、その心配はなさそうである。見ていてはらはらするが、

イダテン丸は鉤縄っぽいものを巧みに使い、ビルからビルへと縦横無尽、自由自在に飛び移っていく。追っている忍者たちも飛び移ろうとするが、既に迎撃体勢に入っているイダテン丸から攻撃を受けていた。

「……あの人が、強いんだね」

「あー、そうだな……っ、つてこら！ 外に出るなっ！」

「レン君！？ あっ、青井さん！」

レンは後部座席のドアを開けている。俺は急いでシートベルトを外し、車の外に出て彼の襟元を引っ張った。

「いきなり何してんだお前は」

「あはっ、だつて楽しそうなんだもん。僕もやりたいから、あっちに行くね」

あ、こいつスイッチが入ってやがる。

「駄目だ！」

「離してっ、離してよ！」

離したら死人が出るって！

仕方ない。俺はレンの頭を軽く叩いて、

「ひゅっ」

もう一発、強めにぶん殴る。

レンは頭を押さえて、その場にしゃがみ込んだ。

「……う、ううっ、痛い……痛い……」

「痛くしたからな」

涙目のレンを抱えて、後部座席に放り込む。社長は溜め息を吐いた。

「危ない子ね」何を今更。

「九重、出せ出せ。あいつらが見えなくなるところまでな」

「わ、分かりました」

俺は車に戻り、ぐすぐすと鼻を嚙っているレンを睨む。

「ひゅ、酷い。お、お兄さんなんか、お兄さんなんか……」

「俺との約束を忘れたのか？ いらん事すんな、馬鹿が」

「もっと優しくしたら？」
うるせえぞ。ここで甘やかしたら付け上がられるってんだ。俺に
レンを押し付けといて、好き勝手抜かすな。

車は走る。どうやら、カライズに戻っているらしかった。

そうしている内、レンも泣き止んで大人しくなる。

「……お兄さん」

「何だ？」

「ごめんなさい。もうしないから、だから、僕を……」

またそれが。

「それについても言っただろ。忘れたのか？ 安心しろって」

「う、うん。あ、あはっ」

「んー？ がっ、ぐ……！？」

座席越しに首を絞め、し、絞められている……！？

「お兄さんって本当優しい！ あはははっ、僕ね、今日のご飯は腕
によりをかけちゃうから！」

腕を！ 腕を離せ！ 息が出来ないってんだろ！

「あなたたち、随分と濃密な関係を築いているのね」

「た、しゅ……けて」九重、九重っ、あ、ガン無視。

恐ろしく強く、素早い

「いつてらっしやいお兄さん、明日の朝ごはんも期待してて良いからね！」

お、おう。

エプロンつけてお玉を持ったレンに送り出されて、俺は仕事場ごと、悪の組織へと向かった。

あいつ、やけに気合が入っていたけど、今から仕込んだりするんだろつか。朝から、何を食わされるんだろか。ちよっと怖い。晩飯もすげえ手が込んでたし。

ロッカーの鏡で確認すると、喉にはうっすらとした手形が残っていた。あのまま、死ぬかと思った。社長も九重も止めようとしねえし。畜生、俺はカライズ唯一のヒーローなんだぞ。もっと丁寧に扱ってくれってえの。

「青井ー、お前さ、今日はどうすんの？」

何も考えていない。

「コーヒー飲んで帰る」

「給料泥棒が。少しは働けよ」

働きたくても仕事がない。つーかお前だって泥棒だろうが。

しかし、控え室に三十分もいると退屈になってくる。流石に、一時間足らずで帰ってしまうのもどうかと思うので、江戸さんの部屋へと向かった。上司のところには暇だから行くっていうのは、部下としては最下層の部類に入りそうだが、その辺の言葉は言われ慣れて

いるので問題なかった。

「……イダテン丸？」

「はい、そういうヒーローがいるんですけど、知ってますか？」

江戸さんは苦々しい表情を浮かべる。何か、おかしい事を言ってしまったのだろうか。

「青井君、私はエスメラルド様の右腕なのだよ。イダテン丸と言えば、ウゴロモチを潰したヒーローだ。その憎むべきヒーローの名を、私が知らない筈がない」

う、ま、まあ、そりゃそうなんですけど。

「今の質問は、受け手によっては馬鹿にされていると思われかねない。覚えておきたまえ」

「も、申し訳ありません」

「うん、素直に謝るのは君の美德だと思う。それで、イダテン丸がどうしたのかな」

うーん、どうしたもこうしたもないんだなあ、これが。第一、ここには暇潰しに来た訳だし。

「いつか戦うかもしれませんから、出来るだけ情報が欲しいかなあ、と」

「ほう、素晴らしい心掛けだ。他の数字付きにも見習って欲しいものだ。良いとも、教えようじゃないか。ただ、イダテン丸の情報は少ないのだよ」

忍者、だからか……？ すぐえぜ忍者。

「これまでの目撃情報などから、イダテン丸を追っているのは軒猿のきざるの構成員だと分かっている。恐らく、イダテン丸というのは、元はそこに属していたのだろう。抜け忍と言えば分かりやすいかな」

やっぱり、そういう理由で追われていたのか。しかし、の、軒猿？ そいつは初めて聞いた名前だな。

「軒猿と言つのは……そうだな、忍者集団、忍群とでも呼べば良いだろうか」

「忍者の集まりなんですな」俺たちだってクズの集まりだけだ。

「噛み砕けば。だが、その実力は他の似たような組織とは比べ物にならないほど、高い」

江戸さんは目を瞑り、指で自分の二の腕辺りを叩いていた。苛々しているのだろうか。

「そもそもは、戦国武将の上杉謙信が使っていた忍者の一種だ。けんえんとも呼ばれていたらしい。その名の由来は中国の伝説上の皇帝だとも言われている」

ん？ そいつらって、戦国時代からいたのか？ すげえ古株じゃん。どの悪の組織よりも古い。超先輩じゃねえか。

「ああ、いや、勘違いはしないでくれたまえ。あくまで、軒猿と言う名にあやかっているだけだろう。実際の軒猿は、忍者の中でも特に高い戦闘技量を持つていたようだったからね。同じ忍者を殺害するのが主な任務であり、それを得意としていたらしい」

なるほどね、確かに強そうだ。そもそもって、今の軒猿もその名前に恥じないくらい強いんだろう。イダテン丸みたいな化け物が所属していたくらいだしな。

「尤も、組織自体がどのようなもので、一体何を狙って活動しているのかは殆ど分かっていない。他の組織との交流を嫌っているような節さえ見受けられるくらいだ」

「どっかのお偉いさんに雇われているのかもしれないね」

「かもしれない。肝心のイダテン丸の情報だが、これが嘘のようにならないのだよ。恐ろしく強く、素早いといった話は聞くがね」

むしろ、軒猿なんて名前が出てくるだけでも奇跡だろう。

「しかし、関わり合いにならないければ問題はない。今のところ、軒猿が追い掛けているのはイダテン丸だけで、他にどこかを襲ったとか、誰かを殺したとかは聞いた事がない。うん、早くあのヒーローがいなくなれば、我々も仕事やり易くなる」

俺は苦笑する。うん、そうだ。自分から首を突っ込まない限りは大丈夫。俺はイダテン丸を少しだけ知っているが、まあ、問題ない。そうに違いない。

「済まないね、青井君」

「とんでもない、勉強になりました。……それじゃ、俺はそろそろ帰りますね」

「ああ、気を付けて帰りたまえ」

江戸さんに見送られながら部屋を出る。

軒猿、ね。まだまだ、俺の知らない組織がこの街にはあるって事か。

電車に乗り、がたごとと揺られて駅に着く。最近はずっと終電で帰ってるな。何もしてないんだけど、何かやったって感じがしてるんだが。疲れたサラリーマンの次に改札を通り、俺は体を伸ばす。眠い。さっさと帰って、とっとと眠っちまおう。

厄介事は無視するに限る。そうすりゃ、危ない目には遭わないで済む。

が、忘れていた。そういうのに限って、俺の意思を無視して向こうからやってくるんだって事を。

「ひっ、ひい！ ひいい！」

俺の目の前を、全身タイツの覆面野郎が走り抜けていく。どっかの組織の戦闘員だろう。あらら、首元には白いスカーフなんか巻いちやっつて。おっしやれー。

「くるなくなるなくなるなあああ！」

そいつを追い掛けるのは、青い忍び装束を着たヒーローである。

……イダテン丸、である。彼は戦闘員の首元に手刀を叩き込んでいた。

焦る。さっきまでの俺は悪の組織の戦闘員だったからな。いや、くわばらくわばら。ここは見て見ぬ振りをして、さっさと行っちまおう。

路地裏に連れ込まれる戦闘員と、無言で引きずっていくイダテン丸から背を向けて歩き始めた瞬間、俺の前方に何かが落ちた。突き刺さったと言うべきか。地面に刺さってるのは刃物だ。こつ、細長い手裏剣？ みたいな。

ふと、上を見る。黒い忍び装束を着たのが二人、いた。そいつらはビルの壁に立っている。

「ああ……？」

目の錯覚じゃない。確かに、壁面に直立不動していやがるのだ。

二人の忍者は音もなく、俺の前方に着地する。片方は大柄な男だ。もう片方は、小柄な……女、か？

「……イダテン丸の仲間か？」

はあ？

「どちらにせよ、目撃者は消すだけだ」

小柄な忍者が小さく笑う。何が、どうなってんだ？

「ちよつと待てよ。俺は別に、何の関係も……」

最後まで言えなかった。でかい方の忍者が得物を構えたからである。

どこに隠し持っていたのか、巨大な、刀だった。あの変わった刀身には見覚えがある。忍者の持つてる奴だ。つー事は、つまり何か、こいつらはまさかイダテン丸を追ってるって言う、軒猿って連中なのか？

「はあああつ！？ てめえ正気かコラ！ 俺は無関係だぞっ！」

返事はない。巨大な忍者刀を持った男が突進してくる。

「うおおおおおおおつ！？」

駄目だ絶対逃げらんねえ！ 速過ぎだろ！

「……ぬう、現れたか」

「な、何が」男が俺から距離を取る。振り向けば、そこにはいつの間にかイダテン丸が立っていた。まるで幽鬼のようである。存在感のかけらもない。

イダテン丸は俺の前に立ち、懐から短刀を取り出して、そいつを

逆手に構えた。

「ふ、仕掛けるか？　だが、良いのか？」

小柄な忍者がくすくすと笑ってから、俺を指差す。……俺？

「お前が動けば、その一般人に額に穴が開く事になるか？」

「ふざけんなつ」逃げ出そうとするが、俺の顔のすぐ横を、冷たいものが通り過ぎていった。何かを投げつけられたらしい。何かを、確認するほどの勇氣はなかったが。

「次は当てるよ？」

軽い感じで言われてしまう。俺は動けなかった。

「抵抗したら、どうなるか分かってるよね？」

こ、これってやばいっつーか、俺がめちゃくちゃ足引つ張ってる形になってる？　（恐らく）軒猿の二人はこっちに狙いを定めてやがるし、そもそもイダテン丸が俺を助けてくれるとは思えん。ヒーローっちゃヒーローだけど、誰だって我が身が一番可愛いに決まってるんだ。

「た、助けてください」俺にはプライドなどなかった。

「ふふ、さ、どうするイダテン丸？」

マジで！　マジで助けてくれ！　お願いだから！

縋ってみる。めっちゃ見つめてみる。イダテン丸は表情一つ変えない。

「……へえ？」

だが、イダテン丸は短刀を懐にしまい込む。そうして、軒猿の方へと歩いていく。

「はっ、軒猿の幹部候補がこのザマかい。すっかりヒーローに毒されちゃって」

「おっ、おい……」

このままじゃ、あいつは殺されちゃう。俺は、助かるか？　俺だけでも、どうにか……？

「おい、待ってって」

いや、助からない。

奴らは言ったんだ。目撃者は消す、と。イダテン丸がやられれば、次にやられんのは俺だろう。野郎、俺を良いように利用するつもりかよ。そうはさせるかボケが。

「先に死にたいのかい？」

小柄な忍者が俺に何かを向ける。それは、真つ白な手裏剣だった。さつき投げつけてきたのはアレだったのか。

「待てよイダテン丸。お前が行っても、結局俺は殺されちまうんだぞ」

「ぬう、鬱陶しいな、貴様」うるせえデカブツ。つーかお前の体格じゃ全然忍べてねえぞ。

「ここであいつらをどうにかしてくれ。頼むから」

イダテン丸は返事をしないが、足を止めてくれた。

「随分とまあ、好き勝手言うじゃないか」

「好き勝手言うてんのはそつちだろ。良いから、見逃せ」

「馬鹿かつ、見逃す筈ないだろ！」

軒猿の忍者が構えつばい姿勢になる。対するイダテン丸は、再び、短刀を構えた。

「そつかよ」俺はしゃがみ込み、奴らからは見えないように石を握り込む。

あいつらは、俺をただの一般人だと思っている。……まあ、スーッ着てないから実際そうなんだけど。だけど、そこそこは向き合える筈だ。少しくらいは、隙を作れる筈だ。

「……むうつ？」

立ち上がったと同時に、大柄な男の方へ石を放る。奴は、受ける事をせず、横に避けるのを選んだ。残念だが、今のはただの石である。ビビって体勢崩すほどのもんじゃない。

イダテン丸が地を蹴る。俺は姿勢を低くした。小柄な忍者は喚き、手裏剣を放る。それを、イダテン丸が短刀で弾き返した。

「フドウ来てるよっ」

「ぬうつうつうつうつー！」

大柄な忍者は得物を横薙ぎにする。だが、イダテン丸は地面に這い蹲るみたいに身を低くしていた。忍者刀は空を切る。次の瞬間には男の喉に短刀が突き刺さっていた。ゆっくりと、倒れていく。

「よくも……！」

小柄な忍者の両手から手裏剣が放たれる。その内の一本は俺を狙っていたが、イダテン丸はそいつを弾き、尚且つ、全ての飛び道具を回避していた。

フドウと呼ばれた男は後頭部から倒れ、イダテン丸に顔面を踏みつけられている。

「私の氷手裏剣をつ」

「逃げてくぞ！」

小柄な方は不利を悟ったのか、ビルの壁面を走り抜けて、屋上に辿り着いていた。イダテン丸はそれを確認し、もう追えないと判断したらしい。得物を戻して、俺を見遣る。

「あ、あのさつ」

イダテン丸は何も言わず、さっきの奴が逃げたのとは違う方向に駆け出した。姿が見えなくなるまで、五秒と掛からなかった。これは、もしかしてまた面倒な事に巻き込まれてしまったのだからか。正直、勘弁して欲しい。が、イダテン丸には借りを作りっぱなしである。公園の時も、スーパーの時も、ヴィーフホリの時も、今も。借りっぱなしは性に合わないけど、あんな奴に恩を返せるとは思えなかった。

最初からヒーローをやっておれば良いものを

イダテン丸の事は気になるが、彼についての情報は少ない。彼がウゴロモチを潰したヒーローとは言っても、そう簡単に尻尾を出すような奴ではないとも分かっていた。

「知ってるわ。名前だけはね」

そこで、もしかしたらと思い、朝一番で社長に聞いてみたのだが、これだよ。やっぱこんなもんだよ。彼女は軒猿の名前だって知らなさそうである。

「第一、初めて見た時には名前だって知らなかったんだもの。イダテン丸って名前も、一体誰が漏らしたのかしらね」

社長は新聞を放り投げる。そこには小さな記事があり、ブレまくりの写真が載っていた。多分、イダテン丸を撮ったものなんだろうが、これじゃあ何が写ってるのかさっぱりである。

その日の夜、俺は仕事がないと分かっているながらも組織に顔を出した。江戸さんから、詳しい話を聞く為である。昨日は教えてくれなかったが、あの人なら他にも何か隠し持っているような気がしたのだ。

が、

「いない？」

「江戸さんは出張だぜ。ちゃんとボード見とけよな」

どうやら、そう言う事らしかった。

ホワイトボードで確認すると、江戸さんは他の組織へ出張に行っているらしい。ウチと協力関係にある組織も幾つかあるし、出張だつてそう珍しくはない事だけど、このタイミングで、かよ。

やべえ、すげえやる事がない。

「武器なら出来ておらんぞ」

「知ってる。いや、暇潰しに来ただけだから」

仕方がないので、俺は今、爺さんのところに来ている。

「暇潰しじゃと？ 仕事はどうした。お前は今、四天王の数字付きだろうが」

「ないもんはないんだから、どうしようもねえだろ。それより爺さん、軒猿って知ってるか？」

爺さんはキーボードを叩く手を止める。

「ほう、随分とまあ懐かしい名前を聞いたもんじゃ。青井、どうしてお前が軒猿を知ってる」

どこまで説明して良いものか迷ったが、適当に誤魔化して話す事にした。

「最近さ、イダテン丸ってヒーローが活躍しているらしいんだ」

「そっちは聞いた事がないのう」新しいヒーローだな。爺さんはここに引きこもってるし、その辺に転がってるヒーローなんざ興味がないんだろう。

「どうやらそいつ、軒猿を抜けてヒーローやってるらしいんだ」

爺さんは鼻で笑った。心底からイダテン丸を馬鹿にしているらしい。

「最初からヒーローをやっておれば良いものを」

「それより、知ってるのか？」

「軒猿か？ ああ、えげつない忍群だった」

「だった？」

「ま、昔の話じゃ。あまり覚えておらん」

やっぱりもうろくしてるじゃねえか。大丈夫かよこの爺さん。

「戦闘員一人一人の錬度が高く、殺人すら厭わん連中だ。ある意味お前よりもクズだが、潔い分、向こうのがマシかもしれんな」

「あつそ」その辺の話なら江戸さんからも聞いてるっつーの。

「確か、組織は能力に応じて上忍、中忍、下忍と分かれていた筈じや。ウチで言えば、中忍が四天王で、下忍がお前らと言ったところか。力の差は歴然だがな」

余裕で俺らのが下って事か？ けど、中忍でウチの四天王と同レベルってのは眉唾だな。

「軒猿の上忍は一人しかおらんかの」

「へえ、そいつが親玉って訳か？」

「そう言う事になるか。じゃが、それは前の、わしが知っている軒猿の話じゃ。今、どうなっているかまでは知らん」

一体、この爺さんは何歳で何者なんだろうか。なんて、考えるだけ無駄だ。本人が覚えてねえんだからな。

「果たして、十人衆や三行者さんぎょうじやが残っているかどうかすら怪しいな」

「……何だそりゃ？」

「ああ、そいつらは軒猿の中忍でも別格の存在じゃ。……数字付きみたいなものか」

はいはい、そんで比べるだけ無駄だつて話なんだろ。

「そんなのが十三人もいるのかよ」

「イダテン丸というのがどんな奴かは知らんが、古今東西、抜け忍というのは死ぬまで追い掛け回されるものだ。……あるいは、その抜け忍が追う側の組織を潰すか、組織自体が諦めるまでは」

どっちかが死ぬまで続くてかい。そりゃ難儀な話だな。

「そもそも、軒猿つてのは何をやりたい組織なんだ？」

今のところ、ストーカー集団つてイメージが拭えない。

「さて、良く分からん物を追い掛けているとも聞いた事がほつ。

「あつたよつな、なかつたよつな」

「もう良い。……んじゃ、俺は帰るわ」

「おう、青井。新しい武器についてだがな」

俺は立ち止まる。

「可変式のことを考えておるんじゃ」

「かへん式？ それって、どんなだ？」

「近、中、遠距離に対応した武器。それから、サブウェポンのようなものを幾つか。そいつを一つに纏めてしまおうかと考えている」
なっ、何それ？ すげえ、超至れり尽くせりじゃねえか。

「じゃが、複雑な機構のものは強度に難がある。どこまで遊んで良
いか、目下検討中じゃ」

「遊ぶってな、爺さん。俺は……」

「勘違いするな。物事と言うのは、少しくらい力を抜いていた方が
上手くいくものよ。それに、試作品を用意してある。テストが終わ
るのもすぐだろうし、明日には渡せるだろうよ」

「えっ、マジで？ もう武器くれんのか？」

爺さんは顎鬚を弄ぶ。

「だから、試作品だと言っているだろうが」

それでも充分だろう。何せ、俺には武器が殆どないんだから。ど
んなもんだって有り難がってみせるっつーの。

「いや、存外来て良かったわ」

「どっという意味だ。全く、可愛げのない……」

爺さんはぶつぶつと呟き始めていた。こうなると手に負えないな。
さっさと逃げるに限る。

この日は、終電よりも一本早い電車で帰った。明日辺りには、組
織に顔を出していないかもしれない。恐ろしい職場である。いや、
下っ端ん時とはえらい違いだ。偉くなるって素晴らしい。もっと偉
くなってもっと楽をしよう。

労働意欲に燃え上がりながら、俺は帰宅する。

「あ、お帰りなさいっ」

扉を開けた瞬間、レンが飛びついてきた。引き剥がしたいが、相
変わらずこいつの馬力は凄まじい。

「まだ起きてたのか。ガキは早く寝て、早く大きくなるもんだ」

「うん、もう寝る。お兄さんもそうするよね？」

「あー、シャワー浴びたら寝るわ」

「あはは、僕も僕も」

手を上げるレン。ふざけるなよ。

「えー、一緒に入ろうよー？」

「お前、俺が出る前に入ってたろ。日に二回も入ってどうすんだ。ふやける気か？」

「あは、お背中お流ししますよ」

お前が十年経って女に生まれ変わったら、こっちからお願いしますと頭を下げるけどな。

「いらん。早く寝ろ」

「……意地悪」

性悪が。

ゆっさゆっさと、体を大きく揺さぶられる。が、何か変。横にっつーか、縦に？　そんで、俺に何かが乗っかってる？　地震、にしちゃあ微妙だし。

妙な感覚に目を覚ませば、レンが馬乗りになって俺をじっと見ていた。で、時折、縦に揺する。

「あは、起きた」

「……………今何時だ？」

「えつとね、二時」

勿論、夜中の。

「おっしや、ちょっとそこに正座しろ。ぶん殴るから」

「だつ、だつて！　だつて怖い夢見たんだもん！」

理由になつてねえぞ。

「お前は、一々かわい子ぶろうとするな……首を傾げるな！　男だろうが、めえは！」

「お兄さんの布団で寝てもいい？」

「じゃあ俺がお前の布団で寝るわ」

「ひ、酷いっ」お前がな。

あー、くそ。声張ったから目え覚めちったじゃんか。

「……寝られねえのか？」

「あ、あは。今は、無理かも」

レンは俺の服の裾を握っている。ちぎるつもりかこの野郎。

「じゃあねえ。コンビニでも行くか」歩いてりゃ気だつて紛れるし、少しは眠くなるだろう。

「あはっ、やった。お出かけだね。……あは、お兄さんと一緒」

「ま、まあそうだな。そんな嬉しいか？ コンビニだぞ、コンビニ」

「嬉しいよ？」

その笑顔は、何ら含むものがない、あっけらかんとしたものだ。た。

コンビニで缶ビールと適当なつまみを買う。

「あ、僕も飲みたいな」

「駄目に決まってるんだろ。お前はから揚げでも齧ってる」

レンは素直に、串に刺さったから揚げを齧っていた。俺も、自分の串を取って、口に運ぶ。ゆっくりと歩きながら、アルコールで体を充たす感覚。いや、良いね。たまにはこういうのも良いじゃねえか。

「あは、こんな時間にこういうの食べてたら太っちゃうね」

「育ち盛りだろ。あんま気にすんな」

そもそも、こんな時間にガキが起きているのが駄目だ。駄目駄目だ。

缶の中身を半分くらい飲み干した辺りで、俺は足を止める。レン

が俺の前で立ち止まったからだ。彼は前方をじっと見据えている。

「おい、どうしたよ？」

「誰かが遊んでる」

遊んで……？ いや、違う。戦ってるんだ。暗がりの中で、時折火花が散っている。物音は殆どしていない。だが、凄まじい速度で何か動いているのは辛うじて分かる。

「お兄さん、こないだの人だよ」

「こないだって、イダテン丸か？」

レンは頷いた。俺はどうして良いか分からずに、ビールを呷る。ビール袋の中から、ピーナッツを取り出して開封した。ひょー、超美味そう。

「……あは、余裕があるんだね」

「今だけな。……レン、約束忘れてないよな」

「あははは、当たり前じゃん！」
けど、なーんか不安なんだよな。ほら、ちょっとテンション高くなってるし。

しかし、イダテン丸か。妙な縁があるな。やだやだ。相手は軒猿って事なんだろうし。うーん。昨日の、氷手裏剣とか抜かしていた奴か？

「ねえ、遊んできてもいい？」

「駄目だって」少なくとも、俺が絡んで得するような奴らではない。このまま回れ右するのが正解だろう。

「こつちだ。行くぞ、レン」

レンは戦闘をじっと見つめていたが、俺に手を引かれて、黙って歩き始める。

「……あつ」

「ん？」

振り向いた瞬間、何か俺の頬を掠めていった。暗いし、速過ぎて全然見えなかった。カナブンか？

「ちつとびっくりしちま　　レン？」

「お兄さん、ほっぺから血が出てる」

えっ、嘘だろ。指を当てると、それっぽい感触を確認出来た。『
すげー強いカナブンじゃん』とか言ってる場合じゃねえ。多分、今
のは流れ弾だ。いや流れ手裏剣？

それよりも、レンさん、顔が怖いんですけど。きつと向こうを睨
み付けていらっしやる。

「お、おい、俺なら大丈夫だから……」

「……よくもお兄さんを……！」

が、レンは俺の手を振り解いて、一目散に駆け出した。

「レン！？ 馬鹿戻ってこい！」

死人が出るから！

俺は追い掛けられなかった。だってすげえ怖かったんだもん。

暫くして火花が見えなくなる。多分、レンのせいで戦いが中断し
ているんだろう。

「うぎゃあああああああああああああああああああ！」

ひっ。

「ひっ、う、うわ……」

えげつねえ叫び声だ。この辺一帯に響き渡ったな、こりゃ。今の
は、どっちの声だろう。どっちが、レンにやられてしまったんだろ
うか。こ、殺したりしてないよな？ 今、あいつは武器だって持っ
てないし、流石に素手で人間を殺すつてのは……ありうる。大いに
ありうる。

「ストップ！ レンストップ！ レーン！」

腕を変な方向に捻じ曲げられていたのは、昨夜に見た軒猿の忍者
だった。そいつは泡を吹いて倒れている。ひでえ。

「あはははっ、お兄さんお兄さん、僕ね、約束守ったよ？」

「いや全然守ってねえじゃん」

スイッチオンで楽しそうだったじゃん。

「お兄さんが危ない時は、こつこつ事しても良いんだよね？」

まっすぐに見つめられる。そう言えば、そんな事を言ったような気が。

「殺してないよな？」

「あはは、その前に気絶しちゃったもん」

「そ、そうか」ここで安心しちゃう俺ってどうなんだ。

そして、さつきから立ったまま何も言わないイダテン丸。相変わらずブレない奴である。

「……軒猿の追っ手か？」

イダテン丸は答ええないが、僅かに表情が曇ったように見えた。

「……………かたじけない」

「あ、おい。ちよい待ってって」

必要以上には関わり合いになりたくないが、こいつには借りがある。

「一緒に戦ってくれとか、そういうのはきついけどさ。何か困った事があったら……………」

「……………何故」

「ん？」

何か言っただけだけど、声が小さくて全然聞こえん。

「あー、そう。カラーズってヒーロー派遣会社に連絡くれよ。少しは力になれるかもしれない」

返事は、ない。イダテン丸は俺たちに頭を下げ、夜の闇へ溶けるようにして、見えなくなっていく。

「お兄さん、この人でもう少し遊んでもいい？」

「駄目に決まってるだろ」

放置つてのも可哀想かもしれん。ケーサツ呼んで、とんずらこくか。

ド貧乳じゃん

翌朝、俺は社長からの電話で目が覚めた。また仕事かよと思ったが、どうやら、物事つてのは悪い方向に上手く転がるものらしい。知ってたけどな。

カラースマでレンと二人で行くと、形容し難い顔をした社長と九重、それから、

「……青井、説明してもらえるかしら？」

「どうして俺が」

イダテン丸がそこにいた。

「説明、してもらえるかしら？」

「そんな怖い顔したってすぐには出来ねえよ」

しかも、イダテン丸は怪我をしているらしい。右腕に包帯が巻かれている。彼はソファに深く腰を下ろしていた。酷く、疲れているみたいだ。目を瞑り、苦しそうに呼吸している。

「朝、ドアの前に座り込んでいたのよ。事情を聞けば、あなたからここを紹介されたって言うじゃない」

確かに、困った事があれば来いと言った。が、昨日の今日で来るとは思っていなかった。そもそも、来るとは思っていなかったのである。

「大丈夫なのか？」

「……傷自体は深くありません。けど、それよりも疲労が溜まっているみたいで」

青い顔をした九重が答えた。

「おい、昨日はそんな怪我してなかっただろ。何があったんだ？」

イダテン丸は胸に手を当てて、呼吸を整えようとする。

「悪い。無理はしなくて良いから」

「……………五人掛かりで襲われた」

五人！？ 軒猿の忍者五人か？ 嘘だろ。生きてるだけでラッキ
ーってレベルのやばさじゃねえか、それって。

「……………他に、思いつく場所が……………」

「ああ、分かったから。気にすんな」

「青井」社長に睨まれる。仕方ない。

「……………昨日、ちょっと巻き込まれた。そんな時、困ったらここに連絡
したらどうだって言ったんだよ」

「まるでここを自分のモノのように言うのね」
う。す、すいません。

「困った人を放っておく訳にはいかないけど、突然過ぎるわ」
「すまん」

「事情さえ分かれば良いのよ」

社長はイダテン丸の顔を覗き込んだ後、いつもの場所に陣取る。

彼女は窓を開けて、物憂げに溜め息を吐く。

「とにかく、イダテン丸は悪い連中に追われているのね」

「そんなところらしい。とりあえず、匿ってやってくれ」

「仕方がないわね、もう」

しかし、病院には行かずにここに来たつてのは、相当切羽詰つて
たつて事か？ それとも、一般人を巻き込みたくないと考えていた
んだろうか。……………どうにも、それっぽいな。無愛想で無口だけど、
俺を庇おうとしてくれてたんだし。

「よつてたかつてなんて、酷い話ですね」

「しかも女を。随分と下卑た連中なのね」

「らしいな。……………ん？」

レンが俺を見上げてくる。

「あは、お兄さん、どうしたの？」

「いや、女つて誰？」

よつてたかつて襲われたのはイダテン丸だぞ。

意味分からん。なのに、社長たちは俺を冷たい目で見てくる。

「あなた、まさか気付いていないの？」
何を。

「あの、イダテン丸さんは、女性ですよ」

「えっ」九重め、エイプリルフルには少しばかり遅過ぎるんじゃないの？

「そんな訳ねえじゃん」

俺は目を瞑っているイダテン丸を見遣った。こいつが、女？ まあ、確かに顔立ちは男つつーよりも女っぽいけど、決定的に欠けているもんがある。こいつには、胸の膨らみこと神がもたらした奇跡のおっぱいがないのだ。それは自身を女だと断言するにはあまりにも絶望的な事実である。おっぱいがないなら女じゃねえだろ。

「おっぱい」

「……は？」

「あ、青井、さん？」

あ、しまった。つい。脳味噌と口が直結してしまった。しまった。あなたの品性下劣過ぎるわよ」

「ええっ？ マジで女なの！？ だって、だって……」

イダテン丸は反応しない。騒がしい奴らだと無視しているのか、既に眠っているのか分からない。

「ド貧乳じゃん」

「あっ、ああ……青井さんは最低です！」

「なっ、何を。お前だってそう思うだろ！？」

同じ男だろ！ 気持ちを通じ合うだろ！？ お前だって本当はそう思ってるんじゃないのかよ！ 社長の前だからってかっこつけやがってクソが！ これだからイケメンは信用出来ねえんだよ！

「あはははは、お兄さんシメンソカー」

「レンだってそう思うよな？」

「レン君を巻き込まないでください！ みっ、見損ないました！」
非難轟々だった。

「……機嫌直せよ」

九重は俺を無視していた。ガキみたいに分かりやすいシカトしくさつて。

「ふふ、こんなに怒っている九重は初めて見るわ」

何を笑ってんだあんたは。

「それより、どうしたものかしら」

「何が？」

「イダテン丸の事よ。匿うのは構わないけど、いつまでも逃げ隠れしている訳にはいかないでしょう？ 彼女を追っている組織をどうにかしないと」

それが出来るなら自分でどうにかしてるだろ。ムリムリ、相手は殺人集団みたいなもんだぞ。

「正式な依頼さえ受ければ、色々と手を回せるし、使えるんだけど」

「断られたのか？」

社長は首を振った。

まあ、そうだろう。イダテン丸としちゃあ、俺たちをここまで巻き込んでる時点でありえない、とでも思っただろう。

「弱っているくせに、強情よね。……結構、持っていそうだからふんどくれそうなのに」

「正義の味方の台詞じゃねえぞ」

「あなたに言われたくないわ。ま、今は保留ね。彼女が目覚めない事には動けないもの」

だが、いつかは動かなきゃならないだろう。イダテン丸をここまですぐで追い詰めておいて、そう簡単に諦める軒猿ではない筈だ。下手すりゃ、この場所も突き止められちまう。そうなりゃ、あ、マジでやばいんじゃないの？

「……ちよつと、出てくる」

「こんな時に？」

こんな時だからだ。

九重は口を開かないが、俺を横目で見ている。へん、ビビりめ。今の内に謝って頭下げろってんだ。

「あは、じゃあ僕も行く」

「や、待て待て。すぐに戻ってくるし、お前は留守を守つてくれ」

「またお留守番？」

めっちゃめっちゃ不満そうだが、俺たち二人がいなくなったら、カライズが危ない。

「頼む」正直、弱い俺に守られてるよりも、レンがいる方が百倍安心だ。

「……すぐに戻ってきてよ？」

「おう、分かった。んじゃ社長、何かあったら電話くれ」

イダテン丸があの状態じゃあ、次に軒猿が襲ってきた時、完全に手詰まりになっちまう。俺のグローブじゃあ攻撃を当てられる気がしないし、レン一人で五人を相手するのは無理過ぎる。戦うだけならまだ良いが、カライズを攻められちゃ社長と九重が危ない。四方八方塞がりである。

だから、新しいものが欲しかった。

ぎりぎりの瀬戸際で、どうにかなるかもしれねえ。まだツキにや見放されていないらしい。爺さんは試作品なら明日、つまり、今日渡せると言っていた。生き残るには、そいつに賭けるしかない。とにかく、イダテン丸が復活するまで時間を稼げさえすれば良い。他のヒーローにも情報を流して連絡を取って、軒猿を攻めてもらうのだ。

「武器くれよ」

爺さんは固まっていた。俺を、アホみたいな目で見ている。どっ

ちがアホかは言うまでもない。

「いや、一刻を争う事態になってんだよ、マジで」

「……本気で言っているらしいな。尚更信じられん。急いでいるなら、礼節を弁えずとも良いと思っっているのか？」

「武器をくださいお爺様！」

我ながら良い角度で頭を下げたと思う。

「最初からそうしておれば良いものを。……しかし、何じゃ。何が起こっている？」

「やー、それは流石に……」

事情、説明しなきゃ駄目なのか？

「ま、試作品だし構わんが。ほれ、これじゃ」

「……これ？」

そう言っつて爺さんが差し出したのは、おもちゃだった。

おもちゃである。いや、どう見ても。

「これ？」

爺さんは『どや？』みたいな顔で満足そうに頷く。

渡されたのは、でんでん太鼓だった。持ち手がついたちいせえ太鼓。その両側には紐があつて、紐の先には玉が結びつけられている。

「これでガキをあやせつてのか！？」

「ほう、お前に子供がおつたのか。かわいそうに」

「流石に怒るぞ！ なっ、何だよこれはさあ！ 俺はっ、武器が欲しいって言っただぞ！？」

爺さんは耳の穴に指を突っ込んでいた。

「うるさいのう。これはただのおもちゃではない。れっきとした武器じゃ、武器」

「どこがだ！」

確かに、普通のでんでん太鼓にしちゃあでかい感じはするけどよ。紐に結びつけられた玉は、持ち手の部分は十センチくらいで、太鼓の部分は持ち手よりちよっと長くて大きいくらいである。叩けば痛いかもしれねえが、こんなん持って戦うならその辺から金属バツ

ト奪ってくるわポケが。

「持ち手の下の部分にボタンが二つ、ついている。押してみる」

言われた通りに押してみると、垂れ下がった紐がずんずんぐんぐん伸びていった。

「すげえ！」

「どうじゃ」

い、いや、惑わされるな騙されるな。紐が伸びただけじゃねえか。もう一つのボタンを押してみる」

言われた通りに押してみると、伸び放題だった紐がずんずんぐん縮んでいった。

「掃除機のコードかよ！」

「ボタンを押せば押す分、最大で五メートルまで伸びる」

「へえ………いや、どんだけ伸びたってどうしようもねえだろ」

邪魔になるだけだし。

「分かっておらん。見た目はおもちゃでも、素材は違う。最先端のモノを使ったでんでん太鼓じゃぞ」

「具体的には？」

「持ち手と太鼓、そして二つの玉の部分には超合金を使っておる」
信用出来ねえ！

「そして、それは紐ではない。半端ない強度のワイヤーじゃ。そんなものでまともに叩かれてみる。人間の頭やスイカくらいなら木っ端微塵になる」

「人間の頭とスイカを同列に並べられる爺さんの精神が、何よりも信じられん」

「超合金は嘘だが、お前に説明しても分かるまい。それに、そいつは企業秘密じゃ」

うーん。爺さんは自分の作ったもんに対して嘘は吐かないが、だからと言ってこれは。

「分かった。何か壊しても良いよな？」

「やるなら、お前の首の上に乗っているスイカを壊せ」

「試し打ちも出来ないままかよ」

「テストなら終わっておる。心配いらん。お前に渡したグローブよりも破壊力は下だが、その分リーチに優れておる」

リーチ？ ああ、そういう事か。この紐を伸ばして、先っちょの玉をぶつけろって話か。

「二つの玉の不規則な動きで、簡単には近づけん。懐に潜り込まれたとしても、太鼓の部分で直接殴ってしまえば良からう」

「練習してえんだけど」こんなトリッキーなもん、ぶつつけ本番で上手くは扱えねえぞ。

「自分の家でやれ」

「……こんなもん振り回したら住めなくなりそうじゃねえか」百パ
ー追い出される。

仕方がない。見た目は死ぬほど間抜けだが、中々面白そうなもんをもらっちゃまったぜ。使いこなすには時間が掛かりそうだけど。

「有り難いけどさ、名前くらいはどうにかならなかったのかよ」

「そんなアホくさいものの名前など考えていられるか。自分で決
め
い
い」

「この部屋ぐちゃぐちゃにすんぞ！」

試作品だからって好き勝手しやがって！ これだからジジイの道楽つてのは嫌いなんだ！ もっとマシなデザインに出来たんじゃねえのかよアアン！？

組織を出る。電車に乗る。駅前から歩く。

その間、俺の手にはでんでん太鼓が握られていた。ずっと一緒。

「……せめて鞆くらい……」

今度会ったら入れ物くらいは作ってもらおう。

「お」ケータイが震える。そろそろカラスに着く頃なんだけど、何かあったのか？

「もしもし」

右手にケータイ。左手におもちや。俺は何者だろう。

『青井、今どこ？ すぐに戻ってこられるかしら』

焦った様子の社長の声に、俺は死にそうだった。

まさか、軒猿が……？

「近くだ。何があっただ？」

『イダテン丸がいなくなっていたのよ』

「はあああっ！？ 嘘だろ！？」

だって、立つ事だって無理そうな状態だったじゃねえか。

『本当に、少しだけ目を離していただけなんだけど。……ごめんなさい。私のミスよ』素直に謝られてしまう。

「や、別に、アレだ。気にすんな。とにかく急ぐから」

『会社の前に車を停めているから』

「了解だ」

ケータイをポケットに戻して、俺は走った。でんでん太鼓の紐が揺れ、でんでんでんでん鳴っていた。でんでんでんでん、と。……
爺さん……！ いつか殴る。

軒猿十人衆が一人、コナユキにお任せを

カラーズの前、タクシーを見つけて、俺は走る速度を上げた。

「どうなってる？」

助手席に乗り込むと、後部座席には既に社長とレンが座っていた。
「分からないわ。でも、イダテン丸が消えたのは事実よ」

「……あの、青井さん」

「謝るくらいなら何も言うな。お前らは悪い事をしちやいないんだ」
誰が悪いとするのなら、それはイダテン丸だろう。何も言わずに出て行って、巻き込みたくないと思ったのか？ 遅いつてんだろ、馬鹿が。

「どれくらい時間が経ってる？」

「十分くらいね。けれど、動くのでやっつとという有様よ。そう遠くには行っていないと思うわ」

同感である。

「お兄さん、探すんなら二手に分かれた方が良いんじゃない？」

「いや、そりやまずいだろ。相手は五人らしいし……他のヒーローには連絡を入れてないのか？」

「いいえ、あなたが来る前には連絡しておいたわ。ただ、事情も説明し辛いし、カラーズの名前を出すのもどうかと思ったから……」
当てになるかどうかは分からないか。けど、何もしてないよりはマシだ。

「……でも、一体どこに向かえば良いんでしょうか」

「適当に走らせるしかねえだろ。それから、レンは上を見とけ」

「う、うん。でも、なんで？」

「馬鹿と忍者は高いところが好きだからな」

「そんなの聞いた事がないわね」

俺もだ。

タクシーは走る。イダテン丸はまだ見つかっていない。やっぱり人目に付きにくい場所にいるんだろうか。路地裏か、ビルの屋上とか。

「ところで青井、あなたは何かを持っているの？ それを買いに行く為に出かけたのではないでしょうね」

「んな訳あるか」買ったんじゃない。もらったんだ。

少しずつ落ち着いてきた。上がっていた息も整い、俺は窓の外、流れる景色に目を凝らす。

……何故、イダテン丸を探しているのか、彼女を助けようとしているのか、分からなくなる。

俺たちがやっているのは、何だ。イダテン丸は何も言わないで出て行った。会ったばかりの他人だから、それもしょうがない。大体、深く関わるなと決めていたじゃないか。このまま、何事もなかったかのように振舞うのを、彼女も、俺も望んでいるんじゃないか？

「早く見つけなければいけないわね」

「……どうしてだ？」

気付けば、俺は社長の言葉に反応していた。彼女は、どうしてイダテン丸を探しているんだろう。依頼を受けた訳でもない。やばいってのは分かっている筈だ。

「怪我をしているのよ？ 放っておける筈ないわ」

だから、どうしてだ？ 結局のところ、他人だろうが。

「なら、あなたは見捨てるとでも言うの？」

「見捨てるも何も、捨てた覚えはねえよ」

「いいえ、確かに拾ったのよ。イダテン丸は私たちを……きっと、あなたを頼った。理由が他に必要かしら」

俺は、あんたみたいに変なところでまっすぐじゃない。歪に曲がってる。理由がないままに戦って死ぬのはごめんなんだ。

「イダテン丸が拒否したとしても、私はあの子を探すわ。それが私の正義だもの」

「その正義ってのを押しつけるのか？」

ミラー越しに社長を盗み見る。彼女は真面目な顔で、至極普通に言い放った。

「イダテン丸からすれば、そうなるんでしょうね。でも、正義とは押しつけるものでもないし、振りかざすものでもないわ。あなたはヒーローでしょう？ だったら、嫌がられたとしても助けなくちゃね」

そういうのを押しつけるって言うんだよ。

だが、そうか。そうだった。今の俺はエスメラルド部隊の数字付きじゃあない。ヒーロー派遣会社、カラーズのヒーローである。偽者の正義の味方で、偽物の正義を持っていたとしても、だ。顔見知りの人間とはいえ、女が殺されるってのは後味悪い。そうに違いな

住宅街を抜け、オフィス街を潜り、三十分ほど走ったところで、九重がタクシーを停めた。

俺はシートベルトを外して、車から降りる。

「言った通りだろ、レン」

「あは、気持ち良さそうだね」

目の前のビルを見上げた。十階建てを遥かに超えた高さの建物、その屋上に踊る影がある。レンが見つけたものだ。

「二人はそこで待っていてくれ。……お前は、何を言ったってついてくるつもりだろ」

レンは屈託のない笑みを浮かべる。正直、こいつの戦闘能力は心強い。なるべく、何もしないで欲しいけどな。

「待って。二人に渡すものがあるの」そう言って、社長は鞆からあるものを取り出した。

お面、である。縁日とかで売ってそうな、安っぽいものだ。デフォルメされたタヌキとキツネの、お面。

「……付けるってかい」

「そうよ、タヌキマン」しかもそのまんま過ぎるし。

「あはははっ、僕キツネだ。見て見てお兄さん、似合う?」

はつきり言っつてすげえ似合う。

しかし、あのビルか。普通の会社だよな、多分。仕方ねえ、突っ切らせてもらうか。

「……青井さん、レン君、気を付けてください」

「あいよ。お前らも、危ないと思ったら逃げるんだぞ」

「馬鹿ね。社員を置いて逃げる訳ないでしょう。あなたこそ、ちゃんとイダテン丸を連れてくるのよ」

俺は手を上げて答える。屋上に辿り着くまでに、イダテン丸が無事でいれば良いが。それから、場所を移さないでいて欲しい。

レンを連れて、自動ドアを抜ける。受付嬢がこっちを見てぎこちない笑みを浮かべていた。ロビーにはスーツを着たおっさんやおばさんがたくさんいる。ソファに座り、煙草を燻らせるハゲ頭と目が合った。

「あははは、すごく見られてる」

「エレベーターは……」駄目だ、使われてる。

「こっちだ、行くぞ」

くそう、階段かよ。屋上に着いた途端へたり込みそうだ。

清潔そうな屋内。真っ白な床と高い天井。自分たちの頭の上でヒールと悪の組織が戦っているとは、全く気付いていなさそうな人たち。羨ましいと思ったらないね。

「おらっ退け！ タヌキとキツネのお通りだ！」

でんでん太鼓を打ち鳴らす。それだけで、俺たちを前進を阻む奴はいなかった。……警備員が来る前に何とかしないと。

「あはっ、お兄さん頑張つて。もう着いちゃうよ」

俺は首を振るので精一杯だった。何階建てなのか、数えるのを止めたのは十五を超えた辺りだったろうか。足が痛い腰が痛い息が苦しい。もう足が上がらんぞ、畜生。

一足先に、屋上への扉に辿り着いたレンは、一切の躊躇を見せず、それを蹴破った。轟音が俺の耳をつんざき、外からの風が吹き込んでくる。火照った体には心地良かった。

「お前は、手え出すなよ！」

「あはははははははははっ、混ぜてよ！ ねえ！？」

駄目だ聞いてねえ。

屋上に出ると、くの字に折れ曲がった鉄製の扉が目に入った。フエンスに囲まれた空間は決して狭くはない。だが、そこに五人の忍者と、一人のヒーロー、タヌキとキツネ、合わせて六人と二匹がいる事で、俺は妙な圧迫感を覚えた。

「何者っ」

「陣形を崩すなっ、あくまで狙いはイダテン丸ぞ！」

五人の黒い忍者はイダテン丸を取り囲んでいる。彼女は片膝をつき、俺たちに目を向けていた。

「あはっ、あはは！ すごいや、すごい！」

「レ……キツネ下がれ。お前は戦うなよ」

「えー？」

露骨に不満そうである。ガキはいらん事すんな。ろくな大人にならんぞ。

「俺が死にそうになったらちよつとは助けてくれ」

「……はい」

レンが俺の後ろに下がり、軒猿の忍者たちの数を数え始める。酷く楽しそうだった。

軒猿の忍者はイダテン丸を囲んだまま、こっちに向きを変え始め

る。各々が同じような忍者刀を構えていた。

「お主、イダテン丸の仲間か？」

「そうだよ。文句あつか」案外、すぐに答える事が出来た。

「そいつから離れる。半病人をよつてたかつて翽つてよ、そんなに楽しいかってんだ」

五人の内、一人が囲みから離れる。俺に照準を定めたらしい。

「ここは軒猿十人衆が一人、コナユキにお任せを」

「ふん、フブキの後釜に据えてやった恩を返すつもりか？」

「そのように捉えていただいて構わぬ」

コナユキと名乗った忍者が俺を睨みつける。

十人衆つてえと、爺さんが言つてた中忍の中でもすげえ強いって連中の事か。こりゃ駄目だ。荷が重過ぎる。

「はっ、俺の相手は一人で充分つてか」

「覚悟っ」

俺はでんでん太鼓のボタンに指を伸ばした。が、それよりもコナユキって野郎のが早い。ワイヤーを伸ばして近付けさせるなつてのは分かつてたが、先に懐に入られるのは想定外である。

「お兄さん危ないっ」

「ぎっ……！？」

短い叫びと共に、コナユキが左方向へ吹っ飛んでいく。彼はフェンスに顔を埋めると、それきり動かなくなつてしまった。

「あははは、かるーい。すっごい飛ぶね！」

「……手を出すなつて言つたじゃねえか」

「お兄さんが危なかつたんだもーん」

信じられんつつか、もはや呆れてしまう。レンはコナユキよりも速く前に出て、裏拳を放つたのだ。フェンスで止まつたつてのを見ると、手加減はしていたようだが。

そして、レンのありえなさに気付いたのは四人の忍者も同じらしかった。殺しのプロである彼らが、一瞬とは言え構えるのを忘れるくらいである。

「くっ、手負いのイダテン丸は後回しだ。あの童を仕留めるぞ」
「応っ」

忍者の意識がこっちに向いたと同時に、イダテン丸が囲みから抜け出す。

「しまっ……！」

「よそ見するなっ、全員ここで仕留めれば済む」

無理な跳躍をした後、彼女は足をもつれさせながら俺の傍で膝をついた。ひとまずは安心だな。

「よう、伝言くらいは残していけよな。見つけるのに時間が掛かったら
ちまった」

「……………何故、ここに」

「ヒーローだからな」

曲がり切った根性の。

「話は後だ。下がってる、俺よりも役に立ちそうにないぞ、あんた」
イダテン丸は俺を見上げた。

「任せろって言うてんだ。それに、後から野次馬が来るかもしれねえ。その辺で見張ってる」あの社長が、大人しく待っているとは思えんしな。

「……………かたじけない」

イダテン丸が下がったのを確認し、俺はグローブをはめ、太鼓のワイヤーを伸ばす。あんまり長過ぎても使いづらいから、とりあえずニメートルとちよつと、くらい。

軒猿の四人は二人ずつ、左右に分かれている。二人、か。かなりきついな、こりゃ。

「あは、何それ？ お兄さんの武器？」

「はっ、かっこいいだろ」

「あはははは、全然」

楽しそうに笑ってから、レンが踏み込む。予備動作なんか、殆どなかった。

それでも、流石は軒猿か。踏み込まれた二人はきつちりと反応し、

レンから距離を取る。

「スーツもなしにつ……改造か!？」

「ゲキリユウっ!」

距離を取ったのは良いが、中途半端に退くからそうなる。レンは片方に追いつき、腹部に回し蹴りを叩き込んでいた。ありゃ、当分は起き上がれないだろうな。

「カリン」

「テツカベ」

よそ見してる暇は、なくなりそうだな。

俺はワイヤーの動きを確かめながら、二人の忍者と向かい合う。

見てから動いてちゃ間に合わん。とにかく、近寄せずに玉をぶち当てちまえば良い。

「舐めた得物を」うるせえぞ。

忍者がじりじりと詰めてくる。俺は太鼓を振り被る。ワイヤーがしなり、二つの球体が地面を穿った。……砕いたぞ? すっ、すげえ。爺さんすげえぜ! 正直、全く信じてなかったぜ!

その隙を衝いて片方が踏み込もうとするが、俺は太鼓を戻すように動かす。球体が不規則に揺れて、忍者を襲った。が、刀で防がれてしまう。そうして、もう片方が迫ってくる。

「しっけえぞっ」

不規則過ぎて、この武器は俺にも制御出来ん!

とにかく振り回してビビらせちまえ。ぐるんぐるんと動かせば、球体が空を切り裂き続ける。それだけじゃない、あのワイヤーにだって触れれば痛い筈だ。

「くっ、厄介な」

忍者は一旦離れていき、何かを投げつけてくる。俺は咄嗟に身を屈めた。忘れてた、向こうには飛び道具もあったんだ。どうにも攻めあぐねちまうな。お互い様ってのが、まだマシだけど。ただ、俺がこいつの扱いに慣れてないってのがバレちまうのは時間の問題である。どうしたものか。

「あははははははははははっ！」

「お、おおっ！？」

忍者が吹き飛んでいる。頭から。そんなもって、俺と対峙している二人に向かっていた。……レンが蹴飛ばしたんだろう。多分、こつちを援護するつもりではなかった筈だ。あのガキ、やっぱり楽しんでやがる。後でお仕置きだ。

「だけでもらった」

一步前に出て、俺はワイヤーをならせる。太鼓を前方に振り被れば、二つの球体が忍者の肩に喰らいついていた。もう一発。今度は右から太鼓を回転させる。球体は右から左に流れる。ぎりぎりで避けられたが構わねえ。当たるまで振り回しまくってやるぜ。

頭の上で、でんでん太鼓を回す。一回ごとに勢いが増していく。もはや俺にも、すぐには止められん。

「こんな、こんなものでっ」

「当たってくたばれえ！」

鈍い衝撃を受け、球体が上空に跳ね上がる。忍者のこめかみを捉えた一撃は空恐ろしいものがあった。

「おいマジでくたばんじゃねえぞ！？」

太鼓の回転を止める。情性で玉は回り、ワイヤーがぐいんぐいんしなっていた。

「よくもデンコウを！」

「うわあ来るな！」

手裏剣を何本か投げつけられるが、

「……………御見それした」

「お前っ」

そいつはイダテン丸が短刀で弾いた。ふらふらの状態ながらも、彼女は飛んできた手裏剣を掴み、相手に向かって投げ返す。

「くっ、いつ、イダあああ！」

「あははは！ あっど一人！」

恐慌状態に陥った最後の一人にレンが迫る。彼は忍者の顔面に張

り手を喰らわせた。喰らった忍者は、地面に体をこすり付けるようにして滑っていく。

そうして、音がなくなった。

お、終わった、のか？

俺はその場へたり込んだ。今になって、階段ダッシュの疲れが来たらしい。がくがくだった。もう動けん。誰かおぶってくれ。

三度も見れば分かります

俺たちが軒猿の忍者を全員ぶつ倒したのとほぼ同時、別のヒーローが屋上にやってくる。そいつは俺たちを順々に見回した後、嫌そうに舌打ちした。……このハイエナ野郎が。

「良いよ、手柄ならやるよ。そん代わり片付けとけ」

「えっ、良いのか？ いやあ、悪いなあ」

マタギみたいな格好をして、熊のマスクを被り、猟銃（らしき棒）を担いだ中年のヒーローはへらへらと笑った。

「……………良いのか？」

「惜しいけどな」

イダテン丸が立ち上がるうとするので手を貸してやる。

「レンっ、ちよっと来い！」

「あは、なーにー？」

にこにこ顔のレンが俺の前で立ち止まった。俺はしゃがみ込み、思い切り睨みつけてやる。

「な、何……………？ お、お兄さん、どうして怖い顔してるの？」

アホか。さっきのお前よりかマシだろうが。

「楽しかったか？」

「あは、すごく」

レンの頭を軽く叩く。彼は一瞬で涙目になった。ころころと表情を変える奴である。

「お前がいなきゃ俺は死んでた」

「だ、だよな？」 すぐに同意すんな！

「そこは素直にありがとう。けどな、お前みたいなちんちくりんに助けられるのは、はつきり言って俺としちゃあ情けない事極まりない」

しかも武器はでんでん太鼓だし。

「あはは」

「笑うなっ。……戦うのを遊びだと思うな」

「……それは、約束？」

俺は首を横に振る。

「お願いだ」

レンは目をぱちくりとさせた後、一瞬だけ笑顔になる。けど、すぐに真面目な顔になった。

「ん、頑張る。だから、その、ね」

「言うなって。分かってるから」全く、何を分かっているって言うんだ。

「またその子を苛めているのかしら？」

「……やっぱりきやがったな。」

涼しげな社長と、死にそうな顔の九重が姿を見せる。

「ここはバリアフリーがなくなっていないわね」

ああ、なるほど。九重はここまで社長を運んできたのか。

「伸びているのがイダテン丸を追っていた者たちなのね。まさか、あそこの冴えないヒーローが倒したとは、言わないでしょうね？」

社長はマタギヒーローを指差す。

「俺たちだよ」殆どレンがやったんだけど。名誉は保っておきたい。

「そう、良くやったわ。ふふ、すごいじゃない」

素直に褒められると、どうにも気持ちが悪い。いや、このママが俺を褒めるってのが気持ち悪いんだな、きつと。

「それで」

社長はイダテン丸に視線を移す。

「また、何も言わずに行ってしまうのかしら？」

責めるような口調ではないが、俺は少しだけビビってしまっ。

イダテン丸は答えられず、社長を見つめていた。

「別に構わないのよ？ ただし、また追いつけるけどね」

「はっ、マジで言うてやがる」

「その体でどこまで行けるかしら」

依頼すると、社長の目は物語っている。ここは、口を挟むのはやめておこう。

「……………しかし」

「良いから依頼しなさい。あなた一人ではここで死んでいたかもしれないのよ。お金だつて持っているでしょう？ 安心して、ウチは格安だから。足元は見ないわよ、決して」

「うわあ言っちゃった。もう少し粘れよ。しかも足元見て吹っ掛ける気満々じゃん。」

イダテン丸は押し黙っていたが、社長の圧力に屈したらしい。彼女は懐からがま口の大きな財布を取り出した。

「……………料金は」

「その前に、依頼の内容を聞かせてもらえるかしら」

「暫く考え込んだ後、

「助けて、ください」

イダテン丸は頭を下げた。

依頼を受けた社長と九重は、イダテン丸を連れて会社に戻った。俺とレンは、とりあえず家に戻る事にした。

「僕たちも連れて行ってくれて良かったのにな」

「全くだ」

お陰で、家まで歩きで帰るはめになったんだからな。

「それより、お姉さんたちだけで大丈夫なのかな」

「さあな。知るか」今の俺たちは連絡待ちの状態である。一体、奴らは何を待てと言うのだ。

「それよりメシを食おう。腹が減った」

朝だつて食ってないし、昼飯にしては遅過ぎる時間である。レンはそうだねと笑って、エプロンを身に着けた。

……………イダテン丸か。

まさか、俺たちみたいな弱小の派遣会社が、あいつを助けるような事になるとは思わなかった。頭を下げた彼女が、未だに信じられない。めちゃくちゃ強かったイダテン丸が弱っている姿ってのは、ちよつと見たくなかったかもしれん。すげえレアなんだろうけど。

「お米、全部使っちゃっても良い？」

「任せるわ」

勘違いしちゃあ、いけないよな。

あの時、屋上でイダテン丸を助けたのは俺じゃない。レンだ。そして、今から彼女を守るのも、俺ではないんだろう。俺に出来る事と言えば、でんでん太鼓を振り回すくらいのものだ。

どうにも、上手くはいかないな。

出来損ないのヒーローじゃ何も出来ない。レンを戦わせたくないけど、あいつに頼らなきゃ駄目って状況だ。我ながら、マジに口だけは達者だよ。

深夜になっても、社長からの連絡はなかった。心配になったので一度こつちからも電話を掛けたのだが『何？』と、冷たい声で一蹴されてしまったのである。もう良い、マジで知らん。

「おい、早く寝る準備しろよ」

「あはは、何だか目が冴えちゃって」

うん、すげえざらざらしてる感じ。でも寝る。

「遊んだ後って、感覚が敏感になっちゃうんだよね」

レンは布団の上で転がる。埃立つからやめろ。

「……ほら、だから分かるんだ」

「何がだ」

「誰か来るよ」

何？ こんな時間に誰が来るって言うんだ。住人か？ いや、でも、レンのこの様子からじゃあ、そついう風には捉えられん。

「ここで止まった」

「えっ、もう!？」

の、軒猿の連中か？ 嘘だろ、もういい加減休ませてくれよ！

俺んちに来ていたのは、イダテン丸だった。普通にチャイム鳴らされて、まあ、普通に対応した。良く分からないまま、とりあえず部屋に上げたのだが、彼女は口を開かなかった。ずっと俯いている。……あのさ、こんな時間に何か、用事でもあったん、です、か？」
忍者スーツを着ている奴が俺の部屋にいるってのは、かなり違和感。

深夜の訪問者という立場だが、下手に怒らすと怖いので、こう、下手に出て尋ねても、イダテン丸は中々答えてくれない。何だか話が長くなりそうだったので、俺は布団を片付けて、ちゃぶ台を持ってきた。レンにはお茶を頼んだ。麦茶だけど、文句は言わせない。つーかスーツ脱げよ。私服で来いよ。余計なプレッシャーを感じさせるなよ。

「お兄さん、僕、眠いんだけど」

「あー、そっか。もうこんな時間だもんな。悪いけど、布団はちょっと向こうに敷いてくれるか」

「はい」レンは臉を擦りながら、片手で布団を引っ張っていく。

「お休みなさい」

「おう、良く寝ろよ」

くそ、二人きりにさせんなよ。俺だつて眠いんだぞ。

「……………気を遣わせてしまつて……………」

「あ。あ、いや、別に。えーと、それで、体の具合はどうなんだ。

大丈夫なのか？」

「まだ、十全とは申せませんが」

何か、固い話し方だな。古いつーか。

「そ、そうか」やべえ、何を話したら良いか分からん。やたら喉が渴いてくる。……イダテン丸、麦茶に手をつけてないし。

テレビ、点けよつかない。でも気を悪くされても嫌だしなー。
ちらつと、対面のイダテン丸を見遣った時、彼女は口元に巻いて
いるマフラーを解いた。こう、改めて見ると、結構可愛かったりす
る。死ぬほど無表情だけど。

「……………はなだの縹野、はつめ初芽と申します」

「もしかして、名前？」

イダテン丸は頷いた。

名前を覚えてくれるのは良いんだけど、何？ このタイミングで
？ まあ、確かに自己紹介するタイミングはとくに逃してた気は
するけど。こいつ、ちよつとアレじゃないか？ 俺が悪の組織の戦
闘員だと知らないとは言え、本名バラしちゃうかー、普通？

「青井正義です」何となく名乗ってみる。

「存じております。……………一番初めに、ご挨拶をしたかったものです
から」

「初めつて、ああ。社長たちといたんだっけな。……………え？ まだあ
いつらには名前教えてないの」

イダテン丸は小さく頷いた。

「……………先刻まで、執拗に問い詰められておりました」
それで逃げてきたってのか。

「名前くらい教えてやっても良いのに」

一応は正義の味方っぽいんだし、社長たちは全くの無害だぞ。

「ですから、青井殿に、一番最初に、ご挨拶を……………」

「あ、そ、そうなんだ」

「……………多大なるご迷惑をお掛けしましたから」
いやいやいや、迷惑掛けたのはこっちだし。

「私のような者に手を差し伸べてくださるとは、感謝をしてもし足
りないくらいで……………」

「良く分かんが、借りがあるのはこっちなんだぞ？ 俺みたいな
奴に恩を感じる必要はないって」

と言うか、俺は何もしていない。

まあ、恩だの借りだの言うのは当人の自由だ。そいつでおいしい思い出来るんなら、それに越した事はない。

ともかく、イダテン丸は挨拶をしたかったって訳だな。こんな時間によってくるってのはアレだけど、やっぱり、基本的には悪い奴じゃあないんだろう。

「あんたつてさ、昔は軒猿にいたのか？」

イダテン丸は弾かれたように顔を上げ、それから、その場で頭を下げる。

「……………申し訳ございません」

「え、え？ おい、いきなり謝られても困るんだけど」

「は、はっ、重ね重ねっ……………！」

今日、寝られんのかなー、俺。

「なるほど、そういつた組織にいたのに、ヒーローやってるのが申し訳なかったと、そういう事なんだな？」

イダテン丸はようやく頭を上げてくれた。

「……………罪なき者を手に掛けるのはどうかと御大将に進言したのですが」

「それで裏切り者だと言われたのか。だったら、どうしてそんなところに入ったんだよ？」

「他に行く場所がなかったものですから」

悪の組織の戦闘員も、ヒーローも、同じだ。スーツを着て、一般人よりも強い力を振るうんだ。俺も、イダテン丸も、それ以外を選べなかったクズか、グズでしかない。

「そうか」だから、それ以上は聞けなかった。

「あんたを追ってるのは、軒猿の十人衆と三行者らしいな」

「……………その名前をどこから」

あ。

しまった。

爺さんから聞いたのをそのまま話しちまった。一応、こいつだつてヒーローなんだし、俺が戦闘員だとバレルのはまずい。

「あいつらが自分で言ってたじゃねえか」

「そうでしたか」そうなんだよ。

「……………青井殿の仰る通り、追っ手は十人衆と三行者です。しかし、十人衆は全滅した故」

全滅？ いつの間に？

「気付いておられないのですか？ 公園で四人、路地裏で一人、昨夜に一人、そして、屋上で五人仕留めたましたが」

全部で十一人だが、コナユキつて野郎はフブキつて奴の後釜とか言われてたな。補充つてのも考えられるのか。どこまで湧いてきやがるってんだ。

ん？ 公園つて、段ボールん時だよな。はあ、あいつらも軒猿の中忍、十人衆だった訳か。

「つーか、あれ？ 公園つて、え？」

「スーパ―では紙袋を被つておられましたね」
うわ、バレバレじゃん。

「私も忍びの端くれ。三度も見れば分かります」
変装に気を遣わなくちゃいけないな。いや、つーか、あの社長がまともなスーツを渡してくれりゃあ済むんだよ。まあ、俺も今以上に気を付ける必要があるな。

「でも、どうしたら良いんだろうな」

誰を倒せば終わる。いつまで続く。

イダテン丸は助けると言った。社長はその依頼を受けた。俺は、ヒーローとしてその依頼を完遂しなきゃいけない。軒猿を敵に回してでも？ ……誰を敵に回そうが、彼女は言うんだろうな。『分かった』と。自分の正義つてのを守る為に。俺の命がどうなるうが、そいつはしつたこつちゃねえつか。

「……………少しずつではありますが、戦力は削ぎ落としています。いつかは……………」

いつかは、何だ？ 言えよ。

いや、言える筈、ないか。

「三行者ってのは、どんな連中だ？ 少しでも情報が欲しいところ
なんだけだよ」

イダテン丸はゆっくりとだが話し始める。敵を知り、己を知れば
百戦危うからず、とか言うけど、彼女の話は殆ど、頭に入っ
てこ
な
か
っ
た。

「自分の手で確かめられてはいかがですか

軒猿三行者。

木目蝦蟇。

こいつは、馬鹿でかいカエルを呼び出し、操れるらしい。話を聞いていても、いまいち能力が伝わってこなかったのだが、『すげえマジモンの忍者じゃん！』と、思ってしまった時点で俺の負けだろつ。

うつぼ坊。

そいつは、手足を伸ばせる能力を持っているらしい。忍者なのか坊さんなのか分からん名前だが、うつぼとか超強そう。

最後に根来刑部ねくらけいぶだが、こいつの能力に関しては一切不明だそうだが話をしながら、イダテン丸はかなり申し訳なさそうだった。

十人衆プラス一人を倒した今、目下の敵は三行者と呼ばれる奴らだろう。いつ現れるのか分からないが、気を引き締めておかなければ。

「……………三行者の力は、十人衆とは比べ物になりません。彼らほどの者となると、身体能力だけではなく、奇怪な技をも所持しております」

奇怪過ぎるわ。よくよく考えりゃ、カエルって何だよ。スーツ関係ねえじゃん。マジで忍者じゃん。ちょっと見てみたい気もするけど。

「先に言っとくけど、俺はお前より弱い」

イダテン丸は俯く。答えづらい話を振ったのは分かっている。

「お前は、そいつらに勝てるのか？」

「……………勝ちます。必ずや」

嘘だな。万全の状態なら勝てるかもしれないけど、今のイダテン丸はその辺のヒーローと変わらん。あの、見惚れるような体術も満足には出せないだろう。

「本当の事を言えよ」

イダテン丸は下げていた頭を更に下げようとする。

「申し訳ありませんっ。しかし、青井殿に迷惑を掛ける事は……………！」

「こっちは一応、依頼を受けてんだからさ。迷惑とか、そういうの考えんなよ」

「重ね重ねっ」

思ってたより、三行者つてのは強そうだ。一組織の幹部だもんな。そう簡単にはいかないと分かってたけど……………どうなるんだよ、マジで。

「……………青井殿を危険な目に遭わせる事はしないと誓います」

お前が誓っても、三行者が誓ってくれなきゃどうしようもねえだろうが。

だが、俺の実力じゃあ『一緒に頑張ろう』なんて言葉は掛けられないだろう。

「無理はすんなよ。社長が怒るからな」

薄ら寒い言葉を掛けてやって、俺は麦茶を一气飲みする。…………イダテン丸は結局、飲み物に手をつけないままだった。

深夜、三時。

俺はうつらうつらとしていたが、まだ眠れなかった。何故なら、イダテン丸が動かないからである。いや、出るよ。帰れよ。とは思ったが、流石に言えなかった。

レンはすやすやと眠っている。羨ましかった。出来るなら、俺も布団にダイブしたい。それで貪るように、泥のように眠りたい。目を閉じれば、意識が飛びそうだった。

駄目だ。我慢の限界である。

「あのさ、そろそろ寝たいんだけど」

「……………は、何かおっしゃいましたか」

こいつ、ずっと俯いていると思ってたけど、まさか寝てたんじゃないだらうな。

「俺、眠い。あんたも、そろそろ家に戻った方が良いんじゃないか？ 三行者は怖いけど、ただでさえ弱ってるんだ。少しは体を休めておけよ」

「お心遣い、感謝いたします」

「いや、帰れよ」眠過ぎて気を遣うのも面倒になっていた。

「……………そうしたいのは山々なのですが」

あんだよ、言えよ。

「家がないのです」

不意打ちである。

「追っ手にアパートを燃やされてしまいました」

「あ、ああ、そう、なんだ」

「……………青井殿」

すげえ嫌な予感がした。

「軒猿だけでなく、忍びには主君が付き物です。我々は主君に影の如く付き従い、主君を影ながら支え、守るべき存在なのです」

イダテン丸は俺を見つめる。

「青井殿には」

「言つな。絶対に言つな」

俺はちゃぶ台を片付けて、布団を敷いた。駄目だ、これ以上聞いてはいけない。

「……………是非、私の」

「あああああつ！ 何なんだよ！？」

布団を蹴り飛ばす。いい加減にしてくれ。どうして、最近はどうなんだ。どうしてっ、こんなのかなんだ！？

「手前味噌ではありますが、戦いに関しては自信があります。諜報

活動も、やれと言われれば……」

「俺は殆ど一般人だぞ！」

諜報活動をしたがる一般人って何者だよ！

「忠義の心も持ち合わせていると自負しております。どうか、新たなねぐらが見つかるまでで結構ですから」

「矛盾してんぞ！？ 間に合わせの主君じゃねえかつ、忠義のかけらも感じられん！」

「……………では、この身、朽ち果てるまで
「極端だなあオイ！」

第一、今まで突っ込まなかったけど忍者ってもうおかしいだろ。

何、忍者って？ 全然忍んでないしこいつら。公園とかで戦っちゃうしな！

「ウチにはもうケダモノが一匹いるんだ。これ以上は……………」

「……………お忘れですか、青井殿」何を。

「私も女である事を。……………くの一としての手解きは受けておりません、未だ生娘ではありませんが、必ずや青井殿を満足させてみます」

イダテン丸は三つ指ついて、こっちに視線を向ける。

「生娘とか、自分で言うな」

しかも生娘が満足させられるかボケ。

「……………肌のきめ細かさには自信があります」

「だってお前、色気ないし」

「……………いろ、け？」

そこで首を傾げるな。

「つか、ドが付く貧乳だし、髪の毛にだって気遣ってないじゃん。決して不細工ではないけど、化粧してないから男と間違われてもおかしくなさそうだ。」

「下手すりゃ、そこで寝てるレンよりもないぞ」

「……………それは、まさか」

いや、そのまさかなんだよ、これが。正直、イダテン丸とレンの

性別を交換して欲しいくらいだ。

「青井殿は、私から女の魅力を感じないと……?」

「そうだ」しかも一切だ。何一つとして感じない。

「正直、お前のおっぱいをこねくり回しても、どれだけ揉んだとしても、満足感は何もないだろう」

イダテン丸の表情が少しだけ引きつっているように見える。言い過ぎているのかもしれないが、構うものか。

「……………そこまで、おっしやられるのですか」

俺は一も二もなく頷いた。

イダテン丸は立ち上がり、俺の手を掴む。

「何をするつもりだ」

「ご自分の手で確かめられてはいいかがですか。本当に、私の胸を触っても、何とも思わないかを」

「馬鹿かお前？」

完全に後に引けなくなる前に、早く手を離せ。

「……………さあ、どうぞ遠慮せずに」

そこまでして主君が、と言うより、寝る場所に困ってるのか？

そんで、自分の体を安く売ろうとしていやがる。けしかけたのは俺かもしれないが、やっぱり、ヒーローなんてやってる奴はクズだ。

俺はイダテン丸の手を外して、彼女の頭を鷲掴みにする。

「あうっ、な、何を……?」

「社長に電話してやる。お前一人くらいなら、当分は泊めてくれるだろ」

「し、しかし、あう、あう」

ぎりりと力を込めた。

「ちよつと待ってる」

俺はケータイを開いて、社長に電話を掛ける。こんな時間だけど、緊急事態だから仕方がない。

暫く待つと、社長の眠たそうで嫌そうな声が聞こえた。

「悪いな、寝てたか？」

『喧嘩を売っているのかしら?』

「実はな、イダテン丸がこっちに来てる」

『呻き声らしきものが聞こえるのだけど、彼女の?』

「思ってたよりアホだったんで、アームロックをくれてやっている」

イダテン丸は表情を表に出さないようにしているらしいが、目の端には涙が浮かんでいた。

『くだらない用事だったからお給料を払わないから』

「払え。……イダテン丸を社長んとこに泊めてやって欲しい」

『最初からそのつもりだったのに、いなくなったのはイダテン丸よ。全く、忍者というのは素早くて仕方がないわ』

まーた何も言わずに出てきてたのか。

「頼むよ」一応は女だし、家を燃やされたなんて不憫過ぎる。でも、流石に俺んちに泊めるってのは、なあ。

『ふう、しようがないわね。今から連れてきなさい』

「助かるよ。……連れて? いや、一人でも良いだろ」

『イダテン丸からの依頼の内容を復唱しなさい』

ちっ、面倒くせえ。

「はいはい、分かったよ。連れてきゃ良いんだろ」

『それより、部屋を用意してあげた方が良いかもしれないわ。どうかしら、ウチが入っているビルなら開いているし、格安で済むわよ』

テナント借りるって事か? 普通のアパート紹介してやった方が楽だし、安くつくんじゃねえの?

『どうせカラーズ以外には何も無いんだし、持て余すより、少しでもお金が入る方が持ち主だって喜ぶわよ。それに、払うのは私じゃないんだし』

……用心棒代わりになるか? アホ丸出しの女だが、戦いに関しては申し分ない。どうにも、リアル立ち回りは不得手そうだが。

『ふふ、ウチで雇うってのもアリね』

「あ、それはやめろよ。俺はお払い箱じゃねえか」

『何を言っているの? あなたはカラーズのヒーローでしょう』

お、おお、ちょっと嬉しいかもしれん。

『ヒーローが増えるまではいてもらうから』

「俺の感動を返せ」

『冗談よ。あなたこそ、ウチを辞めたいと言わないでね』

「言わねえよ」

少なくとも今は。

「じゃ、今からそっちに向かうから」

『待っているわ』

ケータイを切り、俺はイダテン丸から手を離す。彼女は痛んでい
るであろう部分を摩り、平伏した。

「……………ご厚意、痛み入ります」

「俺は何もしてないよ。んじゃ、まあ、行こうぜ」

「このご恩は……………」

「待て待て。返すほど、俺は何もしてないんだって。とにかく、社
長のところ行って、次に目が覚めたら今後の事を考えよう。それで
良いな？」

イダテン丸は頷き、立ち上がる。

「ん、んう……………」

レンが身動きした。起こさないように、静かに歩く。
が、足首を掴まれてしまった。誰に？ 分かってる。

「……………お兄さん、どこ、行くの？」

いや、まあ、さっきまで騒いでたんだし、起きない方がおかしい
か。

「ちよつとな。お前は寝とけ」

「ヤ。僕も行く」言って、レンは即座に体を起こす。その時に力が
入ったのか、俺の足首に激痛が走った。

「……………レン殿も一緒にされるのですか？」

仕方ねえだろ。

「こいつに殿とか付けなくて良いぞ。付け上がるから。呼び捨てで
充分だ」

「あはっ、何が？」

「何でもねえよ。ほら、行くなら着替える」

「えー、パジャマでも良いよう。誰も見てないんだから」

「着替えなきゃ連れて行かない」

わがまま言うな！……いや、言っても良いんだった。縛りつけて押さえつけるのは良くない、よな。でも駄目なものは駄目と言うのが俺のジャスティス。

レンは文句を言いながらも、ぼんぼんと服を脱いでいく。押入れにある自分のスペースから、綺麗に折り畳んだTシャツを引っ張ってきた。

「……………確かに、私よりも」

「えっ？」

イダテン丸はレンの着替えをじっと見つめていた。

「まさかお前、そういう趣味が……………」

「全くの誤解です。青井殿が、レン君よりも、私の方が、色気が、ない、と……………」

あー、気にしてたのか。あはは、こいつアレだな。面白い。

三人で夜道を歩く。切れ掛けた街灯に目を細め、俺は前を歩くイダテン丸を見遣った。

「ねえお兄さん。僕が寝てる間、お姉さんと何してたの？」

「話してただけだよ」

「あは、本当？」

「本当だ……………って」

どうして俺が、レンに弁解しなきゃなんねえんだ。

「良いタイミングで起きるね、お前は」

「お兄さんにとっては、悪いタイミング？」

馬鹿じゃねえの？

「イダテン丸ー、さっきの話な、どうするつもりなんだ？」

「……………有り難いお話ではありますが」

イダテン丸は立ち止まり、こっちに顔を向ける。外に出たときから、彼女は口元をマフラーっぱいので隠していた。

「そこまでお世話になるのは……………」

「そうか。まあ、とりあえず今日は泊めてもらって、ゆっくり寝ろ俺も寝る。送って行って、帰ってからじゃあ、まとも寝られそうにはないが。」

「……………かたじけない、です。……………青井殿っ」

「ん？」

イダテン丸が身を低くしてこっちに飛んできてくる。いきなりで訳が分からず、俺はその場にしゃがみ込んだ。

「お兄さんは伏せてっ」

「はああっ！？ 何？ 何なんだ！？」

奇声が聞こえてきた。瞬間、近くにあった街灯が壊れて、視界が真っ暗になる。

「げげげげろっ！ 見つけたぞイダテン丸！」

「ほつら見えるか我らの姿が！」

「我ら軒猿三行者！ ここでもらうぞ貴様の命！」

三行者だと！？ もう来たってのかよ！

俺はイダテン丸とレンの後ろに回る。襲撃者の姿は見えない。声はどこからも聞こえてくるような気がしていた。そして、俺には今、武器がない。グローブも、でんでん太鼓も家に置きっぱなしである。これは、本格的に終わったっばい。

……… 軒猿が十人衆筆頭、イダテン丸は死んだ

襲撃を仕掛けてきたのは軒猿の三行者。奴らの姿は全く見えん。

街灯を壊されたからではない。辺りが暗闇に包まれているからでもない。単純に、上手い事死角に潜り込んでいるらしい。レンがまだ見つけれられていないのが、何よりの証明だ。これくらいの暗がりです。改造人間の視力は変わりやしない筈だからな。

「逃げるぞ」

「……………無理です。恐らく、我々は囲まれております」

金属が擦れるような音がする。イダテン丸が短刀を抜いたのだからか。

「ここで、戦う？」

嘘だ。無理だろ。敵は見えない。向こうからはこっちが見えてる。仕掛けてこないのは、必中を狙っているからだろ。飛び道具を撃つて避けられれば、自分たちの位置がバレちまうかもしれないからな。……………今は、遊んでいるのかもしれないが。レンはともかく、畜生、一般人と変わらん俺と、弱っているイダテン丸か。

イダテン丸は軒猿の構成員を返り討ちにしてきた。楽には殺されないだろう。拷問にでも掛けられて、惨たらしく殺されるに違いない。

「げげげげろ！ イダテン丸、お前の仲間も道連れだ！」

攻め手に欠けている。流石に、俺たちを守りながらでは、レン一人でも厳しいだろう。かと言って、こいつのフォローに回れるほどの力もない。イダテン丸だって、一分凌げりや良い方だろう。

「右から！」

レンが短く叫ぶ。俺は地面に這いつくばった。そのすぐ上を、何かが通り過ぎていった。

「……………うつぼ坊の攻撃です」

「どっから来た!？」

返事はない。くそ、分からなかったか。

「……………明かりを」

「何だと？」

「携帯をお持ちでは？ 一瞬で構いません。点けてください」

アホか！ 自殺かてめえ！ 明るくしたら正確な位置がバレて一発で死んじゃうだろ！ 狙ってくださいって言ってるようなもんじやねえか！

「……………向こうは我々の位置を分かっている筈です」

「お兄さん、早く」

「知らねえぞ！」

こつなつたらヤケだ。このままここで這いつくばっていても死んじまう。俺はケータイをズボンのポケットから出して、蓋を開ける。

瞬間、風を切るような音が一つ。

金属音が三回、連続して響いた。

「見つけた」イダテン丸が呟く。彼女は跳躍し、破壊された街灯に向かった。

「げろろっ!？」

「くっ……………!」

焦ったような声が聞こえて、何かがかつちに向かってくるのが確認出来た。目が暗がり慣れてきたのである。

レンが飛んできた何かを払い除ける。

「げろおおおおおっ!」

断末魔。

その時、影が二つ、真上に躍り出た。

深い編み笠を被り、袈裟を着た小柄な男と、スーツを着た細身の男である。

「根来よ!」

「応よ、うつぼの!」

「来たぞレン！」

レンが俺を蹴り飛ばした。

「ごめんなさいっ」

「いだあっ!？」

俺は地面を滑っていく。イダテン丸と何者かがブロック塀の上にいるのが見えた。彼女は、同じく塀の上に立っていた、やたら太った男をそこから蹴飛ばす。

「げろ、げっ……軒猿が三行者っ、木目蝦蟇破れたりい！」

俺の近くに落ちてきたのは、カエルみたいな顔をしたおっさんだった。こいつが、木目、蝦蟇？ カエルを操るって言う、あの？

……ちよつと。ほんの少しだけ見たかった気もする。

「……………青井殿、ご無事ですかっ」

「俺は良い、レンを！」

頷き、イダテン丸はブロック塀の上を駆けた。

少し離れた場所で、レンは行者の二人を相手している。だが、軒猿の二人は相当に手強いらしい。あのレンが攻撃に回れていない。

実にシンプルな、ヒットアンドアウェイである。攻撃をしたと思えば、捕まる前にすぐに退く。そうして、二人は呼吸を合わせて再び仕掛けるのだ。あんな事されちゃあ、俺なら一秒持たねえぞ。

腕を伸ばして攻撃しているのは（気持ち悪い）うつぼ坊で、短刀を得物にしているスーツの男が根来刑部だろう。

俺は援護に回れない。近づいたって邪魔になるだけだ。レンとイダテン丸に任せるしかねえ。

根来刑部が短刀を振りかざす。イダテン丸が自分の得物でその攻撃を防いだ。

「あははははっ！ 早い早い！」

レンが低く飛ぶ。うつぼ坊が両腕で頭を庇おうとする。が、そのガードは無意味だった。

ハイキックと見せかけて、ミドル。体勢の崩れたところに、素早い回し蹴りが突き刺さる。うつぼ坊は苦しそうに呻いた。

「おおっ」イダテン丸から離れた根来刑部が、レンに向かって短刀を投げつける。

「……………取った」

レンは短刀の柄の部分を殴って弾いた。咄嗟の判断だろう、イダテン丸はうつぼ坊の懐に潜り込んでいる。そのまま、野郎の顎を蹴り上げた。

「おおっ！ うつぼよっ、果てりしかあっ！？」

根来刑部が懐から、新たな得物を抜く。が、彼はレンの接近に気付いていない。

レンは体を沈ませて、根来刑部の脛を強く蹴った。そのまま、起き上がりながら連撃を浴びせていく。ふらつく軒猿の忍者に、イダテン丸が飛び膝蹴りを放った。しかも顔面。根来刑部は鼻血を撒き散らしながら後ろ向きに倒れていく。

……………戦いは終わった。

あっという間の出来事で、俺はついていくので精一杯だった。しかも、レンは手加減している状態で、イダテン丸は万全ではなかったのである。あの二人が本調子なら、俺程度の奴が目で追える筈もないのだ。頼もしい。が、改めて、恐ろしく思える。

三行者にはまだ息があった。

「……………息の根を止められなかったとは、不覚」

イダテン丸は倒れているうつぼ坊に短刀を向ける。ちよい、待て待て待て。

「おい、わざわざ殺す事はないだろうが。後始末は他のヒーローに任せようぜ」

「……………青井殿がそうおっしゃられるのなら」

「レンも。良いな？」

レンは小さく頷き、俺の方に走り寄ってくる。

「あはっ、見てた？」

「見てたよ。手加減、してたんだろ」

「何か、窮屈でやり辛かったなあ。あは、水族館でお兄さんと遊んだのを思い出しちゃった。アレは楽しかった……う、嘘。嘘だから、にっ、睨まないでよう！」

全く。とんでもないガキだなお前は。

「でもさ、この人たちを壊しとかないと、また遊びに来るんじゃないの？」

「……………その通りです。やはり、とどめを……………」

そうかもしれない。三行者がヒーローに捕まったとしても、抜け出してくる可能性はゼロじゃない。それに、別の軒猿の忍者がやってくるだろう。

「あははは、だったら壊しちゃっても良いよね」

「や、待て。イダテン丸、こいつらん中で、一番ダメージ少ないのはどいつだ？」

イダテン丸は倒れている奴らを見遣り、

「……………甲乙つけがたいですが」

根来刑部を指差した。

よし。

俺は根来刑部の傍にしゃがみ込み、彼の頬を張った。目覚めるまで、何度も。

「イダテン丸、こいつが目え覚めたら腕を取れ。折れるぎりぎりまで関節曲げる」

イダテン丸は指示通り、しゃがみ込んでスタンバイする。

やがて、根来刑部が呻き声を発した。彼の鼻からは、まだ血液が流れている。なので、俺の手にも血がついちまった。汚え、マジで。

「おい、起きろ」

「……………ぐ、う、きつ、貴様は……………！」

「お前さ、死にたいか？」

根来刑部が腕を伸ばそうとする。その動きを察したイダテン丸が、力を込めた。彼の腕から、鈍い音が鳴る。骨が軋んでいるのだ。

「答える。折るぞ」

「の、軒猿三行者は、死を、おそれ……いつ、ごあああああああああ！？」

思い切り喚いてんじゃねえか。

「死にたくないんなら、俺の言う事に従え。断ったら、爪先から頭のとっぺんまでただじゃ済まさねえ。死にたいって泣き叫んでからが本番だ」

レンが手を振る。根来刑部の顔が歪んだ。

「そつ、組織については何も話せぬ」

「そんならどうだって良いんだよ。……お前、イダテン丸を殺した事にしろ」

「……………それは」

何故か、根来刑部よりもイダテン丸が驚いている。

いや、そりゃそうだろ。そうでもしなきゃあ、本当に死ぬまで鬼ごっこやらなきゃならねえんだぞ、お前。

「したら、見逃してやる」

「誰が……くおおおおおつ、ぎつ、お……！」

イダテン丸がぎりりと締め上げていた。彼女、ちょっと必死になっている。

「……………根来、断ればお前だけでなく、他の二人の命もないと思え」

「あはは、この人たちさあ、踏んづけたら壊れちゃいそうだよね」

無邪気に笑うレン。演技であると思いたい。

「てめえんところの組織に言え。自分が仕留めたと」

「がああああああつ！」

「うるせえつ、おい、ちよつと力緩めろつて！」

申し訳なさそうに頭を下げながらも、イダテン丸は根来刑部の腕を放さなかった。

「他のヒーローが来る前に決めろ」

何も、こつちだつてこいつを百パー信用するつもりはねえ。時間稼ぎ、それさえ出来れば良いと思っっている。

根来刑部はさんざん喚き、イダテン丸に関節を決められ、押し黙った後、

「分かった」

と、一言だけ、ようやく喋った。

「は、そうか。安心しろ、悪いようにはしねえよ」嘘だけど。正直、後の事は知らん。俺が見逃すと言ったのは根来刑部だけで、まだ気を失っている二人の忍者がどうなるかまでは分からん。

「……………これを持っていつてもらいたい」

イダテン丸は懐から手裏剣を取り出す。それで、自分の指の皮を切り裂いた。血が滲み、溢れていく。彼女は、自分の血液を手裏剣に染み込ませているようだった。決め手にはならないだろうが、そんなんでもないよりマシだな。

「……………軒猿が十人衆筆頭、イダテン丸は死んだ。そう伝える」

根来刑部の背中を見送り、俺は息を吐く。野郎が、他のヒーローに捕まらないのを祈るだけだ。

木目蝦蟇とうつぼ坊は渡さなかった。言っちまえば人質である。

尤も、ついさつきヒーローに引き渡したところではあるが。あの二人がどうなるか、それは誰にも分からないのである。

「……………かたじけない」

謝られる必要はない。俺は、お前を守った訳じゃない。助けたいと思った訳でもない。第一、これで全てが終わったと思えないしな。根来刑部がどこまでやれるかっつーか、野郎、すぐに仲間呼んで引き返してくるかもしれん。軒猿の上忍とやらをいつまで騙せるかどうか、である。

「お兄さん、早く会社に行こうよ」

「ん、ああ、そうだな」

俺とレンは歩き出そうとした。けど、イダテン丸は動かない。彼女はじっと月を見上げている。何を思い、何を考えているのか、そんなの俺には分かりそうになかった。

だけど、これで依頼は終わっただろう。

形がどうであれ、イダテン丸を助けた。未だ結末がどこに向かうか、それすらも定まらない状態ではあるが。

「……………青井殿」

だからきつと、イダテン丸は行くのだろう。組織から逃れる為に、遠くへ。ヒーローとして悪を倒す為に、どこかへ。

「行くぞ、社長が待ちくたびれている」

今までずっと、一人で戦ってきたんだろう。組織の追っ手と、悪と。

何故、イダテン丸はヒーローになるのを選んだんだろう。逃げるだけなら簡単なのに、わざわざ面倒な奴らを相手して、顔が売れるような事までやっちゃって。…………俺みたいなグズを助けた。

もしかして、イダテン丸は仲間を、誰か傍にいてくれる人を望んでいたのか？　なんて、感傷的な事は絶対に口にはしない。

「あのアマ、怒らせたら怖いんだ。お前も覚えとけよ」

青井正義は、縹野初芽に借りがある。

カラーズの依頼は完了したのかもしれない。けど、ここで彼女と別れてしまうのはどうかと思うのだ。中途半端に首を突っ込んで、見捨てるようなものじゃあないか。

「ああ、早く行こうよ、お姉さん」

「……………了解しました」

イダテン丸は、かたじけない、とは言わなかった。

彼女は相変わらず無表情だったが、何かを押し殺しているようにも見えた。

部下をちゃんと守るんだぞ！

「やり過ぎだな」

「やり過ぎたな」

俺は部屋の中にいる人間を見回す。

悪の組織の仕事が始まる。が、今日はいつものように江戸さんの部屋で話を進めている訳ではない。滅多に使われない、大会議室である。それもそつだ。数字付きや怪人を合わせたエスメラルド様の部隊が二十人、そして、四天王の一人、クンツアイトの部隊が一堂に会しているのだから。

「件のヒーローが活動を再開したのは、ここにいる殆どの者にとって周知の事実だと思う」

会議を進行させていくのは江戸さんである。が、しゃもじ女が動き出した事は知らなかった。あのアマ、懲りずにヒーローやってんのか。

「通称は『しゃもじ』。彼女はヒーロー派遣会社、ミストルティンの社員だと分かっている」

流石にそこまではバレているか。まあ、あの夜、ミストルティンの近くで俺が見つつけちまったもんな。誰かが改めて調べたんだろう。江戸さんがそこまで言うと、クンツアイトの部下であるうダンゴムシ型のスーツを着た怪人が手を上げる。

「何だね？」

「そこまで分かっている、どうして手をこまねいているんですか？」

「尤もだ。しかし、ミストルティンは怪人、戦闘員の退治を専門に請け負う派遣会社であり、属するヒーローの数も、戦闘能力も、この街ではピカイチだ。我々……少なくとも、今の戦力だけでは返り討ちに遭うのが関の山だろう」

ダンゴムシ怪人はやり切れないと言った風に息を吐き、手を下ろした。

「……しかし、事態は変わった。だからこそ諸君を呼んだのだ。遂に、ヤテベオが動き始めたらしい」

場が俄かにざわつき始める。

ヤテベオとは、この街を活動拠点とする悪の組織だ。植物型の怪人たちが多く所属する組織であり、ミストルティンに壊滅寸前まで追い込まれている組織でもある。

「ヤテベオを援護する訳ではないが、我々もしやもじには借りがあ
る。彼らが仕掛ける前に、一度敵戦力を把握しておきたい」

「しゃもじをぶっ倒すのは俺だ！ そう思っていたんだけど、話が
デカくなり過ぎたか。仕方ない。前回は一泡吹かせてやったんだし、
諦めよう。」

「ミストルティンのビルに、常にヒーローが十数人という訳ではな
いだろう。実際、我々が相手をするのが誰で、何人いるのか、それ
を確かめたい」

牽制って訳か。けど、仕掛けたら向こうだって警戒するんじゃない
か？ どうせなら、一息にやつちまった方が良いんじゃないか？
「他の組織もミストルティンに恨みを持っている。一致団結すれば
相応の戦力になるだろう。しかし、動かない。だからこそ我々が動
く。情報を得て、確実に勝てる戦いを考えれば、呼応する組織も増
えるだろう。更に、牽制なら既に終わっている。ヤテベオは一昨日
に仕掛けていたのだよ」

そういう事か。

「その時の情報は、ヤテベオから得ていないのですか？」 誰かが
手を上げる。

「残念ながら、流れてきていない。そも、流すつもりがないのだろ
う。ヤテベオは、自分たちだけでミストルティンを潰そうとしてい
る」

そして俺たちが動くって事は、ヤテベオだけじゃ無理だって事で

もある。俺たちは便乗している形なのだ。だが、それが正解だろう。漁夫の利を狙うのが悪のやり方だ。

「今はヤテベオをあてに出来ない。我々だけでミストルティンの現状を探る必要がある。そこで、先遣隊のメンバーを募りたい」

先遣隊？　って、現状分かってないんだから、要は捨て駒みてえなもんじゃん。うわー、誰が行くってんだよ。

俺たち下っ端の動揺を予想していたのか、江戸さんは優しげな声を出す。

「死んでくれと言っている訳ではない。あくまで牽制、様子見なのだよ。現場に行き、交戦が可能だと判断すれば戦い、ヒーローの数が多いと分かれば戻ってきて構わない。それだけでも十分な収穫なのだから」

だが裏を返せば、ヒーローの数が少なけりゃ戦えって言ってるよ。うなもんだろう。江戸さんの本音としちゃ、本隊が出向く前に少しでも力を落として来いって感じなんだろうし。つーか、戦闘員とヒーローのスーツは同等じゃないっつーの。

「そうだな、十人も集まれば充分だろうか」

こつこつというのは、時間が経てば経つほど決まらなくなる。俺の隣に座ってる数字付きも、江戸さんと目を合わせないように俯いていた。早く決まってくれ。誰か手を上げるよ。……しかし、俺たちみたいな組織に委員長、優等生キャラはいないのである。

「誰もいないのか？」

さつきから黙りっぱなしだったエスメラルド様が声を上げる。席を立ち、皆を見回し始めた。すげえ嫌な予感がする。絶対、目を合わせちゃ駄目だ。見つかったも駄目だ。

エスメラルド数字付きは、全員息を殺し始める。

「早く決めないと帰れないぞ！　エド、私が行く」

「それはいけません。エスメラルド様は本隊に組み込まれる予定ですから」

「誰も手を上げない！　朝になっても何も変わらないぞ！」

うわー、めっちゃ怒ってらっしゃる。お腹が空いているんだろう。多分。

この時、数字付きの誰もが思っていただろう。自分たちに白羽の矢が立つんだろうなあ、と。

「アオイ」

声が出なかった。静まり返った大会議室に、怒りを孕んだ声が響く。

「……はい」俺はゆっくりと立ち上がった。エスメラルド様の顔は見られなかった。

「お前は誰だ。言ってみろ」

え？ あ、あの、どういう意味で、ごきますでしょうか……？

「あ、青井、正義です」

う、うつつ。視線が、視線が突き刺さる。

「お前は誰の下で働いているか、言ってみろ」

「エスメラルド様です」

「うん、そうだな。そういう事だっ」

相好を崩したエスメラルド様は俺を指差した。行けて事ですよ。ねー。

「了解、です」

「アオイ、期待してるからな！」

張り詰めていた場の空気が緩んでいく。

「それと、数字付き、半分」

「はっ？」

「ま、まさか………！」

「数字付き、半分！」

俺の同僚たちが指を差されていった。ぎゃっはっは、ざまあみる。地獄へ道連れじゃあ。

江戸さんを見ると、額を手で押さえていた。彼は、こうなる事を予想していたのだろうか。

「そっちからも半分出せ」

エスメラルド様はクンツァイト部隊の方に向き直る。

「クンツァイトがないからって油断するな。私の部下だけ危ない目に遭わせられない。お前らからも半分出る」

エスメラルド数字付きはへらへらと笑い始めた。

「エド、怪人も出して良いのか？」

「そう、ですね。一人までなら構いません。……………組み直し、練り直し、許可、許可……………」

江戸さんは何事かをぶつぶつと呟き始める。

「よし、ならウチから出すぞ。良いか、部下をちゃんと守るんだぞ！」

優しいんだか厳しいんだか、良く分かんない。

ワゴンが二台、組織の地下駐車場を出発する。

車の中にはエスメラルド、クンツァイト部隊の数字付きが六名と、ヒョウ型怪人が分乗していた。全部で十三名、ミストルティン襲撃の先遣隊である。

「……………何だつて選ばれちまうかなあ」

同僚が溜め息を吐いた。ふざけんな。

「俺なんか名指しだぞ」

「良いじゃん、気に入られてるって事だろ」

「良くねえよ」マジで。

会議から二時間後、現在の時刻は午前一時。迅速である。心の準備を整える間もない。

俺たちは敵地へと向かっている。ヒーロー派遣会社、ミストルティンへ、である。正直、そいつらが何をしたのか、何をしているのかまで分かっちゃいない。ヤテベオって組織は相当キレてるらしいけど。

ただ、奴らはヒーローで、俺たちはヒールだ。それだけで、戦える。理由なんかそれだけで充分だった。……………充分か？ 本当に、そ

れだけで命を賭けられるのか。命を捨てられるのか？ 俺は、そういうのが嫌だから、偉くなりたくて、ヒーローになろうとしたんじゃないのか？

「へーい、どうした十三番、怖い顔しちゃってよ」

「顔なんか分からないだろ」

「はっは、そうだった」

ミストルティンのビルが見えたところで、俺たちは異変に気付いた。人通りが異常に少ない。深夜だからってのもあるが、単純に、人の気配がここら一帯から感じられなかったのである。

理由は簡単だ。

怒号。衝撃音。

窓から見えてるのは、戦闘だ。

「出るな、出るな！」

先遣隊の指揮を任されているヒョウ型怪人が短く叫ぶ。

ワゴンを路肩に寄せて、俺たちはビルの前で展開している、ミストルティンとヤテベオの戦闘を眺めていた。……奴ら、今日も仕掛けてやがったのかよ。

近くにはバスが停まっている。その辺の市営バスじゃあない。緑にカラーリングされた……恐らく、ヤテベオのものだろう。スモークフィルムの貼られたガラスだって事は確認出来た。もしかしたら防弾処理が施されてるかもしれないねえ。

「おいおい、マジでやり合ってたんじゃないか」

遠目からではどうなっているのかが分からない。それでも、戦いが行われているのは分かる。

「ヒーローの数は？」

「見えん」

「俺も見えねえ」

「出ちゃ駄目なんすかー？」

流石に、今から乱入するつもりはないよな。怪人だってビビってるだろう。

ヒョウ型怪人は車から降りようとする俺たちを手で制する。

「……ヤテベオは、かなり本気だぜ。数自体はさほど多くないが、ボスのタイタンマット以外、全員来てるな」

「マジっすか!？」

先の会議の資料によると、ヤテベオに残された構成員の数は三桁にも満たないらしい。それでも、幹部の内、何人かは残っているし、首領のタイタンマットは健在だ。その辺のヒーロー派遣会社なら楽に潰せるだろう。が、相手は怪人退治を専門にやってる奴らだ。簡単にはいかない。

「ミストルティンのヒーローは？」

「三人だ」はあ!？」

「嘘でしょ!？ そんな少ない人数で!？」

ありえん。だって、本丸に敵が迫ってんだぞ。自信があるからって、三人つてのは流石に……。

「三人で止めてやがる。むしろ、完全に殺してるぞ」

ヒョウ型怪人は恐れおののいている。俺たち数字付きは既に小便ちびりそうだった。

その時、戦闘員たちが吹き飛ぶのが見えた。割れた人垣から、そいつは姿を現す。巨大なしゃもじを得物にしている、あのヒーローだ。

ビルの入り口、最前線でヤテベオの戦闘員と怪人を相手にしているのは、しゃもじ女だった。

「助けるんすか?」

「無理だな」ヒョウ型怪人は首を振る。

「それに、あの様子じゃあ戦闘始まってすぐって訳でもないらしい。直に別のヒーローが駆けつけてくるぞ」

撤退、か。

この戦いがどうなるのか、見届けたい気持ちもあったが、ここに

残っていてもヒーローに見つかっちゃう。かと言って、この人数じや大した助力にもならないだろう。第一、俺たちの任務は果たしている。

「裏口、確認しますか？」

「それとも応援を呼びます？」

「撤退だ」

断固とした口調で、怪人は告げた。

何をしに行ったのか、やっぱり良く分からないまま、俺たちは組織に戻った。

俺たちからの報告を聞いた江戸さんは、事態の静観を選んだ。ヤテベオの仕掛けが予想以上に早かったのもあり、機を窺うとの事である。

俺たち下っ端は、命令に従うしかない。……江戸さんは、組織は、ヤテベオとミストルティンが潰し合うのを願っているのだ。他の組織だってそうだろう。仮にヤテベオが潰されたとしても、ミストルティンだって疲弊している筈。そこを狙うつもりなのだろう。別組織と協力してでも、叩く。そうに違いない。

江戸さんや怪人たちは作戦を練り直すのと、他組織への呼び掛け、新たな情報の収集に忙しく動き回っていた。俺たち先遣隊は、一旦家に戻っても良いと言われた。

ミストルティン。

しゃもじ女はその社員なんだろう。この辺の情報は、もうとっくに知られている。俺が縋っていたものは、どこかにいつてしまったらしい。

俺はエスメラルド様の数字付きとして、何も考えずに戦うしかない。もはや、一戦闘員がしゃばり、好き勝手出来るような時では

なくなったのである。こうなるのは予想していたが、それでも、何だか釈然としなかった。

きつと、以前までの俺ならこんな事は考えなかっただろう。文句を言いながらも、上の言う事を聞いて体を動かしていたんだろう。

……カラーズに入ったせいかな？ あの日から、何かが変わり始めたよ。よくな、そんな気がしている。いや、きつと、そうに違いはないんだろう。

うわっ、ページめくった!?

体を揺すられる。うざい。

体を揺さぶられる。うっぜえ。

「お兄さん、朝ごはん、出来たよ?」

あんま腹減ってない。俺は寝返りを打つ。

布団の中に、レンが潜り込んでくるような気配がした。邪魔なので蹴っ飛ばそうとする。が、それよりも先に、足に足を絡められてしまった。

「あは、朝から元気なんだね」

「……疲れてんだよ」

朝から鬱陶しい。良いから寝かせろよ、って。

「出るよ」

「今食べなきゃ冷めちゃうよ」

「分かった。分かったから、もう退いてくれ」

力では敵わない。家事でも敵わない。顔でも敵わない。あれっ?俺って、レンに勝っているところがあんのか? ……ガキと張り合っている時点で俺の負けだった。

今朝は和食だった。

「今日も美味しいな」

「あは、お漬け物は買ってきたやつだけだね」

漬け物にまで手を出すレンは見たくない。

「お兄さん、お味噌汁のおかわりは?」

「欲しい」俺は碗を差し出した。レンはそいつを受け取り、にこにこしながら立ち上がる。

「ん？」

と、チャイムが鳴った。

こんな時間に珍しい。そもそも鳴る事が珍しい。新聞か、宗教の勧誘か？ 常識知らずめ。叩き返してやる。

「あ、ぼ、僕が出るよ」

「味噌汁よそつてくれ」

俺は漬け物をばりばり齧りながらドアを開けた。が、誰もいない。あれ？ なあ、鳴ったよな？

レンは頷く。聞き間違いじゃないなら、いたずらか。俺は左右を確認した後、乱暴にドアを閉めた。

「ちっ、近所のガキか」次は現場を押さえてお尻ぺんぺんしてやるう。

「あ、あの……」

俺の機嫌が悪くなった事を気にしているのか、レンは伏目がちになっっていた。

「……お前は俺を怒らせたか？」

「お、怒らせたの？」

「んな事ねえって。……味噌汁、くれよ」

レンは、両手で腕を差し出す。俺をそれを啜った。うん、美味しい。毎日飲んでも飽きないな」

「あ、あはっ、そ、そうかな？」

嬉しそうだった。レンの趣味は料理なのだろうか。素晴らしいが、男の子ってのは、こう、外で遊び回るもんじゃないのか？ いや、違うか。台所に女だけが立つ時代は終わっている。料理の一つも出来なけりゃ、嫁の貰い手もないのだろう。

今日もカラーズへ行く。仕事、である。

「お兄さん」

「何だ？」

「今日はどんなお仕事なの？」

最近、レンを仕事場に連れて行くのが当たり前になっていた。留守番は嫌がるし、まあ、社長や九重はこいつの相手をしてくれるから俺も安心である。

「怪人退治だ。本屋かどっかに出たんだってよ。それより、もっと深く帽子を被れ」

レンは帽子を被り直した。……新しい帽子を買ってやろうか。カライズにも依頼が来るようになったし（尤も、大抵がおつかい程度のものであるが。ヒーローを何だと思ってやがる）、給料だってぐんぐん上がっている筈だ。多分。そうじゃなきゃ嫌だ。

カライズの前に着くと、誰かが階段を下りてくる音がした。たんたん、と。軽快に。依頼人か？

「……………あ」

……………誰だ？

白いシャツにカーディガン、そしてスカート。

「……………あの」

ぼさぼさの黒髪。そして縁なしの眼鏡。どこの文学少年だ。

「もしかして、依頼人の？」

俺がそう聞くと、文学少年は仏頂面になる。と言うか無表情。何か、気に障るような事を言ってしまっただろうか。

気持ちの悪い間が空く。しかし、ここにはカライズしか入っていない筈だ。だとしたら、こいつは何者だ。もしかして、ウゴロモチの残党？

「あは、お兄さん、何言ってるの？」

レンに袖を引っ張られる。彼は楽しそうに笑っていた。

「忍者のお姉さんだよ」

「えっ!？」

「……………恥ずかしながら」

えっ、嘘！？ こいつがイダテン丸なの！？ 信じられん。だつて、スーツを着てる時しか知らなかったし。何よりド貧乳じゃん。

「いや、どこの文学少年かと思っただぜ」

イダテン丸は俺を見つめる。

「…………… スカートを穿いているのですが」

「胸がねえんだもん」

「ま、またそのような事をつ」

「っーか、ここで何してんの？」

依頼は終わった筈だし、スーツを着ていないのを見ると、ザ・プライベートって事だろ。

「お忘れですか。私は今、この屋上を間借りしているのです」

あ、ああ。そう言えばそうだった。いや、しゃもじとかミストルティンとかヤテベオとかで頭がいっぱいいっぱいになってるんだよなあ。

「ん、屋上？ どうしてそんなところに」

「…………… 白鳥社長にも勧められて、三階にも部屋を借りたのですが」

イダテン丸はつかつかと歩いていき、ビルを見上げる。

「屋根のある場所は落ち着かないのです」 難儀な奴だな。

「…………… 屋上の倉庫が広がったので、そこを部屋代わりに使わせてもらっております」

それに、と、イダテン丸は続ける。

「あそこは見通しが良いのです」

「見通して。ああ、見張りか何かを社長に頼まれたのか？」

「いいえ、私の判断です」

軒猿の追っ手、その脅威が完全になくなった訳ではない。今まで逃げ続けてきたのだから、そう簡単には平穏です、とはいかないか。「で、どうなんだ。軒猿の連中は」

「…………… 追っ手の気配は、ありません」

「そりゃ良い事だ」根来刑部も、まあ一応はやってくれたみたいだ

な。さて、いつまで持つか。

「それで、お前は何をしてたんだ？」

「……………書店に行くところでした」

スーツ着て、買い物に行くって奴もそうはいねえもんな。

「青井殿は、今からお仕事ですか」

「ああ、怪人を倒してくれって依頼だ。……………そういや本屋に出たとか言ってたな」

イダテン丸の眼鏡の位置がずり下がっている。多分、変装用のものなんだろう。だが、これか。この格好を選んだ訳か。……………趣味、なのか？ やっぱり。

「……………では、また会えるかも知れません」

「あー、そうだな」出来たら会いたくねえけど。

俺はいつものソファに座り、レンは九重が置いていったぬいぐるみで遊んでいる。

「今から行くんだよな？」

「ええ、そうよ。九重からも連絡があつたわ。十分も掛からないと言っていたから、そろそろね」

九重は時間に正確な奴だから、間違いないな。

「縹野を見なかったかしら？」

「……………誰？」

「イダテン丸の名前じゃない。あなたにも教えたど、彼女は言っていたのだけど」

あー、そういや、名乗ってたっけ。確かそんな時は死ぬほど眠たかったんだよな。あんまり覚えてない。イダテン丸はイダテン丸じゃねえか。

「駄目よ、名前で呼ばないと」

「あー」

「だって、追われているんでしょう？」

「あ、ああ、そうだったそうだった」あつぶねえ。そういや、軒猿とか、三行者とか、その辺の話は社長にしていなんだっけか。しかし、いつか話さなきゃならんだろうな。イダテン丸が自分で言えば良いのに。

「でも、あの日はいきなりで驚いたわ。しかも繚野ったら、屋上を借りたなんて言い出すんだもの」

「そういや、俺もあの日は投げっぱなしだったような気がする。社長に後を任せて帰ったんだし。」

「ここに住まわせてやれば良かったのにな」

「あなたは、ここをどこだと思っているのかしら……」

「そう言えば会社だったな。忘れてた。」

イダテン丸の名前については、まあ、追々努力していこう。

九重が来たので、彼のタクシーで現場へと向かう。

「つーかさ、怪人が出て結構時間が経ってるんじゃないかねえのか？」

被害とか、大丈夫なんだろうか。

「その点については問題がないと、先方も言っていたわ」

「……どう言う事だ？」

「怪人が出現したのは街にある大型の書店よ」

それは電話でも聞いている。

「怪人は、立ち読みをしているらしいわ」

「もっぺん言ってくれ」

「立ち読みをしているのよ、怪人が」

「はああっ!?!? 立ち読みだとう!?!?」

「ふざけんな! 俺を! ヒーローを! 何だと思ってやがるんだ

!?!?

「警察呼べよ」

「相手は怪人よ」

「だけど、立ち読みって。立ち読みって!」

「死ぬほど迷惑な客だな」スーツ着て本屋なんかに行くなボケが。

「あ、そういやさ、さっきイダテン丸を探してたな」

「縹野」

「はいはい、はなだの、ね。で、あいつがどうしたんだ？」

「依頼が増えたの」

「うん、そうだな。とても良い事だ。」

何となく、社長が何を言おうとしているのか、分かっていたんだが。

「この先、あなた一人では追いつかないくらいの仕事が舞い込んでくるでしょうね」

「前からそんな事を言ってたけど、マジなのか？」

「仮に、同日に二つの依頼が来たとしましょう」

「やっぱ言わなくて良い」

「そらアカンて。そら無理やで。怪人退治が二つきたら、青井さん死んでまうわ。」

「縹野のようなヒーローが来てくれれば、あなたを潰さなくても済むもの」

「あいつを勧誘しようとしていたのか。今までに、話とかしなかったのか？」

「同じ屋根の……あー、イダテン丸は上に住んでたんだっけ。まあ、同じ建物に住んでるんだ。顔を合わせる機会もありそうなんだが。」

「それが、いざ話をしようかと思えば、姿を眩ましているのよ。流石忍者ね、益々欲しくなったわ」

「カライズの知名度も上がっている。マジで、本当に、少しずつ。」

だから、イダテン丸クラスのヒーローは、社長からすりゃ喉から手が出るほどの逸材なんだろう。俺だって、あいつが来てくれれば助かる。けど、決めるのはイダテン丸だ。……彼女がカライズに入れば、新しい厄介事まで抱え込んでしまっけど。あっちを立てればって奴か。上手くないかないな。

依頼してきた書店つてのは、中々に大きかった。駐車場も完備である。レンタルビデオやテレビゲームなんかも扱っている、俺も普通の客として何度か足を運んだ事のある店だった。

「お前ら留守番な」

「えー、僕もいきたい」

「駄目だ」お前が来ると、どうしても勘定に入れて頼っちゃう。

「私も行きたいのだけれど」

「駄目だ」

お前が来ると、どうしても邪魔になっちゃう。

「……青井さん」

「仕事にならないって言うてんだ。つーか、そろそろ信用してくれ
たって良いだろ」

「信用？」

社長は俺をねめつけた。

そうだと、俺は頷く。まあ、俺はあんたを信じちゃいないがな。

スーツだって渡さないし、まともな武器だってくれないんだ。せめて足手まといにはなってくれるなよ。

「待つのもあんたの仕事だろ」

「……何だか、頼れるヒーローって感じね」

「あのなあ、俺はヒーローなんだろうが。あんたが言ったんだぞ」

だからこそ、俺はぎりぎりでごんな事をやってこれてるんだ。

「分かったわ。じゃあ、マスクを受け取ってちょうだい」

差し出されたのはマスクだった。

うん。いや、普通の。薬局で売ってるようなアレ、である。

「女だからって殴られないと思ったら大間違いだぞ」

「度の入っていない眼鏡も持ってきたわ。正直、こういう変装が一番目立たないと思うのよね」

「特徴！ とーくーちよーうー！ こんなんしてたらヒーローかどうかも分からんわ！」

風邪引いてる男の出来上がりだ馬鹿野郎！

「色々と考えているんだけど、お金を掛けずに変装するとしたら、そこに落ち着いてしまふの」

「金を掛けるっ」

「お金があつたらこんな事をしていないわっ」

「うわ、最悪だこの女。こういう時だけ子供になるんだからよ。…

…まあ良い。毎度思うが、中途半端なスーツ渡されても困るんだ。

敵を油断させといて、グローブで殴る。これが俺の武器なのだから。

「危ない橋ばかり渡らせやがって。橋が壊れたらどうすんだ」

「その時はあなたと一緒に落ちるわ」

「てめえと心中するくらいなら自爆した方がマシだ」

一人で店内に入ると、レジカウンターには店員らしき人たちが集まっていた。皆、怯えているようだ。客は、まだ残っている。怪人が来たつて関係ないのだ。こういう奴らつてのは、自分たちとは無関係だと、本気で信じている。

「すみません」

「……はい？」

憔悴しきつた様子の、四十路くらいの男がこちらを向く。

「カラーズのもんなんですけど」

「ああ、来てくださっただんですか、良かった。私はここの店長を任されている者で……ところで、その、ヒーローの姿が見えないようですが……」

「あ、俺っす」

男の目から光が消えた。

「馬鹿にしているのかね？」

立場が逆なら、俺だつて同じ事を言っていたらどう。つーか殴るね。『ヒーローです』と名乗ったのが、マスクをしたクソ眼鏡だつたら。

「気持ちには分かりますけど、マジでヒーローです」
とりあえずグローブをはめてみる。

レジにいるバイトの（高校生くらいだろうか）女の子が俺を見て
引きつった笑みを浮かべた。あ、こいつら全然信じてねえな、畜生。
「終わった……」

「店長！ しつかりしてください！」
バイトの子たちに支えられる店長。

「……依頼料はまだ払ってないんでしょう？ だったら、とりあえずやらせてくださいよ。怪人ってのはどこにいるんですか？」

店長は床にへたり込んでしまう。彼からはまともな話を聞けそう
になかった。

「で、怪人ってのは？」

「あ、う、上です」

店長の代わりにバイトの女の子が口を開く。

「上？」 俺は天井を見上げる。

「漫画コーナーなんですけど、そこで怪人が朝からずっと立ち読み
？ を、してるんです。その、新刊の前にいるから、売り上げが全
然で」

「よしてきた」

立ち読みするくらいの怪人なら、俺にだってやれるだろう。いる
んだよなあ、こういう奴。へばいスーツで調子に乗る怪人がさあ。
どこの組織にも入れず、燻って、そのままくたばってく奴が。あ、
人の事言えねえ俺。いや、とにかくやる。やってやる。金の為、
明日の為、より良いライフを送る為、見ず知らずの怪人をぶっ飛ば
してやらあ。

二階に上がると、目的の怪人はすぐに見つかった。新刊コーナー
の真ん前に陣取っている。そして、立ち読みと言うレベルを軽々と
超えていた。ビニールシートを敷いて、寝そべりながら漫画を読ん

でいた。傍らには魔法瓶と弁当箱、そこで、携帯型のゲーム機。大量の本が積み上げられている。……そんながあるなら本屋に来るなよ。暇潰しの材料なら死ぬほど揃ってるだろうが。ム力つくわ、こいつ。

「……カニ、か？」

店内でアホみたいに寛いでいるのは、カニ型の怪人だ。何か、手がハサミって、すげえ事になってるけど。アレで本を読めるのか？ 切っちゃうだろ、ちょきんって。

とりあえず観察してみる。すると、

「うわっ、ページめくった!？」

すげえ！ あのハサミで器用にページをめくってやがる！

「シオ？」

怪人が首だけを動かす。どうやら、俺の姿を認めたらしい。

そして、すぐに漫画を読み始める。あ、無視されてる。そりゃそうか。ヒーローには見えんわな、これじゃ。

……しかし、普通に客もいるんだよな、やっぱり。まあ、怪人は今のところ本を読んでるだけだし、これと言った被害は出てないんだろう。が、仕事は仕事だ。やる事はやる。

「おいカニ、ここはてめえの婆ちゃん家じゃねえんだぜ」

「生意気な口を利く奴シオ」

怪人はこっちを見ない。でんでん太鼓を持ってこなくて良かった。アレを屋内で使うには危な過ぎる。

「シオシオシオ、やっぱり漫画は素晴らしいシオ」

「だったら金払って家で読めや！」

戦う気がないんなら良いぜ！ 今の内にポッコボコにしてやっからよー！

ミストルティン舐めんなや

殴り掛かるうとした瞬間、俺の鼻に何か衝突した。鼻血こそ出なかったものの、すごく、痛い。

「ああああああああっ!?!」
床に転がる俺。

ふと、何かが落ちていのに気付いた。それは、辞書である。英和か和英か知らんが、とにかく分厚い本だ。カニ野郎、これを投げつけたのか!? こんなもん当たったら洒落にならねえって分かってねえのかよ!

「いてえだろぅが!」

「シオシオ、タフな奴。読書の邪魔をするつもりなら、容赦しないシオ」

カニ型怪人は床に積み上げていた辞書を掴む。いや挟む。

くそ、野郎のスーツの性能を甘く見過ぎていた。いつ、辞書を投げたんだ? 全然見えなかったぞ。

「あーおもしれーシオー」全然面白くなさそうに言ってやがる。
「畜生ぶっ殺して……あ?」

お返しに辞書を投げてやるうとしたが、誰かに肩を叩かれた。振り向くと、そこには何だか見覚えのある奴が。つて、イダテン丸じやん。あ、そーいや、本屋に行くとか言ってたっけ。

彼女は俺を本棚まで引っ張っていく。怪人からは見えない位置にまで来ると、イダテン丸(変装版)は元々小さい声を更に小さくした。

「……………お仕事ですか?」

「これが仕事じゃないなら、俺は自殺してる」

「……………あの怪人を退治するのですか?」

「それが依頼だ」

だが、勝てる見込みは全くない。怪人め、あの調子なら三日くらい居座り続けそうだな。

「イダ…… 縹野が来た時には、もうあいつがいたんだよな」

イダテン丸は反応しない。

「いや、お前の名前だろ」

「は、はっ、も、申し訳ございません」

「謝らなくても」

「重ね重ね申し訳……っ！」

頭下げるのが趣味かお前は。

「けど、流石はヒーローじゃねえか。どうにかしようと思ってたんだろ」

そう言うと、イダテン丸は口の端を引きつらせる。が、すぐに元の表情に戻った。

「……………新刊が」

ん？

「……………新刊が欲しいのですが、居座られておりました」

「あ、そう。お前も漫画読むんだ」

「漫画を読まない人間がいるのでしょうか」

選民思想的である。

イダテン丸がここに残っている理由が分かった。なるほど、漫画を買いたいけど、怪人が邪魔って訳だな。

「奇遇だけどさ、他の店に回れば良いんじゃないか？」

「……………既に回りました。ですが、この客が別の店に流れってしまったので」

「売り切れちゃったのか」なるほど、店長はそういうのを恐れていたのか。申し訳ない。時既に遅しである。

「残っているのは、怪人が積み上げているものだけなのです」
隙を窺っていたのだろう。

「あいつ、トイレには行かないのか？ 中身は人間だろ」

「……………どうやら耐え忍んでいる様子」

耐えるなよ。くそ、ややこしい奴だ。

「しかし、青井殿が来てくださったのなら安心です」

「いや、安心は出来ない。と言うか俺に勝てる要素はない」

「……………あの、何を？」

「何とかしてくれないか？」

ノープライドノーライフ。

「……………今、スーツを着ていないのですが」

見りや分かる。が、イダテン丸は鍛えてるだろうし、生身でもその辺の奴より強いだろう。少なくとも俺よりは強い。そうに違いな
い。頼もしい。

「でもヒーローじゃないか。頼む、手伝ってくれ」

「なっ、あ、青井殿が頭を下げる事は……………」

「少しで良い。隙さえあれば、一発で野郎をぶちのめせる」

イダテン丸は俺をじっと見つめていた。何か、やっぱり感じが違
うな。別人である。変装は大成功だぞ、イダテン丸。本当に、本好
きな女の子にしか見えねえ。

「……………しかし、今の私は体術を使えません」

もしかして、体調が悪いのか？

「スカートを穿いておりますから」

「あっ、そうか、ここでアピールするんだ」TPOガン無視じゃん。

「……………体術を使わずとも、隙くらい作って見せましょう」

イダテン丸は自信満々そうに宣言した。

俺は再びカニ怪人の前に立つ。

「てめえの婆ちゃんは死んだぞ」

「何を言っているか分からんシオ。また、辞書をぶつけられたいシ
オか？ 今度は漢語でいくシオ」

はん、てめえの漫画ライフもそこまでだ。やれっ、イダテン丸！

「……シオ？」

何かが倒れるような音がして、怪人は不審そうに目を動かす。だが、こいつは立ち上がるうとも、逃げ出そうともしなかった。

「おおああああああつ!?!」

「何これ!?!」

その様子を目撃した客は叫ぶ。

「なっ、何が起こっているシオか?」

俺からは見えていた。

カニ怪人に向かって、まっすぐに本棚が倒れてきているのを。野郎の陣取ってる位置は、本棚、棚、棚、棚の先だったのである。

イダテン丸が一番向かい側の棚を倒し、倒れた棚が次の棚を薙ぎ倒し……そうして、ドミノみてえに怪人に向かってきてきているのだ。

「しっ、シオオオ!?!」

事態に気付いた怪人は、漫画を投げ出して立ち上がった。俺は腰を落として、拳を振り被っている。

良いスーツ持つてるくせに小汚い真似しやがって。

「出禁ナツクルウウ!」

大振りだが、怪人は俺の攻撃を回避出来なかった。顔面に入ったパンチは酷く気持ちが良い。

怪人は別の棚まで吹っ飛び、その衝撃で棚が崩れて、再びドミノが始まる。逃げ惑う客と轟音と共に倒れていく棚、棚、棚。

「おっ、おお……!」

振り向くと、店長がバイトに支えられて階段を上っているのが見えた。彼は気を失った怪人と散らかりまくった、と言つか無茶苦茶に荒らされた売り場を確認して、後ろ向きに倒れる。

「……少々やり過ぎたのでは?」

俺もそんな気がしていた。しかし、怪人を倒すのにある程度の犠牲は付き物である。店長、ごめんなさい。

息を吹き返した本屋の店長から事情を聞き、社長は依頼料の半分だけを受け取った。

「正当な働きだぞ。正当な報酬をもらえよ」

「だって、大の大人が泣いているんだもの。とてもじゃないけど、全額は受け取れなかったわ」

全く、このアマは中途半端に甘いんだからよ。

「……さっきの怪人はシオマネキ型でしたね。あの、青井さんが一人でやったんですか」

助手席にどっかりと座り込んでいる俺。イダテン丸に手伝わってもらったのだが、彼女は『ここに私がいた事は内密に』とか言っていたので、

「当たり前だ」

自分一人の手柄にしておこう。

「なあ社長、とりあえずやってやっただろ？ これからはもっと俺を信じるようにしてだな」

「そうね」お？

「荒っぽいやり方だったし、あなたが時々ヒーローなのかどうか分からなくなる時もあるけれど、期待以上にヒーローをやっているわ」
「遂に俺の実力を認める時が来たらしいな。給料を倍にしてもらっても良い」

社長は溜め息を吐いた。

数時間後、俺はいつもよりも早い時間に組織へと向かっていた。ミストルティン襲撃がいつになるか分からないので、その準備もかねて、である。

駅前はそれほど混雑していなかった。帰宅ラッシュはとうに過ぎている。これくらいの時間ってのが一番好きかもしれねえ。

改札口が近づき、財布から回数券を出そうとしたが、ない。なくなっていた。そっぴや、使い切ってたっけな。危ない危ない。俺は

券売機の方に向かう。

券売機の前に立ち、液晶パネルをタッチしようと指を伸ばした。
「見つけた」

肩を上げつない力で引つ張られる。財布を落としそうになって、俺の頭に血が上がったのが分かる。

何をしゃがる。

そう、怒鳴りつけてやるうとしたが、

「……青井、正義……！」

俺よりもブチ切れてる奴の目を見て、その気が萎んでしまった。
女である。

背は高い。髪は長い。シャツとジーンズ。ラフな格好。……あつ。

「うわっ」俺は逃げ出そうとするが、両肩をがちりと掴まれてしまっ
まっ。

「てっ、てめえなんで!？」

「うわああ嘘だ嘘だ! なんだってここに広島女がいやがるんだ
よ!？」

「この前はようもやってくれたな」

「離せつての!」

「誰が離すかつ」

意味が分からん。どうして俺が、しゃもじに見つかったんだ?

「われのお陰で会社じゃあ扱き使われるようになるし、最悪じゃ
みな、われの差し金じゃろう、ああ?」

「何の話だっ」もしかして、ヤテベオの事を言ってるのか? だと
したらとんでもない思い違いだぞクソ。

「どっちにせよ許さん」

唐突過ぎる。こんな展開予想してなかった。いや、俺の顔は割れ
てたけど、こんなに早く、しかも正確に突き止められるなんて、ど
この誰が思っつてんだよ。

「ミストルティン舐めんなや、下っ端やろうが調べられるんじゃない
け」

「調べたのかっ」

しゃもじ女はふふんと鼻を鳴らす。

俺がこの女を調べたように、こいつも俺を調べたって言うのか。うわー、うわーっ完全に油断してた。超舞い上がったた。しかし、高が下っ端にそこまでするかよ普通。

「死ぬか、死なんかぐらい殴る」

勘弁してくれ。……………待てよ？ こいつ、スーツ着てねえじゃん。生身じゃん。女にしては馬鹿みてえに力あ強いけど、それでも俺が抵抗出来ないくらいのもんじゃない。イダテン丸とは違い、こいつは鍛えてなさそうだし。

「出来ると思ってるのか？」

しゃもじは更に睨みを利かせる。俺は彼女の手首を掴み、振り解いた。

「悪党が何をゆうか」

「やってみろって言ってんだ」

負けじと睨み返す。一般人だっているんだぞ、こんなところで殴り合おうってのか？

「……………ちっ」

「あ？」

しゃもじ女が辛そうな顔を見せる。彼女は手で額を押さえていた。油断でも誘おうってのかよ。

が、何か様子がおかしい。しゃもじは俺を指差してから、ふらふらと歩いていく。どこに向かうのかと思えば、ベンチに座って俯いていた。

ここで見逃すのは勿体なかったので、俺は何となく追いかける。

「ウンコか？」

「殺すぞ」さつきよりも語気が弱い。

何か、拍子抜けだ。今までムカついて、ぶっ倒してやろうと思っていた相手が目の前にいる、しかも押せば倒れそうな状態なのに、そうしようとは思えなかった。あの日、俺の中でケリがついていた

んだろうか。

「青井正義だ」

しゃもじ女は顔を上げる。

こっちの素性はとくにバレてんだ。改めてと言う訳でもなければ、自己紹介してこいつと仲良くしようなんてつもりもない。だが、彼女は俺よりも情報を持っている。優位に立っている。火の粉はこうして降り掛かるのだ。

「お前を仕留める男の名前だよ」

「……はっ、いきりめ」

しゃもじ女は口の端を歪める。俺に怯えている様子はなかった。

「赤丸夜明^{あかまるよあけ}。われを殺す女の名前じゃ」

どうせ逃げても追いつかれるし、ここでこいつをどうこうしようなんて気も起こらなかった。

「おら」その自販機で買ってきた、ペットボトルの水を差し出す。赤丸はそれを見るだけで、受け取るうとはしなかった。

「借りは作らん」

「やるから飲めよ。つーか、お前何しに来たんだ？」

俺を殺すとか殴るとか言っておきながら、へばってやがる。間抜けにもほどがあるだろう。

だが、やはり昨夜の戦闘が堪えているんだろうな。最前線でヤテベオの構成員と戦っていたんだから。

「……礼は言わん」

赤丸はペットボトルを引ったくり、勢い良く流し込んでいく。彼女は水を頭に被ろうとしたので、それは止めておいた。

俺もベンチに座ろうと思ったが、流石に怖かった。このアマ、いきなり噛み付いてこないとも限らない。首だけになっても襲い掛かってきそうな、鬼気迫るものがある。

「お前、俺の事をどこまで知ってたんだ？」

「青井正義。悪の組織の構成員。確か、四天王とかの下っ端になつとるらしいの」完璧じゃん。どっからそんなんが漏れてんだ。超怖い現代社会。情報技術発達し過ぎだろ。

だが、

「完璧だな」

「ふふん、驚いたか」

そこまでか。

助かったと喜ぶべきなんだろうか。こいつ、俺がカラーズで働いてる事は知らないのか？……いや、そもそも誰が知っている。俺が掛け持ちでやってるなんて、誰にも話してないんだぞ。はっ、そうか。バレる訳がないし、そんな話はどこにも転がっていないんだ。

「頭おかしいんか？」

「アホか。ここまでバレてんなら笑うしかないだろ」危ない危ない。ついついにやついちまってたか。

「で、お前は下っ端の俺を探してたのか。何とも優雅な生活じゃねえの」

睨まれる。俺は口をつぐんだ。

「謝らないからな。先に仕掛けたのはてめえだろ」

「先に？」

「何でもねえよボケ」

正直、この女には良く分からん感じでムカついていただけだ。最後の砦、俺がヒーローだってバレる訳にはいかねえよな。

ミストルティンが吸うのは栄養ではない

組織に行かなきゃならないが、しゃもじ女こと、赤丸を放置するのも怖い。帰ってきたらアパートが燃えていたなんて、マジでシャレにならん。だが、説得も無理だろう。この場を取り繕ったところで、どこでまた襲われるか分からないんだし。けど、けどなあ、スーツも着てないこいつをぶん殴るか？ つーかどっか埋めるか？

……無理だよなあ。

赤丸はペットボトルを握り締めたまま俯いている。どうしよう。どうすれば良いんだ。

「……昨夜は、俺たちの組織とは関係ない」

何を喋ったら良いか分からないまま、俺の口は半ば勝手に動いている。

「そっちだっけ知ってるとは思うけど、ヤテベオの独断だ」

「そんなん知つとる」赤丸はやけくそ気味に言い放った。

「お前はたいぎいんじや」

「たい、ぎ？」

赤丸は弾かれたように顔を上げる。

「ちっ、違う。うざいんじや、お前は」

何を言っただ、こいつは。

「今日も来るかもしれねえぜ、あいつら。……何せ、てめえらを恨んでる連中は山ほどいるんだからな」

「黙れ。ワルにゆわれとおない」

そりゃそうだ。だけど、ヒーローだって恨みを買っただよ。

「何されても文句はゆえん筈じや」

「……どういう意味だ？」

赤丸は、その問いには答えなかった。間が持たないので、話題を

変えてみる。どうして、俺がヒーローに気を遣っているんだろう、とは考えたくなかった。

「お前さ、会社の仕事以外にも色々やってたんだろ」

「なっ、何を……」明らかにうるたえてやがる。腹芸の出来ない奴だ。

「目を付けられ過ぎ」

しゃもじ女は怪人を倒した。会社の仕事で。……本当にそれだけか？ それにしちゃあ多過ぎる。倒された怪人の数も、目撃された回数も。こいつはきつと『内職』してたんだ。会社を無視して勝手に動いて、あるいは、勝手に依頼を受けたりもしていたんじゃないだろうか。

カマでも掛けてみるか。

「お前が俺を調べ上げたように、俺もお前を調べて上げている。ネタは上がってたんだぜ。俺はさ、ただ理由が聞きたいだけなんだよ。ヒーローと話せる機会なんか、滅多にねえし」

赤丸はこつちを睨みつけようとしたのか、顔を上げる。けど、その目にさっきまでの力は宿っていなかった。

「金が」

ぼつりと、呟く。

「ヒーローは、金払いがええんじや。怪人を倒せば倒すほど、面白いくらいに、こつ……」

俯きながら、赤丸は話を始めた。

赤丸夜明がヒーローを選んだのは、他に何もなかったからである。中学卒業と同時にある町工場で働いていたが、数年後、そこが悪の組織によって破壊されてしまったらしい。悪を憎むのも無理からぬ事だろう。

が、彼女は人よりもまっすぐ過ぎたのだ。こつこつと貯めてきた金をスーツに充て、病床の親とまだ幼い兄弟を置いて、この街まで

単身でやって来たらしい。

街に着いた赤丸夜明だが、彼女はヒーロー派遣会社に入る事を選ばなかった。曰く、ピンハネを恐れたそう。フリーランスでやるなら、依頼料は丸々入ってくると考えたのである。

しかし、新人のヒーローがこの街で上手く稼いで、やっていける筈もない。半ば諦め気味に怪人を追いかけていると、そこでミストルティンにスカウトされた、そう。俺と出会ったのもその時期だろう。

そうしてあの日、名刺一枚を持ってミストルティンを探していたのである。

赤丸は、ミストルティンについてはあまり話さなかったが、あまりまともな会社ではなさそうだった。

要は、金である。

赤丸夜明は悪を憎む気持ちと、故郷の家族への仕送りの為にヒーローをやっているのだった。

身の上話を打ち明けた理由は分からない。一人きりでこの街に来たのだ。赤丸は弱っていたのかもしれない。あるいは、昨夜の戦闘で相当に疲れているのかもしれない。俺には良く、分からない。

「同情して欲しかったのか」

赤丸は俯いたままだった。

「戦闘員の同情引けば、どうにかなるでも思っただのか」

「違う」赤丸の声は震えている。

笑わせるな。

その程度の話なら、嫌と言うほど聞かされてきてるんだ。きつと、こいつ以外のヒーローだけじゃない。悪の組織の戦闘員にだって、怪人にだって、色々あるんだよ。少なからず、俺にだってあるんだから、きつと、そう。そうに違いないんだ。

赤丸夜明。てめえはどこまで俺をムカつかせるんだ。

「俺は手を緩めねえ」
背を向けて、歩く。振り返る事はしない。絶対に。

赤丸夜明は、昨夜に引き続き、今夜も最前線での戦いを割り当てられているらしい。

組織に着き、江戸さんの部屋に行く。

「ヤテベオは今夜も仕掛けるそうだ。一時間後か、三時間後か、もしかしたら一分後かもしれないがね」

江戸さんは涼しげに告げた。俺はそれを、どんな顔で聞いていたのだろう。

「君は先遣隊として働いたのだ。総攻撃の日まで休んでもらってくられても構わない。ああ、ただし体は怠けさせて欲しくない」

今夜は、とりあえず、今だけはという感じだが、仕事がないらしい。けど、組織まで終電で来ていたのである。歩いて帰らなきゃならないので、一度、爺さんの開発状況とやらを聞きに行く事にした。爺さんは相変わらずだった。が、少しだけ疲れているようにも見える。

「差し入れは俺の笑顔だ」

「お前が孫なら勘当ものだな」

「疲れてんじゃねえか。珍しい事もあるもんだな」

言って、俺は床に座り込んだ。

「ミストルティンの連中に仕掛けるとか仕掛けないとかで、スーツの調子確かめると言う奴らが増えておつてな。だから青井、お前の分は後回しじゃ」

思わぬ弊害である。まあ、そうなりゃ俺の分は後回しになっても

仕方がないな。

「……ミストルティンについて知ってるのか？」

会議の時じゃ、大した話は出なかった。赤丸も、何も言わなかった。

「相手の情報を掴んでおくのは常勝のコツだろうが。まさか、知らんのか？」

「いや、怪人退治を専門にやってる奴らだろ。知ってるよ」

「それだけではない」

俺は爺さんを見上げる。彼は、キーボードを叩く手を止めていた。肩が凝っているのだろう、親指でそこを押さえている。

「奴らは正しくヤドリギじゃよ」

ミストルティンってのは、古い外国の言葉でヤドリギを意味している。しかし、正しくヤドリギとはどういう意味だろうか。

「樹皮の下を這い回り、栄養を吸い取る事で己の渴きを充たし、己以外を渴かせる。寄生植物のヤドリギはな、吸血鬼の木とも呼ばれておる。無論、悪く扱われているばかりではないがな。幸運の源ともされ、薬効もある。魔法的な部分が注目されて、ヤドリギを信仰する者もおるしおう」

今日は喋るじゃねえの、爺さん。だけど、俺はそう言う事を聞きたいんじゃない。ミストルティンは、つまり何だ？ 何をしているんだ？

「ミストルティンが吸うのは栄養ではない。金じゃ。その為なら、わしらでも『腐っている』と思うような事を平気な顔でやりおる」「腐って……？」

「ミストルティンのやり口はな、怪人、戦闘員の素性を調べ上げる事から始まる。依頼を受けた、受けないには関わらず、常に個人情報収集しておるんじゃ」

あ、そうか。それで、俺の名前やら住所が割れていたのか。

確かに、個人情報があるのとないのとは、戦い方が全然違ってくる。そもそも、正体を知らなければ戦闘さえ起こらない事もある

だろう。

「依頼を受けた時にそいつを使うんだな」爺さんは頷く。

「怪人の家族や恋人を人質に取る事も珍しくはない。雁字搦めの状況を作った上で叩くのよ、奴らは」

人質、か。俺たちの組織はそんな七面倒には手を出さないが。

別に、そういうのが悪いとか汚いとかの話ではない。だってそうだろうが、人質取る奴なんざ、悪いし、汚いに決まってるんだから。

「真っ向からぶつかっても勝てるほどのスーツを持っているらしいがな」

爺さんは忌々しそうに呟く。

「依頼者によつて料金を変えるのもザラだし、払えなかった者を脅迫したと言う話も聞いたのう」

そう言えば、社長からもそんな話を聞いていたっけ。ヤの付くお仕事してるじゃねえの、ミストルティンめ。

「そら恨まれるわ。ヤテベオの連中だって、似たような事をされたんだろ？」

「確か、幹部の家族がさらわれたと、どこかで聞いたな」

「……無事、なんだろ？」

爺さんは答えなかった。……怪人の家族、か。幹部ともなると、相当色々な事に手を出し、染めていたんだろ。ヒーローや一般人から恨まれても仕方がない。だけど、身内にまで手を出されても良いのか？ 普通、そこまでやるか？ やって良いものか？ 良くねえに決まってる。ミストルティンは、その線を越えるような、飛び抜けて狂った連中らしい。

「じゃが、わしらのような者がどこに言えるか。何をされても仕方がないとも言えるだろうな」

何を、されても。

「ミストルティンの社員、人数とか、爺さんは知らないのか？」

「わしがそれを知っておつたら、スパイじゃないかと疑えよ。流石に、そこまでは知らん。人づてに聞いた話じゃ。第一、情報を売り

にしとる奴らが、そう簡単に情報を流すものか」

「その割にや会社の場所とか割れてんじゃん」

「どこにあるか分からなければ、依頼人が来れなくなるだろうに」
そりゃそうだ。

「本丸はここだと言っておきながら、いつ襲撃されてもおかしくないような真似をする。ヤドリギめ、相当、自信があるらしいな」

「だからこそ、まだ仕事を続けているんだろうな」

普通、二度も会社を襲われたら逃げようと思うだろう。基本的にヒーロー派遣会社つてのは相手が大きな組織である場合、好んで依頼を受けようとしない。行わない。怪人、戦闘員個人をターゲットとして動く。理由は簡単、危ないからだ。金は欲しいが、必要以上に敵を増やしたくないんだろう。

だが、ミストルティンはやらかした。そして徹底して抗戦している。それは自信か、プライドか。弱みを見せたくないという恐怖からか。

「一体、どんな奴らがそこで働いてるんだろうな」

「社員の評判もあまり良くないとも聞いておるぞ。その辺の戦闘員よりも柄が悪いと専らの噂じゃ。まあ、仕方ないとも言えるだろうな。何せ、良いように使われておる駒だ」

上がアレなら、誰がワリを食う。決まりきってる。下だ。

「所属しているヒーローを使って使って、使い潰すのも茶飯事といったところだろうなあ」

「ああ、だろうな」

俺は、赤丸夜明の姿を思い出す。疲れ果て、力を失っていた彼女を。

「おお、それよりも青井、太鼓の調子はどうじゃった？」

「悪くなかった。けど、どうしたって慣れねえな。使いこなすには時間が掛かりそうだ」

「……どこで使った？」

「黙秘権を行使するぜ」

「阿呆が。戦闘員に権利などあるものか」

おっしゃる通りである。だが、話す訳にはいかないだろう。

「無理に聞き出そうとは思わんがな。具合が悪くなったら持つてこい」

「あいよ」

「それから、新しい武器をやるう」

「えっ、マジかよ。気前が良いじゃねえか、爺さん。ありがとうよ。爺さんは机の引き出しをごそごとと漁り始める。」

「何、当分はお前のスーツに手をつけられんからな」

「あー、そう言う事ね。くれるのは嬉しいんだけどよ、ついでに鞆とかくれねえか？」

「鞆？ 知るか」

いや、だつてさ、グローブはともかく、太鼓を持ち歩くつてのはどうかと思うのよ。

「そこまでは面倒を見られん。……おお、あつたあつた。ほれ、持つていけ」

新しい武器をもらい、その使い方についての説明を受けて、俺は組織を後にした。このまま、家まで一時間程度は掛かる。

今夜も、ヤテベオは動くのだ。

きつと、どちらかの組織が潰れるまで続くだろう。

ふと、赤丸の事を思い出した。彼女は、今日も最前線で戦うらしい。どっちが悪か分からないような会社を守る為に。

俺は、何を考えているんだろう。あいつを助ける義理なんかどこにもない。依頼だつて受けていない。動く理由なんざ、何一つないんだ。

俺は戦闘員で、彼女はヒーローだ。可哀想な話を聞いたところで、立場は変わらない。立っている場所つてのは、そう簡単に動かない。だけど、あんな調子で戦えるのか？ 数多の怪人を叩いて屠り、

俺を腹立たせたヒーローが、他の誰かに倒されるんじゃないのか？
馬鹿が。俺に、何が出来るって言うんだ。

金の枝

かつちかつちと音が鳴る。

時計の針は仕事を続ける。

俺はソファに深く腰掛けて、深夜にしか流せなさそうなバラエティ番組を眺めていた。

「……あなたにはデリカシーというものが無いのかしら」

社長は至極迷惑そうだった。俺の対面に回り、こつちをねめついている。

「お互い様だろ」

「普通、こんな時間にこんなところへ押しかけてくるかしら」

「こんなところって？」

馬鹿じゃない？ とでも言いたげに、社長は鼻で笑った。

気付けば、俺はカーズに来ていたのだ。来ていたんだから仕方がない。

「何か、あつたのかしら」

「何かって、何だよ」

社長はぼうつとした表情でテレビに視線を遣っている。恐らく、番組の内容なんかはどうだって良いんだろう。

「悩みがありますって、あなたの顔に書いてあるわよ」

「決めつけるなよ」

「あまり作りの良くない顔なのだから、そんな顔をしていると、ますます悪くなってしまうわよ」

悩みがあるなら話してご覧なさいってか。無理だよ、組織での事なんかお前に話せねえよ。

……じゃあ、どうして俺はここにいるんだろうな。話を聞いて欲しかったのか？ それとも、何だ。

「……ヤドリギはさ、吸血鬼の木、なんだってよ」

「何よ、それ。寄生植物だからって事？」

特に意味なんかなかった。

「でもあなた、面白い事を言うのね」

「俺が考えたあだ名じゃねえけどな」

「ヤドリギ、ね」

社長は本棚に向かっていく。俺はその姿を目で追った。

良く見たら、この部屋の家具は背の低いものばかりである。理由は、言うまでもないか。

「ああ、あつたわ」社長は一冊の本を手取る。そうして、そいつをすぐに戻した。

「今の本は？」

「金枝篇よ。イギリスのえらい人が書いた、言わば研究書ね。全部で十三冊あるわ。読む？」

俺とは一生縁のなさそうな本である。

「面白いのか？」

「魔術、呪術、慣習、風習、禁忌、精霊信仰、王殺し、これらのワードに興味は？」

俺は笑った。それだけで、社長は理解してくれたようである。

「民族学、神話学に興味を持ったら、とりあえずこれを読めば良いわ」

「ご親切にどうも。で、そのキンシヘンとやらがヤドリギと関係があるのか？」

「金の枝、金枝とはヤドリギを指すのよ」

キンシ……ああ、そういうタイトルだったのか。それで、社長はその本を思い出した訳だ。

「作者がね、さっきの本を書いたのはイタリアのネミってところにあるヤドリギ信仰の謎が気になったからなんですって。でも、あなたの言うヤドリギとは、聖なる樹、金の枝ではないのよね」

社長にはミストルティンについて尋ねた事がある。だから、彼女

は何となくではあるが分かっていたんだろう。

「……北欧神話、善の神を貰った、盲目のアースの若い槍を言っているのかしら？」

「はっ、何だそりゃ。随分とまあ、詩的だな」

「だって神話だもの。金枝篇ならともかく、北欧神話なら知っているでしょう？」

「少しだけな。マジで、本当に。」

「あなたが何を悩んでいるのか、私には分からないわ。けれど、女々しい」

社長はテレビを消す。何もかも、全ての音が一瞬間、掻き消えた。「話せない悩みなら、抱えてきて欲しくないわね。どうせ迷うなら、好きにした方が健康的よ」

健康的、ね。

大体、俺は何を悩んでいるのかすら分からないってのに。

「だけど、気は楽になった。ごちゃごちゃだった頭ん中が、少しだけすっきりした感じである。やりたい事、好きにしたい事なんかない。だけど、そうか。俺は、邪魔されなくなかったのかもしれない。」

「社長、マントを貸してくれ」

「貸すも何も、あれはあなたのものよ。だけど、何をするつもり？」

俺は口の端をつり上げた。意識した訳ではなく、自然と、そうなっていたのである。

「悪党を殴ってくる」

「あら、それは素敵ね」

社長は柔らかに微笑んだ。

俺は一旦家に戻り、レンを起こさないよう、グローブと太鼓、それから、押入れに埋もれていたウエストバッグを掴んで外に出る。バッグに爺さんからもらったものを詰め込んでいく。これで、どこまでいけるだろうか。

「……………青井殿」

背後から声を掛けられる。そこには、ヒーローとしてのスーツを纏ったイダテン丸がいた。

「よう、漫画は面白かったか？」

「……………こんな時間にどこへ行かれるのですか」

「あれ、買えなかったのか」

「お仕事と言う訳ではなさそうですが」

見つめられる。

「ああ、趣味だよ」

「……………ミストルティンに、ですか？」

ああ、もしかして、イダテン丸も戦いを見ていたのだろうか。あるいは、お人好しを發揮してヤテベオを敵に回したのか。

「事情があつてな、ちつと行ってくる」

俺が行ったところでどうにもならないだろうが。

「では、私もお供します。微力ながら、青井殿の力になりましょう」

「有り難いけど、良いのか？」

「……………お忘れですか、私もヒーローなのです」

イダテン丸はマフラーの位置を上げて、口元を隠す。

忘れるものか。お前はヒーローだよ。

ミストルティンに向かう。俺は会社の近くまでは行かず、イダテン丸の様子を見に行ってもらった。近くの路地裏で彼女の帰りを待つ。

眼鏡に、マスク。そんでもってマント。……………ヒーローには、見えねえよなあ。

「お」

「……………お待たせしました」

イダテン丸が戻ってくる。

「向こうの方からバスが二台、来ます」

戦いはまだ始まっていない。始まるとしたら、きつと、そろそろだ。

「……………恐らくはヤテベオのものでしょうか」

「ヒーローたちは？ 建物の外に出てないのか？」

イダテン丸は首を横に振る。彼女は、どうしますか、とでも言いたげに見てくる。そいつは俺が聞きたかった。

俺としては、戦いが始まっていると思っていたんだが。そうすりゃ、無茶苦茶に突っ込んでいって、場を荒らしてうやむやに出来ると思っていたのに。

選択肢は二つくらいか。

一つ。ミストルティンに『敵が来てるから、逃げてください』と注意を促す。

一つ。ヤテベオのバスを止める。

難易度としてはどっちも高い。ミストルティンは俺の言う事なんか聞いてくれないだろうし、そもそも、敵が来るって分かっている筈なんだ。その上で、奴らはこの場に留まっている。

だったらヤテベオのバスを止めるかって話なんだけど、えーと、物理的に？ 無理だろそれって。

ほづらやっぱり、俺に出来る事なんか高が知れてんだ。…………畜生。

「ヤテベオを叩くぞ」どっちにしろ、イダテン丸はヒーローなんだし。こうするのが自然ってものだろう。

「……………了解」

イダテン丸は路地裏を飛び出す。俺もすぐに後を追った。

広い道路には、路上駐車している車もない。人も殆どいない。コンビニや建物から、明かりが漏れているだけだ。

俺はイダテン丸の姿を探す。彼女は道路に、何かを撒いているようだった。

「何それ？」

近づこうとすると、イダテン丸は俺の動きを手を上げる事で制する。

「……………撒菱を仕掛けておりますゆえ、危険です」

「おー、流石忍者だな」

三角錐みたいなものがちらほらと、そこら辺に置かれていた。

「けどさ、バスのタイヤって分厚いぞ。こんな小さいので大丈夫なのか？」

まあ、イダテン丸だってそれくらいは分かっているだろうけど。

彼女は暫くの間俯いていたが、屈んで、仕掛けておいた撒菱を拾い始める。手伝ってもらっているんだから、文句は言えん。しかし、何だかなあ。

「ん？」

光が見える。目を凝らすと、向こうからバスが二台、俺たちの立っている道路へと走ってくるのが見えた。

「イダテン丸、バスが来たっ」俺は道路の脇に行く。やっぱり走行中のバスを止めるなんて無理無理。こうなりゃ、乱戦を覚悟するかねえな。

「ってこら！ おい！ 聞こえてんのか！？」

イダテン丸は撒菱を拾い続けている。

「そんなもん後で拾えや！」

「……………これは高価な代物なんですっ」

「うっ、うわ！ 来てる！ もうそこまで来てるから！」

緑色のバスがすぐそこまで来ていた。イダテン丸は一心不乱に道具を拾っている。俺は後ろから彼女の体を掴み、引きずろうとした。

「後生ですから、はっ、離してください」

「死ぬ気かてめえ！」

クラクションを鳴らされている。ああっ、もう！ くそ、放っておけるか！

「その分の金なら後でやるから！」

「……………はっ」イダテン丸が振り向く。ライトが眩しい。

と、次の瞬間には、イダテン丸は姿を消していた。は？ え？

「ひっ、ひい！」

バスはもう、目の前にまで迫っていた。

暫くの間、生きた心地がしなかった。俺は道路にへたり込み、急停止したバスを見上げていた。

「てめえ自殺志願者かコラ!？」

「てめえのおふくろさんにも見分けがつかないくらいぐちゃぐちゃにされてえのか!」

「さっさと退けや!」

クラクションを鳴らされ、ライトに照らされ、罵声を浴びせられ、そこで、ようやく俺は我に返る。

生きているのは確かだ。素晴らしい。生きているって素晴らしい!

「狂ってんのかアアン!？」

「もういいって轆け轆け!」
「ラッキーだ。」

無茶苦茶だったけど、結果的にバスを止める事が出来たのだから。「ツイてる」口に出すと、本当にそうなのだと思う。俺は、最高に最強なのだ。

「俺も助けるよ」

「……………申し訳ございません」

イダテン丸はバスの上に立って、こっちに向かって頭を下げている。頭が高いぞお前。

「何分、今まで一人で戦っていたものですから」

「言い訳は用意してるんだな」
「まあ良いけど。」

視線を下げると、バスから誰かが下りてきた。スーツから見ると、怪人のおようである。そいつは、頭から奇妙な植物を生やしていた。いや、そういうマスクなのか。

「モーウ! お前、俺たちをコケにしているのか!？」

その後ろから、そろそろと戦闘員らしき奴らが降りてくる。緑っ

ばい色のタイツを着込んだ連中だ。もろ、量産品って感じがしてて嫌いではない。

「飛び込み自殺ならよそでやれ！」

「つーか謝れ！ 俺たちを誰だと思ってるんだ！」

「お前らの事なら知ってるよ」

俺はウエストバッグを開いていく。

「モ？ 何……？ お前、まさか」

おせえよ、ノロマが。

「ひっ、何だお前！？」

「うわ、わっ、うわああ！」

バスから降りていたヤテベオの戦闘員が次々と倒れていく。五人全部が地面に崩れ落ちてから、植物型の怪人は事態に気付いた。眼前に立つイダテン丸を認めた。

「……………お覚悟」

「てきしゅうつうつうつう！」

怪人が拳を振るう。イダテン丸は跳躍してそれを避け、バスの屋根に降り立った。

バスから新たな戦闘員が現れる。後方、二台目のバスからも戦闘員が姿を見せ始めた。

俺はバッグから新しい武器を取り出す。爺さんからもらっていたものだ。迫ってきた戦闘員に向けて、そいつを放り投げる。

次いで、バッグから太鼓を取り出した。急いでワイヤーを伸ばし、放ったモノを狙って、球体をぶち当てる。瞬間、それは爆発した。

「ぎゃあああああつ！？」

「ばっ、爆弾だ！」

爺さんからもらったのは、めんこの形をした小型の爆弾である。と言っか見た目はただのめんこだ。ご丁寧に、イラストまで入っている。しかも一枚一枚違うものだ。どこまでアレなんだ爺さんは。

爆弾とは言うが、一発でドーン！ はい爆死ーみたいな威力はない。このめんこはそこそこの衝撃を感知すると、中に仕込んだ火薬が破裂し、それっぽい音と共に破片を撒き散らす仕組みになっているらしい。痾癩玉みたいなもんだらう。

それでも、至近距離で爆発させれば軽い火傷では済まないだろう。爺さん曰く、これで相手を殴ったら良いんじゃないやね（要約）？ との事だが、アホか。俺だってただじゃ済まんわ。

地面に置き、それを誰かが踏めば地雷っぽい使い方も出来る。

でんでん太鼓を使えば、こうして遠くから手動で爆発もさせられる訳だ。一発で成功したのは、幸運だったな。

……全く、扱い辛いものばかり渡してくれるぜあのじじい。俺にテストさせようってんだな、畜生、助かるぜ。

花粉大嫌い！

バスを盾にして、基本的には逃げながら戦う。追ってきた戦闘員をめんこと太鼓で牽制し、とどめはイダテン丸に任せる。

「この野郎グルグルグルグルしやがって、バターにでもなんのかよ！」

倒れている戦闘員は十を超えた。たった二人、しかも、俺はスーツを着ていない半端ヒーローなのだ。ここまでやれば上出来だろう。

「おっ、上からだ上！」

「……………御免」

「下じゃねえか！」

叫んだ戦闘員が、次の瞬間には地に伏している。慌てふためく奴らに向かって、俺は太鼓で攻撃し始めた。

「こいつは良いぜ！」

俺は楽しくなってくる。段々、この太鼓の使い方が分かってきた。戦闘員程度のスーツじゃあ、この球体は追えないし、防げない。何せ、俺にだって二つの球体がどこに行くのか分かってないんだからな！

めんこだってまだまだある。なくなったら爺さんにもらいに行こう。ひやはは、使い放題じゃんか。

「イダテン丸、こいつを向こうのバスに仕掛けて来い」

頷き、イダテン丸はめんこを持って疾駆する。その間に、別の戦闘員が俺を発見した。

「いたぞっ、囲め囲め！」

「囲むだけだろうがっ」

太鼓を振り回す。ワイヤーが軋み、球体が風を切り裂いていく。

相手からすりゃ、厄介な事この上ないだろう。その上、暗くて軌道は見切られづらい筈だ。

「ふはは、もはやこいつは俺にも止められん！ おらっ、こっち来いよお前ら！ そんで当たれ！」

「こいつマジでヒーローかよ」

「こんな奴見た事ねえぞ」

そりゃそうだ。

「わああああああああっ!?!」

あちらの方から、爆発音と叫び声。仕掛けためんこを誰かが踏んだのか？

振り向くと、後方のバスのフロントガラスがぐちゃぐちゃになっていた。……イダテン丸は、あそこに直接叩き込んだらしいな。スーツの性能に飽かした、何とも乱暴な使い方である。

「……………青井殿」

バスの上から呼び掛けられた。

「名前で呼ぶなっ」

「では、何とお呼びすれば？」

「花粉大嫌い！ 俺の名前は除草マスクだ！」

戦闘員どもが声を荒らげる。

「俺らに喧嘩売ってんのか!?!」

「ピンポイント過ぎるだろうがア！」

今適当に考えたからな。お前らは適当な名前の、俺みたいなどうしようもない奴にやられちまえれば良いんだ。

「モウ！ モウ！ そこまでだ！」

戦闘員たちが道を開ける。出てきたのは、さっきの怪人だ。

「除草マスクだと？ モウウ、そんなヒーロー聞いた事もない」

イダテン丸が俺の傍に着地する。太鼓を戻し、俺は怪人を見据えた。

「まさか、ここまで好きにやられるとは……ミストルティンではなく、お前らのような、この、コケにしてくれたな」

「コケにされたらどうすんだ？ 帰ってクッキーでも焼くのかよ？」
「モウウっ、モウセンゴケ型怪人、ドロドロスが相手をすると言っているんだモウ！」

「は、お前が？」

「まずいな。弱ったぞ。」

怪人と戦うなんて、こっちは予想していなかったのに。

そもそも、ここまで上手く立ち回れたのは、イダテン丸と爺さんの武器のお陰である。ちょっとバスを止めて、その間にミストルテインの奴らが出てきてくれれば良いんだけどなー、くらいの気持ちだったんだけど。

「モウ、これ以上部下には手を出すな」

ドロドロスが両拳を上げた。あれが、野郎の構えなんだろう。

「……………私が打って出ましよう」うむ、任せた。

「さあっ、かかってこい除草マスク！ モウ！」

「あ？」

イダテン丸と顔を見合わせる。

いや、お前の相手は俺じゃない。イダテン丸だ。除草マスクとか

呼ぶな。

「除草マスク！ さあっ！」

「こっ、この野郎……………！ 俺なら勝てると踏んだのか！？」

「モウ？ 何の事かさっぱりだモウ。しかし、ここまでやられて二人とも逃がすのはヤテベオ怪人の名折れだモウ」

「卑怯だぞてめえ！ もう良い、やっっちゃえイダテン丸」

「卑怯とかお前が言うなっ」

「ヒーローのくせに小ざかしいもん使ってんじゃねえぞ！」

「自分で向かって来いクスが！」

うっ、大ブーイング。アウェイにも程があるぞ。

「……………ああ、ではなく除草マスク殿。これは流石に」

「俺が出て瞬殺されるだけだぞ」

「モウっ」ドロドロスが走ってくる。やべえ。

イダテン丸が撒菱を投げつける。が、怪人の頭に生えた触手みたいなもんが伸びて、撒菱を絡め取る。

「モウモウモウ！ 飛び道具は無意味だモウ！」

どうやら、あの触手には粘着性があるらしい。と、走りながら考える。

「モウっ、逃がすな！ 追え追えっ、コケにされてたまるか！」

「いつ、イダテン丸！ あいつをやっちまえ！」

「……………しかし」

イダテン丸は俺の隣に並んで走っていた。

「…………… ああいう、グロテスクなモノは苦手で」

「今になって言うなっ」

くそっ、あてにならん。こうなったらやるしかねえ。

俺はバッグからめんこを何枚か抜き出し、ドロドロスに向かって投げた。案の定、触手に絡め取られる。

「これならどうだっ」

立ち止まり、太鼓を構える。ワイヤーを伸ばして振った。めんこはまだ野郎の頭に張り付いたままだ。そこを叩けば、爆発するって寸法である。馬鹿めっ。

だが、球体はめんこに届く前、別の触手によって弾かれてしまった。

「モモっ？ 早くて掴みづらいモウ」

やべえやべえ、太鼓まで捕まえられたら、武器がなくなっちまう。

しかし、どうする？ どうやって仕掛ける？ めんこは駄目。太

鼓も駄目。イダテン丸も消極的だ。

「モウウ、お前、知っているのか？」

「何？」

ドロドロスは立ち止まり、向こうに見える建物を指差した。……

野郎が指差しているのは、ミストルティンのビルだ。

「確かに、ミストルティンはヒーローを派遣している会社だモウ。

そして、我らヤテベオは悪の組織だモウ」

「ただ、そう付け足して、ドロドロスは悔しそうに地面を踏みつけた。」

「奴らはやり過ぎだモウ！ そうだっ、やられたんだからやり返す！ 復讐してどこが悪い！？」

「自業自得って言葉が良く似合う。ただ、俺もヤテベオの一員だったら、同じようには思えないだろう。いや、むしろ、そうに違いない。」

「自分の子供を殴られても！ 妻を蹴られても！ 年老いた親を人質にされても！ お前はっ、何もするなと言いたいのかモウ！？」

「俺に構わず好きにやれよ」

俺には子供がいない。嫁さんもない。そんなん分からん。

ただ、親はいる。確かに、両親に刃物当てられたら黙ってられねえよ。それは分かる。

「俺はお前らの邪魔するけどな」

「ミストルティンに味方するかあ！ モッ、モオオオオウ！ どこまでコケにすれば気が済む！ どうしてっ、邪魔をするんだモウ！？」

「ただ、お前らだっけ知らないだろう。」

ミストルティンには、そういつた事情を分かっているけど、それを実行しなくちゃいけない下っ端がいるってのを。クズはいる。グズもいる。確かにこの街に存在している。俺もお前もお前も、ヒーローだのヒーローだの言ってる奴はどいつもこいつも皆が最低最悪なんだ。

「だから、気にする必要はない。」

「悩むのも迷うのも、今更だったんだよ。」

「右を向けば親がヒーローに殺されて、左を向けばヒーローに金を奪われる。」

「誰を信じて誰に味方するのか、何をするのか、全部、てめえで決めるんだ。」

「アレは俺の獲物だ。てめえらにはやらせねえ」

赤丸夜明。しゃもじ女。あいつは、俺のだ。手を出すってんなら容赦しねえ。

「モツ、モオオオオウ！」

ドロドロスが走ってくる。俺は太鼓を振った。が、球体は避けられてしまう。

くそ、何度か攻撃を見られてしまっているのだ。軌道を見切られたのか、あるいはリーチを見切られたのか、とにかく当たらん。このままじゃ潜られる！

「ドロドロス様ーっ！」

「そんな奴やつちまえー！」

このままじゃ、危ない。

俺はボタンを押す。瞬間、ワイヤーが伸び、球体の軌道が微妙に変化する。

「モツ、モウ……？」

ドロドロスは寸前で攻撃を回避したと思っっているようだが、それは違う。この武器は伸びるのだ。さっきまでのワイヤーの長さは、大体二メートル。目が慣れていたのであるが、今はそれよりもメートルは長くなっている。

つまり、見誤り、当たるのだ。

「モツ」しかし頭部は狙えない。俺は球体を、ドロドロスの胸に命中させていた。

「はっはあ！ すげえ俺っ」

ドロドロスの動きが止まる。俺は太鼓を振り回しながら接近を試みる。……調子に乗ってるって、そう思ってくれたかよ。

俺は太鼓を振り下ろす。球体は地面を穿ち、破片を撒き散らしている。ドロドロスは、もう片方の球体を触手で掴んでいた。関係ねえ。俺の本命はそれじゃねえんだ。

腰を深く落とす。踏み込む。

「モツ？」完全に、野郎は太鼓の方に気を取られていたらしい。

「ふんっ！」

挟り込むように、拳をめり込ませる。怪人の体が一瞬間宙に浮き、その後、くの字に折れ曲がった。

拳を払うと、意識を失った怪人は地面に倒れていく。

「……………お見事」

ありがとうよ。

「さて、と」遠巻きに戦いを見ていたらしい戦闘員どもを睨みつけてやる。どうだ、超やるだろ俺。すげえかつこいいだろう。

「ひっ、う、嘘だろ……………」

「ドドロロス様が、こんな奴にやられちまうなんて」

「こつち見んじゃねえよ！ くつ、来るな来るな！」

俺はドドロロスの傍にしゃがみ込む。めんこを剥がさなくてはなるまい。まだ使えるだろうし。

「……………除草マスク殿、ミストルティンのヒーローが出ました」

「はあっ！？ マジかよ、まだ全部剥がせてないんだぞ！？」

俺は立ち上がり、件の建物を見遣った。…………俺の視力じゃ確認出来ないが、うーん、何か走ってきているような気もする。確か、赤丸もいるんだっけな。

「撤収する」

「は、はっ、何ゆえ。ここでミストルティンのヒーローと協力すれば……………」

「それは不可能だ」

眼鏡とマスクだけでは、赤丸にバレてしまうだろう。

第一、俺の目的は終わっている。あのアマを仕留めるのは俺なんだ。ヤテベオはそこそこ叩いたんだし、後はミストルティンが片付ければ良い。バスもすぐには走れなさそうだし、俺も怪人を一人倒した。戦闘員もかなりボコボコにした。ここまでお手伝いしてやったんだから、どうとでもなるだろう。

「お前は残っても良いけど、とにかく俺はどさくさに紛れて逃げる」
「……………では、お供します」

ヤテベオの戦闘員たちは、バスに戻って逃げようとする者、ミス

トルティンに向かっていく者の二つに分かれていた。俺は路地裏まで一気に、道路を駆け抜けていく。立ち止まらず、走り続けた。

その夜、イダテン丸にもう一度様子を見に行かせたところ、残っていたヤテベオの構成員は全滅したらしい。バス二台にどれだけの怪人が乗っていたか知らないけど、奴ら、相当の打撃を受けた筈である。

「……………報告は以上です」

「悪いな、使い走りさせちまって」

「構いません。私は忍びですから」

俺は眼鏡とマスクとマントを取り、アパートの前に座り込んでいた。イダテン丸はまだ、周囲を警戒している。

「しかし、見たかよ俺の活躍をさ」ほぼ生身であそこまでやれる奴はいないな、うん。……………そんな馬鹿は、この街にいないよな、うん。そうに違いないよな。

「怪人と戦闘員、あそこには何人がいたんだろうな」

「……………戦闘員が三十。怪人が四です」

あつ、すげえ数えてきたんだ。三十四、か。いや、全員と戦った訳じゃないけど、凄まじいよな。

「お前は優秀だな」

「恐れ入ります」

「……………ん？ 怪人が、四？」

おかしいな。俺は一人しか倒してねえぞ。

「……………二人は私が倒していたようです。残った一人は、しゃもじを持ったミストルティンのヒーローに吹き飛ばされていました」

あつ、すげえ、何か面白くねえ。しれつとした顔で（いつも無表情だけど）怪人を倒したとか言いやがった。

「あの、何か？」

「何でもねえ。疲れた。お休み。今日はありがとな」

「あつ、あの、青井殿っ!？」

これで良かったのだろうか。こうして振り返ってみても、やっぱり分からん。俺はヒーローとしてヤテベオを邪魔したのか。それとも、悪の組織の戦闘員として、赤丸に負けて欲しくなかったのか。どっち、だったんだろう。

エスメラルド部隊は機を見て仕掛ける、です

翌日、組織から召集が掛かった。深夜ではなく、昼前にあっちへ出向くのは久しぶりである。

何があっただろう？ とか、とぼけるつもりはない。十中八九、昨夜の事だ。俺とイダテン丸がヤテベオに仕掛けた事についてだろう。まあ、あの時、現場にはヤテベオの奴らしかいなかったし、バシてはいないだろう。

組織に着くと、あれよあれよと言う間に話は進んでいった。正直、ちよつと頭が追いついていない。

「アオイ、眠いのか？ ダメだぞ、休んでも良いけど、鈍らせるなって言った筈だ」

「あ、いや、そうじゃないです」

気付くと、大会議室には、俺とエスメラルド様しか残っていないかった。

「だったら良し！ じゃあなアオイ、また後でな」

俺は頷く。エスメラルド様は元気良く会議室を去っていった。

……ミストルティンとヤテベオの戦いは、俺とイダテン丸が去った後も続いていたらしい。双方が打撃を受け、主要なメンバーが倒されたのだと聞いた。赤丸夜明も追い詰められたそうだが、何とか逃れたとも聞いている。

ウチの組織は、ミストルティン襲撃を決定した。ヤテベオに乗じて動こうとしている他の組織とも連携していくようだ。

ウチからはエスメラルド、クンツァイト部隊が出撃する。他の組織と合わせると……かなりの人数だ。ミストルティンだけでなく、

一組織くらいなら楽に潰せそうだな。けど、まあ、そうはいかねえんだろうな、この街には悪人と正義の味方がのさばっているんだから。金の匂いを嗅ぎつけたヒーローが来る前にケリをつけなきゃならねえ。

決行は今夜。

今夜、確実にミストルティンは壊滅するだろう。奴らは、この街で長くやっていくには、少しばかりやり過ぎたのだ。

時間つてのはあつという間に過ぎていく。

俺たち、エスメラルド様の数字付きに与えられた任務は、彼女の護衛と戦闘行為だ。手順もクソもない。上司にくっついて突っ込むだけである。

「十三番、大丈夫か？」

「……お、ああ、平気だよ」

いつものワゴンの中、隣に座る六番に声を掛けられた。

「俺たちは中盤つてところだろうな」

「だろうな」先陣を切るのはヤテベオの生き残りだ。遂に、首領のタイタンマツトも出てくるらしい。これで最後にする決めているのだろう。そも、ヤテベオが仕掛けられるのはこれが最後だ。奴らは既に戦力の大部分を失っている。他の組織の協力がなければ、ミストルティンのヒーローに飲み込まれるだけなのだから。

「エスメラルド様にしっかり付いていけよ。あの人、めっちゃくちゃだからな」

「何となくは分かるが……」

そう言えば、俺はエスメラルド様の戦いぶりを見た事がない。スパーの時は、他人を見ていられる余裕なんかなかったしな。

「あの人俺たち数字付きの頭なんだ。守れよ。じゃないと江戸さんに殺される」

「はっ、そいつは冗談じゃなさそうだな」

あの人にはもう少し、自分が四天王って立場だというのを理解して欲しいものだが。

何となく顔を上げると、前方のワゴンが緩々と進んでいくのを認める。

「時間だ」

始まる、か。

これでもう、しゃもじとは戦えない。もう二度と会えないんだろう。……感傷に浸っているのか、俺は？ 話を聞いたから、なのか？ くそつ。だから嫌なんだ。俺が悪であいつが正義で、それだけの話なら良かった。そしたら、何も考えずに戦えたんだ。

だけど割り切れ。今の俺はヒーローでも何でもない。ただの戦闘員で、私情を挟むな。赤丸夜明がどこのどいつに倒されたって、諦めるしかねえんだろうが。

ミストルティンのビルを臨める地点で、ワゴンは停まった。先頭には江戸さんの車、その後ろに怪人を乗せた車、そして俺たち数字付きを乗せた車が停まっている。

それだけではない。昨夜はヤテベオのバスしかなかった道路に、数十を超える車があった。そのどれもが、戦闘員や怪人を乗せた悪の組織のものである。

「……出番、あんのかな」

「いやー、同感。俺らが出なくても勝手に終わってそうじゃね？」
全くこいつらときたら。心底から同意出来るぜ。

ヤテベオの連中は既にスタンバイ済みだ。ミストルティンだって、この車の数には気付いているだろう。これから先、自分たちがどうなるかも分かっている筈だ。

「はい段取り確認な」

数字付きの一番がメモ帳みたいなものをぺらぺらとめくり始める。全員が彼を見遣った。

「えー、俺たちエスメラルド数字付きはー、エスメラルド様の援護、護衛が任務です、と。まず、ヤテベオが突っ込む。その後、別の組織の戦闘員、怪人が雪崩れ込みまーす」

「段取りもクソもねえな」

「はっは、確かに」

「静かーに！……で、エスメラルド部隊は機を見て仕掛ける、です。とりあえずエスメラルド様が動けば俺らも動くって事で」

「簡単で助かる。今回はヒーロー派遣会社が相手だからな。単純な力比で構わないのだ。しかも、こっちの数が多。負ける要素はない筈である。」

「それまで待機ー、質問はー？ はいナシなー」

「出番があるかどうかも分からなくなってきたので、数字付きの乗っているワゴンは和やかな雰囲気だった。正直、俺も戦わないで済むなら、そっちのが有り難い。危ない橋を先陣切って渡る奴なんか早々いやしねえんだ。」

「あれ？ 江戸さんが車から降りたぞ」

「はっ？ 早くねえ？」

「全員が前方を注視する。」

「江戸さんは車から降りて、どこかに行ってしまった。時間的に、そんな余裕があるとは思えないんだが。」

「挨拶回りじゃないの？ 今回の襲撃に関しては江戸さんが進めてたらしいし」

「ふーん……あれ、エスメラルド様も出てきた」

「しかし、エスメラルド様は江戸さんとは違う方に歩いていく。ミストルティンの建物の方へと向かっているようだった。」

「まさか……」

「いや、流石にねえだろ。ちょっと様子見に行くんじゃないか？」

「和やかな雰囲気は消え去っていた。全員、嫌な何かを感じている。そうに違いない。」

「あ、怪人も降りてきたぞ」二人の怪人がエスメラルド様の後を追

う。続いて出てきた二人の怪人は、江戸さんの方へと走っていった。
「俺らどうする?」

「えっ、追いかけるの? ヤだぜ俺」

俺も嫌だ。だけど、俺らの任務はエスメラルド様を守る事である。

「一から六。七から十三。どっちか半分が追いかけるか」

「おっしや、言いだしっぺが行けよ」

提案したのは十番だ。つまり、十三番の俺はエスメラルド様を追いかけなきゃいけない。

「えー? あー、うーわ、仕方ねえな。もう半分は?」

「江戸さん待ちで」

「あいよっ」

七人がワゴンから降りて、ミストルティンの方へと走る。

「うわ、見られてる見られてる」

「いたぞ、ヤテベオんとこだ」

最前線の位置にはヤテベオの残党が立っていた。そこに、エスメラルド様もいる。……誰かと話している様子だが。

俺たち数字付きの姿を認めると、エスメラルド様は大きく手を振ってくれた。

「おー、どうしたんだ?」

それはこっちの台詞である。

「いえ、エスメラルド様がこっちに来ていたので」

「そうなのか? タイタンマット、こいつらは私の部下だ。よろしく頼む」

「ん」こっちを向いたのは、やたらでかい怪人だった。

こいつが、タイタンマットか。

タイタンマットのマスクは、昨夜のモウセンゴケ型怪人よりも、更に上げつない。ヤテベオの連中は、スーツよりもマスクに力を入れてるらしい。

巨大な花が、頭から咲いている。開いている花びらの直径は一メートル以上もありそうだった。中央には三メートルもありそうな、突起がある。パツと見、燭台みたいな花だった。

「んん」

タイタンマツトはそうして、また前を向く。

「あつはつは！ 気にするな、こいつは照れているんだ！」

エスメラルド様はヤテベオのボスと知り合いらしい。流石四天王だ。彼女の性格からして、交友関係は広そうである。

俺は他のヤテベオのメンバーも確認した。ごちゃーつとした感じの植物をモチーフにしたスーツ。一見して、誰が何型の怪人なのかさっぱりである。

「あ、VFTがいる」

「何だつて？」

「ヴィーナスフライトラップマンだよ」な、何だつて？ ビーナス……？

興奮した様子で話しているのは十二番の同僚だ。

「ハエトリグサ型の怪人だ。あつちはウツボカズラ、あれはタマツルクサ……おお、もしかしてコレティア・パラドクサ型も！？」

マニアめ。こいつにこんな趣味があるとは知らなかった。ちよつと距離を置こう。

「あのー、エスメラルド様」

「どうしたフジタ」

「十番です！ ……あの、ヤテベオの人たちへ顔を見せに来たんですか？」

「あー」

エスメラルド様は空を見上げ、ぼりぼりと頭をかいた。

「待つのに飽きたから、行って来る」
ん？

疑問に思い、それを口に出して尋ねるより先、エスメラルド様はミストルティンのビルを見据えていた。

「止めるーっ」

「あ、ウチの奴らだ」

エスメラルド部隊の怪人が走りながら、こっちに手を振っていた。何か、すっげえ焦ってる感じなんだけど。

「数字付きーっ！ エスメラルド様を止める！」

「は、何？」

「止めるって、何をスか？」

振り向いた瞬間、エスメラルド様は駆け出していた。

……………え、あ、何？ は？ はあっ？

「馬鹿野郎！ 追いかける！」

怪人たちが俺たちの脇を走り抜けていく。

ヤテベオの連中は皆、呆けていた。そりゃそうだ。自分たちが陣を切ると言っていたのに、エスメラルド様は『飽きた』の一言で作戦を無視したのである。

「なっ、う、嘘だろオ!？」

阿鼻叫喚だ。

まずい。このままじゃヤテベオの連中の八つ当たり、そのとばっちりを食う。

「おっ追え！ 追っぞ！」

俺は駆け出した。エスメラルド様を追いかけるといっよりも、ヤテベオから逃げるって言った方が正しい。俺に続いて、他の連中も走り出した。

前方に目を向けると、エスメラルド様はミストルティンに辿り着こうとしていた。そして、ビルからはヒーローが出てきている。数は、二人か。……………赤丸夜明ではない。見た事のねえヒーローである。

「エエエエエエエスメエエエアアルドさまああああああああ！
物凄い勢いで走り、俺たち数字付きを追い抜く影があった。

江戸さんである。彼は武器も持たず、スーツも着ていないまま、ミストルティンのビルに、いや、エスメラルド様目掛けて疾駆している。っーか早い早過ぎる。あの人も、改造を受けているのだろうか

か。

俺が辿り着いた頃には、ミストルティンのビル前での戦闘が始まっていた。

ミストルティン側のヒーローは、黒いコスチュームを着た細身の男と、重戦士といった出で立ちの、大剣を得物とした大男である。

悪の組織連合軍からは、エスメラルド様と怪人が二人に江戸さんだ。数の上では有利っぽく見えるが、相手は怪人退治を専門にしているヒーローなのだ。二人で充分、と言う事なのだろう。

「エスメラルド様っ、お下がりにください！」

ヒョウ型怪人と、シカ型怪人が前に出る。

既に、江戸さんは重戦士との交戦に入っていた。

ヒーローの一撃一撃はクソ重い。そして、速い。あんな馬鹿でかい武器を使ったら、隙が出来て当然なのだが、あのヒーローは完全にそれを使いこなしている。空振りしても、戻りが速いのだ。だから、江戸さんは中々踏み込めていない。

江戸さんの得物は二本の、小振りな太刀である。彼はその得物で、重戦士の大剣を受け止めず、攻撃をかわし続けていた。

「しつこいんだよあんたらは！」

黒いコスチュームのヒーローが叫び、二人の怪人に襲い掛かる。

すると、ヒーローのコスチュームが奇怪な動きを見せた。伸び、縮み、そうして、鞭のような形状になる。

「失せろっ」

ヒーローがシカ型怪人の頭部に蹴りを入れる。ヒョウ型怪人がその際に攻撃を狙うが、鞭と化したスーツの一部分が、彼の攻撃を防ぐ。それだけでなく、お返しとばかりに、怪人の頬を打ち据えた。高く、乾いた音が鳴り、ヒョウ型怪人はよろめく。

「旦那ア！ そんな奴早く片付けてくれよ！」

「うるせえんだ、お前は」細身のヒーローに煽られ、重戦士は嫌そ

決めた事は曲げん

江戸京太郎。

エスメラルド様の右腕を自負し、俺たち数字付きの上司であり、他の組織にも顔が利き、仕事の出来る万能な男。そして、彼には高い戦闘能力も備わっていた。

「なるほど」

呟いた江戸さんは、重戦士の攻撃を二本の小太刀で弾いてみせる。大剣は空を切っていた。

江戸さんは小太刀を順手に握り、ヒーローに迫る。が、やはり大剣の戻りが早い。このままでは受け止められてしまうだろう。

「エドっ、分かってるな！」

エスメラルド様が声を上げる。江戸さんは小太刀を上から振り下ろし、もう片方を下から振り上げる。二方向からの残撃。重戦士は大剣で両方を防ぐ。瞬間、江戸さんは自らの得物を手放して、ヒーローの背後に回った。

ヒーローが易々と背後を取らせたのは、江戸さんの得物を見誤っていたからだろう。彼の武器は二本の小太刀ではなかったのである。「ごっつ、あ……！？」

「あの方の前だ」

江戸さんの小太刀は、二本だけではない。翻ったジャケットの裏地には、十本の小太刀が潜んでいたのである。彼は、それを惜しまずに振るう。突き刺し、突き立て、重戦士の装甲を剥いでいく。

数え切れない回数 of 攻撃を受け、重戦士は大剣を地面に突き刺した。必死で、立とうとしている。倒れれば、そこで終わりだと分かっているのだ。が、江戸さんは小太刀で大剣を砕く。最後の支えを失った重戦士は吐血し、前のめりに倒れた。

「私に敗北は許されない。そう覚えておきたまえ」

「なっ、旦那ア!?!」

ヒーローが一人倒れて、

「ちつきしよう! やりやがった!」

怪人が二人倒れる。

細身のヒーローの鞭に打たれ続けていたのだろう。ヒョウとシカの怪人は苦しそうに呻いていた。

「エスメラルド様ああーっ!」

後方から、数字付きと怪人が走ってくる。これでエスメラルド部隊が揃う事になる。そして、そのすぐ後ろにはヤテベオの連中だ。

「新手法」江戸さんが忌々しげに吐き捨てる。ミストルティンのビルからは、新たなヒーローが数人、その姿を見せていた。そこにも、しゃもじの姿は見えない。安心すると同時、俺は自分を嫌悪した。捨てろって、あれほど言ったのに。俺はまだ分かっちゃいないらしかった。

「悪役がぞろぞろとよオ! 寝てろってんだ!」

「しまっ エスメラルド様!」

黒いコスチュームのヒーローが跳躍する。彼のスーツが不規則に伸縮し、数本の鞭が体中から出現する。野郎の戦法つてのは、中々に嫌らしい。鞭で中距離から牽制し、自分も突っ込む。相手は反撃したくなるが、別の鞭がそこを狙い打つのだ。攻守に優れた、すごいスーツである。

そのヒーローに狙われたのはエスメラルド様だ。彼女は倒れた部下を見つめている。俯いたまま、

「なっ、てめ……!」

飛んできた鞭を、素手で受け止めた。

エスメラルド様は鞭を掴んだまま、中空にいたヒーローを引き摺り下ろす。地面に叩きつけられたヒーローは受身を取れずにその場を転がった。

「私の部下を傷つけた!」

「てめえらが先に来たんだろうが！」

地を蹴るエスメラルド様を確認し、ヒーローは再び鞭を作る。数本の鞭は不規則な動きをしながら、彼女に襲い掛かった。まるで、鞭が生きているようだった。

「先とか後とか、聞いてない！」

「なああああつ!?!」

不規則な動きの鞭を、エスメラルド様は全て回避している。立ち止まらず、ただ前へ。彼女は倒れているヒーローの頭を蹴り飛ばした。動いていた鞭は、ゆつくりとスーツに戻っていき、ヒーローは動かなくなる。

勘が良いとか、センスがあるとか、そういうレベルじゃない。エスメラルド様は初見であるの攻撃を見切っていたのである。やっぱり、四天王ともなると人知を超えている。もう何が起きても、何を起こしても不思議じゃあない。

「流石ですエスメラルド様」江戸さんは回収した小太刀をジャケットに戻し、エスメラルド様に駆け寄る。

「エド、倒れた者を車に運ばせる。私はこいつらと戦う」

「いけません。……ヤテベオも、別組織の者も追いついてきています。ここは乱戦となりましょう。お下がりを」

「下がらない」

エスメラルド様は誰よりも前に出て、ヒーローを睨みつける。

「私は、こいつらが嫌いだ」

「おおおおおつ!」

ボクサーのグローブを装着したヒーローがエスメラルド様に襲い掛かった。

が、

「おおおおおつ!?!」

横合いから体当たりされて、右方向に吹っ飛んでいく。

タックルをぶちかましたのは、タイタンマットだ。彼はエスメラルド様の肩に手を置き、親指を立てた。

「ん」

「ここは任せる？ でも、良いのか？」

「ん」

「そうか。なら、このヒーローはお前が平らげる」
話に通じている？

いつ、いや、それよりも、まずい事になってきた。

「おおおおおおおおっ」

「くたばれやヒーローが！」

「囲まれるなっ、一人ずつ仕留めていけ」

「一対一の状況を作るなあっ！ 囲んで袋が合言葉！」

こうなりやもう段取りもクソもありやしねえ。手柄を欲していたであろう最後方に待機していた別の組織の連中までいやがる。ヒーローの数も増えてきて、何が何だか分かりやしねえ！

いつの間にか、俺たちは戦いの輪の中にいた。エスメラルド様と江戸さん、それから、十三人の数字付きである。

「作戦は失敗ですね」

「んー、ごめんな。でも、だらだらしてたら逃げられちゃうぞ」嘘吐き。待つのが飽きたとか言ってたじゃないですか。

「私は、最初からこうなるとも思っていました。何せ、我々は悪の組織です。足並みを揃える事は何よりも難しい」

かもしれない。結局、戦功を焦った誰かが先走っていただろう。

「建物を押さえましょうか」

江戸さんは小太刀を抜き、ビルを見上げた。

俺は、周囲の戦闘を見ていた。もはや、しゃもじがどこにいても分からない。怪人たちはヒーローを囲もうと動き、ヒーローたちは各個撃破を狙っている。

怒号と剣戟。金属音と叫び声。ふと、スーパーでの戦闘を思い出した。だけど、前よりも気は楽だ。立っている場所がすっかりしているから、安心出来る。今日の俺は、戦闘員をやっているんだ。
「十三番、行くぞ」

「……ういっす」

江戸さんを先頭に、エスメラルド部隊はビルへの侵入を試みた。入り口付近にいたヒーローは、怪人たちが数人掛かりで押さえる。建物内に人の気配はなかった。エレベーターが二基、その近くには階段があった。

「最上階から落とす」

「了解！」

迷わず、俺たちは階段を使う。

数字付きは隊列の一番後ろに位置していた。

二階、三階、四階、五階。

何も無い。誰もいない。ヒーローは出てこないし、一般人だって出てこない。

「確か、このビルにはミストルティン以外のテナントも……」

「一度目のヤテベオの襲撃の時に逃げ出したんだろう」

ミストルティンは確か、六階にある筈だ。ヒーローの一人や二人は守りに回しているだろうが、あまりにも、何もなさ過ぎる。

「今更慎重にいつでも仕方ない。諸君、私に続きたまえ」

江戸さんが階段を駆け上がる。全員が彼に続き、六階に辿り着いた。

しいんと、静まり返っている。戦闘員の呼吸音と、外からの声が聞こえてくるだけだ。

「……暗いな」

江戸さんが照明の切れた廊下に足を踏み入れた瞬間、ひゅつと、風を切るような音がした。彼は暗がりの中、何者かの攻撃を受けてしまう。

敵だ。そう判断した数字付きは、エスメラルド様を庇う為に、彼

女を囲んだ。

「江戸さんっ」

「私は心配ない。数字付きは彼女を守れ。四方確認、ヒーローだ」
息を呑む音すらうるさく感じられる。静寂が、侵入者である俺たちを押し潰そうとしていた。そう錯覚してしまう。

暫くの間はヒーローの攻撃を警戒していたが、何か、おかしいと感じ始めていた。

「来ない……？」

人の気配が、全くと言って良いほど感じられない。まさか、逃げたつてののか？

「制圧を始める。単独で動いてはならないぞ」

江戸さんが怪人を呼び寄せ、扉を蹴破らせた。中には誰もいなくなつたらしく、次の扉を破壊し始める。俺たち数字付きはちよろちよると動き回るエスメラルド様の後を、ちよろちよると追いかけているだけだった。

結果、ミストルティンのある筈の六階には、誰もいない、何もな
い事が判明した。

恐らく、逃げたのだ。と言うか、それ以外には考えられない。しかし、そりゃあそうだろう。ヤテベオだけを防ぐならまだしも、やべえ数の戦闘員と怪人が押し寄せてきてるんだ。プライド云々は忘れて、我が身惜しさに逃げ出して当然だろう。

「まだ上がある。階下も調べ直す必要があるだろう」

江戸さんの怪我は浅かった。肩を切りつけられた程度で済んだらしい。何よりだ。彼がいなければ、俺たちはバラバラになってしまうだろうし。エスメラルド様は、的確な指示を出してくれそうにな
いしなあ。

ふと、俺は階段の窓から外を見下ろした。……赤丸夜明が、戦っていた。しゃもじを振り回し、押し寄せる怪人たちを払い除けてい

る。

最初からいたのか？ どこかに隠れていたのか？ とにかく、あいつは今、下にいる。

けど、勝手な行動は取れない。俺は今一人でやってるんじゃない。エスメラルド様の部下で、俺は、戦闘員で……。

「数字付きから二人、戦闘に加わってくれないだろうか？」

え？

「ああ、いや、他の組織へのポーズだよ」江戸さんは苦笑する。

「建物内のどこかにヒーローが潜んでいるかもしれないが、この状況で留まる必要性もないだろう。奇襲を仕掛けたところで、倒せるのは一人か二人くらいのもだからね。下が片付けば、一時間と掛からず制圧出来るだろうし、この場合は、今の人数でも多いくらいなのだよ」

「俺が行きます」

気づいた時には、俺の口は勝手に動いていた。

俺と、もう一人の数字付きが下に行くが、相方が何番なのか、確認するよりも早く、俺は建物の外を目指していた。

自分でも、何をやっているのか、今から何をやるうとしているのか分かっていない。

だけど……！

外は、静かだった。

既に殆どのヒーローが片付けられて、残っているのは悪の組織の連中が殆どである。誰もが傷つき、あるいは倒れていた。車の方に運ばれている者もいた。

ミストルティンのヒーローを倒せたのは、悪の組織に属する者にとっては、喜ぶべき事なのだろう。ヤテベオの怪人や、他の組織の

怪人が倒されたのは、一般人にとっては喜ぶべき事なのだろう。この状況を喜んでるのは、誰なんだろう。

多くの怪人と戦闘員が、一人のヒーローを取り囲んでいた。だが、誰も近づけない。

赤丸夜明。

彼女の鬼気迫る戦いぶりに、誰もが恐れをなしているのだ。たった一人で、赤丸はここまでの状況を作り出している。勿論、無傷ではない。百を超える復讐者を前にして、ただで済む筈がないのだから。

「おい十三番!？」

同僚が俺を呼ぶ。だけど、俺は命令違反なんかしてないぜ。江戸さんは『戦え』と言ったんだ。俺は、上の命令に従っているだけなんだ。

一歩ずつ、ゆっくりと近づいていく。しゃもじを担いだヒーローが、俺の動きに気付いた。彼女は、俺に気付いているのだろうか。

「よう、ヒーロー」

赤丸は俺を見て、ふつと微笑んだ。俺には、そう見えた。

「……よう、悪党」

彼女が、俺を見た。俺の存在を認めた。そう分かった途端、体中から力が抜けていく。

そうだ。

お前は、俺を馬鹿にしていた。俺を否定していたんだ。お前が、そう思っていないくてもな。だけど、やっとこつちを見たじゃねえか。俺がお前を追いかけたように、お前も俺を追いかけた。力の差は歴然だ。対等な立場とは言えねえよ。けど、今こうして、向かい合っている。

俺は、今までにも色んな奴に馬鹿にされてきた。否定されてきた。けど、何故だろうな。お前にだけは、馬鹿にされたくなかった。否定されたくなかった。お前だけは何故か、許せなかった。

赤丸夜明、俺はお前がム力つくんだよ。

理由なんぞ知るか。あつてもなくても関係ねえ。何でも出来るお前が、誰とでも戦えるお前が、気に入らないだけなんだ。

「その状態で戦うか」

「決めた事は曲げん」

赤丸はしゃもじを振る。風が起こり、彼女の黒髪を揺らした。

「そうかよ」だったら俺を正してみろ。

「今日で終わりだよ、しゃもじ」

音が消える。声が届かなくなる。俺の目は、赤丸だけを捉えていた。

それでもまだ、ミストルティンのヒーローとして戦うのか？

常識的に考えて、俺が赤丸に勝てる訳がない。

俺のスーツは組織から支給される、量産品の戦闘員スーツである。赤丸のものとは比べ物にならないくらい、へばい。今の俺には、爺さんからもらった武器がない。素手一本、自分の体だけで勝負するしかないんだ。

それがどうした。

今までだってそうしてきたじゃねえか。

「来んのか？」

「今……行くよ」

そんな訳で、俺は好き放題やられていた。あー、痛い。中々立てんぞ、こりゃ。

周りの奴らが手を出してこないのが唯一の救いである。多分、俺が完全に駄目になった瞬間、こいつらは赤丸に襲い掛かるんだろうな、きつと。俺はアレか、削り役くらいにしか見られてねえんだな。畜生、そうに違いねえ。

でも、何か変だな。俺はどうして、まだ立ち上がれるんだ。しゃもじの攻撃を喰らってるのに、どうして動ける。前みたいに、記憶を失うほどブチ切れてもいねえのに、意識はある。だからこそ、変だ。

ゆっくりと立ち上がる。節々がいてえ。どうにかなりそうだ。だが、どうにかなっている。

「おお、らあっ！」

簡単に避けられ、簡単に殴られ、簡単に倒れる。それを何度か繰り返した時、俺は違和感の正体に気付いた。

こいつ、弱ってるんだっけ。そういや、そうだ。忘れてた。

今の今まで鬼のような戦いを見せていたから、完全に忘れてたぜ。赤丸はヤテベオの襲撃を受け、そして、今の今までずっと戦ってたんだ。……たった、一人で。

こいつぁ良い。手加減してる訳でもなさそうだと思ってたが、出したくても、力が出せないって事かよ。だーから、俺みたいな戦闘員に手こずってんのか。

「お、とと……」立ち上がるうとしたけど、足がふらついている。まあ、幾ら万全じゃあないからって、ダメージがないって事は、ない。と言うかグロッキー寸前です、俺。

「踊つとんか、われ。楽しそうじゃ、なあ、つと」

「うおっ」しゃもじを振るわれる。その風圧だけで、俺はバランスを崩してしまった。

こうして粘っていられるのは、赤丸が加減しているからじゃあない。彼女の体調が悪いつてもあるが、経験が、俺を生かしてくれている。そりゃ、一挙手一投足までは読めないし見えないけど、何となくといった勘が、俺を動かしていた。

砕けたアスファルトを掴んで、投げつける。しゃもじで防がれる。赤丸は苛立った風に得物を振るった。俺は横っ飛びでそれを避ける。精彩を欠いてるのはどっちもだ。どっちも、疲れ切ってる。

戦いを見てる奴らも分かっているんだろう。どちらかが倒れてしまつのを。赤丸が倒れれば、それでおしまい。そして、俺が倒れれば、彼女はやっぱりおしまいなのだ。この状況、もはやヒーローに勝ち目はない。

「うあああっ！」

それでも、赤丸夜明は戦い続けるのだろう。

俺は逃げている途中にすっ転ぶ。赤丸がしゃもじを振り上げた瞬間、建物から誰かが出てきた。エスメラルド部隊の奴かと思ったが、そうではない。そいつは、そいつらは、普通のおっさんに見えた。

もしかして、逃げ遅れた一般人だろうか？

「じゃ、ちょう……」

「……あ？」

赤丸は、そのおっさんたちを見ていた。その視線に気付いた彼らは、再びビルの中に引っ込んでしまふ。

瞬間、誰かが叫び声を放っていた。あいつだと、逃がすなと声を荒らげている。……まさか、まさか？ さっきの野郎、が？

俺と赤丸を取り囲んでいた戦闘員や怪人たちが、乗ってきた車の方へ駆け出していく。建物の中に突っ込んでいく者もいた。そうして、さっきまでここにいた奴らの半分以上がどこかへ行ってしまった。

「……何だよ」

「あ、ああ……」

赤丸がしゃもじを落とす。

「何だよ、それ」

どうやら、あのおっさんたちが、ミストルティンの社員だったらしい。

「あ、くっ、う……」

「そうかい」赤丸がうるたえている事からも、それが分かった。

「そうか、そうかよ」

俺は立ち上がり、赤丸の体を突き飛ばす。彼女は無抵抗のまま、その場に座り込んだ。

「そう言う事がよっ」

今までどこに隠れていたやがった。ゴキブリみてえな真似しやがって、胸糞悪いつたらねえぜ。こいつは、赤丸は、見捨てられたんだ。いや、こいつだけじゃない。江戸さんに倒された重戦士も、エスメラルド様に倒されたヒーローも、タイタンマットに吹っ飛ばされたヒーローも、皆、全部だ！ 所詮、下っ端って事かよ。ヒーローだって、使われてる側の人間なんだ。こうして、馬鹿みたいに捨てられる。切られちまう。そりゃねえよ。そりゃねえだろ。俺たちは、

こうして体張って、命張ってるつてのによつ。

「畜生つ、畜生が！ てめえらは何なんだ！？」

もつとつくにさっきの奴らは逃げちまっただろう。それでも、叫ばずにはいられなかった。

……どうしてだか、理由は分からない。けど、俺は、彼女を、白鳥澪子を思っていた。あの、金に汚い、口が悪くて性格が悪いどうしようもない役立たずの口だけ女を、だ。

でも、社長なら、俺たち社員を見捨てないだろう。ああ、そうだ。そうに決まってる。そうに違いない。『それが私の正義だから』なんて事を言つてのけるんだろうさ。

なのにつ、あいつらは何だよ。ヒーロー派遣会社だろ？ ヒーローだろ！？ あいつらにもつ、正義つてもんがあるんじゃないのかよ！？ 馬鹿らしい！ アホらしい！

「こんな事やつてられつかよ！」
赤丸に背を向ける。もう嫌だ。もう無理だ。こんな場所、いたくねえ。こんな建物は今すぐにでも潰れちまえば良いんだ。

「おつ、おい、今だつて、今ならやれるつて、行け、行けつ」

「あ、ああつ。おおつ、おおおおつ！」

どこの組織のものか知らないが、戦闘員が一人、赤丸に向かって駆け出していた。彼女は、気付いていないのか、全く反応していない。

「そいつは俺のだつ！」 気付けば、体が勝手に動いていた。

「げつ……！ あ、あ？」

蹴りを放とうとしていた戦闘員の脇腹を、思い切り殴りつけてやる。

「ぎつ、な、な、な……」

腹を押さえた戦闘員が俺に視線を遣っていた。邪魔なので、下がった頭を蹴り飛ばす。

「ふつ、ふ……ふざけんなやコラ！？」

「てめえ欲張つてんじゃねえぞ！」

「舐めた真似してくれてんじゃねえかよ、野郎が」

「おい、行け行け。構わないから、ぶつ殺しちまえ」
「どうやら、ここに居る奴らを敵に回しちまったらしいな。」

「はっは、馬鹿か、俺は。そうだよ、遅かれ早かれ、こうなるのは分かってただろうが。俺が、赤丸を倒す？ 諦めてたじゃねえか。もう良いって思ってただろうが。」

「……何を、しとるんじゃ、お前は」

「座り込んだ赤丸は、弱々しい声を発する。」

「悪党だろうが、われ」

「お前を倒すのは、この俺だ。俺じゃなきゃ嫌なんだよ」

「赤丸の前に立つ俺は、彼女を庇っているように見えるのだろう。」

「ヒーローを庇うなんて、悪の組織の戦闘員、失格である。」

「息を深く吸い込んだ。喉が、少しだけ痛む。」

「おい……」

「こいつはっ！ 俺の敵だ！ 俺だけのっ！ 良いかてめえら、こいつに手え出すなら容赦しねえぞ！ 全部ぶつ殺す！」

「言った。言ってやった。……うわ。うーわ。めっちゃめっちゃ睨まれているわ。は、はは、死ぬな、これ。」

「おっしや、お前から行け」

「一人の怪人が前に出る。サイ型の怪人だ。こいつは前にも見た事がある。ああ、もう、典型的なパワータイプで、最悪の相手じゃねえか。」

「馴れ合いとか、そういうのはもうやめだよな。ぶつ潰してやるからよ、そこ動くんじゃねえぞ」

「はよう逃げろ、私は、もう、えーけえ」

「サイ型怪人は太い足で地面を均している。足踏みする度、僅かに煙のようなものが上がっていた。」

「ん？ 何だ、お前は……がはっ!？」

「ちよっセンパイ!? てめえ何を!？」

「何か、向こうの方が騒がしい。手柄を奪い合っのの小競り合いだ」

ろうか。

「ヤロオオオツ！ やるってのか！？」

「全く、うるさいな」

それにしちゃあ様子がおかしいぞ。

サイ型怪人も、騒ぎの方へ目を遣っている。

「君たちは美しくない」

……アレは。

人垣が割れる。踊るように現れたのは、派手な翅だった。青みのある光沢が、暗がりの中では酷く眩しく映る。周りにいるのが黒っぽい奴らばつかなので、尚更だった。

「それに比べて僕はどうかだろう？ 実に美しいと思わないかな？

ほらっ、この光沢！ この色彩！ 素晴らしく美しいじゃあないか！」

長いブロンドをかき上げ、背中に蝶を模したアホみたいにてかい翅（恐らく、飛行ユニット）を付けた優男が歩いてくる。……奴は、ウチの組織の四天王、クンツァイトだ。

クンツァイトは蝶型のスーツを着ていると爺さんは言っていたが、あれでは翅を付けただけのナルシストにしか見えん。確かに顔立ちを整っているし、テレビに出てくる俳優よりもかつこいい。顔だけはな。アレではただの変態である。アレが、あんなのが、四天王なのか？ しかも、何か周りがキラキラしてるし。何これ？ 漫画？ 「そして、彼らは僕よりも美しい。今この場に置いては誰よりも、何よりも輝いて見える」

クンツァイトは俺と赤丸を指差して、へんてこなポーズを取った。彼以外の者たちは押し黙る。あるいはひそひそ話を始めた。

「……何じゃ、あれ」

「四天王だ」

「イカれとる」尤もである。

「どうせ僕らは悪の組織の人間なんだ。いつまでも手を組めるとは思っていないし、最初から組んでいたとも思わない。ふふっ、『裏

切ったな』と言う人がいなかったのは、僕たちみたいな人間にとつては喜ばしい事だね」

踊る。舞う。クンツアイトから、皆が距離を取る。彼はそのスペースをふんだんに使ってくるくると回っていた。その度にきらきらとしたものが舞っている。

「まるで北欧の神話じゃないか」

他の奴らは『気でも狂っている』とでも言いたげだったが、俺だけは違った。

北欧神話？ 確か、社長も言ってたよな。

「ロキに唆されたヘズは、彼らさ」クンツアイトはビルを指差す。

ミストルティンって事だろうか？

「善き神、バルドルを貫いたヤドリギは君たち」赤丸と、倒れているヒーローたちを指差し、クンツアイトは妖しげに笑う。

「そして僕たちはバルドルであり、復讐の神、ヴァーリでもある。

どうだい、素晴らしいだろう？」

「てっ、めえ！ 何を言ってるかさっぱりなんだよ！」

「……分からないのかい？」

クンツアイトが目を細めて、指を鳴らす。瞬間、彼に文句を言った怪人がよろめいた。

「一対一の決闘というのは、何よりも美しいものなんだよ。それを邪魔する者たちは、この世の何よりも醜い存在だ。僕はそう言ったんだよ」

「分かるか！」

「ぶっ殺してやらあつ！」

もう一度、クンツアイトは指を鳴らす。彼に向かっていた戦闘員も怪人も、全ての動きが鈍り、止まっていった。……何を、したんだ？ 魔法でも使ったつてののか？

「君は確か、エスメラルドの数字付きだね？」

「あ、はい」お、俺？ 俺に話しかけてんのか、こいつ。

「僕たちが醜い者から君たちを守るう。そちらのお嬢さんも、気に

せずに戦ってくれば嬉しいね」

赤丸は答えられない。どうやら、呆気に取られているらしかった。クンツアイトの指示に従い、彼の部下である昆虫型のスーツを着た怪人たちが、動けなくなつた戦闘員や怪人に攻撃を加えていく。

「興奮めじゃ」赤丸は呟き、しゃもじを杖代わりにして立ち上がる。その際、彼女は俺を蹴つ飛ばした。

「……同感だ」

けれど、ケリはつける。

クンツアイトの思考回路は理解出来ないが、有り難い。これで邪魔が入る余地はなくなつた。これで、ようやく、終われる。俺はきつと、ゆつくり休める。

「……お前は、ヒーローとして戦うのか？」

俺はビルを見上げた。もう、ミストルティンの人間はここにいらない。

「お前の上司は、お前を置いて逃げ出した。お前と、仲間を捨てていったんだ。それでもまだ、ミストルティンのヒーローとして戦うのか？」

「決めた事は曲げん。お前こそ、手え緩めんなや」

上等じゃねえか、赤丸夜明。

ロキも俺たちだ

無理矢理にでも曲げてやらあ！

と、勢い込んで向かっていったのは良いが、赤丸はそれはもうあっさり倒れてしまった。その場に、どてんと。

「……………は？」

赤丸は動かない。得物であるしゃもじはしっかりと握っているが、それだけだ。

幕切れは、意外と呆気ない。俺が倒した訳じゃない。彼女はもうとつくに、限界を迎えていたのだろう。体力的にも、精神的にも。

俺はどうする事も出来ずに、クンツアイトや、いつの間にか下りてきていた江戸さんや、エスメラルド様の戦闘をぼんやりと眺めていた。……………何か、ヒーロー増えてね？ いや、明らかに増えてる。ミストルティンの奴らじゃあなさそうだ。今になって駆けつけてきた奴らだろう。ミストルティンを援護する為じゃあない。金の為に、俺たち悪の組織の人間を捕まえようとしているのだ。

「おい、起きろよ。俺の勝ちになんぞ、てめえ」

赤丸は答えない。一瞬、死んでるのかなーとか思ったけど、微かに息をしているのが分かった。

だが、どうする？

ここに留まるのは危険だ。現に、隙を見つけてはこの場からの逃走を図る戦闘員がちらほらと。しかし、赤丸を放置していても、別の戦闘員に捕まってしまうだろう。彼女は、恨みを買って過ぎた。それがミストルティンの指示であったとしても、である。尤も、赤丸は自分の意志で悪人を駆逐していた節がある。金と、復讐の為つてのが半分ずつだろう。だから、捕まって、ぐっちゃぐちゃにされちまっても自業自得なのだ。俺がどうにかしてやるのもおかしい話な

のだろう。

「十三番！ 十三番どこだっ！？ 逃げるぞ！」

「アオイーっ！ どこだっ、無事なのか！ 返事しろっ、返事しないと駄目だ！」

数字付きの誰かが叫んでいる。

エスメラルド様が俺の名前を呼んでいる（ちよつと勘弁して欲しい）。

俺は、赤丸を見下ろした。こんな状態になるまで戦った、一人のヒーローを。

……なあ、そこにいるんだろ。いてくれよ。頼むから。

「イダテン丸！ いるんだろ！？ イダテン丸ウ！」

彼女の名を呼ぶ。何度も呼ぶ。喉から血が出ても構わない。とにかく声を張り上げた。

刹那、蒼い影が見える。疾駆し、戦闘員を薙ぎ倒しながら進む風とも思えた。イダテン丸は短刀を構えて、俺の喉にそいつを突きつけている。お前なら、きつと来ていると思っていたよ。きつと、来てくれると思ってた。

「……………何故、私の名を知っている」

「こいつを連れて行ってくれ」

イダテン丸は俺の指差す方に目を遣った。

「……………彼女は、ミストルティンの」

ああ、情けない。

今の俺は戦闘員で、お前はヒーローだ。だから、悪いな。頼らせ
てくれ。

「動けねえ。助けてやってくれ」

「お前は、戦闘員ではないのか」

頼む。頼む。無理なお願いだとは分かっちゃいるんだ。でも、俺
は赤丸を、他の奴に取られたくない。

「む、十三番！」

「江戸さんっ」

江戸さんがこつちに気付いた。彼は近くにいた怪人を小太刀で薙ぎ倒し、切り刻んでいく。

「た、頼むっ」

イダテン丸は向かってくる江戸さんに視線を遣ると、短刀を懐に戻した。彼女は赤丸を抱えて高く跳躍し、もう一度、俺を見る。

「……………さらば」

「十三番、無事かっ」

「あ、俺は、どうにか……………」

江戸さんは刃こぼれした小太刀をジャケットにしまつと、そこから新しいものを取り出した。

「ぐずぐずしてはヒーローに捕まってしまう。脱出だ。私に付いてきたまえ」

「ひゃっはあ！」

飛び掛つてきた青と橙色のコスチュームを着たヒーローを一刀の元に切り伏せると、江戸さんは再び走り出す。俺は彼の背を見失わないように追った。

その途中、エスメラルド様や数字付きの奴らと合流し、俺たちは車に乗り込む。急いで点呼をしてから、俺たちを乗せたワゴンはわき目も振らずに走り出した。

俺は、ビル前の戦闘に目を遣る。あそこではまだ、誰かが戦っているのだ。自分の信じる正義と悪とを掲げて、生きる為に、金の為に、誰もが誰かに抗っている。…………俺は、どうだったろうか。戦闘員としてあそこに行った。けど、ヒーローを逃がしてしまった。しかも、ヒーローに頼んで。

やっぱ、半端者なんだな、俺は。どっちつかずのコウモリ野郎なのかもしれない。

「あ、そっぴやクンツアイト部隊はどうなったんだ？」

エスメラルド部隊の殆どは車に乗り込めていたけど、あいつはどうなったんだろう。一応、彼には助けてもらったって言う恩がある。一応、だけど。

「知らん」

「よその部隊なんか気にしてられるか」

そりゃそうだ。俺も馬鹿な事を聞いたな。

「けどよ」運転席に座る五番が口を開いた。

「クンツアイトって絶対に戻ってくるんだってよ」

「は？ 何、それ？」

「だからさ、どんなやべえのが相手でも、絶対に死なないで戻ってくるらしい」

クンツアイトの能力は不明だったが、相手の動きを鈍くさせるようなものに近いのだろう。確かに、そういった力があれば生還も難しくくない。けど、まあ、そういうのを超越してるよな、あの人。力とか関係なさそうだった。

車の中では、ミストルティンに関する話を聞かされた。

社員へのえげつない待遇だとか、依頼者を脅迫したとか、怪人の家族を人質に取ったとか。どっかで聞いたような話が殆どだったけど、

「……悪の組織よりも黒い会社ってあるんだな」

数字付きの気持ちは一つになっていた。

「ヒーローじゃなくて、戦闘員選んどいて良かったわー」

「俺は公務員になりたかったんだけどな」

「良く言っぜ、警官ぶん殴っついでよ」

組織へと近づくにつれ、車中には和やかな空気が流れ始めていた。「そっぴやさ、クンツアイトと話したぜ、俺」八番がそんな事を言う。

「へえ、何話したんだ？」

「あー、そうだ。忘れてた、十三番、お前にクンツアイトから伝言」クンツアイトから？

「『ならばロキは誰なんだろうね』ってさ。ロキって何？ ヒーロ

「か？」

ロキ？

ロキって、アレか。北欧神話の神様だったか。そういや、クンツァイトは神話がどうのこうの言ってたな。俺たちはバルドルでもありヴァーリでもあると。ヘズを貫いたヤドリギはミストルテインのヒーローで、ヘズはミストルテインだと。……じゃあ、ロキは？あいつは、俺に何を求めているんだ？

ミストルテインを唆した者がいるとでも言うのか。

あるいは、あの状況を作った者がいるとでも言うのか。

「もう二度と会わないと思うけどよ、会ったら伝えといてくれ。」

ロキも俺たちだ』ってな」

「はあ？ まあ、覚えてて、あの人に会ったら伝えとくわ」

答えなんか知るか。けれど、俺が思いついたのはさっきの答えだ。俺たち人間なんて、そんなもんなんだよな、きつと。ヘズでもあるし、バルドルでもあるし、ヴァーリでもあるし、ヤドリギでもあるし、ロキでもある。クンツァイトが何を尋ねたかったのか、何を言いたかったのか分からんけど、これが俺の精一杯の答えだ。

「そ、それよりさ、ビビっちまったぜ」

「あ？」

「い、いや、十三番が、だよ」

「うるせえな、死ねよ」

口を開いたのは九番だが、最近、皆が彼に対してきつく当たっている。アレだ。九番はこないだ、しゃもじ女こと赤丸夜明に俺たちの事をチクった裏切り者扱いだし。

「だってさ、こいついきなりしゃもじと戦おうとするんだぜ？」

「お前はしゃもじに俺たちを売ったけどな」

「もっ、もうそれは忘れるよ！ やつと痣が消え始めたんだって！」

九番以外の数字付きは、それぞれ顔を見合わせる。へえ、そうか。痣が消えてきたのか。

「じゃあ、新しいのを作ってやろう」

「今度は中々消えないようにしてやるぜ」

「おらっ、スーツ脱げよ！」

「ひっ、ひいひい！ 俺たち仲間だろ！？ やめてくれよ！」

「その仲間を売ったんはためえじゃねえか！」

「八つ裂きだ！」

ケリはついたのでだろうか。

でも、俺は、本当は、どっちなんだ？

赤丸夜明を守りたかったのか？ あいつを、他の奴に倒されて欲しくなかっただけなのか？

俺はヒーローなのか？ 俺はヒールなのか？

何が正義だ？ 何が悪だ？ 誰が正義で、誰が悪だ？

小さい頃はもっと、分かりやすいもんだと思ってた。

ヒーローは正義で、戦闘員が悪で、それだけで、世界が回っているものだと思っていた。

ヒーロー派遣会社が弱者を虐げる。悪の組織が協力し合う。無茶苦茶じゃねえか。

カラーズに入っても、何も変わらない。何も分からない。シンプルな答えってのを、誰かが持っている訳じゃあないし、誰かが教えてくれる事もない。テレビの中のヒーローは、現実にはいないんだから。

えらくなるんだぞ？

ミストルティンは事実上、崩壊した。ヒーロー派遣会社だから、倒産したと言うべきなのかもしれないが。

社員は逃げ、所属していたヒーローもほぼ、悪の組織に倒され、捕らえられたと聞いた。生き残ったヤテベオの連中は、まだ、元ミストルティンの奴らを追いかけているそうだ。首領のタイタンマトもあの場を脱していたそうである。彼らには後ろめたい気持ちがあったので、生きていてくれて良かったと、心から思った。

赤丸夜明を庇った俺も、俺たちを庇った形になるクンツアイトも、特にお咎めはなかった。俺は下っ端同士の揉め事という扱いだったし、クンツアイトに至っては、江戸さんは何も言わなかったのである。心中、お察しする。

「青井君、君を呼んだのは他でもない」

俺は、江戸さんとエスメラルド様に呼び出しを受けていた。お咎めはなかった筈なので、別の理由だろう。平静を装うが、内心は裏切りがバレていないかで心臓バクバクである。

「実は、クンツアイトからなのだが、君に関する、とある報告を受けている」

クンツアイトから？ あの人は何を言ったんだろう？

「どうやら、しゃもじを倒したのは君らしいじゃないか」

「……へ？」

江戸さんは嬉しそうに笑っていた。

「いや、私も分かっているよ。しゃもじは他の戦闘員や怪人との戦いで傷ついていたのだろう。弱っていたのだろう。しかし、最後に

倒したのは、君なんだ。鬼すら倒してしまいそんな気迫を放つしやもじに向かつていったのも、また君だ。それに、獲物を取られまいとする気概も素晴らしいではないか。やはり、君とあのヒーローは相性が良いらしい。あのヒーローが絡む度、君は何かをやってくれるね」

べた褒めである。そう言われたら、そうかもしれない。だけど、やっぱり、俺が赤丸を仕留めた訳じゃあないんだよな。自分一人の力だけでやったんならともかくだ。

「そんな、まぐれですよ。ラッキーだったんです」

「謙遜する事はないよ。……青井君、怪人になるつもりはないかな？」

目の前が真つ暗になって真つ白になって、良く分からない感じになった。

「か、怪人、ですか？」

江戸さんは頷く。

願ってもない話だ。怪人って事は、つまり、昇進って事じゃねえか！ この俺が？ 俺が怪人に？ マジかよ。良いのかよ。すげえ、すげえぞ。

「怪人になれば専用のスーツも支給され、給料も上がる。危険な仕事につく時もあるだろうが、それは百も承知だろう。ああ、それから、部下もつく。流石に怪人になったばかりで数字付きの部隊をもらえるような事はないだろうけど、時間の問題だろう。君には能力がある。そこまで来られたのは、まぐれや幸運かもしれない。しかし、それもやはり君に備わった力なのだ。そう、自覚したまえ」

ああ、ああ、知ってる。知ってるよ。怪人だ。怪人だぞ。六年燻ってたのは、今日、この日の為だったんじゃないか。

「君にはエスメラルド様部隊の怪人として、今一層励んでもらいたい。この話、決して悪くないと思うんだが」

悪いどころか良いことづくめである。断る理由なんかない。……ない筈なんだ。

「……有り難いお話ですけど、今の俺には、考えられません」

「ふむ、つまり、怪人にはならないと？」

「なりたいけど、やっぱ違うと思う。」

「や、その、めっちゃくちゃ嬉しいっす。評価してくれてる人がいるってのは、もう、その、何と言って良いかわかんないですけど、あの、自信がないんです」

「言ってる事がむちゃくちゃだけど、江戸さんはちゃんと聞いてくれている。」

「無理だと思っていいたら、君に今の話をしていないよ。君にならやれると思っただけだ」

それはもう、非常に有り難い。嬉しい。だけど、今回に限っては俺一人で得たものじゃあない。他の戦闘員や怪人のお陰なのである。と言うか、怖い。怖いんだ。何か、どうなるか分からなさ過ぎる。

確かに出世したのはすげえ嬉しい。給料だって上がったし。だけど、世界が変わった。面倒な事が増えた。

「申し訳、ないです」

数字付きになってから、しんどい事ばかりだ。気楽な下っ端に別れを告げただから、仕方がないんだけど。

「それに……」俺は視線をゆつくりと、移動させていく。その先には、むすっとした顔のエスマラルド様がいた。さっきから、彼女は一言も口を利いていないのである。

「……エスマラルド様。あなたは彼の働きを評価しないのですか。

「いけません、部下を褒めないというのは……」

「うるさいぞエド」

「ご機嫌斜めだった。」

「アオイは良く頑張った。私の部下は全員頑張ったぞ。みんな、えらい。そんなの分かっている」

「では、エスマラルド様からも青井君に一言おっしゃってください。彼は、数字付きで終わるような人間ではないのです」

えー、そこまで褒めちゃうの？ ……まあ、強かな江戸さんの事

だ。裏はある。俺を怪人に押し上げる事で得られるメリットもあるのだろう。

「アオイ」

エスメラルド様が顔を上げる。彼女はじいっと、こっちをねめつけていた。

「クンツアイトから話は聞いたぞ。よくやった。あんな、お前、怪人になりたいか？」

なりたいけど、なれない。まだなりたくない。

「はつきりしろ！ なりたいのかっ、なりたくないのかどっちだ！？」

「なっ、なりません」

「……………な、ならないのか？」

俺は反射的に頷く。

「でも、怪人だぞ？ えらくなるんだぞ？」

怪人になるのは怖いし、まだ早い。色々と理由は挙げられる。

「俺はエスメラルド様の数字付きになれましたから。今は、この仕事を続けていきたいんです」

「そうか。そう、なのか？ アオイは、私の部下で良いのか？」

「ええ、楽しいですから」

「お前、良い奴！ ちょっと嬉しくなっただぞ！」

きつと、この位置が気に入っているんだ、俺は。

ま、まあ、江戸さんの顔が、ちょっと怖くなっているのは忘れよう。

その日、俺はエスメラルド様から段ボール箱を渡された。『やる！』と言われたのでもらっておいた。断る理由はない。中には、大量のソーセージや饅頭が入っていた。江戸さんの部屋にあったものだろう。多分。

夜道を、段ボールを抱えて歩く。結構重い。ずっしり来る。

「あー、くそー」

段ボールを置いて、俺はその場に座り込んだ。めんどいけど、捨てる訳にはいかないよなあ、やっぱ。……とりあえず、魚肉ソーセージの封を切る。食べる。美味しい。飲み物も欲しくなってきた。近くに自販機ないかな。

「……………青井殿」

「うわっ!？」

背後から声を掛けられる。ソーセージを噴出しそうだった。

「……………夜分に失礼。少し、お話がありまして」

「あ、ああ、何だ、お前か」

声を掛けてきたのはイダテン丸である。一体、いつの間に。こええよ。

彼女はこないだと同じく、文学少女って感じの服装をしていた。

「青井殿は、お仕事の帰りでしたか」

「ああ、そうだよ。で、用事ってのは？」 既に見当は付いているが。

「……………実は、先日、とある者を拾ったのです。ああ、拾ったと言つのは語弊があるかもしれませんが。託されたと言つべきでしょうか」

十中八九、赤丸の事だろう。

「分かった。話してくれ」

「……………屋上にその方を匿っております。事情は、道すがらお話ししましょう」

カラーズに着く前に、イダテン丸は赤丸と出会った経緯を話してくれた。だが、赤丸を頼んだのは俺である。なので、イダテン丸の話は再確認といった感じだった。

「……………こちらです」

社長を起こすのもめんどいから嫌なので、こそこそと階段を上り、

屋上への扉を開ける。

屋上は、意外と綺麗だった。もしかして、イダテン丸が掃除をしたのだろうか。隅の方、ぼつんと何かが立っている。

「……倉庫？」

「広いですよ」倉庫なのか、やっぱり。

「………いつもはここにいます。落ち着きますから」

まあ、トイレとか風呂とか困るよな。こんなところに電気も水道も通っていないだろうし。

「赤丸もここに？」

「ええ、今はここに」社長にバレるからか？ イダテン丸のいない時に物音がしていても、怪しまれちまうだろうしな。

さて、どうするか。イダテン丸は俺が戦闘員やってるのは知らないんだし、上手い事口止めしないといけないだろう。赤丸には、俺がヒーローやってるって言うても大丈夫だ。と、思う。どうせ、バシてんだろうし。

「………正直、誰かと共に暮らすのに慣れていないのです」

イダテン丸はすっかり参っていた。あの凶暴女の相手をしていたのだ。そりゃ疲れる。

「おう、縹野か？」

と、倉庫の扉ががらと開いた。中から現れたのは、間違いない。赤丸夜明その人だった。

俺の思考は停止してしまう。彼女は俺を見遣り、目を細め、そして、指を差して叫ぶ。

「ぶっ殺す！」

「………ええっ？ あ、赤丸殿……？」

イダテン丸が赤丸を止めようとするが、

「われえ、ここで何をしとるんじゃ、ああっ？」

俺は胸倉を掴まれてしまった。

「どういつつもりか聞いとるんじゃ」

「はっはっは、何を言っているのかさっぱりだ。いやー、イダテン

丸さん、この人すごいですね。初めまして、僕は青井正義。あなたのお名前は？」

「な、なっ、舐めとるんかお前！」

あー、もう、うるせえうるせえったらねえな。

「……そう言う事にしとけ」俺は声を潜める。

「イダテン丸は事情を知らんからな」

「お前、縹野にゆうとらんのか？」

「言える訳ねえだろ」

イダテン丸はちゃんとしたヒーローなんだぞ。俺が戦闘員ってバシたら、どうなるか。

「ふふん、自業自得」

「頼むから黙ってる。……お前、俺に借りがあるんだぞ」

赤丸は目を見開き、俺から手を離す。

「そがあなもん、知らん」

「ざっけんなよ!？」

「ふふん、そがいにいがつてもしょうがないで。……うちは、われが憎うて憎うて……」

「なあ、いがつてつて、何？ 日本語？」

拳が飛んできた。

「あつぶねえな！」

「ムツカつく！ 避けんなボケエ！」

だつて方言とか地元民以外にやあ、外国語も同然だぞ。郷に入つては郷に入れ。俺に負けたお前は俺に従え。

イダテン丸は表情こそ変えなかったが、心配そうに俺たちを見つめている。どうして良いか分からない風にも見られた。

「……ヤテベオ」

「あ、な、何いよん？」

「ヤテベオの連中は、まだミストルティンを追ってるんだよな」

嘘ではない。ヤテベオの奴らの怒りはまだ収まっていないのである。

「われえ、脅迫する気か」

「それはお前次第だ。だけど、俺は一人で死ぬのをよしとしないタイプだと覚えておいてもらおうか」

互いが互いの命運を握っていた。運命共同体というには、少しばかりすぎすぎしているが。

「クズ」はつは、そんな言われ慣れてんだよバーカ。

「ヒーローに言われたくないね……いであっ!？」

赤丸は俺の脛を蹴飛ばして、倉庫に戻っていく。とりあえず、口止めは出来たらしい。危ないところだった。

「…………… 赤丸殿とお知り合いだったのですか」

「まあな。薄い間柄だけど」

「あの、それで」イダテン丸は何か、言いづらそうにしている。

「…………… 私は、どうすれば」

俺に聞くな。

「下に部屋を借りてるんだっけ？ とりあえず、当分はそこに住まわせてやってくれよ」

イダテン丸はマフラーの位置をずり上げた。

「家賃は請求しとけな」

返事はない。

「…………… 赤丸殿は、ヒーローを続けるそうです」

「ああ、そうなのか」

まあ、それ以外に何か出来るとも思えない。行き着くところに行き着いたのが、俺たちみたいな存在なのだから。

「フリーでやっていくというお話を伺いました」

フリー、ね。そいつが難しいから、あいつはミストルティンに入っただろうに。別のヒーロー派遣会社からのスカウトを待っているんなら、あまりにも甘い。『元ミストルティンのヒーロー』って肩書きが邪魔をするに決まってる。厄介な奴を抱え込みたいと思えるようなところは、この街には存在しねえんだよ。ミストルティンは同業者からも嫌われてそうだし。生き残ったヒーローはヤテベオ

に追われてるんだし。

「悪いな、イダテン丸。何かあったら、いつでも……あ、連絡先とか教えてなかったな」

俺はケータイを取り出す。イダテン丸が携帯電話を持っていた事に、少しだけ変な気分を覚えたが、連絡先を交換し合ってから、俺たちは別れた。ここにおいても、赤丸に蹴られるか殴られるかの二択だしな。

あつ、これノーパンじゃん！

その日の夜、組織に着くなり、俺は数字付きの同僚に話し掛けられた。

「仕事だぜ」鼻息荒く詰め寄られる。……彼は数字付きの十一番だ。既にスーツを装着している。

「え、仕事あんの？」

ミストルティン襲撃ってのは、結構でかい仕事だったから、当分は暇になると思ってたのに。

「俺が押したんだよ。江戸さんにな、今、俺たち悪の組織には勢いがあるって」

へえ、数字付きには真面目な奴もいたもんだな。

それにしても勢いか。ついてるっちゃあ、ついてるのかな。

「何するんだ？ 銀行強盗か？ それとも別のヒーロー派遣会社でも襲うのか？」

「いや、コンビニへ押し入る」

江戸さんの部屋兼、ほぼ会議室となっている部屋にエスメラルド様の数字付きが終結していた。

江戸さんは俺たちを見回した後、ホワイトボードに文字を書き込んでいく。

「今日は、十一番からの強い後押しを受け、駅前のコンビニエンスストアへの襲撃を執行する事となった」

ホワイトボードには『食玩強奪作戦』と書かれていた。……食、玩？

「十一番、作戦目的を」

「はっ」十一番が立ち上がる。

「駅前のコンビニエンスストアに、本日の深夜に納品されるとある商品を強奪するのが、今作戦の目的であります」

「いや、コンビニを襲うのは構わない。けど、何？ とある商品って。」

「質問があります」一番が手を上げる。

「許可しよう」

「……食玩とは、一体……？」

江戸さんは目を瞑った。

「十一番、説明してくれたまえ」

「はっ、食玩とは食品玩具の略であります。食品のおまけとして、玩具を添付した商品の総称であります。昨今では、そもそもおまけではなく本体じゃね？ みたいな感じになってて線引きが曖昧になってきております」

つまり、アレか。お菓子についてくるシールとかミニカーとか、そういうものか。

「ペットボトルのジュースにさ、ストラップ付いてる時あんじゃん、あれも食玩？」

「その通りです！」

「どんなものは分かった。」

「……え、俺たちさ、お菓子のおまけを奪いに行くの？」

「その通りです！」

今日の十一番は絶好調である。ふざけるなよ。

案の定、他の数字付きはぶつぶつと文句を垂れていた。そりゃそつだ。もしそこでヒーローに捕まってみろ。『え？ こいつらおもちや欲しさにやらかしたの？』とか思われちゃうじゃん。嫌過ぎる。

「十一番、説明してくれたまえ」

「はっ。お菓子のおまけとは言いますが、食玩はコレクション性が高いものなのです。特に、実際に開けるまで何が入っているか分か

らないブランド式のものもコレクターの射幸心をくすぐります。また、企業側が消費者の購買意欲を高める為に、あえて混入率を低くしているアイテムがあります。これはレア、シークレットと呼ばれ、ネットオークションでも高値で取引されているのです。物によっては、通常価格の数倍、数十倍の値が付く事もあります。更に、地域限定、期間限定、特定の店限定、イベント限定の商品もあり、コレクション性に拍車を掛けていると言えましょう」

江戸さんは口を挟もうとしたが、十一番の熱気に押されて黙り込んでいた。

「食玩とは、単なるおもちゃに非ず。コレクターと言うのは、金に糸目をつけません。おもちゃだから分かりづらいのかもしれませんが、美術品や貴重な食材と同じレベルのものだとお思ってください」

あー、何となく分かるかもしれん。確かに、上手いのか美味しいのか良く分からんものに金を払う奴らってのは同じだな。おもちゃも絵も同じだ。

「では、どうでしょうか？ 食玩を集めて、その中からレアなアイテムを売り捌けば、エスマラルド様部隊にとって無駄にはなりません。重要な資金源となるのでは？」

「売買ルートはどうするつもりだね」

「それもお任せを。私と、とある有名オークションサイトの管理人とは知己の間柄です。念を入れて、そこには信頼出来る者も潜り込ませていきます」

……趣味だな。そうに違いない。作戦とかあんま関係ないだろ。

「……しかし十一番、その食玩というのは、何もこの街だけに流通している訳ではないだろう。それに、そのコンビニだけに納品されるとも限らない筈だ。希少性の観点から言えば、強奪したところでそうでもないような気がするが」

「ご安心を。既に、この街の商品は店頭に並ぶと同時に私のチームが買い占めておきましたから。とある人気アニメ、そのアニメのキャラクターフィギュアが入った新発売の商品ともあり、売り切れが

続いております。少なくとも、この街では今回襲撃するコンビニ以外に納品の予定はありません。向こう一ヶ月は品切れが続く予定です」

「ええっ!? アホだろお前! 大人げねえぞ!」

「大人買いと言っていただきたい」

駄目だこいつ。ただのマニアじゃねえか。

アレだろ。金を使い切ったから、組織の力を借りて食玩を集めたって気持ちが見え見えじゃねえか。江戸さん、却下です。こんな奴の口車に乗せられちゃ駄目です!

「……十一番、その、アニメとやらのタイトルは何だ? 言ってみたまえ」

「はっ、『魔法少女プリプリガールズ セカンド』です」恥ずかしげもなく言いやがった。

「許可しよう」ええっ!? 嘘だろ!

俺たちは『考え直してください』と、目だけで訴える。が、江戸さんは腕を組み、難しそうに唸るのだ。

「そのアニメは、エスメラルド様がお気に入りのもなのだ」

あっ、江戸さん、エスメラルドポイントを上げるつもりだ。

上からの指示には逆らえん。俺たちは(十一番を除いて)釈然としないながらも、ワゴンに乗り込み、地下の駐車場を出発していた。今回は数字付きだけで襲撃を行う。まあ、コンビニだし。納品のトラックが来たところを襲って、商品をしこたま頂くって簡単なものだ。

「ヒーローと戦わされるよりマシだな」

「違うない。……でもよう、おもちゃだぜ?」

「しかも女の子向けのアニメだぜ?」

「やってらんねえ! おい十一番っ、ちゃんと分けるよ! それで俺らの人形も売ってくれよ」

窓の外を見つめていた十一番は、低い声を放つ。

「人形ではない。フィギュアだ」

「どっちでも同じだろ」

「死ねクズが」

「この街のガキどもに頭下げて回れ」

十一番は何も言わず、再び窓の外に目を遣った。

仕事は呆気なく終わった。トラックが荷台を開けた瞬間に飛び出し、『プリプリガールズのフィギュアはどこだ』と迫り、商品を奪って、逃走。成功。

車の中では、商品の鑑賞会が始まっていた。数字付きは箱を開けて、プリプリしたキャラクターを手にとって眺めている。大の大人が狭苦しいところに集まって、フィギュアを見つめているのだ。

「へー、思ってたより良く出来てんだな」

「なあシークレットってどれよ？」

十一番は難しそうな顔で俺たちを見ている。

「遊んで壊すなよ。ダブった奴は売るんだからな」

「そんで山分けな。あ、江戸さんには幾ら渡すんだ？」

「三割くらいを渡そうと思う」

「ふーん。まあ、十一番に任せるわ。おっ、この子かわいくね！？」
思ってたより楽しくてびっくりだ。

「あ、パンツはいてんだ」

全員が持っていたフィギュアをひっくり返して、スカートの中に目を遣った。

「あっ、これノーパンじゃん！ おい十一、十一、シークレットだろこれ！」

「いや、ただの彩色漏れだろう。……しかし、これは俺が預かっておこつ」

「ええい俺のあかりちゃんに触るなっ殺すぞ！」

フィギュアの取り分とか、俺の当たった子が可愛い、いや俺の子が一番だとか、そういう愚にも付かない話をしていたら、とつくに朝を迎えていた。始発が動き始めて、俺はようやくアパートの前まで戻ってきた。

「ただいま」鍵を開け、扉を開ける。レンはまだ眠っていた。俺も寝るとしよう。フィギュアの箱が入ったビニール袋を机の上に置き、「くあ……」

あくびをして、既に敷いてある布団に潜り込んだ。

チャイムが鳴っている。

でも眠たいから無視する。

「お兄さん、お兄さん」

レンに揺さぶられた。お前が出るよ。……あ、いや、出るなって言っただけ。留守番してる時は、俺以外の電話にも出なくて良いとか、面倒な事言っちゃったんだっけ。

「あー、今、何時だ？」

「あは、朝のね、八時」

「はええよ！」

俺はもぞもぞと起きる。布団を退かして、顔も洗わないまま玄関に向かった。誰だか知らんが、くだらん用事だったらぶん殴ってる。

「あ、また鳴らされちゃった」

「しつこい野郎だ」

扉を開けて、思い切り睨んでやった。

「隣に引越してきました、よろしく」

扉を閉めた。

めちやくちやノックされる。めちやくちやチャイム鳴らされる。

どんだんどんぴんぽんぴんぽんるっせんだよ！

「お兄さん？」

「……ちよつと待ってる」

サンダルを履いて部屋の外に出る。そこにいたのは、赤丸夜明だった。何で？ 分かんない。まだ俺は完全に目覚めていないのか？

「挨拶しない奴はクズの極みじゃ」

やっぱり赤丸だった。

「夢なら覚める！」

「まだ寝ぼけとんの？」

「……てめえ、何の用だ。どうしてここにいやがる」

言つと、赤丸はふふんと鼻で笑う。

「越してきたつてゆうたけどな。朝からやーやーと、こまい男じゃ」

「冗談だろ？」

赤丸は左隣の部屋を指差した。確かに、そこは前から空いていたが。……表札を見ると、しっかりと『赤丸』と書かれている。彼女は口の端をつり上げた。好戦的な笑みである。

「引越しそばはやらんけどな」

「誰が食つか。……どういっつもりだよ」

わざわざ俺の隣に引越してきやがつて。何を企んでやがる、このアム。

「俺はな、一応、お前を助けてやったんだぞ」

「こつしたら、簡単には裏切れん。違うか？」

「見張りつて事かよ」

「縹野に世話なるんも、悪う思うとつたしな」

渡りに船みたいない方しやがつて。畜生。こんな事になるんなら、あんな事するんじゃなかつた。

「聞きたい事もあるし」

「何だよ、それ」

「お前はどうして掛け持ちなんかしとるんじゃ」

どうしてって、お前、そんなん決まってるんだけ。

「金だよ。それしかねえだろ」

「プライドはないんか」ねえよ。

「正義は、ないんか」……ねえよ、んなもん。つーか、そんなのどこにあるってんだ。誰が持つてるってんだよ。

「お前だつて同じだろ」

言い切る。

赤丸は僅かに怯んだように見えた。

「ち、違う。うちは、お前とは……」

彼女はこつちを見据えたまま言いよどむ。

「ま、余計な口さえ利かなけりゃ、何だつて良いけどよ」

「お前なんか……」

「あ？」

声は震えていた。俯いていた。あの日の夜みたい、弱々しく見える。赤丸夜明は、手を開き、閉じたりするのを繰り返す。

「お前なんぞに、助けられとおなかつた」

「俺なんかに助けられたのはお前だよ」

腰に蹴りが飛んできた。その攻撃を予測していなかった俺はまともを受けてしまう。その場に蹲り、赤丸を見上げた。

「てっ、めえ……！」

「這いつくばってんのがお似合いじゃ」それだけ言って、赤丸は自分の部屋に戻ってしまう。くそ、はったりじゃなくて、マジで越してきたってのかよ。ありえんぞ、この状況。

いやあすごい！　すごい爆発だった！

イダテン丸と赤丸。

ひよんな事から（ひよんって、すげえ便利な言葉だな）二人のヒーローと出会い、関わってしまった。悪の組織とヒーロー派遣会社を掛け持ちする俺の二重生活がバレてしまいそつで、朝も中々起きれない。

「寝不足なんだよなあ」

「口を開くなり、何をやる気のない事を」

社長が溜め息を吐いた。俺はテレビを見ながら、あくびを一つ。

「ねえねえ、今日はどんなお仕事をするの？」

「……今日は、ピラ配りだよ」

九重とレンはアニマル図鑑と一緒に見て遊んでいた。

「今日も、だろ」くそ面白くもねえ。

「今日は何だ？　またピザ屋の宣伝か？　それともパチンコか？」

「コンビニよ」

車椅子を動かし、社長はテレビを消す。

「アルバイトが足りないから、募集のチラシを配って欲しいんですけど」

「んなもん、どこだって人手不足だよ」

人手がないからってヒーローを使う奴がどこにいるか。そしてお前だ、お前。簡単に使われてんじゃねえぞ。

「俺はやだぞ。ピラ配るだけならお前からやってこいよ」

「カラーズの宣伝も出来るんだから」
知らんわ。

「つーか、いきなりピラ配りだあ？　オープニングスタッフでも雇いたいのかよ？」

「違うわよ。何でも、最近その店が悪の組織の襲撃を受けたらしくて、アルバイトが大勢辞めていってしまったんですって。尤も、その事件は単なる引き金ね。前々から辞めようと思っていたところに、それらしい事件が起こってちょうど良い。みたいな考え方のスタッフがいたんじゃないかしら」

コンビニ。襲撃？

「……襲撃って大丈夫なんか？ 店ん中がぐちゃぐちゃに潰されたとか」

「商品を強奪されたと聞いているわ。それ以外に被害はゼロとも。私には分からないけど、お菓子のおまけみたいなおもちゃを狙った犯行らしいわね」

間違はなく、エスメラルド部隊の仕業である。つーか俺だった。あの後、調子に乗って何度か襲撃仕掛けたし、別の店も狙っていたのである。ちなみに、数字付きの控え室にはその時のフィギュアが飾られており、薄汚い部屋は薄ら寒い部屋に様変わりしていた。

「よし、しっかり宣伝してやるか」

「わー、お兄さんやる気だー」

「いきなりどうしたの。コロコロと考えを変える男ね、あなたははっはっは。」

依頼をしてきたコンビニの店長はやつれていた。三十路の、働き盛りの男である。彼はやつれきっていた。頬骨が薄っすらと見えるくらい。流石に可哀想な事をしたような、そうでもないような。…
…当分はここを狙うのはよそう。数字付きの奴らにも言うっておかないと。

で、気持ちを切り替える。

俺と社長はそのコンビニの前でチラシを配っていたのだが、

「なあ」

「何よ」

道路を挟んで向かい側にもコンビニがあったのだ。

「どうしてさ、コンビニってコンビニの近くに建つのかな。しかもアレ見るよ、同列の店だぞ」チェーン店という奴である。

「これって嫌がらせじゃねえの？」

「私に言われても困るわ。それより、店の中を見てみなさい」

指を差されて、店内に目を遣る。カウンターには虚空を見つめる店長がいた。客はいない。立ち読み客すらいない。店長が放つ独特の鬱屈した空気に吞まれ、誰も寄り付かないのである。

「あれでは、幾ら募集を掛けたところで無駄な気がするわ」

「じゃあ帰っちゃまうか」俺は路肩に止めてあるタクシーに目を遣った。車内には九重と、昼寝をしているレンがいる。

「場所を変えた方が良くないじゃねえの？ 駅前とかさ」

「ここでチラシを受け取ってもらっても、あんな店長がいたんじゃない。なあ。」

「駅前はまだ良い場所を取られているのよ」

「じゃあせめて、店の前ってのはどうにかしようぜ」

「じゃ、もう少ししたら……あら？」

「どうした？」

社長は向かい側のコンビニを見ていた。俺も彼女につられる。

「んー？」 何の変哲もない普通のコンビニだ。俺たちのいる店との違いは、客がいるかどうか。この一点である。

「あそこの三人組、怪しく見えるわ」

三人組って言うと、ああ、今軽トラックから降りてきた奴らの事か。だけど、別に怪しくは見えん。作業用のつなぎを着ているのでどっかの現場から昼飯でも買いに来たんだろう。

「ま、ゴーグルを着けたままってのは面白いセンスだよな」

「袋を被るヒーローもいるくらいですものね」

「そりゃあんたのせいだろっ」被りたくて被ってる訳じゃあない！

しかし、こっち側のコンビニには、本当誰も来ないな。店の前だつて中々人が通ってくれない。と、ありゃ、店長？

「おい、あの人が何してんだ？」

突如、店から出てきたと思っただらガードレールに腰掛け、向かいのコンビニをじっと見つめる店長。はつきり言って気味が悪い。

「道路に飛び出しそうになったら止めなさい」

ありえない話ではなかった。

その時、俺の鼓膜を轟音が襲った。耳鳴りがして、持っていたチラシを取り落としてしまう。社長を呼んだが、彼女は辛そうに目を瞑っているだけだ。こっちの声は通っていない。

何事だ？

音のした方、つまり、向かい側を見ると、コンビニの前にバズーカみたいなもんを担いだ奴らがいた。さっきの三人組、その内の一人である。遠目からでも分かるほど、ガタイが良い男だ。

コンビニのガラスはバズーカらしきもので爆発させられている。

ぶっ放した奴らは高笑いを上げて、店内に侵入し始めた。これっつまさか、コンビニ、強盗？

「よ、よ……」

音が戻り始める。耳はまだ少しだけ痛んでいたが。

ガードレールに腰掛けていた店長は、そこから歩道に飛び降りて、ガッツポーズを作る。

「よっしやあああああああああ！」

「はあああああああ！？」

「よしっ、よし！」

店長はさっきまでの鬱々とした空気はどこへやら。飛び跳ねる勢いでめっちゃめっちゃ喜んでた。つーか、何？ まさかこの人、向かいのコンビニが襲撃されたのを喜んでんのか？

「……中々のクズね」

「奇遇だな。俺もそう思った」

「君たちい！ 今の見た！？ 見たよねえ！？ いやあすごい！すごい爆発だった！」

笑いながら、店長は店の中に戻っていく。

「しゃっ、社長」九重が走ってくる。

「あの、今のって？」

「向かいのコンビニが何者かに襲われているわ」

現在進行形。店内からは客が逃げ出してくる。今度は銃声が聞こえた。

「めっちゃめっちゃ派手にやらかしてんじゃねえか」俺たち悪の組織でも、あそこまではしねえぞ。

「あっ、レンはどうした!？」

あいつをほっといたら、何をするか分からんってのに!

「……ね、眠ってます」

助かった。けど、今の音で起きないってどういう事だよ。俺が夜中帰って来た時には、ちよっとした物音でも目を覚ますのに。

「子供は寝て育つものね」

「お前だつて全然起きなかつたじゃねえか。ガキだな、ガキ」

「あら、何の話？」

もう良いよ!

「社長、どうするんですか？」

「そう、ね」社長はチラシの束を膝の上に置き、俺と、向かいのコンビニを見比べる。

「九重は車に戻りなさい」

「……分かりました」

「青井はあの強盗を捕まえてきなさい」

「分からないぞ」

このアマ、やっぱおかしい。

「お前、さっきの見てないのか？」

「見たわよ。聞いたわよ」

じゃあおかしいだろ! あのなあ! 真昼間からバズーカだのピストルだのぶっ放すような連中だぞ! 生身の俺がしゃばっても

「誰だお前バーン!」 「うわー!」 で死んじゃうよ!

「諦める。ほら、こっちの店長だつて喜んでただろ」

「あつちの店長は喜んでいないわ。せめて、様子だけでも見に行っ
てきなさい」

「……様子を見るだけだな？」
社長は頷く。

今日の俺は何も持ってきていない。グローブも、爺さんからもら
った武器を入れてあるバッグも、家に置いてきたままである。

「じゃあ、こつからでも充分だろ」

様子見だけならわざわざ行かなくても良いじゃん。

「あ、嘘よ。様子見だけってのは嘘。早くどうにかしなさい。それ
で、上手くいったらウチを宣伝しなさい」

「嘘ってのはもつと優しいもんだろ！」

「何を言っているの、あなたは」

そうこうしている間に、店からはあの三人組が出てくる。何故か、
段ボール箱を抱えていた。彼らはトラックの荷台に大量の段ボール
と武器を積み込み、小さい二人が運転席に。でかい男は荷台に乗っ
て、

「また撃つわ」

「え？」

バズーカをぶっ放した。……が、音だけである。何も出てこなか
った。そして、軽トラックは走り去ってしまう。結構、あつという
間の出来事だった。

「何、今の？ 不発？」

「挑発のつもりじゃないかしら」

「……誰に対しての？」

社長はこつちを睨む。一々聞くなどでも言いたげな顔だった。

俺たちの仕事は終わった。店長は向かいの店が潰れたのを大層喜
び、『新しいバイトは当分必要ない』と言ったのけたのである。

「だったら最初から呼ぶなってんだ」金はもらったらしいから、そ

れだけが救いだ。

九重が運転するタクシーの中、俺は毒づいていた。

「やりきれないわね」

溜め息を吐く社長は、さっきのコンビニのチラシを未練たらしく見つめていた。

「あの三人組が来なければ良かったのよ」

ま、あの店長はそうなるのを望んでいたみたのだがな。しかも、最高のタイミングで外に出てきて一部始終を見ていやがった。案外、強盗を手引きしたのは彼かもしれない。チェーン店なんだから、向かいのコンビニの内装、内情、知っていたとしてもおかしくはないっばい。

「白昼堂々と、何者なのかしら」

何か、俺は奴らをどっかで見た事があるような気がしている。少なくとも、一度や二度は確実に。どこで、いつ見たのかは思い出せないが。

「あいつらを追い掛けるとか言うんじゃあないだろうな」

「そんな依頼が来れば受けるわよ」どんな依頼だって、こいつは嬉々として引き受けるに違いない。

「……でも、おかしいわね。何故だが、知っているような気がするのよ」

「あの三人を、か？」

「ええ。既視感とは、違うような気もするけど。どうしてかしら」社長もか。俺も、もしかしたら、奴らの犯行をどこかで見ていたのだろうか。あの手口、あの手際、明らかに初犯ではない。派手にやってやがったのは、捕まらねーよっていう、自信の表れだろうか。やけに逃げ足が速かったように思えるし。

「どうしてだろうなあ」

タクシーはカラーズの前で停まった。今日のヒーローはここまでである。これから数時間後、俺は悪の組織の戦闘員として働くのだ。

この街には星の数ほどいるだろう

悪の組織の控え室でだべっていると、ふと、昼間の三人組の事を思い出した。なので、さつきから女の子向けキャラクターのフィギュアで遊んでいるクズどもに声を掛けてみる。

「なあ、それ、スカート履いてなかったか？」

ピンクのふりふりしたドレスを着ていた魔法少女っぽいフィギュアにはスカートがなく、白いパンツが露わになっていた。何それ？

「ああ、改造したんだよ」

「改造？ ……剥がしたただけだろ」

くつくつと笑うのは四番の男である。彼は机の上に俺たちの戦利品を並べて、口の端をつり上げていた。傍目から、どころか、上下左右前後、全方位どこから見ても変態である。

「これから弄ってくんだよ。ああ、可愛いなあ、何を履かせようかなあ」

十一番め、着々と仲間を増やしつつあるな。つーか、お前らもノリが良すぎるんだよ。

「それよりさ、三人組の強盗を知らないか？」

「ああ？ 興味ねーよ、そんなの」あつそ。

と、また誰かがやってきた。入ってきたのは大柄な男。数字付きでは三番に当たる奴である。

「うーす」

「おう。お前ら、まだそれで遊んでんのか？」

三番は、四番を侮蔑の目で見ていた。

「なあ、三人組の強盗を知らないか？」

「三人組い？」 三番は荷物を自分のロッカーにしまうと、腕を組んで低く唸り始めた。

「そんな奴ら、この街には山ほどいるだろ」
そりゃあ、そうだよなあ。

「けどさ、ツナギ着てて、ゴーグルしてて、軽トラ乗り回してバズーカとかぶっ放す三人組なら限られてくるんじゃないかねえの？」

「何だあ、そんな奴らがいんのか、よ……………何か、見た事あるよな」

「だろ!？」

「やっぱりそうだ。俺たちは見ている。悪の組織の仕事中に、そいつらを見ていたのだ。そうに違いない。」

「けど、誰だ？ どちらの組織の怪人って訳じゃあなさそうだし。」

「いや青井よ、お前はそいつらをどこで見たんだけ？」

「あー、まあ、昼間に街ぶらついてたらさ、ちらっと。で、気になったもんだから」

「江戸さんに聞くのが手っ取り早そうじゃねえか？ 今日のはアレだろ、どうせ仕事もないんだろっし」

「あれ？ そうなのか？ 俺はてっきり、またコンビニを襲撃するもんだと思ってたけど。」

「十一番が言うには、目ぼしい食玩を殆ど持ってたから、次の納品まではお休み、だよ」

そう言って、三番は部屋を見回す。至る所に、フィギュアの箱が散らかり、フィギュアが飾られていた。何を隠そう、俺のロッカーにも幾つかのフィギュアがある。いずれオークションなりに売りに出すんだろっが、うん。少し寂しくなるな。

「へえ、知らなかったぜ。じゃ、そうするか、な」俺は立ち上がり、控え室を出て行く。

江戸さんは部屋にいた。彼は書類を睨みつけるように見て、頭をくしゃくしゃと掻いていた。急がしそうである。今、質問をするのは迷惑ではなからうか。しかし、部屋に入ったばかりで黙ったまま

出て行くのはどうだろう。何かを話さないと失礼ではないだろうか。いやしかしここで仕事の邪魔をするのも。

「ん、やあ、青井君。どうしたんだ、突っ立っていないで座りたまえ」

「急がしそうに見えたものですから」

「ああ、これか」江戸さんは書類を指差す。

「気にしなくても良い。何か、質問でもあるのかな？」

和やかに言うと、江戸さんは冷蔵庫からペットボトルのジュースを取り出す。俺は紙コップを江戸さんの前に置き、

「俺もご相伴にあずかっても？」

自分のコップをキープした。

「勿論さ」

紙コップに、とくとくとアップルジュースが注がれていく。小さな器の、小さな水面が揺れ動く。

「十一番の提案した作戦だが、上手くいっているらしいじゃないか」「ええ、それはもう」皆、食玩に夢中だ。

「良い事だ。こうして、一人一人が策を立て、組織への忠誠を高めてくれれば、私としても嬉しい」

江戸さんは美味そうにジュースを飲み干す。喉が渴いていたのだろう。良い飲みっぷりだった。

「話というか、あの、三人組の強盗を知っていますかって聞きたかったんです」

「三人組の？ そう、だね。茶化すつもりはないが、この街には星の数ほどいるだろう」

その通り。俺は昼間見た奴らの特徴を江戸さんに伝えた。彼は暫くの間、空になったコップの底を見つめる。

「……聞いた事は、あるな。見た事は、どうだろうか」江戸さんは難しそうな顔を作った。

「俺も、どこかで見たような気はするんですけど」

「どうにも、思い出せない、か」

マジで、誰だったっけ。

「しかし、思い出せないと言う事は、思い出さなくても問題ない事だろう」

「そういうものですかね」

「言い訳になるが、思い出せないものはしょうがない」

うーん。江戸さんにも思い出せないんだから、俺に思い出せる筈はないな。

組織からの帰り道、俺の頭を占めていたのは、明日の朝飯の事だった。オムレツが食いたいなーとか、やっぱり朝は味噌汁も良いよなーとか、そういった事である。

なので、俺は気付かなかったのだ。

翌朝、社長から電話が来た。時刻は九時。朝飯を食って、ぼんやりとテレビを見ていた頃である。出ようかどうか迷ったが、レンが『でんわでんわ』とうるさいので、仕方なく出る。

「あい、もしもし」

『仕事よ』

「そんな気はしてた」だから出るかどうか迷ってたんだよな。

『急で悪いのだけど、来てくれるかしら』

何か、社長は俺に遠慮しているというより、戸惑った様子である。

「厄介な仕事なのか？」

『昨日、コンビニが強盗に遭ったでしょう？ その店長からの依頼なのよ』

「……チラシでも配れってのか？」

『だったら分かりやすく助かるのだけど』

一体、何だっただけ？

レンと一緒にカラーズへ行き、九重のタクシーで件のコンビニへと行く。依頼を受けた者だと言うと、店長らしき人物は、俺たちを控え室に通した。

「向かいのコンビニ。あそこの店長を叩いて欲しい」
「は？」

店長は、三十路くらいの男である。眼鏡を掛けており、ばりばり仕事の出来そうな人に見えた。そんな奴が、叩け、だあ？ 訳分かんねえぞ。

「詳しく聞かせていただけるかしら」

社長が言うと、店長の男は眼鏡の位置を押し上げた。

「……昨日、強盗に遭った。知っているかい？ 新聞にも小さく出ただけだ」

俺は何も言えなかった。苦笑いを作るのすら諦めた。

「強盗は三人組の奴らでね、この店を……いや、言わなくても分かるか。とにかく、むちゃくちゃにして、商品を箱詰めして逃げた。いや、良い。それはもう良い。警察がそいつらを追っているし、多分、ヒーローだって……」

その辺は誰にも分からない。ヒーローってのは基本的に勝手なものなのだ。派遣会社のヒーローは、依頼さえ受ければ仕事をこなそうとする。しかし、フリーの奴らは分かりやすく、金目当てで動く。単なる強盗よりも、悪の組織の怪人を狙うのが習性だ。

「君たちにお願ひしたいのは、あいつだ。奴を問い詰めて欲しいんだ」

店長は歯を食い縛る。奴、と言うのは、恐らく、向かいのコンビニの店長の事だろう。昨日、俺たちに仕事を依頼した、あの男である。

「あいつが、強盗を頼んだんだ。奴の店はこないだからどこかの組織に襲撃を受けていてね、アルバイトもいなくなるし、売り上げはガタ落ちだ。ウチの店はその分、客が流れてきていてね。それを妬

「なんだよ、奴は」

被害妄想も甚だしいな、おい。強盗に襲われたんだ、気持ちは分かるけど、そんなもんをヒーローに頼むかあ？ 何を言ってるんだ、こいつは。

「問い詰める、とは。具体的に、私たちに何をさせたいのですか？」
社長は慎重に言葉を選んでいうようだった。

「奴が汚い真似をしたんだ。その証拠を掴んで欲しい。出来るなら、鉄槌を。私は、あいつが許せないんだ」

「……証拠もないのに、問い詰めると？」

「一歩間違えりゃ、訴えられるのはあんただぞ。そしてとばっちりを食うのは俺たちだ。」

「方法は問わない。要は、奴を痛い目に遭わせられれば良いんだから」

ヒーロー派遣会社は、警察でも弁護士でも探偵でもない。何でもない。依頼人から仕事をもらって、働くだけなんだ。だから、仕事は選ぶ。やべえ橋渡らせられそうなら、そいつを断るのは、社長の意思による。つーか受けるな。面倒だし、迷惑極まりねえぞ。まあ、社長だつて渋ってるみたいだし、この依頼、悪いけど「お引き受けしましょう」「あー引き受けちゃう？ マジかー。」

「ちよつと待てコラ」

「何よ？」 社長が俺を睨む。

「あんた、分かってんのか？」

社長は車椅子を動かして、俺の耳元に口を近づけた。

「分かっているわ。要は、私たちに害が及ばないように、あの店長に痛い目を見せれば良いのよ」

「引き受けてくれるんだね？」

「勿論ですわ」営業スマイル。

「報酬は後払いと言う事で、構いませんね？」

「ああ、良いとも。それじゃあ、よろしく頼むよ。それから、くれぐれもこの依頼については……」

「ええ、勿論。秘密は守ります。……九重、書類を。あ、ここにサインをお願いします。はんこがなければ署名でも結構ですわ」

コンビニを出た後、俺はタクシーの助手席で深い溜め息を吐いた。「お兄さん、お仕事は終わったの？」

「これからだよ。はあ、やってらんねえ。つか、仕事受けてなかったんじゃねえか」

「だって、気味が悪かったんですもの。昨日の今日で、殆ど隣同士のコンビニから依頼を受けるなんて、怪しいと思わない方がおかしいわ」

なるほど、俺は何かあった時の用心棒みたいなもんだ。たつて訳かい。

「……結局、依頼を受けてしまいましたね」九重は窓の外を見つめている。何か、思うところでもあるのだろうか。

「しかし、ヒーローに八つ当たりをさせるたあ、見上げた根性だな」依頼は依頼よ。それに、可能性はゼロじゃないもの」

「可能性って、何の？」

社長は二軒のコンビニを指差す。

「あの、躁鬱の店長が強盗と繋がっているという可能性よ」

それは俺も考えた。けど、首を突っ込むとは思ってなかったぜ。

「あはっ、良く分からないけど、そっちの店長さんから話を聞けば良いんじゃない？」

話してくれば、そいつが一番手っ取り早いんだがな。

「訴えられるのはごめんだぜ」

「私もよ」だったらどうする。

「……その、強盗から話を聞けば良いんじゃないでしょうか」

「アホか。だったら話聞くまでもねえよ。捕まえてボコボコにしてやりゃあ良い」

話を聞くならその後だ。

「けど、一番分かりやすい方法なのは確かね」
「分かりやすいだけで、簡単じゃあないだろ。どうやって見つけりや良いんだよ」

社長は笑う。意地悪そうな顔になっていた。ああ、嫌な予感がする。

「探すのよ」

「誰が？」

「私たちが。主にあなたが」

「どうやって？」

「どうやってもよ」

「具体的には！？」

「頑張つて」

「頑張れねえええよおおおお！」

強盗を頑張つて探せだと！？ 頑張つて探して見つかるなら！
それこそ警察だつて探偵だつていらねえよ！

「やってられつか、俺は降りるぞ」

「歩いて帰るの？」

「そういう意味じゃねえよ！」

九重とレンは耳を塞いでいた。腹が立つので、もっとでけえ声を上げてやる。

「冗談よ。あなた、からかって面白いから」

「年上をからかうな」

「一つ、考えがあるわ。あっちのコンビニを張り込むのはどうかしら」

あっちって、昨日の躁鬱店長のコンビニか？

「犯罪者は犯行現場に戻ると言うじゃない。それに、もしも昨日の彼と繋がりがあるのなら、あの強盗が姿を見せる可能性もあるわ」

「そうかあ？ 連絡くらい、電話か何かで取り合つてんじゃねえの？ わざわざ会つて話す事なんぞ、そうないぜ」

「そう、ね。店長にはないけれど、あの強盗たちにはあるかもしれ

ないわ」

「……何？」

社長はくすくすと微笑むだけである。

「あの店長を問い詰めるのと、ここで張り込むの、どちらがお好みかしら」

答えるまでもない。俺は助手席に、深く座り直した。

ボクたちはスーツに頼ったりしない

「……俺は行くぞ」

「ええ、仕事でしょう？　いってらっしゃい
社長に手を振られる。」

「お兄さん、頑張ってきてね」

「……ファイトです」

九重とレンも手を振ってくる。

こいつら、本当にここで張り込みを続ける気か？

「何かあったら電話掛けて来いよな」

「分かっているわ。あなたこそ、仕事とやらが終わったら戻ってきてなさいよ」

はいはい。

俺はタクシーを出て歩き始める。……タクシーは、例のコンビニが見える道路に止められていた。あいつら、何だかんだでガキだからな。レンはちょっとしたお泊り感覚でいそいだから、すぐに寝ちまうだろう。社長もガキだし、一回寝たら中々起きないし。九重だけじゃあ、何かあっても頼りない。

……はいはい。

組織に着くと、仕事があるのかどうかをすぐに確かめた。

「ないんだな？　本当に、マジで！　帰っても大丈夫なんだな！？」

「さ、さあ？　大丈夫じゃねえの？」

「よしっ」

「何？　何かあんのお前？」

終電ぎりぎりです。駅前に帰ってくる。ケータイを気にしながら、俺はタクシーに戻ってきた。運転席の窓を軽くノックすると、九重が小さく笑って、そこを開ける。何か、めちゃくちゃ疲れているみたいだった。

「……お帰りなさい。早かったんですね」

「まあな」ちよつと心配だったからなんて、口が裂けても言いたくない。

車の中を覗きこむと、案の定、ガキ二人が寝息を立てていた。

「……さつき、お休みになったところですよ」

「何かあったか？」

九重は緩々と首を横に振る。

「そうか。お前も寝てて良いぞ。俺が見とくから」

「大丈夫です。起きてられますよ」

気を遣わなくても良いのに。

「じゃ、何か買ってくる」

「……え、コンビニで、ですか」

俺は二軒のコンビニを見比べる。

「ちよつと遠出してくる。何か、欲しいものはあるか？」

「じゃあ、あの、お茶を」

「それだけ？」

「太っちゃいますから」九重は照れくさそうに笑った。

女子高生がお前は。そんなん気にしなくても良いだろ。どうせ元からなよなよしてて細いんだし。

この辺にはコンビニがたくさんある。ついさつき気付いた事なのだが、びっくりだ。一軒で充分じゃねえの？ まあ、こつこつ時は助かるけど。

「おう、戻ったぜ」助手席に座り、ビニール袋からお茶のペットボ

トルを取り出す。

「……………ありがとうございます」

「これもやるから食べよ」

俺は肉まんを手渡そうとした。が、九重は驚くばかりで受け取るうとしない。

「あ、あの……………」頼んでないってか？

「お前は、細い」

「へっ？」

ペットボトルを取り落とし、それを拾おうとした九重はハンドルに頭をぶつける。蓋を開けてなくて良かったな。

「もつと肉を食べ。それで肉を付ける」

「……………は、はあ」困った顔で肉まんを受け取られる。

「俺もこれ食ったら寝ようかな」

「えっ？ ね、寝ちゃうんですか？」

だってさー、眠いもん。第一、強盗なんか都合良く出てきやしねえって。

「……………あ、トラックが」

九重は例のコンビ二の前に停まった軽トラックを指差した。

「空似だよ、空似。あんなトラック、どこにだってあるっつーの」

「でも、荷台に大きい人が。あの、ツナギとか着てますけど」

「そ、空似だろ、空似。どっかの現場から……………」

「こんな時間にですか？」

「うっ、うるさい！ 一々口答えするな！」

「……………しかも三人組です」

「嘘だろ」うっ、うわあゴーグルまでどんぴしゃり！

えっ、これ行くの？ 行かなきゃ駄目なの？

「社長を起こさない……………」

「まっ、待て。まだ起こすな」

「どうしてですか」

九重は疑い深そうに俺を見る。

「はっはっは、俺一人で充分だからだよ」

今社長を起こせば何を言われるか、俺には分かっている。ここでやり過ぎすのだ。九重が何を言おうとも、強盗を見過ぎすのである。

「……信じて良いんですか」

「何だお前。お前、その目付きは何だ。俺を信じていないって言うのか？」

「信じてます」うつ。普通に言い切られてしまった。

「青井さん、文句ばかり言いますが、仕事はする人ですもんね。そういうところは、かつこいいと思います」

「ばっ、や、やめる！ 俺を褒めるな！ 尊敬の眼差しっぽいのをこっちに向けるなああああ！」

俺はコンビ二の前まで来ていた。九重の目に耐えられなかったのである。何だあのきらきらした瞳は。人間のものとは思えん。

「くそっ、こいつらのせいだ」

軽トラックのタイヤを蹴飛ばす。こいつらが来なけりや、そもそもあんな真似しなけりや、俺が危ない目に遭う必要はなかったのである。ム力つくから、ちよっと悪戯してやろう。

気が晴れた後、俺はコンビ二に足を踏み入れた。店員も、客もいない。あの三人組はどこだ？ 仲良くトイレに行く訳ないだろうし……バックルームか？ どうする？ 突っ込むのか？ けど、不法侵入にならね？ つーか、全然知らん人がいたら俺すげえ怪しいじやん。問答無用で通報じやん。だがしかし、ここで怖気づいて何もしなかったら社長に怒られる。

「……トイレと間違えたって事にしよう」うん、そうしよう。大丈夫。そうに違いない。

扉に近づいた時、声が聞こえてきた。野太い男の声である。何か、

怒鳴っているような、とにかく剣呑な感じだ。耳を済ませば、他にも子供特有の高い声と、若い男の声が聞こえてくる。そして、あの店長の焦ったような声。四つの声が聞こえてくる。

俺はゆっくりと、気付かれないように扉を開いた。ほんの少し。ちよびつとだけ。

隙間から見えたのは、ロープでぐるぐる巻きにされた店長の可哀想な姿である。彼は大男に足蹴にされていた。

ツナギに、ゴーグル。

あの、三人組だ。奴ら、何をしているんだ？

「バラされなくなかったら、分かっただろうなあ？」

「かつ、金か？ 金ならあっちのコンビニの方に……」

「違っつて」小さい奴が店長に向かって、何かを突きつける。

「ボクたちは、あんたから欲しいのさ。向かいの店からは色々もらっちゃったからね」

抜かしやがる。

「ほら、言うんだ。俺たちと組んでたのをバラされなくなかったら、な」

……三流だ。あまりにも三流過ぎる。

これで、話の流れが掴めてきたぞ。

「あーあ、指が疲れてきたなー。撃っちゃおうかなー」

「わっ、分かった！ 分かったから！」

どうやら、この店長はマジでこの三人組とグルだったみたいだな。どうやってこいつらと知り合ったのか、それとも、こいつらからこの店長に擦り寄っていったのかは知らないが。

ともかく、あの襲撃は、この店長が、この三人組に頼んでたらしい。ひでえ話だ。

そして、店長は脅迫されている。アホだ。こんな欲の皮突っ張らせたような連中と組もうとするからだ。悪人はどこまでいっても悪なのである。少しでも信用しちゃあおしまいなんだ。

あのちっこいのが持つてるのは、銃だな。すげえ、超こええ。俺

あ今生身だし、間近で見たらやべえな、ありゃ。

だけど、こっちにやグローブがある。バッグもある。……でも飛び道具には無力っぽい。やっぱスーツがねえと。

「じゃ、早くお金出してよ?」

「がはは、出せ出せ」

「こんな状態じゃあ出すに出せませんよっ」

馬鹿だな。今の内に警察呼ぶか?

と、でっかくもない。ちっこくもない、真ん中くらいの奴が移動し始める。どこに行っただかと思っただ瞬間、何か、ちっこいのがこっちを見たような気がした。

「……ん」

っーか、見てる? えっ、バレ、てる?

「兄ちゃん!」

「おうよっ!」

「しまった防カメかよっ」とんだちよんぼだ。俺は背を向けて逃げ出そうとする。が、一発の銃声が俺の足を止めた。

「あんた、どこのどいつ?」

ちっこい奴が敵意満々にみなぎらせた声を放つ。俺は振り向き、グローブを装着した右腕に力を込めた。

かなり、まずい。モロ顔出ししてるし。誰かモザイクかけて。ギリギリのでも良いから。

「あのう、トイレはどこですか?」

「あー、そーゆーのはもう遅いと思うんだけどなー」

「がっはっは! 潰せ潰せ、それでしまいだろっが」
でっかいのとちっこいのが前に出る。

「……お前ら、何者だ?」

「だから、分からない奴。あんたから答えなよ」

銃口を向けられてしまった。

「ヒーローだ」口からでまかせではない。

三人組は顔を見合わせ、意地悪そうに笑む。

「あーあーあー、そうかよ。好きなだけ笑えよ」

くそっ、この反応は分かってたけどム力つくな。

「あんた、ヒーローのくせにボクたちの事を知らないの？ それってモグリじゃん」

「はあ？」

「冥土の土産に教えといてあげるよ。ボクたちはハリマ一家、この街にその名を轟かす強盗団さ」

「はあ？」

ちっこいのは地団駄を踏んだ。

「はあ、じゃない！ ハーリーマー！ ハリマ一家！ 何だよお前

！」

「いや、そんなん知らねえし」

「スーツも着てないヒーローが生意気なんだ！」

「うっ、うわっ」商品棚に身を滑らせる。次の瞬間、幾つもの発砲音が鳴り響いた。身を低くして震えていると、足音が遠ざかっていくのが聞こえる。……あれ？

俺はプレーリードッグよろしく頭を上げる。ハリマ一家とか名乗った三人組は、軽トラックに乗り込もうとしていた。

「あははははっ、バーカ！」

「ちきしょう！」

店の外に出ると、九重がタクシーから降りてくるのが見える。邪魔だからあっち行ってる！

軽トラックの荷台にはだけえ男が乗っている。エンジンはとっくに掛かっていて、車は発進した。

「じゃあねヒーローさん！」爆発音が四つ、続けて響く。うっ、撃たれた！ 撃たれたぞ！ 俺は思わず耳を塞ぎ、その場に蹲る。

しかし、撃たれたのは俺ではなく、奴らだった。更に言うと、撃たれたのではなく爆発したのである。軽トラの、前輪と後輪が。

「なっ、何！？ 何これ！？ 兄ちゃん、兄ちゃんやばいよ！」

「がははははっ」

あつ、そうだ。そういや、タイヤんところにめんこを仕掛けておいたんだつたつけ。自分でやったもんにはビビってどうするよ。

「爆発だよ兄ちゃん!？」

「落ち着け。兄ちゃんが見てきてやつから」

「こうなりやヤケだ。走れ！」

「がつ!？」

俺は荷台に跳び上がり、大男の頭部をそのままの勢いで蹴り飛ばす。飛び降りて、運転席から出てきたところの男の腹に左腕でパンチを入れる。苦しそうに呻いちゃいるが容赦しねえ。このまま右のグローブで殴り飛ばしてやらあ！

「やめろオツ」

「なあああっ!？」

車の中からピストルを向けられる。俺は男を蹴り飛ばして、荷台の方に回った。

「がははははつ、やるじゃねえか！」

荷台の上から、巨漢が拳を振り回す。俺は立ち止まり、方向転換する。

「へっ?」

ちっこい奴は、倒れた男を起き上がらせようとしていた。俺はちっこい奴の襟を掴み、無理矢理引きずって引つ張り上げる。

「いったあああ!？ はつ、離せ！ 離せたら!」

「動くなよ、てめえら。動いたらこいつぶっ飛ばすぞ」

「へん、バーカ！ スーツもないのに何を……お?」

でっかいのと、真ん中くらいの男がこっちに視線を向けた。俺はちっこいのを持ったまま、軽トラックのフロントガラスの前に立ち、右腕のグローブで思い切り、そこを殴りつけた。ヒーローのスーツよりも柔らかいんだ。こんなもん、壊せない訳がない。

「はつ、はあああああああ!？」

放射線状にひびの入ったガラスを見て、ちっこいのは悲鳴を上げた。

「非常識だああああああ！」

「てめえらに言われたくねえよ！ 昼間からピストルやらバズーカぶっ放しやがって、死人が出るぞ」

「出ないっつーの！ ボクたちは殺しとか、そーゆーのやらない主義なんだ！ お宝だけをばーっと奪っていくスマートな強盗なんだ！」

強盗にスマートもクソもあるか。

「何でも良いよ。おら、その二人。突っ立ってねえで跪けよ」

「にっ、兄ちゃん……」

「心配しなくても良いって。てめえらまとめてブタ箱行きだ」

感謝しろ。俺以外のヒーローだったら問答無用で顔の形が変わるまでボコられるぞ。

「くそお！ 何なんだよお前！ スーツも着てないくせにっ」

ちっこいのは両腕を振り回し、宙でじたばたともがく。鬱陶しいので頭を軽く叩いておく。

「残念だったな。しっかし、てめえらこそスーツ着てるくせに弱過ぎるぞ」

「バツカじゃないの？ スーツなんて邪道さ」何？

「ボクたちはスーツに頼ったりしない。スマートな強盗だから！」
へ？ じゃあ、何？ これってただのツナギなのか？

「変な顔してるけど、あんただってスーツ着てないじゃんか。変なヒーローだけど、そこは認めてあげても良いかな」

…… あっぶねえ。思いつきりグローブで殴るところだった。

「ふーん。あっそ。ここのをえー、ケーサツ呼べ、ケーサツ」

「…… あっ、はい」九重はタクシーに戻っていく。さーて、意外と楽に済んだな。

「あーっもう！ 離せつてば変態！ 痴漢！」

「黙れクソガキが」尻を叩くと、ちっこいのはぎゃあと悲鳴を上げた。
そして、

「こっの……！」

「あ？」

振り子みたいに体を揺らして、足を後ろに突き出してくる。俺の腹に、野郎の踵がぶち当たった。

「あ、あ……」俺はちっこいのを落としてしまう。っーかそれどころじゃない。は、腹の中身が出てきそう。

「バーカっ、覚えてろ！」

頭を踏んづけられる。

「青井さん!？」

「い、いだい、いだいよう……」

痛い。痛い痛い痛いっ、痛くて痛い！「ごろごろと地面を転がっている」と、路地裏に向かって逃げていくハリマ一家が見えた。

「こ、殺してやらあ、あのクソガキが……!」

「おっ、落ち着いてください」

しかしあいつら、スーツもないのにとんでもねえ逃げ足である。

却下よ

説教と言うのは、教訓を垂れる事だったり、良く分からんもんを分かりやすく教えてくれる事を指すらしい。が、今俺が聞いている説教ってのは、小言である。つーかもう暴言とか、そういう領域のものになっていた。

「……許してくれ」

朝もはよから、俺はカラーズの床に正座させられていた。白鳥社長は非常にご立腹の様子である。

「駄目よ。スーツも着ていないただの泥棒に逃げられたですって？

おまけに、事が起きたのに私を起こさないし」

「俺だってスーツを着てないただの人間だぞ。良いじゃねえか、あの店長は痛い目見て、依頼だって達成出来たんだからよ」

「悔しいの！ スーツを着た怪人を倒してきたあなたが、どうしてあんな小悪党にあしらわれてしまったのだろうって。そんなのって、ないじゃない」

油断してたと言え、そうかもしれない。

「だから、悪かったって」

「うるさいわね。私の気が収まるまでそうしてなさい」

「いつになったら収まるんだ？」

「聞きたいの？」

いいえ、聞きたくないです。

失敗は失敗だ。忘れるのではなく、割り切って次に進もうじゃないか。失敗は成功の母である。己の中で糧と変え、新たな仕事に臨むのだ。

「怪人、退治か」

「そうよ。商店街の方で、怪人らしき者が目撃されたらしいの」
らしき？ 怪人なのかどうかはつきりさせろよ。」

「それを見たのが、ちよつと歳のいったおばあさんで」

「ババアの言う事はあてにならない。あいつら、送迎代わりに救急車
呼ぶんだもん。頭おかしいよ。アレだろ、目立ちたいとか、そうい
ういらん事を考えてんだろどうせ。」

「やってられん。お前から処理しとけよ。出たかどうかも分からん
怪人とやらをな」

「何よ、その言い方」

「うるせえなあ。レン、帰るぞ」

九重と遊んでいたレンが顔を上げる。

「お仕事じゃないの？」

「仕事になるかどうかは、これから社長が確かめに行くんだよ。な
あ？」

「って、うわ、すごい睨まれてる。」

「いや、あやふや過ぎんだろ。ちゃんと確認してから仕事しようぜ。
俺は無駄足踏ませんなよ」

「足を無駄にするくらいなら、あなたも一緒に確かめてちょうだい。
その時に怪人と出会えたらラッキーと思って」

「だってなあ、あそこの商店街って、行く度に何かあるんだよ。や
だよ。俺にとつては鬼門だね、鬼門。」

「どうせ暇でしょう。商店街で買い物して、地域に貢献してあげな
さい。ああ、そう言えば、あそこのコロッケは美味しかったわね」

「おごらんぞ」

「結構よ。九重、車を」

九重は頷き、先に外へ出て行った。俺たちはその後をゆっくりと
追いかける。何事もなければ良いなあ。お願いだから。」

商店街は、相変わらず閑散としていた。俺がコロツケを何個買ったって、ここに活気は戻るまい。

「で、怪人を見たって婆さんは？」

「九重が聞き込みに回っているじゃない。もう少し待ちなさいよ」
俺たち三人は、駄菓子屋の前の朽ちかけたベンチに座ってコロツケを齧っている。

「このコロツケ、出来立てで美味しいね」

「そうだな。おい、そんな急いで食うなよ。口元に食べかす付いてんぞ」

「あは、取って取って」自分で取れ。

「……仲が良いのね、あなたたち」

知った風な口を利きやがる。誰のせいだと思ってるんだ。

「社長、食べかす付いてるぞ」

「え、うそ……」

「うん、嘘。ひやはは、慌ててやがる」

「口の利き方に気を付けなさい。ぶつわよ」

こういうのに引掛かっちまうくらい、社長は美味そうにコロツケを食ってたって事である。これからも隙を衝いて、ちょいちょい反撃に出よう。そうでないとは精神衛生上よろしくない。

「……戻りました」

「ご苦労様。それで、どうだった？」

九重が戻ってきたので、俺は彼に場所を譲ってやった。九重はお辞儀し、ベンチに座る。

「……例のおばあさんですが、病院に行っているみたいですね」

「はあ？ 死んだのか？」

「どうしてそうなるんですか。接骨院に行ってるだけです」

じゃあババアから話聞けねえじゃん。解散だな、解散。

「よし九重、家まで送ってくれ。今日はもう無理そうだ」

「勝手に決めないで。本当に怪人が出たらどうするつもりなのよ」
だって朝から呼び出されて眠いし、ここにはいたくない。この商

店街は呪われているに違いない。

「レンも家に帰って休みたいよなー？」

「ちよっと、子供をダシに使うなんて卑怯よ」

「黙れ。俺の進退を握ってる分際で」

「馬鹿ね。それが分かかってるならもう少し賢く立ち回りなさい。私を敵に回しても損しかしてねえよ」

味方に回しても損しかしてねえぞ。

「口だけは良く回るっつーの。じゃあ、俺は何をしたら良いんですかね？」

嫌みったらしく言ってみる。いるかどうか分からん怪人を相手にしろって何？ パントマイムでもやれってのか？

「ブヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

うっ、うお！？ 何だ！？

響き渡った奇声。声のした方に目を向けると、肉屋の前にブタがいた。正確に言えば、ブタ型のスーツを着た怪人である。彼は肉屋の店主にいちやもんをつけているらしかった。

「……ほら、いたじゃない。怪人」

「顔が引きつってるぞ」

マジかよ。本当に怪人がいたのか。グローブは持ってきてるが、どうする？ やるのか？

「あははっ、すごく怒ってる。ねえねえお兄さん、僕が行ってこようか？」

却下だ。

「社長、どうすんだ？」

「勿論倒すのよ。と、言いたいところだけど、あの怪人は何をやっているのかしら？ 文句を言っているみたいだけど」

「様子見てくる。お前はここにいろ。良いか、動くなよ。動いたら本気で張り飛ばすからな」

俺は社長たちを駄菓子屋に残し、肉屋に近づいていく。距離が縮まるにつれ、ブタ怪人と店主の会話が良く聞こえてくる。

「お客さん、そんな言われてもね、ウチはこれですつとやってるわけだから」

ブタ怪人に負けなくらいの体格をした店主が、鬱陶しそうに言い放つ。怪人は負けじと言い返した。

「ブヒイ、ブタはやめろ！ ビーフかチキンだけにしろ！」

「いや、そりゃコロッケとかは牛肉使ってますけどね、インドじゃないんだし、何の肉使ったってウチの勝手じゃないですか」

「ブヒイイ！ 口答えを！」

何を血迷ってるんだ、こいつは。

「ブタを大切にしろと言ってるのが分からない奴だ！ ブヒッ、ブヒッ！ こないだもあれほど忠告したのに、これ以上続けるならどうなるかと言ったのに！」

「商売ですから。おたく、警察呼んだから、もうどこかへ行った方が……」

「警察が何だブヒ！」

どうやら、この怪人は豚肉を使っている肉屋にいちやもん付けているらしかった。いや、だって、なあ？ 肉屋だし。ブタだろうがなんだろうが使うだろ普通。

「その辺にしとけよ」しかし、弱そうだ。手え出さないって事は、戦いに自信がないんだろう。だから、こうしてガタガタ抜かしやがる。文句があるならやれよ。そのスーツは伊達か？

「牛と鶏が良くてブタが駄目って事はねえだろうが」

「……何ブヒ？」

「そいつは俺の台詞だ。何だお前？ 文句があるなら養豚場へ行けよ」

そんで意味なく捌かれる。てめえの肉は食いたくねえ。

「生意気な奴ブヒ。やってやるブヒ」

「ブヒブヒうつせえんだよ。やれるもんならやって……」

ブタの姿が消える。俺の目が、野郎の動きを追いきれなかったらしい。咄嗟に両腕で顔面をカバーする。同時、背中に強い衝撃が走った。視界が反転し、二転三転していく。体中が熱いと感じるのは、地面にしこたま転がされたからだろう。擦りまくってすげえ痛い。

「……い、でえ……」

「ブヒイイイ！ ぼくちんを舐めていたなお前！ 人を見た目だけで判断したブヒか！？ そもそもブタというのは賢く！ 綺麗好きな生き物だブヒ！ ブタで使えないのは鳴き声だけっ、ぼくちんは素晴らしいエコノミックアニマルなんだブヒイイ！」

油断してた。畜生。最近、マジに調子乗ってたな。弱そうだったけど、こいつもスーツを着てるれっきとした怪人なんだ。俺より強いのは当然じゃねえか。

「とどめの百貫プレスを受けるブヒイイ……！」

ブタ怪人が高く跳び上がる。このまま、俺に押し掛かるつもりなんだろう。よけなきゃ死ぬ。逃げなきゃやばい。だってのに体は動いてくれない。

「たっ……」 助けてくれ！ 誰でも良いから！ 声を出そうとしたのに、喉が痛んで変な音だけが漏れた。

「ブヒイイイイイイイ！」

爆発音がする。

見上げると、ブタ怪人が中空で燃え上がっていた。奴は俺の近くの地面に落ち、悲鳴を上げながら転がっていた。……レン？ い、いつの間にかそんな危ない技を覚えたんだ？

「怪我は？」

え？

誰かに顔を覗き込まれている。女の人だった。そんな若くはない。黒髪をポニーテールに結っている。二十代後半にも見えるが、三代、くらいにも見える。彼女はエプロンをして、エコバッグを持っていた。そこからはネギが覗いている。買い物帰りの主婦にしか見えない。

「ああ、話せないの。だったら良い、寝てなさい」

「ブヒヒヒヒ、ヒヒヒヒ」チャーシューが泣き叫んでいる。
まさか、この主婦が？ 彼女があのだた怪人を？

主婦は俺の前に立ち、ブタ怪人を見据えた。何をやるうってんだ、この人。武器もない。スーツもない。なのに怪人と向き合おうなんて、自殺行為だ。

「ぼくちんを、おおおっ、燃やそうなんて考えはアア！」

ブタ怪人が立ち上がる。

主婦は、ネギを取った。いや、ネギではない。ネギの形をした、カバーのようなものである。そこから姿を覗かせたのは、メカメカしい細長い何かだった。一見すると、杖のようにも見える。

「立て、『シヤクヤク』」

『……起動完了』

何かが喋ったように聞こえた。やけにノイズの雑じった、機械音。それが、長々と流れ続けている。何を言っているのかは分からない。「ブヒヒヒヒヒ！ そんなおもちゃでええええええええ！」 ブタ怪人がこつちに向かってくる。

『状況、甲。ブレイブシュートの使用を提案』

「却下よ」主婦は、どうやらあの杖みたいなもんと会話しているらしかった。

主婦はエコバッグから、メタリックな杖を引き抜く。彼女がそいつを振ると、小振りだった杖が太く、長く伸びていた。どうなったんだ、ありゃ？

『敵性存在との相対距離縮減。キラリンバスターの使用を提案』

「却下よ」

杖の先端には、星のようなエンブレムがついている。そこが、かばつと開いた。主婦が何かを呟くと、杖が反応する。

『音声認識、ハパーセント』

「やりなさい」

『了承。放出開始』

「ブヒ？」

ブタ怪人が立ち止まる。杖の先から光が漏れていた。開いた穴からは、小さな、黒いものが幾つか飛び出してくる。そいつは怪人の直前で、

「ブツ、ブヒ！？」

「おっ、おわああ！？」

爆発した。

黒焦げになったブタが転がっている。

「お兄さん、大丈夫？ 立てる？ 手、貸すよ？」

「……え、あ、何？」

「早く立ちなさい」

商店街には活気があった。悪い意味で。その辺の建物の窓からは、野次馬が顔を見せている。肉屋の店主はコロッケを揚げ続けていた。俺はよろよろと立ち上がり、はたと気付く。あの主婦を探したが、彼女はもうどこにもいなかった。

「さっきの人、どこ行った？」

「ああ、あの女性ね。そう、ね。いつの間にか消えていたわ」

「……ヒーロー、なんでしょうか？」

「あはははっ、すごかったね、さっきの」

ヒーロー、なのか？ 武器らしきものはあったが、マスクは被ってなかったな。でも、怪人を倒したのは事実で、助けてもらったのも事実だ。礼くらい言わせてもらっても、なあ。

「ヒーローだとして、見た事のない者だったわね。ルーキーなのかしら」助けてもらってなんだけど、その割には、歳がいつてるような気もする。

「おいしいところを持っていかれたわね」

「おーい、俺の心配は？」

「勿論、してたわよ」

にっこりと微笑まれて、俺は何も言えなくなった。

魔法少女だ

今日のお仕事はいたって簡単。怪人に声掛けて地面を転がるだけで、何の資格もいりません。

「あー、いてえ」全身が擦り切れてやがる。社長からの罵詈雑言を受け、ついでに心もだ。

「大丈夫？ あは、そんな訳ないよね」

レンはけらけらと笑う。いつそ引き倒して俺を蝕んでる痛みを味わってもらおうかとも思ったが、返り討ちに遭って半泣きになって自分が易々とイメージ出来たので断念する。

アパートの前に着くと、隣人が部屋から出てくるのが見えた。夕イミング悪し。奴は赤丸夜明。狂暴なヒーローである。俺を見ると舌打ちしたり露骨に嫌そうな顔をしたり、こないだなんか肩がぶつかっただけで脛をしこたま蹴られた。無視するに限る。

「あは、お隣さんだ。お兄さん、ご挨拶」

「しなくて良い」

部屋の鍵を開けて、中に逃げ込もうとすると、獣じみた視線がこっちに向いてるのが分かった。

「……こんにちは」仕方ないので、出来る限り嫌味たらしく言うてる。赤丸は顔をしかめた。俺はレンを中に入れ、扉を閉める。

「挨拶も出来ん奴は最低じゃ。われ、自分の子供にどんな教育をする」

「何度も言うが、レンは俺の子じゃない。それに、お前みたいなんと関わる方が教育に悪い」

「……悪党が」

「うるせえぞ無職」

言い返してこないのを見ると、赤丸の就職活動は芳しくないらしい

い。ざまあみる。悪党だが、俺はちゃんと働いてるっつーの。頭がたけえぞ無職。

「これから仕事をもらうとこじゃ」
「どうだか。」

「最近のヒーローってのは筆記にすら通れん馬鹿がいるらしいな。いや、腕力だけでどうにかなった時代が懐かしいですなあ、婆さんや」

まあ、悪の組織の戦闘員にやテストがないんだけど。ボーナスも保険もない。

「誰が婆さんか。ぶち殺すぞ」

「そっぴやさ」適当に話を変えてやる。赤丸は乱暴だが、妙に律儀なので話題にはついてこようとすのだった。

「杖を持った主婦を知らないか？」

「そがあなもん、そこらにおるよ」

「じゃなくてヒーローで。喋る杖を持った主婦だよ。知らない？」
赤丸は、ふふん、と鼻で笑う。見慣れた所作だった。

「知ってても悪党には教えん」

「就職先に困ってるなら、とあるところに口を利いてやろうかなーとか考えてんだけどな」

赤丸の目の色が変わるが、それも一瞬の事である。彼女は察しが良い。野性的なところはエスメラルド様と似ていた。

「悪党にはならん。よそ当たれ、よそ」

「向いてると思うんだけどな。お前なら、すぐにも怪人になれるぞ」

「それ以上ゆうたら殴る」

おお、恐い恐い。君子危うきに近寄らず、だ。からかうのはほんくらいにしとこつ。

「じゃあな、頑張れよ」

「……主婦はしらんけど、杖なら知つとるかもしらん。うちより、縹野が詳しい、と思つ」

おや？ いやに協力的と言うか、何と言うか。

「へえ、ならそつち当たってみるわ。ありがとよ」

「いや、ええよ。……もしもの時があったら、考えたい欲しいかなあー、とか。いや、アレ。悪党になるんじゃあなく……あくまで、ヒーローとして雇ってもらえるまでは手伝いと言いますか」あははと、赤丸は小さく笑った。……良いけどよ。良いけど、プライドは？

あの主婦については、イダテン丸が何か知っているらしい。彼女がどこにいるかは知らないが、とりあえずカラーズの屋上に向かう事にする。最近、レンはとみに大人しい。一人で留守番するのにも慣れたらしく、わがママを言わずに送り出してくれた。ただし、帰りにスーパーでみりんを買ってきて、との事だ。めんどいから家の近くのコンビニで買おう。

それから、社長に見つかからないようにしなければ。今日の彼女はいつも増して機嫌が悪い。硬軟織り交ぜた悪口でこっちを突いて引つ掻き回して弄ぶのが常の社長だが、今日は暴投上等と言わんばかりに苛烈な責めとなるだろう。まあ、俺のせいだが。

物陰からカラーズを見ている内、どうして俺があんな小娘にビビらなきゃならんのか腹立たしく思えてきた。大体、初めて会った時からだな、あのアマは生意気だったんだ。目上に対する態度じゃない。マジに、一度がつつり、がつんと教育してやるのが双方の為ではなかるうか。いや、そうに違いない。

「……………青井殿」

「いや違うんだ。別に何をしようと思つてた訳じゃなく、ふらつと足が向いただけなんだよな。だから今日のミスはもう良いだろ？

二度と油断しねえから、だからもういじめないで……ああ、イダテン丸か。やあ、元気だったかい」

「……………急に爽やかになられても」無理があるか。ちつ、社長だ
と思つて、思わず弁解から入つてしまった。

「それと、この格好の時には縹野で通して欲しいのですが」

イダテン丸は前に見た時と同じく、文学少女的な出で立ちをして
いる。確かに、これならイダテン丸とは気付かれないかもしれない。
「悪い悪い、つい、な。それで縹野、実は、お前に聞きたい事があ
るんだが」

「……………伺います」

「杖を持った主婦を知らないか？ いや、赤丸からイダ……………縹野に
聞いてくれて言われてさ」

そう言う事でしたか、と、縹野は眼鏡の位置を押し上げる。

「……………その、主婦と申される方は存じません。しかし、最近に
なつて気になる者たちがこの街に訪れたのは……………」

気になる者？

「人語を解する奇怪な杖を所持した連中の姿が、あちこちで、ちら
ほらと」

「主婦が持つてたのか？」

「……………いえ、主婦と呼ぶには若過ぎるような、そんな少女が三
人、杖を所持していた、と。それから、保護者らしき男が一人」

あれえ？ 俺が知つてるのは違つじゃん。しかも三人もいんの
？ あんな馬鹿みたいな力を持ったのが、三人も？

「うーん、ヒーローも山盛りだなあ、本当」

俺がだるそうに言うつと、縹野は不思議そうに小首を傾げた。

「……………ヒーロー、だつたのですか」

「そうじゃないのか？」

「話によると、その者たちは、ヒーロー、怪人、無差別に襲つてい
ると……………」

「はあ？ マジかよ。何なんだ、そいつら」

「……………何とも」

スーツを着た奴を無差別に襲つ、杖を持った少女、か。何だか、

さっきの主婦とはえらいイメージがかけ離れているような気がしてならない。つーか、俺は助けてもらったんだし。あ、いや、スーツを着ていなかったから、一般人と思われたんだろうか。いや、それにしたってやばいのが三人うるついているのに間違いはない。昼間の主婦とは、一体何者なのだろうか。イダテン丸の言う少女たちと関わりがあるのだろうか。

「ふーん、そっか」

まあ、関わりがあったところで、俺に関係はない。俺とは一切、何も。スーツを着た奴襲ってるのが本当なら、カラーズで仕事してる時には大丈夫だし、悪の組織でも仕事は滅多にないだし、すぐにぶち当たるような問題でもなさそうである。

「色々ありがとな」

「……………あの」立ち去ろうとする俺を、イダテン丸は遠慮がちに引きとめた。

「また、何かあったのですか？」

「いんや、何も無いって。気になっただけ」

半分は、願望だろうか。

夜、戦闘員としての仕事が入った。冗談みたいなタイミングだったので、また何か起こるんでないかと不安になる。

ワゴンの中で数字付きの連中と一緒に揺られていると、陰鬱な気持ちがあります落ち込んでいくような、そんな思いだった。

「今日も楽な仕事なら良いよなあ、なあ、十三番」

「うん、そっだね」

「お前さ、何かキャラちがくねえ？」

今日の仕事はヒーロー狩りである。ミストルティンの残党を発見したとの事で、俺たち数字付きが派遣された訳だ。正直、戦力だけで見るとこちらが圧倒的に不利なんだが、ヤテベオを筆頭とした、他の悪の組織も動いているだろうし、まあ、大丈夫だろう。相手は

一人だから、見つかるとも限らんし、そもそも、とつくに終わっているかもしれないしな。……まさか、あいつじゃあないよな。

数字付きの連中は、飽きずにフィギュアの話を始めている。確かに、お菓子のおまけにしては異常に出来の良いものだったが、俺のプリプリ魔法少女、マルルちゃんフィギュアの右腕はレンが遊んでいて壊してしまったのだ。彼に悪気がなかったとは言え、何だかとても虚しい気分になったのを覚えている。

「もうその話はやめろよ。大の大人が集まってよ、もっと色気のある話をしようぜ」

「うるせえなあ、黙ってるよ非オタが」

「消えてる非国民」

「てめえらそこまで言うか。」

「だったらてめえら全員表に出やが……っ！？　れ、れれっ？」

ワゴンが急停止する。立ち上がりかけた俺はバランスを崩し、窓に頭をぶつけた。

「マジで停める奴があるかっ」勢い任せに叫ぶも、運転席からの反応はない。

「……おい？」

車内がざわざわし始める。その内、誰かが叫んだ。どうやら、車の前に何者かが飛び出してきたらしい。

「轢いちゃえ轢いちゃえ」煽るな煽るな。

「女の子だぜ」

「大丈夫ですかっ」

「お怪我はっ！」

阿呆どもが飛び出していきやがった。俺たちは戦闘員のスーツを着てるんだぞ、その姿を見たら誰だって逃げ出すわ。

「これだからロリコンは嫌なんだよ」

と言うか、今は仕事だぞ。悪の組織の戦闘員だとして、その辺は弁えて、けじめを大切にして働かないと駄目だろうが。第一、そのガキを心配する必要はねえじゃんか。向こうから飛び出てきた

んだから、ほつとくか、どっかに放り出しちゃえば良いんだ。

「どつきまくって親のところ突き出そうぜ」

「ぎゃっはっは、そりゃ良いな！……って、何かあの二人遅くねえか？」

「っーか、何も聞こえん。何やってんだ」

窓際にいた俺は、ふと、外を覗き見る。そこには誰もいなかった。運転席に座る一番も、間抜けな声を上げている。

「出たったの、何番と何番だ？」

「知らん。誰か見て来いよ。勝手にいなくなったのがバレたら連帯責任だぜ」

ええい、鬱陶しい。俺はドアを乱暴に開けて、思い切り怒鳴ってやった。足元に転がされている数字付きを見て、変な声が喉から出てくる。

「な、あ……は、はい？」

何だ？ どうして、この二人が倒れてるんだ？

「だっ、お、おい！」 声を掛けると、他の奴らもぞろぞろと車から降りてくる。そうして、全員が彼女を認めた。

ふわふわとした、綿菓子みたいに甘い雰囲気を持った少女が、そこに立っている。淡い、今にも消えてしまいそうな紫色のワンピース、えげつないほどにフリルのついたスカート。白いニーソックス、紫の、先が尖ったブーツ。そして、金属製の杖だ。その杖の先端には、小さな、釣り鐘のようなものがくっついている。

「『魔法少女だ』」

呟いたのは、何番だったのか。確かに、見た目だけならそう勘違いするの不思議ではない。

ヒーローか、ヒールか。

悪の組織の戦闘員を倒したのは、この少女なのだろう。では、正義か？ 彼女は正義の味方なのか？ その割にはこいつ、目が死んでやがる。長く、どこことなく青みがかった髪から覗いた瞳は、人間のそれとは思えなかった。

エドは当分が好きだな！

男たちが叫ぶ。走る。逃げる。惑う。舞う。

「ぎゃああああああああ！」

「ちょおおおお前こっち来んなって！」

「わーっ金ならやるっだから！ だからああ！」

「俺だけでも助けてくださいお願いしま」

だが、誰一人として戦うのを選ばなかった。

俺たちの乗ってきたワゴンは炎に包まれ、立っている者はもはや一人もいない。

たった一人の少女によって、俺たち数字付きは壊滅させられたのだ。

「カノコ」

ノイズが走る。

『状況終了だよっ、みいんな倒れて動けないみたい！』

「了解」

杖が喋った。やけに、甘ったるい、舌足らずの声である。件の主婦が持っていた杖の、無機質な声とは違っていた。しかし、同じだ。こいつらは、同じものなんだ。俺の直感がそう告げている。そこに、違いない。

少女は倒れている俺たちに気を払わず、そのまま背を向けて行ってしまう。

立ち上がるうとするが、体が痛んですぐには動けない。上半身だけを何とか起き上がらせて、立ち上る炎と、煙を見つめた。

幸いにも、死者は出なかった。しかし、最初に車を降りた二番と

五番の二人は、すぐには復帰出来ない程度に痛めつけられていたそうである。

仕事も、当分はなさそうだ。不幸、か？ いや、その二人に比べりゃ俺なんて大した怪我をしていない。打撲、擦り傷で済んだ事を幸運と感謝すべきだろう。

それよりも、あの少女は何者なのだろうか。

殆ど何も喋らず、ただ、俺たちを痛めつけて去っていった。悪の組織の戦闘員だから、こんな目に遭うのか？ ……まあ、仕方ないっちゃあ、仕方ない。もしかしたら、こっちに恨みを持つてる奴なのかもしれない。が、あの目が気になる。何も見ていない、虚ろな瞳。そんな目をした奴が、他人に恨みなんて抱けるものなのだろうか。

杖と、少女。

一体、彼女たちはこの街で何をしようというのだろうか。

組織で軽い手当てを受けた後、俺は控え室に戻った。そこには、俺以外には誰もいない。皆、今日はもう帰ってしまったのだ。何となく、すぐに動こうとは思えず、パイプ椅子に座る。

机に突っ伏し、両目を瞑ると、燃えるワゴンが脳裏を過ぎった。

数字付きが、ガキ一人にああまでやられるとは。信じられん。

「……アオイ？」

誰かが部屋に入ってきていたのに、俺は気付けなかった。顔を上げると、心配そうな表情をしたエスメラルド様がこっちを見ている。「あ、あの、本当に、すいませんでした」頭を下げた。彼女に合わせる顔がない。

「何を謝ってるんだ？ 私は、お前たちが無事で良かったと思っていて。その、杖を持った女は許せないな。理由もなくお前らを倒すなんて、あんまりだ」

理由なら、ある。俺たちは悪の組織の人間だ。それだけで、理由にはなるんだ。

「だから、あんまり気にするな！ それよりエドが数字付きを呼んでる。……あれっ？ アオイだけか？」

「今日はもう帰って良いと言われてましたから」

「誰にだ？」

「先生です」

「この人間が先生と呼ぶのは一人しかいない。組織の隅にある部屋、通称は保健室。の、主である。組織では唯一の医者と呼べる存在だ。だが、免許を持っているかは危うい。怖くて聞けないし。先生は男なのか女なのかも分からない。歳を食ってるのか、まだガキなのかどうかもさっぱり。全身を包帯でぐるぐる巻きにしているのだ。保健室に来た人間の様子を見ただけで（本当に見えてるのかどうかを聞くのも怖い）、適切な処置を行う（筈）。会話は筆談で行う。その字もやたら汚いので、解読には時間を要する。付添い人がいなければ、誰も先生に頼ろうとはしない。と言っかなるべくなら行きたくない。」

「んん、センセイか。じゃあ仕方ないな。よし、アオイだけでもこっちに来い！」

ええ？ 俺だけえ？ また、何か厄介な事を言われるんじゃねえの？ 杖持ちを倒せとか、探せとか、さあ。

江戸さんはいつにも増して難しそうな顔をしていた。見た事もないような薬の瓶を机の上に並べて、それを見つめている。

「あの、江戸さん……？」

「あつ、ああ、青井君。呼び立ててしまつて済まない。それから、エスメラルド様。あなたをこのような些事にお付き合いさせるのは……」

エスメラルド様は小首を傾げた。

「さつきも言つただけど、私は好きでやってるんだからな。なー、アオイ」へ？ や、その言い方ってちょっとおかしくないですか？

「そうですか」

部屋の空気が一度か二度は下がった。そうに違いない。

「先生から先刻連絡が来てね、他の数字付きは帰ってしまったそうだが……青井君。君だけでも話を聞いていきたまえ」

「勿論です」断れる訳がないだろう。

「話というのは、他でもない。先の通り魔の事だ」

「……通り魔、ですか？」

ヒーローでも、ヒールでもなく、江戸さんはあの少女を通り魔だと呼んだ。何か、違和感を覚える。

「名乗っていないからね。我々は悪だよ。それは間違いない、紛れもない。そして、我々と敵対する者はヒーローだ。彼らは自らをその名乗り、正義を謳う。我々悪の組織だって、時には別の組織との抗争もあるが、相手が悪の組織と名乗る以上、悪は悪だ」

江戸さんはもったいぶった風に、遠回りに言う。彼が何を言いたいのか、何となくは分かるが。

「君たちを襲った者には仲間がいる。その者が、別の時間にヒーローを襲っていたのだよ」

瞬間、あの主婦の事を連想してしまう。

「仲間って、どんな奴なんですか？」

「君たちを襲った者と似たような格好をしていたよ」

「プリプリガールズだ！」

ずいっと、俺の目の前に突き出されるものがあつた。見慣れたフェイスギユアだつた。

「なー、アオイ！ 魔法少女だつたんだよな！」

「エスメラルド様。青井君たちは、その魔法少女に襲われたのですよ」

「うっ、ご、ごめんアオイ。ちょっと、興奮してしまつた」

「いやー、俺だつてそう思つちやいましたよ。何かに似てるなーって」

そういや、エスメラルド様はそのアニメが好きだつたっけ。

「昨日から、喋る杖を持った少女の目撃情報が多数寄せられていてね。最初はヒーローが襲われていたと聞いたから、無視しても構わないだろうと判断していたんだが」

俺たちが襲われたって訳か。

「正直、少女たちの目的が分からない。ヒーローに攻撃を加えたかと思えば、今度は悪の組織の戦闘員を襲撃する。自分たちの素性も目的も明かさないまま……まるで、戦うのを望んでいるだけの機械だ」

江戸さんはコップの中身を呷る。だから、彼はヒーローとも、ヒールとも言わなかったのか。まあ、そいつらのやってる事は、確実にヒーローじゃあないんだけどな。

「目撃された杖の少女は三人。君たちを襲ったのは、紫を基調とした服を着ていた少女だったそうじゃないか。他の二人は、赤、そして青を基調としたドレスを着ていたそうだ。三人ともが、持っていた杖と会話を成立させていたらしい」

「間違いありません。絶対、そいつらです」

「注意が必要だ。が、注意しても向こうからやってくるのでは、どうしようもないか」

天災に近い存在である。

「……三人ですか」

「ああ、そう聞いているが、何か疑問でもあるのかな」

「いや、それ以上いたら嫌だなあって」

違うのか？ あの時、ブタ怪人と戦った、杖を持った主婦は関係がないのか？ だけど、喋る杖なんて奇天烈な武器が被るとは考えにくい。

「私もそう思いたいが、いないとも限らないだろうね」

だが、最初から切り札を見せ付けてくるような連中にも思える。考えがあるようで、殆どなさそうな。

「あれだけ派手に動いているんだ。勝手に情報は入ってくるだろうね。全く、最近はまともに仕事を出来ないね。困ったものだ」ただ

でさえ少ない仕事なのに。

はあ、また様子見か。

「私は出るぞ。魔法少女を見てみたいし、それから、殴る」

「エスメラルド様、何をおっしゃっているのか……」

「部下がやられたんだぞ！ 黙ってられるか！」

だが、エスメラルド様は妙に楽しそうだった。俺たちの敵討ちつてのは丸きり嘘じゃあないんだろぅが、欲望が前に出過ぎていい。良いんだけどね。

「駄目です。当分は部隊の怪人、末端の戦闘員に至るまで待機させておきましょう」

「また当分かっ。エドは当分が好きだな！ この当分好き！」

「いけません」ぴしゃりと切って捨て、江戸さんは腕を組む。どっちが部下か分からん。

チケットが出たので、タクシーを呼んで帰った。久しぶりだったので、テンションが上がる。いや、まさかあの組織からこんなものが出るとはな。数字付き様様。江戸さん最高ひゃっほい。

「ただいま……」静かに。しずかに、鍵と扉を開ける。こんな時間だ。レンはまだ眠っている。寝てなきや怒る。

俺は何だか目が冴えていて、すぐには寝られそうにない。布団の上であぐらをかき、ぼんやりと、物思いに耽る。

考えるのは、杖を持った奴らの事だ。考える事が次から次へと現れて、全くもって面白くもない。

俺を助けてくれた主婦。俺たちを襲った少女。どちらも、喋る杖を持っていた。少女には似たようなのが二人も仲間にいるらしい。あの主婦は、少女たちの仲間なのだろうか。……そうは、思えなかった。あの主婦は、自分が誰かも分かっていない、何をしたいのかも良く分からないような人間には見えなかったのである。

似てるけど、違う。決定的に違っている。じゃあ何が違うのか。

そう問われれば答えに窮する。所詮、俺。下手の考え休むに似たりである。だったらとつと寝ちまった方が良さそうだった。

もう一度、あの人に会えれば良いんだけどな。

朝、早く起きる。レンの用意してくれた朝食をぼけっと見ながら、俺はふと、ある事を思いついた。

「どっか行くか」

「会社に？」

「いや、遊びに、とか？」

「あはっ、本当!？」

自分でも良く分かんないままに言ったからなあ。だけど、レンは嬉しそうである。別に、俺はこいつを喜ばせるつもりなんかなかった。ただ、何となく、そう言ってみただけである。

「あんまし遠くは駄目だからな」もしかしたら、会えるかもしれない。会って、何を話そう。そこまでは考えちゃいない。ただ、確かめたかった。俺はもう、巻き込まれているのだ、と。杖持ちのガキどもがスーツ着た連中を襲うってんなら、俺たちがまた狙われるかもしれないねえ。向こうから来るんなら、こっちはずつと息を潜めてなきゃならねえんだ。そんなんは、かつたるくて仕方がない。可能な限り、ぎりぎりまで迫ってやる。

「水族館と商店街はナシな。あ、人が集まる場所も却下」

「そんなんじゃあどこにも行けないよ。だつてさあ、遊びに行くなんて久しぶりだもん」

そういや、アレだ。こいつは基本的に、ここか会社にいるんだっけ。追われてる身なんだから、こそこそとしているのが当たり前前だけ。だけど、ガキ、なんだよなあ。血の気の多い事に巻き込まれない限り、レンは大人しい。スイッチさえオフのままなら、どこに出しても恥ずかしくないハナタレ小僧である。

「とりあえず言ってみ。どこに行きたいんだ？」

「あは、じゃあね、デパートに行きたい」

デパート。デパート、かあ。うーん。大丈夫、か？ 家を出て、駅に着いて、電車に乗って、降りて、歩いて、デパートに入って…どこもかしこも人だらけじゃねえか。知り合いに見つかったら、やっぱりやばいよなあ。

「近くのコンビニは？」

「お兄さんが遊ぶって言ったんじゃない！ 僕、近場じゃ誤魔化されないから」

「じゃあ、ぜってえに人様に迷惑を掛けるなよ。約束な」

「はい、まもりまーす！」

返事も笑顔も満点である。ま、ずっと引きこもらせるのも可哀想だし、たまには良いか。だがしかし、約束を破ったらどうしてくれるよるか。

やっちゃんえ撃っちゃえぶっ殺しちゃえ

..... 疲れた。

飯を食って、朝から引きずり回された。急いだって店は開いてないっつーのに、レンめ。

俺はデパートの屋上、クソガキどもの声を聞きながら、ベンチに座っていた。こうしていると、少し前、ここでオセロツト君の着ぐるみを着て、怪人と戦ったのを思い出す。ついでに、ヒーローにボコられた事も。畜生、鬱だ。

「あはっ、もう疲れちゃったの？」

「お前は疲れてないのか」

「うん、だって楽しいもん。はい、ジュースだよ」

「サンキュー」紙コップを受け取り、俺はそれを呷った。レンは隣に座り、両足をぶらぶらと揺らす。

「ゲームとか、してくか？」

「ううん、やらない」

そういうところは安上がりで助かるけどよ。.....ん？

「もしかして遠慮してんのか？」

「あは、してないよ？ 僕ねえ、お兄さんにはいっばい甘えたいなーって思ってるんだ」

「だから遠慮はしてないってか」

レンは元気いっばいに頷く。

「だったら良い。が、手加減はしてくれ」

「どーしよっかなー、なーんて。あはは、いこ、お兄さん。僕、新しい洋服は欲しいな」

これから先、暑くなるだろうし、売り場には夏物も並んでいるだろう。俺も、何か買うか。

屋上から階段を使い、下のフロアに行く。そこからエスカレーターで五階の子供服売り場に向かう。

「新しいエプロンも欲しいな」

「はいはい、買ってやるから。だから大人しくしてような」
交差した。

女子中学生らしき制服を着た、髪短い女の子。燃えるような赤い色のリボンをつけた少女と目が合う。

俺たちは下へ。そいつは上へ。

見送るしか出来ない。目を逸らす事を忘れて、ただ、見ていた。

「お兄さん？」

「……いや、何でも、ない」

杖を持っていない。ドレスを着てもいない。

だが、その少女の瞳には光が宿っていなかった。まるで、戦うのを選んだ、機械みたいに。

「あら？　こちらは男の子向けですよ」

「え？」

レンと一緒に服を選んでいると、店員のおばちゃんに話し掛けられた。

「お嬢さんなら、あちらの売り場のお洋服の方が、良くお似合いになると思いますよ」

営業スマイルを向けられる。俺は何も言えなかった。

「あはは、本当？」

おばちゃんはレンにもそのスマイルを差し向ける。それでは。彼女が去って行った後、俺は、レンにどう声を掛けようか迷った。

「お兄さんお兄さん、あっちのも見たいなー、僕」

「なんでやねん」

レンは俺を引つ張っていく。その力には逆らえない。

「お前、女に間違われてんだぞ。プライドはないのか、プライドは
っ」

「お嬢さんだつて、あはは」

何か知らんがめっちゃくちゃ嬉しそう。しかし、俺としてはああいうエリアに足を踏み入れたくないのである。あそこは、ちょっと違う。いや、かなり違う。だからやめろっ、ええい離せ！

レンが試着室で着替えている間、俺は天井を見つめる。

思い出すのは、さっきの少女だ。制服を着た、女の子。平日の昼過ぎ、こんな時間に学生がいても良いものか？ しかも、一人で。どう考えたって怪しいだろう。……いや、けど、俺は紫の『杖持ち』の仲間の顔を確認していない。あの少女を疑うのは早計じゃなからうか。ただのサボりかもしれないし。もしかしたら、友達や家族なりと待ち合わせしてるのかもしれない。

ただ、あの目が気になった。少女の瞳は、どうしたって昨夜の光景を思い起こさせる。機械みたいだと、江戸さんは評した。俺も、昨夜の少女から、そして、さっきの少女から、それに近いものを感じている。あんな、何もない目があるか。何も宿らない。何も映っていないさそうな、ビー玉と変わらんような……。

「お兄さん、お兄さん」

「着替えたか？」

「はいっ」試着室のカーテンが開く。涼しげな格好に着替えたレンが、くるくると回った。

「似合うかな？」

「あー、似合う似合う。それで良いか？ 良いよな？ じゃ、レジ行くぞ」

「えーっ、もうちょっと待ってよう。さっきのも似合うって言ったじゃんか。後ね、これにも一回着替えてみたいんだ。それからね…

…」

「いつまで掛かってんだよ。いつまで待たせるんだよ」

いい加減、何もしないで立ちっぱなしってのも疲れてきた。

「あは、お兄さんも自分のを選べば良いじゃない」

「俺はさつき買って来た」

「ええっ？ 僕、どんなのを見てないんだけど」

どうしてお前に見せなきゃならんのだ。

「お前もさっさと決めろよ。腹あ減ってきたし、そろそろ帰らないと」

言い掛けたところで、俺の脳天に衝撃が走る。轟音と震動の後、思わず尻餅をついた。地震かと辺りを見回すが、どうもそうではないらしい。女性客や子供連れが悲鳴を上げている。耳を塞ぎたくなるのを堪えて、俺は短く叫ぶ。

「レンっ」レンは試着室の中から、じっと天井を見上げていた。

「上で何かあったんだ」

「何？ 上？」

つられて、俺も天井に目を遣るが、何が起こったのかなんて分からない。そうしている間にも、エスカレータには大勢の買い物客が押し寄せていた。何かから、逃げてきているように見える。この階にいた連中も、エスカレータや階段に向かって走り出していた。

「……訳が分からんが、俺たちも逃げよう」

「服が……」気持ちは分かるが、レジにや誰も立っていない。この騒ぎだ。店員だって逃げ出したに違いない。

「良いから行くぞっ……っつて、ああ、お前、元の服に着替えるって！」

レンは不満げな様子だったが、手早く着替えて、試着室から飛び出して来る。

「僕これに決めたっ」

「言ってる場合か！」

「あはは、じゃあもうもらっつていこうよ」

「駄目だ駄目だ！　そういう、火事場泥棒みたいな真似は許さん！」
しかし、この期に及んで、レンは頑として動かない。ぷいっと顔を背け、その場に座り込もうとする。そうこうしている間にも、叫び声は遠くなっていく。上階にいた奴らも、殆どが逃げていったんだろ。このフロアに残っているのは俺たちだけになったかもしれないってのに。

「いい加減に……！」

「だって！　外に出れたのは久しぶりだったのに！」

「おまつ、その言い方だと俺が閉じ込めてるみたいじゃねえか！」

「そうじゃない！　勝手に外へ行くなって言っただけさ！」

「そうじゃねえだろ！　お前がグロシユラたちに追われてるから匿ってんじゃねえか！　そこんところを分かってない奴だなこいつはよ！　こんな時にガタガタ抜かしやがってクソガキが。」

「……それ、幾らだ。見せてみる」

レンが抱えている服を引たくり、値札を確認する。俺は持っていた袋にその服を入れた。

「泥棒するんじゃない」

「しねえよ」似たような事はするが、仕方あるまい。俺はレンの手を掴み、無理矢理に立ち上がらせようとする。が、びくともしない。「馬鹿力っ、立て！　行くぞ。買ってやるから、早くしろ」

「そう言うと、レンは飛び跳ねるようにして体を起こした。」

「本当！？　本当に良いのっ？」

「マジだからまわりついてくんなくて。ほら、お前がこの袋持ってる」

俺はレジの方に歩いていき、財布を取り出す。……本当に、断腸の思いとはこの事か。五臓六腑がずたずたに引き裂かれているみたいに酷く痛んでいる。

「ぐっ、がっ、畜生。釣りはいらねえよ！」

「だん、と。カウンターに一万円札を叩きつけてやった。」

こうなったら、社長にたかろう。もとを正せば、あいつらがごち

やごちや言ったのがアレなんだし、助けてもらおう。給料アップを要求する。

「これで文句ねえだろ。行くぞ」

「ありがとうっ！ お兄さん素敵！」

ええい、子供ながらに現金な奴だ。まあ、これで俺たちも避難出来る。一体、何が起こっているってんだ。

階段の方に向かうと、上方から爆発音が聞こえてくる。一度足を止め、天井を見上げた。

考えるまでもなかったのだろう。やっぱり、あの女の子だ。彼女が、何かをしたんだ。そうとしか思えない。このまま階段を下り、外に出て、家に帰ってしまえば良い。そうだろ。そうに違いない。

「……レン、先に外まで行ってる」

「お兄さんは？ お兄さんはどうするの？」

危険なのは分かっている。だが、俺たちを襲った相手の正体を確かめたかった。戦おう。そんな無茶は言わない。少し、見るだけだ。こんな機会は滅多にない。

「やっぱり、釣りをもらってくる」

「あははは、かっこわるーい」

「そういう訳だから、良い子にして待っていてくれな」

レンはこっちを見上げている。心ん中まで見通すように、じっと。言つとおりにするから、すぐに戻ってきてね」

「あいよ」

「絶対だよ！」

レンは階段を下り、振り返りかけたが、結局、そのまま駆け下りていった。

一つ上のフロア、六階はおもちゃ売り場だった。だった。

商品は粉々になって吹き飛ばされている。床にはロボットの足や、

レンや九重の好きそうなぬいぐるみが中身を撒き散らしている。数枚のトレーディングカードが舞い、落ちていく。壊れ、散らばる。砕けて、舞う。ガキのおもちゃがこれ以上ないってくらいにくちゃぐちゃになっている。気持ちの悪い光景だった。癩癩を起こしたクソガキのおもちゃ箱のような世界が、眼前に広がっている。

おもちゃ箱の中央には、杖を持った少女が立っていた。

真っ赤なドレスに身を包み、右手にはメタリックな杖を持っている。その杖の先端には、八つの角を持つ、星形のようなエンブレムがくっついていて。俺たちを襲った奴が持つてるものとは違うが、同じタイプのもつても良い。やはり、彼女がそうなのだ。

物陰から少女を観察していると、どうにも、分からない。動かないまま、虚ろな瞳を床に向けているだけなのだ。悔いている、そういった様子ではない。

何なんだ？ 目的は。理由は。何を狙って、こんな事をしたんだ。

「リリー」

「なーに？ 次は下をこっぱみじんにしちゃおうか？」

「命令？」

「ちがうよーう！ でも、やっちゃっても良いんじゃない？」

杖の方が人間味があるってのは、どういうこった。しかも、やけに物騒な事を可愛い声で抜かしやがる。

あの杖、どういう仕組みで動いてんだ？ 持ち主と会話も出来ているし、プログラムにしちゃあ人間臭過ぎる。……爺さんが知ったら、何て言うかな。どうしよう。あのジジイがあんなもんを作り出したら。流石に嫌だ。

「あーっ！」

杖が大声を上げる（我ながら、何か変な言い方だ）。

「大変だよスターアニスっ、大変大変！」

少女はゆっくりと顔を上げる。

「熱源反応感知！ あっちに誰がいるよー！
は？」

「了解」

『やつちやえ撃つちやえぶつ殺しちゃえ！ ダイナマイトエキスプローションを使っちゃえ！』

「了解」

少女が杖をこつちに向けた。ん？ え？ こつち？ 俺じゃあ、ない、よな？

杖の先端、八角形の星がスライドしていく。ぽっかりと開いた穴からは、何かが覗いている。

『あの男の人をぶつ殺せー！』

うわあ！ 俺だ！？

逃げ出そうとして背を向けると、音が迫ってきた。火薬の臭いが鼻をかすめていく。瞬間、背中が燃えたように感じられた。熱を受け、俺は床に転がる。

『追撃だよスターアニス！』

「了解」

「あつちいい！ くつそ嘘だろオ！」

服は燃えてなかったが、背中がめちゃくちゃ熱い。真つ赤に燃えるものが見えて、俺は四つん這いで逃げ出す。

「うおおおおおおおっ！？」

壁に火球が激突する。破裂し、霧散していくそれは少女の持つ杖から放たれたものだろう。

いかん、やばい。全く、殆ど何も分からないまま逃げ出す事になりそうだ。が、死ぬよりマシだ。焼かれるなんてすんげえ嫌だ。どうせやられるなら一思いに、楽に殺して欲しい。

『逃がしちや駄目だよ！』

足音が聞こえてくる。ここに来たのを後悔する。一刻も早く逃げ去りたいが、エスカレータや階段に向かうのはまずい。そこは見え過ぎる。逃げるより先に攻撃を受けちまう。火の球ぶつけられたらひとたまりもない。物陰から物陰に身を隠し、隙を窺いながら逃げまくる。

「きゃはははははははっ、やっちやえスターアニス！ 標的は戦意は喪失してるよ！ どんどんやっちやえ！」

煽る杖。ふざけくさってボケが。

「了解」了解じゃねえだろ！

火の玉がフロア中を飛び回っている。しかも狙いは的確だ。少しでも足を止めりゃあ、次の瞬間に俺は火だるまになっちまうだろう。少女はエスカレーターと階段が見える位置に陣取っている。駄目だ。ちよつと休憩。

「あーっ、あいつ仲間を呼んでる！」 何だつて？ 仲間？ もしかして、誰かが来てるのか？ ……レンだ。そうに違いない。あの馬鹿、大人しくしてろって言ったのに。お尻ペンペンだな。

少女がエスカレーターに杖を向ける。影が見えた。レンじゃない。彼にしては背が高過ぎるのだ。

「スターアニス、先制攻撃だよ！」

「了解」

「なっ、おいちよつと！」

もしかしたら、事情を知らない客かもしれないし、スーツを着てない警備員かもしれないんだぞ！

が、少女は俺の声になんか耳を貸さない。火球が放たれる。俺は思わず目を瞑った。しかし、いつまで経っても、熱さに苦しむ呻きや叫び声は聞こえてこない。恐る恐る目を開けると、

「あら、また会ったわね」

「な……？ あんたは」

「何、その口の利き方は」

あの、主婦が立っていた。

私はヒーローなんかじゃない

黒髪をポニーテールに結った、三十代くらいの女性は、前に俺が見たのと同じように、花柄のエプロンをして、エコバッグを持っていた。そのバッグからは、ネギがびよこんと飛び出している。

主婦はあのメカメカしい杖を軽く振り、俺を見遣った。

「こんなところで、また巻き込まれちゃったの？」

怜悯な瞳。それでいて、声には温かみがある。俺は、彼女に気圧されていた。

「良かったわね、助かって。命は一つしかないもの」

『何あのおばさん！ やばいよスターアニスつ、あの人私を持つてる！』

少女の両目が主婦に向く。

『早く倒さなきゃ！』

「了解」

『ファイアパレードを使っちゃえ！』

頷き、少女は杖をくるくると回転させ始めた。

「君」

「え、あ、はい？」

「腰が抜けて動けないなら、そこでじつとしてなさい」

流石にそこまでビビっちゃいないが、俺はこの人に用がある。ここまで来て逃げられるかってんだ。

主婦は杖で床を叩く。

「立て、シャクヤク」

『……起動完了。状況把握開始』

「アレを倒したい。力を貸しなさい」

『了解。状況は甲、ブレイブシュートの使用を提案』

「却下よ」

却下すんのかよ。

と言うか、あの人は何をしてるんだ？　そして、何者なんだ？
あっちの少女とは敵対しているらしいが。

「リリー」

『うんっ、いつくよ！　ファイアパレード！』

少女は杖を回転させている。杖の先端、開いた穴から、炎の塊が次々と飛び出してきた。だが、主婦は動揺した様子を見せない。彼女が自身の杖を振り上げると、その杖の先端についた星形のエンブレムがスライドしていく。開いた穴から、風が生まれた。

『状況、乙。対象を吸引開始。後、反攻の提案』

放たれた火球は、次々と穴の中に吸い込まれていく。まるで掃除機だ。とんでもない吸引力である。しかも、あの杖は少女の撃ち出した炎だけを吸い込んでいるのだ。

『むちゃくちやだよ！　スターアニスっ、攻撃を続けて！』

「了解」

『ようし！　次は……』

炎が止む。その隙を見逃さず、主婦は床を蹴っていた。少女のこめかみに、自らの得物を叩きつける。

『スターアニスッ』少女は杖こそ手放さなかったが、ぐしゃぐしゃになったおもちゃの山へと吹っ飛ばされた。主婦は自分の杖で床を叩き、得物に向かって何事かを呟く。

『状況、丙。音声認識、六パーセント。ソニックスマッシャー、発動』

主婦の持つ杖から、風を切るような音が生まれた。不可視の何か、少女に向かっていく。おもちゃの山が吹き飛ぶと、甲高い声が響き渡った。少女の持つ杖の発したものだろっ。

『動かなきゃ駄目だよスターアニス！　じっとしてたらやられちゃう！　やられちゃ駄目っ、やらなきゃ！　あの人を殺さなきゃ！』

少女は片膝をつき、片腕で顔面をカバーしている。まだ、戦おう

と言っのか。

「それを離したら、許してあげる」

主婦が少女に向かって足を踏み出す。

『状況、丙。ソニックスマツシャーの使用を提案』

「却下よ」

『それ以上近づかないで！ それ以上近づかせちゃ駄目っ、ダイナマイトエクスプロージョンで吹き飛ばしちゃうおう！ そうしないとやられちゃうから！』

立ち上がるうとするが、少女の足は震えていた。力を込めようとしているらしいが、よろけて、また膝をついてしまう。勝敗は決しているようなものだった。

「リ、リリー……」

「早く離しなさい」

『ここでやられたらパパに会えなくなっちゃうんだよ！？』

杖が少女に呼び掛けたと同時に、主婦は彼女の胸に蹴りを放った。その時の衝撃で、少女は杖を手放してしまう。

杖は床を滑っていき、瓦礫と化したおもちゃの山の前で止まった。『スターアニスっ！ 諦めちゃ駄目だよ！ 早く私を拾って！ 戦わなきゃ！』

少女は小刻みに震えるだけで、杖の声には答えない。主婦は彼女を見下ろしてから、杖を拾い上げた。

『わあああつあなたじゃない！ 触らないで！ 触らないでよっ』
主婦は杖を振り上げ、床に叩きつけようとする。

「その声で、それ以上……！」

『だめだめだめだめーっ』

『そこまでだよ！』

もう一つ、甘い声が聞こえたかと思えば、主婦の腹に何か突き刺さった。彼女は持っていた杖を取り落として、その場に蹲る。

『あーっ！ デルフィンウムちゃん！』

振り向けば、そこには少女が立っていた。倒れ、震えている、赤

いドレスを着た少女と大して変わらない。違いと言えば、ドレスの色と持っている杖だ。髪型も、背丈も、殆ど同じである。新たに現れた少女は、青いドレスに身を包み、彼女の持つ杖の先端に付いたエンブレムは花に見えた。何だか、イルカみてえな、変な形をしたつぼみがたくさんくつついている。

スターアニスと、デルフィニウム。

杖は、少女たちをそう呼んでいた。

「何やってるの？ アニスちゃんを危ない目に遭わせたら駄目じゃない！ リリーのバカ！」

「えへへへ、ごめんオトメ」

杖同士が、会話をしてやがる。だが、それを持つ少女は一言も発していない。

「デルフィニウム、あのおばさんをやっちゃおう！」

「駄目だよつ、スターアニスが危ないもん！ 早く逃げようよ！」

デルフィニウムと呼ばれた少女は、床に転がったままの杖を拾い上げ、スターアニスに肩を貸して、起き上がらせる。事務的な動作に見えて、どこか、薄ら寒かった。機械が人間の振りをしているような気がしたのである。

「……待ちなさい……！」

「わーっ、怖い！ 早くいこつ、パパに慰めてもらわなきゃ！」

「了解」

二人の少女は頷き、主婦に背を向けて、こっちに向かってきた。

「あ。あの人はどうしよつか」

「別に良いんじゃない？ それより、早く逃げよう」

少女たちはこっちを見ず、エスカレータを使って階下に行く。それを止める術など、誰が持っているというんだ。俺には無理だ。何も出来ん。

俺の頭は、二人の「杖持ち」が現れた事に、暫くの間ついていけなかった。だが、主婦が蹲っているのは分かっている。彼女に駆け寄り、手で押さえている腹に目を遣った。主婦は、何かを握っている

る。そいつが小さな鉄球で、彼女はその球を喰らったのだと俺が気付くまで、少しの時間を要した。

「……立て、ますか？」

主婦は何も言わず、鉄球を投げ捨てて立ち上がる。正直に言って、かなり怖かった。

「アレはどこに行っただか、分かる？」

「アレ？ アレって、何だ？」

「さっきの二人よ」顔をしかめつつ、主婦は自分の杖を軽く振る。それをエコバッグに戻し、ネギを模したカバーを被せた。

「いや、それより、動けるんすか？」

デルフィニウムと呼ばれた少女。彼女が杖から放った鉄球を、この人はモロに喰らってた筈だ。

「平気」言って、主婦はエプロンを指差す。

「……これ、スーツみたいなものだから」

「あー、ああ、なるほど。だから、そんなもん着けてたのか。」

「あなたも早く避難なさい。アレ、何をするか分からないわよ」

「追い掛けるんすか？」

「返事はないが、そうなのだと分かった。」

「あなたには関係のない事よ」

「短く言って、主婦はエスカレーターに向かう。」

「関係ならありますよ」

主婦は足を止め、エコバッグの杖に手を伸ばした。

「俺は、あいつらに殺され掛けたんだ。それも、二度も」

「二度？」

「事情があつて、俺もあの杖持ちを追ってるんです」

「……どういう事情？」

「あなたには関係のない事ですよ」

笑ってみせると、主婦は振り向き、杖から手を離す。彼女は全く笑っていなかった。切れ長の瞳が俺を捉えている。

「二度も助けてあげたのに？」

「それは、ありがとうございます。マジで、助かりました」

下の方が騒がしくなってきた。この場に留まっても、面倒な事になるだけだ。そう思ったのは、どうやら俺だけではなかったらしい。主婦は階段を指し、歩き始めた。

「喉が渴いたわね」

俺は少しだけ考え、彼女の後を追いかけた。

「どござ」

「どうも」紙コップを受け取る主婦は、にこりとしなかった。

屋上には強い風が吹いている。主婦はベンチに座っており、俺もその隣に座ろうかと考えたが、彼女は『まずい』と呟いた。俺は立ったまま、フェンス越しの空を見遣る。

さて、何から聞こうかと考えていると、向こうから口を開いた。

「あなた、何者なの？」

「ヒーローです」

「……スーツも、武器もないのに？ 私みたいなおばさんに助けられたの？」

うるさいな。気にしてる事をさばさばと。

「れっきとしたヒーローですよ。派遣会社にも入ってますし」

主婦は横目でこっちを見てくる。信じられないとでも言いたげだった。

「ふうん、正義の味方って訳。それで、あいつらを追っているの？」

「そんなところです」

「深くは聞きたくないけれど、よしておきなさい。命は一つよ。それに、あんなの相手じゃ、幾らあっても足りないと思うわ」

「あなたは、どうして？」

その通り。何もかもこの人の言う通り。だが、ならば、彼女があの少女たちを追う理由は何だ？ 危険な相手だと分かっているながらも戦おうとするのは、何故だ？

「ヒーロー、なんですか？ だから、あいつらを」

「違うわ。私はヒーローなんかじゃない」へっ？

「悪人でもないと思うけど、自分は正義の味方だなんて言うつもりはないわね」

皮肉っぽく笑むと、主婦は紙コップを空にする。

「じゃあ、何なんですか？」

「ただのおばさんよ」嘘だ。

「何か、理由が？」

「聞きたい？ 教えないけど」

そう言って小さく微笑む。その表情は童女のようにも見えた。

「ここまでね。お願いだから、あいつらと関わり合いにならないで。折角助かったんだから、わざわざ死に行く必要はないでしょう」

主婦は立ち上がり、俺に背を向ける。

「あの。助けられてありがとう、ございました。でも、俺はギリギリまで追いますよ」

そうしなきゃ、いつかこっちがやられちゃうかもしれないんだ。

穴倉に隠れてりゃ安全かもしれないが、やられっ放しは俺の性に合わねえらしい。ここまで首を突っ込んで、引っ込められるか。

「あら、そう。賢くないのね。……あなた、お名前は？」

俺は迷った。ここで名乗っても良いのか、どうか。

「ふふ、自己紹介するような間柄でもないわね。今更。何より、もう会わないと思うし」

「……青井、正義。ヒーローです」それから、悪の組織の戦闘員をやっています。

主婦は僅かに目を見開く。こっちが名乗るとは思っていなかったらしい。

「百鬼牡丹ひゃくきたんよ。主婦をやっているわ」

「もぎ……」

「百の鬼でもぎと読むの」

良くお似合いです。なんて言ったらどうなるんだろうか。

「それじゃあね、ヒーロー君」

百鬼さんは振り返らない。あのまま、杖持ちを追うのだろう。…
…彼女は、しきりに腹を摩っていた。あのエプロンがスーツの代わりをしていたとは言え、やはりノーダメージでは済まなかったのである。だからこそ、百鬼さんは俺の話に乗った。少しでも体を休めようとしていたのかもしれない。休めたところで、怪我が治る訳ではないが。

取り残された俺は頭を振る。前に進んだような気がして、少しだけ気持ちが悪くなった。徐々に、杖持ちとの距離は縮まっている。奴らの狙いは全く分からんが、通り魔的な事をやられちゃあ困る。一刻も早く消えてもらって、平和的に悪の組織の活動に勤しみたいってのに。

俺も行くか。何か忘れていているような気もしているけど、忘れてるって事は、つまりどうだって良い事だ。そうに違いない。

行けたら行きます

俺の前にはカップラーメンと缶詰が置かれている。今日の晩御飯である。何だか怪しい。今まで、良いものを食べてたんだなあ実感する。

「なあ、機嫌直せよ」

レンはまずそうにカップ麺を啜っていた。

「悪かったって。いや、あんな事があつたからさ、つい忘れてたんだよ」

「……伸びるよ、それ」

くっ、家事を放棄されてしまっている。この野郎、さっきからずっと謝ってたろうが。しかし強くは出られない。何故なら、レンをこれ以上怒らせると俺の命がなくなってしまうからである。

とりあえず、麺を啜った。懐かしい味である。そういや、即席のもんは久しぶりだな。

「缶切りは？」

「何？」

「缶切りだよ、缶切り」

レンは俺を睨んだ後、缶詰に手を伸ばす。何をするのかと思えば、素手で蓋をこじ開けやがった。

「これで良い？」

「あ、うん。大丈夫です」

静かな夕食時だった。それにしても、物足りない。白米が食いたい。肉が食いたい。味噌汁が飲みたい。

「俺が悪かった」

レンは既に布団を敷いて眠った振りをしている。当たり前だが、

俺の分は敷いてくれなかった。

一度上がった生活水準が落ちるのは耐え難い。温かい食事の魔力には、誰だって逆らえないのである。そうに違いない。

「お願いだから許してくれよ」

「ヤ」

そろそろ組織にも行かなきゃならんというのに。

もう良い。勝手に不機嫌になってる。バーカ。

「仕事に行くけど、ちゃんと留守番してろよな」

「勝手に行けば良いじゃん」

行くなと駄々をこねられるよりは楽かもしれん。不安は残るが、仕事は仕事。とりあえず、出かけるでしょう。

活動可能な数字付きは、今のところ十一人。最初にやられた二人が復帰するまでは、大した仕事も出来ないだろう。

「帰ってよし」

組織に顔を出したのは良いが、俺以外の数字付きは殆ど来てなかった。江戸さんにも帰宅を許可され、俺は困ってしまう。正直、家に戻るのとはかつたるい。レンが起きてたら、不機嫌な奴の相手をしなくちゃならない。かと言って、仕事がないんじゃないやあな。

どうする？ 杖持ちについて話を聞くか？ 情報はゼロじゃない。杖持ちは三人。スターアニスとデルフィニウム。彼女らが持つ、幼女の声を発する杖。そして、杖持ちを追いかける百鬼牡丹。もしかしたら、何か知ってる奴が組織にいるかもしれない。

「どうしたんだね、青井君」

「あの、杖持ちについて、何か分かりましたか？」

「ああ」と呟き、江戸さんは書類から目を離す。

「今日、街のデパートで破壊活動をしていたという話は聞いたよ。知っていたかな？」

「知りませんでした」

「今回の事で、杖持ちの標的が分からなくなったがね。スーツを着た者を狙っていると踏んでいたのだが、そのデパートにヒーローや戦闘員はいなかったようだ」

「そういや、そうだ。あの時、俺やレンはいたが、スーツを着ていなかった。杖持ちは、他の方法でヒーローたちを認識しているのかもしれないが。もしかして、あいつらの目的は百鬼さんだったのか？ ……いや、それにしちゃ順序が逆だ。第一、あの杖は百鬼さんの出現を快く思っていないかった節がある。いかん。いかんぞ。ますます分からなくなった。」

「目的を伴わない力と言うのは恐ろしいものだ。止まる理由も、止める手段も見当たらない。ただ、こちらも力を以って打ち破る事しか出来ないからね」

「ウチとしては、やっぱり様子見ですか」

「君たち数字付きには申し訳ないが、私はそうするべきだと思ってる」

「可能なら、他の誰かが杖持ちを黙らせるか。あるいは、弱らせてくれるのを待つか。江戸さんは待つ事を選んでる。俺みたいな下っ端と違って、彼は一部隊を束ねる器の持ち主なのだ。おいそれと自らの戦力を削るような真似はしない。」

俺は、江戸さんじゃあない。彼のように賢くない。

「また何か分かったら教えてください」

「そのつもりだ。君も、何か掴んだら教えて欲しい」

「分かりました」

やはり、江戸さんに話を聞くのはよしておこう。それよりも、俺みたいな下っ端か、こう、ふわふわしたような奴から話を聞く方が良さそうだ。

俺以外にこの組織でふわふわしてる奴は山ほどいる。だが、杖持ちについて知っている、と言う条件を加えると、その数はぐんと減

るだろう。更に言えば、俺が気安く声を掛けられる人間ってのもないのである。

「よう爺さん、生きてっか」故に、爺さんだ。

いつもながら、何をやってているか良く分からん部屋である。こんなたくさんのパソコン、何に使って言うんだ。一つで充分だろ。

爺さんは何か食っていた。晩飯にしては遅い時間だが、彼は不規則な生活をしているので、気にする事もないだろう。何を食っているのかと思えば、錠剤である。小さな瓶からそいつを取り出し、口の中にざらざらと放り込んでいた。

「ビタミン剤か何かか？ 健康が気になるなら、もっとマシな生活を送っちゃあどうだよ」

「ふん、悪の組織の戦闘員が説く事か」違いない。

「またエスメラルド部隊は仕事がないのか？」

まあな。また、とは聞き捨てならねえが。

「エスメラルドのところは部下に甘いくらいがある。戦闘員なんぞ、所詮使い捨てじゃ。そこを分かっておらん」

「爺さんには分かんねえだろうよ。それより、ちょっと話でもしようぜ」

「青井。お前と話しても実りは得られん。時間を空費するだけで終わる」

「つれない事言うなよ」。

「喋る杖って知ってるか？」

「杖が喋る？ どういうシロモンじゃ、そいつは」

俺は、百鬼さんや杖持ちの得物について爺さんに話して聞かせた。最初こそ馬鹿にしていたような態度だった彼だが、次第に興味が湧いてきたらしい。何かをメモしたりし始める。

「杖持ちか。そいつらの得物というのは、本当に喋るのか？ ただ、音を発するだけではないのか？」

「いいや。ありゃあ違う。自分の意志みたいなのを持ってるように見えませ」

「音声によつて戦闘をサポートする武器か」

考え込むように眉根を寄せ、爺さんは唸った。

「ない事もない。じゃが、そこまで滑らかに、お前程度とは言え、生きているようだ」と認識させるほどのものは聞いた事がない」

一言余計だ。

「しかも子供の声で、だと？ 悪趣味極まるな。わしでも思いつかんわ。思いついたとして、実際に作るうとは思わん」

「まあな。中々、気持ちの悪いもんがあった」

「やはり天才とナントカは紙一重じゃな」

うんうんと、一人納得したように頷く爺さん。まさか、自分もそこに入れてるんじゃないだろうな。

「心当たりはねえか？ そういうのを作ってた奴とかさ」

「そんな奴がおれば、どこかの組織が欲しがる筈じゃがな。生憎と、わしには何も……」

「……じゃあ、百鬼つて名前に聞き覚えはないか？」

「百鬼？ もぎ、もぎ……」

爺さんはボケちまったみたく、同じ言葉を繰り返す。俺は少しだけ不安になった。

「百鬼、草助くさすけ」

「何だつて？」

「ああ、思い出した。おつた、おつたわ。間違いない。ふん、なるほど、奴なら出来るだろうな」

俺にも分かるように説明してくれよ。百鬼草助つてのは誰なんだ？

「変態じゃよ」何？

「その点はわしと似通つておる。百鬼は、趣味でスーツを作つていたんじゃ」

「趣味、だあ？ そんな奴がどこに」

言い掛けて、俺は爺さんを見る。そんな奴がここにもいたんだつた。

「確か、一度だけ見た事がある。数年前、ウチの技術部に売り込み

に来ていた男がおった。通り掛かったわしも審査する為に呼ばれたな。百鬼は、趣味で作ったスーツと武器を持参して追いつ返されたんじゃない」

追いつ返された？ いや、でも、どこの組織だつて欲しがるとか言つてたじゃん。

「変態だと言つたらう。百鬼が持つてきたスーツは、ヒーローのそれだった。しかも、子供向けのものよ。可愛いドレスでな。は、悪の組織の誰が着ると言うんじゃない」

数年前に、あのスーツが完成していたのか。しかも、ウチに持つてきてたらしい。

「杖は？ 杖はどうなんだよ？」

「喋つておつたよ。ただ、お前の言つたものとは違ふ。機械的で、無機質な声だった。とてもじゃないが、生きているようには思えんかつたな」

これは、アレか。もしかして、繋がり掛けるのか？ 百鬼なんて苗字、滅多にねえだろ。あの主婦と、その発明者、関わりがあるに違いない。

「その百鬼草助つて、歳は幾つだった？」

「若くはない。が、わしよりも若い。そうさな、四十か、その手前といった風に見えたな」

兄。弟。父。いや、多分、違ふような気がした。百鬼草助は、きつと、あの人の……。

「お前たちの言つ杖持ちと百鬼草助が関係あるのか？」

「ああ、十中八九な」

杖は大方、草助つて野郎が作ったもんだらう。百鬼さんがあいつらを追いつ掛けてる理由ははつきりしないが、少しは見えた。あるいは、協力者なのかもしれない。あの少女たちは、草助の作ったであろう杖を持つている。だが、彼の敵か味方がまでは分からない。……あれ？ 分からない事が増えてねえか？

「爺さん、百鬼草助の居場所は？」

「知るか。だが、ありふれた名前ではなからう。自分で調べてみよう」と言うか、初めからそうしてりゃあ爺さんに嫌味を言われる事もなかったのでは。馬鹿、俺。

百鬼牡丹。百鬼草助。

両者の繋がりを調べる。うん、調べるぞ。けど、どうすりゃ良いんだ？ 第一、何から調べれば良い。えーと、どこで調べりゃ分かるんだ。誰に聞けばオツケーなんだ？ 駄目だ。さっぱりだ。こういうのはプロに頼もう。

とりあえず、一度家に帰ろう。まだ電車は動いてるし。……家には鬼がいるが。ま、まあ、眠ってくれてるのを祈ろう。

電車に乗ってがたんごとん。駅前に着いたは良いが、すぐには帰りたくなかった。もうちょっとぶらぶらしていたい。幸い、力は有り余っているんだ。夜の町並み的な。隠れ家的なバー的なところに行くのも良いかもしれん。そうだ。あのマスターの店に行くというのはどうだろう。しかし、俺は財布の中身を思い出し、愕然としてしまった。おしっこ漏らしそうになった。家計として、レンに金を預けていたのである。いや、そりゃ全額じゃないよ。俺だってあいつを百パー信じてねえもん。だから八割くらいしか渡してないっつーの。そらそうだろう。

「イダテン丸におごってもらおう」

思い立ったが吉日だ。ケータイを取り出し、イダテン丸の番号に掛ける。まだ日付が変わったところだし、起きてるだろう。

「……………何か」

「あ、俺。今、暇？」

「いえ、私は今漫画を読むのに忙しいのです。知っていますか青井殿。月明かりの下で読む漫画というのは」

「目が悪くなるぞ。漫画読んでるって事は暇って事だよな。ちょっと駅前まで出てきてくれよ。そんで酒を呑もう」

『……………行けたら行きます』

小学生みたいな便利な断り方すんなや！

「頼む。今、家に帰りたくない気分なんだよ。金は返すから、今晚はよろしく頼む」

『……………そういう事でしたか。しかし、私はアルコールと相性が悪いのです』

「じゃあ、俺が飲んでるのを見ているだけでも良い」

『青井殿にはご恩がありますが、そのような物言いで……………』

「ごめん。ちよっと調子に乗ってた」

でもさー、頼れそうなのはお前しかいないんだよー。数字付きはどうせ呼んでも来ないしー、下っ端の戦闘員の同僚は、誰かのおこりだと分かるまで電話にすら出ないんだよー。

「それから、頼みたい事もあるんだ」

『……………分かりました。すぐに参ります。しばしお待ちを』

「悪いな」

酒を飲めるし、イダテン丸には百鬼について調べてもらおう。忍者だし。俺よりはプロっぽい。

あ、怒ってたんだけ

イダテン丸に振舞われたのは缶ビールだった。文句？ ある訳ないじゃん。

今日の彼女は私服だった。野暮ったい格好である。眼鏡分厚いし。流石に、スーツを着た奴と一緒に酒を飲むのは嫌である。

「……………ご不満ですか」

「まさか。酒つてのはおごりで飲みりやそれだけで美味しい」

コンビ二の前で、俺は缶を開けた。ああ、この音だ。良い。

「いただきます」一気に飲む。

「では、私も」

イダテン丸も、案外良い飲みっぷりだった。

「相性が悪いんじゃないのかな？」

「……………軒猿を抜けてからは断っております。酔い潰れて、そこを追っ手に襲われるのが恐ろしかったです」

「じゃ、今は大丈夫なんだな」

「そう、ですね」

イダテン丸は周囲に目を遣った後、缶ビールを飲み干す。俺も続いた。

「ごちそうさん。…………頼みたい事があるんだけど」

空き缶をゴミ箱に入れて、俺は頭をかく。今更だが、おごってもらった上で物を頼むのはどうなんだ。いや、頼むけどね。

「百鬼草助って奴を調べて欲しいんだ。そうだな、出来れば、そいつの住所、とか」

「…………理由を聞いてもよろしいですか」

どこまで話して良いものか。杖持ちについて、イダテン丸だってある程度は知っているだろうが。

「……杖を持った女の子、知ってるか？」

「イダテン丸は首肯する。」

「無差別な破壊、襲撃を繰り返す者ですね。聞き及んでおります」

「そいつらと関係があるかもしれないんだ」あるかも、じゃなくてもある。俺はそう睨んでいる。

「……カラーズの仕事ですか？」

「いや、違うけど」

俺がそう言うと、イダテン丸は黙り込んでしまった。

「あ、断ってくれて良いぞ。その、申し訳ないが、大したお礼も出れないと思う。いや、間違いなく出来ない」

「いえ、百鬼草助の調査、引き受けます。ただ、青井殿は本当にヒーローなのだと、そう思ってます」

「俺が？」俺がヒーロー？馬鹿な。どの口で言うんだ。

「よせよ。俺なんかヒーローだと、その辺の悪党だってヒーローになっちまうぜ」

「……私を救ってくださったのは、あなたです。だから、少なくとも、私にとって、青井殿はヒーローなんです」

う。ううう。何か、照れ臭い？いや、気持ち悪いっつーか、こっ、ぞわつとした。俺は別に、イダテン丸が想像してるような理由で動いてる訳じゃない。ただ、杖持ちが邪魔なだけなんだ。そんなもってム力つくだけだ。それだけだ。それだけなんだぞ。

翌朝、俺はいつもよりも遅い時間に目が覚めた。レンが起こさなかったからである。ついでに言うと、彼がご飯を作ってくれなかったからである。

目覚めた時、レンは不貞寝を決め込んでいた。実に分かりやすい。ガキは単純だから、一晩経てば機嫌だつてそっくり回復してるだろうと思っただのに。難しいものだ。そして困った。

「朝だぞ」

「そうだね」一応、返事はやってくる。交渉の余地はあった。レンとの溝が断絶している訳ではないのだ。めちやくちゃ広がってる感じはするけど。

何か作ろう。ジャムが残ってたし、めんどいから食パンを焼くだけで良いや。

「腹減らないか？」

「……減ってない」あ、今、嘔吐いたな。そこを突いたら暴れそうだから何も言わないけど。

イダテン丸は、上手くやっているだろうか。いや、俺が心配するような事でもないか。俺に心配されるような彼女ではない。

トースターに食パンを突っ込んでいるとケータイが鳴った。けっ、警戒！ 社長からの『仕事しろ』メールかもしれん。無視しよう。何か、そういう気分じゃない。でも後で怒られるのは嫌だから、確認だけしてみる。と、イダテン丸からのメールで安心した。何々、用件は……『百鬼草助の住所を掴んだので、今からそちらに向かっても良いですか』、か。

早いな。すげえ早い。すげえ良い仕事。もしかして、昨夜、俺と別れてから調べたんだろうか。そこまで急がなくても大丈夫なのに。何だか、昨日からめちやくちゃ申し訳ないな。

「何笑ってるの？」

「へ？ や、笑ってたか？」

レンが布団から顔を覗かせている。

「つーか、別に笑っても良いだろ。悔しかったら感情抑制薬でも持ってこいってんだ」

「そんなの、あるの」
知らんわ。

「だって僕が怒ってるのに、楽しそうにしてるから」

「あ、怒ってたんだ。怒ったら腹減るだろ。ほら、ジャム塗ってやるから食べるよ」

「たっ、食べない。食べないもん」

レンは頭から布団を被った。強情な奴である。まあ、後で食うだろ。焼いとくだけ焼いといてやるか。

ぼけつとしながらパンを頬張っているとチャイムが鳴った。口の中のもんを飲み込んでから扉を開けると、イダテン丸が立っていた。昨夜と殆ど変わらない格好である。

「……………お待たせいたしました」

「いや、早過ぎるくらいだよ。つーか、もう分かったのか？」

「電話帳に載っていたものですから」

え、えー、そんな簡単に見つかったっちゃうもんなの？ それで良いの？

「住所は押さえてあります。これを」

イダテン丸は折り畳んだメモ帳を差し出す。そいつを受け取り、広げると、確かに住所が書かれていた。しかも、そんなに遠くない。記憶違いでなければ、あの商店街の近くだ。百鬼草助は、そこに住んでいるらしい。

「……………ご満足いただけましたか」

「期待以上だ。あー、それで、お礼なんだが」どうしよう。どうしたら喜ぶかな、こいつ。

「と、とりあえず朝飯でもどうだ？ パンだけど」質素だけど。

「よろしいのですか？」

勿論だ。

「上がつてくれ。すぐに準備すつから」

「……………それでは、お言葉に甘えて」

俺はイダテン丸を部屋に上げて、食器棚から使っていないコップを出す。そこに牛乳を注ぎ、焼き上がった食パンにジャムを塗る。

「そこまでしてくださらなくとも……………」

「いやいや、これぐらいは」

「おや、レン殿はまだお休みでしたか」

見ると、レンは完全に布団に包まっていた。もはやそこに誰がいるのかどうかすら怪しい。もしかしたら、中から猫が出てくるかも

しれない。

「拗ねてんだよ。寝た振りしてる」

「……………珍しいですね。お二人はいつも仲が良いですから」

「どこが！ だけど、すぐには言い返せなかった。俺からすりゃあ、ライオンやグリズリーみたいな猛獣に殺される一歩手前までじゃれつかれている感じなんだが、傍目からだど兄弟喧嘩とかに見えるんだろうか。」

イダテン丸が帰った後もレンは布団から顔を出さなかった。挨拶くらいはしろ。親の顔が見てみたい。

心配だったが、どうせ声を掛けたって何を言っただって無駄なのだ。俺はレンを置いて（戸締りはしたしガスの元栓は締めたしお金だつて置いてきたし大丈夫だろう）、イダテン丸から受け取った百鬼草助の住所へと向かっていった。つっても、商店街の近くにある家、らしい。表札があるかどうか、そもそも、そこに本人が住んでいるかどうかは行ってみなくちゃ分からないところだが。

小一時間ほど歩き、商店街でコロッケを買い、食いながらうろろしてると、住宅街に差し掛かった。ベビーカーを押した若い女性。そこらの家からはガキどもの声が聞こえてくる。やかましいが、穏やかだ。本当に、こんなところにいるのか？

だが、立ち止まっていると怪しまれる。不審者として通報されないうよう、注意深く、時には大胆に歩くと、目的地に近づいてきた。その角を曲がると、百鬼草助の家に辿り着く。……………杖持ちがいなだらうな。良く考えりゃ、門番がいなくても限らん。それに、家の中からこつちの様子を窺っている可能性だつてあるぞ。のこのこと近づいてきたところをずどんといかれるかもしれない。やっぱり帰ろうか。いや、でも角を曲がればすぐに分かる事なんだ。ここで逃げてちゃ意味はない！ けど死にたくねえ。

「あら。誰かと思えば」ん？

エコバッグを下げた、黒髪の主婦が俺を見ていた。

「不審者かと思えば、ヒーロー君じゃない」

「あ、あれ、百鬼さん？」

百鬼牡丹。何故、彼女がここにいる。

「その家に用があるのかしら？」

百鬼さんは薄く微笑んだ。彼女が指す家は、角を曲がってすぐの……百鬼草助の家だった。庭付きの一戸建て。庭は、花でいっぱいだった。色とりどりのそれが訪問者を出迎えようとしている。何だろう。理想的、とても言うのか？

俺はもう一度、メモに目を通す。間違いなさそうだった。と言うか、表札には『百鬼』と出ている。間違えようがなかった。

「ふうん、ここまで来たって事は、色々調べがついているという事なのかしら」

百鬼さんは顎に指を添え、ほうつと息を吐く。

「……百鬼草助は、ここにいるんですか。そいつは、一体何を……」

「いないわよ。もう、ここにはね」

涼しげな顔が一瞬だけ、歪んだ。

「ここに住んでいるのは、私だけだから」

ああ、そうか。いや、やっぱり、か。何故、彼女がここにいるのか。そんなの、分かった。百鬼牡丹

と、百鬼草助は、

「それで、夫に何か用かしら？ ああ、元、だけどね」

夫婦だったのである。

何だか良く分からないまま、家に上げられ、リビングに通されてしまった。とんとん拍子。だが、正直、中に入った瞬間にぶん殴られたり、あの杖持ちが出てくるんじゃないかって想像してた。けど、どうやら無事に、何事もなく済みそうだ。

……何か、緊張する。そわそわする。殆ど初対面に近い相手の家

にいるんだ。しかも相手は人妻である。……何だか背德的。あ、い
かん。馬鹿か俺は。

気持ちを落ち着かせる為、俺はリビングを見回す。家具や調度品
を見るに、やっぱ、百鬼草助はここに住んでいたんだろうな。所々
に男っぽい影がある。そもそも、一戸建てだし。一人で住むには広
過ぎるような気もする。

テーブルに、椅子が三つ、か。ここには、痕跡があり過ぎる。そ
う、二人じゃない。多分、この家にはもう一人……。
「粗茶よ」

「は、はあ、どうも」カップとソーサーが目の前に置かれた。粗茶
と断言されたものに口をつける。何か、鼻がすーっとしてきた。ハ
ーブティー、とか、そういうオシャレなものなのだろうか。

百鬼さんは俺の対面の椅子を引く。きつと、そこが彼女の定位置
なのだろう。

「それで、何が聞きたいのかしら」

「……話してくれるんですか？」

「ここまで来たんだもの。それに、見つかったやつだし。引き下が
るつもり、ある？」

あんまりない。そもそも、声を掛けたのはそっちが先なのだ。

「最初に聞いたときたいんですけど。百鬼さんは、あの杖持ちの敵、
なんですよね」

「そうよ。あなたの味方とは限らないけどね」俺の意図を理解した
のか、百鬼さんは小さく笑う。

「安心して。あなたを酷い目に遭わそうなんて考えていないから
じゃあ、もう少し突っ込んだ事を聞かか。」

「何故、あの杖持ちを追うんですか？」

「許せないから」

「あいつらが何か……」

「別に。アレはね、単に使われてるだけだから」
使われている？

「私が追っているのは、ヒーロー君の言う『杖持ち』じゃないの。百鬼草助。私が追っているのは、奴よ」

奴、か。元とは言え、伴侶を奴呼ばわり。一体、百鬼草助は何をしたってんだ。

「……ねえ、商店街で会った時、車椅子に乗った子がいたわね」

「ああ、ありゃ、ウチの社長ですよ」

「そうなの？ ふうん、あんなに若いのに。若いって良いわよね。そう思わない？ 思わないか。君も若いし」

何の話だ。

「そう。その社長さん、あの子を見てたら、ちょっと考えてしまったの」

「何を、ですか」

「生きてたら、あの子くらいの歳なんだなーって。……娘がね、百合^り合^りって言うんだけど。娘がいたの」

百鬼さんは目を細める。ああ、何かを思い出してるんだと分かった。

「百鬼百合。二年前に殺された、私の娘よ」

彼女の声にぞくりとした。鳥肌があわ立つ。落ち着かなくて、俺は指をカッパに這わせる。とつくに、その中身は冷め切っていた。

あの子の声を聞き間違える筈、ない

百鬼さんの様子は先ほどと全く変わらないようにも見えた。声も震えていないし、涼しげな顔が歪んでいる訳でもない。だが、俺は恐ろしいと感じていた。

百鬼百合。

二年前に殺された、百鬼牡丹と草助の娘である。誰に？ どうして？ 俺が尋ねるよりも先、百鬼さんは話を始めた。何故、俺に話してくれようと思っただろう。彼女は、何を求め、何を望んでいるのだろうか。口を挟む余地は、ない。

「百合はね、まだ十歳だった。真つ赤なランドセルの似合う子だったわ。良く笑って、良く泣いて、良く怒って、ころころと表情を変える……そう、ね。見ていて飽きない子だった。まっすぐで、わがままも言わなくて。私も、あいつも、百合を可愛がり続けた。ふふ、目の中に入れても痛くないって言うでしょう。正に、そんな感じよ。私は、あの子の為なら、どんなに痛い目にだって遭ってみせる。あの子の為になるなら殺されたって構わない。そう思っていたの」

百鬼さんは微笑んだ。

「でも、あの子は殺された。もうこの世にはいないの」

「殺されたって、まさか、百鬼草助に、ですか？」

「まさか。あいつは百合に殺されてたって喜ぶようなイカレよ。そんな事する筈ない。あの子を殺したのはね、怪人だった。どこの組織にいたのかも分からない、チンピラよ」

怪人が。悪の組織の連中に、百鬼さんの娘は殺されたと言うのか。何だか、酷く胸が痛んだ。申し訳ないような気がして、ゲロを吐いちまいそうだった。

だが、怪人だって中身は人間だ。よっぽどの理由がなきゃ殺しな

んでやらない。もしくは、よっぽどの悪人だったか、だ。根っから腐った野郎も中にはいる。

「でもね、百合が殺された原因を作ったのはあいつなの」

草助が原因を。……作った？

「……スーツ、ですか」

「そうよ。あいつはね、スーツを作っていたのよ。信じられる？

趣味でそんなものを作ってたの。しかも、それを売り込んだのよ。

ヒーロー派遣会社にも、悪の組織にも」爺さんから聞いたのは、そこだ。草助はウチだけでなく、正義、悪に関係なくスーツを売り込んだのか。何と言えば良いのか。確かにイカレてやがる。

「そして、これもね」

百鬼さんはエコバッグからネギを取り出す。そいつをテーブルの上に置くと、重たい音が響いた。確か、シャクヤクとか呼ばれていた杖、だつたらうか。

「知っていると思うけど、これは持ち主の戦闘を補助する杖なの」カバーが外れると、中からはメカメカしいモノが現れた。

「それ、生きてるんですか？」

「そう見える？」

「喋る杖なんて珍しいじゃないですか。どういう仕組みで動いているのかなって」

「さあ？ 私も詳しくは知らないわ。ただ、認証は終わっているから、これは私の声で動く。戦況を確認し、把握し、案を出す。私はそれに従って戦ってきたの」

いや、むちゃくちゃ却下してたじゃないですか。

「それも百鬼草助が作ったんですよね」

「そう。そして、この杖と、スーツを渡したの」

「……あなたに？」

「いいえ」と、百鬼さんは目を瞑る。彼女が何かを押し殺しているように見えて、俺は視線を逸らした。

「百合に」

二の句が継げない。一体、何を話しているんだ。

「あいつは、スーツを百合に渡したの。ご丁寧に、シャクヤクとの契約まで済ませて、ね」

「けい、やく？」

「シャクヤクを使用するには、使用者の音声を認識させなければいけない。杖が声を覚えてしまえば、すぐには使用者を取り消せないし、変更出来ないの。それが、契約」

実の娘に、スーツと武器を渡した？ 俺には、その意味が理解出来ない。草助は、何がしたかったんだ。

「あいつは認められたかったのよ。自分で作ったスーツを、どこかの誰かに褒めてもらいたかった」

「それで、娘さんにスーツを？ 渡して、どうなるってんですか？」

「あなたもヒーローでしょ。分からない？ 力を認めさせるには、力を示すしかないの。あいつは、そう考えていたんでしょね。だから、百合にスーツを着せ、杖を持たせ、夜の街を往かせた。怪人を倒させる為に」

「嘘だ」

思わず、呻いていた。そんな奴がいるものか。そんな親がいるものか。

「信じ難い事に、あいつの目論見は上手くいつていたみたいね。今でも、十歳の子供に倒される怪人なんてものは信じられないけれど、けれど、そうみたい。私の知らないところで、百合は戦っていたの。戦わされていたのよ。信じられない。信じられる？ 無駄か。あなたに聞いたって分からないでしょうね。それとも、あなたには子供がいるの？ ああ、ごめん。ごめんなさい。いたとしても、分からないわよね」

何だ、それは。実の娘にクズになれと、死ねと言っているようなものじゃないか。そうして、百鬼百合は戦いの果てに息絶えた。その子が何を思い、何を考えて夜の街を歩いたのか、俺には想像も出来ない。

「百合がこの家からいなくなった後、あいつは姿を消したわ。残されたのは、この家と、お金と、杖と、私。それ以外には何もなくなっちゃったの。あいつ、スーツを持って行ったわ。何に使うのかと思っていたけど、こんな事になるなんてね」

草助は研究を続けていたのか。娘が死に、妻を捨て、スーツ作りに没頭したのだろう。そうして、出来上がったのがアレだ。感情のない少女と、甘く、高い声の杖。

おおよその事情は掴めてきた。百鬼さんは、草助を娘の仇だとして追っている。スターアニス、デルフィニウムは草助の盾なのだろう。それに、あの少女たちを追えば、いつかは草助に辿り着く筈だ。「あの女の子たちに見覚えはないんですか？」

「知らない。知ってても、私には関係ないわ。邪魔をするなら退いてもらうだけよ」

だが、細かいところまでは分からない。百鬼さんの話は、あくまで彼女視点からのものなのだ。だけど、まあ、全貌を知る必要はないだろう。問題は、俺の敵が誰なのか。その一点に尽きる。借りを返す奴もはつきりしてるし、ぶん殴りたい奴も出てきた。それだけで良い。スーツのないヒーローに出来る事は限られているが、チャンスさえあれば、どうにかしたいもんだ。胸糞悪過ぎる。悪の組織の戦闘員よりもクスじゃねえのか？ なんて、自分の事を棚に上げるつもりはねえけど。ねえ、けど。

「あの杖も、草助が作ったものなんですかね」

「そうですね」

「どうして、草助だと分かったんですかね」

百鬼さんは僅かに目を見開く。

「あなたの口振りだと、まだ百鬼草助には会っていないように聞こえるんですよ。あの杖持ちだって、得物が似ているだけで、もしかしたら草助と関係がないかもしれない。でも、あなたは彼女らを追い、その先にいる奴を追ってる。どうして、ですか？」

どこかおかしいのだ。百鬼さんが嘘を吐いているようには思えな

い。なら、彼女が『そうだ』と断定しうる何かがあったに違いない。彼女は何を知り、何を見たと言った。

「気になるの？」

「ここまで来たら、そりゃ、まあ」

「……そう。……ねえ、あなたも杖の声を聞いたでしょう？」

俺はテーブルの上に置かれたシャクヤクを見つめる。百鬼さんは違うと言った。

「あいつらが持っていた杖よ」

「ああ、あの気色悪い声ですか」ガキの声でぎゃんぎゃん喚いてやがったな。

「あの声は、百合の声よ」

真つ白になった。何かが。謝れば良いのか憤れば良いのか悲しめば良いのか哀れめば良いのか、何が何だか分からない。

「あの子の声を聞き間違える筈、ない」

百鬼さんは自嘲気味に口元を歪める。

「どこまでも歪んでいるのよ。だから、それを正したい。なんて言うつもりはないわ。私はあいつを許さない。それだけよ。ヒーローでも何でもない。正義だの悪だの、そんなもの関係ない」

復讐は何も生まない。そんなのは子供だって知ってる。知ってやるんだ。やり返せば、またやり返されるだけだろうと、そうやって、俺たちは生きてきた。これからも生きていくのだろう。百鬼さんを止める理由はない。第一、彼女は止まらない。

百鬼さんは、いずれ草助に辿り着くだろう。彼の目的も理由も全てを無視して、殺すのだろう。

「ヒーロー君。あなたがあいつらを追うのは自由よ。戦うのも、殺されるのも、あなたの自由。だけど、あいつだけは駄目よ？ アレは、私のものなのだから。邪魔するなら、誰が相手でも容赦しない。覚えておいて」

喉が渴いていたけど、目の前の飲み物に手を伸ばそうとは思わなかった。

「娘さんを殺した怪人は、どうなりました？」

「どうなったと思う？」

そんなの、決まってる。

百鬼家を辞した後、俺はどこに行くでもなく、ただ歩き続けている。百鬼さんから聞いた話は胸糞悪いものだったが、珍しい事ではない。この街だけじゃない。他の街でも、この国のどこにでも起きた事で、今も起きているに違いない事なんだ。明日は我が身か。誰もが思う。誰もが思うだけで、何もしない。俺だってそうだ。自分の番が来るまで、何をしようなんて思わない。その時が来たら恨み呪い、憎むだけだろう。尤も、命があればの話だ。死んだらおしまい。復讐したくても出来ない。俺が死んだって、俺の仇を取ってくれるような奴もいないだろうし。それで良いとも思う。こんなクズが死んだって、誰も、何も感じない。

捨てて、捨てられた。

残された百鬼さんには、ここで生きていく理由が必要だったのかもしれない。彼女が復讐を終えた時、どうなるのか。答えは一つだ。理由がなくても人は生きていける。生きる事に理由なんか必要ないからだ。ただ、百鬼牡丹は、それをよしとしない人なのだと思う。理由がなくても、人は死ぬる。死ぬ事に理由なんか必要ないからだ。……俺は？

俺は、理由もなく生きてるのか？ 理由もなしに死ぬるのか？俺じゃなくても良い。社長は？ 九重は？ レンは？ 江戸さんは？ 縹野は？ 赤丸は？ 皆、どうなんだよ。教えてくれ。誰でも良い。教えて欲しい。理由がなくても、何か出来るのか。理由がなくちゃあ、何もしちゃいけないのか。

正義って何なんだ？ 悪って何だ？ スーツを着て、ヒーローを名乗れば正義で良いのか？ スーツを着て、怪人だと名乗れば悪で良いのか？ 違うのかよ。もっと簡単なものじゃねえのか。どうし

て、まだ分かってないんだ。まだ迷ってるんだ。

家に戻ると、レンはまだ布団に包まっていた。皿の上の食パンがなくなっているところを見ると、飯はちゃんと食ったらしい。

「片付けといてくれよ」

流し台に皿を置き、俺は冷蔵庫からオレンジジュースのペットボトルを取った。レンめ、こっちを徹底的に無視するつもりか。可愛くない。いや、こいつが可愛かった事なんて一度もなかったが。

だが、良い傾向なのではなからうか。こうして、次第に俺から離れてくれれば助かるし。いずれはしかるべきところに連れて行くのが筋と言うものだろう。と言うか、グロシユラにバレたら怖い。レンを匿ってるのが知られたら、グロシユラには殴られて殺されて、エスメラルド様には裏切り者と言われて殺される。

敵性存在多数確認

ずっぷりと沈んでいく感覚。地面に立っている筈なのに、ふわふわとした気味の悪い感覚。明日はどうなるのか、考えない日はない。眠りに就く寸前まで、心は休まらない。明確な答えが欲しいのだ。何か一つでも良い。これだと、信じられるものが。

「いだっ!?!」

早朝。目は覚めているが、倦怠感に包まれて暖かい布団の中でもぞもぞする。気持ち良い。寝返りを打ち、だらだらする。が、上から何か落ちてきて、俺の目は完全に覚めてしまった。眠気カンバツク。

「……何すんだよ」落ちてきたのは、ケータイだった。何かすげえうるさい。すげえ震えてる。

「電話」

とつくに目が覚めていたか、ケータイの着信メロディに起こされてしまったのである。うレンに見下ろされる。彼のご機嫌は変わらず斜めだった。しかも、社長からの電話である。朝つてのはもつと清々しいものじゃなくちゃいけねえ。

「あー、もしもし?」

『おはようヒーロー。お仕事よ。嬉しい?』

「……はいはい、嬉しいともさ。今日は何をすりゃ良い? 着ぐるみか? それともピラ配りか?」

『お仕事と言っても難しいところね。誰かに依頼を受けた訳ではないのだけれど、そういう匂いがしているの』
どづい匂いだよ。

『小学校のグラウンドにね、ヒーローが集まっているの。それも大勢』

「へえ、俺は呼ばれてないけどな」

『腹立たしい話だね。でも、何か起こりそうだとは思わない？ 上手いけば、カライズの宣伝にもなるわ』

ヒーローが一箇所に集まっている、か。小学校に集まる理由は分からんが、何かありそうなのは確かである。

「集められてるって可能性はないか？ 畏があったら怖いぞ」

『じゃあ、最初は様子見で、最後に美味しいところをいただきますよ』

「そりゃ良い。ヒーロー的だな」俺は思わず笑ってしまった。

一体、何が始まるというのか。暇だし、見物がてらに行くつても悪くない。

「分かった。今からそっちに向かう」

『ええ、待っているわ』

通話が終わり、俺は息を吐く。レンと目が合うが、彼はすぐに視線を逸らしてしまった。

「今から仕事なだけどさ、お前、どうする？」

「何が？」

「いや、何がって。だから、いつもみたいに付いて来るのか？」

立ち上がったレンの顔は真っ赤である。俺は思わず、後退りしてしまった。

「いつもって何さ！ 僕、別にそういうつもりないからっ」

「あ、そ、そう？ じゃあ、留守番お願いしようかなあ」

「勝手にすれば良いじゃん」

カライズへと向かう途中、俺はずっと背中を摩っていた。出掛けに、レンに蹴られたのである。彼にとつては『ちょっとした』、『軽い気持ちで』なんだろうが、自分の力を考えろってんだ。ああ、

畜生。だからガキは嫌いなんだ。

「遅いわよ」

「……おはようございます」

それから、こっちのガキも嫌いだ。

到着するなり、タクシーから冷ややかな視線を浴びせられる。九重は助手席の扉を開けてくれた。

「早く乗りなさい。現場に向かうわよ」

「わあってるよ、うるせえなあ」

助手席に乗り込むが、九重は小首を傾げている。早く出せよ。

「あの、レン君は？」

「あいつなら留守番だよ」

「あら、珍しい事もあるものね。あの子、あなたにべったりだったじゃない。ふふ、もう振られちゃったの？ それとも倦怠期？」

しばくぞ。

「拗ねてるだけだよ。心配なら様子見に行つてやれ」

その代わり、痲癩を起こされて殴られても知らんが。

「そうね。じゃ、お仕事の帰りに寄ろうかしら」

「茶は出ねえぞ」

「何なら出るの？」

愚痴か、文句。

目的の小学校は、住宅街を抜けてまっすぐに進んだ先の坂の下にある。

タクシーが停まり、俺は外に出て小学校のグラウンドを見下ろした。いる。確かに、ヒーローたちが。

「運動会でもすんのかよ」

こっからじゃ遠くて分からんが、校舎の外に出ている児童はいなさそうだった。多分、体育館かどっかに避難しているんだろう。全く、迷惑掛けてんじゃねえぞ、あいつら。

「……数、多いですね」

「まあな」降りてきた九重に目を遣ると、彼は不安そうな眼差しでグラウンドを見つめていた。

「だけど、何かが起こるって雰囲気じゃあない。てっきり、怪人が出ていて、とつくに乱戦状態になってるのかと思ってたが。」

「青井」社長に呼ばれて、タクシーに戻る。彼女は窓を開け、俺を手招きしていた。

「まだ何も起こっていないの？」

起こって欲しそうな口振りだなあ、おい。平和が一番だろうが。

「まあな。つーか、何なんだ、ありゃ。小学校にプレッシャー掛けようするつもりなんだろうな」

「あ、青井さん」

今度は九重に呼ばれる。

「イダテン丸さんがいます」

「えっ、マジで」九重は指を差しているが、良く見えん。本当にイダテン丸がいんのか？ ……うわ。目を凝らすと、馬鹿でかいしゃもじを持った奴が確認出来た。間違いない、あんなもんを得物にするのは赤丸ぐらいだ。あのアマもあそこにいるのかよ。帰りたい。

ヒーローは十、いや、二十人はいる。そこに怪人が現れたとして、俺の出番はなさそうだ。つーかあの状況じゃあ出てきた瞬間にボコられるだろ。

「帰ろうぜ。駄目だ駄目だ」

「……何か出てきました」

何かって、何？

俺が口を開くより先、爆発音が轟いた。次いで、悲鳴が上がる。何かと振り向けば、グラウンドには砂煙が舞っていた。挟まれた土が中空にまで吹っ飛んでいる。

「青井つ、何！？ 何が起こったの!？」

「何か知らんが始まったぞ!」

戦闘だ。誰が仕掛けた？ 痺れを切らしたヒーローが技を放った

のか？ 状況を確認しようにも、砂と煙と埃のせいで何も見えねえ。
「……車に」

「お、おう」俺たちは車に戻る。危険だが、もっと近づかなきゃ駄目だ。

「社長、ガキどもは避難してるのか？」

「分からないわよ、そんなの。で、アレは何？ 怪人が出たの？」
分からないのはこつちも同じだ。

シートベルトを装着するや否や、九重は車を発進させる。
「ギリギリまで寄れ。俺だけで行ってくる」

武器を持ってきていて正解だったな。流石に、手ぶらで突っ込むのは無理だ。

「お前らは一般人の避難を頼む。他のヒーローもそつちに回るだろうが、手が離せない状況だったらやばい」

「任せておいて。……はい、これ」

後部座席から、にゅつと出てきたものがある。シルクハットと、白と水色のチエック模様の仮面だ。

「変装用よ。今日は奇術師風にしてみました。どうかしら？」

「どうもこつちもねえよ。受け取るけど。つけるけど。」

「この帽子、すぐに脱げちまいそうだ」

「置いてく？」

「だったら最初から渡すな。」

「……縁があるな」

「何か言った？」

「いいや、何でも」

停車したタクシーから降りると、グラウンドの様子がはっきりと見えてくる。戦闘を仕掛けたのは、杖持ちだ。煙と喧騒の外側に、デルフィニウムと呼ばれていた少女が立っている。

「九重、表つ側にタクシー回せ。俺はまっすぐあそこに向かう」

九重が頷いたのを確認し、俺はフェンスに向かって駆け出した。フェンスの背は高いが、上れないほどではない。足を掛け、一気に

飛びつく。そこから、タクシーが正門の方に向かうのが見えた。よしよし、巻き込まれるんじゃねえぞ。

グラウンドは阿鼻叫喚だ。ヒーローたちがあっちこっちに逃げ回っている。だが、グラウンドから背を向けようとする者には飛び道具が放たれていた。……攻撃の方向から見ると、杖持ちは三人いるらしいな。デルフィニウムと、スターアニス、そして、あいつだ。俺たち数字付きを壊滅寸前に追い遣った、あのガキだ。

「うわああああああつ!? 何なんだよちくしょう!」

「俺を楯にすんな! あっち行けよ、あっち!」

「来るんじゃなかったあああああああ!」

三方からの攻撃に、ヒーローたちはボロボロである。混乱しきっている。が、それが収まった時、不利になるのは杖持ちの方だろう。数が違い過ぎる。一体、奴らの狙いは何なんだ。

……今、フェンスから降りて参戦しても乱れ撃ちのつるべ打ちに遭うだけだな、ありや。もう少し、こっから様子見しとくか。

風が吹き、煙が流れ、晴れていく。

影が動いた。凄まじい勢いで、その影は杖持ち、スターアニスに迫る。

「こっちに一人来たよつ、やっちやえスターアニス! ぶつ殺しちやえ!」

イダテン丸だ。彼女は短刀を構え、身を低くして地を駆ける。いぞつ、やっちまえ! が、イダテン丸は校舎の方に目を遣り、動きを止めた。つられて、俺も校舎を見る。

「おおおおおおおつ!」

「よりどりみどりじゃねえか!」

「ヒャッハー! ヒーロー狩りの始まりだああああ!」

身を潜め、隙を窺っていたのだらう。グラウンドの左手にある校舎から、黒い集団が戦場に雪崩れ込んでくる。数は、あー駄目だ。数えられん。が、十や二十じゃきかねえだらう。下手すりゃ百人くらいか? 戦闘員が殆どだが、中には怪人らしきスーツを着た奴も

いる。どこの組織のもんかは知らんが、奴らにとつちゃあ、千載一遇、絶好の機会に違いない。

イダテン丸は戦闘員たちを標的と定めたらしく、スターアニスから離れていく。ヒーローの中からも、立ち上がり、向かっていく者が現れ始めた。だが、どいつもこいつも戦闘員をターゲットにしてやがる。杖持ちと戦おうとする奴はいない。そりゃそうだ。距離を取られてるし、一人だけでいってものになるだけだ。まずは邪魔な戦闘員を片付けるのだろう。上手くいくかどうかは別として。実際杖持ちを止めない限りは飛び道具を受け続けちまうんだ。

『撃て撃てっ、撃ちまくれーっ!』

『私たちも負けちゃ駄目だよ!』

『ほらほらゴーゴー!』

杖が主を煽っていた。その、甘く、高い声に従い、杖持ちの攻撃は激しくなる。あの声が、百鬼百合の声なのか。なるほど、やはり可愛らしい。だからこそ、薄気味悪い。

しかしアレだな。どうしよう。本格的にどうするべきか。機を逸したような、そんな気がしてならない。戦闘員の群れは他のヒーローがどうにかするかもしれないけど、杖持ちをどうにかしねえとまじいんじゃないのか？ マジで、たった三人にここに集まったヒーローが全滅させられちまうんじゃないかねえのか。社長は美味しいところを搔っ攫えとか言ってたけど、どうにも……ん？

乱戦から離れたグラウンドの隅に、誰かがいる。腕を組み、戦闘を眺めている。余裕綽々だと言わんばかりな男だった。彼は白衣を着ており、姿勢が悪かった。猫背のせいで分かりづらいが、身長は決して低くないはずである。人相はこっからじゃはつきりしないが、どうも、病的だ。少なくとも健康的には見えん。いや、マジで誰だ、あれ。杖持ちから攻撃を加えられていないのを見ると、ヒーローではなさそうだ。かと言って、戦闘するようなタイプの人間とも思えん。戦闘員たちの乱入にも動じている風には見えない。

「……まさか、あいつが？」

ヒーローではない。

戦闘員でも怪人でもない。

教師？ 生徒？ いや、ありえねえだろ。紛れ込んだ一般人とも思えない。なのに、杖持ちから攻撃を加えられていない。だったらあの男は。

「あら？ また会ったわね」

視線を下げると、フェンスに手を伸ばし掛けた百鬼さんが見えた。彼女はスーツ代わりのエプロンをつけて、自身の得物であるシャクヤクという杖を持っている。百鬼さんは、ここにいるのが当然だという風な佇まいだった。

「不法侵入？」

「警察を呼びますか？」

「それでこの場が収まるならね。ああ、いいえ、そもそも、私の気が収まらないもの。駄目ね、こういう時の警察って。それとも、私が彼らに対して多くを望み過ぎているのかしら」

シャクヤクが機械音を発する。百鬼さんがそれを振るうと、フェンスがぶっ壊れて穴が開く。ここに入った意味を模索している内、彼女はグラウンドに進み出る。

「その格好、もしかして変装のつもり？」

「似合いますか。と言うか、一発でバレちゃいましたね」

「勘よ」勘かよ。

『……敵性存在多数確認。状況、辛。メテオフォールの使用を提案』
百鬼さんはシャクヤクには答えず、俺を見上げた。

「……あいつが、草助なんですね」

俺は白衣の男を指差すが、百鬼さんからは見えちゃいないだろう。それでも、彼女は頷いた。アレが敵だと、そう言ったのだ。

「邪魔、しないでね。もう、抑えが利かないと思うから」

「努力しますよ」

「嬉しいわ」全然嬉しくなさそうに言うと、百鬼さんは歩き始める。一歩ずつ、地面の感触を確かめるように。今までの道程を、確かめ

るかのよし。

トリマーでもポリマーでもないからな！

百鬼牡丹が姿を見せた。彼女は杖を携え、己の敵に向かっている。百鬼草助が、彼女の敵だ。

ああ、と。俺は思わず呻いてしまう。そうか、と。納得してしまつた。ここは彼らの戦場なのだ。ヒーローたちも、戦闘員も、杖持ちでさえも前座に過ぎないのだ。

フェンスから降りた俺は、手持ちの武器を確かめる。ウエストバッグにはでんでん太鼓と、めんこが多数。それから、グローブ。それだけだ。シルクハットは邪魔臭いので脱いでおく。つーかこれサイズ合つてねえし。

「……………どうしようかな」

雪崩れ込んできた戦闘員たちは、杖持ちを狙わない。恐らく、奴らは草助の仕込みだろう。百鬼さんから聞いた話が真実ならば、彼の目的は力を誇示する事にあるのだ。ヒーローを集めたのも草助で、彼は、自分の作り出した『杖』の力を試そうとしているのだろう。尤も、杖持ちの三人は敵味方の区別が付いていないと言うよりも、付けていないのだろうと思われた。自分たち以外は全て敵だと、全てが的だと認識しているに違いない。

やってる事はめっちゃくちゃだ。大人のする事じゃない。実の娘の声で話す武器を作り、少女に持たせて戦わせる。……………人間のやる事じゃあない。百鬼さんじゃなくても、誰だってブチ切れるに決まつてる。だが、草助を、杖持ちを止められる者もそうはいない。むちゃくちゃだろうが何だろうが、杖持ちの力は確かだ。並のヒーローや戦闘員を物ともしない、圧倒的な火力を備えている。あの弾幕を掻い潜るのは至難の業だろう。

でも、行く。

いつかの乱戦と同じように、ここにも正義と悪が溢れ返っている。百鬼さんは、自分はヒーローじゃないと言っていた。正義も悪も、そんなものは関係ないとも言っていた。俺はどうだ？ 正義が、悪が、自分を賭けられるものがあるのか？

「あるよなあ」グローブを右手にはめる。俺は今、カラーズのヒーローとしてここに立っているんだ。誰かに自慢出来るような、ご立派な正義はないけれど、何かはある。そう信じているし、そうに違いない。答えは持つてる筈なんだ。願わくは、俺のちっぽけな答えと、百鬼さんの答えが近い事を。

とは言っても、まともには戦えない。と言うか戦えない。姿勢を低くし、グラウンドの隅をこそこそと進む。ここは混乱の坩堝と化しているの、俺を認める奴らなんぞ、そうはいないだろうけど。

「囲め囲め取り囲めっ！」

「ヒーローもを生かして帰すなよう！ お前ら、もっと前出る！とてもじゃないが、あんな風にはやれそうにない。巻き込まれたら最後、ボロキレになっちまいそうだ。

「やられてたまるかよ！ 押し返すぞ、サンシャインは右からっ、ダンザインは左から攻める！」

「あっ、兄ちゃんいたぞ！」

「おらあああっお前らヒーローだろうが！ 逃げてんじゃねえぞ！百鬼さんはどこだ？ もう、草助のところを辿り着けたんだらうか。

相変わらず、杖持ちの砲撃は止まない。雨霰と、鉄球や針のようなもの、それから、爆発物がグラウンドに注がれている。その度に誰かが悲鳴を上げていた。

「おいっ、そこでこそこそしてるの！ 止まれ！」

「わーっ、上だ上！」

『あははははははっ！ すごいよスターアニスっ、もっと！ もー

つと！ あの人たちのハートをキャッチしちゃえ！」

『あーっ、リリーたちだったらずるーい！ デルフィニウム、こっちも向こうの人たちを狙って！ 負けてらんないんだから！』

くそ、やっぱ杖持ちの火力はハンパねえぞ。早く止めなきゃ。誰か止めてくれ。

「止まれって！ 言ってるの！」

「……あ？」

俺の前方に、ツナギを着て、ゴーグルをしたチビっこいガキが立ち塞がっている。畜生、見つかった。しかも、こっちを指差すクソガキは、物騒なもんを持っていた。拳銃である。

「だっ、や、止める、止せ。何だ、何だよいきなりっ、撃つな、撃つな！ 絶対に撃つなよ」

「んー？ そーゆー事言われたら撃ちたくなっちゃうな」

銃口を向けられ、俺は一步、退いた。ガキは意地悪く笑う。

「あっ、兄ちゃんたち遅いつてば。ほら、あいつだよ。間違いない。変なマスクしてるけどバレバレだよ」

「がはははっ、すまんすまん！」

でかい男と、細い男がガキに近づく。三人とも、同じ格好だ。ツナギに、ゴーグル。

「ってか、バレバレかい。……あれ？ つーか、『あいつ』って、俺の事だよな？ 間違いないって、どいう意味だ。」

「ここで会ったが百年目。覚悟しなよ」

「……え、あ？ あれ、あのさ、勘違いしてないか？」

「何が」いや、何が。俺を親の仇みたいな感じで見てるけどさ。「お前ら、誰？ どっかで会った事あったっけ？」

ガキは持ってた拳銃を地面に叩きつける。

「ボクたちを忘れた！？ あっ、頭おかしいんじゃないの！ ハリマ一家だよ、ハリーマー！ トリマーでもポリマーでもないからな！」

ハリマ？ あー、確か、こないだコンビニを襲った奴らだよな。

逃がしちまったのを思い出したぜ。

「あ。あーあーあー、いた。いたな、そういやそんなのも。はっはっは、よう、久しぶり。こんなところで何してんだ？」

「わあああつ、何だよその友達感覚！ ボクたちを馬鹿にしてるんだなつ、そうなんだな！」

忘れてた忘れてた。いや、杖持ちとかすげえのが出てきたから、どうにも印象が薄くなつちまってたらしい。

「じゃ、俺は急いでっから」

「は、はあ？ 逃がす訳ないじゃん。あんたは、ここでボクたちに葬り去られる運命なのさ！ でも可哀想だから、土下座したらボコボコにするだけで許したげるよ。スーツを着ていないよしみて奴で」

土下座した相手をボコるつてもどうなんだ。

「がはははっ、何だ茜^{あかね}。お前、こいつに惚れてんのか？」

「あー、確かに。いつものお前なら、ム力つく奴には有無を言わせず襲い掛かるもんな」

「……兄ちゃんたち、何言ってるの？」

「なあ、急いでるんだけど」

「うるさいなあつ、あんたが悪いんだから黙っててよ！ 黙って殴られたりしてよ！」

くそ。急いでるのはマジなんだぞ。邪魔しやがって。

「許してくれよ茜ちゃん」

「わあああああ！？ なつ、名前呼ぶな！ 馬鹿じゃないの！？」

いつ、一郎兄ちゃんのせいなんだから！

「がははは、すまんすまん。ところで茜、俺の名前は言っても良いのか？」

「あ……」なるほど。でかいのが一郎さんね。

「そっちの細身は二郎ってところか？」

「おう！ 当たっ取るぞ！」

「兄ちゃんのばかーっ！ 何言ってるの何やってんの！？」

ひひひ、パーソナルデータを押さえてやったぜ。……使いどころはなさそうだったが。

「もーっ！ もう良い！ もう知らない！」

ガキ（茜ちゃん）は拳銃を拾おうとするが、そうはさせるか。俺は一気に距離を詰め、拳銃を蹴り飛ばす。大男、つまり、一郎が拳を振り下ろすが、その攻撃はグローブで受け止めた。脇から二郎が蹴りを放つ。腕で防げばダメージが残っちまう。俺は飛び退き、砂煙に塗れた。

「ああああ、ボクの銃が……」

「いやー、悪い悪い。悪いついでに通しちゃくれねえか？」

「通す訳……！」

「いや、通るぞ」

馬鹿でさえしゃもじを担いだ女が、俺の横に立つ。彼女は、赤丸夜明はハリマ一家を睨みつけ、鼻で笑った。

「ここがあなた奴らに苦労しとるようじゃのう」

ここにいたのは知っていたが、まさか、赤丸がこっちに回るとは思ってたなかった。

「何さ、あんた。そいつの仲間なワケ？」

「うちが？」

赤丸は担いでいたしゃもじを下ろし、ハリマ茜を見据える。

「こいつと手え組むくらいなら、死んだ方がマシじゃ」

「言ってくれるじゃねえの。だったらためえは何しに来たんだよ？」

「悪党は許さん。そのついでに就職活動が出来れば上出来」

「はっ、誰がお前の活躍を見てるってんだよ」

「お天道さんが見てくれればそれでええ」

風が巻き起こる。赤丸はしゃもじを振り回し、自分の得物をハリマ一家に突きつける。

「自分の事を考えるのは、お前らを仕留めた後じゃ」

「……兄ちゃん、こいつ、ボクたちを舐めてる。ハリマ一家の恐ろしさを」

二郎君が吹っ飛んだ。彼は右に弾き飛ばされ、フェンスに体を打ち付ける。

「ありゃ？ 何か手ごたえが……」馬鹿。やり過ぎだぞ、赤丸。

「こいつら、スーツ着てねえんだよ」

「そりゃあ悪い事を」

赤丸は全然気にしていなさそうに笑った。

「ひっ、ひ、非常識だあああああ！？ 何だよこいつ！？」

「いや、スーツ着てたらこれくらい普通だろ」

「仲間を呼ぶなんて卑怯だ！」

だから仲間じゃねえって。まあ、ここは赤丸に任せておこう。

「おいヒーロー」

「何じゃ半端者」

「頼めるか？」

赤丸は俺に目を遣り、口の端をつり上げる。

「お前に言われんでも、悪党を見逃すつもりはない」

は、そいつは頼もしい。

ハリマ一家を赤丸に任せ、俺は百鬼さんを追う。恐らく、彼女は草助のところにいる。辿り着き、戦っているかもしれない。ケリがついているかもしれない。何もかも終わっているかもしれない。だが、止まらない。美味しいところを頂こうってつもりもねえ。

赤丸は、ハリマ一家に時間を掛けないだろう。武器の有無は関係ない。スーツも着ていないんじゃない、あいつの相手はハリマ一家には荷が重い。つつーか、無理だ。だが、赤丸がこっちに来てくれるとも思えない。無駄に派手だから、今頃は別の戦闘員に狙われているだろう。こっから先、彼女の助けは期待出来ないな。

『あつ、またこっちに来たよ』

「うっ……おおっ！？」

思わず、足を止める。

そうかよ。ここで会っちゃうか。そういうもんなのか、やっぱ。

『よしジギタリス、この人もやつつけちゃえ』

「了解」

忘れるものか。

ふわふわとした、綿菓子みたいに甘い雰囲気を持った少女。淡い、今にも消えてしまいそうな紫色のワンピース、えげつないほどにフリルのついたスカート。白いニーソックス、先が尖ったブーツ。そして、金属製の杖だ。その杖の先端には、小さな、釣り鐘のようなものがくっついている。

忘れるものかよ。

こいつが、数字付きを追い込んだんだ。

『あれ？ でも、この人前にも見た事があるかも。まあいつか！

うん、いっくよージギタリス！』

ジギタリス！ それがためえの名前か！

『あーっ、何それ！ いきなりなんて！』

手持ちの武器を確認するまでもない。何を使ってどう動くか考えるまでもない。ジギタリスの、と言うより杖持ちの戦法は把握している。遠距離からの飛び道具。これだ。これに尽きる。スターア二是爆弾を、デルフィニウムは鉄球を使っていた。ジギタリスが何を飛ばすかは分かってないが、何かを飛ばすのだとは分かっている。だったら話は早い。無理矢理に距離を詰めちまえば良いんだ。

ジギタリスは距離を取ろうとするが、俺はでんでん太鼓のワイヤーを伸ばす。グローブじゃ届かない。だったらこいつだろ。中距離くらいなら俺にだってこなせるんだ。

「また会ったよなあ！」

『ジギタリス！ エナジーアロー！』

「了解」何か来る！ 俺は身を低くしながらも太鼓を振った。ろくに見えてもいないが、当たるとやべえのは向こうだって分かっている筈だ。精々ビビれ！

腕に微かな痛みを感じる。何かが刺さった。だけど確認は出来な

い。立ち止まらず、前へ詰めるのを考えてる。

『これ以上は下がっちゃ駄目!』

ジギタリスの持つ杖、その先端の小さな釣り鐘がスライドしていき、穴が開く。まずいと判断し、倒れ込むようにして地面に伏せる。僅かに遅れて、後方から叫び声が聞こえてきた。

『続けて、エナジーアロー!』

「ぐっ、おおっ……!」

腕に刺さっていたのは、小さな針だった。細く、薄い。不幸中の幸いか、長さはさほどでもなく、そいつを引き抜くのに苦労はしなかった。俺はその場から転がり、立ち上がる。

ジギタリスが飛ばしていたのは針だったのだ。くそ、道理である夜は何も出来なかった訳だ。何も見えなかった訳だ。暗がりでもなんもん飛ばされちゃあどうしようもねえ。あの夜も、あの杖から大量の針が飛び出していたに違いない。そうして混乱しているところを、一人ずつ頭をどつかれてやられてしまったのだ。

「いってえ……」

掠っただけで済んだのを幸運と思うべきだろう。針に毒みてえなもんが塗られてたらやべえけど、コスト的にそいつは厳しいだろう。うん。そうであってくれ。

『あーっ避けられちゃった! もう一度だよ、ジギタリス!』

やらせるか。とにかく、追い縋ってぶん殴る。太鼓振り回して引っ掻き回して、グローブである杖を壊しちまえば良い。ジギタリスだけなら何も怖くねえ。身体能力だって大したもんじゃない。あの得物が、少女に命令を下し、攻撃させている。杖を潰せばどうにかなる! どうにかする!

『しっこいってばあ!』

ジギタリスの長髪が風で流れる。彼女が杖を振り上げると、先端の部分が揺れる。それは魔女の指抜きのようにも思えた。

僕はヒーローになりたかったんだ

借りは返す！

が、相手が少しばかり悪かったのかもしれない。借りを返すどころか、万倍にして借りを増やされそうだった。防戦一方である。針から逃げ回り、申し訳程度に太鼓を振り回す事しか出来ない。必要以上に距離も取れない。背中を向けようものなら、的になる事請け合いだ。

『やっちゃんやっちゃん！ パパに近づこうとする人は皆！ 皆やっちゃんやっちゃん！』

左右に振るだけじゃ追いつかれちゃう。杖から放たれる飛び道具、その狙いは正確だ。こっちの顔面を貫こうとしている。少しでも動きを止め、読まれちまえばおしまいだ。かと言って、ワンパターンな回避も難しい。

……こんなのが、後二人もいるのか。だったら、ダメージなんか受けてらんねえぞ。やっば、でんでん太鼓で無理矢理に押し通るしかねえ！

『ジギタリス！』
「了解」

飛んでくる針なんざ見える訳がねえ。杖の向いている方向を頼りに、何となくで避けるくらいしか出来ない。それでも、不思議な事に上手くいつている。攻撃は喰らっちゃいない。

立ち止まると同時、太鼓を振り回す。二つの鉄球がジギタリスへと向かうが、彼女は杖の指示に従い、身を低くし、針を放った。一点に集中した針は鉄球の軌道を変え、俺の体が僅かによるめく。

その時、向こうの人波が一瞬だけ割れた。その中から百鬼さんの姿が覗くも、彼女は再び群集の壁で見えなくなる。

「パパが危ない！」

ジギタリスは俺に背中を向け、駆け出した。俺は彼女を追いかけようとするが、横合いから飛び出してきた戦闘員に阻まれてしまう。「邪魔だっ」

「へへっ、弱そうなんがいるじゃねえか！」

赤茶色のスーツを着た戦闘員が飛び掛ってくる。あまりにも無防備過ぎる。グローブをはめた右腕でそいつを吹き飛ばすが、新たな戦闘員が砂煙の向こうから姿を見せた。おまけに、カンガルー型のスーツを着た怪人まで出やがった。

「ガルルウー！ 何だあ？ 一般人が紛れ込んでるじゃねえか？」

「そんな事よりさっさと逃げましようよ！ ほら、あいつが後ろから！」

「ガル？」

「きたああああああっ！」

振り向き、叫んだ戦闘員が仰向けに倒れ込む。ついで、カンガルー怪人がぐくもった悲鳴を発した。

青い影が飛び回り、跳ね回る。そいつが動く度、戦闘員が地に伏していった。

「ガルルツ、貴様、何者だ……！？」

「……………お覚悟」

あ、やっぱりイダテン丸じゃん。ふいー、助かった。カンガルー怪人がぶっ倒れたのを確認してから、俺は彼女の近くまで歩いていく。

「奇遇だな、助かったぜ」

イダテン丸はじつとこっちを見てから、倒れた戦闘員たちを見回した。

「……………助けたのですが」

「ん？ 何だ？」

「いえ。それより、ここで何をしておられるのですか。もしや、白鳥社長たちもここに？」

「いんや。あいつらはあつちで避難手伝つてると思う」

と言うか、そうでないと困る。流石に、この状況じゃああいつらを守れないだろうし。

「……………お仕事ですか」

「半分は。もう半分は好奇心だよ。この先に用があるんだ」

「お供したいのは山々ですが」

イダテン丸は乱戦に目を向ける。こつちを目掛けて走ってくる怪人が見えた。

「二人揃って足止めを食うのもつまらない話でしょう。青井殿、ここはお任せを」

「お前にはいつも助けられてるな」

「……………お気をつけて」

彼女だけじゃあない。俺はいつだって、誰かに助けられている。

そんなんでヒーローを名乗れるのか？ 名乗る。俺はそう決めた。

無茶苦茶でも良い。やり方なんか選んでられるか。こちらら生身でやってんだ。それくらいは大目に見てもらったって罰は当たらねえだろう。

グラウンドの隅には、べこべこに凹んだ用具倉庫が横倒しになっている。そこに、白衣を着た男が脚を組んで座っていた。間違いないだろう。この状況下で落ち着いていられる者など、殆どいない。彼が、百鬼草助だ。でっけえ隈に、青い顔。健康に良さそうな生活を送ってそうには見えない。歳は、四十を超えたくらい、だろうか。草助の対面には、百鬼さんがいる。彼女は杖を支えにどうにか立っているといった様子だった。

「パパー、この人どうするのー？」

「やつちやえやつちやえ」

「勝手な事したら駄目だよー！」

いつの間に、ここまで来ていたんだ。スターアニス、デルフィニ

ウム、ジギタリス、杖持ちの三人が百鬼さんを囲んでいる。杖持ちが十分な距離を開けているのは、反撃を恐れているから、なのだろうか。……無理だ。もう、彼女は戦えそうにない。唯一の得物、シヤクヤクは折れていなかったが、心が追いついていないのだろう。挫かれ、消失した戦意はどこから汲み上げれば良い。

草助は動かない。足を組み、腕を組み、死にそうな目で百鬼さんを見ている。彼女は片膝をつきながらも、必死に睨み返していた。だが、それだけだ。それ以上は何も出来ない。

良く見る。

良く考える。

俺に、何が出来る。俺なんかになんか出来る。俺が出て行って、何が変わるってんだ。ヒーローなんて言葉や肩書きに吞まれて酔うんじゃない。足を進めるな。前に出るな。もつと、もつと頭を使って、戦うにしたって、真正面から行く事なんかないだろうが。

『あつ、パパ、新しい人が来たよ』

『えへへ、どうする？ やっちゃう？ やっちゃう？』

駄目だった。体が勝手に動いてた。まあ、アレだ。どうせ考えたって何も浮かばなかっただろうし。良さ、なるようになれだ。ちくしょう。

「どうして、来たの……」

百鬼さんが声を漏らす。俺は答えなかった。答えを持っていないかったのだ。

「……百合、か？」 あ？

「百合、なのか？」

草助の瞳が俺を捉える。しかし、その焦点は怪しいものだった。彼の目玉はぎよぎよると、常に動き回っている。果たして、見えているものがあるのだろうか。あつたとして、どういう風に映っているのだろうか。なんにせよ、こいつ、イカレてやがる。

「覚えているか、百合。ここは、お前が死んだ場所だよ。お前が怪人に殺された場所だよ」

「てめえ、何抜かしてやが……」足を踏み出そうとしたが、杖持ち三人に、一斉に得物を向けられてしまった。動けば撃つってかい。草助は立ち上がり、虫みたいに眼球を動かし続けていた。

「覚えているか、百合。ここはお前が死んだ場所なんだ。ああ、戻ってきてくれたんだね。……ああ、百合が増えてるじゃないか？ 四人も百合がいる。覚えているか、百合たち。ここはね、お前たちが殺された場所だよ」

何？ 何だこいつ？ 何を言ってるんだ？

「……無駄よ。話は通じないから」

百鬼さんは苦しそうにしながらも、俺に向かって口を開いた。

「百合が亡くなってから、こいつはずっとこうなのよ。……百合は、通っていた小学校のグラウンド、つまり、ここで怪人に殺されたのだから、ここにヒーローや怪人たちを呼んだのか？ 娘が死んだ場所で、自分の力を示したいが為に？」

「百合、ほら、母さんだぞ。お前の事を大好きで、お前の大嫌いな母さんがここにいるぞ。嬉しいだろう、親子三人、揃ったぞ」

草助は空を見ながら喋っていた。俺は百鬼さんに駆け寄り、彼女の状態を確かめる。酷い怪我はしていないと思うが、服が焼け焦げていた。スターアニスの攻撃を喰らってしまったのだろう。

「はは、百合、そう嫌がるなよ。母さんも悲しんでいるぞ」

「……百鬼、さん？」

百鬼さんは唇を噛み締めていた。俺は、彼女はまだ完全には折れていないんだと気付く。しかし、どこか危ういものを感じさせた。

「分かったと思うけど、話ならするだけ無駄よ。もう、ね。これをどうにかするか、されるか、それしか残っていないの」

これ。百鬼草助。彼はその場に座り込み、こっちに目を向けた。が、常に動き回っている為、俺を見たのは一瞬の事だろう。

「この人は、何がしたいんですか」

「……こいつは」

「百合、僕はね、認められたかったんだ」

俺は思わず顔を上げた。こっちの声が届いている事に、話を通じ
ている事に驚いたのである。

「僕は認められたかったんだ、百合。世界中の人間に、この街のヒ
ーローに、ある組織の博士に、何よりも何よりも、母さんに認めら
れたかったんだよ。分かるか、百合たち」

杖持ちも、杖自体も、一切の声を、音を発さなかった。

「認められたかった、ですって……！」

百鬼さんは立ち上がるうとするが、足に力が入っていない。膝が
震えるだけで、それ以上は何も起こらなかった。

「ふざけないでっ」

「百合、僕はヒーローになりたかったんだ。百合、僕はヒーローに
認められたかった。百合、僕は母さんに好きでいてもらいたかった。
百合、百合、百合？」

「もう、黙って……！」

草助は黙らない。百鬼さんは声を荒らげて、むせて、咳き込んだ。
「お前が百合を殺した！ 訳の分からない趣味に巻き込んで、百合
を！」

「百合、母さんが怒ってるぞ。怖いなあ。でも、僕はそんな母さん
を好きなんだ。分かるか、百合」

「おかしい！ おかしいおかしいおかしい、狂ってる！」

声を放つ。会話を試みる。無駄だと言っていた当の本人が、嗚咽
交じりに感情をぶちまける。

「……狂っている？」

ぎよろりと。草助の目玉が百鬼さんを捉える。

「狂っているのは母さんだ。百合が死んだのに、母さんは何もしな
かった。ただ、泣いて、悲しんでいただけだ。僕は違う。僕はスー
ツを作っていたからね」

「そのスーツのせいであの子は死んだの！」

「なあ、百合。百合もヒーローなら分かるだろ？」

草助は俺を見た。俺を見ながら、娘の名を呼ぶ。

「百合たちのスーツの性能の凄さが分かるだろ？ 僕はね、百合も、百合たちもね、皆ヒーローなんだ。ヒーローは強くなきゃいけない。強さを示すには、悪い奴らを倒すのが一番だろ？ なあ、百合。父さん、間違ってるか？ 百合、お前もヒーローなら分かるだろ。父さんのやってる事が凄いつて分かるだろ？ なあ、百合。お前は母さんに味方するのか？ 違うよな。お前は、母さんの事が嫌いだったもんなあ」

俺は、この家族の間で何があったのか、全部は知らない。娘が死に、不幸があつて、ばらばらになつてしまつたんだ。そうは言えるけど、口だけだ。俺は何も知らないに等しい。

百鬼牡丹は、草助に娘を殺されたと思つている。

百鬼草助は、娘が殺されたのに牡丹さんが何もしなかつたと言つている。

百鬼百合を殺したのは誰だ？ 直接手を下した怪人か？ それとも、彼女にスーツを渡した草助か？ 事が起こるまで気付かなかつた牡丹さんか？

誰が正しくて、何が悪い？ 何が正しくて誰が悪いんだ？ 誰が罪を負い、罰を受けるべきなんだ？

「なあ、百合」

「……決めたぜ」

俺は杖持ちをねめつける。三人の少女は表情一つ変えやしねえ。

イダテン丸のそれとは違う。こいつらからは何も感じられないんだ。

……誰のせいだ？

お前の言う通り、俺は確かにヒーローだよ。

「美味しいところってのは、ここしかねえだろ」

可哀想だ。可哀想だよ。娘を怪人に殺されて、頭おかしくなつて、ばらばらになつて、その上、この有様だ。

「百合？」

「青井、君……？」

可哀想だ、百鬼草助。お前はどの口で、自分がヒーローだなんて

抜かしやがる。ガキだろうが。死んだのはてめえのガキなんだろうが。どうして、自分のスーツを作らなかった。どうして、娘にスーツを渡したんだ。どうして、杖持ちなんか作っただんだ。お前の趣味に誰かを巻き込むなよ。全部、てめえ一人でやってりや良かったんだ！ 何がヒーローだよ、くだらねえ。スーツ作って、それで娘が死んでりや世話ねえだろうが。お前は、何がしたかったんだ？

「ヒーローやりたきや、てめえだけでやってりやあ良い」

正義の味方ごっこがしたいならよそでやれ。俺を巻き込むな。他人を巻き込むな。何より、てめえの家族を巻き込むな。

「……あ、ああ、百合？ どうして……？」

「けどな、ここまでやっちゃあ野放しには出来ねえよ」

「どうして僕の邪魔をするんだ！」

「ヒーローだからだ」クズでも、グズでも、中途半端の偽者野郎でも関係ない。

確か、ヒーローとしての力を証明したいなら、悪い奴をぶっ倒せば良いんだっただよな？

座りましょう

関わらないで。

どこかへ行つて。

ここから消え去つて。

お願いだから、手を出さないで、か。

「あなたには関係ないでしょう！」

悪いけど、もう遅いんですよ。

『パパの前だよ、負けられないんだから！』

『分かっているよりリー、さあ行くよーデルフィニウム！』

『負けちゃ駄目だよジギタリス！』

どいつがどいつなのか訳が分からなくなってきた。

距離を取られると、まるで駄目である。草助の前に並んで立つ杖持ちを見遣り、俺は太鼓をバッグに戻した。相手が一人ならともかく、こいつを振り回し続けるには怖い相手だからだ。

「勝てないって、自分でも分かっているんでしよう!？」

もしそうだったとしても、やる事は一つだ。寄つて、殴る。それだけなんだ。

三つの杖がこちらを捉える。先端部分がスライドし、杖が甘く、高い声を放った。飛び出してくるのは、三つの飛び道具に違いない。かわす術はないだろう。

「だつたらさあ！」

バッグの中のめんこを鷲掴みし、自分の前方に投げる。

『きゃああああああつ！』

『嘘つ、どうして!？』

刹那、杖持ちの眼前で爆発が起こった。そして、一つの爆発が次の爆発へと繋がっていく。奴らにとっては、思っていたよりも早い

地点で爆発が起こった事になるだろう。

杖持ちの飛び道具を完全に回避するのは、俺には不可能だ。一番やばいのはスターアニスの爆弾だったので、めんこには盾になってもらった。誘爆のおまけに目晦ましにまでなってくれたらしい。ここまで上手くやれたのは、杖と少女が合ってたせいかもあるだろう。

杖の指示は完璧に近い。だが、少女たちの肉体がついていないのだ。だからこそ、スーツを着ているのに、必要以上に距離を取ろうとする。杖持ちは杖に従い攻撃を放つ。そこで誤差が生じるのだ。付け入る隙は充分にあつたのである。

この状況を予想していた俺は身を低くしていたので、爆発による被害は受けていない。筈。まあ、体も動いているし大丈夫だろう。混乱に乗じて、草助を追い詰めるだけだ。

その前に、杖持ちの中で一人だけ突出している影を見つける。

『あつ、あわ！ やば……………』

ジギタリスだ。ちょうど良い、ためえには借りがある。

右の拳に力を込める。杖がこちらを向いたが、もう遅い。まずは一人目、返してやらあ！

『ぱっ、パパー！？』

「ふんっ！」

杖が、真ん中から二つに割れる。ジギタリスは膝から崩れ、得物を手放した。

『よくも』

『ジギタリスを！』

遅れて、スターアニスとデルフィニウムが俺に狙いを定める。

が、やはり遅い。全く気付いていない。この場にいるのは俺だけじゃないんだ。

『…………敵性存在、状況、己。フラッシュスナイプの使用を提案』

「却下よ」

百鬼さんがシャクヤクを振るう。スターアニスは杖で防御しよう

とするが、

「ブレイブシュート」

『了解。音声認識二十一パーセント。ブレイブシュートを使用』

シャクヤクの先端部分がスライドしていく。そこから、火花が散ったのが見えた。次の瞬間には、スターアニスは爆発音と共にフェンスに叩きつけられている。至近距離からの衝撃だ。スーツを着ていたって、気を失うのも無理からぬ事である。

『このおばさん……！ まだ動けたの！？』

「黙れ、にせもの」

残ったのはデルフィニウムただ一人。百鬼さんは杖持ちを無視して草助のところに向かおうとするが、俺は彼女を押し留めた。野郎をやるのは俺じゃなくちゃあいけない。

「……邪魔をしないで」

「あんたたちがやり合っちゃ駄目だ」

「邪魔をしないで」

俺は部外者だ。百鬼家に関わる権利も許可も得ていない。だけど、駄目だ。ここでこの人が草助を殺せば、本当に終わっちゃうんだ。

「家族でしようが」

「もう違つわ」

「違わないでしょう！ 草助がどうしてあなたにシャクヤクを残したか、あなただって気付いている筈なんだ！」

もしもの時、草助は百鬼さんに止めて欲しかったんじゃないのか？ そんな事、彼女だって気付いている筈だろう。そうに違いないんだ。

「もう、遅いのよ」

百鬼さんがシャクヤクを振るった。デルフィニウムが杖を彼女に向ける。

『パパには触れさせない！』

鉄球が百鬼さんの胸部に命中する。スーツを着ているが、彼女は苦痛に顔を歪めた。

放たれていたのは鉄球だけではない。百鬼さんはデルフィニウムに小型の爆弾を飛ばしていたのだ。それが命中する事はなかったが、充分な隙は作れていた。俺の入る余地が、そこにある。

ガキを殴るなんざ胸糞悪いが、スーツ着てるし諦めてもらおう。第一、草助と杖の指示があつたからとはいえ、ここまで好き放題やってきたんだ。痛い目見なきゃあまともな大人にはなれねえって。

「あ」デルフィニウムが目を見開く。それは、俺が初めて見た杖持ちの感情だった。

杖持ちは全員倒れた。三本の内、二本の杖は折られている。百鬼草助に戦える力は残っていないだろう。

「待ってください」

百鬼さんは草助を睨み付けていた。彼女の足はふらつき、やがて膝をつくが、這ってでも彼のところに行こうとするだろう。

「話し掛けないでっ」

「巻き込んだのは、あなただ。あなたが俺を突き放して、話なんかしないでいれば、俺はここにいなかったんです」

「黙って！」

「こんな事言いたくないんですけど、あなたの娘さんが、こういう展開を望んでいると思いますか？」

百鬼さんの声はかすれていた。

「百合は死んだの。あいつが殺したのよ。死んだ人間は何も考えないし、何も思わないわ」

正論過ぎる。この人に、俺みたいな奴の言葉は届かない。もう、止められないのか？ ……いや、駄目だ。ここまで首を突っ込んだんだ。中途半端に終われるか。力づくでも止める。

「百鬼さ」
「彼女の前に立った瞬間、百鬼さんは杖で俺の膝を突く。痛みを感じ、顔を下げれば、顎に衝撃が伝わる。シヤクヤクで殴られたのだと気付けたのは、地面に仰向けになって倒されて

いると気付いたのと同時だった。

「もう遅いの」

百鬼さんが立ち上がり、足を踏み出す。俺は顔を上げたが、視界は酷く歪み、ぶれていた。

せめて草助が逃げ出してくれば良いのだが、彼は座り込んだまままで動こうとしない。

「……………」俺の手は宙を掻いている。この期に及んで、助けを期待していた。赤丸かイダテン丸が現れて、この場を丸く収めてくれるのを望んでいたのである。馬鹿か。

終わりなんだ。結局、正義も悪も死んじまえばそこで終わりですべてなくなる。俺だって、誰だって。でも、納得出来るのか？ ほんなので、良いのか？

「潔さは認めるわ」

俺は無理矢理に体を起こす。百鬼さんは既に杖を振り下ろそうとしていた。声が出ない。走り出そうとして、よろけて転んだ。

『ママ』

甘い声が時間を止める。

百鬼さんは動きを止め、ゆっくりと、後ろに振り返った。

『おねがい。おねがい、ママ、やめて。パパをいじめないで』

「……………」百合、なの？

百鬼百合ではない。彼女は死んだのだ。死んだ人間は、何も考えないし何も思わない。生き返るなんて有り得ない。百鬼さんが見ているのは、デルフィニウムの持っていた杖である。その杖が『声を発した』のだ。

それはきつと、プログラムに過ぎないのだろう。草助の仕込んだ、身を守る術だったのかもしれない。杖は杖だ。物でしかなく、発したのは声ではなく、音の筈だ。だけど、そうは聞こえなかった。そうは思えなかった。百鬼さんも同じ気持ちを抱いていたに違いない。

「ああ、百合は、優しい子だ」

草助が微笑む。その表情は、まるで

百鬼さんは腕を下ろしそうになる。だが、止まる。草助を見据えながら、叫び声を進らせる。もう、彼女の娘でさえ止められないのか。

「シャクヤク！ こいつを殺して！ おねがいっ、お願いだから！

もう私、これ以上は耐えられないの！」

『……マスター』

「お願い！ 早く！」

裏返せば、百鬼さんは自分で草助を殺せないとやっているようなものだった。

『敵性存在、抵抗皆無。状況の終了を判断』

「なっ……！？」

『睡眠状態に移行開始』

「ま、待って。待ち、なさい。『立って』、『立って』、『立ちなさい』シャクヤク！」

これは、どうなってんだ。シャクヤクが機能を停止しているのか？ 持ち主の、百鬼さんを無視して？

「シャクヤク！」

『……お疲れ様です、牡丹。あなたと共に、座りましょう』

「何よ、それ。何を言っているの？ だってあなた、そんな事、今まで、一度も。ど、して、人間みたいな……」

シャクヤクは完全に沈黙した。百鬼さんは崩れ落ち、己の得物を、パートナーを胸にかき抱き、涙を流す。

百鬼さんを止めたのは、ただのプログラムなのかもしれない。ただの杖で、ただの音だったのかもしれない。だけど、彼女を止められたのは、他の誰にだって無理だった筈だ。生きている人間には、あの人を止められなかったんだ。

足はふらつく。けど動く。

視界は揺れる。でも見える。

俺はまだ、拳を握れる。俺はまだ戦えるんだ。
ケリはついた。杖持ちが倒れ、杖が折れ、ヒーローを望んだ者が
うな垂れている。

「本当は全部見えてたし、聞こえてたんだろ」
足を踏み出せ。

『あ、ああつ。駄目！ 駄目ーつ、パパに手を出さないで！ パパ
をいじめないでえー！』

「あの子たちを巻き込んだ罪悪感で、そうなったのか」狂った振り
をしていたのは、

「あんたは、おかしくなりたかったのか？」

「こんな事を、したのは！」

「ああ」

俺は草助の前に立つ。

「百合。僕は、ヒーローになれなかったんだな」

俺は俺だ。

青井正義であって、百鬼牡丹でも、草助でも、百合でもない。あ
んたらの夫婦喧嘩に巻き込まれた、しょうもないヒーローでしか
ない。あそこで戦っている奴らと同じだ。ヒーローも戦闘員も怪人も、
全員が、百鬼家に巻き込まれた脇役でしかない。

「父親はいつだって、子供からすりゃあヒーローだろ」

「……そうか」

そうだ。ケリはついた。

だけど、ここでこいつをぶん殴らなきゃあ話にならない。気が済
まない。草助が可哀想だとか、どうしてこうなったとか、そういう
のはナシだ。物事ってのはシンプルでなくちゃいけない。悪い事し
たんなら、歯あ食い縛って殴られなくちゃあ、良い大人にはなれな
いんだからな。

あんたはやっぱり、いつまで経っても子供だよ

「百鬼草助は警察に出頭したわ」

「そうか」

「『杖持ち』と言っていたかしら？ あの三人はヒーロー派遣会社が引き取ったらしいわね」

「……杖を持たされていたのは、身寄りのない子たちだったそうです」

「そうか」

俺は完全に、ソファに体を預けた。カラーズにも良いところが一つくらいはある。例えば、このソファとか。

「あの小学校にも被害はなかったと思って良いわ。当分の間、グラウンドでサッカーは出来ないと思うけれど」

「お前ら、ちゃんとやる事やってたんだな」

「当たり前じゃない」社長はいつもの場所から、俺を見て意地悪く微笑む。

「あなたが頑張っていたんだから」

「そうかよ」

朝っぱらから呼び出されたと思ったら、そんな事かよ。ああ、畜生。めっちゃくちゃ眠い。

「何も思わないの？」

「あんたに褒められたって……」

「そうじゃなくて、昨日の事よ。あなた、美味しいところを持っていったんでしょう？ イダテン丸から聞いたわ」

あー、そうだったか。あんまり、喋りたくはないんだけどな。

「何があったのか、詳しくは話せないのかしら」

「まあ、込み入ってるしな。……森の中でさ」

社長と九重は訝しげに俺を見た。気にせず話を続ける。

「夫婦と、その子供が野犬に襲われたんだ。どうやってたら、その家族は助かると思う？」

「ああ、そういう話だったの？ でも、全然分からないんだけど？」
勘の良い奴だな、くそ。

「……え？ 社長、今のなぞなぞ、分かったんですか？」

「まあ、その辺で納得しといてくれ」

「あ、あの青井さん、こ、答え、答えは？」

自分で考える。

『何？』

「いや、別に。何となく、だけど」

『はあー、あんた平日の昼間から電話掛けてきて、良いご身分だね全く。正義、あんたしっかりやってんの？ ちゃんとご飯食べてんの？』

「やってるし食ってるよ」

『アホな事してたらいかんよ』

「もうガキじゃあねえんだぞ」

ごめんなさい。

「畑、どう？ 上手くいつてる？」

『はあー、駄目駄目、全然駄目。虫がね、野菜に付いちやうの。薬撒こつて言ってるのに、お父さんはいかんって言うから、もうさつきから虫を潰しまくってるよ。あんたからも言っただいよ、農薬は人体に無害だって。野菜なんかね、農薬使わないと美味しくならないってのにねえ、お父さんはほら、古い人だから』

「父ちゃん、元気が」

『歳だからね、腰が痛いとか肩が痛いとか、そんなんばかり。でも、こつち来て煙草やらなくなったのよ』

ああ、そう、だったのか。全然、知らなかった。そうか、煙草止

めたのか。

『そんな聞くくらいなら、あんたゴールデンウィークに帰ってきたら良かったじゃないの。こっちのね、仕事、手伝ってくれても良かったんじゃないの?』

「仕事があるんだよ。年中無休だからさ」

『なんだっけ? コンビニの店長さんやってるんだっけ?』

「……工場だよ、工場。うちところ、コンベアが止まらないんだ」

『はあー、そんなところ辞めちゃいなさい』

俺も辞めようかどうか考えてるんだけどなあ。

「俺さ、ちよつとだけ偉くなったんだ。だから、まだ辞められねえよ」

『ふーん? あんたも人様に認められるようになったんだねえ』

「お盆も駄目かもしんない」

『正月も?』

俺は頷く。そうしてから、慌てて返事をした。

『若い内からあくせく働いたってしょうがないよ』

「さっきはしっかりやれって言ってたじゃん」

『しっかり、休み休み、騙し騙しやっていきな』

母さんは豪快に笑う。久しぶりに聞いた声は、やっぱり懐かしく思えた。

「ったく、うるさいなあ」

『はあー、あんたね、うるさく言われたくなかったらもつと電話よこしたらどうなの。そうしたらこっちだってこんな風に……』

あー、もう、分かった分かったって。

『昔からそうだよ。あんたは分かりやすい子なんだから。でももう駄目だわ、機嫌が悪くなっても、お菓子とおもちゃじゃ釣れなくなっちゃったから』

「何? 何の話だよ?」

『正義が小さい頃はね、すぐ怒る子だったあ。しょうもない理由で拗ねてね、お母さんの顔を見ようとしもないの』

覚えてねえよ。

『そういう時はお菓子ですつと出したら、すつとあんたの手が伸びてね、気付いたらここにこにこしてる。我が子ながら、ちよろいとか思ってたね、まあ今もだけど』

「……なあ」

『んー？』

「子供つてさ、機嫌悪くなったら、どうすりゃ良いんだ？」

暫く、沈黙。

『あんた、子供いんの？ 相手は？ 結婚したの？ それならそうと』

「そうじゃなくて、何となくだよ、何となく。俺がちよろいとか言うからだよ」

『はあー、早く孫の顔が見たいとは言わないけどね、お母さんは心配だあ。あんた、お父さんとお母さん死んだら一人だよ』

「で、機嫌が悪くなったらどうすりゃ良いんだ？ と言うか、怒らせたらどうすりゃ良いんだ？」

うーん、とか、あー、とか、母さんは唸っている。

「やっぱ、菓子とかおもちゃで釣るのか？」

『いや、そりゃああんたが現金な子だったただだよ。はあ、あんたね、もう良い歳なんだから、それくらい分かるでしょ。ご機嫌斜めならご機嫌を取れば良いだけ。あんたが怒らせたんなら、心の底から謝れば良いだけじゃない。お母さんね、恥ずかしいわ。そんな事も分からないような人間に育てたようなつもりは』

「分かった、分かったって。ああ、うん、分かっているから。聞いただけだから」

一を聞けば十が返ってくる。余計なお世話だつっの。

『正義、子供なめちやいかんよ。あんたも昔はそうだったけど、子供つてのはね、嘘を見抜くのが上手いんだから』

なめてねえよ。俺より強いガキだっているんだからな。すっげえ不本意だけど。しょうがない。

「はあ、子供か」

『子供よ』

会話が止まった。だけど、決して気まずいとは思わない。そりゃそうだ。親子なんだから。家族、なんだから。そこには、正義も悪もないのだろう。正誤も善悪も関係なく、家族つてのは、そこにある。ああ、良いもんだなあ、なんて、そんな事を言つつもりはないけれど。

『そっちはどう、大丈夫？』

「何が？」

『辛い？ いやあな事があつたら、放り投げて逃げちゃって良いよ。こっちはね、人手はいくらあつても困らないから』

給料は出ないけどね。そう言つて、母さんは笑った。

『こっちはね、なあんか時間の流れがゆっくりで。お母さんね、あんたが大人になつてると思つてたけど、駄目駄目ね。あんたはやっぱり、いつまで経つても子供だよ』

「そりゃ、そうだろ」

『まあね、そうね。……ああ、うるさい。お父さんが何してるんだーって呼んでる。代わる？』

「いや、やめとく。じゃあ、そろそろ」

『また掛けてきなさいよ。あんたは、私たちの子供なんだから』

「うん」

父さんの声が聞こえてくる。声に張りがあるような気がして、少しだけ驚いた。

「……あの、母ちゃん、俺さ」

母さん、父さん、俺は、俺は。

『んー？』

「母ちゃん」

『何、早く言いな』

「……元気で」

『うん。正義も元気でね』

家に帰ると、布団に包まったままのレンがいた。朝、ここを出た時と一緒の体勢である。

「ただいま」と声を掛けても返事はない。

「レン」

俺は枕元に座り込む。レンは、うるさそうに寝返りを打った。

「ごめんな」

黄前レンは俺の子供じゃない。兄弟じゃない。家族じゃない。血なんか繋がっていない。うるせえし、わがままだし、しかもそいつを押し通せるくらいの力があるし、血い見たらスイッチ入るし、べたべたくっついてこようとすると、とにかく鬱陶しい。だけど、ガキ、なんだよな。こいつは俺よりも小さくて、なのに、守ってくれる奴はいない。うるさくしても仕方ねえし、わがままを言ったって良いんだ。力があるのは、レンのせいじゃない。俺とお前は成り行きでこうなってる訳だけど、少しくらい、ほんの少しくらい仲良くしたって構わないんじゃないか。なんて、思う。思った。

そうやって拗ねてりゃあ、普通の子供なんだよな。……なあ、今回さ、お前に頼らなくなったって何とかなっただぞ。見るよ、やってやっただぞ。

「……お兄さん」

「ん」

「お兄さんの、ばか」

「……ん」

レンは布団から顔を出さない。

「僕より弱いくせに」

「うるさいな」

「僕の方が家事だって出来る」

「そっだな」

「ねえ、馬鹿で弱くて駄目なお兄さん」

「何だ？」

「今日、何が食べたい？」

俺は少しだけ考えた。

「お前の作ったものなら、何でも」

スーツ脱がされるらしい

朝も昼も夕も夜も働いているので、時間の感覚が曖昧になる時がある。今何時だっけ？ ならマシな方で、今日が何月何日の何曜日なのか、それすらも分からなくなる時がある。仕方ない。生きていくにはそういうのも犠牲にしなければならぬのだから。

それっぽい話をレンにしたら、

「あは、お兄さんがボケてるだけじゃないの？」
笑われた。

最近の彼からは、遠慮と言うものが失われつつある。朝も容赦なく起こされるし。無駄にうじうじいじいじされるよりは良いのかもしれないが。

「お、牛肉じゃん、牛肉。今日は肉にしようぜ」

「あつ、駄目だよ。今日はお魚が安いんだから」

レンは俺を無視して鮮魚コーナーへとすたすた歩いていく。

夕方のスーパーには買い物客が大勢いた。BGMの切れ間に子供が母親を呼ぶ声が高く、店内に響く。俺は立ち止まり、人の流れをぼんやりと見つめた。

「お兄さん、何してるの」

「ああ、悪い。すぐ行く」

買い物が終わって店を出ると、後ろから声を掛けられた。

「百鬼さんじゃないですか」

「お久しぶり……でも、ないかしらね」

俺に声を掛けたのは百鬼さんである。彼女はエコバッグを持つ手を入れ替え、薄く微笑んだ。何だか、雰囲気が変わったような気が

する。丸くなつたとしても言うのだろうか。

「お兄さん、この人、誰？」

「言わなかったつけ。ほら、前に小学校のグラウンドで……お前が
ふて腐れて拗ねてた時の」

「……拗ねてないもん」

はいはい。

「お買い物、です、よね」

エコバッグから突き出たネギに目を向ける。まさか、まだ草助や
杖持ちを追いかけているんじゃないか、ないだろうか。

「ええ、今日は魚が安かったから」あー、びっくりした。

「あなたのお陰で、普通の買い物を楽しめるようになるかもしれな
い」

「俺の？ いや、まさか、言い過ぎですよ」

俺は何もしていない。あの日、あの時、百鬼草助を殴っただけだ。
それだけで、何が変わるでもない。

「あの時、青井君は迷っていたように見えただわ」

青井君、か。

「何がです？」

「もつと胸を張りなさい。自分はヒーローなんだって、そう思いな
さいと言いたい」

迷っているのは、あの時だけじゃあない。今だって、いつだって、
きつと、いつまでもうじうじと、いじいじと悩んでいるんじゃないか
らうか。

「君はヒーローよ。少なくとも、私にとっては。私がもつと若けれ
ば、君を抱き締めて、キスの一つでもしてあげられたのかしらね」
う。嫌でも、百鬼さんの唇が気になってしまう。

「や、あの、百鬼さんは充分若いですよ」

「あら、それってお世辞？ 駄目よ、こんなおばさんをからかつち
や」

嘘ではないんだけどな。

「……ぎりぎりのところで君が助けてくれた。君がいなければ、私はここにいられなかったかもしれない。どうか、自分を卑下しないで」

俺は小さく頷いた。百鬼さんは満足したかのように、頷いて返す。「ところで」

百鬼さんはレンに目を遣った。

「可愛い弟さんね」

「あー、弟、みたいなもんです。ちょっと、その……」
流石に、言えないよなあ。

「そ」百鬼さんはレンの傍にしゃがみ、彼を見つめた。

「私を怖がらないのね」

「あは、何が？」

「何でもないの。お兄ちゃんは頼りないから、大きくなったら君が守ってあげてね」

レンはにこにこしている。えーと、百鬼さん。今ですら、そんな感じです。情けない事に。

「それじゃあ、そろそろ行こうかしら」

百鬼さんは立ち上がり、髪の毛をかき上げる。何か、まだ聞いた事が、聞かなきゃいけない事があるような気がしている。だけど、俺は彼女を引き止める術を持ち合わせていない。

「じゃあね、青井君。元気で」

「百鬼さんも、お元気で」

手は振らない。振り向かない。百鬼さんはスーパーの駐輪場を抜け、その後姿を雑踏の中に隠してしまった。

「今日は焼き魚を大根おろしで頂きました。げふー。

「お兄さん、そろそろお仕事に行かなくて良いの？」

ん？ ああ、もうそんな時間か。

「CM入ったら準備……あ、入っちゃった」

仕方なく体を起こし、身支度を始める。今日はカラーズの仕事が多かったから疲れてないけど、朝に起きてからずっとだらだらとしてたので、こんな時間になって動くのは辛い。辛い。行きたくない。

体がだるいのか、気持ちが悪えているのか、溜め息が止まらない。悪の組織の控え室でコーヒーを啜っていると、数字付きが次々と部屋に入ってくる。その内、江戸さんに今日の予定を聞きに行っていた一番が戻ってきて、ホワイトボードに文字を書いていく。全員の目が、そこに引き寄せられる。

『待機』

溜め息が漏れた。

最近、待機が続いている。杖持ちに負傷させられた二人がまだ復帰していないからだ。

「待機って言われてもなあ」

「どうする？ もう帰るか？」

「昨日も聞いたし昨日も言ったけどよ、来たばっかじゃねえか」

杖持ちはいなくなつたが、その被害がなくなつた訳ではない。そう簡単に、何もかもが元通りにはいかないのだろう。元通りになるかもしれないってだけ、ウチはまだマシな部類だ。

「なーんかおもしろい話ねえのかー？」

「俺の部屋に野良猫がさー」

「それ、前も聞いたって」

「はー、つまんねえ。」

「……おもしれえかどうかは知らないけどさ、最近、出るらしいぜ」

「何が？」

「スーツ狩りだよ」

「はあああ？ スーツ狩りい？ 親父狩りみたいなものか？」

「そんな感じだけどさ、狙われてるのは俺たちもそうなんだぜ。スー

俺はコーヒーをおかわりする。

「どっかのアホなヒーローの仕業か？」

「いや、ヒーローも狙われてるんだって。とにかく、スーツ着てる奴が襲われてんだよ」

「襲われてどうなるんだ？」

「スーツ脱がされるらしい」

「ぎゃっはっはっは、恥ずかし過ぎだろ、それ。んな間抜けがいんのかよ」

いや、いるいる。普通にあるだろ。ただ、ヒーローもヒールも関係なく、スーツを着た奴を襲うつてのは意味が分からん。

「しかしよう、次から次へと厄介な奴が事を起こすよな」

「疫病神でもいるんじゃないかねえの？」

「……おい」

お前ら、俺を見るな。見るんじゃないねえ。

「だってさー、お前が来てから色々あったじゃんか。だから、つい、な？」

「ヒトデナシめ」俺だって、俺だってなあ、色々とあるんだぞ。しかも、こつちでも痛い目や酷い目に遭って、ヒーローとしても痛かったり辛かったりしんどい思いをしてるんだ馬鹿野郎。シット！

「ま、青井苛めはその辺で切り上げるとして。待機とか言ってるけど、今日は帰ってオツケーだろ。スーツ狩りは気になるけどさ、逆に言えば、スーツさえ着てなきゃ大丈夫って事だろ」

「そりゃそうだな。よっしゃ、どっか飲み行こうぜー」

控え室からは、少しずつ人が消えていく。俺も帰って寝るとしよう。

「……な、なあ、青井」

「ん？」

最後に残ったのは、俺と、スーツ狩りの話を振ってきた十二番である。心なしか、彼の顔色は悪く見えた。

「何だよ、終電出ちゃうじゃんか。用事があるなら」

「俺、見たんだ」

見たつて、何を？

「スーツ狩りの連中だよ」

「連中？ 連中つて、単独犯じゃねえのか？ つーか、え、どうしてさっき言わなかったんだよ」

「信じてもらえねえと思つたんだよ。あいつら、いや、俺も含めてだけどさ、人の言う事を素直に信じないだろ？」

うん。まあね。俺たちがもっと素直なら、もっとマシな生き方をしている筈だ。……いや、ある意味、自分に素直過ぎてこんな事になつているのかもしれないが。

「……じゃあ、どうして俺には言うんだ」

「まあ、青井だし」てめえぶっ飛ばすぞ。

だけど、信じられないつて話じゃあない。忍者やら悪徳ヒーローやら魔法使いもどきの奴ら

がいたんだ。宇宙人とかがいたつて不思議じゃあない。

「信じてやるから、続きを話せ」

「お前さ、前から言うおうとしてただけどよ、新人りの癖に偉そうなんだよな」

「俺の方がここでの戦闘員暦が長いからな」

「あつそう。……俺が見たのは、ヒーローが襲われてる時の話なんだ。こないだの帰り道に、どのどいつかも知らないヒーローだけどさ、そいつが路地裏で大勢に取り囲まれて、そいつらが立ち去つた後、裸にされた男がうつ伏せになつててよ。ああ、トラウマだ。怖くて一人で出歩けねえよ」

男がガタガタとうるせえつてんだよ。

「もっと詳しい話をくれよ。どんな奴らがスーツを狩ってるんだ？」「何か、軍隊？ みたいな連中だったよ。数は十、二十人くらいだったかな。その中でもさ、リーダーっぽい女がいてよ、めちゃくちゃ怖かった。ありゃドのつくサドだね。ドサドだ、ドサド。ああいうのがたまらないつて奴もいるかもしれねえけどさ、俺あ断然……」

「何の話してんだ」軍隊、ねえ。
「そいつらはスーツ着てたのか？」
「わっかんねえ。全員、軍服っぽいのは着てたけど、スーツかどうかはさっぱりだ。ただ、マスクはしてなかったな。普通に顔出ししてたぜ」

戦闘力に自信があるのか。バレても大丈夫だと高をくくっているのか、どっちだ。うーん？ 軍隊？ 軍人？ 面倒だなあ、おい。すげえ強そうだし。とにかく、結論としちゃあスーツ着てなきゃ大丈夫って事だな、やっぱ。ヒーローの仕事ん時だって、俺はスーツを着てないし（着れないし）、襲われる心配はないだろう。少なくとも、今のところは。

それでも、一人で暗がり歩くのは中々に怖かった。

「ただいま」

「あ、お帰りなさいっ」

扉を開けると、レンが布団から起き上がってきた。電気も点いてるし、こいつ、夜更かしするつもりだったな。

「ガキは寝てなきゃ駄目な時間だぞ」

「お兄さん、お仕事は？ 今日も早かったね」

ぐっ、痛いところを突きやがる。

「まあな」俺が悪いんじゃない。組織が悪いんだ。

「良いから寝ろ。俺も眠い」

「あは、じゃあ一緒のお布団で寝ようよ」

「却下だ」

昼前に目が覚める。いつもよりもゆっくりと眠れたのは、レンが

俺を起こさなかつたせいだろう。彼は、すつすつと寝息を立てていた。ほれ見る。もつと早くに寝ないからだ。

とは言え、仕事はない。急いで起きる理由もないのだ。むしろ、今こうして起きている意味もない。二度寝を決め込むべく布団に戻るが、隣室から物音が聞こえてきて、俺の眠気がどこかに消えた。うるせえ。うるせえぞ赤丸ちくしょう。

『くあああああつ調子乗んなやボケエ！ 潰れつちまえ！』

何を荒れてるか知らんが、近所迷惑って言葉を知らんのか。寝る子は起こさないが吉。文句を言つてやるう。後、あいつを馬鹿にする材料が増えるかもしれない。

いてもたつてもいられなくなつた俺は起き上がり、部屋を出て、赤丸の部屋の前に立つ。チャイム連打、ノック連打で奴をビビらす。

『じゃかあしいんじゃボケ！』

「うるせえのはてめえだろうが！」

物凄い勢いで扉が開いた。俺は一步後退り、真つ赤な顔をした赤丸と目を合わす。相変わらず色気のかけらもないラフな格好だった。Tシャツにジーンズという、つまらない服装である。……俺も人の事は言えんが。

「殺すぞ」

「すぐに殺すとか言うな。お前、それでもヒーローかよ」

「黙つとれ。うちは今、虫の居所が悪い。怒らせたら死ぬるぞ、われ」

見たら分かるわ、そんなの。

「レンが寝てつから、ちつたあ大人しくしてくれよ。何？ 何かあったんか？」

「……お前にゆつてもどうにもならん。はあ、生きるつてせんないのう」

赤丸は玄関に座り込み、溜め息を吐いた。

「あー、また駄目だったのか」

睨みつけられる。どうやら、赤丸さんとの娘さんは、就職活動

とやらが上手くいつていないらしい。

「うちが行こうとしてた会社、潰れてた。なんなん、もう。皆、死ね」

「潰れてた？」

「知らん。知らん知らん。あほらし、やってられつか」

赤丸はよろよろとしながら部屋に戻っていく。彼女は扉を閉める
気力すらなかったので、俺が代わりに閉めておいた。

生意気なお嬢さんだ

「はあ？」

『はあ、じゃないわ。仕事よ青井』

朝飯を食っている最中に掛けてきやがって。

「どうしたの？」

「何でもない、食べてて良いぞ。……怪人か？」

『違うわ。依頼をしてきたのは元、ヒーロー派遣会社ヴィラルカウ
ンターの社長よ』

元？ 今は違うのか？

『昨日、潰れてしまったらしいわ。仕事が出来なくなってしまった
そうよ』

「何だそりゃ？ 良く分からんぞ」

『焦っているみたいで、詳しく教えてくれなかったのよ』

「焦ってたって、だからさあ、何なんだ？」

カラーズにはアレな奴からの依頼、仕事が始どである。新興、弱
小の派遣会社だから仕方ないっちゃあ仕方ないんだが、社長にはも
う少しまともな仕事を選んでもらいたい。矢面に立つのは俺なんだ
から。

『依頼人は会社に残って後片付けをしていたのだけれど、得体の知
れない連中に囲まれてしまったらしいのよ。そいつら、スーツをよ
こせと言っているみたいで、出入り口も固められてどうしようもな
い状況よ』

ふーん。

『依頼人を建物から逃がすのが、今回の仕事』

「いや無理だろ」

得体の知れない連中に囲まれてて、そいつを助けろだと？ ぶざ

けんな、もつとマシな派遣会社に頼めってんだ。

「警察か、別の派遣会社に依頼するよう掛け直せ」

「警察に助けを求められるほど、清廉な事をやっていたのではないんでしよう。それに、お金がないからウチに依頼をしてきたんだと思っわ」

「……相手は？ 得体の知れない連中って何なんだよ？」

「さあ？」

「さあって！ お前、そんな奴らの中に俺を放り込むつもりかよ！？」

「助けを求めている人がいるのは事実よ。とにかく、こつちに来なさい。様子を見に行きましょう。そうじゃなきゃ、大丈夫かどうかの判断だつてつかないわ」

嫌だね。そうやって現場に引つ張って、あとは野となれ山となれつてのがいつものやり口じゃねえか。大丈夫とか適当な事言つて、俺を突っ込ませる気だろう。

「持病の癩が……」

「小癩な言い訳を。良いから来なさいっ、悪いようにはしないから！」

癩癩持ちめ。

「様子見るだけだぞ。やばいと思つたら逃げるからな」

「ええ、どうぞ。逃げられるものなら。……私だつて、あなたを無駄に潰すつもりはないわ。青井、あなたの判断に任せるから」

「ん？ あ、ああ、まあ、それなら良い」

やけに素直だな。気味悪い。

電話を切り、俺は朝飯の続きに取り掛かる。

「お仕事？」

「ああ。付いてくる気か？」

「あはっ、良いよね？」

嫌と言つても付いてくる気、満々だった。

「絶対、車から出てくんないよ」

「お兄さんが危ない時は出て行っても良いよね」

「……でも、なるだけ戦うなよ」

レンは頷き、にこにここと笑っている。こいつにっつーか、こんな子供に頼るのは、本当に嫌なんだけどなあ。力不足が情けない。こっつやって、レンがへらへらとしていられるようなら、この街はもう少しだけ平和になるっつのに。

車中、俺は社長に疑問をぶつけてみた。

「ヒーロー派遣会社がさ、仕事出来なくなるっつてどっついつ時なんだ？」

「お金がなくなって首が回らなくなった時」

「その、ウイルスカウンターだっけ？　そこも、やっぱりそうなのか？」

社長は窓の外を見つめている。同業者が潰れたのだ。カラーズだつて、いつそうなるか分からない零細企業である。彼女にも思うところはあろうだろう。

「ヒーロー派遣会社は、ヒーローがいないと成り立たないわ。だから、私は、ウイルスカウンターからはヒーローが消えてしまったんだと思う」

「それで潰れちまったのか？」

小さく、本当に小さく、社長は頷いた。

……ヒーローがいなくなった理由、か。その社長が愛想尽かされちまったのかな。まあ、この仕事が終わる頃には、その理由だって分かるだろう。

現場のビルには、確かに、得体の知れない奴らが整列していた。

それも大勢。数は二十人程度といったところだろうか。全員が、深緑色の軍服みたいなを着ている。

「……借金取りでしょうか？」

「それにしちやあお行儀が良過ぎるな。ありや、もつとやばそうな感じに見えるぜ」

軍服。軍隊。軍人。……得体の知れな　　アツ！　アアツ！

「お兄さん、顔色が悪いよ？　大丈夫？」

そういや、奴ら、スーツをよこせとか言ってたんだっけ。そんなもつて、軍服だろ。どうしてももつと早く気付かなかったんだ。あいつら、昨夜十二番が言ってたスーツ狩りの連中じゃねえか！　畜生、マジでそんなのが存在してたのかよ！

「あ、依頼人から電話。……窓からタクシーが見えたから、連絡を入れてきたのね」

「出ないのか？」

「早く助けてくれ、でしょう。言われなくても分かっているわ。さあ、青井」

「さあ、じゃねえよ！　嫌だ！　いきたくない！　俺の判断はこうだ！　ノーだ！」

絶対に嫌だ！　嫌過ぎる！　スーツ着てなかるうが、向かっていたら関係なくボコられて脱がされるに決まってる！

「……数、多いですよね」

「そうだろ！　そう思うよな！？」
もつと言つてやれ九重。

「でも、青井さんなら大丈夫ですよね」
「喋るな」

「え、ええっ？」

俺に過剰な期待をするのはよせ。つーか、普通のヒーローだって囲まれてしばかれりゃあ身包み剥がされちまうんだぞ。俺に何が出来る。

「俺の判断に任せるって言ったろっつが」

「でも」

「でもじゃねえぞ甘ちゃん。無理な仕事は受けるな。そりゃ、こう

いう依頼しか回ってこないのは認めるけどさ、それにしたって限度がある。良いか？ お前は俺をヒーローだの何だの言うけどよ、こっちはスーツだってないんだぜ。ただの人間だっつーの。殴られりや痛いし刺されりや死ぬぞ」

社長は俯いて押し黙る。そうだ。そうやって反省しろ。お願いだから。

「様子見続行だ。あんな奴らが固まってるんだ。他のヒーローだって嗅ぎ付けてやってくるだろ。今のところ、手を出すつもりもないみたいだし、話はそっからだ。とにかく、俺は、動かないからな」
「……分かったわ」よしよし、助かった。

助かった？

タクシーの中から軍服着こんだ奴らの様子を観察していると、向こうの方からえげつない奴がやってくる。でかいしゃもじを持った、露出度の高いスーツを着た女である。うん。赤丸夜明だった。……あのアマ、一体、何をしてるんだ？

もしかして、赤丸が面接を受けようとしていたヒーロー派遣会社って、ここなのか？ 潰れてたとか言ってたし、もしかしなくてもそうなんじゃないのか？ うわ。うーわ。なんつー、最悪な。どうしよう。嫌な予感しかしない。赤丸め、どうしてスーツなんか着てのこのこと姿を見せやがったんだ。

とりあえず、窓を開ける。

赤丸の姿を認めたらしい軍服の集団は、彼女に視線を遣った。

「止まれ。貴様、何者だ」

「何じゃお前ら。お前からここに何の用じゃ、ああ？」

「我らの邪魔をするつもりか、ならば……」

「やるってんなら相手になつたるわ」

って、ぎゃああああ、もう始まりそう！ 早い、早いよ！ どうしてああも喧嘩っ早いんだ、あいつは！

「アッテンション！」

鶴の一声とはこの事か。ぎゃあぎゃあと喚き散っていた軍服集団が整列する。その先頭には、灰色の軍服を着た女がいた。一人だけ服の色が違う。アレか、指揮官みたいなもんか？

「騒ぐな雛ども。貴様らは何だ？ 答えてみる」

「はっ！ 我々はセンチネル警備保障の……」

「口を開くなうじ虫が！」

「あっ、ありがとうございますっ」

灰色の服を着、腰にサーベルらしきものを提げている女が、目の前の男を鞭で打つ。

鞭で、打つ。何あれ？ 何それ。

「新兵どもが戦場の空気に酔い、熱に浮かされるのは勝手だ。だが、和を乱すな。良いかブタども！」

「サー、イエツサー！」

「私を馬鹿にしているのか！ 声出せクスども！」

「サアアアアイエツサアアア！」

俺たちの目は、灰色の女に釘付けだった。いや、すげえな、あれ。

「……何じゃ、われ。いなげな奴やのう」

「貴様、ヒーローか？」

赤丸は問われて、笑った。

「生意気なお嬢さんだ。……私はセンチネル警備保障の灰空愛理だ。はいぞうり あいり貴様がスーツを着用する限り、私は貴様のスーツを狙う。今すぐに脱ぎ、跪け。その綺麗な顔には傷をつけないで置いてやる。早くしろ。私がこの世で我慢ならないのは、貴様のようなウスノ口だ」

灰空愛理と名乗ったショートヘアの女は、まだ若い。赤丸をお嬢さんだなんて呼んじゃいるが、自分だって同じくらいの年齢だろう。遠目なのではつきりしないが、顔立ちもはつきりしている。気の強そうなつり目は、たまらない奴にはたまらないのだろう。俺はご勘弁願いたい。鞭も、サーベルも、罵声を浴びせられるのも嫌だ。

「……センチネル警備保障なんて、聞いた事ありません」

「私もよ。ヒーロー派遣会社でもないみたいだし」

「本当、まるで軍隊だな、ありゃ」

「あはは、楽しそう。ねえねえお兄さん、僕も混ざってきていい？」だーめ。

警備会社の人間があんな格好つてのはどうかと思う。いや、それよりも、あいつらはどうしてスーツを狙っているんだ。

「貴様らは、悪だ」

「何じゃと？」

サーベルを抜いた灰空が、己の得物を赤丸に突きつける。

「スーツは街の平和を乱すものであり、それを着る貴様らも平和を乱すものだ」

「うちはヒーローじゃ。悪党と一緒に……」

「木っ端の戦闘員も怪人も、貴様らヒーローと何が違う？ スーツを着て、力を振るうだけだ。不必要だと思わないのか？ 貴様の脳には何が詰まっている。ウジか？ それとも生ごみか？」

社長も九重も、反論したそうな顔をしている。だが、違わない。

根本的には違わないのだ。灰空とやらの言う通りである。俺たちは、同じモノなんだ。

「我々センチネル警備保障は、街の平和を守る為にここにいる。スーツがなければ、ヒーローも悪も関係あるまい。余計な揉め事は起こらなくなる。それが分からののか？」

極論だ。分からないでもないが、この街からスーツをなくすなんて、そりゃあ無理だろう。何人のヒーローが、どれだけの組織がここに存在すると思っただ。そいつら全部を敵に回すなんて、アホだ。アホ極まりない。

「ヒーローだと？ 貴様らは悪だ。貴様らも悪だ。大人しくしている、ブタ娘。すぐに終わらせてやる」

「ほー、ああ、ほーね」

赤丸はしゃもじを構え、灰空を睨み返した。

「ぶっ殺す」

「両親の愛情が足りなかったようだな、貴様。じっくり可愛がってやれ！」

「ガンホー！ ガンホー！ ガンホー！」

灰空が下がり、別の軍服どもが赤丸を取り囲む。

「ねえ、青井。まずいんじゃないの？」

「聞かなくても見りゃあ分かる。ありやまずい」

しようがない。あの赤丸がいるんだし、少し手助けしてやるか。

奴ら、スーツを嫌っているらしいからな、口だけは達者で戦闘力は大した事がないと見た。めんこを使うのは勿体ねえから、太鼓で驚かしてやるう。地面を少し抉ってやりゃあビビって退散しちまうだろう。

「出てくる。お前ら、レンをこっから出すなよ」

「えー？ 僕も行きたい！」

「……わがまま言っちゃ駄目だよ、レン君。ほら、社長が遊んでくれるって」

「え？ 私？」

ひやはは、ざまあみる。

「……仕方ないわね。ああ、青井。これを持っていきなさい」

「ん」紙袋を手渡される。中を見ると、カラフルな三角帽とシャンブーハットみたいなのと……何だ、これは。

「今日は道化師でいってみたわ。どう？」

ああ、なるほど。この赤くて丸いのはピエロの鼻だった訳ね。はあはあはあ、なるほど、帽子を被って、えりをつけて、鼻をつけて、鏡で確認すると、オッケー確かにピエロだ。超いかしてる。最高にご機嫌じゃん。

「てめえ、こんなのつけなくたって、俺はとっくにピエロみたいなもんじゃねえか。馬鹿にしてんのか」

「あなたに似合うのは、クラウンよりもピエロよね、やっぱり」うるせえボケ、血いついた風船飛ばすぞコラ。

「わーっ、お兄さん面白い！ 風船ちょうだい、風船！」

畜生が。毎度恒例だが、この変装は今までで、ある意味一番俺に似合ってたやがる。

暴れ馬が

依頼は依頼だ。仕事は仕事。どっかで諦めなきゃいけないかったんだ。だから、赤丸の登場は歓迎すべき事なのだろう。きっと。多分。赤丸は鬱憤を晴らすべく、軍服の男たちを次から次へと吹っ飛ばしたり蹴っ飛ばしたり殴り飛ばしたりしていた。ひでえ。そもそも、彼女がスーツを着てこの会社に来てきたのは、報復の為ではなからうか。下手すりゃ依頼人の社長、センチネル警備保障ではなく、赤丸に酷い目に遭わされていたのかもしれない。アホを敵に回すと恐ろしい。

「む？」

戦闘には加わっていなかったのだろう。少し離れた場所にいる灰空が、俺の姿を認めたらしい。彼女は帽子の位置を直し、こちらに向き直る。

「止まれ民間人」いや、お前も民間人だろ。

「……民間人？」

疑問形になるな。俺は紛れもなく一般市民だよ。こんなナリしてるがな。

「あんたら、どっかに行ってくれねえかな」

「口を開くなゴミ。ここは戦場だぞ、無駄死にしたくなければさっさと消えるウスノ口」

口悪いな、こいつ。サボテンみたいな奴だ。が、こいつを見せりゃあびるに決まってる。

俺は太鼓を取り出し、ワイヤーを伸ばした。

「変わった武器だな。それはおもちゃか？ 我々を馬鹿にしているのか？」

「してねえよっ」

器物破損という文字が頭を過ぎったが、無視。太鼓についた鉄球で地面を叩いてみせる。アスファルトは余裕で砕け、破片が飛び散った。おらどうだ見たか。

「気合が入っていないな、どこを狙っている」

あれ？ 何か、超普通なんだけど。

「つ、次は当てるぞ」当たったらすげえ痛いぞ。

「お優しい事だな、私をコケにしているのか貴様？ ジェントルマン、戦いを続けてもよろしいですか？」

よく。よくよく考えれば、スーツを着た奴らを相手にしているんだから、こんなので驚いたり脅されたりしない、の、か？

ふと、赤丸の様子を横目で見ると、彼女は軍服たちをボッコボコにしているように見えたが、彼らは倒れても倒れても立ち上がり、飛ばされても飛ばされても舞い戻ってくる。タフだと言で片付けるには、あまりにも異常だ。あいつら、まさか。

「……スーツ、着てんのか？」

灰空は自分の服に目を遣り、当然だと告げた。

「スーツを相手にするのだから、こちらもスーツを着なければならんだろう。馬鹿か、貴様。無抵抗主義者を演じるつもりはない。貴様らはただ、大人しく狩られている」

そういう事かよ。いや、そりゃそうだ。そりゃあそうだよなあ、あー、もう。くそう。どうしよう。

「たった二人で何が出来る。……貴様、それはスーツなのか？」

「いや、違います」

「戦意を喪失したか、ブタが」

思わず敬語を使ってしまった。

「お前らの狙いはスーツだろ？ 民間人を叩いても良いのかなー？」
「我々の邪魔をするのなら、民間人だろうと、そこらのお嬢ちゃんだろうと関係ない。……スーツも危険だが、貴様の持つそれも見過ごせん。渡せ」

ひでえ。そして分が悪い。こいつら全員がスーツを着ているって

んなら話は変わってくる。逃げよう。逃げたい。逃げなきゃやばい。

「あ、バイトの時間だ」

「われえヒーローじゃろうが！ 逃げんな！」

背を向けた瞬間、赤丸に呼び止められる。

「ほう。貴様もヒーローだったのか。スーツを着ていないヒーローは初めて見たぞ」

「いや、あの女が勝手に言ってるだけだから。俺バイトだから」

灰空は、俺の足元の地面を鞭で叩いた。

「無抵抗主義の者を痛めつけるのは嫌いではない。這い蹲れ、二度と笑えないようにしてやる」

「しゃもじどうにかしろよお前！」

「だあってるボケ！」

赤丸は他の奴らを相手にするだけで精一杯と言う有様だった。依頼を片付けるには、こいつら、センチネル警備保障の連中を片付けなきゃいけない。だけど、話が変わってきたぞ、おい。このままじゃジリ貧だ。俺は使い物にならないし、赤丸一人じゃあの数は辛いだろう。……隙見つけて、どこかで逃げよう。

鞭つてのは非常に怖い。恐ろしく見える。ぱしんぱしんと響く音は、実に痛そうだ。アレで叩かれて喜ぶ奴の気がしれない。鞭を受けても、一発二発じゃ死なないだろうが何発、何十発と受けていたらあまりの痛さでショック死すると聞いた事がある。DS専用武器じゃあないか。酷過ぎる。どうせなら一思いに楽にしてくれ。

「どうしたうじ虫！ 這いずり回って悲鳴を上げるか！ それしか出来ないか貴様！」

灰空は楽しそうに鞭を振り回している。俺はそいつから逃げるのに必死で、反撃しようだなんて考えはちっとも出てこなかった。ひいひい言いつつ地面を転がる。ぺしんぺしんと音が鳴る。高く乾いた音が、耳ん中に張り付いて頭の中がきいんとしてくる。

「天狗がよう！ いい気になってんじゃねえぞ！」

段々腹が立つてきた。やられっ放しでたまるかよ。それに、こうしている間にも、いつ、レンのスイッチがオンになるか分からねえんだ。あいつがマジで出てこようとしたんなら、社長と九重二人がかりでも止められないだろう。

こうなったら太鼓だのめんこだのグローブだの選んでられねえ。あるもん使ってこいつをどつく！

まずはめんこだ、こいつで爆発しやがれ！

「……舐めるな、クズが」

投げ放つためんこは、端から鞭で叩き落されていく。その際、小さな爆発も起こるが、杖持ちん時みたく目晦ましとはいかなかった。それどころか、この灰空つて女、爆発にビビった様子を見せない。

だったらこれだと太鼓を振るが、鉄球は全て避けられてしまう。

あ。しまった。ネタ切れだ。今の位置じゃあグローブは使えん。

「正しく兎戯だな」黙れ。その通りだ。

「ヒーローを名乗るのなら相応の力が必要だろう。貴様、我々を舐めているのか？ 私がお嬢さんに見えるのか、間抜けめ」

見えねえよサド女が。

サド女は俺を脅威とみなしていないのか、赤丸たちの方に目を遣っていた。

赤丸がしゃもじが振れば、センチネル警備保障の連中が吹っ飛んでいく。彼女は四肢を余すことなく使い、四方から押し寄せる敵の攻撃を防ぎ、かわすだけでなく反撃までしっかりと入れていた。正直、奴を敵に回していたのが奇跡に近い。今になってからめっちゃ怖い。よくもまあ生きてるよなあ、俺。

「友軍は優秀なようだな」

灰空が俺に攻撃してこないの、俺も赤丸の戦いぶりを見るしかない。

「全然仲良くないけどな」

いつになったら終わるのか。そう思っていたんだが、今日の赤丸は絶対調だったらしい。吹っ飛ばされ、倒れるセンチネル警備保障の軍服どもの内、起き上がらない者の姿が見え始めた。

灰空は腕を組み、あつちの戦闘を睨みつけるようにしている。

「は、焦ってんのか？」

「許可なく口を開くな」

そうだ。そうだそうだ。こいつら、軍隊みたいなもんなんだよな。単独で戦うヒーローとは違うし、戦闘員とも違う。群れるところは戦闘員と同じだけど、あいにく、悪の組織の戦闘員には整然だの規律だのといったものは無縁なのだ。

灰空愛理は焦っている。そうに違いない。

俺も、灰空の部下も下つ端なんだ。上司の指示がなくちゃあ動けない。特に、あいつらはこんなめっちゃくちゃな女が上にいるんだ。

勝手に逃げ出す事も出来ないし、下手すりゃまともに戦えない。

「命令したいのか、あんた」灰空は答えない。そうしたくてもさせないけどな。俺がここでこいつを抑えときゃ、後は赤丸がやってくれるだろう。そうか。この状況、案外悪くないんだな。

面接すら受けられないまま、意味が分からないまま不合格を言い渡されたような赤丸は、その鬱憤を晴らすべく拳を振るう。しゃもじで払う。今の彼女を止められるのは内定の二文字くらいのもだろう。

「ほーら、いち、にい、さん、しい。どんどんやられてんな、あんなの部下」

「貧弱なクスどもだ」

「勇将の下に弱卒なし、なんて言うがよ。あんたはどうだろうな？」

灰空は腰に提げたサーベルを抜こうとするが、叫び声に気を取られる。声を上げたのは、赤丸に殴られた男だった。自分の部下が倒されていくのを、こいつはどういう風に捉えているんだろう。

俺には分からない。社長なら、エスメラルド様なら、あるいは、

分かるのだろうか。

俺は軍人でも軍に関係がある訳でもない。が、こいつらの引き際ってのは知っている。

「三割で全滅。五割で壊滅だったか」

灰空は答えない。

兵力の内、三割が減ると組織的な戦闘が難しくなる。半分が減ると、部隊を再建するのは不可能になる。俺たち下っ端は雑魚だけど、数合わせにはなるのだ。一人一人はアレでも、力を合わせればなんかこうすごい感じになる。そうに違いない。……センチネル警備保障の奴らは二十人程度しかいない。そして、三割ならとつくと減っている。十人近くが赤丸に倒されたままだった。尤も、本格的な部隊って訳じゃあないし、俺の思う定義には当てはまらないのだろう。だけど、手酷くやられている。センチネル警備保障は、赤丸一人にやられているのだ。ここでむきになって戦いを続けるのか、退くのか、そいつを選ぶのは。……ここまですか

「……ここまですか」

「ここまですつといて逃げるのかよ」頼むそうしてくれ。早くどこかに行ってくれ。

灰空は、答えない。彼女は俺が何もしない事を見越したのか、ふいと視線を逸らして、撤収を告げた。その声は小さかったが、灰空の部下たちは逃げ去っていく。赤丸は、ああ、残念そうにしている。マニアックめ。

「覚えたぞ」

「何を」

「貴様の顔だ」

ややこしい事になりそうだな。……こいつを、逃がすか？ ダメだ。俺一人じゃあどうにも難しい。どうしてこう、この辺にやあ強い奴がごろごろしてるんだよ。

「忘れんじゃねえぞ」

灰空は赤丸がこっちに向かってくるのを確認し、背を向ける。し

かし、焦らない。ゆっくりと歩き去っていこうとしていた。イダテン丸と違って愛嬌がないな。

「おい役立たず」

「……誰の事を言ってるんだ。暴れ馬が」

「ふふん、何とでもゆうたらええ。今のうちは気分がええんじゃ」
そりゃ、あんなだけ暴れ回ってたらストレスだって逃げ出すわ。

「楽しそうで何よりだな。じゃ、さいなら」

「ボケエ、コラ。われ逃げようとしたな。ヒーロー名乗っとるんなら、あがいな真似すんな」

「てめえもヒーロー名乗るんなら、もつとマシな口を利け。今日からヤの付く自由業か」

頭どつかれた。

「あー、すつきりした」

赤丸はヴィラルカウンターのビルを見上げる。

「はん、こんなとこ潰れて当然じゃ。困まれて、縮こまって、助け求めて……ヒーローのやる事か」

吐き捨てるように。赤丸は、しゃもじを肩に担いで歩き始めた。

「……あいつ。もしかして、ここの社長を助けに来たのかもしれないな。全く、俺の周りには変な奴ばかりだ。分かり難くて手に負えねえ。」

「青井」あ？

「……青井……！」……ああ。

「ああ、はい、はい、と」

タクシーの窓から手招きする社長が見えて、俺の足取りも気も、考え付く限りのものは全て重くなっていった。

お家でかき氷が作れるようになるの？

暑くなってきた。夏の到来である。太陽はじわじわと俺の体力を奪い、セミはじわじわとやかましく鳴き、やる気なんかもじわじわと削り取られていくような気がしてならない。これで、まだまだ本番じゃないってんだから気が滅入る。夏はこれから。この先、もっともつと蒸し暑くなり、えげつなくなる。外に出たくない。

「あはは、お兄さん、犬みたい」

スーパールの買い物袋を提げていた俺は、舌をだらりと出してしまうていたらしい。

「汗だくだ」

「僕も僕もー」

嘘つけ。全然暑そうな素振りを見せないじゃねえか。レンは元気そのもので、何も変わってない。まさか、改造人間ってのは熱すら感じないのか？んな訳ないよな。

家までの近道の為、噴水のある公園を横切る。途中、レンが空いていたベンチを見つけて腰を下ろした。何してやがる。さっさと帰るぞと言おうとしたが、水音に誘われ、俺はふらふらと彼の横に座った。

「きゆうけーい。お兄さん、荷物持ち変わるっか？」

「……いや、良い。しかしあちいな。もう夕方だったのに」

陽は落ちつつあるのに、湿気が多くて気持ち悪い。帰って風呂入って着替えたい。組織の仕事も行きたくない。夜になりゃあ、少しは凌ぎやすくなってるだろうが、暑いもんは暑い。早く冬が来れば良いのに。そして冬が来れば早く春になってくれれば良いのに。

ぼけーっと噴水を眺めていると、公園の入り口にピンク色のファンシーな車が停まった。

「ねえお兄さん、アレ、何？」

「ソフトクリームか何かの、移動販売車じゃねえのかな」

「ソフトクリーム……」

車の前面には、ネコみたいな顔がペイントされている。しかし、塗装が剥げつつあって妖怪みたくになつていた。あれじゃあ子供は寄り付かない。……そう思いきや、我先にと群がるガキども。この熱気だ、アイスやかき氷はアホみたいに売れるだろう。

「ねえお兄さん」

「食べたいのか？」

「どうして分かったの？」

「わからないでか。」

いつもの俺なら『駄目だ』と切るんだろうが、正直、食べたい。

俺もアイス食べたい。何か冷たいものを口の中に入れてみたい。

「俺の分も頼む」レンに千円札を渡す。彼は大きく頷き、他のちびっ子に混ざるように駆け出した。

息を一つ吐き、噴水に視線を戻す。その縁に、小さな女の子が腰掛けていた。歳は、レンと変わらないだろう。黄緑色のトラックジャケットに、同色のスカートに合わせて履いている。活動的っつか、あの年頃の子にしちゃあ可愛げがない。と言うか、ちよつと怖いくらいだ。やけに凜々しい顔つきをしていらっしやる。目は切れ長だし、シヨートヘアに、銀髪だ。珍しい。

と、気付く。俺はガキをじろじろと見つめて、何をしているんだ。

「お兄さん？」

「ん、あー、サンキュ」レンからソフトクリームを受け取り、俺は『何でもないよ』と取り繕いたくなる。

あー、ソフトクリームつめたくてうめーなー。

「かき氷も食いたくなってきたな」

「売ってたよ？」

「うーん、そういうんは店で買うよりも、今度家で……ああ、マシーンがないんだった。明日、買いに行くか」

「お家でかき氷が作れるようになるの？」

なるなる。つっても、氷を入れてかき回すだけなんだけどな。

「今から買いに行こうよ！」

「やだよ」ん？ 噴水の少女と、目が合う。見ていたのを咎めるような視線ではない。じつと、こっちを見ているだけっぽい。が、なんだか気まずい。気恥ずかしい。

あ。もしかして、あの子、ソフトクリームを見てるのか？ はっはっは、何だよ、キツそうな感じだけど、やっぱガキじゃん。可愛いところもあるじゃないか。

「ねえねえお兄さんお兄さん、なんか、さっきから見られてるんだけど」

「よし、あの子の分も買ってきてやれよ」

「え？ どうして？」

「あの子も食べたそうにしているじゃないか。今日の俺は機嫌が良からな。誰彼構わずおごってやっても良いくらいだ」

何せ、給料がこないだ入ったばかりなのである。数字付きになった事で組織の給料は上がったし、カラーズからもちゃんと出た。正直、驚いた。あの社長がきつちり金を払ってくれるとは思っていなかったし、しかも、中々の額である。手渡して頼んどいて良かった。あの、ずしりとくる感触がたまらないんだよなあ。金の重さは幸せの重さである。大概のもんは金だ、金で買える！ がはは！

「良いの？」

「良いの良いの。あ、今行かなくても、食べ終わってからで……展開はええな、あいつは」

レンは食べかけのソフトクリームを持ったまま駆け出してしまった。

女の子はまだ、俺を、あ、いや、俺のソフトクリームを見つめている。食いづらい。つーか、よく考えたらどうすんだよ。どうやってあの子に渡すんだよ。『はいどうぞ』とか絶対怪しまれるだろ。もしかしたら近くに親御さんがいるかもしれないなんて、通報とかされ

たらどうしよう。やべえじゃん。

「たっだいまー！」　ぎゃああ帰ってくるのが早いよ！

「はい、あの子の分。お兄さんが渡してあげるんでしょ？」

「いや、やっぱお前食って良いぞ」

「えーっ、僕もう食べられないよう」

ちらりと、女の子に目を遣るが、やっぱり彼女はこっちを見続けていた。ええい、覚悟を決める。いざとなれば走って逃げ出せ。俺は優しいお兄さん。ソフトクリームをあげるだけだ。別に何もやましいところはない。

「よし」俺はベンチから立ち上がり、自分のソフトクリームを平らげ、レンから新しいものを受け取る。少しずつ、野良猫に近づくようにして歩いていくと、女の子が俺を捉えた。

「……こ、これをあげよう」

女の子は、俺ではなく、差し出されたソフトクリームを見つめている。

「誰だ、お前は」

おおう？　意外と、その口調は大人びていた。ただ、少女の声それに追いついていない。背伸びしているような印象を受ける。

「他人から物を受け取る理由はない。それに、あたしはソフトクリームなんかいらない」

しっかりとらあ。

「そらそうか。いや、じっと見てたからさ、食べたいのかな、とか思ってる」

「見ていただけだ。お節介な奴だな、身を滅ぼすぞ」

「滅ぼすって……一人なのか？」

近くに親の姿はない。まあ、一人でぶらついててもおかしくはない年齢だが、そろそろ暗くなる。怪人が出ないとも限らない。

「いけないのかい？」

女の子は鬱陶しいといわんばかりに、俺を睨んだ。

「うちの人心配するんじゃないのか」

「うちの？ …… ああ、そういう事か」

何がそういう事なんだろうか。

「帰るさ。じゃあな」

女の子は立ち上がり、公園の出口へと向かう。それと同時に、ソフトクリームの移動販売車から、奇声が聞こえてきた。

「シャアアアアアアアア！ 許せん、許せんぞおおお！」

目を向けると、蛇型のスーツを着た、怪人らしき男が暴れている。どうやら、奴の狙いは件の販売車らしい。

「何だ。怪人か」女の子はつまらなさそうに怪人を見遣ると、腕を組んで、鼻で笑い飛ばした。

「いや、何その反応？ 早く逃げた方が良いつて。 …… レン、レン！ カムヒア！」

レンは蛇怪人が気になるのか、すぐにはこっちに来なかった。早く逃げなきゃ、厄介な事になるぞ、こりゃ。俺の勘が、そう告げている。だから、そうに違いないのだ。

「あはっ、怪人だあ」

「うんそうだね。じゃあ行くぞ。おい、さっさと逃げた方が良いぜ」女の子は動かない。地面と足がくっ付き付いちまったみたいに。流石に、置いてはいけないだろう。どこか、安全なところまで逃がしてやらないと。

「シャアアアア！ とぐるを巻いても良いのは我々蛇型の怪人だけなのだあ！ シャアアアア！」

馬鹿じゃねえの、クソして寝ろつてんだ。そんな理由で、あのソフトクリーム屋を襲ってるつてののかよ。許せん。が、どうにもならん。直、ヒーローが駆けつけてくれるだろう。それまで、あの車が壊れないのを祈るしか出来ない。

「ほら、早く逃げなつて」

「平気だ。おじいちゃんを待っている」

「 …… おじいちゃん？」

「何だ、待ち合わせしてたのか」

でも、ここにいちやあ巻き込まれる可能性がある。無理矢理にでも引つ張っていくか。……いや、そのおじいちゃんとかと鉢合わせしたら言い逃れ出来ねえぞ。ああもう、ガキつてのは本当に面倒くせえ。わがままだし、生意気だしな！

「いなせーっ、いなせーっ！」

「おじいちゃんだ」

こっちに向かってくる者が見えた。グレーのスーツと帽子を着こなし、真っ黒い杖をついた爺さんである。ジエントルマン。なんて言葉が脳裏を過ぎった。

「お前のじいちゃんか？」

「そうだ」女の子は頷き、爺さんに手を振る。それに気付いた爺さんは、嬉しそうにこっちへやってきた。……あー、良かった。下手に連れて行こうとしないで。

「おつおつ、全く、どこに行っておったんじゃ」

さっきまでの俺に対する生意気な口はどこへやら。女の子は申し訳なさそうに俯き、しゅんとしていた。

「怪人が出たんすよ。早く逃げた方が良いです」

爺さんは俺とレンを見比べた後、納得がいったような表情を浮かべる。

「もしや、この子の相手を？」

「あー、まあ、相手っつー相手は。ただ、一人でいたんで。危ないな」とソフトクリームのくだりはカット。俺は何食わぬ顔でソフトクリームを平らげる。

「大変だったでしょう」

爺さんは笑い、俺に握手を求めた。感謝、されているのだろうか。慣れていないので、ぎこちなく、手を差し出す。

「……あはは、別に、子供の相手すんのは慣れてますから」

「私は銀川ぎんかわと申します。この子はいなせ。いや、助かりました」

「ねえお兄さん、帰らなくて良いのー？」

あ、そうだった。ここでのん気に自己紹介なんざやってる場合じ

やねえ。

「あの、それじゃあ俺たちは行くんで」

「ああ、そうですか。さ、いなせ、行こうか」

いなせちゃんは小さく頷き、爺さんと手を繋いで公園を出て行く。実にのどかな光景だ。まあ、後ろでは蛇型怪人が店主に詰め寄ってるけど。俺たちもさっさと帰ろう。

「……お兄さん？」

「ん、ああ、何でもねえ」

しかしあの爺さん、やけに力が強かったな。ジジイの握力とは思えなかったぜ。何かスポーツでもやってたのか？ あるいは、今も何かをやってるのだろうか。

お前、気持ち悪いぞ

レンと一緒にソフトクリームを食って、銀川と名乗る老人と、その孫娘いなせちゃんと出会った日の夜、俺は組織の控え室にいた。お仕事である。しかも、久しぶりの。

「おお、もう動いて平気なのかよ」

「もつと休みたかったけどな」

怪我をして、戦線を離脱していた数字付きの二人が復帰したのだ。エスメラルド数字付きは、本日をもって元通り。いや、良かった良かった。

そんな訳で、お仕事だ。今夜は、エスメラルド部隊に所属する怪人のお手伝いをする事になっている。楽な仕事だと聞いて、控え室にいる数字付きは気楽そうだった。と言うか俺も気楽に、適当に構えている。

何かの間違いだと思いたい。

熱帯魚を扱う店を襲撃した俺たちは、ビニール袋やバケツに、商品のサカナを一杯入れて車に乗り込んだ。そこで、ヒーローと遭遇したのである。と言うか今まさに相対している。意味が分からなかった。嗅ぎつけるのが早過ぎじゃねえか、おい。

「……どうすんだ？」

「知るか」

数字付きはペンギン型怪人の後ろに整列していた。隠れていたともいう。ああ、くそ。めちゃくちゃ頼りない怪人と仕事する日に限って、こうだ。ペンギンって何だよ。マスコットじゃん。ちくしよ。うぺたぺたよちよち歩きくさってボケが。

「お前たちは下がっている」

「はっ、はい！」

でも、ペンギンの声は死ぬほど洪かった。低く、重く、太く、やけにダンディである。

「俺一人で充分だ」

ペンギン型怪人が前に出る。彼と対峙していたヒーローは、一歩後退りした。

俺たちを襲撃したヒーローは、板前のような格好をしている、髪型も筋肉も、どこか角ばったおっさんだ。ついさっき調理場から抜け出してきたかのような、そんな感じだった。

「その刃物で俺を捌けるかな？」

「や、ヤロウ舐めやがってえ！」

板前ヒーローが飛び掛る。ペンギン怪人は彼の攻撃を避け、鳩尾に拳（つつーか羽だけど）を叩き込んだ。崩れ落ちるヒーロー。すかさず、怪人が飛び上がる。右足で顎に蹴り、左足で胸に蹴り、空中で二連続キックを放った。ヒーローは大きく後方に吹き飛び、それから、道路の上に寝転ぶ。

「次に見えるまでに腕を磨いておくと良い」

背を向けるペンギン。や、やべえ、かつこいい。

しかし、何故に熱帯魚？ 帰りの車の中でそんな事を考えていると、ペンギン型の怪人はやはりダンディな声で俺の疑問に答えてくれた。

「エスメラルド様が食べたいとおっしゃるのだ」

「……え？」

まさか、これを？

「グッピーを天ぷらにしたいと。……熱帯魚は目で愛でるもの。持ち帰ったのは良いが、どうにかしてあの方を説得したいものだ」

恐るべき食欲である。こんなちっこい熱帯魚を食べるくらいなら、

水族館からサメを持ってこいと言われる方がまだマシだった。なんて悲しい熱帯魚。

カラフルな魚たちを見るのが辛くなって、俺は窓に目を向ける。と、視界の端に女の子が映った。ような、気がした。ビルとビルの間から、顔を覗かせている。ように、見えた。どこかで見た事があるような。

「なあ、今、女の子が見えなかったか」

他の数字付きに尋ねると、

「幻覚だ」

「っーか、やめるよ。俺ら軽くトラウマなんだからよ」

「また襲われでもしたらどうすんだ、ボケが」

「死ねロリコン」

「溜まってんのかポルノ野郎」

……………殺すぞ。

ふと、いなせちゃんを思い出してしまう。短い銀髪に、ジャージ、スカート。……やっぱり、さっき、いたよなあ？ こんな夜中に何をしていたんだろう？ それとも、やっぱり俺の見間違い、勘違いだったのだろうか。

熱帯魚に群がられる夢を見た。

嫌な気持ちになって目覚めると、携帯に着信が。確認すると、社長からメールだった。寝ていても起きても嫌な気分になる。最悪じゃないか。

「お兄さん、変な顔してるよ？」

「そうか」カラーズへの呼び出しメールだ。昼までに会社へ顔を見せに来い、との事である。また仕事だろうか。嫌だ。行きたくない。

しかし、無視して後で怒られるのも嫌だった。朝食の後、レンを

残り、俺はカラーズへと向かう事にする。途中、あのソフトクリーム屋の車を見掛けた。どうやら無事だったらしい。その車は噴水のある公園に向かったのだ、何となく、俺もそっちに足を伸ばした。

まだ昼前、しかも平日の。公園には人が殆どいない。ソフトクリームでも舐めながら会社に行こうと思った時、噴水の縁に座るいなせちゃんを発見した。彼女は緑色のジャージに、スカートを履いている。そうして、じっと一点を見つめているのだ。

そつだ。昨夜の事を尋ねてみようか。思い立って、俺は噴水の方に歩いていく。いなせちゃんは俺の姿を認めたのか、じっとこっちを見つめ……っ！が睨んでいた。ええい、怯むな俺。

「何見てんだ？」

「お前か」いなせちゃんは素っ気なかった。

……学校には行かなくて良いのか、とか、そんな言葉しか思いつかなくて、俺は話し掛けたのを後悔していた。と言っかしている。真っ最中。

「お前です。いやあ、無事だったみたいで良かった、良かった」

いなせちゃんは無言でこちらを見上げている。

「ふう、何か用でもあるのかい？」

あつたとしても興味ない。みたいな感じに聞かれると、どうもなあ。まあいつか。

「や、昨夜さ、君を見たような気がして」

「あたしを？」

「そう。夜、出歩いてたりしてた？」

「いいや、夜は嫌いだからな」

あ、そうですか。じゃあ、昨夜に見たのは誰だったんだらう。

「もしかして、双子がいたりする？」

「知るか。お前、気持ち悪いぞ」

いなせちゃんは俺から視線を外し、ソフトクリームの移動販売車に目を向ける。

「欲しいのか？」

「何がだ」

「ソフトクリーム」

「必要ない」

それでも、いなせちゃんは視線を逸らさない。若い母親に連れられた子供が、ソフトクリームを舐めている。彼女は何を見ているのだろう。冷たいお菓子か？ それとも……。

「昨日の、爺ちゃんはいないのか？」

「お前には関係ないだろ」

「買ってやるうか」

いなせちゃんが口を開くより先に、俺は歩き出していた。振り返った時、彼女はまだ噴水の縁に腰掛けていた。

「はい」

「昨日も言ったけど、知らない奴からものをもらう理由はないよ」
早くしないとソフトクリームが溶けちゃうんだけど。

「青井だよ、青井正義。俺の名前な。昨日も会ったんだし、知っている奴からならもらう理由はあるだろ？」

「何が狙いだ？ ゴマでもすって取り入るうってのかい」
ガキに取り入っても仕方ねえだろうが。

「まあ、もらっておくよ」

いなせちゃんはソフトクリームを受け取り、舌でそれを舐める。俺は彼女の隣に座って、同じようにした。冷たくて甘い。

同じものを同じように食べていると、何だか打ち解けられたような気がしてきた。そう、ソフトクリームが溶けるのと同じように、彼女の心も氷解していくような、まあ良く分かんがそんな感じ。

「昨日も思っただけけどさ、何を見てたんだ？」

「何も」

こんなに冷たくて甘いものを、いなせちゃんは表情一つ変えず、口に運んでいる。

「おいしくない？」

「そんな事はない」あら、そう。

しかし、困るな。最近の子供ってのは皆こうなのか？ めちゃくちゃわがままだったり、ぶっきら棒で無愛想だったり。自分よりも小さなものを扱うつてのは、非常に疲れる。さっさとソフトクリームを食べて、立ち去ってしまおうか。

「お前は何をしているんだ」

「え」

「おじいちゃんが言っていたよ。平日の昼間からぶらついている奴に、ろくなのはいないってさ」

随分とまあ、行き届いた教育ですね。

「仕事だよ。これから行くところなんだ」あ、その顔は信じてないな。

「そうかい」

「ここ、好きなのか？」

「ここって？」

「公園。昨日もいたじゃんか」

ああ。呻くように呟き、いなせちゃんはソフトクリームのコーンを齧った。

「別に。他に行く場所を知らないだけだよ」

学校は？ 家は？ つーか親は？ なんて、くだらない質問ばかりが浮かんでくる。それを聞いてどうするんだ。聞いたところで、どうしようもないじゃないか。

「こういうものを久しぶりに食べた気がするな」

自嘲気味に言うと、いなせちゃんはソフトクリームを食べ終わる。

「甘いものに興味ないのか」

「どうだろうね。良く分らない」

良く分らんって、自分の事だろうに。

「青井、だったか？ ありがとう」

「……あ、お礼、言えるんだ」

「何かしてもらったら、おじいちゃんがそう言えと言っていたからね」

「ふうん、そっか。そういう事なら、どういたしてまして。……そいじゃ、俺は行くよ」

「お前、何の仕事をしてるんだ？」

ヒーローだよ。そう言おうとして、何故か、俺は少しの間固まっていた。

「無職か」

「ちっ、違うぞ！ 工場だよ、工場。ベルトコンベアがお友達なんだ、俺は」

いなせちゃんは、そうかと一言だけで、俺からは興味をなくしたようである。さて、お仕事だ。

カラーズに到着すると、俺は額の汗を拭った。いかん。いかなあ。これはもう本格的に暑い。まあ、会社にはクーラー効いてるし、冷たい飲み物でも出してもらおう。……お客様気分だな。こりゃいかん。社長に何を言われる事やら。

「ういーす」ドアを開けると、冷たく心地良い空気が俺を温かく迎えてくれた。

「……もっとまともに挨拶をしなさい」

「悪い悪い。まともに給料を払ってくれた社長には、もっとまともに接するべきだったな」

「あなた、まだ言っているの？ 私を何だと思っているのかしら。全く、失礼ね」

社長は新聞紙を畳んで、俺に目を向ける。

「あれ？ 九重は？」

「あの子は今、情報収集に出ているわ」
情報？ いったい、何の？

「昨夜、ヒーローが襲われたのよ」

「へ、へえ、そうなんだ」

「やっべえ、十中八九、板前ヒーローの事だ。うわあ、何だ？ もしかして大事になってんのか？」

「まだ若いヒーローだったんだけどね」
ん？

「襲われたのだけど、上手く逃げ出せたそうよ。それで、今ヒーロー派遣会社にも『気を付ける』なんて話が回ってきているの」

「若いヒーロー？ しかも、逃げられただと？ どうにも、あの板前ではなさそうな感じである。昨夜、別のヒーローが俺たちとは違う何者かに襲われたらしい。」

「アレじゃね？ またスーツ狩りの連中じゃねえの？ ほら、なんとかって言う警備保障の」

「センチネル警備保障の事かしら？ あそこの人たちは依頼がないと動かないわ。彼らはね、この街の治安を守るうとしているようなもの。一般市民からの依頼を受けて、スーツを狩っているみたいなのよ」

「じゃあ、昨夜は依頼がなかったって事なのか？」

「あくまで表向きは、そう言っているわ」

「ふーん。まあ、じゃあ、そうなんだろう。スーツを狩っていると公言している奴らなんだ。今更、その事実を隠そうとする筈がないだろう。」

「マジで全然別の奴が、そのヒーローを襲ったって言うのか」

「気を付けると言われても、何に気を付けたら良いのか分からないなんて馬鹿らしい話じゃない。だから、九重にお願いしているの。」

「私も、話が聞けそうなところに連絡を入れているのだけれど、どこも同じようなものよ」

「まだ何も分かっちゃいないってか。」

「……はあ、厄介な話だな」

「ソファに座り込む。ここは、クーラーの冷気が当たる位置なのだ。『その、襲われたヒーローってのは何も見てないのか？』」

「襲われたと言ったけど、実際、そのヒーローは怪我一つ負っていないわ。何か、大きなものを目撃して逃げ帰ってきたらしいの」「大きなもの？ ビルか何かを見間違えたんじゃないかねえのか？」

「つか逃げるなよ。ヒーローだろうが。戦えボケが。」

「流石に、そこまでお馬鹿なヒーローではないと思うけど。ああ、人間じゃない、とも言っていたそうよ」

「信じられるか。ビビって逃げたって思われたくなくて、適当な事を並べてるに決まってる。せめて相手の正体を確かめろってんだ」「今日はいつになく強気ね」

「何でも来いって感じだな。仕事は来てないのか？」

「社長は定位置に戻り、テーブルの上に置いてある書類に目を遣った。」

「意欲的じゃない。明日は雨でも降るのかしら。……仕事ならあるわよ。明日、だけど」

「怪人退治か？」

「いいえ。着ぐるみよ」

「……えっ？」

「ふ、ふざけんな……！ 夏真っ盛りだぞ！ 着ぐるみの中が何度になるか分かってんのか！ 地獄まっしぐらだぞ！ 俺を殺す気か！」

「やっぱり明日は晴れね」

「ああ、もう、最近はそういう仕事がなかったのによっ」

「パフォーマンスはあなたの得意技じゃない。ソフトクリームの移動販売って奴かしら。その店主が、あなたに着ぐるみでパフォーマンスをやって欲しいそうよ」

ソフトクリームの？

「それって、公園の近くに出してる店か？」

「ええ、そうよ。知ってるの？ だったら話は早いわね。何でも、店主は怪人に襲われてしまったらしくて」ありゃ？ 無事だったんじゃないかねえのか。

「その怪人を車で轢いてしまったらしいのよ。スーツ相手だから正当防衛になるんでしょうけど、その現場を大勢に見られてしまっていて、評判が悪くなっているとの事よ。おまけに、怪人には逃げられてしまったって」

「なるほど、パフォーマンズってのはカモフラージュで、調子に乗って寄ってきた怪人を始末しろって事なんだな」

社長は僅かに目を見開いた。

「逆よ、逆。悔しいけれど、ヒーローとしての働きには期待されないみたい。売り上げのついでに、怪人をどうにかしてくれれば、との事よ。残念だったわね」

「ついでかよ！」

アホみたいに金と時間が掛かる

ふざけてやがる。もうあそこのソフトクリームは買わない。絶対だ。畜生。

仕事についての話を聞き終わった後、俺はカラーズで不貞寝を決め込み、目が覚めると陽が暮れ掛けていた。

俺は半ば、社長に追い出される形で会社を出て、家へと戻っていた。その途中、公園に寄ってみる。ソフトクリーム屋は、いた。確かに、こないだよりも客がいない。と言うより子供が寄り付いていない。はっはっは！　ざまあみる！

「おや、あなたは」

「ああ、あなたは、ええと」

公園のベンチに座っていると、物腰の穏やかそうな爺さんが声を掛けてきた。確か、彼はいなせちゃんとのこの。

「銀川です。お仕事の帰りですか？」

「そんなところですよ。……あ、いなせちゃんを探しに？」

銀川老人は苦笑し、俺の隣に腰を下ろした。

「あの子は家にいるよりも、外にいる方が楽しいらしく」

「はあ、そうなんですか」

全然、楽しそうには見えなかったけどな。

「いつもはここにいるんですが、はあ、今日に限っては……」

銀川老人はうな垂れてしまう。

「お孫さん、女の子ですし、心配ですよね」

「ああ、いや、まあ、そう、ですな」何だか歯切れが悪い。余計な事を言ってしまったらどうか。

「そう言えば、俺はまだ名乗っていませんでしたね。青井と言います。青い、井戸の井で、青井です」

「この間は、こちらが一方的に名乗ったきりでしたな。ご丁寧にあいすみません」

いなせちゃんと違い、爺ちゃんはやけに丁寧だ。俺みたいな若造に対しても、紳士的な振る舞いである。出来るなら、こつこつ風にな年を取りたいものだ。無理だけど。

暫く、お互いが口を開かなくなる。ゆっくりとした時間が流れている。そんな気がした。

「……青井さんは、この公園には良く来られるのですか？」

「そう、ですね。最近は通り道にしています。……あそこに、ソフトクリームを売っている店があるでしょう」

「ああ、すっかり暑くなりましたからね。なるほど」

銀川老人は何度も頷く。

「青井さんは、自由業なのですかな」

「に、近いものですね」

「そうでしたか。いや、気を悪くされないうでいただきたい。この歳になると、口ばかり回るものでしてな」

「ああ、そんな、全然気にしてませんから」

そついや、この人がいなせちゃんに教えたんだよな。昼間つからぶらぶらしてる奴はろくなもんじゃねえって。当たってる。正に正しくその通り。

「ありがとうございます。では、私はそろそろ」

「いなせちゃんがいる場所、心当たりがあるんですか？」

「幾つかは残っています」

「あの、俺も探すのを手伝いましょうか？」

「いえいえ、そんな……いなせを心配していただき、ありがとうございます。でございます。では」

銀川老人は帽子を取り、会釈を一つ。それから、杖をつきながら、ゆっくりと歩き去っていった。

家に帰ると、レンがへらへらと笑っていた。どうやら、面白い番組でもやっているらしい。

「何見てんだ？」

「マグロのね、解体ショー」

こいつはこういう奴だった。

「そ、そうか。今晚も仕事があるんだけど、留守番、よろしくな」

「はい。……あははははっ、魚ってすごいよね！ 最初から目が死んでるもん！」

組織の控え室。ホワイトボードには『調達』の文字が。何事か。

「何を調達してこいつて？」

「知らん。おい、一番、説明しろや」

油性マジックを置いた、数字付きの一番に当たる男が息を吐く。酷く憂鬱そうで、嫌な予感がした。

「水槽だよ」

水槽だあ？

「何？ 新しい罰ゲームか何かか？」

「そうじゃなくってさあ、ほら、盗ってきた熱帯魚だよ。アレ、エスメラルド様は食うのをやめたらいいんだよ。で、気に入った奴以外は店に返すらしくて。そん代わりに水槽とか、飼うのに必要なものを用意しろって」

ペンギン型怪人が上手く説得したらしい。しかし、凄いな。エスメラルド様の食欲を抑えるなんて。

「……で？ 誰が持つてくるって？ 誰が、魚を店に返すんだ？」

「つか水槽って、どこから持つてくるんだよ？」

「そりゃ、やつぱ……」

あの、店だよなあ。じゃあ何か、俺たちは今から盗んだ熱帯魚の殆どを店に返して、その店から今度は水槽を盗ってくるってのか。

「めんどくせえー！」

「あ、でもさ、俺たちも飼って良いんだってさ」

「何を？……………熱帯魚か？」

「一番は大きく頷く。ふざけるなよ畜生が。」

「いらねえよ！」

「魚なんぞに癒されてたまるか！」

「何がグツピーだ！何がグツピーだ！」

「ついこないだまで魔法少女フィギュアに血道を上げていた連中が憤った。」

数時間後、俺たち数字付きの控え室には、そこそこ大きめの水槽が置かれていた。ぶくぶくと泡が起こり、水面まで上がって、消える。カラフルな魚たちを囲みながら、大の大人が十三人、癒されていた。これでもかと言わんばかりに。

「いやあ、良いよなあ」

「でも何か殺風景じゃね？」

「前にテレビで見たけど、魚の隠れられそうな木とか、そういうの入れてたぜ」

「木なんてどこにもねえよ」

「あ、じゃあ、これ入れようぜ」

「あつ、おいそんなん入れんなよ！」

「あー、あーあーあー。」

ぼとん、ぼとんと、次々と水槽に沈められていく。敷き詰められた砂利に、それは埋まった。…………魔法少女フィギュアの、折れた足や、手の部分にあたるパーツである。俺たちの遊び方が荒かった為に、彼女たちは傷つき、倒れ、捻じ曲がっていった。

「……………何だこれ」

「地獄絵図じゃねえか」

今、少女たちは水槽の底で魚たちを楽しませている。筈だ。頭やら胴体だけになっても、フィギュアはフィギュアだ。こんな姿にな

つても、そのあり方を貫き続けている。
「三途の川ってこんな感じなんかな」
知るか。

熱帯魚を堪能した俺は、爺さんのところに向かっていた。スーツの製作に取り掛かってくれているのではないかという期待と、この間、俺の懐に入った給料、即ち誠意を見せる為である。

「よう、生きてるかー」

爺さんの部屋は、相変わらず汚かった。本人曰く『わしには分かるように整理しておる』との事だが。

「なんじゃ、お前か」

「俺だよ。で、早速なんだけどよ」

俺は床に腰を下ろす。

「スーツ、どんな感じだ？」

「ああ、お前の分は駄目じゃな。全然、駄目じゃ」

「……どうしてだよ？」

爺さんは片手でキーボードをかたかた叩きながら、もう片方の手で自分の肩を叩く。

「スーツ狩りの連中じゃよ。うちの若いのも、何人かやられておつてな」

「あー、それで、爺さんにスーツを頼んだ奴が増えたのか」

「お前を優先する理由はないからな」

「ちっ。センチネル警備保障め。マジで目障りだぜ。」

「まあ良いや。今日はそれだけが目的じゃないからな」俺は封筒を見せ、それを爺さんに渡す。

「ほう、誠意か」

「さようございます」

爺さんは封筒の中身を見ずに、それを懐にしまい込んだ。

「ま、それで栄養つけられるようなもん食ってくれや」

「生意気な口を利きおつてからに」

そう言う爺さんは、何だか機嫌が良さそうに見える。

「何かあつたのか？」

「そう見えるか？」 見える。

「実はな、古い友人から連絡があつたんじゃ」

へえ、爺さんに友達なんかいたんだ。

「まあ、長く生きてるもんな」

「お前にはもう何もやらん」

「冗談だつて。で、何だ？ 同窓会のお知らせでも来たのかよ」

爺さんは何も言わず、机の引き出しから錠剤の詰まったビンを取り出す。そんなもんばっか食つてると、いつか死ぬぞ。

「試作品を見てくれと言われたんじゃ」

試作品？

「爺さんの友達つてのも、科学者？ みたいな奴なのか？」

「うむ。大掛かりなものらしくてな、不安がつていたよ。じゃが、わしも今は手が離せなくてな。用事を片付けたら見てやると言ったんじゃが、時間がないらしい」

ふーん。意見を求められるなんて、爺さんつてすげえんだな。

「その人もスーツを作ってるのか？」

「いや、そいつはスーツを、むしろ嫌つておる。奴が作るのは、兵器じゃよ。それも比較的大型のな」

「戦車とか、戦闘機とか、そんな感じの？」

「まあ、そんな感じじゃ。人間が操縦する、いわゆる機動兵器の一つじゃな」

そりやすげえ。戦車やら戦闘機を作るつて、いったいどんな人なんだ？

「爺さんも作れば良いじゃねえか」つーか一度で良いから乗ってみたい。乗りてえ。超操縦したい。

「ああいうのはな、アホみたいに金と時間が掛かる。第一、わしの趣味じゃない。こついうのは趣味でやらなければな、長くは付き合

えん」

説得力はある。

「スーツの方が手間が掛からんし、どうせ壊すだけならスーツを選ぶだろう。お前だってそうだろう?」

「いやあ、目の前にでっけえロボットがあつたら、俺はそっちを選ぶんじゃないかな」

「機動兵器の欠点とはな、人材にある。兵器を使うにはパイロットを育てなければならん。じゃが、人を育てるのは機械を作るよりも難しい。まずは候補となる人を呼び、適性を見、マニュアルを頭に叩き込ませ、体にも染み込ませる。知識だけではなく、体も鍛えなければならん。それに、訓練はどうする? 場所の確保も難しい。ヒーローや、他の組織に嗅ぎつけられるのも面倒じゃろう」

そう言われちまつたら、確かにスーツを選ぶかもな。どうせ、スーツだってロボットだってやる事は大して変わらねえんだ。壊すだけなら、スーツのが楽である。訓練もいらぬし。

「それから、コックピット部分を作るのが鬱陶しい」

「何でだ?」

「パイロットの体格に合わせなければならんだろう。折角作った兵器も、そこに選ばれた人間が乗れなければ、意味がない」

だつたら人を選ばないものを作れと言いたいところだが、そういう事が出来ないのが、そもそも選ばないし、最初から選択肢に入っていないのが爺さんなのである。彼の友人も、似たようなものだろう。言わば変人。変態なのだ。

「だつたらさ、その、爺さんの友達つてのは、兵器だけを作った訳じゃないんだな」

「む?」

「いや、その兵器に乗る奴も育てたつて事だろ?」

「……まあ、そう言われれば、そうか。しかし、あやつに付いていく者などおるのかのう」

変態には変態が付いていくんじゃねえの? 一人くらいは、そう

いう奴もいるだろう。

「大型の兵器、ねえ。……この街で動かす訳じゃあないよな？」

「知らん。何をしているのかは分かるが、どこでそれをしているのかは聞かなかつたな。ほっほ、運が良ければ、奴の新兵器を間近で見られるかもしれないなあ」

何を笑ってやがる。

全く、これだから変人は困る。変でジジイってのはもっと困る。

「俺のスーツは、いつになったら完成するのかねえ」

「おお、そうじゃ。面白いものが出来てな、それをやろう」

爺さんはいそいそと立ち上がる。孫に小遣いを遣るような、そんな風にも見えた。

「何をくれるんだ？」

「盾じゃ」盾！ 良い。良いじゃんか！ いや、スーツのない俺にはそういう、身を守るような道具も必要なんだよな。やるじゃん爺さん流石じゃん。

「ほれ」

「おう」

渡されたのは、タコだった。オクトパスの方ではなく、カイトの方である。

凧。正月の遊び。風に乗ってぶかぶか浮かぶ。

「これが盾？ 俺に死ねって言うのか」

骨組みは金属でカチカチだけど、張ってるのは思い切り布じゃねえか。何か手触りが変だけど。

「もっと固そうなのくれよ！ ちっちええし！ 頭隠して他全部隠せねえよ！」

「うるさいのう。……あのな、青井よ。お前、ダイヤモンドを知っておるか？」

「当たり前だ」

実際、この目で見た事はねえけど。

「アレも簡単に砕ける。ダイヤモンドも、最初は原石だろう。それ

を砕かねば、裝飾には使えん。ハンマーで砕ける。ダイヤモンド同士がぶつかっても砕ける。分かるか？ どれだけ固くても、やはり壊れてしまうものじゃ」

「でもさあ」

「逆に。柔らかかなものはどうやって砕く？ どうやって崩す？ どうやって貫く？ 柔らかい物質はな、盾に打ってつけなんじゃ」

「うーん。そう言われれば、そんな気が……」

「青井。骨組みのな、真ん中の出っ張りを押してみる」

言われた通りに押ししてみる。すると、出っ張りが更に突き出て、凧が傘みたいにバツと開いて大きくなった。大きくなった！ 何かこれと似たパターンがあったような気がするけど！

「すげえ！」

「これなら全身を覆い隠せるじゃろう。元の大きさに戻す時は、出っ張りを押し戻してみい。小さくなる。ほっほ、それはただの布に見えるがな、新しい素材なんじゃ。心配するな、耐久性、防弾性、防刃性にも優れておる」

「超便利じゃねえか！」

「ほっほ、ほっほう！」

固いものは砕かれる。

柔らかかなものほど、貫くのは難しい。

なるほど、確かにそうかもしれん。俺は新しい事実気付けた。

素晴らしい。世界が広がった。

だが、爺さんはただ単純に新素材を試してみたかっただけなのだと、その事実気付くまで、俺はかなりの時間を要した。

まさかアレとやり合えって言っくんじゃあないだろうな

爺さんに尻をもらい、控え室でぼーっと待つ。始発が動くのを待つ。既に相当な時間になっていた。眠ってしまいたいが、今日は力ラーズの仕事もある。我慢だ。ここで寝過ぎすのはまずい。ああ、もう、こんな生活を続けていたら、いつか必ず体がやられちまう。

小さくした尻をビニール袋に入れ、始発に揺られて、自宅の最寄り駅まで帰ってくる。眠気は限界に達していた。歩きながら寝られそうである。

誰もいない。音が殆どない。セミだってまだ眠っていそうな時間に、

「あ」

彼女はいた。

一人で噴水の縁に腰掛けているのは、いなせちゃんだった。相変わらず、険しい表情で一点を見つめている。何を見ているのかは、俺には分からなかったけれど。

話し掛けるのを躊躇ったが、見つけてしまったからには仕方がない。それに、無視するのもどうかと思った。……銀川老人の、苦い顔を思い出してしまったのである。彼はまた、いなせちゃんがいなのに気付き、探しに行くのだろうか。

「朝、早いんだな」

「お前は」

「おはよう」

いなせちゃんは挨拶を返してくれなかったが、構わず、彼女の隣に座った。

「何してたんだ？」

「お前には関係ない」

素っ気ないなあ、もう。

「この辺は危ないぜ。前だつてさ、怪人が出ただろ」

「怪人なんて、別に怖くないよ」

強がっている風には見えない。が、何だか、いなせちゃんはいつもより……。

「もしかして、疲れてる、か？」

「あたしが？」 俺は小さく頷く。

「……かもしれないな」

いなせちゃんは溜め息を吐き、俯いてしまった。元気出せ、なんて、簡単には言えそうにない雰囲気である。子供には子供なりの理由があるものなのだ。無理に聞き出そうとしてもお互いが疲れるだけだろう。こういう時は、口を開いてくれるのを待つか、相手が立ち去るのを待つか、だ。ああ、それにしても、眠い。眠たい。

「お前は何も聞かないんだな」

「聞かれたら答えてた？」

「そういうのは嫌いだよ。大人は、皆そうだ。何もかも分かるようにする」

そりゃそうだ。大人が怖いのは幽霊でも怪物でもない。分からないものだ。自分には理解出来ないものを、意味のはっきりしないものを嫌い、恐れる。俺だつてそうだ。

「言いたくなつたら言えば良い。俺じゃなくても、とにかく、誰かに。家族とか、友達に」

いなせちゃんは皮肉っぽい笑みを見せる。そんなもの、いないとでも言いたげだった。

「なあ」

彼女が何か言い掛けたが、時を同じくして公園のセミが鳴き始める。いなせちゃんの声を掻き消すほどの音ではなかった。しかし、彼女は口を閉ざしてしまふ。

「セミが鳴くと、暑くなるな」

「そうなのか？」

「そう感じるだけだと思うけど。……今日はまだ、来てないんだな」
ソフトクリームの移動販売車を探したが、流石に、こんな朝早くからは店を開かないだろう。

「悪いな、今日は何も出せなさそうだ」

「あたしが何かを欲しがっているように見えるってのかい？」

頷きかねる。そうも見えるし、そうじゃないかもしれないのだ。

ただ、何かを諦めているような風にも見える。いなせちゃんのどこか投げ遣りな口調はそこからきているのかもしれない。

「ソフトクリームは嫌いか」

「そういう事を言っているんじゃない……ふん、良さ。お前はどこかとぼけた奴だからな」

「さいですか」

俺は立ち上がり、体を伸ばす。一瞬だけ眠気が消えたが、すぐに睡眠は訪れる。

「帰るのか？」

「うん？ ああ、そろそろ眠気がやばくてさ。そっちも、帽子も被らずに外に出っ放しじゃあ倒れちまうぜ」

「……なあ、どうして、あたしに構うんだ」

「あ、ごめん。迷惑だったか」

いなせちゃんは、小さな声でそんな事はないと言った。

「あたしが可哀想に思えたのかい？ どうして、あたしに……」

「俺はヒーローだからな」

「……何だって？」

あ、その『嘘を吐け』みたいな視線、もう慣れたぞ。

「信じてねえだろ」

「お前、本当にヒーローなのか？」

「こっに見えてもな」

いなせちゃんは、俺をじっと見つめる。穴が開いちゃいそうだった

た。

「お前、ここには良く来るのか？」

「ここって、この公園の事か。」

「近道だし、結構来るけど。それがどうしたんだ」

「……もう、来ない方が良くい」

「は？」

いなせちゃんは立ち上がり、俺を見上げる。

「ヒーローだなんて、そんなつまらない事を言うな」

「いや、いきなりどうしたんだよ」彼女に手を伸ばしかけるが、いなせちゃんは脱兎の如く逃げ出してしまう。つーか、足、はええな。

「……………マジで、何なんだ？」

公園に来るなだとか、ヒーローはつまらないだとか、そんな事言われてもなあ。

家に帰り、少しだけ寝て、昼前に起きる。うわーお、なんて健康的な生活なんだろう！

「あつぢい……………」

カラーズのお仕事の為、かんかん照りの太陽の下、俺はレンと連れ立って歩く。目指すは公園だ。……………いなせちゃんは『近づくな』と言っていたが、そうもいかない。生活がかかっているのだ。

「お兄さん、今日はどんなお仕事なの？ 怪人と戦うの？ それとも解体？ 解体？」

「公園にはマグロなんかいないからな」

「あは、知ってるよ。公園にはマグロじゃなくて、人間がいっぱいいるんだもんね」

今日も、猟奇的な彼だった。

ソフトクリーム屋の前には既に社長と九重がいた。二人はおいし

そうにソフトクリームを舐めている。ちくしょうが。

「あら、早かったのね」

今日の社長は麦藁帽子を被っている。外面だけ見りゃあ、深窓の令嬢って感じだ。あくまで、見た目だけは。

「……おはようございます」

「おう、おはよう。うまそうだな、ちよっと分けてくれよ」

「だっ、駄目です」

九重はふいっと顔を逸らしてしまう。けち。

「やあ、君がヒーローか」

車の中から顔を見せたのは、ソフトクリーム屋の店主である、若い男だった。真っ赤なキャップを被り、涼しげな微笑を浮かべている。……こいつが、怪人を轢いたってのか。何気なく、車の前面に目を向けると、凹んでいるのが分かる。潰れた化け猫が、実に恨めしげな顔つきをしていた。

「どうも。ええと、着ぐるみを、って事を聞いてきたんですけど」

「ああ、そうそう。ちよっと待っててね」

店主はしゃがみ込み、何かを取り出そうとしている。少し、時間が掛かりそうだった。

「社長」

「何？」

「今から、いつまで着ぐるみの中に入っとけば良いんだ？」

社長は腕時計を見遣り、コーンを齧る。

「半日くらいかしら」

「俺に恨みでもあるのか」

「馬鹿ね、ちゃんと休憩させてあげるわよ」

「当たり前だ！」

お仕事開始である。今日の俺の相棒は、シロクマの着ぐるみだった。デフォルメされた、何の面白みもない奴である。

俺のやる事と言ったら、一つだ。客を、特にガキの気を惹く事なのだろう。尤も、適当に車の前で動いただけなのだが。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「息が荒いわよ」

俺の近くでは、社長がちらしを配ろうと待機している。九重はレオンと一緒に、公園内をうろつろしながらソフトクリームを食べていた。いわゆる、サクラって奴だろう。

「汗が止まらん」そして、汗が流れなくなったら俺はおしまいだろう。

「まだ一時間しか経っていないわよ」

客足は、まあ、上々と言えた。この炎天下だ、長蛇の列が出来るって事はないが、店主は忙しそうにしている。ちびっ子は俺のパフオーマンスを少し離れたところで見ていた。よし、次はバック宙を見せてやるぜ。

「わーっすげえ！」

「クマが飛んだ！」

「中の人、平気なのかしら」

その奥さん、俺はもう空元氣すら使い果たしてしまいそうです。

それから三十分ほど経過し、客足が途絶えた。どうやら、今日は最高気温がマークされるといっ話である。つまり暑い。死ぬほど暑い。俺は涙ながらに休憩を訴え、着ぐるみを脱ぎ、九重のタクシーの中で水をがぶ飲みしていた。

「……タオルです」

「おお……さんきゅう」

うへえ、こらアカンわ。着替えも用意しといて正解だったな。たったの二時間弱でこの有様だ。そろそろ死んでしまっ。

「……大丈夫、ですか？」

「んな訳ねえだろ」九重、お前いっぺんで良いからやってみろ。し

たら、あの社長をぎゃふんと言わせたくなるから。

「でも、あの、こういう仕事の方が良いと思います」

「こういうって、着ぐるみが、かあ？」

サウナと変わらねえんだぞ。

「……だって、青井さんが危ない目には、遭いませんよね」

ああ、そういう事か。確かに、怪人を相手にするよりかは楽な仕事である。

「もう遭ってるよ。死ぬ一歩手前だぜ」

「無理だったら無理だって、社長に言った方が良いです」

「それは、悔しいから嫌だな」

さつきは半泣きで頼み込んだけど。

「そっいや、今、何度だ？」

「……気温、ですか」

俺は頷く。九重は窓の外に目を遣った。

「……聞かない方が、良いと思います」

俺、死んじやうかもしない。

小一時間ほど休ませてもらい、俺は再び戦闘服に袖を通す。と言
うか頭からすっぽりと被る。

さあ、見るガキども！ 俺を見る！ ほらすげえだろ！ 今度は
逆立ちだ！ 頭に血が上るぜひゃっほー！

しかし、今日日のお子様は飽きるのが早かった。常に流行の最先
端をいくちびっ子どもは、俺に興味をなくしてしまい、ソフトク
リームをぺろぺろしたり、このくそ暑い中を元気に走り回っていたの
である。

「わー、すごい」

舐め腐った拍手を送るのは社長だ。彼女はちらしを配る相手がい
ないのを良い事に、クレープをもぐもぐと食べている。バナラアイ
スを挟んだ、甘味の極みとも言えるスイーツだった。

「はあ、はあ、はあ、一口、くれ」

「嫌よ。それより、次は何をしてくれるのかしら」
俺は大の字になって地面に寝転がる。

「いつそ殺してくれ」

「馬鹿ね。……ああ、ほら、子供たちがぎゃあきゃあ騒いでいるじゃない。あなたに興味を戻したのかも」

確かに、ガキどもの甲高く耳障りな声が響いている。鼓膜が破裂しそうだった。俺はゆっくりと体を起こす。仕方ねえなあ、少しだけ相手してやるか。

瞬間、地面が揺れる。

「……地震かしら」

「それにしちゃ……うお、また揺れた」
地震ではないみたいだ。さつきから、定期的に振動が起こっている。

「うそ」社長が、顔を上げる。彼女の持つクレープから、アイスクリームがどろりと零れた。

嘘であって欲しい。

俺の目が馬鹿になっっていないのなら、公園の木々を踏みしだく、巨大な蜘蛛が見えた。

八本の脚に、光る四つの目。見た者を等しく嫌悪させるフォルム。正しく、アレは蜘蛛だろう。

ただ、その蜘蛛は生きていなかった。言ってみれば、巨大な金属の塊である。見上げれば、三階建ての建物くらいはありそうだ。鋼鉄の体躯が陽光を反射している。

「蜘蛛型の、大型兵器……」

鋼鉄の蜘蛛。

呟くと、現実味が増してくる。

逃げ惑う一般市民に、姦しい叫び声。時たま訪れる振動に、木々

を押し折る嫌な音。それらが混ざり合って、俺の意識を飛ばしていた。

「青井さん！」

九重に肩を揺さぶられ、俺は我に返る。とにかく、やたらでかい蜘蛛が暴れてるってのに変わりはないんだ。ここから逃げるしかねえだろう。

「社長とレンを車に。ああ、それから」

俺は、ソフトクリーム屋の店主の姿を認める。彼は、さっさと逃げ出す準備を始めているらしかった。大したタマである。

こっちも、他の奴を気にしてられねえ。あんなもん、相手にしていられるかってんだ。

「お兄さんっ、すごいよアレ！ すっごくおっきい！」

「あほっ、早く車に戻れ！」

タクシーには、既に社長が乗り込んでいる。九重は運転席で俺とレンを待っていた。

目を輝かせているレンを引きずり、タクシーに戻ると、社長は何か言いたそうな顔をしていた。

「……あんだ、まさかアレとやり合えって言うんじゃあないだろうな」

社長は苦しそうな表情を浮かべる。

「そう、言いたかったのだけれど、分が悪いわね」

「つたりめえだるバカ！」

巨大な蜘蛛型兵器は、八本の脚を使って破壊活動に勤しんでいた。危険だが、ここから見る限り犠牲者は出ていない。恐らく、奴の狙いは殺人行為ではないのだろう。が、いつまで続くか。

「悔しいけど、逃げるしかないわね。他のヒーローを待ちましょう。俺は頷き、車に乗り掛ける。が、誰が、アレをどうにかしてくれるって言うんだ？ 他のヒーローって、ヒーローも中身は俺らと同じ人間なんだ。」

ヒーローってのは、スーツを着た人間だ。一般人よりも高い身体

能力を得た者である。だから、彼らの相手は、いつだって同種だ。スーツを着た戦闘員や、怪人を敵に回している。……あんなバカでかいものと戦った事のある奴なんか、いるのか？ 第一、戦いたいとも思えないだろう。もはや、個人の能力でどうこう出来るモノではないんだ。

「ありやもう、警察とか軍の出番だろ」

「でも、彼らは鈍足よ。被害があつて収まりかけてから、ようやくになつて動けるの」

昔、爺さんは言っていた。『脚のある戦車はロマンでしかない』と。巨大な兵器というのは、巨大能的にしかないのだ。尚且つ、弱点である、脆い脚部は常に丸見えである。

だけど、怖いじゃねえか。単純に、でかくて、固くて、強いんだ。そんなのが街中で暴れてんだぞ。理屈は分かるけど、誰が、どうしてくれるってんだ。

小さければ小さいほど良いんですよ

突如として現れた、巨大な蜘蛛の姿をした機動兵器。

俺たちはただ、黙って見ているしかなかった。あんなもん、どうしようもねえだろ。……だが、俺はその場から立ち去る事も出来なかった。九重はさっさと逃げたが、俺が車に乗ろうとしないので、酷く困惑している。

不幸中の幸いとも言うのだろうか。蜘蛛型兵器は、火器を使わなかった。八本の脚を巧みに使うだけで（それだけでも十分脅威といえる）、専らの標的は公園内に植えられた木、だけである。

「何が狙いなのかしら」
狙いならある筈だ。でなければ、あんな風に巨大な姿を晒しはしないだろう。

「……あつ、来ました」
この大きさだ。そこそこ遠くにいても、嫌でも見えてしまうだろう。公園に、数名のヒーローが到着した。あの、板前ヒーローや、以前にも見た事のある、またぎのような格好をしたヒーローが見える。が、やはり期待は出来ないだろう。手柄を取り合う正義の使者が、ああして足並み揃えようとしているのは、自分たちでは力不足だと分かっているからだ。巨大な相手に尻込みするのも無理はない。やはり、スーツを着た者との戦闘には慣れていないが、『ああいうもの』を相手にした奴なんざ、いやしないんだろう。

いかん。まるで、夢でも見ているようだ。俺だって、あそこまでえげつないものは初めて見る。あんな趣味丸出しの……。

「お前が行けよ！」

「いやお前が行けて！ 手柄譲ってやるからさ！」

「無理ムリムリ！ 無理だつて！」

ヒーローたちは消極的だった。ここに、一般市民がいなくて良かったな。ただでさえアレな評判が、更に悪くなっていくところだった。が、気持ちは分かる。分かり過ぎる。誰だって死にたくない。そうに決まってる。うん。やっぱ逃げよう。

「ぎゃああああああつ！」

どうやら、蜘蛛型の兵器がヒーローたちを発見したらしい。大きな脚を動かし、標的を彼らに定めていた。蜘蛛の脚、その先端はかなり尖っている。刺されりや死ぬ。っつーか、押し潰される。板前もまたぎも、地面を転がるように逃げ惑っていた。

「……あつ、青井さん、このままじゃ」

逃げるしかねえな。

しかし、俺は見てしまった。公園に、見知った人物がいるのを。

……銀川老人である。彼は、鋼鉄の蜘蛛を見上げていた。

「逃げ遅れた人がいる」

まずい。あそこにいちやあ踏み潰されるぞ。早く避難させてやらねえと！

「お前らはそこで待ってる！」

「ちよつと、青井!？」

銀川さんは、いなせちゃんを探しに来ていたのだらう。全く、あのチビスケは。

と、走り出したところで、まだ着ぐるみのままだった事に気付いた。やべえ、上手く走れ……あ、走れるわ。普通に走れる。いつの間にか、俺の着ぐるみスキルは上がっていたらしい。嬉しくない。

「銀川さんっ」

銀川老人は俺の声に気付き、振り向く。が、不思議そうな顔だった。

「あ、そうか。あの、俺です。青井です」

俺は足踏みしながら、自分を指差す。

「あ、ああ、青井さんだったのですか」そんなのん気に！

「ここにいちや危ない。早くこつちへ避難しましょう！」

「……いや、そういう訳にもいかないのです」

まさか、いなせちゃんか？

「まだ、あの子は見つかからないんですか？ おつ、俺が探します！」

だから銀川さんは

「ああ、そういう意味ではないんです」

え？

「うわっ！？」

蜘蛛が脚を振るい、払う。ヒーローたちは悲鳴を上げながら吹き飛び、こつちにまで風圧が届いた。俺は両腕で顔を隠すが、銀川さんは微動だにしなかった。何か、様子がおかしい。彼は、何か興奮しているようにも見える。この、悪夢のような状況のせいなのか？

「銀川さん！」

「青井さん、早く逃げた方が良いですよ」

「だから！ あなたも、いなせちゃんも！」

『実はな、古い友人から連絡があつたんじゃ』

何故。何故、こんな時に、爺さんの言葉を思い出す。今は、関係ないだろうが！

「ここは、危ないんですよ？」

「ええ、知っておりますよ」

心臓が痛い。胸が破れてしまいそうだと錯覚する。まさか、なんて、馬鹿な考えが頭を過ぎった。

俺が言葉を探し、選んでいると、新たなヒーローが公園に到着する。

劣勢だったヒーロー側だが、救援が駆けつけた。

二人のヒーローである。まず、空からやってきたヒーローは、以前に俺をボコった、飛行ユニットを装着した男である。彼は蜘蛛の攻撃を掻い潜り、その周りを飛び回り、自身に注意を引きつけ、隙を作った。

「おおおおおおっ！」

その隙を衝いたもう一人のヒーローの咆哮と共に、蜘蛛の脚がへこみ、曲がる。同時、歓声が沸き起こった。

空飛ぶヒーローと一緒に駆けつけたのは、巨大なしゃもじを持った……赤丸である。彼女は類稀な攻撃力でもって、蜘蛛型兵器に己の得物を叩きつけたのだ。馬鹿力め。今だけは感謝しといてやろう。ありがとうございます。本当に助かりました。

反撃に活気付くヒーローたち。

そして、渋面の銀川老人。

「だが、あれくらいでは終わらんよ」

「……銀川、さん」

線が繋がった、とでも言うのだろうか。俺は、着ぐるみを被ったままで良かったと思っている。

恐らく、爺さんの友人というのは、銀川さんの事だろう。そして、若いヒーローが見た巨大な何かと言うのは、アレだ。あの、鋼鉄の蜘蛛に他ならない。そうに、違いないんだ。

「あの蜘蛛は、あなたが……」

「そうです。良く、お分かりになりましたね」

あっさりと、認められた。

「ようやっと完成したんですよ。試作品で、今は試運転というところでしょうか」

俺はどうしたら良いのか分からなくなる。

「本当に、あなたが？」

あんな馬鹿なものを。こんな馬鹿な事を。

「青井さん、私はね、ヒーローを憎んでいるんですよ」

銀川さんは昂ぶっているのか、話を始める。別に、俺がここに立

つていなくても、誰もいなくても、彼は一人で喋り続けたのだろう。
「私の息子はヒーローに殺されたんです。その細君と共に。私は、
二人の子を失った。突然の出来事でした。何が何だか分からなかつ
たんです」

ヒーローに、殺された？

「復讐を考えました。しかし、私はそれどころではなかったのです。
当時、私の組織は壊滅寸前にまで追い遣られていましたから」

「まさか、あなたは……！？」

「ええ、悪の組織の首領でした。驚きましたかな？」

……爺さんの知り合いつてんなら、そういう事もあるだろう。い
や、そういう事しか起こらない。そうに違いない。

だが、そうか。銀川さんが悪の組織を率いていたのなら、彼の家
族が狙われた理由は分かる。

「復讐、されたんですね」

「妻には先立たれていましたから。ですから、標的は、息子に」

そして、自分の組織はヒーローに潰されつつあった、か。自業自
得つつーか、なるようになった、か？ それを聞いて、俺にはどう
する事も出来ない。

「もう随分と前の話です。……先日、懐かしい方と連絡が取れまし
てね。私の、友人とも呼べる人なのですが」

爺さんの事だな。

「いや、蘇った。久しく忘れていたのですよ。アレを作つてはいた
のですが、半ば惰性でしてね。しかし、その友人との会話で思い出
したのです」

「何を、ですか」

「野心を、です」

野心ときたか。

「尤も、その方は私の趣味を批判していましたが。どうにも、私は
スーツが苦手です。ああいったものを作る事に喜びを感じるのですよ。
知っていますか、青井さん。兵器に搭乗する、いわゆるパイロット

はね、体格の小さい者が良い。コックピットは窮屈で、図体の大きい者ではまともには操縦出来ない。パイロットというのは、小さければ小さいほど良いんですよ」

おい。

「分かりますか？」

「ちょっと待てよ。おい、ふざけんよ。」

「分かり、ますか？」

「……あなた（・・・）、やっちゃんねえ事やりやがったな……！」

「分かるのですね」

「ふざけ……！ てめえ！」

銀川老人はくつくつと笑った。

「アレを止める！ 止めさせるよ！」

「ふ、ふふ、やはり、あなたも、そうでしたか」

「俺の話聞きやがれ！」

俺は目の前の男の襟を掴もうとして、手を伸ばす。が、彼はこちらの伸ばした手首を掴み返した。

「あなたも、ヒーローだったのですね」

「だったらどうした！ ここでやり合うかよ！」

力づくで銀川老人から逃れると、俺は蜘蛛を見上げる。

巨大な蜘蛛は、数の上では勝るヒーローたちと互角の戦いを繰り広げているように見えた。いや、むしろ押している、か？

赤丸も、板前も、またぎも、空飛ぶヒーローも、どうにかして取り付き、攻撃を仕掛けようとしていた。だが、あの蜘蛛型兵器はそれを許さない。脚を使う。時には払い、振り、下ろす。闇雲に暴れているようにも見えるが、それは違った。アレに乗っている者は、酷く繊細な立ち回りを要求されている。そして、応えている。まるで、自らの手足であるかのように、蜘蛛の脚を動かしているのだ。

そう、あの兵器には人が乗っている。

あの子が……銀川いなせが乗っている。

「止める……！」

「ヒーローには従えませんな」

銀川老人はいけしやあしやあと抜かした。

「第一、止まれと言われて止まるものではない」

「あんたが作ったんだろうが！」

「作ったのは私ですが、動かしているのは私ではない」

「いなせちゃんを乗せたのはあんただろ！」

どうして、そんな風に、平気な顔をしていられるんだ！

「あくまで、あの子の意志ですよ。分かりませんか？ 私が息子たちをヒーローに殺されたのと同じく、あの子もまた、親をヒーローに殺されたのです」

「あの子が望んで、アレに乗ってるってのか」

「いなせはね、ヒーローを恨んでいます。憎んでいます。組織が潰され、私と共に命からがら逃げ出したのですよ。二人でね、復讐を誓いました。毎日、毎日、呪いの言葉を吐き続けましたよ。復讐の為に、私は兵器を作り、あの子は部品になろうとした」

部品、だと？

「いなせもまた、あの兵器の一部なのです」

「人間だろ？……！」

「人の身ではスーツを着たヒーローに立ち向かえない。あの子が戦うには、部品となるしかなかった。それが、分からないのですか？

青井さん。あなたは、私たちの人生を否定するのですか？」

何だ、そりゃ。さっきから聞いてれば、くだらねえ事をずらずらと並べ立てやがる。

「全部、てめえの都合じゃねえか」

「……何ですって？」

「身内を殺されたってのはさ、心から同情するぜ。でもな、自業自得じゃねえか。悪の組織名乗ってりゃ、そうなっちまうのも覚悟し

てたつて事なんだろうが」

自分だけが悪い事をして、ただで済むと思つてたのかよ。

「覚悟はしていたつ。しかし許すかどうかは別でしょうが！ あなただつて、同じ目に遭えば私と同じだつ、同じになる！」

「俺はな」

俺は、あなたと同じモノになるだろう。

だけど、違うだろう。

「その時、あの子は幾つだつた？ まだガキだつたんじゃねえかよ。善悪の区別も付かないガキによ、何を吹き込んだ？ てめえの復讐に、てめえの孫を巻き込むつてのはおかしいんじゃねえか？」

確かに、許せないだろう。親を殺されたんだ。仇を取つてやりた。そう思うのは不思議じゃない。だけど、子供なんだ。他に、何も知らないんだ。分からないんだ。

「あの子は頭が良い！ 全て分かつていた！ 全て知つた上で、私に付いてきたのです！」

違うだろう。

「そうするしかなかったんじゃねえか。親がいなくなつて、ヒーローに狙われてさ。いなせちゃんにとって、頼れるのはあなたしかいなかった筈だ。あなたに従い、守つてもらつしかなかった筈だ」

ガキは、ガキだ。どれだけ頭が回つたつて仕方がねえ。あの子には、選択肢が必要だつた。……いや、いなせちゃんだけじゃない。

この世の中のガキには、そういうものが必要なんだ。守つてくれて、教えてくれる人が。

「それは青井さん、あなたの理屈だ。あなたの意見だ。あの子にとつては、そうではない。今まで、ずっとそうやって生きてきたんです。辛い訓練にも音を上げず、ひたすらにあの子は耐えてきたんです。あの子は、ヒーローを憎んでいる。他ならぬあの子がつ、この戦いを望んでいる！」

「その人生を強いたのは、その道を敷いたのはあなただ。他に生きる道なんか、幾らでもあつた筈だろうが。あなたは、誰に仕返しし

たいんだ？ この公園にいるヒーローの誰かが、あんなたちの家族を殺したのか」

「私たちは、全てのヒーローに復讐を始める……!!」

「そんなもん無理に決まってるだろ!!」

「ならば止めるか若造が！ 止められるものなら止めてみる！ 私
もあの子も、言葉では止まらんぞ！」

じゃあ力づくだ。こいつの相手は後回しにして、先にあのデカブツをどうにかするしかねえ。

そこで見てろ、銀川。

お前はあたしを裏切ったんだ！

最悪だ。

もう何も見たくねえし、聞きたくねえ。誰彼構わず復讐だの何だので周りを巻き込みやがって。

銀川老人が、あの蜘蛛型兵器を作った。そして、乗っているのは彼の孫娘である、いなせちゃんだった。

ヒーローに家族を殺されたいなせちゃんは、ヒーローを憎んでいるのだと、銀川老人は言った。……本当に、そうか？俺は嫌だ。そんなの、信じたくない。彼女は、そんな風には思っていない筈だ。そう、信じる。そうに違いない。

「俺も行く」

タクシーに戻るなり、俺は口を開いた。九重は目を丸くし、何か言おうとしている。

「駄目よ」ちっ、いつもなら行けって言うくせによ。

「……そ、そうですよ。無茶です、あんなのを相手にするなんて」俺はドアを開けたまま、助手席に座り込んだ。

「九重、チャック外せ。頭だけ被ってくからよ」

「だっ、駄目です。それよりドアを閉めてください。逃げましょう」それこそ駄目だ。ここで尻尾巻いて逃げるなんざ、俺は嫌だね。

「外せ」

「あはっ、僕が外してあげようか？」

「九重、レン、駄目よ。……青井、他のヒーローに任せなさい。流石に、あんなの」

「無理か？」

社長は少しの間、黙った。

「俺にとっちゃあ、アレも、今までに戦ってきた怪人も同じだよ」

「違い過ぎるわ。全然違う。違うじゃない。あんなの……」

「良いから外せて言ってるんだろ。動きづらいつたらねえんだ」

「おい」ああ？

顔を上げると、ヒーローがいた。真つ赤なスーツを着た男である。どうやらこいつ、ここまで逃げてきたらしいな。

「何だてめえ？ 乗せてって欲しいのか？」

どうせ逃げ場なんかねえけどな。

「んな訳ねえだろ。お前ら、何だ？ ヒーローなのか？」

真つ赤なヒーローの後ろには、またぎの格好をしたヒーローもいる。こつちに逃げてくる奴らの数が増えていた。

「ヒーローだよ」

俺がそう言くと、ヒーローたちは笑った。おかしそつに、楽しそつに。

「はっ、冗談だろ！？ お前ら、さっきから目障りなんだよ」

「……何なんですか、あなたたち」

意外にも、九重が噛みつく。彼はヒーローたちを睨みつけ……ああ、すぐに視線を逸らしてしまった。

「スーツも着てねえ奴がちよろちよるとさあ、鬱陶しいんだよ。お前みたいなの野次馬が」

「ヒーローだよ、俺は」

ミラーで自分の姿を確認する。……ああ、確かにヒーローには見えねえか。クマの着ぐるみだもんなあ。

「見えねえんだよ」

「スーツもなしに戦えるか。邪魔なんだ、てめえらは」

別にムカついたりしねえけど。どうせ、言われ慣れてるし、自分で分かってる事だしよ。

「……じゃあ、あなたたちはどうなんですか？」

ヒーローたちが九重を睨みつける。

「ああ……この人に何か言える立場なんですか。あの大きな蜘蛛から逃げてきたくせに、ヒーローだのどうのって言えるんですか」

「なっ、この野郎……！ ヒーローでも何でもねえ一般人のくせによ、横から口挟んでんじゃねえぞ」

「あんなもん相手にしてられるかよ！」

「今も戦っている人たちがいるじゃないですか」

九重が指を差す。その先には、蜘蛛型兵器と戦う、赤丸たちがいた。

蜘蛛の脚が二本、なくなっていた。一本は異様な方向に捻じ曲がり、使い物にならない。もう一本は真つ二つに切られたらしく、下半分が地面に転がっている。

だが、蜘蛛はまだ動く。むしろ、動きが良くなっているような気さえしていた。八本の内、二本を失って本気になった？ あるいは、脚の数が減って操縦が楽になったか、だ。

倒せるか？

鋼鉄の蜘蛛は確かに脅威だ。だが、無敵じゃあない。脚だつて折れるし、曲げられる。戦いが続けば破壊だつて可能に違いない。あの大型兵器は、少しずつではあるが、壊れているのだ。

しかし、ヒーローだつて同じだ。彼らもまた疲れてきている。スーイツの性能に飽かせた攻撃だつて、いつまでも続けられるもんじゃない。まともに攻撃を喰らえばやばいだろうし、攻撃を避けるのだつていつまで続くか分からない。どっちが先に倒れるか。方やスーイツ、方やマシン。

「……レン」

「あは、何？」

全く、このお子様ときたら。この状況を何とも思っていないのか。

「社長たちを頼む」

「僕、お留守番？」

退避してきたヒーローたちは混乱している。無理もない。……ビビって、何をしでかすか分からん連中だ。俺たちに対して、好意的な感情は持ち合わせちゃいないだろう。ここでヤケを起こされちゃあたまったもんじゃねえ。

「ついでに、ほら、脱がせてくれるか」俺は自分の背中を指差す。

「駄目っ、駄目よ！」

うるせえぞ。

「……私がやります」

「お？」

九重に着ぐるみのチャックを下ろし始める。冷たい風が背中に当たって気持ち良かった。

「九重、あなた、何を勝手な……」

「……社長は、ここまで言われて平気なんですか？」

俺の位置からじゃ、九重の顔が見られない。

「この人たちが言っていたように、カライズにスーツはないんです。青井さんが危ない目に遭うのは嫌です。だけど、ヒーローじゃないですか。青井さんは、自分から戦うと言ってきてるのに。それを私たちが拒むのは違うと思います」

「青井は私の部下よ。うちの社員なの、だから、勝手な事をしてもらっては困るのよ」

青井青井って、名前を呼ぶな。連呼すんなアホどもめ。

「……悔しくないんですか？」

問われ、社長は押し黙る。まさか、九重に言い負かされる彼女が見られるとは。

「私は悔しいです」

とん、と、背中を押される。脱いだ着ぐるみは、車の外に投げ捨てた。

「なんて格好だよ」思わず笑ってしまう。顔だけは可愛らしいシロクマだが、そこから下はただの男である。おっさんである。これじゃあ、その『本物の』ヒーローたちが何か言いたくなるのも分かる。

るってもんだ。

「……危なくなったら戻ってきてください。そうでなくても、引きずってでも、戻ってきてもらいますから」

「あいよ」

立ち上がる。車の外に出ると、むわつとした熱気と、ヒーローたちからの敵意。

「……がんばってください」

「あいよ」

そんな俺にも、期待してくれてる奴がいる。だったら、スーツがなくても、中途半端でも、俺は俺を貫かなきゃならない。他ならぬ自分が、そう決めたのだ。

蜘蛛が脚を振り下ろす。地響きが起こり、風が巻き起こる。だからどうしたってんだ。

戦場に戻った時、赤丸と目が合う。彼女は俺の正体に一発で気付いたらしい。……こんな格好して出てくる奴を、一人しか知らないとも言えるが。

「何を……何をのこのこと！」

「忙しそうじゃねえか。ヒーロー日和だな、なあ」

「阿呆か、われ！ 出る幕ないんじゃ、ボケが！」

元気だな、こいつ。

蜘蛛が緩慢な動きで脚を上げる。スーツなしでもかわせない訳では、ない。だが、恐ろしい。アレに当たったら、俺は一発でアウトだ。スーツを着ているヒーローたちとは違う。同じように戦ったって駄目だ。俺が狙うのは脚じゃない。

「うおおおおっ！？」

ヒーローたちの頭すれすれを掠めていくような一撃である。俺は地面に転がるようにして、攻撃を回避した。

「退けってゆうとるじゃろうが！」

「手伝えしやもじ」

「ああ!？」

ちまちまやっててもしょうがねえ。俺は蜘蛛型兵器のコックピット部分を指差す。蜘蛛の目玉には、透明な、蓋みたいなものが付いている。恐らく、そこにいなせちゃんがいる筈だ。

「あそこに行きたい」

「……無理じゃ。遠過ぎる」

「頼む」

俺は頭を下げる。

「われ、何ぞ掴んでるみたいじゃのう」

何も掴んじやいない。これから掴みにいくんだ。

「その話、詳しく聞かせてもらおうか」

「てめえは」

俺たちの近くに降り立ったのは、あの、空飛ぶヒーローだった。

彼は蜘蛛を見上げて、不満そうに鼻を鳴らす。

「アレをどうにか出来るのか？」

「やってみなくちゃ分からねえ。あそこまで、俺を連れて行ってくれ」

赤丸とヒーローが、こっちを見ている。見定めるような、気味の悪い視線だった。

「良いだろう」

飛行タイプのヒーローは小さく笑う。

「手をこまねいていたところだ。お前の策が失敗に終わったとしても、それはそれで構わん。ふりだしに戻るだけだからな」

「ちょ……うちは……」

「残った俺たち全員も、あなるかもしれねえんだぜ」

戦いから逃げ出し、それでも尚この場に留まろうとするヒーローたちを指差す。赤丸は彼らを一瞥し、覚悟を決めてくれたらしかった。

「うちは、何をすりゃあええんじや」

空飛ぶヒーローは、自らをジエイと名乗った。

「俺に、男を連れて飛ぶ趣味はない」

そして、こう断言した。

「使えん」赤丸の言うとおりである。えっと、お前何しに来たの？

「いや、乗せてけよ」

「駄目だ」

ジエイは首を横に振る。煩わしそうな仕草であった。

「じゃあ、どうやってあそこまで行くつてんだよ!」

「彼女に頼めば良い。その得物で、あそこまで飛ばしてもらえ」

俺は、しゃもじのしゃもじを見る。これで、飛べ？ 馬鹿言っ
んなよ。

「まさか、こいつでぶっ飛ばしてもらえなんて言っつもりじゃあな
いだろうな」

「ほう、読心術が使えるのか」

「なっ……て、てめえ」

「ほう、ほいじゃ、それで」

なんで乗り気なんだよ。こいつ、どさくさに紛れて俺をどうにか
するつもりかもしれませぬ。と言っかありえる。充分考えられる。

「歯、食い縛れ」

「あ?」

振り返ると、赤丸がしゃもじを振り抜こうとしているのが見えた。
風が唸る。え？ つーか、ちょっと待てよ。行動に移すの早過ぎる
だろ。心の準備とかあるし、クモのコックピットに取り付くより先
に俺のケツが使い物にならなくなるのが早いんじゃないか。手加減
してくれるんだろうな、なあ、なあ!?

「ちよ、おま

「ぶっ飛べや」

ぎらりと光る目。にやりと尖る唇。あ、こいつやる気満々。

ケツが。
痛い。

地球の重力に真つ向から逆らつて、風を切り、宙に浮く感覚。俺は叫び声を上げていた。何せ着ぐるみのせいで視界が悪い。取り付く場所だつて確認しちやいなんだ。このまま落下して怪我するのだけは嫌だ。嫌過ぎる。闇雲に手を伸ばすも、すぐ傍をクモの足が通り抜けていき、俺の金玉が縮み上がる。

「目の前だ、しつかり掴め！」

ジェイが他人事みたいに言つてやがる。実際、他人事だつた。俺はいなせちゃんをどうにかしなくちゃというよりも、死にたくない一心から必死に手を伸ばす。視界が反転している。ぐるぐると頭の中が回っている。空を飛ぶのつて、思つてるより楽しくない。だが、戦闘員での経験が活きた。ヒーローにぶつ飛ばされまくつたのは無駄じゃない。しつかりと目を開け、右腕のグローブでクモの骨組みらしき部分に手を掛ける。安心するのは早い。力を込め、一気に足を掛ける。飛び上がるようにすれば、そこは。

「……生きてる、よな」

どうやら、俺は今、クモの背中に立つているらしい。見下ろす街は案外小さく、ヒーローどもは酷くちつぽけな存在に思えた。……いなせちゃんも、俺と同じ風に思い、同じようにものが見えているのだろうか。なるほど、ガキが見るには贅沢な景色過ぎる。

足元からは声が聞こえてきた。ヒーローの声。銀川老人の声。社長たちの声。俺を応援している風には聞こえない。危ないから降りるだとか、勝手な事を抜かしてやがる。俺だつて早く降りたいわ。

「暴れんじゃねえぞ」

クモの背中は、足場としては不安が残る。なるべく平べったい場所を探し、飛び移るようにして距離を稼いでいく。コックピット部分までは後少し。が、俺の祈りは通じない。クモはその巨体を揺ら

して俺を振り下ろそうとする。真下ではヒーローの悲痛な声。多分、脚にぶつ飛ばされたんだろう。時間を掛けてたら俺もそうなる。背中にひやりとした汗が流れた。そいつに急かされ、後押しされるような形で、俺はクモの頭頂部に到達する。幸い、掴めるようなポイントが多い。無様に落下するような事態は避けられそうだ。今のところは、だが。

コックピットはクモの顔の前面部に位置している。こっから飛び降りなきゃ、そこには取り付けない。視界を確保する為だろう、コックピットはガラス張りになっている。覚悟を決めて、その横に飛べ。大丈夫だ。いなせちゃんなら話せば分かってくれる。そうでなきゃ困る。

「らあっ！」

クモの動きが緩慢になった隙を見計らい、下りる。コックピットのガラス部分に着地し、近くの出っ張りを両手で掴んだ。心臓がばくんばくん鳴っている。飛び出しそうになるそれが、馬鹿な真似はもうやめると必死に訴えているように思えた。

だが、見えた。いた。ガラス一枚隔てた先には、いなせちゃんがいる。彼女は俺を睨むようにして見据えると、凶悪な形相で何事かを叫んだ。

「いつ、いなせちゃん！ 俺だ！」

「誰だ!?!」

いなせちゃんの声は辛うじて聞こえる。

「誰だつて……俺だつて！ 青井だ！」

「何を……！」

「本当だ！ 君を止めに来た！」

目を見開いた彼女は、頭を振り、声を荒らげた。

「何故、お前がそこにいるんだ！」

こっちの台詞だつっの。さっさとクモを止めてくれ。頼むからもうやめて。

「こいつを止めろつて！」

悪いっ、かき氷！

走馬灯が何度も見えた。だけど、簡単には手放してやるかよ。

「大人しくしろっ！」

いなせちゃんは喚きながら巨大兵器を操作する。……が、さっきまでの繊細な動きではない。感情に任せて、むちゃくちゃにしているだけだ。

「もうやめてくれ！ 戦うな！ そこから出るんだ！」

「黙れッ！」

「どうしてこんな事してるんだ、君は！」

「お前たちが悪いんだ！ ヒーローがいるからっ、あたしたちは！」
駄目だ。全然話を聞いてくれない。そして腕が痺れてきた。

……ヒーローが、いなせちゃんの家族を殺したとは聞いている。だけど、ここにいるヒーローが彼女の身内を手を掛けた訳じゃない。いなせちゃんだって分かっていている筈だ。

「君はこんな事がしたいのかよ！」

坊主憎けりや袈裟まで憎いつてのか。

「しなくちゃ駄目なんだ！ お前はもう関わるなっ、あたしの前からいなくなれ！」

「答えるよ！」

押し問答が続く。無駄に時間が過ぎていく。クモの脚は地上の公園を踏み抜き、踏みしだき、遣りたい放題に荒らしていた。その時、コックピットからノイズが聞こえて、いなせちゃんが口元を押さえる。

『……何をしている、いなせ』

しわがれた声は銀川老人のそれだった。無線、か？ ……なるほど、彼がいなせちゃんに指示を出していたのか。

『ヒーローと戦え』

「あ、こ、ここにヒーローがくつついて……」

『振り落とせば良かるう』

あ、ちよ、余計な事言うなじじい。

「で、でも」

『いなせッ』

「ヒーローは、青井正義で……だから」

『知っておる。早く振り落とせ』

いなせちゃんの肩が震えて、彼女は無線機を呆然と見つめる。ノイズ雑じりの銀川老人の声は、いなせちゃんをたきつける。戦えと、ヒーローを倒せと。大人しくなった彼女は操縦桿を握ったまま動かない。コックピットの中には計器やスイッチが並んでいる。そこは、俺には牢獄に見えた。

「戦いたいのか？」

「あ……」

右腕に力を込める。

いなせちゃんは、本当に戦いを望んでいたのか？ 本当に、ヒーローを倒したいと思っていたのか？ 他のヒーローは、そうだと断じるのかもしれない。彼女を知らない人間も、銀川老人だって、そうだと決め付けるのかもしれない。実際、いなせちゃんはここにいない。クモのコックピットに座り、公園を荒らし、皆をビビらせた。事実だ。曲げられない。変えられない。だけど俺には関係ない。

「君はこのまま暴れ回るのか？」

「お前はいつまでそこにいるんだ……！」

涙目で睨まれる。他の誰かがいなせちゃんを引きずり出そうとするなら、俺はここで体を張るつもりだ。

「俺を巻き込むつもりはなかったんだよな」

いなせちゃんは答えない。……無愛想で、きつと不器用な彼女は、今朝のやり取りを忘れたのだろうか。君は、俺にここへ来るなど言っていた。その意味を理解しているのだろうか。いや、良い。彼女

にそのつもりがなかったとしても、俺を助けようとしたのが嘘だったとしても構わない。

ム力つくよなあ。

こんなガキに気を遣われて、こんなガキに気を遣わせる人間ってのは。

「そこを開けてくれ」

「駄目だっ、早く降りろ！」

「降りられるか！ だったら壊す、それだけだッ、伏せてろよ！」

俺はつるつるとしたガラスの表面に飛び移る。辛うじて取っ掛かりと呼べる部分を左腕で掴み、体を固定させ、右腕でガラスをぶん殴ってやった。が、びくともしねえ。力を入れにくい体勢なのは確かだけど、それにしたってかってえ、ちよつと痛え、何これ？ 強化ガラス？ 畜生構わねえ、壊れるまで続けるだけだ。

「やめる！ お前の手が壊れるぞ！」

「だったらここを開けるってんだ！」

二発、三発、四発。ガラスを殴りつける度に衝撃で腕が痺れる。

体が揺れる。足を滑らせればまっさかさまに落ちていくだろう。そんでまあ死んじゃうんだろう。

『いなせ！ 何をしておる、早くそいつを落とさんか！』

「あんたは黙ってる！」

割れる壊れる頼むからひびくらい入ってくれ、このままじゃホントに死んじゃまう。

「……っ、何故だ。何故、あたしに触れようとするんだ！？ お前とあたしは関係ないじゃないか！ 家族でもないっ、ただの他人だろうっ！」

んな事分かってる。

「他人があたしに近づくなっ、分かつとするとするなっ、あたしは言っただぞ！ ここに来るなって！ それを裏切ったのはお前じゃないか、なのにつ」

何故だ。いなせちゃんは繰り返す。ひきつれた声が、痛い。

『いなせっ、どうしたんじや、いなせ！ そいつの声に耳を貸してはならん！』

「青井正義っ、お前は、何なんだ！？」

「ヒーローだ」

それだけ返して、俺は歯を食い縛る。殴るのではなく、右手全部で叩くようにして、ガラスに力をぶつける。馬鹿の一つ覚えみたいに同じところを叩き続けた甲斐はあった。鈍い音の後、表面に入ったひびを確認する。おっしや、もう少し。

「……退け」

「やだね。なあ、頭下げといた方が良いぜ。破片が飛び散るから」

「今、ここを開ける」

「え？」

クモが沈黙している。開かれたコックピットの中から、いなせちゃんが見上げる。

「詰めてくれ」

いなせちゃんは無言でスペースを作ってくれた。狭いけど、無理をしてでもここに入らなきゃならない。もう限界だった。足がぐがくするし、手びりびりしてるし。

「よ、っと」変なボタンを押さないようにしながらコックピットに俺は出来る限り、身を縮こまらせる。

「……近い」

「だって狭いんだし」

泣き止んだいなせちゃんの顔が近くにあった。彼女は俯き、鼻を啜る。暫くの間、いなせちゃんは口を開かなかった。

『何を』

あ？

『何を、してある……！』

怒気を孕んだ銀川老人の声。俺は無線機を引っ掴み、それを睨ん

だ。

『何をしておると！ そう聞いておるんじゃ！ 何故振り落とさなかつた！ 何故コックピットに入れた！ 何故マシンを動かさない！？ いなせ、お前は何をしておるんじゃ！？』

無線機を見るいなせちゃんを制し、俺は言葉を選んだ。

「銀川、お前の孫は預かつた」

「な、何を」

向こうからの反応、なし。

『……青井さん。あなたは、何がしたいのですか？』

「こいつを止める。……いや、止まつてるか。じゃあ、いなせちゃんをこつから降ろさせる」

銀川老人は落ち着いているんじゃあない。怒りに震える声つてのは隠せない。俺の話の聞く振りして、頭ん中はどうやっていなせちゃんをその気にさせるのか考えているんだろう。

『出来ません。あなたには伝えた筈、私たちはヒーローと戦い、倒すのだと』

「何度も聞いたよ。あのな、だつたらてめえでやつたらどうだ？」

『……あなたは……！』

「自分で作つたんだ。自分でこのばかでけえのに乗って戦ってみるよ。ガキにやらせてんじゃねえぞ、鬼か、あんたは」

『ぶざけるなっ』

思わず、無線機を握り締めていた。

「てめえの子供をてめえの都合に付き合わせてんじゃねえぞ。……いなせちゃん」

いなせちゃんは俺を見て、目を伏せようとする。もう一度彼女の名前を呼び、こつちを向かせた。

「時間がない。このクモの動きが止まつてるから、他のヒーローがここまで上がってくるかもしれないんだ。だから、正直に答えて欲しい」

『いなせっ、よせ、いなせ！』

「誰かと戦いたいか？ ヒーローを倒したいか？」

「そ、そうだ……」

目を伏せて、俯いて、声を震わせて。

「あたしは、ヒーローを」

だったら泣くな。そんな顔でこっちを見るなよ。

「分かった」

俺は無線を置いて立ち上がる。コックピットから出て、不安定な足場に立つ。膝が震えた。ガキ相手にやずるいかもしれないけど、ここまでやらなきゃ本音を引き出す事は難しいんだと思えた。

「銀川いなせ、俺を殺せ」

下の方から、俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。

「や、やめろ、あたしは」

「押せよ。落とせよ。したら死ぬぜ。ヒーローだけど俺は死ぬ」

「やめろっ」

「お前が望んだんだろうが。復讐したいんだろ、ヒーローに。だったらやれよ」

やめてくれ。やらないでくれ。怖いけど、俺はいなせちゃんから目を逸らさない。

「あ、お、おじいちゃん、あたし、あたしは……」

無線機は何も発さない。銀川老人だって、孫娘に人を直接殺させるのは嫌なんだろう。馬鹿が。ふざけやがって。やってる事は変わってねえんだ。機械に乗ってるからって、人を殺すってのに変わりはない。直接か、間接か、それだけの違いだろうが。こっちを見る、銀川いなせ。お前がやろうとしているのは、つまるところこれなんだ。ここでじっとしていたのは、一分くらいだろうか。俺は息を吐き出して、いなせちゃんを見下ろす。

「……違うんだよな。君は、これに乗らなきゃ駄目だったんだよな。そうしなきゃ、おじいちゃんにはもう何も無いんだって、分かってたんだよな」

復讐、復讐、復讐。すげえ分かりやすい。一度でも奪われれば、

一人でも身内を殺されれば、憎んで恨んで、そいつを殺したいって思うのは当たり前なんだ。だって、それでもしなきゃその先を生きていくのが難しくなる。もう一度立ち上がるには、また生きていくにはエネルギーが必要なんだ。

「でも、もう良いんだ」

「違うっ、違う」

「ごめんな」

「うっ、ああ……！」

俺はコックピットに戻り、いなせちゃんの頭に手を置いた。……

ああ、くそ。泣かせちゃまった。胸糞悪いつたらねえよ、畜生。

「聞こえてたろ」無線機に向かって声を放つ。

「てめえの子供が泣いてんだ。それでもまだ、戦えって言うのか」

小さな笑い声が聞こえた。何か吹っ切ったような、一種、晴れ晴れとした……。

「おい、まさかあんた」

『卑怯ですな、ヒーローと言うのは。怪人一人に大勢で襲い掛かり、その身内にまで矛先を向けるのですから』

そこに關しちゃ何も言えん。俺だってそう思っているんだし。

『本当は何もかも分かかっていて、私は、それでも尚止まる事を選べなかった。私が諦めてしまえば、ヒーローに屈した事になり、息子たちに向ける顔もなくなってしまう。ですが、は、は、そうですか』
「もう、止めてくれますよね」

『だが、矜持がある』

「なっ、おい！ おいつて！」

駄目だ。通信、切られちゃってる。俺はコックピットから身を乗り出し、眼下に視線を向ける。うわ、こわ……。一回冷静になったらやばい。マジ怖い。

「銀川さんっ！」

クモに近づく人が見えた。多分、銀川老人だろう。彼は立ち止まると、恐らくは、こちらを見定めた。

上出来じゃねえか。何とかなった。これで終わった。はあ、気が抜けてきた。ああ、怖かった。

「それじゃ、とりあえず降りよう。これ、動かせるか？」

「ああ、脚を畳むから、じっとしている」

生意気な口調だが、許そう。泣き腫らした顔を俺に見せないようにしながら、いなせちゃんは操縦桿に手を伸ばす。俺は彼女の邪魔にならないように、スペースを作ろうとした。その時、右手が何かに当たる。やべえ、変なボタン押したんじゃないやねえの？

「なあ、自爆スイッチとか付いてないよな？」

「何だそれは」

「ふう、良かった。さっきさ、なんか押し込んだんだよね。いや、ここで爆発オチとか弱いからさ、焦っちゃった」

「……何を言ってる」

いなせちゃんが固まる。彼女は操縦桿を焦った様子でぎこぎこ動かしていた。え、何？ 何だよ。おい。やめろよ。

「お前、どこを押した？」

「わ、分かんないんですけど、あの、俺、どこを押したんでしょうかね、えへへ……」

「何をしているんだ」

詰め寄るいなせちゃんから逃れる為、俺は立ち上がる。と、同時にクモが動いた。強く、激しい揺れが容赦なく襲い掛かる。ぐらりと背中から宙に浮く感覚。ぶわっと、全身に立つ鳥肌。

「なっ、これどうなって」

「手を！」

落ちる。コックピットから。

いなせちゃんは俺に向かって手を伸ばすが、彼女の腕力では支えきれないだろう。その手を掴めば、一緒に落ちるのは目に見えてる。だったらしようがねえな。

俺は目を瞑り、歯を食い縛った。眼前に迫った助け、それを掴むのは堪える。

「悪いっ、かき氷！」

「青井！」

もう、おごれそうにない。

パスコードヲニューリヨクシテクダサイ

まだ手を伸ばしているいなせちゃん。これ、絶対トラウマになるよな。と言っかやべえ死にたくない。耳が痛くて、怖くて、俺は足をばたつかせた。声が出ない。誰か、お願いします、助けてください。

「何をっ」

地面が近い。

「しとるんじゃわれは！」

「ぐぎゃ　　！？」

ああああああ駄目だ死んだああああああ！

「お母さああああああああん！」

「……マザコン」

「あ？」

あれ？　ここ、下だよな？　俺、落ちたんじゃないの？　地面に。恐る恐る、自分の体に手を伸ばす。わたわたと足を動かす。あ、なんか柔らかい。

「やめろ、くすぐったいんじゃない」

「あれ？」

「ちっ」舌打ちされて、俺の体が投げ出される。背中から地面に落ちて、俺は悶絶した。殺す気か！

周囲を見回せば、ここは、やはり荒れてはいるが公園である。おまけにクモは暴れたままだった。俺は慌てて立ち上がる。いつでも逃げ出せる準備は万全だった。

「……くそ、助けてもった」

「あー、そういう事かー」

どうやら、俺は赤丸に助けってもらったらしかった。彼女は中空で

俺を抱きとめ、着地したのだろう。人間業じゃなかった。

「見殺しにすれば良かった」

「その、悪い。助かった。ありがとう」

土下座の一つでもプレゼントしようかと思ったが、クモはお構いなしに暴れてやがる。俺は赤丸に頭を下げて、精一杯の謝意を述べた。

「しかし、ありゃあ何じゃ。さっきまで止まっていたのに、なして動いとる」

「俺にも分かん。勝手に動きやがった」

心当たりはある。と言うか百二十パーセント俺のせいっぽい。

「……オートパイロットが作動したんです」

「銀川、さん」

杖をつき、死にそうな顔でクモを見上げる銀川老人。彼が何かした、という訳ではないのだろう。もう、この人は戦いを望んでいない。

「われがあがいなもん作ったんか？」

「その通りです、お若いヒーロー。……青井さん、いなせはまだあそこに？」

「ええ、あの、オートパイロットって、勝手に動いちゃう的な、ですよね」

銀川老人は頷いた後、止まる気配を見せないクモを見据えたままだった。

「暴走と言い換えても良いでしょう。アレは、最後の手段です。まさか、いなせが……」

「いや、俺です。俺が押したんだと思います」

「……われ、何を……！」

「やつ、やめろ！ そんな平べったいものを俺に向けるな、ごめんなさい！ 何とかしますから！」

とにかく、アレを止めなきゃならない。いなせちゃんはコックピットに取り残されているんだ。それに、あのクモが公園を出たら？

人を殺しちゃったなら？ 駄目だ。もう、取り返しがつかなくなっちゃう。今ならまだ、ぎりぎり間に合う。

「銀川さん、アレ、勝手に止まったりはしないんですか」

「難しいでしょう。電力の供給を受けないままでも、半日程度は…物理的に破壊するしかないと思います。だが、しかし…」

物理的ときたか。そりゃあ、なあ。

「オートパイロットのシステムはどこにある？」

「おお、役立たず」空を飛んできたジエイは、無言で地面に降り立つ。

「システムは、背部に位置していますが」

「ならば、破壊しかあるまい」

おい、後から出てきて当たり前の事を抜かしてんなよ。

「システムを狙うのか？」

ジエイは首を振る。

「いや、徹底的に破壊する。わざわざ一部分だけを狙って叩く意味はない。他のヒーローにも伝えてこよう」

「待てよ。あそこには子供が乗ってるんだぞ。巻き込むつもりか？」

「ほう、パイロットは子供だったか。だからどうした？ 破壊活動に従事する、テロリストと同じような者を助けると？ 我々ヒーローが、か？」

「そうだ」

「ふざけるな」

こちらをねめつけると、ジエイは避難し始めようとしているヒーローたちのもとへ飛び立って行った。やべえ、駄目だ。まずはあいつらを止めないと、じゃねえと、いなせちゃんが…！！

「待てや、青井。あれのゆうとおりじゃろうが、悪党を助ける義理なんか」

「悪党なんかじゃない。確かに、壊したし、俺たちを襲った。やった事は認めなくちゃいけないけど。だけど、この人たちにはもう、戦う意思がない。あそこに乗ってるのはただの女の子なんだよ」

「……本気か、われ」

赤丸が俺の肩を掴もうとする。彼女の手を振り払い、俺はヒーロたちを見つめた。

ああ、そうだよ。確かにそうだ。俺はお前らとは違うよ。馬鹿な事をやるうとしてる。数日前に会ったって、そんだけの理由でいなせちゃんを助けようとしているのかもしれない。

「後味悪くなるだろうが」

それだけの理由で、俺は動いたって良い。俺だけは。

ヒーロたちはクモの向かう先とは反対側、つまり、社長たちの乗るタクシーの近くに固まっていた。彼らは皆、一様に巨大なクモを見上げている。呆けた顔で、侵略者を見つめたままだ。ジエイがアレを破壊する為の手伝いを求めているが、名乗り出る者はいない。だが、時間が経てば、また別のヒーロがやってくる。クモは街を壊す。人を殺す。触発されたヒーロが、アレを壊す。乗っているいなせちゃんは、どうなる。

「待て、ジエイ」

「貴様か、えせヒーロ」

「俺をクモの背中まで連れて行ってくれ。後は、どうにかするから」
「無駄だ、退け」

「退かねえ。あの子はどうなる？ あの子を殺すのかよ」
場がざわつくが、俺の話を実剣に聞いてくれる奴は……いや、俺みたいなのを信じてくれる奴はいなかった。

「……お前、馬鹿か？ 何を、何を言ってるんだよ？」

「アレに乗ってるのは敵だろうがっ！ てめえだって酷い目に遭わされたじゃねえかよ！」

「俺たちはヒーロなんだぞ！？ 悪人助けたって一文にだってならねえ！」

「第一な、何が出来る？ 本当に止められるのか？ 本当に壊せる

のかよ？ 俺たちは、お前を信じられない。……あいつの仲間じゃないのか？ 本当は、お前だって……」
全部。全部分かる。分かっている。分かった。こいつらの言っている事が正しいのだと。ヒーローとしては、こいつらの方が本場で、本物なんだ。

でも。

「頼むつ、お願いだ！ 時間がない！」

俺みたいな偽者だけじゃあ、どうにもならないんだ。

「皆、手伝ってくれ……！ だって、あんたたちは……！」

「私からも、お願いします」

「あ……」

帽子を取り、両膝を地につける。一切の躊躇いを見せず、銀川老人は、頭を地面にこすり付けるようにして、声を振り絞った。

「てつ、てめえが親玉だって知ってたんだぞ！」

「今更どの面下げてんだ、ああつ！？」

罵声を浴びながらも、銀川老人は怯まない。彼は土下座しながら、何度も何度も、頭をそこに叩きつける。

「どうか、どうか……！」

今、ここで殺されないだけで奇跡なんだ。銀川さんは、やってはならない事をした。復讐心はあった。だけど、彼は萎えかけたそれと情性によってここまで来た。何もかも偽物の憎しみを抱いて、今、ここにいる。

「どうかつ、孫を！ あの子を助けてください……！」

偽物だ。悪者だ。彼はきつと、良い人ではない。だけれど、子を思う気持ちは、きつと本当なんだ。

「ふざ……っ、ふざけてんじゃねえぞ！」

「どうなるか分かっただろうな！」

「虫が良過ぎんだろうが！」

そつだ。ふざけてる。虫が良過ぎる。

「……な、お前、おい」

俺は足を踏み出す。ヒーローたちに背を向けて、クモを見上げる。誰の助けも借りられないなら、どうかせめて、邪魔だけはしてくれな。

ああ、足が震えてる。膝が笑ってる。

「よせ、無理だ」ジエイが言う。

「お前なんかは何が出来るんだよ」ヒーローが憤る。

「くたばれや、ニセモノ」ヒーローが笑う。

「は、ははっ、本当はあんた、ヒーローでも何でもないんだろ？」足を踏み出す。

右腕に力を込める。

だけど心がついていかない。

その時、焦ったような、九重の声が聞こえた。

「行きなさいっ」

思わず、振り向いてしまう。

這い蹲る、白鳥澪子が見えた。今まで散々扱き使ってきた俺に、行くなと言った彼女が。遥か高みから他人を見下ろすようなプライドを持った彼女が。俺の、上司が。

彼女は車椅子を下ろすのまで待てなかったのだろう、自分ひとりでタクシーから降りて、無様にも地面を這って、それでも、尚。

「行きなさい、あなたはヒーローなのだから……!!」

「社長っ、危険です！ 車に戻ってください！」

車中の後部座席から、レンが手を振る。無邪気な笑顔だった。俺を、信頼している。そんな表情だった。

どうした。どうした俺の足。どうした俺の腕。どうしたってんだよ、俺！

「うちのヒーローを舐めるな！ 馬鹿にするな！ あいつを馬鹿にしても良いのは、私だけなんだから！」

軽くなった体と心。気付いた時には、俺の全部はクモに向かっていた。

は、しゃもじで脚を払い除ける。大型の兵器は僅かにバランスを崩していた。

「泣いとうガキ見捨てたら、そいつも悪党じゃ！ いけっ」

答える暇はない。こうなったら、一本一本潰すのは骨だ。赤丸が受け止めている脚から、背中まで上ってやる。

「そのまま堪えてろ」

「命令すんな！」

脚に足を掛けようとした瞬間、クモが僅かに身動きする。それだけで、俺は振り落とされてしまった。赤丸が怒鳴り、俺は舌打ちする。

「もっぺん行くぞ」

「うちを殺す気か！」

一本目の脚が迫り、俺と赤丸はそいつを、身を低くする事でやり過ぎす。彼女はしゃもじを構えて、二本目の脚を受け止めた。風圧で揺れる髪。激突の際の衝撃で赤丸は呻き、少しずつ後退し始める。

「よっしゃあ！」

「まだ、行くな……！」 あ？

二本目の影に隠れるようにして、三本目が迫っていた。あ、まずい。

「手え離せ赤丸！」

だが、彼女はそこを動かない。……畜生、俺の盾になるってのか！俺が足引つ張っててどうすんだよ！？

「おらっしゃあああああああああ！」

「どけっどけっどけえええ！」

思わず、俺は目を見開いた。三本目の脚に向かって、今の今まで動こうとしなかったヒーローたちが突っ込んでいる。彼らはスーツの性能に飽かせて、自らの体を盾にしていた。

四人がかりで、一本の脚を止めている。本物のヒーローたちが、俺の、為に？

「てめえだけに手柄取られてたまるか！」

「この獲物は、俺たちのもんだからな」

「だから早く行け！ こつちだつて持たねえっつーの！」

「助かったぜヒーローども！」

俺の為なんかじゃない。誰だつて自分の為に戦っている。それで良い。それが良いんだ。

またぎの格好をしたヒーローの肩に飛び乗り、クモの脚に手を伸ばす。脚を引つ掛けて力を込める。先は長い。逃げ、逃げ逃げ逃げ！

「どっ、お、わ……！」

「ふらついてんじゃねぞクソが！」

「さつさと上れつてんだ！」

振動が、振動が。駄目だ。ガラス殴り過ぎてたせいか、すぐに力が抜けていく。腕が痺れて、これ以上は持たない……！ つてうおおおお！？ 二度目の激しい揺れが、繋ぎ止めていたものを振り解いた。俺は必死に手を伸ばすが、空を掴むに留まる。

「主義と主張は曲げてても良い」

「……て、てめえ」

「だが、正義だけは曲げてはならない」

「ジエイ！」

いけすかないヒーローが、俺の手を掴んでいた。彼は高い鼻をこちらに向け、ふん、と笑った。

「俺の主義を曲げたんだ。貴様は正義を曲げるなよ」

シニカルに言い放つと、ジエイは俺を掴んだまま、ぐんぐんと上昇していく。

「ちくしょう、ありがとう」

「礼を言うにはまだ早い。行け、詰めだ」

俺たちはクモの背中を見下ろせる位置まで辿り着いた。ジエイは俺をクモの背中に下ろすと、他のヒーローたちを助ける為に急降下していく。

……やっぱり、ヒーローはヒーローだ。クズでグズな奴らの成れの果てだけど、それでもあいつらは本物なんだ。だから、俺だつて

負けていられない。オートパイロットのシステムってのはどこにあるんだ？ ボタンかスイッチか、どんなものでどこにある！？

周囲を見回すと、配電盤のようなものを見つげられた。真っ白い蓋には電卓みたいなボタンが並んでいる。何だよこれ邪魔すんな。適当に押しまくると、無機質な声が聞こえてきた。

『パスコードヲニューリヨクシテクダサイ』

はあああああああ！？

「そんなもんっ」

これで最後だ。最後に一番良いのを打てよ、俺。

「知るか！」

蓋を叩き壊して、中にある、見えるもの全部を殴り続ける。壊れる壊れる壊れる壊れるッ！

……風？

停止した鋼鉄の蜘蛛の上で、俺は随分と近くなった空を見遣った。何の感慨も湧いちゃこねえが、生きてるって実感だけはある。

ふらつきながらも、倒れかけても、俺は這うようにしてクモの体を進んでいく。

コックピットには操縦桿を握ったままのいなせちゃんがいて、彼女は、やっぱり泣いていた。が、俺の姿を認めるなり泣き止み、睨みつけてくる。

「……お前は、馬鹿なヒーローだったんだな」

「かき氷でも食べに行こうぜ、ここはちよつと、暑過ぎる」

いなせちゃんを連れてクモを降りたが、ヒーローが待ち受けていた。が、どうにも、歓迎ムードって風には見えない。銀川老人はいなせちゃんに近寄りたいらしいが、若いヒーローがそれを防いだ。

「……悪いけどよ」

「そいつ、こっちに渡してくれや」

まあ、こうなるわな。いなせちゃんを背中に隠すようにして、俺はヒーローたちを見回す。どいつもこいつも、まあ、気まずそうにしてやがる。逆の立場なら俺だってそうなる。一応、俺たちは協力してクモを止めたんだ。その点で言えば、ある意味仲間だったんだから。

その事が分かっているんだろう。赤丸もジエイも何も言わない。社長たちは少し離れたところから、こちらの様子を窺うようにしていた。……まずいよな。正直、いなせちゃんと銀川さんを連れて一気に逃げ出そうとしてただけだ。駄目だな。ヒーローとしちゃあ

三流もいとこだ。情に流されてちゃ、本物に申し訳が立たねえ。そんな目で見ると、立つ瀬がねえよ。悪いのはこっちなんだからさ。「あー、まあ」

銀川老人は、俺に目を向ける。申し訳なさそうなの、そんな顔をしていた。

「……青井、構わない。あたしとおじいちゃんを」

「俺のシャツを離してから言え」

突っ張ってんじゃねえぞ。ビビって手が震えてるじゃねえか。

「見逃してやってもいいんじゃないの？」

「いや、だから」

クモを止めるまでのヒーローたちとは大違いだ。彼らも迷っている。銀川老人が頭を下げて、小さないなせちゃんを見て、俺と同じように悩まされている。何を選んで、何を捨てるのかを。俺だってそうだ。銀川さんたちを助ける方向で動いちゃいるが、自分の身が危うくなれば諦めざるを得ない。俺だけじゃない。社長たちに害が及ぶようなら、俺は迷わずこの子を差し出す、筈だ。

「ここには俺たちしかいなかったんだし、黙ってりゃ誰も気付かないって」

俺は笑ってみせた。勿論、死ぬ気で作った表情である。冗談みたいな話で済むなら、これ以上は誰も傷つかないで済む。

だが、そうはならない。

俺は偽者だが、眼前に立ち並ぶ彼らは本物なのだ。スーツを着ているのは伊達じゃない。自分の中にある正義を掲げる為に、彼らはここにいて。何よりも、怖がっているんだ。ここで『こいつら』を逃がせば、また襲われるかもしれないって考えてるに違いない。中途半端に手を伸ばしても、その手を噛まれるだけで終わっちゃうんだって、きつと。

「よう、さっきは凄かったぜ、あんた」

「そうかい」

「だけどもあ、俺らヒーローだからさ」

己の得物を構え、ヒーローたちは牙を剥く。自らの敵を倒すのだと、そう決めたんだろう。

「ま、待つてください……！」

銀川老人が訴えるが、彼の意見は無視される。若いヒーロー二人に取り押さえられて、やがて、銀川さんは諦めて動かなくなった。彼はその場に立ち尽くし、ただ、俺を見る。

「……あ？ どうしたんだ。来ないのかよ？」

いなせちゃんを背にした俺は両手を広げた。

もう、体はぼろぼろである。腕は痛いし痺れはまだ取れないし、空を行ったり来たりで足はふらふらだ。今、ちよんつて体を押されたら倒れてしまう自信がある。と言うかも倒れ込んでしまいたい。ヒーローは、誰一人として動かなかつた。剣をこちらに向け、拳を構え、それでも、一歩だって足を踏み出そうとしない。まだ、躊躇してくれている。だけど、誰か一人でも動けば、俺は終わる。

「青井……っ」

いなせちゃん。出来れば、君は顔を伏せないで欲しい。目を逸らさないで、前を見続けていて欲しい。今、相対しているモノはクモの中にいたんじゃ絶対に分からないモノなんだから。

さて、やれるか……？ 手持ちの武器はグローブに太鼓、めんこが十枚あったかどうか。対して、ヒーローは十五人。ここは貸しを作っている（筈の）赤丸に期待してみるか？ いや、駄目だ。がけつぶちの彼女の足をこれ以上引つ張ってどうするよ。つーか、そろそろ動かなきゃまずい。ここにはレンがいる。動くなどは言ってるが、社長たちがこのまま黙っているとは考えられない。レンが一度出てくりゃ、血を見るまでは止まらないだろう。あ、そうだ。そういや、爺さんからもらった新しいアイテムがあつたんだっけ。確か、ええと。

「うっ、動くんじゃねえよ！」

「は？」

ポーチに手を伸ばすと、銃口がこちらを向いていた。金色に塗装

された、レーザービームでも出てきそうな、言っちゃ悪いがおもちゃみたいなものだった。でも怖い。多分、俺のとは違って本物なんだろう、アレ。

銃を向けているのは、銀川老人を拘束していた、若い男のヒーロ―である。オーソドックスな作りの、純白色のスーツが目痛い。ベルトのバックルには強そうな鳥が彫られていた。彼は物騒なものを構えちやいるが、手がめちやくちや震えまくっている。よせ。よせよ、撃つなよ。

「いや、あのですね？ 俺は別に何も」

「だからっ、動くなっつて！」

ひいっ！

「お、おい、一回冷静になれっつて。な、武器下ろせっつて？」

「誰か止めろっつて、キレ過ぎてんよこいっつ」

「てめええええええらああああああ！」

他のヒーローの制止を振り払い、真っ白いヒーローが喚き散す。

「こっつ、こいつらを見逃すっつてのめえ！ 信じられねえ！ なあっ

悪い事したんなら、裁かれなくちやあなんねえよなあ！？ 違うか

？ 俺、おかしい事言っつてるか！？ 違いますよね！？ 違うよね

！？」

何一つとして、間違っちやいない。

「なあに焦っつてんですか先輩方は！ こいつらを撃てば話は収まるんだっつて！ もうこんな物騒な奴、出てこなくなるんすよ？ それ

が分かってんですかお前ら！？」

「けどよ」

「けどじゃねえって三流が！ 良いか見てろっつ、まずてめえだ、着ぐるみなんざ被りやがっつてよう！ すかしてんじゃねえぜあんだ！」

赤丸が若いヒーローを止めようとする。ジエイも、僅かにだが動いていた。

が、震える銃口は俺を向いたままで、ヒーローは俺に対して牙を剥いたままだった。いなせちゃんが俺に抱きつく。タクシーからレンが出てくるのが見えた。社長と九重では、本気になった彼は止められないだろう。このままじゃ、また乱戦になっちまう。全部、銀川さんたちのせいだ。彼らの羨みかけた復讐心と、安っぽいプライドがこの事態を引き起こした。そうだ。何もいなせちゃんを庇う必要はない。ここで逃げちまえば良い。レンを連れてタクシーに逃げ込んで、見て見ぬ振りで背を向ける。したら、明日からはまたいつも通りの生活だ。

「動くんじゃねえぞ着ぐるみやるおおおおおおおおおおおおおお！」
「！」
「ただ俺は決めている。」

今日の俺は、青い正義を曲げないと決めていた。
黄金の銃から放たれたのは、一発の弾丸だったのだろう。貫かれてしまえば、撃ち抜かれてしまえば、スーツを着ていない俺じゃあ耐えられない。

「おおおおつ、おお、お……！？」

貫かれなければ。撃ち抜かれなければ。

視界が真っ白になる。はためくそれは、ヒーローたちを馬鹿にしているような動きにも見えた。

俺の取り出した柔らかな盾が、風に乗って舞い上がろうとする。俺は新しい力を畳んで、そいつをポーチにしまい込む。

「……風？」

銀川老人が目を剥いている。彼だけはこいつの正体に気付いたらしい。この馬鹿げたモノを作った奴を、彼だけが知っている。そうだ。そうだよ。あんたの友達が、俺とあんたの孫を助けた。

見ろ、これを。

見ろよ、ヒーロー。こんなもので防がれてしまった、てめえの得物を。……って、あ、赤丸にどつかれちゃったか。可哀想に。あの女、ゴリラぐらいなら余裕で殺せるからな。

「動くな！ 動くなよクスどもが！ 動いた奴から、一人ずつぶつ殺してくからな」

「なっ……！！？」

俺は全員をねめつける。見回す。ぴたりと、レンの動きも止まってくれていた。もう少し遅ければ、誰か一人か、二人か、三人は死んでいたのかもしれない。

「お前正気かよ！？」

「黙ってる！ 良いかヒーロー、このガキの命は預かった！」

いなせちゃんの両肩を掴み、前面に押し出してみる。彼女は呆れたような顔でこつちを見上げていた。

「さつき見ただろてめえら、俺に攻撃は通じねえからな！ だからっ、こいつの敵に回るつもりなら、俺が相手になる。誰だろうと関係ねえぞ、ヒーローだろうが戦闘員だろうが、全員ぶっ飛ばすからな」

「……なんか矛盾してんぞ、シロクマ」

「ヒーローどもっ、そこを退け！ 俺が通る！」

むちゃくちゃな空気に気圧されてくれたのだろうか。それとも、関わりたくないと思ってくれたのだろうか。俺が足を踏み出すと、ヒーローたちはその分だけ退き、少しずつ距離を取り始めた。

「ふう、助かった」呟くと、いなせちゃんにだけは聞こえていたんだろう。彼女は小さく笑った。

このまま、何もかもをうやむやにして逃げられそうだ。後の事は、こつちから離れてから考えれば良い。銀川老人といなせちゃんをタクシーに乗せて、終わりだ。

俺は、目だけで銀川老人を促す。早くタクシーに向かえ。……っで、おい。おいおいおい。

「何をしてんですか、あなたは！」

「皆様」

「……おじいちゃん？」

タクシーまで、もう距離がない。だと言うのに、銀川さんは頭を

下げ、近くにいたヒーローに自らの手を差し出した。

「本当に、ありがとうございます」

「あ、あんた、いきなり何を」

「ヒーローたち、私を警察に連れて行きなさい。今回の事、全て、私に非があり、責があります。私以外の者にそれらを求めるのは、ご寛恕願いたい」

何を言ってるんだ、今更だ。今更じゃねえか。つまるところ、銀川さんは『娘だけは助けてくれ』と、そう言っている。

「責任を取るのは、私だ」

あ。

銀川さんが、俺を見る。真摯な瞳には、もう、ヒーローに対する恨みだとか、憎しみだとかは感じられなかった。ただ、子供を思う者がいる。まっすぐに、俺を見つめている。……が、ここで彼を見捨てて良いのか？ 確かに、銀川さん一人が何もかもを引つければ、全てまあるく片がつく。こつちとしちゃあ願ったり叶ったりだ。だけど、いなせちゃんはどうなる？ 彼女にはもう、銀川さんしかないんじゃないか？

「……行くぞ」

「ま、待て。おじいちゃんが」

いなせちゃんの手を引く。彼女の小さな手を強く握る。

「待てと言っているだろ！」

「良いからっ」

忘れていた。銀川さんだって、人の上に立つ人間だったんだ。悪の組織の首領として、多くの部下を従えていたのだろう。力を用い、知恵を使い、戦ってきたに違いない。

俺と銀川さんは、悪の組織に属する者だ。だけど、全く同じと言う訳じゃあない。立場が、圧倒的に違う。俺が下で、彼が上。俺みたいなたつ端にはボスの気持ちなんて分からない。精々『こうなんじゃないか』って自分の中で押し量り、想像するだけだ。

矜持がある。悪には悪の美学があり、上に立つ者には責任がある。

これが、銀川さんにとっての最後の仕事、ぎりぎり残った見せ場なのだろう。なら、俺は従う。完全なヒーローでもない。完璧な戦闘員でもない。中途半端な位置にいる俺だけが、今、この場で、銀川さんの意を汲み取る事が出来るんだから。

「全て、私一人が仕組んだ事だ。私が全てを無理矢理に巻き込んだ」
銀川さんを背に、歩き出す。

「おい」

赤丸が俺を睨んでいる。

「これでええんじゃない？」

「……今日はありがとな。お前のお陰で助かった」

答えにはなっていない。赤丸は舌打ちし、あっちへ行けと手を振った。

「ジエイ、あなたにも感謝してる」

「ふん、くだらん。興醒めだ。……貴様の正義がどこまで貫けるか、それだけに興味はあるがな」

「ご期待には沿いたいもんだ」

「早く行け。ほら、そのルーキーが目を覚ます前に」

俺は偉大なる先達に頭を下げ、いなせちゃんを引っ張っていく。

彼女は必死に抵抗するが、俺は構わずにタクシーの後部座席へと乗り込ませた。

「出せ、九重」

「……良いんですか」

良いんですか、だと？ 良くないに決まってるだろうが。そうに決まってるだろうがよ！ 公園は無茶苦茶になって、止まりはしたが馬鹿でかいクモ型兵器は残ってる。ヒーローたちはボロボロで、銀川さんは捕まった。何より、いなせちゃんはどうなるんだよ。クソが。こんなガキ一人置いて、あの人はどうするつもりなんだよ！
「出してくれ。頼む」

「……シートベルトを」

九重は助手席のドアを開けてくれたが、俺は暫くの間、その場に

立ち尽くしていた。

何をやってんだ、俺は。

「お兄さん。僕、ちゃんとお留守番出来たよ？」

「……ああ。そうだな」

社長がいなせちゃんを気遣っている。レンは後部座席の窓から身を乗り出すようにして、俺に笑いかけていた。

「えらいな、レン」

「うんっ、えへへ、お兄さんも早く乗りなよ。今日はもう、帰るんでしょ？」

家が、カラースのビルが俺の脳裏を過ぎる。そうだ。帰る家がある。戻る場所がある。……俺には。

「ああ、そうだな」助手席に乗り込み、シートベルトに手を伸ばした。いなせちゃんが声を上げて泣いている。社長の胸に顔を埋めて、思いの丈をぶちまけている。

「青井」

俺は声を出せなかった。

「今日はお疲れ様。本当に、あなたは良くやってくれたわ。カラースのヒーローとして、最高の働きを見せてくれたもの」

俺が？ だったら、これはなんだ。どうしていなせちゃんは泣いている。どうして、俺はこんなにも惨めな気持ちになっっているんだ。俺は、彼女の居場所を取り上げた。それが、今日、俺のやった事なんだ。そくに違いない。

じよ、乗車拒否します！ 乗車拒否します！

生き地獄つてものを、俺は何度も経験してきたように思う。が、さっきまでの車内も、中々のそれだった。

「さて、誰があの子を引き取るかについてだけれど」
「……ふざけんよ」

そして、車を降りた後も地獄は続く。カラーズに着くなり、九重はいなせちゃんを社長の私室に連れて行き（どうして彼が社長の部屋に入れるのだろう。俺が入ろうとしたら死ぬほど怒られるのに）、残った俺たちは、

「ふざけてなんかいないわ」

いなせちゃんの今後について話し合う。と言うより、彼女の押し付け合いだ。ここまで連れてきたのは良いが、その先については何も考えちゃいない。考えられるのかどうかも分からない。

俺は右の拳を摩りながら、ソファに身を沈める。

「レン、お前も九重んとこ行つてろ」

「えー？ 僕もお兄さんと一緒にいるよ」

「良いから、ほら」

多分、こつから先の話は子供に聞かせたくない方へと展開していく。正直に言つちまえば、俺だつて聞きたくないし、そんな話にはしたくない。

「さて、と」

社長は定位置から俺を見据える。冷たい目だった。

「先に言つとくけどな、俺はもうレンを……」

「……分かっているわ。だから、そういう風にものを言わないでち

ようだい」

何だよ。俺が悪いみたいで……まあ、そうか。実際、悪いもんな。実際、俺は本当に駄目だぜ」

社長は小さく息を吐き出した。……レンの時と似ている。いなせちゃんも彼と同じく、身内がない。知り合いがない。俺はレンを引き取った形になるが、彼女は無理だ。だって、女の子だぞ。一つ屋根の下っつーか、同じ部屋で暮らすんだ。そりゃ、まずい。と言つかもう本当勘弁してください。どう接したら良いんですか。

「イダ……縹野と同じように、私がここの空き部屋を提供する形になるわね」

「そうしてくれると助かる。だけど、良いのか？」

「仕方ないわよ。見捨てる訳にはいかないわ」

いなせちゃんは銀川さんの身内だ。つまり、悪の組織の身内って事にもなる。おいそれと警察にも預けられないし、身元がばれりゃあ何をされるか分からない。ほとぼりが冷めるまで、あるいはもっと上手い手を思いつくまで、俺たちが見ててやしないと駄目だろう。けど、あんたが名乗り出てくれるとは思わなかったぜ。これっばつちも期待してなかった」

「あのね、私だって鬼ではないし血が通っている人間なのよ？ 第

一、あんな小さな子をあなたのような男に預けられる訳がないでしょ」

「ちっこさで言えば、いなせちゃんも社長も変わらないじゃん」

「……どういう意味かしら？」

そのままの意味だよ。ま、これでようやくと肩の荷が下りた感じだ。もう駄目。これ以上は動けん。九重に家まで送っていつてもらおう。

「それじゃ、後は任せるわ。また明日顔を出すからよ」

「あの子に何も言わなくても良いの？」

「何を言えば良いか分からん」

いなせちゃんからすりゃあ、俺が銀川さんに引導を渡したような

もんだからな。少なくとも、俺自身はそう思っている。……勿論、あのままって訳にはいかなかったけどさ。誰も動かなければ、人死には出ていただろうし。

「お互い、考えたり頭冷やしたりする時間が必要だと思う」

「そう。……そうね。分かったわ」

「ん。レン、おいレンっ、帰るぞー！ ついでに九重ーっ、送っていってくれー！」

俺の呼びかけに反応して、レンが一目散に飛び出してくる。抱きつこうとしてきたので、かわしてソファに叩き込む。彼はへらへらとした笑みをこちらに向けた。

「あはははは、いたーい」

「元気だねえ」

九重は帽子の位置を直しながらやってくる。彼も、今日は疲れただろう。色々と感謝しなくちゃならない。が、お願いですからどうか車を出してください九重大明神。

「……あの、青井さん」

「いや、言いたい事は分かってる。お前だっつてしんどいよなあ。だけど俺はもつとしんどい。お願いします！」

「……いえ、そうではなく」あ？

九重の後ろから、いなせちゃんが顔を覗かせる。目を逸らしてしまいそうになるが、彼女の、俺を見る目には悪感情が宿っていないように思えた。都合の良い勘違いだろうか。

「いなせちゃんはどうするんですか？」

「ああ、それなただけどよ」

社長に視線を送り、俺は口を開く。

「とりあえず、このテナントの好きなところを社長が貸してくれるって。当分は大人しくしといた方が良くと思うし」

「そうだ。イダテン丸にもいなせちゃんの事を伝えておくか。万が一、何かあった時の為にイダテン丸にも色々とお願ひしておこう。」

「……あー、いなせちゃん。その、色々と思うところはあると、思

うんだけど、でも、しばらくは社長のところで大人しく……」

「嫌だ」

「……え？」

いなせちゃんは首を振り、足を踏み出した。

「あたしは、ここには住めない」

「あら、どうして？ 外観はそう見えないけれど、中は綺麗なのよ？」

「そういう意味じゃない」

どういう意味だと問う前に、俺は気付く。カラーズだって、一応はヒーロー派遣会社なんだって事に……。今まで、いなせちゃんは銀川さんからヒーローは敵だと教えられてきたんだろうし、自分でもそう思っているに違いない。彼女がヒーローと戦いたいと、今でも思っているとは考えにくい。だが、長く積み重なり、積み上げてきたものもあるのだろう。環境も思考も、すぐには変えられない。つまりとところ、ここはヒーローの本拠地で、いなせちゃんからすれば敵の本丸にも等しい。流れ流れて連れてこられたが、やはり抵抗は少なからずあるのだろう。

「別に、ヒーローが嫌いだとか、そういうんじゃない。あんたたちには感謝してるよ。だけど、簡単には信じられないんだ」

「まあ、そりゃそうだけど。だったら君はどこに住むつもりなんだ？」

もしかして、家に戻るとか言うんじゃないだろうな。やべえぞ、それは。絶対マークされてるって。

「あたしとしても、長く世話になるつもりはないよ。時期が来れば出て行くさ。でも、それまでは」

いなせちゃんは何故だろうか、じつと俺を見ていた。

「青井、お前のところに住む」

「……えっ」あつ、声が裏返っちゃった。

「この中で一番信用出来るのはお前だからな」

は？ いや、駄目。駄目だって。

「だから、君はここで暮らすのが……」

「だったらあたしを放り出せば良い」

腕を組み、不遜にも映る態度。いなせちゃんはまっすぐに俺を見続けている。

「社長」

「何よ」

「どうしよう?」

「……銀川いなせ、と言ったわね。あなたは、自分の置かれている状況が分かっていないのかしら。あなたの祖父は警察に捕まってしまったのでしょね。なら、住んでいた場所だつて危うい筈よ。身元が割れば、あなたは更に危ないところへ追い遣られる」

ちよ、お、おい。いきなり何を。社長は止めようとしたが、ものっそい睨まれたので黙っておく。

「あなたの祖父は、それを望んでいるのかしら」

あまりにも遅過ぎた。幸せになつて欲しい、か? だったら銀川さんには、いなせちゃんに対して与えなければならぬ事が、教えなければならぬ事がたくさんあった。

「ふ、あはは、あんた、口が回るじゃないか。部外者がおじいちゃんを分かつとするな」

「そつ、部外者。あなたは部外者に助けられたの。そして、あなたの『おじいちゃん』は部外者にあなたを預けたの」

「……何だお前。何が言いたんだよ」

社長といなせちゃんが睨み合う。両方ちつこいが、妙な威圧感があつた。

「こちらの言う事を素直に聞きなさいと言っているのよ。人の厚意は受け入れるものだ、あなたは教わらなかつたのかしら?」

「他人は疑つて掛かれとも言われたよ。何度も言うけど、あたしは青井しか信じられない。もつと言え、青井だつて敵じゃないかもしれないだけで、あたしの味方じゃあないんだ。……心配しなくても良いよ。あんたらに迷惑は掛けないからさ」

「ふう、生意気ね。それに世間知らずだわ」あんたもな。

「私たちはもう、あなたに迷惑を掛けられているのよ」

その通りだけど、この女、よくもまあここまで言えるよな。いなせちゃんの気持ちを考えれば、少しくらいのわがままだって大目に見てやっても良いと思うんだけど。

「ますます不愉快な気持ちになってきたよ。あたしは、あんたが嫌いだ」

「奇遇ね。私もあなたを好きになれないわ」

あ、やばい。何か嫌な予感がする。

「青井」

「……はい」

「この子を連れて行きなさい」

「はい。……えーと、どこに、ですか？」

「決まっているじゃない」

にっこりと微笑まれる。わあ、まるで極寒凍土に花が咲いたようだ。

「で、でもさあ」

「どうしても駄目なら言いなさい。私が我慢するし、その子にも我慢させるから」

「社長、顔が怖いぜ」

「そう？ ふふ、そうかしら？ そう見える？ だったら青井、何をすべきなのか理解しているわよね？」

俺は九重に目配せして、レンといなせちゃんを引っ張るようにして事務所を後にした。と言っか逃げ出した。

「……あの、それじゃあ私はここで」

「……おう、助かったよ。あ、お茶くらい出すけど上がっていかないか？ つーか上がっていくよな？ なあ？」

タクシーがアパートの前に着く。俺はレンに部屋の鍵を渡す。九

重は運転席から出てこようとしない。そうはいくか。

「茶ア出すつつつてんだろが！」 最低のくどき文句だった。でも相手は九重なので、この際無理矢理に部屋まで引きずり込んでやる。

「やつ、やめ、やめてくださいっ」

「げへへへへ、おら出て来いよ！」

「じよ、乗車拒否します！ 乗車拒否します！ もう青井さんは乗せてあげません！」

お互い必死だった。いなせちゃんはつまらなさそうに俺たちのやり取りを見ている。ミラー越しの視線が酷く痛かった。

九重に逃げられてしまった。

俺といなせちゃんは部屋の前に立ち、何故か入れないでいる。俺が扉を開けてやれば良いのだが、何か、タイミングを逃しちゃったって言うか。

「えーと、あのさ、いなせちゃ……って、あ」

いなせちゃんは俺が何かを言う前に、すつと部屋に足を踏み入れた。躊躇いを感じさせない動きである。

「へえ、片付いているんだね」

「あはっ、僕がお掃除してるんだよ」

レンは既にエプロンを着けていた。俺も遅れて部屋に入り、テレビを点ける。

考えなくちゃいけない事が、山ほどあった。死ぬほどあった。

まず、どうする？ どうやって暮らすんだ？ いなせちゃん、女の子だし。女の子ってどう接すれば、この年頃の子ってどういう風に扱えば良いんだ？ 何をすれば良いんだ。どういう話題を振れば良いんだ。と言うか何もなくて良いんじゃないのか。ほら、女の子ってマシユマロみたいに柔らかくてガラスみたいなハートなんだから。『お父さん、寄らないで』みたいな感じでサボテンだって真っ

青なんだろ。下手に触れようとするとグァーって牙を剥くんだろ。って違うよ、俺はお父さんじゃないよ。マシユマ口ってなんだよ。馬鹿じゃないの俺。じゃなくて、もっとこれから先どうすんだって話だよ。あ、そうだ。着替え。着替えとか、寝る場所とかどうしよう。カーテンとレールか何か買って、仕切りみたいななんか作つたら駄目だよな。でもこの部屋そんな広くないし、仕切りなんか作つたら生活するスペースなくなっちゃうよ。でもあんまし蔑ろにするのもどうかと思うのさ俺は。でも金、どうしよう。今だって自分の食い扶持稼ぐのに精一杯だったんだぞ。そりゃあカラーズでヒーローやったり平の戦闘員から数字付きになったりで少しは稼ぎも良くなくなったけど、まさかもう一人養う羽目になるとは思いもよらなんだ。つーが無理じゃねえ？ これやばくねえ？ 明日になったら、いなせちゃんの食器とか、日用品も買わなくちゃだし、そも、何を買えば良いんだよ。彼女にだって好みはあるだろう。男の俺が適当に買ってきたものに抵抗を示したり嫌悪感を露わにしたりするかもしれない。そうになったら俺はショックを受ける。嫁さんどころか彼女だっていないのに段階すっ飛ばして気分は二児の親である。うわ、もうこれだけでショックだわ。親とか、この字面に衝撃だわ。俺みたいなクズが保護者に？ ありえん。申し訳なさ過ぎだろ。「……青井」やべえどうしよう。どうすりゃ良い。誰か教えて。どなたか助けて。預かるとは言ったが、いつまでつてのが分からない。あ、そうだ。そうだよ。それを言い出すならレンだって同じじゃねえか。こいつだって、いつまでここに置いとくのか決まっていんだぞ。俺、一人増やしてる場合じゃねえだろ。レンは、いなせちゃんをどう思っているのか。新たな同居人を歓迎しているのだろうか。表面上はいつもと変わらずへらへらしているだけの彼だが、思うところはあるだろう。（改造）人間だもの。ま、まあ、明日の事は明日の俺が考えるところだよ。今日の事は今日の俺、つまり今の俺が考えなくちゃあならない。とりあえずメシ食って、で、あー、どうする？ そうだ。仕事だ。今日の夜だって組織には行かなくちゃい

けない。けど、すげえしんどい。むちゃくちゃに眠い。つーかレンといなせちゃんを二人にするのは何だか心配だ。いなせちゃんって無愛想だし、レンとはとことん気が合わなさそう。駄目だ。今日は組織、休もう。うん、まあ、俺一人がいなくなっただって大丈夫だろう。

「青井」

「……え？ あ、ああ、何、どうした？」

いなせちゃんがじっと俺を見ていた。やべえ、全然気付かなかつた。

「……いや、何でもない」

「そ、そう？」

とにかく、気まずい。

だったらあたしも呼び捨てにするよ

三人になつて初めて囲む食卓。料理の味なんて、殆ど分からなかった。酷く気まずく、とてもぎこちなかった。ま、まあ、仕方がない。よな？

「お兄さん、お兄さん」

「んー、どうした」

いなせちゃんには先に風呂に入ってもらっている。とりあえず、彼女には当分、風呂場の前で着替えてもらうしかない。仕切りっつか、ドアがあるのはそこくらいのもんだし。

「お布団、二つしかないんだけど」

「あ」やっべえ、すっかり忘れてた。まさか地べたで寝させる訳にもいかないだろう。

「明日買いに行くわ。今日は、俺、その辺で寝っから」

レンは枕を抱えたまま、小首を傾げた。

「じゃあ、僕と一緒に寝ようよ」

「やだよ」

「えー、どうして？」

何か怖いもん。

「それよりレン、お前は、その、いなせちゃんをどう思う？」

「どうって？」

「うーん。好きとか嫌いとか」

「あは、わかんない。でも、たまには良いよね」

「うん？」

「お客さんがお泊りに来るのって、今までになかったから」

さーっと、血の気が引いていくような感じである。

「……あのさ、話、聞いてたよな。いなせちゃんは泊まるんじゃない

くて、ここに、住むんだけど」

レンはにこにことしていた。えーっと、だからね黄前くん？ お兄さんの話、分かってるかな？

「どういうこと？」

「お前と同じ。今日からあの子もここに住むんだよ。オツケー？」

「どういうこと？」

えっ？

「ねえ、それって、どういうこと？」

レンはずっとにこにこしている。が、もはや彼の目は笑っていないようにも見えた。同じ言葉を繰り返している事から、思考を放棄しているようにも思える。

「ここはお兄さんと僕のお家じゃないの？」

おいこら、ここはあくまで俺の家だぞ。どさくさに紛れて自分もねじ込もうとしてんじゃねえよ。

「今日から三人の家になるんだ」

「や、やだ」おい。

「だって、だって僕そういうの分かんないもん。ねえ、僕、どうしたら良いの？」

んなもん俺だって聞きてえよ。どうしたら良いのかって。誰が教えてくれるんだ。

「仲良くする、とか」

「……僕、今日はお風呂入らない」

「だーっ、もうわがまま言うなって」

レンは無言で布団に潜り込む。くそう、また拗ねやがった。が、今晚は大人しくしてくれるだろう。溜め息が止まらない。酒が飲みたい。

「青井、上がったぞ」

「あ、ああ」

……話、聞かれてないよな？

「布団、そっちの使って良いから。それで、明日は買い物に行こう」

「……良いのか？」

悪いとは言えないだろう。なんて言葉が浮かんできた。とことんまで駄目な奴だった、俺は。

「気にすんな。そんじゃ、俺も入ってくるかな」

「分かった」

大量のクモにうごうごと集られる夢で目を覚ました。……こえー。クモ、こえええ。背中、めっちゃめっちゃ汗かいてる。そんでもって体が痛い。畳の上じゃあ疲れは完全に取れねえな、やっぱ。

「くあ」今何時だ？ ケータイで時間を確認してみると、午前の一時を過ぎたところだった。昨日は早めに寝ちまったからな。本来なら、組織の奴らとその辺のスーパーなりコンビニなりを襲っているような時間である。基本的に夜型人間。

「……あれ？」

いなせちゃんが、いない？ トイレ、か？ でも、何の音もしてないし。電気だって点いてない。この部屋には隠れる場所なんて殆どないし。どっか出掛けたのか？ って、ないよな。そりゃない。うん。

とりあえず部屋の中をぐるぐる回る。意味がないと分かっているのにくるくる回る。あはは楽しいー。

「んな訳ねえだろ」

深夜のテンションは恐ろしい。一人でもこんなに楽しくなれるんだから。

しくじった。失敗した。いなせちゃんはきつと、俺とレンの話を聞いていたんだ。その事が決定打となった訳じゃあないんだろう。忘れてた。気付かない振りをしてた。彼女は賢いんだ。気が回って、気を遣える人間なんだ。畜生、何をやってんだ俺は。だから、ガキに気を遣わせてどうするんだって話だろ！ 探しに行こう。放っておけない。見つけたところで何を話せば良いか分からないけど。だ

けど。

レンを起こさないようにそっと外へ出る。しかし、アレだ。どこに行った？ どこを探そう。ちょっと待てよ範囲広過ぎだろ。全然分からん。もしかして、銀川家。自分の家に帰ってしまったんだろ。うか。……俺知らねえぞ。銀川さんちなんて知らないぞ。あ、詰まった。はい今手え詰まりましたー。

唯一、心当たりがあった。というより、ここ以外、なかった。

『他に行く場所を知らないだけだよ』

公園には誰もいない。あのクモは既に撤去されていた。跡形も残っちゃいない。きつとヒーローたちが退かしてくれたのだろう。……だが、痕跡までは消えない。被害はなくなっていない。木々は薙ぎ倒されたままで、クモの脚が踏み砕いた穴ぼこがそこらにあった。そして、噴水としての用を成さなくなった残骸の縁に、いなせちゃんが生かされていた。彼女は相変わらずぼうつとした様子で、一点を見つめている。外灯が破壊されているので、公園を照らすのは月明かりのみだった。月光の下、彼女は何を思うのだろう。

「……これがあたしのやった事か」

いなせちゃんは俺に気付いていたらしいが、こつちを見ようとはしなかった。俺はその場に立ち尽くし、彼女を見遣る。何も、言えなかった。だって、そうだろう。いなせちゃんがやった事に変わりはないんだから。

「青井」

「ん、ああ、何」

「家に戻りたい」

心臓が千切れるかと思った。

「あたしとおじいちゃんの家だ」

「ん。分かった。ついてく」
いなせちゃんにとって、自分の家と呼べるような場所はそこなんだ。青井正義の部屋では、決して、ない。

いなせちゃんに無言で付き従うように、ただ、彼女の後姿だけを見て歩く。

さて、彼女の行く先、銀川さんちってのはどこにあるんだろう。段々と、郊外の方に近づいていつてる気がするんだが。通行人は俺たちの他に見えない。かれこれ、十分以上は歩かされていた。

「ここだ」

「え」

だから、気付かなかった。寂れた工場の前で立ち止まっていたいなせちゃんは、そこを指差している。周りには人家らしき建物がない。いちじく畑が広がるのみだった。近くには、似たような工場が建ち連なっているが。

「ここに、住んでたのか」

「いけないかい？」

「いや、そういう意味じゃない。……で、どうするんだ？」

「そうだな」

いなせちゃんは工場を見上げ、歩き始めた。裏口の方に回るつもりらしい。

「必要なものを取ってくるよ」

付いて来いとは言われなかった。付いて来るなとも言われなかった。だが、俺はここで待つのを選ぶ。

……何やってんだか。どうせ人だって通らねえし、車の一台だつて見やしねえ。俺は道路に腰を下ろして、溜め息を吐き出した。

「おい、そこで何をしておる」

「あ？」

声を掛けられたので、睨みつける。が、そいつは銀川さんの工場

内から現れたのだ。しかも真正面から。暗くて良く見えないが、年寄りだな。じじいだ。……銀川さんではないと思う。じゃあ、こいつは一体……？

「……ん、お前、青井かつ？」

「まさか、爺さん、か？」

こつちに向かつて歩いてくるのは、確かに爺さんだ。組織の研究室に引きこもり、変態的な活動に勤しむジャンキーである。その爺さんが、どうしてこんなところにいるんだ？

「何やってんだよ、こんな時間に。もうボケが始まっちゃったのか」「馬鹿を言つな。誰がボケか。お前こそ、どうしてここにおるんじや。まさか、散歩などとは言つまいな」

「いや、散歩だけど」

爺さんは座り込む俺を訝しげに見下ろしてきた。

「……ふん、ここはな、わしの友人のアジトなんじゃ。元、だがな」「元？」 あ、ああ、そうか。そうだよな。やっぱり、そうなんだ。爺さんと銀川さんは……。

「お前には話していたな。試作品とやらを見てくれと頼まれておつたんじゃがな、そいつはもう檻の中におる。ついさつき、捕まった……自首したと言つ情報が入った。お前は、知らんか。公園で巨大な兵器が暴れていた事を」

どう答えるものか。

「知らねえ。けど、何？ マジでそんなんが動いてたのかよ」

「うむ。しかし、残念じゃ。アレほどの男をわしは他に知らん。惜しい事をしたなあ」

「爺さんなら、どうにかなるんじゃねえのか？」

「……何？」

爺さんのぎよろりとした目がこつちに向く。

「あんたになら、その友人つてのを出してやれるんじゃねえの？」

「自首、じゃぞ？ 元とは言え、悪の組織の首領が、だ。覚悟を決めて、矜持を貫いた。そんな男の思いを踏み躪るつもりはない」

「そうか。そう、だよな。ちょっとだけ期待しちゃった。」

「それで、爺さんはどうしてここに？ ああ、ここが友達の家ってのは分かったけどよ」

「爺さんは懐から手紙を取り出す。その封を切り、俺に見せるような事はなかったが。」

「もしもの時にと託されておったものだ」

「それって、何が書いてあったんだ？」

「さあな。開けておらんから知らんよ。大体は分かるがな。どうせ自慢話だろうよ。長い付き合いというのも、面倒なものじゃなあ」

「そう言う爺さんだが、嫌そうには見えない。」

「わしはここに、銀川の孫を探しに来た」

「そう、だったんか」

「やばい。やばいやばいやばい。今、ここにいなせちゃんが来たらやばい。俺の正体がバレちまう。爺さんにはヒーローやってるってバレちまうし、いなせちゃんには俺が戦闘員をやってるってバレちまう。」

「銀川にはな、家族が孫娘しかおらん。自分がどうなっても、その娘だけはどうかしてやって欲しかったんだろうな。だが、いないものはしょうがない。見つけれんものだから仕方がない」

「……良いのか？ 友達の頼みなんだろ？」

「青井よ、わしらは悪の組織の人間じゃ。嘘を吐き、約束を破り、頼みをすげなく断ってこそ悪の華だと思いがな。それに、銀川の孫も自立出来るくらいには大きくなっていた筈じゃ。案外、孫が銀川を見限り、出て行ったのかもしれん」

「いや自立って、それはねえだろ。でも、まあ、爺さんはいなせちゃんを見ていないんだもんな。」

「居場所も知らん、分かんのではどうしようもない」

「そっか。……銀川ってのは、もう、本当に出てこられないんだな」

「奴が望めばどうなるかは分からん」

「そっか」

いなせちゃんにはもう、誰もいないんだ。

「爺さん、その手紙、もらっても良いか？」

「何い？ これはお前、わしがなあ」

「あ、やっぱいらねえわ。うん」

「おかしな奴め。お前も早く帰らんか。……ん？ そう言えば青井よ、組織の仕事はどうした？ 今日は休みなのか？」

やべえ、これ以上はぼろが出る。

「まあな。じゃ、爺さんも気を付けて帰れよ。こんなところうろついてて捕まっても面白くねえからな」

「ふん、よう言うわ」

「あんたには、俺のスーツを作ってもらわなきゃなんないからな」
爺さんは喉の奥でくつくつと笑うと、俺に背中を向けた。

「青井、今日、ここで会った事は忘れる。老人のしがらみに付き合う必要はない。そして、わしもここでお前と会った事は忘れる。お前が何をしようが、全く関係ないとは言わんが、今だけは追求しないでおう」

「ああ。分かってる」

爺さんはここが銀川さんの家だと知っている。多分、いなせちゃんがいる事も知っている。そして、俺が何をしたのか、何をしようと思っっているのか、それすらも知っているに違いない。

「じゃあ、またな爺さん。風邪引くなよ」

「ふん、お前に心配されるようなわしではない」
はっ、違くない。

爺さんが去ってしばらくすると、彼女は旅行鞆のようなものを持って現れた。小さな体には不釣り合いな、大きな鞆である。

「青井、行こう」

俺はヒーローで、戦闘員で、クズで、グズだ。子供の面倒を見られるような甲斐性はない。けど、こいつにはもう、頼れる奴がいな

いんだ。こんな俺に縋るしかない。そんな話つてあるかよ。その上、まだ気を遣つてやがる。この状況下でも気丈に振舞っているんだ。こんな話があるか。ボケが。

「違う。行くんじゃない」

「ん？」

「いなせ、帰ろう」

一人も二人も変わらんわ。せめて、銀川さんが戻つてこられるその日まで、俺がいなせを守る。半端にクモを壊しただけじゃあ、俺の正義は貫けないんだ。そくに違いない。

「……ああ」

いなせは聡い子だ。社長に言われなくても、自分の立場は分かっていた筈なんだ。

「ああ、そうだな。うちに帰ろう、マサヨシ」

「マサ、ヨシ？」

「お前だつてあたしを呼び捨てにしたんだ。だつたらあたしも呼び捨てにするよ。構わないだろ？」

「まあ、良いけどさ」

「……マサヨシ、よろしく頼む」

無愛想で不器用で、本当にもう素直じゃない。それでも、いなせはすつと手を差し出してくる。俺は少しだけ迷ったが、彼女の手から鞆を受け取った。

「友よ。」

翼の折れたわが友よ。久しぶりに、君に手紙を書く。筆を握るというのは非常に面映く、なんともこそばゆい気持ちになるものだ。

友よ。私の作った試作品を見てくれないのは残念だ。しかし、君は直に私の作品が動いているのを目撃する事だろう。そこで忌憚のない意見を述べてくれ。そして願わくは、驚いて欲しい。すごいと、その一言だけでも構わない。羨ましく思ってくれ。そして光栄に思

つてくれ。私のような友を持ち、幸せなのだと感じてくれ。

君の事だから、私に何かあればいなせを助けてくれるのだと信じている。独り身は辛いだろう。少しの間、いなせに話し相手になってもらうのはどうだ。あの子はとても頭が良い。優しい子だ。素晴らしい子だ。しかしいなせはやらん。

冗談だ。いなせを、どうかよろしく頼む。それから、今から書く事に関してはあまり心配していないが、私が倒れても、どうか、私を倒したヒーローを憎まないで欲しい。復讐とは疲れるものなのだと最近になって知った。そのような行為は、君には向いていないと思っっている。

私には、最後に一花咲かせるつもりなどない。ただ止まれないのだ。君になら分かってもらえると信じている。では、先に行く。久しぶりに心が躍った。君も、私に続いてはどうだ？ これに関しては冗談ではない。あの日のような戦いを、輝きを、君ともう一度、見てみたかった。いや、今も見たいと、そう思っている。』

……胃が、痛いんじゃないのかな？

「ぼうつとしてないでお皿ぐらい並べてよ」

「ああ、分かった」

「違うよ、そのコップはお兄さんのだから、そっちに置きちゃダメなんだから」

「ああ、そうだったな」

夕食の準備が出来るのを、俺は寝転がったままじっと見ていた。

「ソース出しといて」

「ああ、分かった。どこに置いてある？」

「前にも言っただじゃん！ 冷蔵庫のみぎっかわに入れてるよ」

「ああ、分かった」

レンといなせができてきばきと動いている。が、二人はどうにもぎこちない。と言うより、レンがいなせを手荒く扱っていると言うか、嫌っていると言うか。

「なあ、俺も手伝おうか」

「あはっ、お兄さんはそのまま良いんだよ？」

さっきまで仏頂面だったレンが、にっこりと微笑み掛けてくる。

「ソースがないぞ」

「右側だつてば！」

レンが足踏みをして冷蔵庫を指差した。彼はいなせに対しての当たりが、きつい。もう、彼女がうちに来てから一週間は経つと言うのに。一向に慣れない。仲良くなならない。つか、そのつもりがないんだろ。たぶん、お互いに。

『えーっ、お兄さん行かないですよー』

俺が悪の組織の戦闘員として仕事に行く前、レンが涙目ですが付いてきた事があった。確か、五日くらい前の話だったか。

『僕、この人と二人きりになっちゃうんだよ?』

『まあ、そうだな。でも仕事だし。つか、仲良くしろよ』

『無理だよ』

泣き虫め。

『おい』いなせの定位置は部屋の隅だった。彼女は俺が見る限り、三角座りで小難しそうな本を読んでいるのが殆どだった。いなせは手が掛からない。わがままを言わないし、賢い。新しい環境に慣れようとしているのか、それともめちゃくちや無頓着なのか。まあ、とにかく。レンとは少しくらいしか歳が違わないのに、全く違う。お姉さんって感じた。その分愛想はないんだけど。

『……何?』

『マサヨシの邪魔をするな。わがまま言って困らせるのが、お前の仕事なのかい?』

『なっ、なんだよその言い草!』

『あ、おい』

レンといなせの相性は死ぬほど悪かった。彼らは、気が付いたら口喧嘩をする始末である。尤も、いなせが適当にあしらい、レンが言い負かされるのが常の光景だった。殴り合いに発展しないのは不幸中の幸いである。

だが、一度だけレンが手を出した事がある。三日前の話だ。

『……濃いな』

昼食の際、いなせがふと漏らした発言が火種となった。

『何が?』

ぶすつとした顔のレンがいなせを睨みつける。彼女は味噌汁の椀を持ち上げ、睨み返した。

ちなみに、俺の胃が本格的に痛み始めたのは、この日以降の事で

ある。

『塩辛過ぎる。あたしには合わないな』

『だっ、だったら残せば良いじゃん！ 一々言わないでよ！ それにつ、お兄さんは舌が馬鹿だから薄味だとおいしいって言ってくれないんだもん！』

えっ？

『マサヨシ』

『え、あ、何』

『何事も、過ぎれば健康に悪いとおじいちゃんも言っていたよ』

いなせの視線はいつも鋭い。歳相応のそれではない。

『作ってるのは僕なんだからっ、文句言わないでよ！』

『へえ？ だったら、お前はマサヨシに早死にして欲しいのかい』

『いつ、言ったな！』

レンが飛び掛かる。俺は彼を止めようとしたが、軽く手で払われただけで顔面に強い衝撃が走った。死ぬほど痛かった。……このままではいなせが殺されてしまう。最低でも半殺しの目に遭うだろう。彼女はパイロットとしては一流だが、戦士としては二流なのだ。

『あ、あれ？』

が、次の瞬間にはレンが畳の上に転がされていた。いなせは飛び掛かってきた彼を、片腕だけでいなしたのである。

『子供の遊びだよ。まっすぐ過ぎる』

そう言っつて、いなせはまずそうに味噌汁を啜った。……彼女は、戦士としても一流だったらしい。いわゆる、柔術というのを使えるそうだ。

いなせ専用の食器や、日用品が揃ったのが昨日の話だ。

俺はこれまでに、いなせのプライバシー的な、セクシャルなそういうアレを尊重して、部屋に仕切りを作ろうと提案した。洗面所のところを閉め切っつて着替えてもらっているが、まあ、彼女専用の空間

つてもんは、ないよりはあつた方がマシだろうと思つたからだ。

が、いなせは俺の案を受け入れてくれなかった。彼女曰く、自分は新入りのようなものなので、そこまでやってもらうのは心苦しいとの事である。金が掛からないで済むのは良いんだけど。なんか、こつ、なあ？ 第一今更だし。

『……わがままじゃん』

そして、やはりレンが食いついた。

『お兄さんが君の為にしてあげるって言ってるんだから、素直にお願いすれば良いのに』

『あたしの為に負担を掛けられないって言ってるんだよ。マサヨシ、あたしは気にしていないから』

『と言うか！ と言うかつ、お兄さん呼び捨てにすんのやめてよ』！

いなせはレンをじつと見る。感情の動きが酷く緩慢な、彼女の仕草だ。癖とも言うべきか。とにかく、いなせは人を見る。一言も発さないでじいつと見つめる。まるでその人の全部を見透かそうとするみたいに、だ。

『どうしてだ？』

『生意気だからだよ！』

ちなみに、俺は呼び捨てにされるのをあまり気にしていない。

『あたしの勝手じゃないか。なんなら、お前もマサヨシと呼ばば良い』

『そ、そついうのはまだ早いし』

『何故照れる』 気持ちわりいな、おい。

いなせは思っていたよりも家事が出来ない子だったが、レンのあしらい方に関しては誰よりもプロフェッショナルだった。だから俺も安心して組織の仕事に行ける。その点については非常に助かっていた。

「今日とはんかつにしたからね。あ、お兄さん、ソースも大根おろしもあるから、どっちが良い？」

食事の用意が出来たので、俺はむくりと起き上がる。さっぱりしたい気分だったので大根おろし。そう、答えようとしたのだが、気付いてしまった。……いなせのんかつだけ、明らかに量が少ない。おい。彼女は食べ物だったり着る物だったり、とにかく様々な事柄に無頓着なので何も言わないでいるが。

「……レン」

「あはっ、何？」

俺は無言でいなせの皿を指した。レンはそこを一瞥する。見る者を底冷えさせるような、虫でも見るかのような目だった。が、それも一瞬の事。彼はすぐさま俺を見遣り、馬鹿みたいに能天気な笑顔を作った。

「どっしたの？」

流石に怒るぞ。ぐっと睨むと、レンは目を逸らして俯いた。俺は自分のとんかつをいなせの皿に戻していく。

「マサヨシ、食欲がないのか？」

………はあ。まるで嫁姑の小競り合いじゃねえか。このままで良くない。ガキの喧嘩だと、口を挟むつもりはなかったが、こいつらの喧嘩って全然可愛くないんだよな。怖いし重い。つーか、胃に負担が掛かってしようがねえ。キリキリする。早いところどうにかしないと。

「と言う訳で胃薬漬けになっている」

「あら、モテモテなのね」

社長がくすくすと笑う。と言うかモテモテとか古いぞ。

俺はちらりと奴らの様子を盗み見る。いなせはソファで大人しそうに読書。レンは九重と一緒にアニマルの図鑑を眺めていた。……仕事の話があるとの事で、俺はカラーズに呼び出されていたのであ

る。

「……どうにかしてくれ」

「どうにかと言われてもね」

すつと、社長は視線をずらした。その先には窓がある。外の景色を見つめながら、彼女は物憂げに息を吐いた。

「私も手一杯なのよ。ここ一週間は大人しくしなきゃならなかったでしょう?」

銀川さんたちの引き起こした事件のせいである。彼は大人しく警察に捕まったが、孫娘であるいなせは絶賛逃亡中の身である。銀川さんが罪を引つ被った形にはなつちやいるが、ヒーローたちはいなせを目撃しているんだ。勿論、カリーズの一員である俺も、社長も、九重も見られている。馬鹿面下げてヒーローの仕事をする気にはなれなかった。

「四方八方に手を尽くして、色々と工作はしているのだけど、中々進まないわね」

「そ、そうか」

何を、どう工作しているかは聞かなかった。

「女の子だし、私の方で預かってるも良いんだけど」

「ああ、俺も隙あらばいなせに勧めてるんだが、別に良い、だってよ。社長さ、あんた随分と嫌われてんだな」

同性に嫌われるタイプ、白鳥澪子。

「否定はしないわ。それより、あなたが気に入られているんじゃないのかしら?」

「そうかあ?」

「そうよ。あなた、子供には強いもの」

どういう意味だ、そりゃ。

「……で、仕事の話ってのは?」

「働きたい? それとも働きたくない?」

「そりゃあ働かなきゃ駄目だろう。良い仕事でもあんのかよ」

社長は肩をすくめて見せた。

「一応ね。でも、急ぐ仕事ではないらしいの。勿論、苦しんでいる人がいるのは確かだけれど。それでも……」

なるほど。仕事は来ているが、目立ちたくはないって事だな。ま、今はそこまで金にやあ困ってない。組織のお仕事は残ってるから、もう暫く大人しくしていても大丈夫だろう。社長は俺の懐具合を心配しているのかもな。

「よその心配するより、自分らの心配を先にすべきだと思うけど、まあ、あんたに任せる」

「良いの？ そんな風に言ってしまったって」

「慣れてきたからな」

「あら、何に、かしら」

色々だよ。一々言わせようとすんじゃねえ。ゴラ、くすくす笑ってんじゃねえぞ。

「そう、ね。うん、もう少し、あなたに休みをあげちゃおうかしら。ウチも、少しずつ仕事が増えてきているし」

「そいつは助かる」正直、まだ体は万全じゃない。クモン時、飛んだり跳ねたりしたせいで、いつもよりも体力を消耗していたところである。そして、何よりも、もうしんどいのは嫌だった。チラシ配りとか、着ぐるみみたいな仕事が良い。

「よう青井ー、江戸さんが呼んでたぜ」

今日も今日とて組織のお仕事である。が、控え室で寛いでいた俺は数字付きの仲間の声が掛けられた。

「いや、今から水族館狙うんじゃねえの？」

「すぐ終わるってよ。さっさと行ってこいや」

釈然としないながらも、俺は席を立つ。呼ばれた理由は思いつかないが、上司が呼んでいるのなら関係はない。行けと言われれば行くのが下っ端の下っ端であるゆえんである。

もしかして、ヒーローやってるのがバレたのだろうか？ クモで、ちよっと目立ち過ぎちまった気もするし。今更だけど。それとも、最近手を抜いてるのがバレたか？

「入りたまえ」

江戸さんの部屋に入ると、彼にじろりとねめつけられる。う、お、怒ってらっしやる、のか？

「あ、あの、何か……？」

「青井君っ」

「ひっ！？」

江戸さんは両手を机の上に置いて椅子から立ち上がり、つかつかとこちらに歩いてきた。やべえ何かされる。殴られる？ ヒーローだとバレてんなら、やられる前にやるか？

「やはり、隈が出来ているな」

「……は？ く、クマ、ですか」

「この間から気になっていたのね。良く、寝られていないようだが。何か悩みでもあるのかな？ ……それはもしや、仕事についての悩みではないだろうか」

あ、そ、そういう事か。びびったあ。江戸さん、やっぱりすっげえ良い人じゃん。

「し、仕事は大丈夫です。楽しくやってるんで。その、悩みは別の方面でして」

「そうか」江戸さんは腕を組み、難しそうに唸った。

「……胃が、痛いんじゃないのかな？」

え？

そ、そこまで言い当てられるものなのか？ 俺は何度も頷く。

「やはり……最近の君は、とても他人とは思えないような、沈痛な表情が多くなっていたからね」

「は、はあ」

「良く効く薬がある。良ければ、持って行くといい」

胃痛持ちは胃痛持ちを知る。とでも言うのだろうか。流石は、エスメラルド様の右腕、江戸京太郎である。年中胃薬を手放せない彼の苦勞。同情するのを禁じえない。

「良いんですか？ これ、結構高そうですけど」

「ああ、構わない。買い溜めしているからね」

胃薬を箱買いする江戸さんを想像して、涙が出そうになった。彼ほど有能な人間なら、わざわざ誰かの下につく必要もないんじゃない？ とも思えるのだが。

「それじゃあ、ありがたくいただきます」

「ああ、そうしてくれ。……ところで、今日の任務についてだが」

「えーと、水族館を襲うんですよね？」

理由は知らんが。まあ、襲えと言われりゃ襲うしかない。

「正確に言えば、襲う事が目的ではない。ただ、ヒーローとぶつかる可能性は高いだろうと踏んでいる」

「ヒーロー、ですか」

「ああ、詳細なら数字付きの一番に伝えてある。彼からも話を聞くといいだろう」

ヒーローが張り込んでるってワケか。情報が漏れてるって感じじゃあない。つー事は、やっぱりその水族館には何かがあるんだろう。楽な仕事になりゃあ良いんだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3771r/>

ブルージャスティスここにあり！

2011年12月10日01時05分発行